

オレが愛した女は過剰スパルタアネゴレオン

ホスパッチ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「あなたに一目惚れしました！ 結婚してください!!」

恵外界の中でも人々が住む場から離れた森林の中で、少年は一世一代のプロポーズをした。

「断る」

一秒も経たずフラれてしまったが。

それでも諦めず少年は気付けば惚れた女性の弟子になっていて、気付けば魔法騎士団の中でもへ紅蓮の獅子王を目指していたが——気付けば完全にやらかしていた。

これは、出生も謎だがただ愛した女性と結婚するためにひたすら頑張る少年の物語。

## 目次

### プロローグく魔法騎士団入団試験編く

0話「出会いからのプロポーズ」	1
1話「スパルタ訓練」	9
2話「社会見学と乱闘騒ぎ」	16
3話「魔法騎士団と魔導書授与式」	23
4話「魔法騎士団入団試験」	31
5話「入団試験と鉄拳制裁」	38
6話「試験結果と新たな生活」	45

### 第1章く初任務編く

7話「パシリランク決定戦」	52
8話「朝食と雑用係の小屋」	60
9話「初任務」	68
10話「決戦」	75
11話「任務報告とお勉強タイム」	83
12話「計算訓練」	91

### 第2章く魔宮調査編く

13話「魔宮調査開始」	100
14話「七剣総統」	108
15話「家族だから」	115
16話「レベル2」	123
17話「オレが決めたことだから」	130
18話「約束」	137
19話「魔宮踏破」	144

### 第3章く戦功叙勲式編く

20話 「いざ戦功叙勲式へ！」 | 151

21話 「オトウトレオン」 | 159

22話 「窮地」 | 166

23話 「狙撃手」 | 173

24話 「新たな進化VS魔弾の射手サイル」 | 180

25話 「吸魔の銃」 | 187

26話 「再会」 | 194

#### 第4章く修行&窮地編く

27話 「氣」 | 201

28話 「レベル4爆誕」 | 208

29話 「貴様程度」 | 215

30話 「責任」 | 222

31話 「シャーロット・ローズレイ」 | 229

32話 「女の覚悟」 | 237

33話 「自宅謹慎」 | 245

#### 第5章く雪上の決戦編く

34話 「全力のリベンジマッチ」 | 252

35話 「過去と今の俺」 | 260

36話 「想いは過剰に暴走する」 | 268

37話 「薔薇の姫君VS魔弾の射手」 | 276

38話 「裏切り者」 | 283

39話 「新たな魔宮への誘い」 | 290

#### 第6章く地底帝国編く

40話 「魔導書合体」 | 297

41話 「地底帝国の支配者」 | 304

42話	「鋼の巨兵」	312
43話	「本当の宝物」	319
44話	「地底湖の激闘」	326
45話	「剛機絶鋼の鉄重拳」	333
46話	「開国と真実と後輩誕生」	341
第7章く誕生日会&キテン防衛編く		
47話	「誕生日会準備」	349
48話	「最高のプレゼント」	357
49話	「ユノとの共闘」	364
50話	「女の因縁」	372
51話	「ハッピーバースデー」	380
第8章く魔女の森編く		
52話	「トモダチのために出来ること」	387
53話	「開戦の狼煙」	395
54話	「進化VS昇華」	402
55話	「気まぐれなる猫との共鳴」	409
56話	「エルフの覚醒」	416
57話	「兎炎霊の業猛鎧」	423
第9章く星果祭&温泉合宿編く		
58話	「星果祭開催」	430
59話	「替え玉作戦」	438
60話	「功績発表」	445
61話	「国王との再会と王撰騎士団」	452
62話	「登山からの温泉っ!」	460
63話	「男風呂と覗き」	468

第10章「王撰騎士団選抜試験編」

64話「風神鳥が語る真実」

65話「王撰騎士団選抜試験開始」

66話「火力VS雷速」

67話「きょうだい」

68話「魂重なる光と影」

69話「独創VS創造」

70話「最強の証明」

第11章「白夜の魔眼討伐編」

71話「大喧嘩」

524

517

510

503

496

489

482

475

## プロローグ 魔法騎士団入団試験編 0話 「出会いからのプロポーズ」

——一瞬にして目を奪われる。

少年にとつて目の前に広がるのはあまりにも暴力的な光景だった。そして何よりも非現実的な光景だった。

人間よりも遥かに巨大な獣が振り切られた拳に吹き飛ばされていく。

しかも拳を構えているのは女性。

いくつぐらいだろうか。

確実に自分よりも年上で女性らしい成熟した肉体を持っている。

見方によれば野蛮で、美しさなど皆無に思えるだろうがこの時、確かな美しさを感じていた。

どんなに磨かれた宝石よりも、どれほど着飾った女性よりも。

誰よりもその女性は輝いていて、野性味に溢れた美しさを持っていた。

一体どこの誰なのか。

そんなことはどうでも良かった。

あれほどの獣を一撃で仕留めたその姿に惚れてしまったから。

だったら取るべき行動は一つ。

隠れていた木陰から出ればすぐに獣の上に立つ女性を見上げる。

唐突に現れた少年に女性は不審げに眉を顰める。

その容姿を一言で例えるならば女獅子だった。

鬣の如き髪が示す色は太陽の如き橙。

口端から覗く肉食獣のような牙。

獣の眼光。

どれを取ってもおおよそ女性とは思えない、ある種恐怖すら覚える容貌だったが——

「オレ、キリヤスフィール・フィン・ガルガンです！ キリヤって呼んでください！ そんなあなたに一目惚れしました！ オレと結婚し

てください!!」

「断る」

一世一代の告白。

しかし、それは一秒も経たずに断られるのだった。

◎

かつて人間は魔神に滅ぼされるかに見えた。

人類絶滅の危機。

その窮地を救ったのはたった一人の魔道士だった。

世界を救った彼を人は讃え、崇め、感謝し。

いつしか彼は”魔法帝”と呼ばれ、伝説になった――

◎

「何ですか!」

人が住む地から随分と離れた森林の中で少年――キリヤの叫びが木霊する。

「貴様、さては莫迦だな? 初対面の男といきなり結婚する女がいると思うか?」

「確かに! それじゃあちよつと待っててください!」

いきなり現れ、いきなり告白したと思えば、今度はいきなり踵を返すキリヤ。

この展開にあまりついていけないのか、相手の女性も首を傾げる。

と、そのうちにもキリヤはどこかへ走り出し、一瞬で姿が見えなくなってしまう。

「……何だったんだ今のは」

思わず疑問を漏らす女性だが、少ししてまたドタドタと走る音が聞こえてくる。

戻って来たキリヤは、女性の前で止まると親指を立てて、

「これで二度目っスね! 結婚してください!」

「断る」

「えー何ですか!?!」

「どうしていけると思った? どうやら本物の大莫迦者のようだな」



「三度目行きますか!？」

「莫迦者が。そもそも私は結婚などに興味はない。それに私よりも弱い男と結婚など到底ありえん」

「なるほど！ だったらオレがあなたに『参った』って言わせれば結婚してくれませんか!？」

女性から迸る炎の魔マナに凹たれるどころか、拳を握り締めてキリヤは意欲を見せる。

これに対し、女性は一瞬呆気にとられ魔が止まるが、すぐに鼻で笑う。

「良いだろう。本当に貴様が私に参ったと言わせれば結婚でも何でもしてやる」

「マジですか！ ヤッター!！」

もはやプロポーズ成功だと言わんばかりに喜ぶキリヤだが、それがどれほど難しいことか。

本当に分かっているのかと言いたげな女性の視線にキリヤは親指を立てる。

「オレ、頑張ります！ ……えーつと」

「よく名前も知らん相手に告白出来たものだな」

「何せ一目惚れですから!！」

どこまでも楽観ホジティブシンキング的なキリヤに女性も呆れた息を吐く。

やがて自らの頭に手を当てると、

「メレオレオナだ。メレオレオナ・ヴァーミリオン」

「じゃあレオナ様って呼びますね!！」

「ほう、いきなり愛称を付けるとはイイ度胸だ。まあいいだろう」

しかし、と何か気になることがあるようで獣から下りた女性——メレオレオナは怪訝そうにキリヤを眺める。

「私のことは知らずともヴァーミリオンの名ぐらい聞いたことはあると思っただが」

「全く知りません！ もしかしてレオナ様って有名人か何かなんですか?！」

「知らなければ知らなくていい。……で、貴様グリモワール魔導書は持っているの

か?」

「ぐりもわーる……? 食べ物ですかそれ?」

「貴様よくそれで私に参ったと言わせるつもりだったなア!!」

「ぎやああああああ!!」

何も知らないキリヤの頭はメレオレオナの両手で挟まれ締め上げられ絶叫。

持ち上げられ靴裏も地面から離れジタバタするキリヤは待った待ったとメレオレオナの手首を掴む。

「オレ何か知らないんすけど記憶がないんです! だから正直何にも知らなくて!」

「記憶がない……?」

「自分の名前だつてうろ覚えで! あいでつ!」

言ったところで万力の締め上げから解放され地面に尻餅をついてしまう。

涙目で見上げるキリヤにメレオレオナは腕を組む。

「どういうことか教えろ」

「いやーそれが自分にも分からなくて。気付いたらこの森にいて、何か名前だけは覚えてたんですよ」

「本当によくそれで求婚したな」

「手紙もあるんですけどどうにもオレには読めなくて。レオナ様なら読めますか?」

「……貸してみろ」

手紙を渡されたメレオレオナは内容に一通り目を通すと頷く。

「どうやらこれを書いた者は貴様が記憶喪失になることを見越していたようだな。丁寧に名前、年齢、生年月日、貴様に関する情報ばかりだ」

「ほうほう」

「貴様の年齢が十三歳で私と一回り以上差があることも分かったが」

「オレは全然歳の差とか気にならないですよ! それに記憶喪失だろうがこれからどうにか生きていかないといけないんでとりあえず魔導書グリモワールつてのが何か教えて欲しいです!」

「随分と楽観的だが……まあいい。いいか魔導書というのは——」

メレオレオナが言うには魔導書グリモワールは全ての国民が十五歳になれば貰える魔法の書物のことらしい。

何でも体内にある魔マジを使うことで魔法を使うことができ、中でも何かを創つたり形を変えたり高度なことをする際には魔導書が必要不可欠。一応魔導書がなくても大雑把な放出は出来るらしい。

また魔法を扱う者——魔道士としての証でもあり、持っているだけで魔力が増幅される強化アイテムにも一役買っているとのこと。

「まだ貴様は十三歳だから魔導書を貰ってなくて当然だったな」

「レオナ様も持つてるんですか？」

「ああ、これだ」

メレオレオナの腰に取り付けられたホルスターには大きな魔導書があり、留め具を外してキリヤへ手渡してくる。

表紙は細緻な装飾が成されていてキリヤも「すげえ」と言いながら開いてみる。

何やら中身はびっしりと文字が書いていてまるで読めないがとりあえず——

(食えるのかな……?)

と、興味本位で齧ってみる。

「何をしている莫迦者がアアアアア!!」

「ぎゃふんっ!」

メレオレオナの拳骨が脳天に炸裂。

普通に怒られ頭を手で押さえるキリヤにメレオレオナは魔導書を回収すると、

「誰が食べてイイと言ったアア!!」

「い、いや……食えるかなーって……」

「本を見たことがないのか貴様はア! 歯形が付いてしまっただろうがア!!」

「ごめんなさい!」

見ればメレオレオナの魔導書の隅にはしっかりと歯型が付いてしまい、キリヤも申し訳なさそうに頭を下げる。

しかし、謝られたのと色々記憶が足りていないことを加味し、メレオレオナは一息吐く。

「……まあいい。準備しろ」

「……………へ？」

「今から貴様がどれほど素質があるか確かめてやる」

「すみません今のオレだと死相しか見えないのですが!」

「ほう、私に死相が見えるとはイイ度胸だな」

「いやいやいや!!」

メレオレオナは魔導書をホルスターに仕舞えば、後ろへ放り投げ構える。

「どうやら魔導書を持っていないキリヤに合わせて一応手加減はしてくれようだ。」

(落ち着けオレ! これは初めの第一歩だ!)

左足を前に出し、右拳から拳一個分開けて左拳を出し、とにかく感覚的に思いついた構えを見せるキリヤ。

その構えを見てメレオレオナは感心の声を上げる。

「ほう、一応武術の心得はあるようだな」

キリヤの構えを見て尚やる気を見せるメレオレオナ。

そしてその言葉から数秒経つことなく戦闘が開始される。

——今日の空は青く、快晴そのものだった。

◎

「……まあこの程度だろう。十三にしてはなかなかだったぞ」

「あ、ありがとうございます……」

結果的に言えばキリヤは十分と持たなかった。

年齢の差もあるがメレオレオナは魔導書なしでもとんでもなく強く、大の字で倒れたキリヤの顔面は陥没していて、そこから煙まで出ている。

「う、ういしよ……っ!」

両手で頬を叩くと顔面が復活。

上体を起こすとメレオレオナが目の前で屈んでキリヤを見ていた。

「ど、どうしたんですか……?」

「なるほど。あの戦闘の中で私のマナスキンを真似していたのか。だいぶと荒削りだが及第点といったところか」

戦闘の最中、キリヤはメレオレオナが身体中に魔力を纏っていたのを見様見真似で自らもしていたのだ。

だがメレオレオナと違って一糸乱れぬ魔力放出と違い、部分によって荒いのが目立つ。

現状では到底追いつけない格の差に笑いすら出ずにいると、メレオレオナは顎に手を当てる。

「よし、今日から私の弟子になれ」

「……へ？」

突拍子のないメレオレオナの発言にキリヤの目が点になる。

「何だ、超えようとする者の教えは受けたくないか？」

「い、いやそういうことじゃなくて、一緒にいていいんですか？」

「……は？」

「だってオレ負けたじゃないですか。だから、もう金輪際私の前に顔を出す的な感じで……」

てつきりそう言われると思っていたキリヤは負けた瞬間に終わりを覚悟したが、どうにもそうではないようだ。

メレオレオナは目を細めると拳を握って、キリヤの脳天に拳骨を浴びせる。

「莫迦者が。そんな私の器量が狭く見えるか？」

「い、いえ……」

「それに今貴様に求められている言葉は私の弟子になるのかの『はい』か『いいえ』だけだ。……答えはアア!？」

「はいっ!! オレ、メレオレオナ様の弟子になります!」

「ふ、それでいい。魔導書を貰うまでの二年間私がみっちりしごいてやる。死ぬなよ?」

「何だか妙な自信あるんで多分何とかなるっス!!」

「イイ答えだ」

突然のプロポーズから突然の弟子入り。

前途多難なキリヤだが本当の始まりはここからだった。

キリヤはまだ知らないのだ。  
——メレオレオナが過剰スパルタである、と。

## 1話 「スパルタ訓練」

「何をしているかアアア!! さつきからまるで進んでいないぞ、貴様アアアアア!!」

「ごめんなさいっ!」

メレオレオナの弟子になったキリヤを待ち受けていたのは、当然生易しい修行ではなかった。

今キリヤの身体には縄が巻きつけられており、その先にあるのは身体より遥かに大きい岩の塊。

その岩の塊にメレオレオナが乗った状態で、それを引き摺りながら急勾配な坂の山道を登っている。

「ていうか、質問いいですか!?!」

「何だアアア!!」

「何でオレ岩引っ張って山登ってるんですかア!?!」

「……………」

問いかけるとメレオレオナは一瞬黙ってしまう。

反応がないので訝しげに首を傾げると、目の前にいつの間にかメレオレオナが立っていた。

「貴様、私の采配を疑っているのか?」

「そういうわけじゃないんですけど、マナスキンってヤツを鍛えるのにどうしてかなーって思ってた……」

「いいか、魔道士は多かれ少なかれ魔力で身体能力を向上させて戦っている。それは基礎的なものであり、中でもマナスキンは基礎魔法の極地だ」

「極地ってことは、それが出来るレオナ様ってやっぱりスゴいんすね!」

「莫迦者が。この程度上級魔道士ともなれば大抵の者がしている。極地と言っても上を目指すならば出来て当然だ」

「でも、まだこの修行とイコールになってないんですけど」

「話は最後まで聞かんかアア!」

「ぎゃふんっ!」

恒例の拳骨に悶えるキリヤ。

呆れて吐く息も出ないメレオレオナは構わず続ける。

「いくら身体能力を向上させたところで、自らの肉体がついてこなければ宝の持ち腐れもイイところだ。生半可な身体で戦ったところで先に体力が尽きる。そんなことで死ぬなど愚か者にもほどがある」

「つまり、今オレは身体を作るために頑張ってるんですね！」

「それもそうだが、同時に貴様のマナスキンの精度も上げるためだ。ほら集中が切れて放出量が疎らになっているぞ!!」

「ひえーっ！ 頑張ります！」

尻を蹴られ猫背気味になっていたキリヤの姿勢がピンと跳ね上がる。

言われた通り、疎らだった魔力はいきなりの蹴りで驚き、一定と なってキリヤの身体を覆われる。

それを見て、メレオレオナも大きな声で笑う。

「その意気だ!! あと十分以内に登りきれなければもう一セットだ !!」

「スパルタ!!」

結局、この後十分で登り切れず、最終的に七回ほど山を上り下りする羽目になったのは言うまでもなかった。

◎

「貴様はこの数週間で飛躍的にマナスキンの精度が上がった!! 褒めてやる!!」

「ありがとうございます!!」

「だがまだまだアア!!」

「何でっ！」

初めて褒められたかと思えば、またいきなりの拳骨。

何がそこまで不服なのか。というよりマナスキンをどれだけ練習したところでメレオレオナの拳骨の威力はまるで衰えず毎度初めて受けたように痛い。

悶え苦しむキリヤだが、メレオレオナは構わず話を進める。

「何故今マナスキンを解いている？」



「……え？」

「何故解いていると聞いているのだからさつさと答えんかアア!!」  
「ぎゃーっ怒らないで! ……えっと、戦闘時じゃないから……ですかね?」

「莫迦者がアアア!!」

本日二発目の拳骨。

正確無慈悲に一発目と全く同じ箇所には打ち込まれ、キリヤは地面をのたうち回る。

「”常在戦場”という言葉を知らんのかアア!!」

「ごめんなさい全く知りません!!」

「いいか”常在戦場”とは常に戦場……命の駆け引きをする場にいる心構えでいるという意味だ。だが私は心構えだけでは許さん。常に戦える状態でいなければならん」

「……と、言うത്?」

「マナスキンを一日中しろということだ」

「いやいやいや流石に持たないですって!」

「初めから諦めてどうする莫迦者がアアアアアア!!」

また怒られた。

ついでに三発目の拳骨。

「大気中には微量の魔<sup>マナ</sup>が存在している。人間は呼吸することで大気中の魔を吸収し、使用した魔力を補充しているのだ。つまりマナスキンの放出量をより調整し、呼吸などで吸収し続けければ――」

「永遠にマナスキンし続けられるってことですか?」

「その通りだ。マナスキンは洗練すればするほどより少ない魔力で下手に魔力放出せずとも薄く、堅固に自らの身体能力を高めることが出来る。何より身体能力だけではなくありとあらゆる環境にも適応することができる、会得していて損はしない」

「すげえ! レオナ様って粗雑で乱暴だと思ってたけど何と言うか……技巧派だったんですね!!」

「……貴様が私を莫迦にしていたことは分かった」

「ぎゃあああああ!! 違うんす違うんですよーっ!!」

拳骨どころか顔面にアイアンクローされてしまい身悶えるキリヤ。とりあえずこの後猛烈に謝って何とか許して貰えたが、頭は縦も横もとにかく全体がめちやくちや痛かった。

◎

「ぎ、寒い……」

修行を始めてから数ヶ月経過し、初めての冬の夜。

今年の冬は大気中の魔に異常があったのかとんでもなく寒く、マナスキンがあつても寒くて震えるキリヤ。

一方メレオレオナは何でもない様子で寝転がっていて、獣の毛皮で作った毛布一枚で何一つ寒さを感じていないようだ。

「レオナ様ー」

「……何だ。さつさと眠らんか」

「寒すぎて一緒に寝ていいですか？」

「断る。自らの力でどうにかしろ」

「お邪魔しまーす」

「貴様、話を聞け」

拳骨される覚悟でメレオレオナの毛布の中へ素早く移動。

いつ来るかとキリヤは思っていたがいつまで目を閉じてても拳骨は来ない。

（あ、あれ……？）

絶対ブン殴られると思ったが、どうにも怒りよりも眠気の方が勝っているようだ。

キリヤを睨みつけるわけでもなくすでに眠っていて、キリヤは『これはチャンス』だとメレオレオナに抱きついて抱き枕にする。

（レオナ様のニオイ……何か安心する……）

何というか、野性味に溢れているというか。

と、メレオレオナを堪能する前にキリヤも眠気の方が勝つてしまいい、いつもよりも深い眠りについてしまった。

◎

「レオナ様レオナ様」

「そう何度も呼ばずとも聞こえている」

「何でこんな場所にわざわざ来たんですか？」

キリヤが視線を向けた先、そこにあったのはこれまでにないほどがつつりとした谷だった。

弟子になって一年経ったある日。初めての修行ということで森林から出て山に行くぞと言われついてくればこれ。

山と山の間に来た谷を覗き見てみるととんでもない深さで底など暗すぎて見えない。

説明求めるキリヤに前を進むメレオレオナは「このあたりで良いか」と立ち止まり、振り向く。

「獅子は我が子を谷底に投げ落とし這い上がることが出来た強い子だけを育てるといふ……この意味、分かるか？」

「今からオレがここに投げ落とされそうって感じは分かります」

「その通りだ。説明し終えれば蹴り落とす」

「せめて投げ落として！」

早くも殺害宣告を受けたのと同義だが、すでにメレオレオナは落とす気満々。

こうなれば止められないと弟子であるキリヤは逆らえず、そのうちにもメレオレオナは腕を組む。

「貴様はこれまでに常に一定基準の魔力放出量でマナスキンを出来るようになり、それに応じた肉体にもなってきた」

これまでの修行によってキリヤの身体は鍛え抜かれていた。

身長も伸び、マナスキンの洗練もされ、今度は何かとキリヤも期待で胸を膨らませる。

「次はこれだ」

言ってメレオレオナは魔力を放出すると、メレオレオナの腕を覆うようにして魔力は形状を変える。

それはまるで獣の手のようでキリヤも思わず「おお……」と声を漏らす。

「<sup>グリモワール</sup>魔導書なしでもこの程度までは創れるようになれば話にならん。今から貴様にはこれを谷に落ちながらしてもらおう。出来れば壁にでも張り付いて戻って来られるが出来なければ死が待っている」

「……マジすか」

「生存本能に賭ける——じゃあな」

「え、え、マジで言ってる——ぎゃあああああああ！ ホントに落としたあああああああ!？」

言葉の途中で谷へ蹴り落とされたキリヤは奈落へ真つ逆さま。

臓器が浮く感覚に襲われ、逆風に襲われ、とにかく気分は頗る悪い。しかもこのまま行けば死ぬ——そんな明確なイメージが頭を過ぎる。

(ヤバヤババアアアアアア!!)

死、それは自らに途方もない緊張感を与え身体を萎縮させる。

キリヤも実際蹴落とされ思考回路が一気に真つ白になっていく。

だが——

「死んで……たまるかアアアアアアアアアアアア!!」

真つ白になっていく思考の中でキリヤが思い浮かべたのはメレオレオナの姿。

憧れたからこそ超えたい、その気持ちはキリヤの頭に新たなイメージを植えつける。

(とりあえずレオナ様みたいなデツカイ手!!)

両腕を中心に魔力を放出し、形状を変化させていく。

それはまさしく獅子の如き爪を携えた巨大な手。しかしそれはメレオレオナのものとは違い何とも大雑把な形状をしているが——

「今はこれで充分だアアアアア!!」

この奈落の終着点がいつどこにあるか分からない。

だからこそすぐさま爪を谷の壁に叩きつけ、抉りながらも徐々に減速していく。

「あイタ!!」

と、いきなり奈落の終わりがやってきた。

減速していたものの尻を強かに地面に打ちつけてしまったキリヤは「ひいいっ!」と言いながら身悶え、そうしていると上からメレオレオナがやってくる。

奈落の底だった暗き谷は一気に明るく照らされ、メレオレオナは不

敵な笑みを浮かべる。

「どうやら生き延びたようだな」

「すげえ!! レオナ様浮いてる!!」

「これも基礎魔法の一つだ。後で教えてやる」

「え、今教えて貰った方が楽に帰れそうなんですけど!」

「貴様、たった一回でマスターした気になっているのか?」

「そう言われたら何も言えねえっス!!」

「だったら文句はないな」

先ほどのはかなり荒削りでやっただけに本当に何も言えない。

キリヤがそう答えるのは分かっていたとメレオレオナはキリヤへ背を向ける。

「帰りは当然先ほどと同じようにして登って帰って来てもらう——出来るか?」

「聞かずともオレはやってやりますよ!!」

「イイ返事だ。では私は上で待っててやる」

あまり待たせるなよ、その言葉を最後にメレオレオナは空へ向かって飛んで行ってしまふ。

一人残されたキリヤ。再び沈黙が支配する空間。

両頬を叩いて気合いを入れたキリヤは再び魔力を両腕に纏い、爪を壁に立てて登り始めるが——

「あっ……」

つるん、と滑って再び地面に尻餅をついてしまふ。

「ごっ、滑りやすっ!!」

異常な滑りやすさ。生半可なやり方では忽ち滑って今のように転落してしまう。

恐らくメレオレオナはこれを知っていて課題を出していたのだろうか。

ともかく、やるべきことが後は突き進むだけだ。

「あんまり待たせるとレオナ様マジで怒るから頑張る!!」

——と、粋がったものの普通に時間が掛かって普通に怒られたのは言うまでもなかった。

## 2話 「社会見学と乱闘騒ぎ」

魔力形状変化も物にして数日経ったある日。

「人が持つ魔力は四大元素……つまり火、風、水、地のどれかの魔<sup>マ</sup>が宿っており、その魔または派生した属性の一種類の魔力しか使うことが出来ない。私の場合だと火からの派生の炎だな」

言ってメレオレオナは自らの掌に炎を灯す。

それを見てキリヤは「うおお！」と気分を高揚させて拳を握り、

「火と炎の違いが正直分からないですけど俺も火がイイツス！ レオナ様と同じのがイイツス！」

「貴様、私を超えたいというのに何かと真似したがるな……だが残念な知らせだ」

「……？」

「貴様の魔力の色は——無だ」

「なん、ですと……って、無って何ですか？」

「知らんのに言ったのか貴様は」

キリヤの適当な反応に凄んでくるメレオレオナ。

威圧感に両手を出して制止しつつ後ろへ下がるとメレオレオナも額に手を当てる。

「無とは何もないことだ。貴様の魔力は色を持たない故に火も放つことは出来ない」

「ええっ！ 何てこった!!」

終わったと言わんばかりにショックを受け、地面に蹲るキリヤだが即座に拳骨が飛んで来る。

相変わらずの威力に身悶えるキリヤだがメレオレオナは「最後まで聞け」とキリヤの前に座り込む。

また拳骨される、そう思ったキリヤだが今度は違った。

拳をキリヤの額にこつんと軽く当て、メレオレオナは笑みを浮かべる。

「——何色も持たないからこそ貴様は何者にもなれる。貴様は私を超えたいのだろうか？ だったら私の予想を超える面白い成長をしてみ

せろ」

「レオナ様……オレ頑張ります!」

「フン、貴様はいつもそればかりだな。だがいい返事だ」

「よっしやあ! 頑張ると決めたから次は何するんスか!?!」

「そうだな。実力はまだまだだが最初に比べればマシになった。しかし、このままただ修行させるだけでは貴様の社会性は一向に育まれないな」

そう言いながらメレオレオナは顎に手を当てる。

やがて考えついたのか、目を軽く見開いて今度は不敵な笑みを浮かべた。

「よし、社会見学に行くぞ」

「……へ? しゃかい、けんがく?」

社会見学。

今まで森林や山で暮らしてきたキリヤにとってはあまりにも未知な言葉。

だがメレオレオナが決めた以上異論を唱えることなど許されるはずもなく、キリヤはとりあえずついて行くことに。

◎

広がる光景は今まで見たこともない物ばかり。

石、いや煉瓦というもので作られた建築物が並び、今まで見たこともないほど人々が群れを成している。

「すげえ、いっぱいヒトがいる!」

初めての光景に気分を昂ぶらせるキリヤ。

忙しなく視線を動かして景色を眺めていると背後からいきなり拳骨が叩き込まれる。

「あまりはしゃぐな。私から離れるな。迷子になったら殴るぞ」

「す、すでに一発入れられたんですけど……」

メレオレオナに連れられてやってきたのは城下町キツカ。

何でも商業が盛んらしく、ここに来れば大抵の物が手に入るらしい。

「でも心配しなくて大丈夫ですよレオナ様。オレ、迷子にはならない

んで！」

「そうやって親指立てるヤツの言葉が一番信用ならん。それにはぐれた先でもし貴様が貴族にでも絡めば面倒なことになる」

「貴族？」

「この国には人を階級分けしているのだ。生まれによつて下から下民、平民、貴族、王族とな。中でも貴族、王族はそれ以下の人間を蔑む傾向にある。どんな理由があれ貴様の階級は分らんが手を出せば確実に罪に問われることになる」

「変な風習ですねー。ヒトがヒトの価値を分けるなんて驕りつスねー」

「それだけではない。国も三分割……恵外界、平界、王貴界と分かれている。今いるのが平界で主に平民が訪れるが貴族に出会う確率も低くない」

「だから気をつけろってことですね。大丈夫ですよ！ オレ、レオナ様と手繋いでおくんで!!」

「貴様の行動力にはたまに驚かされるな……」

すでにばつちりとメレオレオナの手を握っていたキリヤは空いた手で親指を立てる。

手を繋いでいるのだからこれでもう大丈夫、なんてキリヤも思っていたが――

◎

「迷った……」

手を繋いでから数分、気付けば完全にメレオレオナとはぐれてしまっていた。

少々人混みを侮っていたようで、加えて路上で魔法を使った大道芸に目が行ってしまい、そのうちに手を離してしまった。

(絶対怒られる……拳骨も三発は来るだろうな……)

なんて考えながら遠くを見つめていると何やら男の荒げた声が聞こえてくる。

人混みを掻き分けながら進むと二十代後半と言ったところか。

同じ紋章が刻まれた外套を身に纏った男二人がまだ十歳にも満た



ないだろう女の子を抱える母親らしき女性に怒鳴りつけている。

(何であんな怒ってんだ?)

「貴様、平民の分際で貴族の私の服を汚すなど——万死に値する!!」

「お許してください……お許してください……」

母親は懇願するように頭を下げ続けるが男達は一切聞こうともしない。

見れば男の穿いているズボンには何か液体のようなものが付いており、女の子を見れば手に器らしきものを持っていた。

キリヤはすぐに理解した。

恐らく走っていたのか、女の子はあの男達にぶつかってしまったのだ。それで因縁をつけられた。

「命が惜しければもつと頭を下げたらどうだ!？」

「ぐっ……も、申し訳ありません……」

「おかーさん!!」

とうとう側頭を踏みつけられても謝り続ける母親。

女の子は目に涙を浮かべ、それでも誰も何も言わないことにキリヤは猛烈な違和感を覚えていた。

(何だこれ……)

誰もが自ら巻き込まれないように目を逸らし、我関せずと離れていく。

どうして誰も助けようとはしないのか、これが身分の差というものなのか。

拳を握り締め、キリヤの表情は怒りに満ちる。

「まだだ!! もつと深く頭を下げろ!!」

「——っ!」

足を上げた貴族。再び来る痛みに耐えるために瞼を閉じた母親。

瞬間、キリヤは我慢出来ずに飛び出す。

「こんのお……クソ野郎がアアアアアア——ッ!!」

思い切り拳で男の顔面を捉える。

バキバキと男の顔面から骨が砕ける音が幾多にも響き、拳が離れたところで勢いは止まらない。

何回転もしながら舗装された道を砕き、キリヤがいる遙か先にあった広場の噴水に叩き込まれる。

「な——」

もう一人の貴族は驚きで絶句し、目の前で起こったことが分からず母親も女の子も目を見開いて驚く。

母親達の前に立ったキリヤは大きく息を吐く。

「レオナ様ごめんなさい……でもやっぱり許せねえよ」

同じ人間なのに格差を設け、誰かを蔑むなど。

そして、誰かが目の前で虐げられているなど。

「貴様何をしているのか分かっていいのか!? 我々は貴族で、魔法騎士なのだぞ!!」

「かかってこいよクソが。テメエなんざオレがブツ飛ばしてやる!!」

相手は魔導書を構え、キリヤも魔力を放出し構え、今にも戦いの火蓋が落とされようとするば——

「何を勝手に離れている莫迦者がアアア!!」

「ぎゃふんっ!?!」

いきなり目の前に影が落ちたかと思えば幾度となく体験した拳骨が脳天に炸裂。

キリヤはこれで体勢を大きく崩したが相手は——

「何者か知らんが——石創成魔法”ロックジャベリン石槍連射”!!」

「レオナ様あぶな——」

「——誰に危ないと言っている大莫迦者」

飛んで来たのは石で創られた無数の槍。

どれも鋭い切っ先で当たればただで済まないことなど明確だが現れたメレオレオナは拳を握れば——

「この程度で魔法騎士を名乗るとは呆れたものだな」

一瞬で焼却。

拳を振るつたと同時に炎が放出され石の槍など影も残さず消え去る。

「で、こんなつまらない魔法を得意げに放った莫迦は貴様か?」

「な、な……」

自らの魔法をいとも容易く消されれば貴族も驚きを隠せず、メレオレオナは一步、また一步と尻餅をつく貴族へ近付いていく。

「一発は一発だ。私は力なき者に拳を振るうのは何とも気が引けるが——先に魔導書まほを向けたのは貴様だ」

拳を握りながら近付くメレオレオナの容貌を見て、何かに気付いたのか今度は別の驚きを見せる。

「な、何故王族であるあなた様がこのような場しよぶるしゅんっ!？」

拳骨を叩き込まれた貴族は身悶えるどころかそ下半身が丸々舗装されているはずの地面にめり込む。

手を軽く払ったメレオレオナはフン、と鼻を鳴らし、

「この程度でなれるのなら魔法騎士団も安いものだな」

「レ、レオナ様……」

「何だ？」

「あのー……そのー……勝手に離れてごめんなさい……」

勝手に離れて迷子になったので後二、三発は拳を叩き込まれると思っただがどうにもメレオレオナにそのつもりはないらしい。

しかも何故か分からないがやや上機嫌にも見える。

「確かに貴様は離れるなど言ったのに勝手に離れたがすでにその分の拳骨シオキはした。それより——」

手を向けられ反射的にキリヤは瞼を閉じてしまうが拳骨のためではなかった。

酷く乱雑だががしがしと頭を撫でられ、

「——よくやった。もし私の言いつけを無駄に守って黙って見過ごしていれば余計に怒っていたぞ。貴様は莫迦だが屑ではない」

「レオナ様……」

と、そこでキリヤはメレオレオナに両肩を掴まれ後ろへ回される。いきなりのごとで何かと思えばそこには先ほど貴族に踏みつけられていた母親と女の子が目に入る。

「本当にありがとうございます……。何とお礼を申せばいいのか」

「別にお礼を言われるほどのこととしてないけど。オレは気に入らなかったヤツをブツ飛ばしただけで——」

「かつこよかったよおにーちゃん！」

「っ！」

純粹無垢な女の子の眼差しを受け、そう直球で言われるとムズ痒いのかキリヤは頭を搔く。

「ま、まあ無事なら良かったよ。これからはきちんと周りを見るんだぞ」

「うんっ！」

ばいばい、と手を振って親子と別れをすれば隣を歩くメレオレオナが軽く笑って、

「どうした、人助けにでも目覚めたか？」

「そんなわけないっスよ。つうかレオナ様って王族だったんですか？」

「ああ、そうだ。まさか私が王族と言って今更態度を変えるつもりか？」

「いやいや変えませんって。王族といえば王貴界ってトコロにいるんじゃないかなって思っただけですよ」

「あの場所はただ息苦しいからな。と言ってもそんな物好きは私ぐらいだな」

言ってメレオレオナは少しだけ歩く速度を上げ、キリヤもその後についていく。

社会見学はもう少し続く――

### 3話 「魔法騎士団と魔導書授与式」

「そもそも魔法騎士団って何なんですか？」

メレオレオナに連れられて入ったのは野生動物の肉を調理し提供するジビエ料理専門店だった。

正直いつもと変わらない気がするがよく分からない葉っぱが乗っていたり、フォークやナイフなどよくわからない刃物を使いながら食べるなど初めてのことばかりだ。

ぎこちない動きのキリヤに対して手慣れているメレオレオナは一度ナイフとフォークを置く。

「魔法騎士団は命を懸けて国や民を守る戦闘に特化した者達のことだ。それぞれ九つの団に分かれ、団長と呼ばれる者達の指示の下に動く」

「民を守るはずの魔法騎士団がさっきの親子を殺そうとするんスか？ そんなヤツらが魔法騎士になれること自体おかしいと思いますけどね」

「貴族、王族は生まれつき魔力が豊富だ。対し下民、平民のほとんどがそれほど魔力を有していない。だからこそ多少難があろうとも騎士団に入れるのだ」

「何かやだなあ……」

先ほど見た光景はキリヤにとって本当に気分が悪くなるものだった。

国民を守るべき存在が国民を虐げる。どんな理由があれ許されない行為そのものだ。

そう考えていると不意にメレオレオナと目が合う。

「だったら貴様の手で変えてみたらどうだ？」

「へ？」

「魔法騎士団に入ろうとする者の誰もが国民のためなどと殊勝な考えを持っていない。当然得た権力を笠にして横暴に振るう者もいる。結局世界は弱肉強食だ。弱ければ搾取されるしかない——先ほどの親子のようにな」

だがそれを変えたければ、

「魔法騎士として実績を積み上げ、魔法帝になればままならぬ現実を変えられるだろう」

「興味ないです!!」

「……即答だな」

魔法帝、キリヤにとって確かに響きは良かったかもしれないが同時にそれは違うとも感じた。

「オレの目的はレオナ様を超えて結婚すること。それにどんな力があってもさっきの親子を助けられたのは偶然だし、どんな人間にだって手の届く範囲しか守れない。魔法帝なんて結局オレの夢とは路線が違うし!」

「ふ、意外と現実主義者リアリストだな。だが何も魔法帝を目指せるだけが貴様にとつての利益ではない」

「?」

「魔法騎士団の任務は命の駆け引きが多い。その分自らを高められる上に様々な人間と出会うことでヒトとして成長することが出来る」

様々な人間、成長、その言葉の数々にキリヤはふと考えてみる。

このままメレオレオナに修行をつけてもらえばかりでは彼女は超えられない。いつしか彼女の元を離れて自らの力で強くならなければとは考えていた。

ならば――

「オレ、魔法騎士団に入ります!」

「生半可な覚悟で入れるほど甘くはないがな。だが、目指すとすれば〈紅蓮の獅子王〉にしておく」

「何ですか?」

「〈紅蓮の獅子王〉には私の愚弟がいる。愚弟からは貴様にとって学べることも多いだろう」

「了解しました! ぐれーのしんし、ですネ!」

「……全く原型を留めていないが」

呆れた表情を見せるメレオレオナだが対照的にキリヤはやる気満々に。

グリモワール  
魔導書授与式まであと——一年と少し。

◎

蛍タンポポの綿毛舞う三月。

年に一度全国各地に存在するその年で十五歳になる者を集めて持ち主の魔力を高めるための魔導書が授けられる。

ということできりやは魔導書塔グリモワールにやってきていた。

(やっぱりいっぱい来るんだなあ……)

社会見学以来また修行に入ったので大勢の人間を見るのが久しぶりなきりや。

周りを見ながら歩いていると——

「のわっ！」

「ん？」

何かにぶつかった。

まるで岩にでもぶつかったような感覚だが見てみるとそこにはきりやよりも遥かに身長は低い少年が。

よそ見していた自分が悪いのだからときりやは軽く頭を下げる。

「ごめんね、ちよつとよそ見してた」

「いいっていいって気にすんな。やっぱり緊張するもんな！」

やけに元気の良い少年だった。

小さくて、灰色……だろうか。とにかく煤けた髪に額に巻いたバンダナ。

恐らく連れであろう見た感じ爽やかといった風体の黒髪の少年ともふと目が合う。

「ということとはそつちも緊張してんの？」

「まあな。でもこれが魔法帝になる第一歩だからな！」

「へえー……つと、オレの名前はきりや。未来の魔法帝くんの名前は？」

「オレはハージ村から来たアスタだ！ よろしくな！」

これまた元気良く自己紹介したアスタは手を差し伸べてきてきりやもその手を握る。所謂握手というものだ。

だがその手に触れた途端にきりやはすぐに察する。

(うわ、結構鍛えてるな)

アスタ、そう名乗った少年は確かに身長は低いが腕も脚も筋肉がしっかりと付いている。

魔法帝になる、どうにもただの戯言ではなく鍛練を欠かさなかった賜物だろう。

「頑張れ未来の魔法帝、オレは応援してるぜ？」

「おう、ありがとな！」

「魔法帝になるのはアスタじゃない——オレだ」

「……なぬ？」

てつきり魔法帝を目指しているのはアスタだけかと思っただがそうではないらしい。

今まで黙っていた連れの黒髪少年もどうやら魔法帝を目指しているようだ。

「だったら二人目の魔法帝の名前も教えてくれよ」

「……ユノ」

黒髪の少年——ユノは小さくそう言うとアスタを置いて先に魔導書塔の中に入って行ってしまおう。

「あっユノ！ 置いていくなつて！ それじゃまた会おうぜキリヤ！」

「おう、オレも行くか」

走って行ったアスタにキリヤも続いて魔法塔の中に入っていく——

◎

『ようこそ受領者諸君——今日からそれぞれの道を歩む道へ進む君達へ「誠実」と「希望」と「愛」を……』

魔法塔に入って少し待つとどこからかしわがれた老人の声が聞こえてくる。

中にいる少年少女はそれぞれ期待に胸を膨らませ、中には孤児だからとアスタ達を蔑むような声も聞こえた。

だが魔導書を授与する老人の話が中盤になれば皆耳を澄ませる。

『それでは——グリモワール魔導書授与』



周りは全て本棚に囲まれていた空間だったがどうにもどれもこれもが魔導書だったようで輝く魔導書はそれぞれ持ち主を求めて浮遊し降りてくる。

「あ、あのー……」

少年少女が魔導書に一喜一憂している中、不意にアスタの声が聞こえてきた。

見てみると魔導書を迎え入れるポーズのまま固まっているアスタがいて、

「魔導書が来ないんすけど」

その言葉で一瞬、この場全てが沈黙してしまった。

どうにも異常事態イレギュラーだったようで聞こえていた老人は少し悩むと、

『また来年』

「ええええええええええ!」

一斉にアスタの周りにいた連中が笑い始める。

よほど稀有なことなのか魔導書塔は爆笑で包まれるがすぐに眩い光と共に沈黙が支配する。

(すっげー光ってる……)

今まで授与された魔導書の中でも際立って輝いている魔導書。

それを持つているのは先ほどアスタの隣にいたユノであり、その魔導書の表紙には四葉のクローバーが描かれていた。

「なあなあ、アレってすごいなの?」

「すごいどころじゃねえよ……。あれは初代魔法帝も授かったっていうとんでもない力が秘められた魔導書だ……。四つ目の葉には『幸運』が宿ってるって」

気になったので近くにいた少年に聞いてみれば想像以上に凄いものようだ。

初代魔法帝も授かったということはアスタとユノの魔法帝への夢の一步は大きくユノに軍配が上がったということだろう。

少年達がユノを讃え騒ぐ中でアスタと同じく魔導書が来ていないキリヤも思わず首を動かして自らの魔導書を探す。

(流石にオレも貰えませんでしたーじゃレオナ様に何て言われるか

……)

どんなものでもいい。

とにかくメレオレオナに失望されたくないキラヤの目の前に——  
確かにあった。

だが、それは——

「ちよつと待ってくれよ……」

想像以上のものが、来てしまった。

◎

「フッフ……アツハツハツハツハ!!」

魔導書授与式を終えて森林に帰り、成果物を見せるとメレオレオナ  
はいきなり笑った。

そんなに笑ったところを今まで見たことないほどに笑っているが  
キラヤにとつては笑い事ではない。

「笑わないでくださいよレオナ様！」

「ハハハ！ 何せそんな魔導書未だかつて見たことがなかったからな  
!!」

尚も笑うメレオレオナ。

結論から言えばキラヤの魔導書は——めちゃくちゃ小さかった。

メレオレオナの魔導書と比べれば二分の一どころではなくもはや  
四分の一。

何かメモする時にでも使うのかと言わんばかりにコンパクトサイ  
ズな一品だ。

何より——

「魔法が一個しか書かれてないんすよ!!」

「莫迦者がアアアアアアア——ツ!!」

「ぎゃあああああ!!? ナンデエエエエエエエ——っ!？」

あれだけ愉快そうに笑っていたのにいきなりぶん殴られ困惑のキ  
リヤ。

「貴様、自分の魔導書をよく見ろ」

「……?」

メレオレオナが何を伝えたいのかいまいち分からないが見てみる

と二ページ目に魔法が一つ。

二ページ目以降には何も書かれていない白紙状態。しかも小さなサイズだというのにとんでもなく無駄にページ数が多い。

「……何が分かった？」

「全く分かりません!!」

「こんの大莫迦者がアアアアアアアア——ツ!!」

「ひえええええ!!」

また顔面に拳をブチ込まれ青天。

しかも今回はいつにも増して強く、大の字で倒れてキリヤは動けなくなる。

「結論から言つて貴様の魔法は増える可能性がある」

「え、マジですか!?!」

即座に復活。

両頬を叩いて顔面を元に戻すとメレオレオナは頷く。

「本当に一つしか使えないならば魔導書は一ページしか存在しない。つまり貴様にはまだまだ成長の余地があるということだ。魔導書は持ち主の成長によつて魔法を増やすことがある」

「え、じゃあオレ二年修行したけど魔法一個分だったんスカ!?!」

「そうだ!! 貴様はまだまだ弱い!! だからこそより強くなれるということだアア!!」

「割とショック!! でも今よりもっと強くなれるならそれはそれで嬉しい!!」

「もし仮に貴様の魔法が一つならばそれを極めるオオオ!! 極めての上がれ!! 諦めるなど死んでからいくらでも出来る!!」

「レオナ様!! オレ、頑張ります!!」

メレオレオナ流の激励を受け、今までやれ小さい魔導書やれ魔法が一つしかないなど嘆いていた己を恥じる。

ますますやる気を出したキリヤは立ち上がると「うおおお!!」と声を上げ魔力を放出。

そのやる気を見たメレオレオナは腕を組み、

「せっかく貴様が魔法を使えるようになったのだ。これからの修行に

は私も魔法を使ってやる」

「……………ええ？」

「……………何だその反応は」

「い、いえ、何でもありません……………」

ただでさえ通常のメレオレオナですらボコボコもいいところなのに。加えて魔法が追加されたら現状死んでしまうかもしれない。

だが、キリヤの想いとは裏腹にメレオレオナは戦う気満々の様子で、

「よし、ここで私の魔法を使えば森が焦土になる。裏にある岩山へ行くぞオオ!!」

「ウツス!!」

もうこうなればやけくそだ。

キリヤはそう言いたげな様子で拳を振り上げればメレオレオナに連れられ岩山へ旅立つ――

#### 4話 「魔法騎士団入団試験」

「……今まで数多の魔法を見てきたが貴様の魔法は初めて見るものだな」

「そ、そうスカ……」

岩山に移動し戦闘開始してから十数分。

メレオレオナは興味深そうに言うがキリヤは地面に埋まっただけでそれどころではない。

今までも強かったのに魔法を使えばメレオレオナはさらに強く、普通に完敗。

だがおかげでキリヤは自身の魔法がどんなものなのか理解出来た。

「これからより研鑽していくことでさらに強くなるだろう。魔法騎士団入団試験まで残り半年だが——」

「魔法騎士団に入るまではレオナ様のお世話になりまアす!!」

「その思い切りの良さは嫌いじゃないぞ。決めたなら早く立て!! 実戦はこんなものではないぞ!!」

「うすっ!!」

一喝されればキリヤは即座に地面から立ち上がり、もう一度身構える。

こうして残り半年間もキリヤはメレオレオナの下、修行を続けたのだった——

◎

魔法騎士団入団試験前日。

深夜、眠るキリヤを背にメレオレオナは通信魔道具でどこかへ連絡を取っていた。

『……姉上から連絡とは本当に珍しいですね』

「明日、魔法騎士団入団試験に私の弟子が行く。気に入ればへ紅蓮の獅子王」に入れてやれ。ハマするようなら容赦なく落とせ」

「え、弟子……姉上がですか?」

「用件は以上だ。切るぞ」

『ちよ——』

自らの用件だけを伝えると一方的に連絡を切り、メレオレオナは空を見上げる。

数々の星が輝き、今夜の月は一層光を帯びているように見える。隣で眠るキリヤはよほど安心していいのか緩みきった表情、しかしその身は一秒たりともマナスキンを途絶えさせることはない。

「——まあ、マナスキンを常時出来るようになった時点で貴様はそこいらの魔道士を超えているんだがな」

本人に言えば調子に乗るために絶対に言わないが。

メレオレオナは眠るキリヤの頭をぽんぽんと撫でるとまた輝く星々を見上げるのだった——

◎

「何だったのだ今の連絡は……」

私邸で休息を取っていた額に浮かぶダイヤの印が特徴的な男——フエゴレオン・ヴァーミリオンは困惑の表情を浮かべていた。

「先ほどの連絡、姉上からでしたか？」

声が聞こえていたのか近くにいた弟——レオポルド・ヴァーミリオンが問う。

その問いにフエゴレオンが頷き、

「ああ。何でも弟子を取ったようで、その弟子が明日の入団試験に来るらしいが……」

「あ、あの姉上が弟子を……ですか？」

信じられない、言葉にせずともレオポルドの意はフエゴレオンに伝わる。

何せ姉のメレオレオナは過剰なスパルタだ。

獅子は我が子を谷底に投げ落とし這い上がることが出来た強い子だけを育てるといふ有名な話があるがそれを本当に実行しようとした女性だ。しかもその時のレオポルドはまだ三歳にも関わらずだ。

自らにも他者にも厳しいメレオレオナが『弟子』と認めた者。

それはつまり過剰スパルタを乗り越えて鍛え抜かれているということ。

「これは少し楽しみになってきたな……」

正直、裁定する立場だが明日の入団試験は気乗りしていなかった。しかし一体どんな者が現れるのか、フエゴレオンの中で一つ楽しみが出来てしまったようだ。

◎ 「ううう……レオナ様とお別れなんてオレ……ぶつちやけ寂しいっス」

「何を腑抜けたことを言っておるかアアア——ツ!!」

魔法騎士団入団試験当日。

暫しの別れに咽び泣くキリヤだが対照的にメレオレオナは朝から厳しかった。

「貴様、私を超えて『参った』と言わせるのだろう？ ならばさっさと入団試験など突破して来い!! まだ始まってすらいないと分からないのかアアアアア——ツ!!」

「それは分かっているんですけど……魔法騎士団になったら寮で暮らすようになるって聞いたしい……レオナ様の顔見れなくなるの寂しいです!!」

「今生の別れでもあるまいし早く行かんかアアアア——つ!!」

「最後まで厳しい!!」

尻を蹴り飛ばされたキリヤは地面を転がる。

別れの時でもメレオレオナらしい振る舞いにキリヤも立ち上がる  
と、

「行ってきます!!」

「行ってこい!!」

「……でも落ちたら帰ってきます!!」

「何を弱気になっておるかアアア!!」

結局、本当に最後まで怒られた。

◎ 平界の城下町にある闘技場。

その闘技場を貸しきって魔法騎士団入団試験は行われる。

「魔力が低いヤツに集る試験会場名物のアンチドリ……くそーうぜーなあ」

などに見知らぬ少年が言っている中、キリヤは何故かアンチドリに集られないのでむしろ追いかけていた。

「待てよ待てよ！ 焼き鳥にして食ってやる！」

見事な野生児ぶりを発揮し、逃げるアンチドリを追いかけるとアスタ達の姿が見えた。

追いかけるのをやめて近くに止まるとキリヤは軽く手を挙げ、

「よっ未来の魔法帝達！」

「ん……？ ああ、キリヤか！」

「つて、ものすごく集られてんな……」

思わずキリヤも呆れて見てしまったがアスタはめちやくちやアンチドリに集られていた。

アスタの言葉は半分以上アンチドリの羽音やつく音に阻まれ聞こえず、そう思えばユノの方は全く集られていない。

「うおおおお！ 何だこの鳥！ すまんキリヤ！ ちよい追い払ってくる!!」

「お、おう……あつ！」

言つてアスタはアンチドリを振り払いながら駆け出せば少し進んだところで誰かと激突してしまう。

異邦人、というのだろうか。黒い前髪を後ろに下げた髪型の目つきの悪い大男。

人殺しの目つきに太い首。筋骨隆々としたその姿は明らかに入団試験を受けに来た受験生ではない。

それなのに――

「いやぁーオマエすんごいフケ顔だな！ 今までどんだけ苦労したんだい？」

アスタはめちやくちやフレンドリーに接しに行ってしまった。

ユノもキリヤもやらかしたな、といった目で見つめると案の定顔面をアイアンクローされてしまい、キリヤはアスタの成仏を切に願う。

「お、おいあれ……黒の暴牛の団長――ヤミ・スケヒロじゃねえか!？」

周りにいた少年が驚きの声を上げる。



有名人なのだろうか、キリヤにはさっぱり分からずユノに問いかける。

「知ってる？」

「知らない」

「だろうな、わっはっはー」

「わっはっはじゃねえよ！　今から入団試験なんだから事前に団のことは調べて来いよ！」

ユノもキリヤも知らず、この会話はこれで終了と思っていたが驚いていた少年が割り込んでくる。

そういえばこの少年はグリモワール魔導書塔でもキリヤの質問に答えてくれた気がする。

「いいかへ黒の暴牛∨つてのは武功よりも被害額の方が上回るならず者騎士団でまともな奴は誰一人いないらしいぜ」

「ふーん」

まあ確かにあの風体で生真面目だったら驚きだが、ヤミを見ながら素直にキリヤはそう思う。

他からもへ黒の暴牛∨にだけは入りたくないなど聞こえてくるが――

「――待たせたね」

聞こえてきた青年の声と共に受験生に絡んでいたアンチドリが一齐に飛び立つ。

受験生達がいる場所よりも高い場所――闘技場の観客席に八人の団長、受験生達がいる場にいたヤミも跳べば合計九人の団長が集結する。

「今回の試験は私が仕切らせてもらうよ」

「あれは……現最強の魔法騎士団へ金色の夜明け∨団団長のウイリアム・ヴァンジャンスだ！」

受験生達が声を上げ、それを拾うとどうにも仮面を着けた……というより被っているあの青年はすごい人間のようだ。

次期魔法帝最有力候補だとか団員からの信頼も厚いだとか、ともかくすごいらしい。

「……『魔樹降臨』」

魔導書を開き、魔法を唱えたかと思えば空から木の根が無数に現れる。

軽く唱えただけでこの規模。次期魔法帝最有力候補と言われるだけあって、納得のものだ。

木の根からは箒がそれぞれ手渡され、キリヤは箒を見ると疑問符を浮かべる。

「……今から掃除しろってこと？」

「そんなわけねえよ！」

「それではこれより魔法騎士団入団試験を始める。まずは手短にルールを話そう」

隣の受験生にツッコミを入れられながらもヴァンジヤンスの話が始まれば二人共押し黙る。

「諸君らには今からいくつかの実技試験を受けてもらう。その様子を我々九人の魔法騎士団が審査し、後に九人各々の欲しい人材を採択してもらおう。誰にも選ばれなければ——言わずとも分かるだろう？」

(レオナ様に超拳骨を受けることになる……)

魔法騎士団に入団出来ないよりも先に浮かんだのはメレオレオナの拳。

思い出すだけで身震いするキリヤだが、ヴァンジヤンスの説明は続く。

「二次試験は手渡された箒を使って飛んでもらう。魔力を操作出来る魔道士なら感覚で出来ることだ。魔道士の最も基本な移動方法だが箒飛行が出来ないようなら話にならないよ」

と、言われてもキリヤは正直箒で飛行したことなどなかった。

例としてヴァンジヤンスの背後で一人の魔道士が実際に箒に跨って浮いて見せ手本となるが股間が痛そう以外に何も浮かばない。

ともあれ飛ばなければいきなりアウトだ。

すでに周りは飛び始めていてユノも見事に飛び上がって、キリヤは出遅れた形になっている。

「よしっ！ やるぞー！」

箒を武器のように掴んだままキリヤは自らのマナスキンの魔力放出量を調整。

靴裏が地面から離ればキリヤの身体は浮かび上がってユノと同じところで静止する。

「あいつ……箒なしで飛んでる……」

これには受験生達はおろか団長達も少し驚いた様子を見せる。

視線が集中してしまったためにキリヤはあたかも当然のことのように、

「昔は適当な枝で飛んでたんすけどレオナ様が『そんなものなしで飛ばんかアアアア!!』って怒られてそれ以来こうやって飛んで……それにほら！ この方が両手空いてて攻撃も出来るし」

「ぶわっ!?!」

「あ、ごめんっ!」

と、適当に箒を振るっていると他の受験生の顔面に直撃。

しかも張り切ってしまったために結構な勢いで相手は空へ飛んでいってしまった。

「……ま、まあこのとおりいつでも戦えるように……的なの？」

などと適当な言い訳をして団長達の視線を受けないようにそそくさり人混みの中へ避難。

すると不意に地上にいたアスタの姿が見える。

「ふんぬぐぐぐぐぐぐぐぐぐ……っ!」

（アスタ、一ミリも浮いてねえ……）

物凄く気合が入っているものの箒は浮く気配がない。

確かどんなに才能がなくとも少し浮くぐらいは誰でも出来るとメレオレオナは言っていた気がするが――

（もしかしてアスタって……魔力がない？）

そんな疑問を抱きながら次の試験へ――

## 5話 「入団試験と鉄拳制裁」

二つ目の試験は魔力を用いた岩壁砕き。

先ほどの箒飛行で奇想天外な行動をしたキリヤと一切飛べていなかったアスタは変に注目されており、キリヤは張り切って腕を回す。「思いつきりやっついていいんだよな！」

誰も答えてくれるはずはないが皆遠距離の魔法で破壊しているためにキリヤも合わせる方向で。

拳を握って後ろへ下げれば――

「よいしょオ!!」

拳を放ち、その速度から魔力の本流が放たれる。

一筋の槍と化した一撃は岩壁を容易く貫き、拳闘技場の壁すらも貫通してしまいその奥の壁すらも貫通。

張り切ってやりすぎてしまったとキリヤは口を一文字に結び、ヴァンジャンスの方を見つめれば――

「た、退場は勘弁してください……」

「ふ、退場なんてしないよ。ここは自らの實力を見せる場なのだから存分に能力を發揮してくれ」

「やたーっ！」

団長というのは何と心広い方なのだろうか。

メレオレオナもする時は思い切りやれと言っていたし、これで憂いはなくなった。

一方アスタはやはり何も出ていなかった――

◎

次は魔法を用いて飛ぶ紙の中心に描かれた印を撃ち抜く試験。

飛ぶ紙はなかなか素早く苦戦している者も多いがキリヤは別のことを狙っていた。

その視線は一つの紙に囚われず、忙しなく動いていると思えば――  
「そこだっ！」

跳び立ったかと思えばすぐその姿は消え、次に現れたのは飛ぶ紙から離れた闘技場の壁。

一点に集中し放たれた魔力は一直線に突き進み、自らのも含めて合計八枚の中心を見事に射る。

「な——何しやがる！」

「どうせなら一気に撃ち抜いた方が気分いいかなって！」

自らの分を撃ち抜かれた受験生達から非難の声が飛んでくるがキリヤはお構いなし。

メレオレオナの言葉を信じるキリヤはどこまでも直進する性質タチであり、他人に構っている余裕などない。

一方、アスタはまた何も出来ていなかった。

◎

「オイオイ、何だありや。とんでもねエのが紛れてるじゃねえか。誰だ動物園からあんな獣放つたのは」

団長席で見ていたヤミは率直な感想を口にしていた。

手元の資料を見れば確かキリヤと言ったか、その動きは人間離れた獣のようだ。

素の身体能力に加え、一定量の魔力を放出することで身体能力をさらに向上させ如何なる環境にも適応出来る基礎魔法の極地——マナスキンを常に身に纏っている。

マナスキンはとても一朝一夕で物に出来るわけもなく、しかも八枚の動きを同時に見て撃ち抜いた。

氣や流れを読んだわけでもなく、ただ勘だけで。

「……もしや」

「何だ熱血真面目大王、心当たりあんのか？」

声を上げたのはヤミより一個空けて離れた席に座っていたへ紅蓮の獅子王。団長フエゴレオン・ヴァーミリオン。

問いかければフエゴレオンは顎に手を当て、

「昨日姉上から連絡があつてな。何でも弟子が入団試験に行くと言われたが……」

「いつ弟子なんて取つてたんだよ、あのバイオレンスメスライオン。つうかよく生きてたなアイツも。充分バケモンじゃねーか」

しかし、言われてみれば納得出来る。

あれだけ野性染みた動き。空中での機動力。マナスキンの精度。何より——持続性のある魔力量。

どこかメレオレオナを思わせるあの動きは間違いなくメレオレオナに叩き込まれた動き。

「見て見てアスタ！ レオナ様作った！」

「レオナ様ってまず誰?!」

（ぜってーそうだ……）

今は魔法を用いて何か好きなものの形状模写をさせているがキリヤが作ったのは間違いなくメレオレオナ。

それをあの魔力を持たないチビ——アスタに見せて楽しんでいる様子。

そもそも魔法騎士団入団試験はその人間の人生さえ左右する。それなのに一人だけ緊張感なくただ遊びに来ているような感覚で軽く試験をクリアしている。

「……まあアネゴレオンの弟子ってのは満更嘘でもなさそうだな」

「彼は相当実戦経験を積んでいるようだ。ある種逸材かもしれないね」

「珍しいなオマエがそんなこと言うなんてよ」

話を聞いていたヴァンジャンスも珍しくそう口にする。

それほどキリヤは見込まれているのか、ヤミ自身にも興味が湧いてくる。

「ま。まだ最終試験があるからな、じっくり見ようぜ」

◎

「——それでは次が最後の試験だ。最終試験は実戦形式、適当に二人一組になってその相手と戦ってもらう。魔法騎士団は戦闘が主な仕事だ。君達の力を存分に示してくれ」

「アスタ、オレとやろうぜ！」

説明が終わればすぐにずっとアスタの近くにいたセツケという受験生がアスタへ声を掛ける。

これまでもどうしてアスタに絡み続けているのか分からなかったがアスタは——

「セツケ……こんなしよーもないオレと戦ってくれるんですかい」  
感動してセツケへ感謝を述べていた。

初戦の組み合わせが決まれば二人は闘技場の中央へ移動していく。  
その最中、セツケが何かアスタに言っていた気がするが――

「どちらかが降参するか戦闘不能になれば試験終了だ。回復魔法が使える魔道士が控えているから存分に戦ってくれ――では、始め！」

「手加減無しだぜアスタ！」

青銅創成魔法” セツケマグナムキャノンボール 青銅の防護魔砲球”。

魔法を唱えればセツケを中心として水晶のような透明度を持った青銅が半球状に展開され、ところどころに魔力を撃ち出すだろう砲台が聳え立つ。

攻防一体と言ったところか、一見アスタにはどうすることも出来ないように見えるがアスタの目は何一つ死んでいない。

「オイ見ろよアイツの魔導書、クソボロだぜ？」

「決まったなこりゃ。最果てのヤツには無理だ」

「つか何でここにいんの？」

「オマエなんかどこの団も取ってくれねえよ」

散々な言われようにアスタでなくとも腹が立つキリヤ。

何故努力してきたアスタが莫迦にされなければならないのか、そう思った刹那――

「んじゃ、行くぜ――」

一言言って駆け出せばアスタはすでにセツケとの肉薄を果たしていた。

一瞬キリヤのようにマナスキンを疑ったがこれは違う。単なる身体能力による速さだ。

「え」

セツケの呆気にとられた声。

そのうちにもアスタは黒ずみ煤けた魔導書を開いて中から一本の柄を握り締める。

魔法なのか。その判断すらする暇なく叩きつけられた大剣は青銅の壁などなかったもののように砕き、その刀身をセツケに直撃させ

る。

「アスタ……スゲエなオマエ」

思わずキリヤも感心の声を零す。

弛まぬ努力によって創られた筋肉。そして躊躇いのない太刀筋。

アスタの勝利にざわめく周りの受験生、対しアスタは声を上げる。

「ざわざわうるせええ!! オレは魔法帝になるってんだ!!」

「バカかアイツ?」

「最果ての下民が何言ってるんだよ。現実見ろよ!!」

アスタが夢を語れば唐突に野次を飛ばし始め嘲笑う受験生達。

すでにそういうのに慣れてしまっているのかアスタは言い返すこともなかったが——キリヤは違った。

「何でそんなにアスタのこと莫迦にすんの?」

思わず口が自然に動き問いかけていた。

すぐ近くにいた受験生が、

「最果て出身で下民だからだよ。世の中には『分相応』ってのがあって、皆だってそう言ってるんだろ?」

「ふーん……皆が言ってくれば何でも正しいってわけか——オマエ、つまらないね」

心底呆れたキリヤは言った受験生を蹴って中心へ移動させ、先ほどからアスタを嘲笑っていた二人の首根っこを掴んで中心へ放り投げる。

何が何だか分からない受験生を無視しキリヤはヴァンジャンスへ目を合わせ、

「魔法騎士団に入れば協力して戦うことってありますよね?」

「ああ、大抵が三人一組で行動するよ」

「だったら三対一で戦わせてください」

「な、何を勝手に言ってるやがる! そんなの認められるわけ——」

「構わないよ。では、そちらの三人と君一人で良かったよね?」

「はい、ありがとうございます」

ヴァンジャンスに一礼すればキリヤは胸ポケットに仕舞っていた魔導書を取り出す。



その小ささに相手の受験生達は早速笑う。

「ハハハ！ 何だその小ささ！」

「そんなんで挑んできたのかよ!!」

「——では、始め」

「やっちまえ!!」

開始と同時に一齐に放たれる攻撃魔法の数々。

対しキリヤは魔力を纏った両拳を強く握り締めれば単純に連続で振るう。

ただそれだけで——相手の攻撃魔法は全て消え去る。

「な——ッ!?!」

「どうした、たったこれだけか?」

一歩踏み出せば一人のすぐ傍まで肉薄。

「ひっ——」

恐れを含んだ声音だがそれで手加減するほどキリヤは優しくない。

容赦ない拳が一人の顔面を捉えればその身は回した独楽のように高速回転し、闘技場の壁に埋めつけられる。

「クソ!! 何なんだコイツ!!」

水創成魔法“ウオーターランス”。

水で形成された槍がキリヤの顔面を捉え、一瞬『やった』と言った表情を浮かべる受験生の顔面に拳が突き刺さる。

キリヤの顔は何一つ負傷することなく、最後の一人を見据える。

「オレはオレのことどう言われようが構わねえけど——」

「待っ！ オ、オレ降参す——」

「トモダチの悪口だけは絶対に許さねえ!!」

渾身の拳骨。

最後の受験生の脳天を捉え、その勢いは止まらず受験生の歯は強引に合わさったことで全て碎け散る。

魔法すらまともに使わず一瞬で三人を打ち倒したキリヤに全員が呆気に取られる。

「あとオマエらの言葉、レオナ様のと違って全然響かねえわ」

「ス……スツゲエなキリヤ!! オマエ超すごかったんだな!!」

「アスタだつてレオナ様に谷底に落とされたり不眠不休で追い掛け回されたりすれば出来るようになるさ」

「死ぬわ!!」

最終試験を終え受験生の元に戻ったキリヤをアスタが迎える。

拳を向ければアスタも合わせ、

「でもありがとな!」

「何のこれしき。未来の魔法帝様のためだからね」

と、軽く冗談交じりで言うがこの沈黙した空気に受験生も慄く。

だが中でも物怖じなかつたのはユノだった。隣には貴族がいて、対戦相手を貴族に決めたのだろう。

通り縋る寸前。

「魔法帝になるのはアスタじゃない——オレだ」

「ハハハ、頑張れよユノ」

負けず嫌いなのかわざわざそう言ってから対戦に望んだユノ。

相手が貴族にも関わらず相手を一瞬で倒し、そこからいくつか戦いを経て入団試験は終わりを告げる。

正直言つて——

(何か物足りねえ!!)

キリヤは緊張感どころか有り余る元気に悩んでいた——

## 6話 「試験結果と新たな生活」

「——以上で試験は終わりだ。では、番号を呼ばれた受験生は前に出て来てくれ。その受験生の入団を望む団長は挙手し、その挙手した団に入団するか否か。また挙手したのが複数の団の場合、どの団を選ぶかは受験生の自由だ」

——ただ挙手がない場合は魔法騎士団には入れない。

念押しされるように言われ、一番から順番に呼ばれ、一喜一憂していく。

だがキリヤには一つ問題があった。

(番号って……オレ、何番!?)

受験票は予め渡されていたが確かに数字らしき番号が書かれている。

しかし、悲しいことにキリヤは文字や数字が読めない。

緊張しているアスタには悪いので涼しい顔をしているユノに聞いてみることに。

「な、なあユノ」

「……?」

「悪いんだけどオレ何番? オレ文字とか数字とか読めなくて……」

それでよくやってこれたな、と言った表情をされてしまうが仕方ない。

仕方なさそうにユノはキリヤの受験番号を見ると、

「一六六番、だからアスタの後」

「マジで! ありがとな!」

何とも緊張感のないが何とか番号を覚えられたのでキリヤはうきうきとした気分で手の上の魔力で暇潰しし始める。

するとしばらく経ってユノの番がやってきた。

ざわめく受験生の中を進み、指定された場所に立てば団長は一気に手を挙げていく。

それも一つや二つではなく——全ての団。

「……マジ、かよ……」

これには受験生達からも驚きの声が次々と聞こえ、キリヤも「おー」と言葉を漏らす。

「金色の夜明け」団でお願いします」

キリヤの知るところではないが魔法帝になる最短で最善の道。

ユノはそれを思慮し「金色の夜明け」団を選択してアスタの番がやってくる。

だが——アスタを選ぶ団はどこもなかった。

「結局、魔法騎士に求められんのは高い戦闘能力でも得体の知れねえ力でもなく——魔力だ」

席から立ち上がったヤミから放たれた魔力。

その魔力は受験生達に悪寒を走らせるには充分であり、キリヤもヤミに少しだけメレオレオナに近しいものを感じるほど。つまり魔法騎士団団長とはそれほどの器なのだ。

「魔力がないオマエを欲しがる団はない。この現実を前にしてまだ魔法帝になるとほざけるのか？」

アスタの目の前に降り立ったヤミは圧倒的な魔力を放ちながら威圧する。

魔力のせいでアスタにはきつとヤミの体躯が何倍にも膨れ上がって見えるだろう。

普通の人間なら諦めるだろう——だがアスタは違う。

「——ここで魔法騎士団に入れなくなつて、何度コケたつて、誰に何と言われたつて。オレはいつか魔法帝になつてみせます！」

その言葉にユノもキリヤも笑い——ヤミも笑った。

「オマエ面白いな。黒の暴牛ウチの団に來い——拒否権はないがな。クソボロになるほど散々な目に遭わせてやるから覚悟しろ」

「えええええ!!」

「そしていつか——魔法帝になつてみせろ」

「はいっ!!」

(やっぱり皆言うから正しいってのは違うな)

魔力がなくてもアスタを受け入れたヤミを見てキリヤはヤミが言われていたほど悪い人間には見えなかった。

見た目ばかりで本質を見抜けないのは本当の愚か者で救いようない莫迦者だ。

かつてメレオレオナが言っていた言葉はまさにその通りだった。

「じゃあ次が差し支えてっからそろそろ下がれ」

「うっす!!」

言われてアスタは戻ってきて、ヤミも席に戻る。

キリヤはまるで我が事のようににこつと笑えばアスタを迎え、

「良かったなアスタ」

「ああ！次はオマエの番だろ？」

「おう」

番号を呼ばれキリヤは前に出る。

他人の心配などしている場合ではなく、やりたい放題やってしまったため終わったかと思えば――

「嘘だろ……また全団挙手してる……っ！」

ユノに引き続いてキリヤの番でさえ全ての団は手を挙げていた。

他の会話を聞いていればへ金色の夜明けへ団は貴族の中でも特にエリートでしか入れないと聞いていたが存外入れるものようだ。

だが、ここで二つ目の問題が発生――

（レオナ様に勧められた団ってどれだっけ……）

社会見学以降魔法騎士団の話をするのがなく、ただでさえ最初からうる覚えだったにも関わらず日々ハード過ぎる修行で完全に忘れてしまった。

消去法で行こうにも今回に限って全ての団が手を挙げてしまっている。そしてあまり待たせるわけには行かない。

（確かヤミ様のところがへ黒の暴牛へ、ヴァン何ちゃら様のところがへ金色の夜明けへ……となればあと七つ！）

左から余っているのは寝ている人、縦に細長い人、兜を被った如何にも美人な人、前髪がバイ人、額にダイヤのマークがある人、もっさりした髪の人、この中から選ばなければならない。

（こんなんだったら遊ばずに他の人の結果聞いとけば良かった！多分一回ぐらいその団の名前出てただろ！）

と、後悔するも必死に思考を回して――

（レオナ様との共通点を探せばいいのでは!? ということは女性だ！  
寝てる人は女性なのか分からないけどこれなら答えは一つ――）

「兜被った如何にも美人な人のところでお願ひしますっ！」

『一六六番――〈碧の野薔薇〉』

「……………マジですか」

賭けに出た結果これは完全に違う名前だと分かり、キリヤはやらか  
した――

◎

『莫迦弟子はどうだった？』

「はい、姉上が育て上げただけあつて群を抜いていました」

魔法騎士団入団試験は終了し、報告のためにフエゴレオンは通信魔  
道具でメレオレオナに報告していた。

フエゴレオンが褒めるとメレオレオナはさぞ上機嫌に鼻で笑う。

『ハッ！ そうだろうな』

「――が」

『が……………何だ？』

「その、非常に申し上げにくいのですが……………」

『無駄に遠回しにするな。さっさと言わんか』

急に歯切れの悪くなるフエゴレオンにメレオレオナからも怪訝な  
声音が聞こえてくる。

正直言いたくはないところだが――

「全ての団が手を挙げたのですが――彼が選んだのは〈碧の野薔薇〉で  
した……………あの時の様子から恐らく〈紅蓮の獅子王〉含めてまるで団の  
名前を把握してなかったのかと」

『フフ……………ハハハハハハハハハハっ!! そういえば教え忘れていたな  
!!』

てつきり『何をしとるかあの莫迦弟子はアアアアアア!!』と怒る  
とばかり思っていたがどうもそこまで機嫌を損ねていないらしい。  
というよりこれほど上機嫌なのは初めてなほどだ。

「姉上はキリヤスフィールを〈紅蓮の獅子王〉に入れたかったのでは

？」

『最初はそうだった。アイツは実力こそあれど何せ精神的に幼い。だから貴様のところで精神を鍛えさせようと思ったが〈碧の野薔薇〉もアイツにとっては精神的に成長出来る場になるか』

「確かにあの団は女尊男卑の思考が強いところですよ。男であるならば真つ先に避ける団かと思いますが――」

『何だかんだで上手くやりそうだがな。まあいつか私を超えろと言ったのだ。〈碧の野薔薇〉の女などに屈服するなどありえん』

「ところで姉上、聞きたいことがあるのですが」

『何だ言ってみろ』

「本当にキリヤスフィールを谷底に落としたのでですか……？」

『ああ、修行の一環でな。レオとは違い自力で這い上がってきたぞ』

「……いやいや、あの頃のレオは三歳ですし」

本当に過剰スパルタなメレオレオナにフエゴレオンはただ言葉を失った――

◎

(うわー……静か……)

魔法騎士団入団試験を終え、団に選ばれた者はそれぞれ拠点となる場所へ案内される。

キリヤが入団してしまった〈碧の野薔薇〉はどうにも女性が多いらしい。すでに兜被った美人な人の隣にはキリヤよりも身長が高い褐色肌の少女。

もう一人はキリヤの隣に黒い髪をボブほどの長さにし、割と小柄で可愛い少女。キリヤと同じく新入団員として並んで歩いている。とにかく静かな雰囲気はいつもメレオレオナと騒がしい日々を送っていたキリヤにとってつらいものだった。

(……ん?)

早くもメレオレオナが恋しくなってきたキリヤだが先ほどから視線を感じる。

見れば隣を歩く黒髪の少女からで、キリヤは目を合わせると。

「何か用？」

「私はシイナっていいいます。あ、あなたの名前教えて貰っていいですか?」

突然の自己紹介。

何故か少し顔を赤らめて恥ずかしがっている少女——シイナに名前を求められれば『そういえば団長と付き人の名前しか聞いてなかったな』と改めて、

「オレはキリヤスフィール・フィン・ガルガン。長いからキリヤでいいよ」

「キリヤさん……よろしく願います!」

「そんな畏まらなくても、同期なんだしもつと気楽で——」

「ちえいさーっ!!」

「あいだっ!?!」

シイナが握手のために手を伸ばしてきたのでこちらも手を出すと褐色肌の少女がそれを手刀で阻止する。

握手を弾かれたキリヤは不満げな表情で、

「何だよ、えーつと……サン・マカロンだっけ?」

「ソル・マロンだ! 何て適当な覚え方してんだ!」

男勝りな口調で手刀を構えているのは付き人のソルだった。

褐色肌に黒の短髪、高身長と男のような要素を多く感じるが胸もなかなか大きく、細身で肉体美はきちんと持っている。あと着ている服装も露出が多い。

「で、何でオレ手刀喰らったの? これから数少ない同期と絆を深めようとしてたんだけど……」

「あのかな新人、ここはへ碧の野薔薇だぞ! 男はパシリが当たり前で女に触れるなんて言語道断なんだぞ!」

「姫様ー、何で姫様って兜被ってるんですか?」

「うおい! 姐さんに何気安く話かけてんだーっ! てか姫様って呼……ありだな」

「……ありなんだ」

「二人共、私のことは団長と呼べ」

「すみません姐さん!」



「サーセン姫様！」

一向に反省する素振りを見せないソルとキリヤ。

二人の態度に呆れるしかない（碧の野薔薇）団長——シャーロット・ローズレイ。

だが結局キリヤはシャーロットの兜が気になるのか、

「姫様の兜何か尖ってるんですけどまさか……姫様の頭って尖ってるんじゃない——」

「そんなわけではないだろ！ あれはそういう装飾なんだよ！」

ぱしーんと頭をソルに叩かれるがキリヤはふとシャーロットと目を合わせると——兜の尖った部分をまるで白刃取りするように両手を合わせてすぽんと取ってしまう。

「尖ってない、だと……」

「反対に何故尖っていると思った？」

冷やかな目で見られるがシャーロットの頭は当然尖っているはずもなく、兜からあまり見えなかったが綺麗な髪をしていた。後ろで団子状にまとめた髪を三つ編みした髪で束ねており、ほどけば元々は長髪なのだろう。

メレオレオナとはまた違った『美しさ』を持っている、そう思いながら取った兜を被る。

「あーっ！ 何で被ったオマエーっ!!」

「何か、ノリで？」

「疑問を疑問で返すな！ 私だって姐さんの兜被ったことないのに——」

「二人共つまらんことで言い争うな」

「アツタマ来た!! オマエのパシリランクは私が決めてやる!!」

何だかよく分からないワードが出てきたがソルはやる気満々。シャーロットの言葉すら無視してキリヤに指を差す。

「パシリランク……？」

あまり分からないがとにかく入団して早々大変なことに巻き込まれているのは確かだった——

## 第1章く初任務編く

### 7話「パシリランク決定戦」

「……で、拠点着いて早々何なのこれ？」

場所は〈碧の野薔薇〉拠点の前、何人もの魔道士によって半球状に張られた魔法防護壁の中にキリヤは入れられていた。

眼前にはソルがいて腕を組んで雄々しく立っていた。

事情を聞こうと素直に問いかければソルが腕を組んだまま答える。

「〈碧の野薔薇〉に入った男は必ず通る通過儀式だ！ 私に負ければオマエは一生〈碧の野薔薇〉のパシリ！ もし勝つことが出来たらパシリは免除で寝床も拠点の中にしてやる！」

「だ、団長でもないのに何てルールを敷きやがる……」

こんな暴挙許されるのかと思いつながら防護壁外にいるシャーロットを一瞥するが何も口出しすることはない。

どうにもこの通過儀礼はシャーロット黙認の下で行われているようだ。

というより――

「質問っ！」

「認めてやるっ！」

「負けたらどこで寝泊りするんですか!？」

「そこに小屋があるだろ！ そこだ！」

「うわちっさ!!」

荘厳な城のような拠点の隣にあったのはこれでもかというぐらい小さな小屋。

まさか今まで来た男全員あの小屋にブチ込まれたかと思えば「ひいーやべえ」と素直に声が出る。

「でも勝てば文句ないんだよな！」

「勝てたら話だけだな!! てゆーかオマエいつまで姐さんの兜被つてんだ!! 返せ!!」

「そつちが勝ったら返すよ!!」

キリヤは今でもシャーロットの兜を被っていて、構えを見せる。  
ソルもその構えに合わせて魔導書グリモワールを開き、構えれば様子を見ていた  
シャーロットが口を開く。

「改めて貴様の實力を見せてもらおうぞ」

「よおし、やってや——」

「姐さんに二度と近付けさせないぞ！」

土創成魔法“暴れ地母神”。

魔導書が輝けばソルを中心に地面は隆起し、やがて大まかに人の形を成していく。

ゴーレム、そう言うのが正しいのか。四、五メートルはあろう巨体にソルは乗ってキリヤを見下ろす。

「せめて最後まで言わせろよ！」

「うっさい！ 潰れる!!」

始めの合図もなしに駆けて来るゴーレム。

確かに実戦において『よいドン!』などあるはずもない。

ゴーレムが踏み込んだだけで地面は震え、だが見たところ速度は大了なものではなく緩慢な動きで拳を振り上げる。

「おっせえ!!」

拳を引いたところでキリヤは胸ポケットから自らの魔導書を取り出し、そのまま地を蹴る。

爆発的な初速。ゴーレムが引いた拳に自らの拳をぶつけ、着地と同時に次はゴーレムの片足へ蹴りを放つ。

「そんな攻撃……ッ!？」

弾かれ体勢を崩したもののソルはすぐさま第二撃を放とうとする。  
しかし、ゴーレムは指示した動きについてこない——瞬間、キリヤに殴りつけられたゴーレムの拳は音を立てて崩れる。

「あれ、何で……魔力が回らない!？」

蹴られたゴーレムの片足もまた魔力が回らなくなったのか巨体は大きくバランスを崩し、転倒。

大きな砂埃を上げる中、地面に着地したソルの眼前にはすでにキリヤが迫っており——

「どうした、それで終わりか？」

「そんなわけないだろ！ 土創成魔法” 土弾連射” !!」

ソルが後退すればその背後の土が天に向かって捻り上がり、いくつも砲台が出現。その照準は全てキリヤに向けられ、一斉に魔力弾と土の弾丸が降り注ぐ。

「そうでなくっちゃなア!!」

構えた拳を一斉に振るえば魔力弾も土の弾も消え去り、キリヤは嬉々として目を輝かせる。

「よっしゃ次イ!!」

「土魔法” 土穴地獄” !!」

ソルの魔導書がまた輝きを見せたかと思えば不意にキリヤが立っていた足下が柔くなる。

まるで一気に耕されたような。その感触を例える暇もなく地面は二つに割れキリヤは浮遊感に襲われる。

「うおっ!？」

「もらったア!!」

落ちるキリヤに再びゴーレムを出したソルはその巨大な拳を振り下ろす。

一見逃げ場のない攻撃。だがこんなことはメレオレオナとの修行では基本だ。

だから恐れもしないし、むしろキリヤは不敵に笑って――

「もっと本気で打ってくれてもいいんだぞ!!」

足下の魔力放出を強化。

修行期間に学んだことだが一定以上足下に放出すれば例え空中だろうが足場を創り出すことが出来る。

これもまた基本の一つであり、拳を真っ向からゴーレムの拳にぶつけ跳ね返す。

「さて次は何を見せてくれるんだ!？」

奈落の底などすでに見慣れている。

修行の時は魔力形状変化によって戻って来いと言われたが今は違う。すでに飛行魔法を覚えている。

空中で加速したキリヤはすぐさま地上に戻り、ソルから一定距離を取って手招きする。

「く……っ！ 男のくせにやるな！」

すでに今出しているゴーレムでは通用しないことは分かったのかソルはゴーレムから降りると自らの魔導書を手に取る。

「これ使おうと魔力消費がとんでもないけど……オマエをブツ飛ばす!!

土創成魔法” 暴れ地母神の超拳骨”!!」

魔導書が一際大きな輝きを見せたかと思えばソルは拳を地面に叩き込む。

ゴーレムが走っていた時よりも遥かに強い揺れが起こったかと思えば今までにないほど大きく地面が脈動し、隆起していく。

「へえ……」

キリヤは思わず感心の声を上げる。

一気に大きくなっていく土の塊はゴーレムとなり、その右拳はキリヤが見上げててもまだ足りないほどで防護壁のギリギリまで膨れ上がればとてつもなく巨大な拳となる。

「これが私の全力だッ！ さっきみたいに受け止められるか!!」

「よっしや上等だア!!」

(まだ”戦竜の腕鱗”には足りねえな……)

これまでの戦いでまだキリヤの魔法を満たすには足りていない。このままなら力負けする可能性もあるがキリヤは不敵に笑う。

「だったらア!!」

ただただ魔力をぶつけてやればいい。

それが全力を見せたソルに対してこちらも全力を見せる。そうでなければ礼儀知らずもいいところだ。

ゴーレムは足を開き緩慢な動きで巨大過ぎる拳を振るい、対しキリヤも魔力で拳を覆って握り締める。

思い切り腰を捻って拳を大きく下げ、真正面から思い切り打ち込む。

「まだまだア!!」

一撃では終わらない。二撃、三撃、瞬きする暇もなく回数を重ね、正

面から何度も打ちつける。

速く、鋭く、重く、相手を圧倒し、完全な敗北を知らしめるには真  
正面からしかない。

「だらアッ!!」

打ち込み続けたキリヤの拳はゴーレムの拳に輝ヒビを作り出し、やがて  
その腕自体を吹っ飛ばす。

脆く崩れ去るゴーレムに呆気にとられたソルの思考は一瞬真っ白  
と化しただろう。

その隙を逃がすわけもなく、キリヤは即座にソルとの距離を詰め  
る。

「——オレの勝ちだな」

「あつ……」

魔力不足でゴーレムから落ちそうになるソルの身体を支えて無事  
に着地させる。

これは殺し合いではないのだからこの程度で充分だろう。すでに  
ソルの身に纏われていた戦闘に対する意識も薄れているのを感じ、キ  
リヤはにこりと笑む。

「これでパシリ免除だよな?」

「くっそう……」

防護壁が解除され、周りも終わったことを認知しただろう。

だが——

「ソルちゃんが負けるなんてありえない!!」

「何か卑怯な手でも使ったんでしょ!!」

そんな非難の声がキリヤへ向けられる。

キリヤの知るところではないがソルは〈碧の野薔薇〉でも実力者の  
一人で、それなのにここの女魔道士が忌み嫌う『男』に負けてしまっ  
たのだから納得出来ないのも無理はない。

一方、外野とは違ってソル自身不満げながらも負けを認めているよ  
うで口を一文字に結んでいる。

(この空気だと勝っても小屋暮らしだったかなあ……)

さてどうするか、キリヤがこの状況をどう打破するか考えていると

「——見苦しいぞ貴様ら」

好き放題野次を飛ばす外野の魔道士達を黙らせたのは以外にもシャーロットだった。

「今の戦いを見て本当に卑怯な手を使っていたと思うならばここへ降りてキリヤスフィールと戦い、自分自身で感じてみる」

その一言で一斉に外野の女魔道士達は黙り込んでしまう。

「外から物を言うのは簡単だ。しかし、戦いもせずただ卑怯だ何だと野次を飛ばすのは勝者の顔に泥を塗り、さらに正々堂々と戦い負けたソルへの侮辱となる……そんなことも分からないのか？」

一睨み利かせれば女魔道士達は一斉に萎縮し、申し訳なさそうに一歩退く。

構わずシャーロットが手を出せば控えていた女魔道士が〈碧の野薔薇〉の刺繍が施された外套を二着受け取る。

「貴様の實力は見せて貰った——〈碧の野薔薇〉へようこそ、二人共歓迎する」

「え、私もよろしいのですか……？」

「元々先ほどの洗礼は男だけに課せられるものだ。突破した者は初めてだったがな」

「マジで！ やったー！」

キリヤは喜びながら外套を受け取ると羽織り、シイナも続くように羽織る。

自分では見た目がどうなっているか分からないがとにかくこれで本格的に〈碧の野薔薇〉として認められ——いやあの視線の様子ではキリヤだけはまだまだ認められないようだ。

「キリヤスフィール、そろそろ貴様は私の兜を返せ」

「え、コレって貰えたって思っていましたけど！」

「どう捉えればそうなる」

シャーロットが手を伸ばそうともキリヤはシュツシュと避けてしまい、諦めたのかシャーロットは踵を返す。

「ソル、魔力が回復し次第中を案内してやれ」

「はいっ姐さん！」

まだろくに魔力も回復出来ないがシャーロットの前では弱気になりたくないのかソルは元気良く返事してみせる。

足早に去っていったシャーロットの後姿を眺めながらソルは一息吐く。

「……私もまだまだってことかあ。くううう悔しいっ!! 姐さんの前でカツコ悪い真似した!!」

「別にカツコ悪いとは思わないけどな」

「うっさい! 勝ったヤツが負けたヤツに変な同情すんな!」

「同情してるわけじゃないけどさ。あのデツカイヤツ今日見た誰の魔法よりすごかったし!」

「私を受験生なんかと一緒にすんな!」

「あいてっ!」

消耗している割にはまだ力が余っているようで脇腹を捉えたソルの拳が普通に痛い。

軽く悶えるキリヤだが、倒れた体勢から状態を起こせばキリヤを見つめてくる。

「なあ」

「何だよ次は」

「オマエの魔法って何なんだ? オマエに触られた”暴れ地母神”の腕とか足動かせなくなったし」

「あーオレの魔法? 至極単純で今のところたった一つしかねえし」

そう言ってキリヤは人差し指を立てると、

「オレが出来るのは魔力の吸収だけ。それで一定以上吸収すると身体が進<sup>レベルアップ</sup>化してパワーアップするんだ。これがオレの身体進化魔法さ」

イエイ、とキリヤはピースし「まあ」と付け足す。

「ソルと戦った時はそんなに魔力吸収出来なかったから無進化<sup>レベル0</sup>で終わったけどな」

「カツチーン!! キレた!! もう一回私と勝負しろ!!」

「ちよ、まだ魔力回復してないんだったら無理すんなよ!」

「あの、いつまでもここには話が——」



立ち上がったソルは勢い良くキリヤを追いかけ始め、キリヤも逃げ  
る。

どうすれば良いか分からないシィナは困惑の表情を見せ、そんなこ  
んなで一時間無駄に経過した――

## 8話 「朝食と雑用係の小屋」

「ココが食堂な」

「女しかいねえ！」

「ココが大浴場な。でも男のオマエは使っちゃダメだぞ」

「ええ!? じゃあオレはどこで身を清めれば!？」

「部屋にシャワーあるからそれで我慢しろ」

「大浴場の意味！」

「ココがオマエの部屋な。本来二人一組で使うんだけどオマエ男だからシイナと同じ部屋にするわけにはいかないしな」

「別にオレは気にしねえけど」

「私が気にしますから！」

メレオレオナと二年半に渡って一緒に生活してきたので女性と共に過ごすことなどどうということはないがシイナ的にはアウトらしい。

結論から言って〈碧の野薔薇〉の拠点はものすごく装飾が凝った内装になっていた。

どこに行っても薔薇が飾られ、装飾でも薔薇があつてとりあえず薔薇薔薇。薔薇尽くし。あとキリヤ以外女しかないない。

案内されただけですでに一生分の薔薇と女を見た気がする。

「じゃあとりあえず自室には案内したし、任務まで自由だから」

「おう、それじゃあな！」

ソルは適当に手を振るとどこかへ去っていき、残されたキリヤとシイナ。

するとキリヤはすぐに目を輝かせ、

「なあシイナ、探検に行こうぜ！」

「え、今ソルさんから案内されましたよね？」

「やっぱり自分の足で歩いて探検する方が楽しいし、新しい発見あると思わねえか？」

「それもそうですね。一理ある気がします」

「そうと決まれば——」

「でも今日はもう遅いので明日にしませんか？ 明るいうちに探検する方が何かと都合が良さそうですね」

「そっか、じゃあおやすみ！」

「そ、即時決断ですね……」

寝ると決まればすぐにキリヤは手を振って走り出し、置いていかれたシイナは遅れて手を振るう。

ちなみにキリヤが強引にシャーロットから取った兜はそのままもはや私物化したままだった――

◎

「はい私はプーリ・エンジェル！ よろしくパンチボーイにシークレットガールっ!!」

「おうよろしく！」

翌日。

まだ友達も出来ていないのでシイナと共に食堂で朝食を食べていたキリヤの前に小太りな女性――プーリ・エンジェルが現れる。

頭髪を団子にした団子だらけで見るからにテンションが高い。

「一緒に朝食食べて親交を深めましょうねーっ!!」

「どーぞどーぞ」

言って、プーリはキリヤの対面する席に座り、自らの朝食が乗ったトレイを置く。

プーリはそのテンションと同じく朝からガッツリ食べるタイプのように皿の上には肉がびっしり。まあキリヤの皿も焼いた肉だらけなのだが。

「あ、プーリのローブ何か俺のと違うな」

真っ先にキリヤの目に入ったのはプーリの着ている外套。

外套はキリヤのよりも長く、また内側にはボア生地が成されていて何ともモコモコしている。

キリヤの興味が向いたのに気付いたのかプーリはボア生地を強調するように見せ、

「イイところに気が付いたわねパンチボーイ！ 魔法騎士団のローブって割と改造していいのよー！」

「へえー！　じゃあオレも何か色変えたい！」

「バッド！　改造してイイとは言ったけど、碧の野薔薇の基調色は守らないとね！」

二人揃って笑うがシイナはついていけないようで、それどころか少し居心地悪そうにしている。

これはキリヤやプーリに対してではなく、周りの視線から来るものらしい。

「シイナ、あんまり視線気になるんだったら無理してオレの近くにいない必要ないぞ？」

「い、いえそういうわけでは……」

「プーリも何でオレ邪険にされてるつてのに来たの？」

「簡単な話よ……私は私の見た聞いたものしか信じないの！　外間にも左右されたくないしね！　だから私は私の意思でアンタ達パンチボーイやシークレットガールと仲良くしたいって思ってるからここにいいのよ！」

相変わらず周りの女魔道士達の視線は厳しいがどうにもプーリは周りの女魔道士と違うようだ。

声音からも嘘は感じられない。本当に本心から言っている言葉だった。

「プーリはイイヤツだな！」

「ホホホっ！　褒めたって羽根しか出ないわよ！」

「それで何でオレはパンチボーイでシイナはシークレットガールなんだ？」

「簡単よ。あんなデツカイゴーレム魔力纏ってシンプルな拳で砕くなんてもはやモンスターよ！　おかげであの子ナチュラルに凹んでそうだったし！」

「ソルが？　どー見たってそうは見えねえけど……」

見てみると少し離れたところでシャーロットが朝食をとっており、その近くに相変わらずソルを見た。

キリヤが見る限り昨日と何ら変わらないように見えるが――

「まあ女の子の心は複雑怪奇なのよ！」

「へえー」

よく分からないがそのあたりは男のキリヤには一生分からない境地だ。

「ここは先人の言葉を信じ、とりあえず頷いておく。」

「それでどうして私はシークレットガールなんですか？」

「簡単よ！ あなたの魔法、全く見当つかないから！」

「め、めちやくちや単純でした……」

確かにキリヤも全然知らないなど思いながらその後も楽しく盛り上がりながら朝食を終えたのだった――

◎

「――で、オレがずっと気になってたのはココなんだよな」

「男性の魔道士が暮らしているという小屋、ですか？」

「うん。オレだつてもしソルに負けてたらこの小屋で暮らすことになつてたし、どんな地獄ヘルなのかなつて」

食事を終えたキリヤとシイナがやってきたのは昨日パシリランク決定戦でソルにも軽く説明されていた小屋だった。

中には男魔道士がいるらしいが見たところ――ボロい。

本当に〈碧の野薔薇〉かと疑いたくなるほどだがこれを見てもまだシイナは、

「いくら雑用を押し付けられているからといつてもそこまで手荒い扱いではないはずですよ」

「おま、よくこのボロ小屋見てそれ言えたよね。オレこの中にまともにヒトいる気がしねえんだけど……」

だが見た目だけで憶測を語るものではない。

もしかすれば中身はすごい豪華な内装になっているかもしれないのだ。

「失礼しまアす!!」

バン、と勢い良く扉を開ければ――

「……………」

キリヤとシイナ揃って口を一字に結んで黙ってしまふ。

視界いっぱいに広がったのは夢もない外装見たまんまのボロ小屋

の内装だったのだ。

中には男性が指で数えられるほどの人数で倒れていて、完全に干物のようになって疲労の濃さを表している。

「あ、あのー……」

「き……キミは……新入団員の子だね!？」

あれだけ干物になっていたにも関わらずキリヤの顔を見るなり活力を取り戻す。

一番にキリヤに寄って来たのは眼鏡をかけたお河童頭の如何にも生真面目そうな少年で、早速キリヤに握手を求めてくる。

「僕はテアクリン、キミより一年早くこの団に入団したんだ」

「なら先輩っスね、テアクリン先輩」

「よしてくれ。キミはあのパシリランクで勝ったのに僕は勝てずに雑用係してるんだから……」

「じゃあテアクリンで」

「て、手の平返すの早いね……」

キリヤには建前など通じないので本人が「よしてくれ」と言われれば本当にやめてしまう。

一年先輩のはずがすっかり嘗められたテアクリンはずれた眼鏡を戻し、

「でも本当に昨日はすごかったよ。ソルに勝っちゃうなんて!」

「あのソルの負けた時の顔! あれだけで酒が進むよな!!」

「……?」

どうしてソルの負けた顔で酒が進むのか、訳が分からずキリヤは首を傾げる。

メレオレオナもたまたま酒を嗜むことはあつたが肴は大抵干し肉で「これさえあれば酒は進む」と楽しそうに飲んでいた。とてもヒトの顔では酒は進みそうにない。

「キミは僕達の希望だよ!」

「ああ! どうかこのまま下克上してこの女尊男卑の団を変えてくれよ!!」

「……………何で?」

思わずキリヤは素で答えていた。

盛り上がっていたテアクリン含め男魔道士は一斉に呆気に取られた様子を見せる。

「そもそもさ、困っていったばいあつたけど何でテアクリンはへ碧の野薔薇に入つたんだ？」

「そ、それは他の団から選ばれなくて……」

「でも入らないって選択肢もあつたじゃん」

「それだと駄目だったんだ。魔法騎士団に入らないと家計を支えられないし」

他の男魔道士達の反応からして事情は大体テアクリンと同じらしい。

そのことを聞けばキリヤは率直に、

「なら仕方なくね？」

首を傾げながら「何言つてんの？」と言いたげな表情を浮かべた。

これにはシイナも同じ気持ちのようで、

「自らの選択で選んだのですからキリヤさんの言う通り仕方のないことですよ。それに文句があるならば最初に勝てば良かったんです」

「お、女だからって何もせずに楽々パシリコース逃れた奴に言われたくねえよ!!」

怒鳴りつける男魔道士。きつとこの言葉はシイナが新人だからこそ言えた言葉で恐らく今拠点の中にいる別の女魔道士には言えないのだろう。

キリヤはシイナを手で制止しつつ、素直な疑問をぶつけていく。

「悔しいって思ってる？」

「そ、そりゃあ思ってるよ!」

「勝てるまで挑めばいいじゃん」

「……そんな簡単な話じゃないよ。あいつら、パシリランク決定の時は必ず中級以上の魔道士と戦わせるから勝てないに決まってるよ」

「だったら何で勝つために努力しないの？」

「だって努力したって勝てないじゃないか」

言つて諦めた雰囲気を見せる男魔道士達。

この態度にキリヤはメレオレオナの言葉を否定されているようだった。そう思えば明らかに不快感を露わにする。

「何それ、もしかして努力して負けたら恥ずかしいとか？ 負けた時の予防線とか？ だったら今のオマエらの姿の方が数百倍恥ずかしいよ」

「なっ——」

「確かに“才能”ってのは皆平等に授かるモンじゃねえ。だけど努力すればいつか新しい戦い方を見出せるし、習得可能な魔法だってある。なのに努力しないヤツらがよく言うんだ」

——努力なんて意味がない。

口を揃えてそう言つて、努力しないで諦めた連中が群がって、いつしか頑張つて身を削りながら努力している人間を莫迦にするようになる。

「オレだつて初めは何も出来なかつたさ。でも必死に身体鍛えて技術を磨いてきた。だからオレに言わせればオマエらは魔道士じゃねえ」  
「そんなっ！ 誰もがキミのように努力したところでキミのようにはなれないんだよ！」

「してもねえクセに語んじゃねえよ。それにオレの師匠は言つてた、諦めるのはいつでも出来る。だから諦めるのは死んでからでいいつて」

せつかく挨拶してきたというのに思わぬ説教をしてしまった。

キリヤの言葉に何も言い返せなくなった男魔道士達は沈黙してしまい、気まずい雰囲気の流れるが——

「あ、こんなところにいたのかオマエ！」

「ん？ ああ、ソルか」

沈黙を打ち破つたのは小屋に顔を出したソルだった。

状況が分からず一度は首を傾げるが用件を思い出せばすぐにキリヤの首根っこを掴み、

「姐さんが呼んでるんだ。こんなところで油売ってないでシイナもさっさと行くぞ」

「は、はいっ！」



「あとオマエら掃除は終わったのか!？」

「い、いえ！ すみませんっ！」

「早く行け!!」

雑用係の男魔道士にとんでもなく厳しいソルが大声を上げれば男魔道士達はすぐに背筋がピンと跳ね上がり、そそくさと退散していく。

その光景を眺めながら引き摺られるキリヤはソルを見上げ、

「姫様が俺らに何の用なの？」

「決まってんだろ、任務だ任務！」

「よっしゃ！」

任務、何だか良い響きで反射的に喜んでしまったがキリヤは任務が何なのかまるで知らない――

## 9話 「初任務」

「キリヤスフィール、シイナ、貴様ら二人に初任務を与える」

ソルに引き摺られるまま団長室まで連れて来られたキリヤとついてきたシイナは入るなりシャーロットにそう告げられる。

すぐさまキリヤはソルから離れると大きく挙手。

「はい質問っ！」

「……早いな。何だ？」

「そもそも魔法騎士団ってどんな仕事するんすか？」

「オマエー!! 何も知らないで入ったのか!!」

横からバシコーンツとツツコミの張り手を入れられながらも知らないものは知らないのだ。

呆れて声も出ないシャーロットの代わりにソルは腕を組み、

「任務って一言に言っても色々あるんだ。市民の安全を守るために戦ったり、要人警護したり、他国の魔道士と戦ったり、魔宮ダンジョンが発見されたら調査したり——」

「基本戦闘なんだな。それで今回の任務は何ですか!？」

「——要人警護に加えて戦闘任務だ」

テーブルに肘をついたシャーロットは両手の指を絡める。

「この頃活動を活発化させている山賊集団があり、商人の荷がすでに二件も被害が出ている。商人の中には国外でしか手に入らない物をクローバー王国に輸入している者が多く、現に今回警護申請を出してきたのは指折りの豪商だ」

「ということはその人がいなくなっちゃったらこの国に必要な物が手に入らないってことですか？」

「そうだ」

「よし、頑張ります!!」

何があるのかよく分からないがキリヤはこれを意気揚々と承諾。

しかしシイナの方は疑問があるのか今度はシイナが挙手する。

「団長、どうして商人は陸路を使うのでしょうか？ 箒や飛行魔法の方が安全にも思えるのですが……」

「そうはいかない。そもそも商人が他国からクローバー王国に物資を提供すること自体をよく思っていない連中が他国には存在する。下手に空路を使えば余計に目立つ。何より山賊と言えど魔道士が揃っているために空で移動すればあらゆる面から恰好の餌食だ」

「なるほど、だからこそ多少の危険はあれど陸路を使うんですね」  
「その通りだ。手段として転移魔法もあるが生憎誰も持ち合わせていないのでな」

「へ黒の暴牛に一人いるらしいけどへ碧の野薔薇が他の団の男を頼りにするなんて女が廢る！」

拳を握って力説するソルにキリヤは一応自分はセーフなのかと思っていると、ふとシャーロットの頭に視線が注目する。

「姫様、スぺアあったんですねその兜……」

シャーロットが被っていた兜は昨日からキリヤが私物化して被っているためにはないと思っていたがどうにももう一つあったようだ。

「これは特注品だ。念のためにスぺアを用意しておいたが——」

「じゃあ貰っておきますね」

「あ！ また取った!!」

「貴様ッ！」

またシャーロットの頭から兜を取るとキリヤはシイナを脇に抱えて団長室から飛び出す。

刹那、シャーロットが出したと思われる大量の荊が飛び出してくるがキリヤは空中で方向転換し、どれも紙一重で躲していく。

「行ってきまあす!!」

「待てコリア!!」

ソルの叫びが聞こえてくるがキリヤはけらけら笑って手を振る。

脇に抱えられたシイナは驚いた様子を見せ、

「さ、流石に怒られますよ！ というよりも怒ってましたけど！」

「よし、この兜をシイナに差し上げよう。これ被り心地イイぞ」

キリヤは走りながら新たにゲットしたシャーロットの兜をシイナに被せる。

最初はぷりぷり怒っているような様子を見せていたシイナだが兜

を被ると――

「うわあ薔薇の匂いがすごいです……良い匂いですね……」

「だろ？　これ一日経っても全然消えねえからすげえよな団長！」

「ははは、とどこまでも恐れ知らずに笑ってキリヤは拠点内を駆けていく。」

◎

「ね、姐さん私が取り戻してきます！」

「……もういい。どの道ソルではあの速度には追いつけん」

キリヤが去った後で伸ばした荊を消せばシャーロットは額に手を当て深く息を吐く。

入団試験で男である彼に手を挙げたのは三対一でも物怖じず、圧倒的な力の差を見せつけ勝っていたのもそうだが何より入団する前から受験生とは別格の存在だったからだ。

その読みは正しく、現にキリヤは中級魔道士相当のソルを打ち倒して見せた。しかもただの魔力放出と身体能力だけで。

（戦闘能力だけ見れば上級魔道士にも引けを取らないが――精神面が幼稚過ぎる……ッ！）

それだけがひたすらに残念だった――

◎

「まさか〈碧の野薔薇〉から男性が来るとは思ってもいませんでしたな。〈碧の野薔薇〉は女尊男卑の思想が根強いと聞いていましたが――」

「んーオレも危なかったけどパシリランク決定戦で勝ったんでパシリ免除しましたし！」

「ほほう！　それはそれは、かなりの腕前とお見受けしましたぞ」

シイナが合流地点を覚えていてくれたおかげで無事任務が開始して商人と合流すれば早速キリヤと商人は会話で盛り上がっていた。

馬車に乗る商人は白髪や白髭が目立つ高齢の男性ながらに商人らしくしっかりと対話術を持っている様子。

現に気分が良くなったキリヤは乗っていた馬車の屋根から上半身を乗り出して、少し力んで自らの力こぶを見せつける。

「オレが来たからにはバッチリ倒してみせますよ。何を倒すか忘れましたけど！」

「山賊ですよキリヤさん……」

「ほっほっほ、それは頼りになりますな」

キリヤの自信ありげな姿に商人は愉快そうに笑う。

一頻り会話を終えるとキリヤの視線は馬車の近くを歩くプーリへと向けられる。

「悪いなプーリ、基本的三人組だからつてついてきてもらつてよ」

「いいのよいいのよ！ パンチボーイやシュークレットガールの実力をもっと見たかったしね！ それに——もう友達じゃない私達！」

「プーリ……オマエ本当にイヤツだな！」

「キリヤさん！ 私もキリヤさんのこと友達だつて思つてますから！」

何故か張り合うように言ってくるシイナにキリヤは「おう！」と親指を立てる。

仲睦まじい光景に商人もまた笑い、

「仲が良いことですな。特にキリヤさんとシイナさんなんて同じ兜を被つておりますし」

「こ、これはですね！」

「この兜、団長から貰つたんすよ！」

「ほうほうほう！ どこかで見たことあると思えばやはりシャーロット団長が被つてらつしやるものと同じでしたか！ それも団長直々に貰えたとなればあなた様方はよほど信頼されているということでしょうな！」

「うーん……それはちよつと違う気がします」

二つとも勝手に盗つたのでシイナは何とも言えない表情になる。

対照的に商人の期待の眼差しはより強くなり、

「それにしてもシャーロット団長はさぞかし美しい女性でしょうな」

「んー、確かに姫様は綺麗とは思うけどやっぱりオレはレオナ様派だからそこまでじゃねえや！」

「レオナ様？」

商人、シイナ、プーリの三人が口を揃えてその名を反復する。  
うんうんとキリヤは頷き、

「レオナ様はオレの師匠でな。もうすんげえ強くてオレなんて簡単に  
ボッコボコにするし、超カッコイイんだぜ！」

「パンチボーイにここまで言わせるなんて……相当な手練れのようなね  
！ 気になる!!」

「そのレオナ様という方の写真は持っていませんか？」

「じゃしん？ 何それ？」

やはり森林育ちのキリヤには分からないのか頭に疑問符が浮かび  
上がる。

首を傾げるキリヤに商人は気を利かせたのか自らの首に下げている  
ペンダントを開いて見せる。

「これは私の娘と孫なのですが写真というのはこうして人々を写すこ  
とが出来るものなのですよ。これで離れていても共にいるような気  
持ちになります」

「欲しい!! オレもレオナ様の写真欲しい!!」

「でしたらキリヤさんにはこちらのカメラとペンダントをオススメし  
ますよ」

馬の手綱から手を放した商人が荷から何か取り出したかと思えば  
透明なレンズが付いた箱——カメラと商人が持っていたものとは違  
う形のペンダントが出てくる。

ペンダントはきちんと写真を仕舞えるようになっており、キリヤは  
目を輝かせる。

「本来ならばペンダントだけで十萬ユーロを超えるのですがお近付き  
の証として破格のお値打ち価格三千ユーロに値引き致しましょう！」

「おおー！」

「しかもこれ純金で出来てるじゃない！ 本当にお値打ちじゃないの  
！ お買い得よ。パンチボーイ!!」

「……で、ユールって何だ？」

キリヤ以外の全員がズッコケた。

「あ、あのねパンチボーイ。ユールっていうのは——」

「っ！　ちよい待ちブーリ、何か音が聞こえた」

ユーロの説明をされる前に草を掻き分ける音が耳に届いた。

すぐに商人は馬車を止め、シイナもブーリも警戒の色を強め、キリヤの眼も鋭くなる。

誰もが強く警戒し、そして整地されていない森の方から出てきたのは――

「山賊……？」

疑問げにシイナが呟く。

確かに獣の皮を加工した衣装に身を包んでいるがその身体は傷だらけ。

血塗れの姿で足下も覚束ない様子でキリヤ達と目が合えば――

「た、助けてくれ……お頭も殺されたんだ……」

「殺された？」

見間違いでなければ今日の前にいるのは間違いなく今回の目標である山賊。

だがその様子、言葉からすでに別の誰かに狩られ――

「――あんま逃げないでくれよ。余計な手間を増やしたくないんだ」

「ひ――」

何か淡い球体が漂ったかと思えば悲鳴にも似た山賊の声は一瞬にして爆発音と共に掻き消される。

肉体など木っ端微塵に吹き飛ばされ、跡形もなく消えてしまう。

「ま、そのおかげでオレらは目的のモノの前にありつけたんだから感謝しなきゃならないかもな」

森から出てきたのは白い外套を血で染めた赤い髪の三十代だろう男。

そしてその周りには外套のフードで容貌を隠した者達が四名、いやまだ伏兵がいるかもしれない。

赤い髪の男は恐らくリーダー格。その男はキリヤ達を一瞥すれば、

「はあーこりや厄介な。魔法騎士団……しかもそのローブはへ碧の野薔薇」か」

「……何者だオマエ？」

「おいおい年上に対する態度がなってねえぜボウズ。だがまあ、名前だけ教えておくとオレの名はフラム——端的に言えばボウズらの敵ってことになるな」

「見たところ山賊じゃなさそうだけど？」

「ハハハ！ 山賊なんかと一緒にしないでくれよ。アイツらはその荷丸ごと狙ってつけどオレらは違う。そのジイさんが持つてる魔石を渡してくれりゃオレはオマエらに手は出さねえ」

馬車から降り、キリヤは男——フラムを睨みつけるがフラムはけらから笑う。

「あそこのデブい女はともかくオマエとそこの黒髪の嬢ちゃんはまだガキもガキだ。こんなところで無駄に命張って死ぬなんてダセエだろ？」

「ハッ！ 何だそりゃ！」

けらけら笑うフラムに対してキリヤは不敵に笑む。

「自分助かるために誰かを見捨てるなんて——それこそダセエつづの!!」

山賊狩りで現れた謎の集団。

キリヤは全身から魔力を迸らせ、シイナもブーリも身構える——



## 10話「決戦」

「本気でオレ達とやろうってのか？」

「冗談で言うわけねえだろうが!!」

魔力を放出と同時にキリヤは地を蹴る。

その速度は初速から最大で<sup>トップギア</sup>フラム達の背後を取れば拳を握り締め、

「速——ッ」

部下だろう魔道士はその速度について来れず、見失った直後にキリヤの拳が魔道士の顎を打つ。

碎ける感触、意識を断ち切った感覚。

両方感じたキリヤは何かに気付くとすぐその魔道士の背中をフラムに向けて蹴り飛ばす。

直後、その魔道士は何かに触れたかと思えば先ほどの山賊と同じように爆発。

その先には面倒そうに頭を掻くフラムがいた。

「あらら初見で見切ってくるとは、野性の勘ってヤツか？」

「テメエ仲間を……っ！」

爆炎魔法”<sup>ほたるびくん</sup>螢火群”。

魔法を唱えたフラムの周りから次々と半径五センチの淡い光を持った球体が幾多にも散らばる。

酷く緩慢な動きだが近くの魔道士が——

「援護します——風魔法”<sup>ガスダ</sup>突風”」

「ッ！ プーリとシイナはジイさんを守ってくれ!!」

突如とした突風に煽られた”螢火群”はあらゆる場所へ拡散。

何かを察したキリヤがすぐに声を上げると馬車の前にシイナが飛び出し、

「——影魔法”怨邪の濁流”!!」

足を地面に叩き込めばシイナの影は円状によりその規模を馬車を囲えるほどにまで広がる。

さらに地面の影は上空へ向かって間欠泉の如く噴き出し壁を創り

出す。

同時に螢火が触れた影、木、地面、キリヤの全てから爆発音が響き、爆煙が湧き立つ。

「キリヤさん!!」

「大丈夫だ!!」

爆発した木や地面は抉れたがキリヤ自身は無事であり、両腕を交差させフラムへ突貫する。

「おや、螢火の威力で殺せないなんて——」

魔力を纏ったキリヤの拳は一直線にフラムに向かって放たれる。

しかしその拳は横から来る魔道士二人同時の風魔法によって強制的に距離を作られ、キリヤは着地と同時にまた駆け出す。

「パンチボーイ!! 援護するわ!!」

「……ん、あのデブい女、姿が見えないがどこへ——」

と、影が重なったのを感じたフラムは上空を見上げる。

するとそこには背中から翼を生やしたプーリが翼をはためかせて夥しい羽根を飛ばす。

「翼魔法」エンジェルフラッピング 天使の羽ばたき!!」

夥しい数の羽根はフラム、その近くにいる魔道士に攻撃と共に視界を塞ぐ。

すぐさま風魔法で風の流れを変えるが魔道士の眼前にはキリヤがすでに迫っていた。

駆けるキリヤには追い風が来ていたのだ——

「ありがとなプーリ!!」

「チツ……鬱陶しいな!」

羽根に紛れて再び肉薄したキリヤの拳と蹴りが同時に二人の魔道士を打つ。

倒れる魔道士達に最後に残った魔道士はキリヤの背後から風魔法によって創られた大鎌で首を狙う。

「影魔法」シャドードール 影人形!」

キリヤはシイナの魔力を感じ、もはや振り向くこともなければ大鎌を構えた魔道士の前に魔道士自身の影が現れていた。

本人と全く同じ動作をする影と魔道士は互いに勢いが止まらず、そのまま――

「うわ、首飛んだ!」

フラムは一瞬嫌な顔をするがすでにキリヤの拳は弧を描きながら腹部に迫っていた。

「そんなの当たるわけ――」

多くの魔力を回し自らも身体強化し地を蹴って後退し、躲した気でいたが――当たった。

フラムの身体は衝撃でくの字に折れ、骨の軋む嫌な音が響く。

「……は?」

確かにキリヤの拳は空振りしていた――だがそれはキリヤ自身の拳。

振り切った拳の後にキリヤが腕に纏っていた魔力が後を追うようにして殴りつけたのだ。

避けられるのを見越した動きにフラムは心底嫌そうな表情を浮かべる。

「だあークソ! 悪かったなガキなんて言って! やっぱオマエら魔法騎士団に入れるだけあってちゃんとして魔道士だったわ!!」

放たれた“螢火群”、その球体の数は先ほどのよりも遥かに多い。

だがキリヤは後退することはない。真っ向から突撃していく。

「なら容赦しねえしこたま喰らいな!!」

爆発が連鎖し、キリヤの身体など一瞬で見えなくなるが――爆煙を裂いてキリヤは飛び出す。

衣服はどこどころ焦げているがその身体はやはり無傷であり、双眸はフラムを捉えて離さない。

「だったらこれはどうかない!」

言ったフラムの魔導書は輝き、指先から連続した火花がキリヤに向かって突き進む。

先ほどの“螢火群”とは違い速度は速く、キリヤは手で振り払うが

「――ッ!」

瞬間、キリヤは身体の中から灼熱と炸裂を感じる。

一体何が、そんなことと思う暇もなく喀血し、目が血走った。

「爆炎魔法”炸裂痼癩”——さくれつかんしゃく——どうにもオマエは表面上の魔法効かなさそうだったから内側から爆破してみたってワケ」

「マズイわパンチボーイ！」

「キリヤさん!!」

(ヤツバ、足下フラつく——)

迫るもう一撃の火花。

避けようにも足下がフラつき、先ほどの魔法は思った以上に威力があつたようだ。

完全なる油断。この場面をメレオレオナが見ていたら絶対に後で怒られまくるだろう。

「でも本来なら内側から爆発して臓物散らしてたはずんだけど、とりあえずもうイツパツいつてみようぜ!!」

歯を食い縛るキリヤの頭にふと過ぎったのは——

◎

『貴様の魔法は魔力吸収するものだがどうにも魔法自体の威力は消せないようだな』

魔法騎士入団試験まで修行していたある日、メレオレオナにふと言われた言葉だった。

自らの魔法が魔力を吸収して進化出来ることを知ってから限界を確かめるためにメレオレオナの魔法を受けまくったが超絶痛い。

どうにもキリヤの魔法はメレオレオナの言う通り魔力は吸収出来るものの魔法自体の威力は受ける。マナスキンである程度の痛みは補助出来るもののやはり痛いものは痛い。まだメレオレオナの魔法しか受けたことはないが。

つまり進レベルアップ化するためには一定以上痛みに耐えなければならないということだ。

『せっかく魔法無効化でラツキーとか思ってたのにオレのアイデンティティがソツコーで消えた!』

『莫迦者がアアア!!』

『いつでえ!!』

嘆いたらすぐに拳骨が飛んで来る。

ただでさえ全身痛いというのに追加で脳天まで激痛でもはや身悶えることすらできない。

『つまり貴様の魔法の長所はそこではないということだ。それに誰も全ての魔法を真正面で受けろなどと言っていないだろう』

『でも結局長所が全然分かんないっスよー』

『甘えるなアア!! 自分で見つけろ!!』

『厳しい! やっぱり厳しい!!』

『よく考えろ。貴様の魔法は何故身体強化魔法ではなく身体進化魔法なのか——それを解けば自ずと答えは見えてくるはずだ』

◎

フラムは勝利を確信していた。

大小どの程度かは不明だが内側に対する攻撃ならば確かな手応えがあった。

つまり後一撃でも同じ魔法を与えればこのキリヤとかいう少年は倒れる。

(恐らくあの三人の中で一番強いのはコイツだ。コイツさえ取ってしまえば——)

統率は乱れ、一人になってしまったが数の有利を覆せる。

火花はすでにキリヤの目前に迫っており、勝利は確実だ。だからこそ——

「この勝負、オレの勝ちみてえだなボウズ!!」

高らかに声を上げ、確信した勝利を口にする。

しかし——キリヤの目は何一つ死んでおらず、何一つ諦めていなかった——

「ありがとな——おかげで進<sup>レベルアップ</sup>化出来る」

短い言葉、そしてキリヤの姿は残像を残して消える。

「何ッー」

完全に見失った。

だが直後、猛烈な腹部への炸裂音と共にフラムの靴裏は地面から離

れる。

勢いは止まらずいくつもの木を薙ぎ倒し、止まったところで口から血が零れた。

「どうだ、今のは見えたか？」

一撃で足に來たというのにいつの間にかキリヤはフラムの目の前に立ち、見下ろしていた。

あれだけ身体を内部から破壊されているはずなのにすでに血が零れる様子もない。

さらに両拳、両腕には鎧の籠手が纏われており、刺々しいデザインは竜の鱗、牙を思わせる。

「身体進化魔法」レベルアップ 戦竜の腕鱗レベル1、ブルガトリトン ——「そんなじゃ勝たせてもらうぜ」

直後、放たれたキリヤの一撃はフラムの目には捉えきれず、いきなりその意識は断ち切られる——

◎

「すごい……」

戦いの結末を見ていたシイナは思わず感嘆の声を上げていた。

傷を負ったと思えばキリヤがソルにすら見せなかつた身体進化魔法が発動し、瞬くうちに勝ってしまった。

すでに身体に痛みはないのかキリヤは殴り飛ばしたフラムや倒れた魔道士を持ってくると魔法を解き、ピースする。

「よし、これでとりあえず任務完了だよな？」

「スゴかつたわよパンチボーイ！ まさかあんな秘策があるなんて！」

「それより怪我の方は大丈夫なんですか!? 血も吐いていたのに——」

慌てて駆け寄るシイナの心配を他所にキリヤは軽く笑い飛ばす。

「治ったから大丈夫だったの」

「治った!?!」

「おう、オレの身体進化魔法はただパワーアップするだけじゃなくってレベルアップ進化する時にそれまで受けた傷を全部治すんだよ」

軽く言うキリヤだがシイナはそんな魔法聞いたこともなかつた。

驚きを隠せないシイナだが当のキリヤはブーリとハイタッチして  
いて、シイナの前にも手の平を差し出す。

「見てたけどオマエの影魔法もスゲエな！ カッコイイな！ アレか  
攻守万能ってヤツか！」

「い、いえ、そこまでは……キリヤさんこそほとんど一人で倒してし  
まって本当にすごかったです」

いつも気味悪いと周りから言われていた影魔法。

それなのにこんな風に褒めて貰えたのは初めてだったシイナはど  
う反応して良いか分からず、とりあえず赤く熱を帯びた顔を俯かせて  
隠しながらハイタッチを返す。

「て、パンチボーイ！ シークレットガール！ イチャイチャすんのは  
後よ！」

「イチャイチャはしていませんっ！ というより私の魔法見ましたよ  
ね!？」

何故まだシークレットガールなのか分からないがブーリの言う通  
りだった。

気を失っているとはいえそのまま放置というわけにはいかない。  
すぐさまブーリは再び翼を広げると――

「翼拘束魔法」エンジェルハグ「天使の抱擁」、これでもう大丈夫ね！」

飛んだ羽根がフラム達に張り付き拘束。

これで一安心と言ったところでキリヤは馬車の中に避難していた  
商人に問う。

「ところでジイさん、アイツらの言ってた魔石って何なの？ 珍しい  
石？」

「もしかしたら……これ、ですか。偶然手に入れてどうしようかと  
思っていたのですが……」

商人が取り出したのは何かの紋章が刻まれた琥珀色の石。

とても価値は分からないものだが――

「どうか持って行ってください。あなた様方は私の救世主でございま  
す。ついでにこのカメラとペンダントも」

「マジで！ ありがとなジイさん！ イイ人だな！」

「いいえいいえ、あなた様ほどでは……」

「——まさかオレが負けるなんてな」

「っ！」

声が聞こえてみればもうフラムは目を覚ましていた。

他の魔道士も同様に目を覚ましているようで動こうにもブーリの拘束魔法で動けないが——

「しかしあの魔法、まさかオマエは……いや、アナタ様は……」

シイナはフラムのキリヤを見る目が変わったことを感じ取る。

だが追及する暇もなくフラムの腹部が輝けば最期までフラムは不敵に笑う。

「ともあれ、もう少し」あの方の役に立ちたかったがな……」

爆炎魔法“爆葬”。

魔法の起動と同時にフラムを含めた魔道士が全員跡形もなく爆発し消え去ってしまう。

「自分で、自分達を……」

思わず呆気にとられてしまった。

よほど忠誠を誓った人間が背景にいたのか、ともあれ何も分からないまま初任務は成功し終了していく——



## 11話 「任務報告とお勉強タイム」

「そうか、ただの山賊狩りではなかったということか」

山での一件の後、無事商人を届けることが出来たキリヤ達三人は〈碧の野薔薇〉の拠点に戻り、事の顛末をシャーロットに報告していた。

「それと、これ姫様にあげます」

言ってキリヤが懐から取り出したのは商人から譲り受けた魔石。

手渡すとシャーロットは訝しげに魔石を見つめ、

「……これは？」

「襲ってきた連中が欲しがってた石です。オレらもよく分かんないんでとりあえず姫様に渡しておこうかなって」

「分かった、これは私から魔法帝に献上しておく——ご苦労だったな」

「ね、労われた、だと……」

労われたことにむしろ驚く様子を見せるキリヤ。

その様子にシャーロットは眉を顰め、

「例え男であろうとも任務に対して成果を挙げれば相応の労いはするに決まっているだろう。私をそんな礼節もない女だと思っていたのか？」

「正直、ソル見てたら多少……ちよつとだけ思っていました」

「オマエ姐さんを侮辱したな！ このっ!!」

「うんごめんなさいだから殴りかかってくるのはやめろ！」

当然のように近くに近くにいたソルは拳を振り上げて襲い掛かってくるので団長室で追い掛け回される。

その光景に溜息しか出てこないシャーロットだがキリヤはようやうく気付く。

「あ、姫様もう兜のスペアないんですね」

「貴様のせいだな……」

衣服の上に軽装の鎧を着ているシャーロットだがキリヤが兜を二回取ったことでスペアもなくなったのか、後ろで束ねていた髪も下ろしていた。

そんなシャーロットの姿にキリヤは親指を立て、

「兜被つてるよりもソツチの方が姫様キレイだと思いますけどね」

「姐さんを口説くなバカ！」

「ぎゃーっ！ 関節技はやめてー！」

素直な感想を言ったのにキリヤはソルからコブラツイストを受け  
身体が悲鳴を上げる。

ぎゃーぎゃー騒ぐ二人にシャーロットは手でソルを制止し、

「とにかく、此度の任務報告書は提出するように」

「何でっスか？」

「話だけでは忘れてしまいますから記録を残しておくためですよ」

関節技から解放され素直な疑問を口にするキリヤに隣にいたシイナは小声で教えてくれる。

だがキリヤはと言うと――

「オレ文字書けないっスし、読めないっス」

自慢げに言い、シイナとブーリ、ソルはズッコケる。

シャーロットも額に手を当て、首を横に振るうが任務報告は必要不可欠なためにシイナを見て、

「シイナ、貴様が書いておくように」

「は、はい！」

「……あと何故貴様も私の兜を被っている？」

「す、すみません……」

もう被っていること自体自然になっていたのかシイナは急いで返す。

机の傍らに兜を置いたシャーロットの話はこれで終わりかと思えばそうではないようだ。

「未知数な敵の撃退、その働きが魔法帝に認められ我が団には星が一つ授与された」

「星……？」

「九つの団は星の取得数を名誉として競いあってんだ。年に一回合計数でランキング付け功績を讃えられるんだ」

早くもキリヤの無知が〈碧の野薔薇〉に浸透してきたのかソルはキ

リヤの思考を先読みして教えてくれる。

当然のようにトップはへ金色の夜明けへ団らしいがキリヤは拳を挙げると、

「オレ、姫様のために頑張ります！」

「頑張るのは皆だけどな！ 姐さんに恥かかせないためにも私も頑張るんだ！」

二人してやる気を見せているうちにシャーロットは机の引き出しを引くと紐で縛られた革袋を二つ取り出し、キリヤとシイナに手渡す。

「今月分の給料だ」

「わーやったーって……食べねえ」

「食べれるわけないだろ！ 本当にバカだなオマエ！」

革袋の中は紙幣や硬貨でいっぱいになっており、試しに一枚取り出して齧ってみるキリヤ。

だが何とも言えぬ味で「うえー」と言っているとまたソルにツッコミの張り手をされ、シャーロットも何とも言えない表情でキリヤを見る。

「……まさか貴様、金銭のことを知らないのか？」

「オレこう見えて十三歳まで記憶ないですし、そこから基本レオナ様と野生動物狩って食って森で暮らしてましたから！ ぶつちやけ何にもこの国のこと知らないっス!!」

「誇らしげに言うな」

あまりにもリアル野人な生活を送っていたキリヤに周りは絶句。あと納得。

だからこんなにキリヤは戦闘以外ポンコツなのか、と。

流石にまずいと思ったのかシャーロットは顎に手を当て、何かを考え始める。

やがてシイナ、ソル、ブーリの顔を見てまた考えて、数十秒思索した結果息を吐く。

「仕方ない。私が貴様に教養をつけてやる」

「な、なななな……なっ何で姐さんが直々に!? 文字とか計算だっ

「たら私が——」

「私が決めたことだ。下手に団員に任せれば余計な面倒になりそうだからな」

「だからと言って姐さんがわざわざしなくても……」

シャーロットの判断にソルはこれまでにないほど反対するがすでに本人は折れない気であるのでそれ以上ソルは何も言えないようだった。

ともあれ何だかんだでシャーロットから直々に教わることになったキリヤはとりあえず、

「ここは喜ぶべきなのか？」

「全身から血を噴いて喜べ!!」

「めちやくちや物騒!!」

嫉妬で血涙でも流す勢いでソルは拳を握り締めており、こうしてキリヤは初めて“勉強”というものに向き合うことになった——

◎

「姫様姫様」

「集中しろ」

「姫様もそうなんですけど何で〈碧の野薔薇〉は女装バンビ？ ってのをしてるんですか？」

「全く話を聞いていないな……」

勉強を初めて十数分、見ていたシャーロットはキリヤにそう問いかけられていた。

聞いた瞬間は女装バンビの意味がまるで分からなかったが少し考えれば言いたいことが分かり、

「女尊男卑と言いたいのか？」

「そう！ それです！」

女尊男卑、キリヤはろくに覚えていなかったところを見れば恐らく他の誰かから聞いていたのだろう。大方雑用係をしている男団員からでも聞かされたか。

男が浅ましく卑しい姿は昔から飽きるほど見てきた。

きつとキリヤも——そんな風に思いながら、シャーロットは反対に

キリヤに問う。

「時に貴様も男は女よりも優れていると思つてゐるか？」

男はまるで女を飾り程度にしか思つていない。

いつも口先だけで貧弱な者ばかり、優れたところなど何一つなくせに女だからと自らより下に見て、横暴な態度を取つてくる。

〈碧の野薔薇〉にいる女魔道士のほとんどがそうして何かしら男に傷つけられたことのある者ばかりだ。

ソルが名付けたパシリランクも結局は勝てば正当に扱われる。負けたからこそ雑用に使われる。

力を示す、ただそれだけのシンプルルールだ。他の団と比べる時点で話にならない。

それなのに負けた男魔道士は口を揃えて陰で言う——女尊男卑だと。

反対に問われてしまったキリヤは一瞬言葉を選ぶように考えると、

「そもそもそういうの考えるのって苦しくないですか？」

「……何だと？」

「だつて結局強さにしても色んな強さがありますし、競おうと思えばそれこそ無限に近いぐらい競えますし。結果男女どっちが優れてる——なんてオレには正直分かんないっす」

あまり難しいことは言えないキリヤはうーんと頭を悩ませながら腕を組み、言葉を続ける。

「皆、それぞれ違った良さつてのがあると思うんすよ。自分には出来ないことでも他の誰かが出来ちゃいますし。だからオレは別に男が女より優れてるって思わないし、女も男より優れてるって思わないです」

キリヤは嘘を吐いているようには見えなかった。

自分がこう感じたから、自らの意思に愚直なまでに素直まとめた言葉の数々。

「それぞれ得意分野が違って、それぞれの強さを持った強いヤツらがいっぱいいて、頼れる仲間として共に戦う——それが魔法騎士団だとオレは思つてますから！」

その言葉はかつてシャーロット自身が「あの男」に聞いた言葉と似ていた。

あの男は自由奔放で、野蛮で、腹立たしくて、しかしその言葉を聞けばシャーロットの口元は自然に笑みを作り出していた。

「……貴様は少し、あの男に似ているな」

「あの男……？」

「さて話を逸らしてしまつたな、貴様の質問に答えよう。別に女尊男卑を強いているわけではない——この団の女が強いだけだ」

「なるほど！ 納得しました！ レオナ様も強かつたし、そんな感じの女のヒトがいっぱいいるんスね！」

レオナ様というのが一体どんな人物なのか分からないが納得したのでから良いのだろう。

そこから再びキリヤは集中して取り組み始め、シャーロット自身色々キリヤのことで気付いたことがある。

(文句を言わないな……)

別にキリヤ自身が文字を読み書きしたいとか計算出来るようになりたいと言つたわけではないが真面目に取り組んでいる。

根は本当に真面目なのか。それとも自分がしたいと思つているから続けているのか。

はたまた望まれていることに、期待されていることに全力で応えようとしているのか。

良くも悪くもキリヤは自分も含めて誰にでも正直な性格なのだからどれも考えられる。

——と、なれば気になってくることがある。

どうしてキリヤは九つの団から挙手を受けていたにも関わらず〈碧の野薔薇〉を選んだのか。

「キリヤスフィール」

「はい？」

「何故貴様は入団試験の際、〈碧の野薔薇〉を選んだのだ？」

そう問いかけるとキリヤは唐突に「あはは」と苦笑し、

「間違えたんですよ」

「……間違えた？」

呆気にとられ過ぎて思わず言葉を反復してしまった。

反復するとキリヤは頷き、

「レオナ様に勧められた団があつたんでそこに入ろうかなって思ったら忘れちゃって。よくわかんないうちに全部の団が手を挙げてて、可能な限り消去法で狙いに行ったら外しちやつたみたいで……」

「……ふ、貴様らしいな」

キリヤの性格を知ってしまったために腹立たしいと思う気持ちなどなく、むしろ“らしい”と思つて思わずシャーロットから笑みが零れる。

「そもそもだがその“レオナ様”というのは何者なのだ？」

「ヤダなあレオナ様はレオナ様ですよ。メレオレオナ・ヴァーミリオン様っす！」

「——っ!？」

その名を聞いて思わずシャーロットは度肝を抜かれてしまう。

無冠無敗の女獅子——メレオレオナ。

ヴァーミリオン家の生まれでありながら戦事や政まつりごとに興味はなく、王貴界からどこかへ姿を眩ませ気が向いたら帰ってくる変わった人だがその戦闘能力はズバ抜けたもの。

シャーロット自身もメレオレオナに尊敬の念を抱いており、弟子など取らないと思つていたが現にキリヤの戦闘能力を見れば頷ける。

あのマナスキンの精度、野性の獣の如き動き。頷ける部分も多い。

「オレ、レオナ様と結婚するために強くなりたいんす!!」

「——っ!？」

本日二度目の度肝抜き。

まさかあれだけの強さを持つメレオレオナと結婚したいと言える男がいたとは思つてもいなかった。

「だ、だがメレオレオナ様はそう易々と求婚を受けるとは——」

「初対面の時プロポーズして『参った』って言わせれば結婚してくれるって言ってくれたんで大丈夫っす!!」

「——っ!？」

本日三度目の度肝抜き。

その過程はさておき、キリヤのプロポーズが半ば成功してしまっていることにシャーロットも驚く。

「そ、それならば〈紅蓮の獅子王〉だったのでは？」

「あ、そこだ！ 思い出しました！ 勧められたのそこですよ！」

ようやく悩んでいた答えが出てきたのかキリヤは大きく頷いて思い出したようだ。

シャーロットは一度手を止め、

「キリヤスフィール、団の異動ならば双方の団長が合意すれば出来るが――」

「しませんよ」

メレオレオナのことを心酔しているならばてつきり異動願いをすと思うたが意外にもキリヤはこの申し出を断る。

「オレは姫様のために頑張りますって言いましたし！ オレって一回言ったことは曲げないから〈碧の野薔薇〉で頑張りますよ！」

任務報告の際に言っていた言葉。

あんなのは一時的な冗談だとシャーロットだがどうにもキリヤは本気だったようだ。

今日は笑うことが多い。そう思いながらシャーロットは計算を解くキリヤに、

「……だったらまず2足す4くらい合わせろ」

「え、24じゃないんすか!？」

どうにもやる気だが習得するにはまだまだ時間が掛かりそうだった――



## 12話 「計算訓練」

「五十音を順に書いていけ」  
「うすっ！」

あれから二日後、キリヤはシャーロットの元で文字の読み書きと計算を教わり、その成果を試されていた。

まだ自ら見ても汚いがキリヤは勢い良く五十音を書き進め、シャーロットへ見せる。

「まだまだ綺麗とは言えんが覚えてはいるな」

「修行しながら繰り返し復習したんで！」

食堂でしているために周りからの嫉妬の視線が物凄いがとりあえず気にしない。

五十音はこれでクリアしたので問題は――

「なら2足す4は？」

「24!!」

「そんなわけあるかーっ!!」

自信満々に答えればいきなりのソルからの横槍。

手刀が側頭部を捉え、イテテと振り向くとソルはガニ股でぶんすか怒っていた。

「6だ6っ！ 姐さんに二日もみっちり教えて貰っという何だその成果の無さは！ あとちよっとスルーしてたけどにーよんって何だ！」  
「そう言われても計算だけは全然慣れないんだよなあ」

キリヤ的にはむしろ2に4を足して6になる方が意味不明だ。そもそも6とは何なのか。

横に置いて24の方がよほどしっくり来ると思いながらもソルから見れば問題はそこではないようで、

「キリヤさん、一度一から順に数えられるだけ数えてみてくれませんか?」

様子を見ていたシイナもやってきて試すような真似をしてくる。

このままでは莫迦にされるがまだまだとキリヤは腕を組むと、

「1、2、3、4、5……24!!」

「そんなわけあるかーっ!!」

本日二度目の手刀。

しかも今回はヘッドロック付きでキリヤは後頭部に柔らかい感触を感じながら「ぐへー」と舌を出す。

思っていた以上にレベルが達していなかったのかシイナは冷静に、

「団長、これは計算どころではないですね……」

「そうだな。しかし、五十音を覚えられたのならば数字の50まで覚えるのも簡単はずだが」

「いつもどうい風覚えていたんですか？」

「えーつとな……手頃な岩がないな。それじゃあ——」

「え——」

「ちよ——」

周りを見渡してもキリヤが望むものがなかったので手近にいたシイナとソルの背に手を当てて軽々と持ち上げる。

いきなりのことでシイナもソルも驚き目を見開く。

「キ、キリヤさん!?!」

「下ろせてー!」

「いやいつもこんな感じで岩持つてんだけど二人共軽いな。で、この状態であ、い、う、え、おー的な感じでやってんの」

上下に上げたり下げたりと回数を数える感覚でキリヤは五十音を覚えていた。

と、ここでシャーロットが呆れた表情をしているのが見え——

「え、どうかしましたか?」

「それを数字に変えれば覚えられていたのではないのか?」

「確かに!」

言われてみれば確かにそうだった。

キリヤがいつもしている筋力修行も五十音だけではなく数字でも挑戦していれば数など簡単に覚えられたはず。

そう思えば悔しくなってきたキリヤは持ち上げていたシイナとソルをゆっくり下ろすと、

「身体動かすか!」

「待て。それならば一つ貴様に課題を課す」

「……へ？」

ソルにまた絡まれている中、不意にシャーロットがそう言っただけから一枚の硬貨をキリヤに手渡す。

見ると5と丸が二つ記されていてキリヤは怪訝そうに首を傾げる。

「お小遣いですか？」

「そんなわけがないだろう——その硬貨を使って好きな物を三つ買って来い。数字を理解し、計算が出来れば容易にクリア出来る。貴様が好む実践だ」

「なるほど！　じゃあ早速行ってきます！」

「……何故毎度私の兜を取っていくのだ」

すでに兜を被っているのに出て行く時になればまたシャーロットが被っている兜を取る。

硬貨一枚と兜を手にキリヤは駆け出し、さりげなく拘束魔法を放ってくる女魔道士達を躲しながら扉を出て行く。

「あ、あの、キリヤさんが心配なんですか！　ついていきますっ！」

言っただけでもそそくさと走り出しキリヤを追った——

◎

(買い物と言えばやっぱりレオナ様と一緒に来たここだよな！)

城下町キツカ。

メレオレオナに社会見学だと言われて連れて来られた場所だが何やかんやここから始まった気がする。

思い出し少し耽っていると、

「キリヤさんっ！」

「ん、シイナ？」

振り向けばシイナが走ってやってきて、キリヤに追いつけば肩で息をする。

何故そこまで急いできたのか分からずキリヤは首を傾げるとシイナは顔を上げる。

「キリヤさんが心配で……」

「別に暴漢とか現れても殴り飛ばせるし大丈夫だけどな」

「いえ、そういうことではなくて……」

いつもはそこまで走りこんでいないのかシイナに体力はなさそうだった。

買い物の前にシイナの体力回復を待っていると、キリヤの耳に聞いたことのある声が届く。

「あれは——」

身長は小さいが声は大きい。

黒の外套に黒のバンダナをした少年が走っており、間違いないとキリヤは手を振るう。

「おいアスターっ!!」

「ん、あつ！ キリヤじゃねえか！」

向こうもキリヤに気付いたのか大きく手を振って近付いてくる。

「どうしたんだこんなところで！」

「いやー給料貰って何に使おうか考えてたらバネツサ姐さんに連れられてここに来たんだよー！」

「バネツサ姐さん？ ということは連れがいるのか」

「あんまり先行かないの坊やー」

言った途端に女性の声が聞こえてくる。

人数は二人。片方は女性にしては身長が高く三角帽子に露出の多い服装の二十代と少しと言ったところか。

もう一人は薄い銀、と言えばいいのかともかくそのような色の髪をそれぞれ側頭で括っているそう年齢は変わらない少女だ。

「なになに？ 坊やの知り合い？」

「トモダチっス！ 入団試験の時、バカにされてたオレのために怒ってくれたんスよ！」

「キリヤです！ アスタの友達で〈碧の野薔薇〉にいるっス！」

「私はバネツサ、よろしくね。でも〈碧の野薔薇〉ってあの男にとんでもなく厳しいあの〈碧の野薔薇〉でしょ？」

「何だかんだで楽しくやってますよ！ この兜だって団長の姫様に貰ったものですし！」

盗ったの間違いだが。

しかしそんな事情は知らないのでアスタは目を輝かせる。

「キリヤやっぱスゲエな！ 流石全部の団に選ばれてただけあるな！」

「よせよせ、あんまり言われると照れるじゃねえか——で、そっちの娘は？ アスタの同期？」

「おう！ なあノエル！」

「口を慎みなさい下民」

「という感じでノエルは王族だ！」

「じゃあノエル様って呼ばないとな。よろしくお願いしまアす！」

「……わ、分かってるじゃない」

暫く王族扱いされていなかったのか紹介された少女——ノエルは照れくさそうにそっぽを向く。

そのうちに体力回復させ完全に面を上げたシイナを見てキリヤも手でシイナを示す。

「この子はシイナ、オレの同期で影魔法ってスゲエ魔法使うんだ！」

「影魔法……？ 聞いたことないわねー」

「種別としては闇属性の派生になります」

「スツゲエな！ よろしくシイナ!!」

「アスタさん……キリヤさんに悪影響を及ぼしたら影の奈落に沈めますから」

「オレにだけ厳しくね!？」

「え、何？ 保護者なの？」

何故かシイナはアスタにだけは対応が厳しく、バネツサも怪訝そうにキリヤを見るがそれはキリヤにだって分からないことだ。

一方、流れを見ていたノエルだったがシイナの姿を見るなり驚いた様子を見せる。

「シイナ久しぶりね！」

「はい、お久しぶりですノエルさん」

「あれ、二人共知り合いなんですか？」

「ええ、シイナは私と同じ王族でシュヴァルツ家の次女なのよ」

「そ、そうだったのか……数々の無礼お許しくださいシイナさ——」

「——やめてください!! 今までどおりで良いですから!!」

ノエルに対するように目上の人間だから敬意を、と思ったがめっちゃくちゃ怒られた。

「今までにないほど声を荒げてシィナにキリヤも勢いに圧され(づ)、ごめん……」と思わず返してしまう。

「ふふ、コツチの坊やもまだ全然女の子の気持ちに分からないみたいね」

「女心は複雑怪奇つてのは教えてもらったんすけどねー……」

「てゆーかキリヤこそ何でここにいるんだ?」

「よくぞ聞いてくれたアスタよ」

アスタ達に会って一瞬忘れかけていたが思い出し、キリヤは懐から硬貨を出す。

それを見たアスタや〈黒の暴牛〉の二人は訝しげに硬貨を眺める。

「オレさ、何だかんだで世間知らずで教養なくてさ。数字や計算を覚えるために姫様からこの硬貨で三つ好きなモン買ってこいって言われてよ」

「はした金にもほどがあるわね……」

「うーん、この金額だったら安売りのものでも三品買うのは難しいわね」

「そんなに価値低いのかこれ……」

「だってこれ五ひゃあいだだだだだだだだッ!」

「答えを言うのはキリヤさんのためにはならないので」

影魔法<sup>かげまじ</sup>、影極<sup>かげきめ</sup>。

何か言おうとしたアスタの影が飛び出しアスタ本人の腕に関節技を極める。

「やっぱり保護者ね……つととにかく、多分ソツチの坊やは社会見学も含めてのことだろうし私がとっておきの場所に案内してあげるわ!」

「とっておきの」

「場所?」

キリヤと関節技を極められたままのアスタは同時に首を傾げ、バ

ネツサの案内で新たな場所へと誘われる――

◎

やってきたのは表では絶対に取り扱われない物ばかり取り扱われている闇市ブラックマーケットだった。

キリヤとアスタは目を輝かせるがシイナは闇市に入ってからとうものずつと機嫌が悪そうに見える。

「さつきからどうしたんだ？」

「アララ、随分と嫌われちゃったものねココも。でも王族や貴族はこういう場所毛嫌いして近付かないものね」

「ここはキリヤさんの教育上良くないと思うので一刻も早く出ましょう。団長もきつと私と同じ考えです。だから早く出ましょう」

「……やっぱりこの子、坊やの保護者なんじゃない？」

バネツサが少々呆れ気味で警戒して唸り声を上げるシイナを見て言う。

しかしすでにキリヤの目は別のものに移っており、その視線は一際賑わっている場所へ向けられる。

気付いたバネツサは「あー」と納得した声を上げ、

「あそこは賭博場よ。坊や達にはまだ早いわね」

「賭博場って？」

「お金を賭けてゲームをするのよ。勝ったらお金が沢山手に入るけど負けたらその分のお金はなくなっちゃうから下手に素人が手を出すと身を滅ぼすわよ」

「そうですキリヤさん、帰りましょう」

この時キリヤは考えていた。

先ほど言われたこの硬貨で三品買うのは難しいという言葉が引っ掛かっていた。

だったらここは――

「行ってくるー！」

シイナの話も聞かず、キリヤは賭博場に向かって走り出す。

この行動の速さにバネツサもシイナも目を見開き、

「キリヤさん待ってくださいー！」

焦ってシイナも後を追った――

◎

「も、もう勘弁してください……」

賭博場でそう言ったのはキリヤ――ではなくディーラーの男だった。

このゲームは至極単純で飛ばしたコインの裏表どちらかを当てるだけ。

挑んできたのは五百ユーロしか持っていない少年。しかし、その少年が豪運の持ち主だった。

イカサマしようが何しようが当ててくる。

おかげでたった五百ユーロが毎度全賭けしていたためにすでに数百万に到達してしまっていた。

一瞬店の者を集めて追い返そうとしたがこの二人は魔法騎士団。しかも後ろにいる黒髪の可愛らしい見た目の少女がとんでもなく怖い。

――余計な真似をすれば殺す。

これまでにないほどマックス殺意の籠った双眸だった。

「よし、これだけあったら何か三つぐらい物買えるかな？」

「……………いいえ、まだまだ足りないと思います」

「いえいえいえいえいえいえいえいえいえいえ!! 足りません足りません!!」

今日だけでこの店は赤字もいところ。

ディーラー決死の土下座で帰って貰えることになったが去り際――

「見てるだけで分かるのに何でこんなことでお金貰えるんだろうな」

「私には分かりかねますね」

「もう二度と来ないで!!」

◎

「――誰がそんな頓知でクリアしろと言った？」

結論を言えばめちやくちや怒られた。

シャーロットへのお土産や色々なものを買って帰り、どうやってこんなにも手に入れたか説明すると正座させられてこれ。



賭博とは良いものではなかったようで、しかもそれが闇市なら尚更のこのようで。

「シイナ、貴様がついていながら聞いて呆れる」

「め、面目ありません……」

ついでに何故かシイナまで怒られていた――

## 第2章く魔宮調査編く

### 13話「魔宮調査開始」

「キリヤスフィール、シイナ、新しい任務だ」

「何スか何スか!？」

「ちかーいっ!!」

「ぼふう!？」

新しい任務の知らせに気分を昂ぶらせたキリヤはシャーロットに顔を近づけたところでソルのラリアットが炸裂。

身悶えるかと思えばキリヤはすぐに立ち上がり、

「それで内容は何ですか？」

「魔宮ダンジョンの調査探索だ」

「うおおおおおっ！ やったーっ！」

「キリヤさん今回は珍しくご存知なんですか!？」

「いや知らね」

分かったような雰囲気を出しながら全く知らないというパターンの変化球にソルとシイナは大きくズッコケる。

立ち上がったソルにバシバシ叩かれるキリヤは「イタタ」と言いながらシャーロットに説明を求める眼差し。

一息吐いてシャーロットは言葉を続ける。

「魔宮ダンジョンというのは遙か昔にいた人間達が遺した遺物が眠る場のことだ。突発的に発生することからそう総称している。中には強力な古代魔法や貴重な魔道具が眠っており、当時の人間が自分達以外に悪用させないように多重の罫を張っている危険地でもあるのだ」

「そんなところに何で行く必要があるんですか!？」

「危険性の高さ、そして邪な者達に遺物が奪われないために常に魔法騎士が調査している。そして必要に応じて回収、撤去することもある」

「墓荒らしってヤツですか!!」

広い視界で見れば墓荒らしを調査に言い換えているだけに思えた

キリヤはそう挙手するがシャーロットはこれを無視。多分グレーなゾーンなのだろう。

「そもそもこの魔宮は私達の担当ではなく〈紫苑の鯨〉が割り当てられていたが連絡も取れないようになり失敗したと断定するのが妥当だ」「男の尻拭いだなんて何だか嫌だなあ……でも姐さんのために頑張りますー!」

「別にソルが行くわけじゃないんだしいんじゃね?」

「はあ!? 今回は私も行くつての!!」

「話は最後まで聞け」

「はいっ!」

叱られればじやれていたキリヤとソルはすぐさま背筋を伸ばして姿勢を正す。

「いつもならば悠長に探索しても良いところだが今回は一刻を争う!」

「この魔宮はクローバー王国と非友好国であるスぺード王国の国境近くに出現している。つまり〈紫苑の鯨〉の団員との連絡が取れなくなったのはスぺード王国が関与した可能性も示唆されている」

そこで、

「対人戦を想定し、前の任務にて功績を積み対人に特化したキリヤスファイル、シイナに加えソルを派遣する。此度の魔宮は何が起こるか解明されていない未踏の地——心してかかれ、以上だ」

任務を言い渡され、シャーロットに一礼すればキリヤを含めた三人は団長室から退室する。

廊下で未だ見たこともない魔宮に夢を馳せながらキリヤはシイナの方へ首を向け、

「また一緒だなシイナ」

「はい、今回もよろしくお願いします」

「……で、何で今回はソルなんだ?」

「……………」

しれっと同じ任務を受けることになっていたソルはそう問われると一瞬瞼を閉じ、腕を組んだかと思えばカツと瞼を開く。

「私はオマエが気に入らないからだ！」

「ええ……理由になつてねえ」

「オマエが私に勝つてから私はオマエが気に入らない！ 前の任務だつて私が受けていれば楽勝だったのに姐さんに労われて！ 何だかこの頃姐さんもオマエを気に入つてるみたいなどころあるし！ 姐さんの側近は私だけで充分だ！ てゆうかいつまで姐さんの兜被つてるんだ!!」

「よっぽど溜まつてたんだな……何かごめんな。兜は返さねえけど」

「いや返せよ!!」

「……大丈夫なのでしょうか、このチーム」

兜を力ずくで奪い返そうとするソルにキリヤは奪われまいと抵抗。

二人のドタバタ振りにシイナもこの先が不安なのかそんなことを呟いた――

◎

「グウウウウウウ……」

「……あのー、変な唸り声上げながら睨まないでくれるか？ ずっとそんな感じだし疲れねえの？」

道中の空でシイナの影に乗せて貰っていたキリヤに傍から突き刺さる視線。ずっと続くものだからどうすればいいか分からず思わず問いかける。

見るとしれつとシイナの影に乗っていたソルが延々とキリヤを睨みつけている。それも獣の威嚇するような唸り声で。

「――着きましたよ」

すでに不穏な空気がチーム内に流れているがシイナの一言で二人共地上を眺める。

「あれが魔宮<sup>ダンジョン</sup>? でも――」

「メチャクチャだな……」

上空から見れば魔宮というよりも瓦礫の山にしか見えない。

しかしそれは空中から見ただけで地上から見ればまた違うのかと降りて見ても――瓦礫の山。

「どうなつてんだ？」

「すでにスペード王国のヤツらが来て壊した、とか？」

「だったらもう手遅れ、ということになりますね。とにかくもう少し調査してみましょう。何か手がかりが見つかるかもしれません」

シイナの言葉に同意したキリヤとソルは瓦礫の山を探索。

どうにも町で見た煉瓦造りの建築物と似ている形の壁らしきものが沢山あるだけで瓦礫を退かして見ても特に目立ったものは見受けられない。

しかし、キリヤには気になることが一つあった。

「なあシイナ、魔宮ってこんなに小さい規模なのか？」

「……確におかしいですね」

遺跡、というにはあまりにも小規模だった。

瓦礫の量を加味して考えてもこの程度ならばへ碧の野薔薇へにある小屋と同程度。しかもどこを探しても罨らしきものも見当たらない。

ゴーレムで瓦礫を退けていたソルもこれには不満げに、

「見た感じ地下もなさそうだな。へ紫苑の鯨への男共もスペード王国のヤツらの姿も見えないし、どうなってるんだ？」

「姫様が伝えた場所が間違ってたとか？」

「バカ！ 姐さんがそんなミスするわけないだろ！」

またソルに怒られてしまい、だが一向に成果は得られない。

それから数分ほど探索するとキリヤは瓦礫に何か引つ掛かっている物を発見する。

「何だこりゃ」

ペンダント、というものか。

ネックレスと同じように首から下げられるようになっており、埋め込まれた宝石は紫色の奇妙な輝きを見せていた。

何も成果物がなかった以上見せるしかないときリヤはペンダントをシイナ達に見せ、

「なあなあ、こんなの見つけた」

「何だソレ？ ペンダント？」

「こんなところに……もしかするとスペード王国が取りこぼしたものの、でしょうか？」

結局答えは分からずしまい。

スピード王国が本当に着ていたのだったらそれも仕方ないと拍子抜けで帰る気になった——直後。

「っ！ キリヤさんそのペンダントから離れてください！」

焦ったシイナの声。

何だと思えばキリヤの持っていたペンダントが光り輝き、中から影のような黒く薄い兎を模した何か飛び出す。

一瞬呆気に取られたキリヤだが兎が狙ったのはキリヤではなく、気付いたシイナ。

手首を掴まれたシイナにキリヤは即座に兎に向けて拳を放つが透過して空振ってしまう。

(クソ、実体がねえのか！)

「シイナっ！」

『我がテーマパークは入場料として一人の命をお預かりします。全てのアトラクションをクリアすれば豪華景品と一緒に返してアゲマス！』

兎から聞こえたのは老若男女複数の声が入り混じったような奇怪な声。

それが何なのか、疑問を抱く寸前——

『……ケテ、ボク達を……助けテ！』

悲鳴にも似た助けを求める子供の声が聞こえた。

瞬間、シイナと兎は一瞬の瞬きと共に姿を消し、キリヤは困惑する。

「シイナは!?!」

「多分どこか別の場所に連れて行かれた！ 空間魔法による転移か！」

周りを見渡したところすでにシイナも兎もその姿はない。

代わりにキリヤとソルの前には先ほどまでなかった黒い穴のようなものが出現し、どうやらこれも空間魔法の一種のようだ。

「さっきの兎、入場料とか言ってたな」

「つまり魔宮マジヨンはそもそもこことは別の場所にあるってことか！ で、どうすんの?」

「決まってんじやねえか」

掌と拳を勢い良く合わせたキリヤは黒い穴に向かって迷うことなく飛び込む。

「助けを求める声がして、今オレの手が届くんだ——放っておくわけねえだろ」

「仕方ないから姐さんのために付き合っつてやるよ！」

ソルもキリヤの後を追って飛び出し、二人揃って黒い穴へと飛び込み落ちていく——

◎

「よつと——だふっ!？」

黒い穴から見事に着地したキリヤだがその直後に落ちて来たソルの下敷きに。

いきなり強かに顔面を打ちつけることになったキリヤは倒れた姿勢で顔を上げ、

「な、何でオレの上にわざわざ落ちてくるんだよ……」

「オマエが私の着地する場所にいるのが悪い！」

「暴論っ！」

とにかく開始早々不運に襲われるキリヤだが無事に魔宮ダンジョンの中に入り込んだようだ。

着地したのは何か板が敷かれた——

「これ何？」

「線路。荷を運ぶトロツコとか通るための道さ」

「へえー」

とにかく線路の上に着地したキリヤは下に注目していると先に魔宮本体を見たソルが大きく口を開ける。

何をそんなに啞然としているのか、キリヤも気になって見てみると

「な、何じゃこりゃああ!？」

線路が続く先に見えたのは——今まで見たこともない幻想な景色。

一見巨大な城のように見えるがそのすぐ傍には超巨大な山。その山にも線路らしきものが見える上に空には人以上のサイズをした

カップがいくつも回っている。

巨大な車輪には沢山の入れ物が付けられゆっくりと回っており、これまた巨大な骨が動いている。どれもこれもクローバー王国では見たこともないものばかりだ。

「これが〴〵てーまぱーく〴〵ってヤツか!!」

目を輝かせるキリヤは見たこともない物の数々に気分の高まりが止まらない。

我先に駆け出すキリヤだったが首根っこをソルに掴まれて勢いを殺されてしまう。

「待てバカ! どうして男は短絡的なヤツが多いんだよ!」

「えーせっかく楽しそうだと思っただのに」

「これは遠足じゃねーし! 魔宮ってのは罠が仕掛けられてるって皆さんに聞いたろ!」

確かに思い出せばそうだったがこれほどまでに楽しそうな場所ではしゃぐなと言う方が無理な話だ。

キリヤの気持ちは視線で伝わり、ソルは深い溜息を吐く。

「こんな見た目だつて侵入者を油断させる罠かもしれないし」

「無きにしても非ずって感じだな」

かと言つてこのままここでじっとしているわけにもいかない。

どうするかと思えばソルの姿に突然影が重なる。

「あ、ソル危ねえ」

「わっ!?!」

キリヤは気付けばすぐにソルを抱き寄せると数瞬前までソルが立っていた場所に何かが落ちてくる。

見ればそれは紫の外套を身に纏った男魔道士であり、ソルは見るなり――

「あ、コイツ〈紫苑の鯨〉だ」

「か、は……っ」

どこからかとんできたのか分からないが男魔道士は全身傷だらけで血塗れ。

すでに息も浅く、回復魔法を持たないキリヤ達には手の施しようも



ない状態だった。

男魔道士はキリヤ達の外套を見て魔法騎士団と分かったのか手を伸ばし――

「き、気をつけろ……ここに、は……へ七剣総統が……いい、る……」  
ただそれだけ言つて男魔道士は事切れてしまった。

その言葉がどんな意味を持っているかキリヤにはまだ分からないが――

「何か来るな」

「てゅーか離せー！」

抱きかかえたままだったためにキリヤは顔を押し退けられるが背後から見えた光にソルを抱えたまま跳ぶ。

見ればそれはいくつも車両が繋がった――トロツコとソルは言っていたか。とにかくトロツコが走り出して男魔道士を轢き、キリヤはトロツコの上に着地する。

「上等だ。しちけんそーとーだがあとらくしよんだか知らねえけど友達は返して貰わねえとな！」

キリヤとソルの凸凹コンビ。

爆進する魔法トロツコに乗れば逆風を受けつつ進み始める――

## 14話 「七劍総統」

「で、ソル。へ七劍総統へって何なの？」

魔法トロツコに乗ってすぐにキリヤは疑問を口にする。

するとキリヤから少し離れた位置で座っていたソルは面倒そうに頭を掻き、

「へ七劍総統へってのはスペード王国で最も強い七人のこと。何でも全員が魔法と剣技に特化した魔法剣士でへ七劍総統へとなれば実質国王と同じぐらい権限持つてるらしいけど。とにかくクローバー王国で言えば魔法騎士団団長みたいなモンだな」

「ということはそんなスゲエヤツと戦えるかもってことか！ もし勝ったらオレってば姫様超えたってことになるかな！」

「だあー！ あくまで団長みたいなモンって言っただけで姐さんと同じ実力とは言ってないだろ！ バカ！ 姐さんより弱いに決まってる！」

「ええ……」

何故怒られているのか分からずキリヤはふと疑問に思う。

——どうしてここまでソルはシャーロットへの執着を強く見せるのか。

気になるもののそれよりキリヤの興味はいつの間にか流れる光景が変化していたことに向けられる。

「これは……星空？」

よく分からないが洞窟のようなものの中に入れば一気に暗くなり、辺りを照らすのは壁一面の星々。

メレオレオナと修行していた頃はよく見上げて星座というものを教えて貰っていたが——

「うおっ！」

回想する暇もなく何やら天井から落ちてくる。

受け取ると筒状のもので持ち手があり、指を引っ掛けられる部分があつて試しに引いてみると——

「スゲエ！ 魔力出たっ！」

砲口から魔力弾が飛び出し、しかしそれは着弾するなり紙吹雪を散らす。

これでどうするのかと思えば次は目の前に兎の影が現れ、今度は看板のようなものを持っていた。

『ルール説明！ 今からたくさんのエネミーが現れるからキミが持つてるクラツカー銃で撃ちまくろう！ 洞窟が終わるまでに五十体倒せたらクリアだよ！ あとトロツコから落ちないように気をつけてネ!!』

「なるほど！ 了解した！」

ゲームスタートまでのカウントが進む中、早速キリヤはクラツカー銃を構え張り切るがソルは何とも乗り気ではない様子。

キリヤは首を傾げ、

「おいおいどうしたんだよソル。こんな楽しそうなのに」

「私はオマエと違ってガキじゃないからこんなのではしゃがないし」

「じゃ、コレ借りる！」

ソルの分もクラツカー銃を持てばキリヤはゲーム開始と同時に現れたエネミーを次々と撃ち抜いていく。

その度に小気味良い音がいくつも響き、キリヤはものすごく楽しそうに笑う。

「ハハハハ！ どんと来い!!」

五十体がどれほどの数か分からないがとにかく撃ちまくる。

と、後ろを見ずに動いていたキリヤはトロツコに後ろ足を引っ掛けてしまい、

「バ——」

落ちそうになったところをソルが慌てて手を伸ばしてくるがキリヤは落ちなかった。

キリヤの背を支えていたのはあろうことか今まで撃ちまくっていたはずのエネミーで、キリヤが落ちないようにしっかりと支えてくれていた。

「あ、ありがとな」

これにはキリヤもよく分からず、しかし問いかけようにもその瞬間

に洞窟を抜けてしまった。

結果的にキリヤのスコアはクリア基準に達していて複数のクラックカーが鳴り響く。

『オメデトウ！ シューティングスターをクリアしたのデ鍵を一個贈呈します！』

「おー何か手に入った」

兎の影から手渡されたのは一本の鍵。これまた兎を模した形になっていて、怪訝そうにその鍵を見つめるキリヤにソルも後ろから覗く。

「多分後で必要になるんじゃないか？」

「そうかな」

とりあえずこうして一個目の鍵を入手。

だがキリヤにはどうにも先ほどキリヤを助けてくれたエネミーのことが引つ掛かっていた。

魔宮は危険な罠が仕掛けられている。そう聞いていたが先ほどからこの歓迎されている雰囲気、キリヤが怪我をしないように配慮したかのような行動。

どうにもキリヤの中で魔宮イコール危険地帯が繋がらないように思えた――

◎

ダン、と苛立ちが籠った靴音が響く。

「ねえウサギのマスコットちゃん。アンタ達はそんなに私を苛立たせて楽しい？」

言ったのは一人の女性。

目を細め、ゆつくりと眼差しを向けた先にいたのはこのテーマパークを支配するマスコットのウサギの群れ。

『ボ、ボク達はソナつつもりじゃないんだ……ただ――』

「そういうことを聞いてるんじゃないの。私はアンタ達の背後にある宝箱、それが目的なんだからさっさとそれを開けなさいって言うてるのよ」

手に持った身の丈よりも遥かに大きい斧の柄頭が地面を打つ。

大きく揺れた床にウサギの群れは驚き、恐れて後退する。女性が指し示すのはウサギ達よりもさらに後ろにある見たこともないほど大きな宝箱。

宝箱は幾重にも鍵が掛けられており、無理矢理壊したところで仕掛けられている防護魔法によって中身は泥に変えられてしまうだろう。

だから力づくでは不可能。それを知っているからこそウサギ達は震えながらも言う。

『ムリだよ……コレは全部のアトラクションをクリアしないと開けられないんだ。ソレがマスターと交わした契約なんだ……』

つまりこのテーマパークに存在するアトラクション自体が儀式なのだ。

厄介なことをしてくれる、女性は心の内で舌打ちをする。

この魔宮を創り出したのはかつて一つの文明すら創り上げた大魔道士。その大魔道士が自らの技術の全てをあの宝箱に封じ遺したとされている。

(あの中身さえ手に入れば他の国を圧倒することが出来る)

その大魔道士は生前精霊魔法や聖遺物と呼ばれる数々の魔道具の研究をしており、たった一人で国力の全てを担っていた。

ここに来るまでにすでにクローバー王国の魔道士複数人と戦っており、クローバー王国も狙っているのは確実。ならば早く手に入れなければ増援がこの場に辿り着いてしまう。すでに魔力は検知している。

だがどうにも解除方法が煩わしい——そう思えば上空にどこからかの映像が映し出される。

「あれは……」

映っているのは自らが無視したアトラクションをクリアしている少年魔道士の姿。さらにクリアしたことによって鍵を受け取っている。

宝箱を見ればいくつも施錠されており、あの鍵はその中の一つに違いない。

楽しんでいるあの様子からして引き続きあの少年魔道士はアトラ

クシヨンをクリックアしてくだろう。

「ははは……なかなか運が回ってきたねエ……」

女性の名は——ベレラファスラ。

スペード王国が総統と崇める〈七剣総統〉が今、動き出す——

◎

『アトラクシヨンクリアーっ!!』

「よっしやあ! やったなソル!!」

「おうっ!」

あれからいくつも現れるアトラクシオンをクリックアしていったキリヤ。

鍵も残すところ残り一本だと先ほど兎が教えてくれたためにもう終わってしまうのかと残念な気持ちにもなる。

それに最初は「男はやっぱりバカだな」と言っていたソルも楽しんでいるキリヤの姿を見て自分もやりたくなったのかいつの間にか参加して今では協力してクリアしていたのだ。

ハイタッチするとそのことに気付いたソルはというと、

「なっ! ちが、違うからな!! 私はオマエみたいな男認めてないからな!」

「何だよ急に」

いきなり離れたソルにキリヤは疑問符しか浮かばない。

またガニ股になったソルは勢い良くキリヤに指を差すと、

「姐さんが認めた風だけど私は騙されないのでからな!」

「何か言えば二言目には姐さんだよなソルって。何でそこまで姫様に拘んの?」

「何でオマエにそんなこと教えないと——」

と、一時は否定したがやがてソルは頭を搔くとどこか照れくさそうにし、

「姐さんは私に生きる希望を与えてくれたんだ。だから私はシャーロット姐さんのために頑張って、活躍して、認めてもらって、喜んでもらいたいんだ」

それはキリヤがメレオレオナに対する思いと同じように思えた。

だがソルとキリヤの二人では大きく違いがある。

ソルはシャーロットの傍にいて頑張ることを決めた。

対しキリヤはメレオレオナの傍に一度離れることを選択し、対等な立場になるために超えることを決めた。

ソルの考えは悪いことではない。キリヤと違い、ずっと共にいて従属することを本懐としているのだから。

「なあソ——」

声を掛けようとした刹那——トロツコが縦に割れた。

これによりキリヤとソルは分断され、キリヤが手を伸ばそうにも即座にソルは空間魔法によって転移させられ姿を消してしまった——

◎

「……くそ、分断された」

どういった趣向か、分断され一人になったソルは頭を掻きながら周りを見渡す。

見れば山、いや火山か。辺りにはいくつもの火山があり、火口から溶岩を垂らし今にも噴火しそうになっている。しかしこれだけ近くにいっても熱を感じないのは今までのアトラクションと同じく見た目だけのだろう。

しかもこの山は入り口から見えた巨大な山のようにだ。線路は平面だが火山は傾斜にいくつも聳えており、上を眺めれば本体の巨大な火山が見える。

「フフ……悪いことをしたわね、彼氏とデート中だったのに」

「っ!?! あ、あんなのが彼氏であつてたまるかーっ!!」

女性の声が耳をくすぐる。

思わずツツコミを入れてしまったが全く気配を感じなかった。

すぐさまソルは大きく後退し、睨みつけければそこに立っていたのは一人の女性だった。

シャーロットには劣るが整った容貌をしており、だが胸元には刀傷と思われる傷痕が酷く残っている。

焦げた黒の長髪を靡かせ、肩口から胸元まで露出した黒の衣装を身に纏いその肩にはスペード王国の紋章。

「まさか……」

「お察しが良ければ分かるわよね。私はベレラフアスラ——へ七剣総統の一人よ小猫ちゃん」

「誰が小猫ちゃんだ！」

相手の言葉にいちいち反応するソルにくすくすと笑うベレラフアスラ。

言葉は勢いあるもののソルの心の内は穏やかなものではない。

（へ七剣総統）……まさか分断された時に出てくるなんて）

キリヤがいればまだしも——そんな考えが一瞬浮かび、ソルは大きく自らの頬を叩く。

いつの間にそんな軟弱な考えになってしまったのか。男に頼るなど普通の女——男以下の女と同じだ。

シャーロットが嫌う弱く、虐げられるのが当たり前になっている女と同じになってしまう。

「上等だ！ あんなヤツいなくたってオマエ程度私がブツ倒してやる!!」

「アハハ……威勢のイイこと」

ここでへ七剣総統を単独で取ったとなればこの魔宮探索も格段に楽になり、よりシャーロットに認められることになる。

そう思えば俄然やる気が出て気合いを入れるソルだがまるで物怖じないベレラフアスラ。

「アンタが鍵を持っていないことは知ってるの。だから簡単に罠り殺してア・ゲ・ル」

不敵に笑い、ベレラフアスラは鈍重大大斧を持ち上げる——



## 15話 「家族だから」

「やっべえソルと完全にはぐれた!!」

ソルと分断されてしまったキリヤは半分に分かれたトロツコでどうすればいいか考えていた。

空間魔法というのはなかなか魔力が読み取れず、大気の魔<sup>マギ</sup>を感じたところで転移先は分からない。

『やっほー!』

「……んん?」

とりあえず行動を起こすかと考えていたキリヤの前に何だかよく分からない生物が現れる。

虎に似ているが二足歩行で、しかも何だか中に人が入っ<sup>い</sup>ていそうな感じで。

一人や二人ではなくそれぞれの動物で大勢がそんな風体でキリヤの前に現れたのだ。

「何だ何だ!?!」

『踊ろうよ!』

「え、踊る!?!」

踊るが何かも分からないのに両脇をそれぞれ二人の動物人間に抱えられ、珍妙な音と共に皆が一つの輪になって踊り始める。

何だか分からないがとにかく楽しい気分になってきたキリヤは流されるままめちやくちや踊った――

◎

「ぐう……っ!」

「アンタの土魔法、面白いわね」

ソルは〈七剣総統〉のベレラフアスラと遭遇し、戦闘が始まったが実力の差は歴然だった。

どんな魔法を使おうともベレラフアスラはあの大斧を振り回すだけで対処されてしまう。こちらは全力だというのに相手が使った魔法はただの身体強化魔法だけ。

これが団長クラスとの差だとも言いたいのか、傷ついたソルはべ

レラファスラに踏みつけられる。

「良く言えば独創的、だけど悪く言えば基礎がなっていない。クローバー王国はよほど魔法教育が整っていないのか、それとも生まれが良くなかったのかしら?」

「……………うっさい!」

「凶星ね。あのボーヤを呼んだ方がイイんじゃない? アンタだと私に勝ち目ゼロなんだから、ねえ?」

「死んでも、嫌だ……………」

土創成魔法“暴れ地母神”。

側面から殴りかかった一撃にベレラファスラは反応していながらもわざと拳を受ける。

直撃。突き抜ける打撃音は猛々しく響く。

だが、ベレラファスラはまるで倒れない。それどころか笑みを浮かべる。

「ハハ、アンタの敗因はまず魔力。その程度の魔力じゃ私が身に纏う魔力は超えられない」

言ってベレラファスラは大斧を地面に突き刺して拳を振るう。

キリヤと同じか、またはそれ以上の速度か。拳を受けたゴーレムは木っ端微塵に弾け飛び、跡形もなくなる。

「二つ目、私とアンタじゃ育ってきた環境が違う。スピード王国はクローバー王国と違い、才能だけでは何にもなれないのよ。常に自らの実力を研磨し、強さを求める。アンタ達はどうかしら?」

スピード王国はクローバー王国と違い、生まれや才能よりも遥かに殺傷能力が求められる国だと聞いていた。

魔法剣士になるためには死者が出るほど厳しい鍛練をこなし、身を鍛え続ける。

数多もの戦争をあえてし続けることによって富国強兵を掲げるタカが外れた国——それこそがスピード王国。

そんな中でも最強の七人に数えられるとなれば桁違いなのも当然だ。

「三つ目、私に劣っていると分かっただけながら unnecessary 矜持で仲間と協

力しなかった。結局アンタは弱い女なのさ」

(クソ……クソっ!!)

これだけ言われても何も言い返すことが出来ず、ソルは奥歯を噛み締める。

ベレラフアスラは踏みつけていた足を退け、地面に突き刺した大斧を拾えば二歩ほど下がり大斧を振り上げた。

「じゃあね、よわいよわーい小猫ちゃん」

◎

どうして魔法騎士団を目指したのか、そのきっかけは今でも覚えて  
いる。

ソルは平界で生まれたものの平民の中でも貧しい日々を過ごして  
いた。いくら平界でも王貴界から遠ざかるほど綺麗な服も着られず、  
満足に食事にもありつけない貧しさを強いられるのだ。

自らの“強さ”なんてどこにもない日々。だが、あの日ソルの中で  
何かが明確に変わった。

ある日、王貴界で強盗が起こりその犯人である男達が平界に逃げ込  
み、魔法騎士団も後を追っていたことがあった。

追い詰められた男達は追跡を払うために魔法をやたらに撃つたの  
だ。

市民に襲い掛かった魔法に対し、魔法騎士団の男達はあるうことか  
見捨てた。強盗達を捕らえることに必死になり、己が功績に目が眩  
み、後で聞けばあの時いた魔法騎士団の男は貴族ばかり。

お世辞にも綺麗だと言えない身なりだったソルや他の平民を“守  
るに値しない存在”に見えたに違いない。路傍の石程度にしか思っ  
ていなかったのだろう。

呆然とする幼いソルにとうとう攻撃魔法が襲い掛かる。

どうしようもない一撃。無力だったソルはただ瞼を閉じるしかな  
かった。

だがいつまで経っても来るはずの痛みは来ない。

何故か。恐る恐る瞼を開けたソルは思わず呆けて口を開けてしま  
う。

ソルの前に立っていたのはまだ団長になっていなかった頃のシャーロット。

荊がソルを魔法から守り、一瞬のうちに強盗達を拘束してしまったのだ。

その姿は今まで見た誰よりも凛々しく、美しく、見惚れてしまい、同時に証明されているようだった。

——例え女でも強くなれる、と。

その日からソルは変わった。

心から強くなりたいと願い、自分を助けてくれたシャーロットの役に立てるようにしたい、と。

魔法学校など行く金もなかったために独学で魔法を得ていったのだ。

そして入団試験で〈碧の野薔薇〉に選ばれ、シャーロットの傍にいて戦えるようになった。

あの時自分を守ってくれたシャーロットの背中を、今度は自分が守りたい。

その想いを胸に——

◎

迫った大斧を前にソルは瞼を閉じた。

命を救って貰ったあの恩に報いることが出来なかったとことに対する悔いが心を支配する。

——だが、まただ。

また、瞼を閉じても来るはずの痛みが——来ない。

「なん、で……う？」

瞼を開け、目の前に広がる光景にソルは痛む身体でも疑問を抑え切れなかった。

あれだけいつも邪険に扱っているというのに。

認めないなどと散々な口を叩いたのに——

「遅れてごめんよ。手当たり次第に探してたら時間かかっちゃった」

そうじゃない。

どうしてここに来たのか、男なら自分を見捨てて当然だったという

のに。

ソルの目の前に立つ少年——キリヤは振り下ろされた大斧を白刃取りして、ソルのことを守っていたのだ。

「あれ、違う？ ……あー、その表情はあれか。何で助けたの的な感じか」

大斧を受け止めながらキリヤはハハ、と軽く笑って——

「オレとオマエは一緒のへ碧の野薔薇で家族だから当然だろ？ そんなでもって——家族を傷つけた落とし前はつけさせてもらうぜ」

大斧を弾いてソルの前に立つその後姿はどこかシャーロットに似ていた。

認めたくないのに、そう思いながらソルの意識はどこか安堵を覚え途切れる——

◎

「フフ……随分早かったじゃないボーヤ。もしかしてボーヤはあの小猫ちゃんの彼氏じゃなくて弟だったのかしら？」

「いや、血なんて繋がってねえけど」

言うところへ七剣総統の女性は首を傾げる。

「オレは昔の記憶がねえから本当の家族がいるか分からねえけどよ。出会った仲間はオレにとったら家族みたいなモンだ。だからオレは家族を傷つけるヤツは許さねえ」

「ハハハ！ でもそう思ってるのはボーヤだけよ？」

「構わねえよ。別に誰かに認められたいから決めたわけじゃねえし——オレ自身がそう決めたんだからオレは意地を貫くだけだ」

キリヤの言葉に女性は「ふうん」と頷く。

見れば分かることだが明らかに今まで出会った魔道士と身に纏う魔力量が違う。シャーロットや他の団長もこうなのは分からないが強敵であることは明白だ。

「私の名前はベレラファスラ。名前、聞かせてくれるかしら？」

「キリヤスフィール・フィン・ガルガン。今からテメエをブツ飛ばす名だ！」

「愉しみねえ……」

拳と大斧。

二者同時に構えられた一撃が真正面からぶつかり合う――

◎  
(重た……ッ！)

ぶつかり合った拳と大斧だが勢いはベレラフアスラの方が上だった。

筋力、魔力放出量、それだけではないただただ単純に武器の重さで負けてしまっている。

「斧とぶつかっても砕けない拳……ああ、ボーヤも知ってるのねソレ」  
キリヤのマナスキンを即座に見抜き、大斧から柄を強引に抜き取るベレラフアスラ。

斧の刃自体が魔力――しかも土属性で作られていたのか大斧は棍棒と化し、後ろで両脇に挟んで横に弧を描くようにして薙ぎ払っていく。

瞬時にキリヤは体勢を低め、棍棒を躲せば一、二と大きく足を地面に叩き込んで加速。

拳を握り締め、凝縮した魔力と共に思い切り両拳でベレラフアスラを殴りつける。

響く衝撃にキリヤは確かな手応えを感じるが同時に反発する感触があり、それでもベレラフアスラの身体は後ろへ吹っ飛ぶ。

「精度も洗練されてる……しかも即座にアレに反応するなんて野生の勘かしら。フフ、気持ちイイわア……」

大の字で倒れたと思えばやはりまるで効いていない。むしろ何故か嬉しそうにしている。

しかし、先ほどの反発するあの感覚は間違いない。ベレラフアスラもまたマナスキンの使い手だ。

『莫迦者が。この程度上級魔道士ともなれば大抵の者がしている。極地と言っても上を目指すならば出来て当然だ』

メレオレオナも確かにそう言っていた。

どうにも相手は魔力だけではない。技術もまた兼ね備えているに違いない。

「フフ……時にボーヤ。痛いのは好きかい？」

「好きなワケないだろ！ レオナ様の鉄拳はものすげえ痛いけど愛があるから好きだけどな！」

「……ボーヤは割と私寄りだねえ」

一体何が言いたいのか、キリヤには分からないがベレラフアスラは倒れた体勢のまま拳で線路を叩く。

瞬間、キリヤを囲うようにして岩壁が次々と現れる。

「岩石魔法」 岩霰」

岩で退路を塞いだと思えば上空から雨霰のように降り注ぐ岩の棘。

この程度ならばまだ防げる。キリヤはすぐさま拳を構え連打で防ぐがベレラフアスラの狙いは上空からではない。

突如として岩壁から湧き出した岩の棘が一斉にキリヤの身を襲う。

「ボーヤ、愛ってどういうものか知ってるかい？ 愛ってのは痛いんだ。ほらアンタも誰かを愛する気持ちあるなら分かるんじゃないかい？ 誰かを想えば想うほどズキズキって痛みを感じるし、与えられれば愛って胸の奥が焼けるように痛いじゃないか」

ゆっくりと起き上がればベレラフアレラは岩の華と化したキリヤを見ながら自らの身体を腕で抱く。

「私は痛いのが好き、それと同じくらい痛みを与えるのが好き。だって私はみくんなを愛してる博愛主義者だから私は被虐性愛者<sup>マソヒスト</sup>で加虐性愛者<sup>サテイスト</sup>なんだ。ボーヤだってあの小猫ちゃんだって私からいっぱい痛みを受け取ってズキズキ痛くて嬉しいだろう？」

「まっつっつっつたくわからんっ!!」

一応聞いていたが何一つ理解出来ることがなかった。

叫びと共に岩の華は砕け散り、キリヤは飛び出す。その腕にはすでに進<sup>レベルアップ</sup>化した証である籠手が装備されており、傷一つないキリヤにベレラフアスラも少し驚いた様子を見せる。

「オマエがマジヒストリーだかサデイちゃんだか知らねえがオレがオマエをブツ飛ばすことに変わりねえ!!」

「へえ……ボーヤはやっぱり他の魔道士とは違うみたいだねえ」

未だ底知れぬ相手ベレラフアスラ。

彼女は再び棍棒を構えれば大斧を構え、不気味に余裕を見せる――



## 16話 「レベル2」

(あつぶな……何つう威力だよきつきの)

早くも“レベル1・ブルガトリト戦竜の腕鱗”を腕に纏ったキリヤは内心焦っていた。

まだ全力ではないお遊び程度の魔法。だがそれだけでキリヤの進化条件を満たすほど。

温存することも出来たが先ほどの一撃は正直危なかった。いくら魔法で傷を受けなくとも身体に来る衝撃は何一つ掻き消せない。

つまり、ベレラフアスラはとんでもない攻撃特化の魔道士ということだ。

「行くよ。ボーヤは強いから私がいくら愛しても壊れなさそうね!!」  
「るっせえー!」

「岩石創成魔法”岩荊”。

足を線路に叩きつけたベレラフアスラの正面から岩の濁流が発生し、それが荊を形成する。

キリヤは片足を軸に回りながら拳を構え、

「こんなモン姫様のに比べれば……っ!」

拳を振るえば一撃で岩の荊を全て破壊。

一瞬晴れた視界だが今度は岩の兵士が十数人剣を持って襲い掛かってくる。

「岩石創成魔法”騎岩士”、この程度ボーヤには簡単にか出来ちゃうでしょ?」

一体ベレラフアスラは何がしたいのか。

この魔法はソルのようなゴーレムを創り操るもの、ならばキリヤにはむしろ有利だ。

一発拳を打ち込むだけで魔力を吸収、途絶えさせ、どこを打とうとも行動を停止させることが出来る。

瞬きのうちに全ての“騎岩士”を打ち倒したキリヤだが――  
「ふうん、これで何となくボーヤの魔法の正体が分かった」

砂埃が上がったせいで肝心なベレラフアスラを見失った。

そう思えばすぐに側面から胸倉を掴まれ、砂埃を裂いて現れたベレ

ラファスラに引き寄せられる。

次いで放たれるのは攻撃魔法ではなくキリヤの腰に手を回して行われる——鯖折り。

「が……ッ！」

「答え合わせと行こうじゃないか。ボーヤの魔法は相手の魔法の“無効化”または“吸収”。さっきの“騎岩土”がボーヤに触られた途端に動かせなくなった……いや魔力が途絶えたんだ。それはさっきの“岩荊”も“岩霰”も同じ」

身体強化も相まって痛烈な締め技。

マナスキンしていようと背骨が持っていかれそうな威力、しかも手放しても良いように線路の端から火山の傾斜に落とすために移動までしている。

「で、“無効化”か“吸収”どっちかで迷ったけど魔法攻撃すればするほどボーヤの魔力が上がったから後者だ。そしてボーヤがその籠手を発動したら私から吸収した“岩霰”分の魔力がほとんどなくなったがボーヤが纏う魔力が強力になった……ということはボーヤは他人の魔法から魔力を吸収し、その魔力で自分を進化させ素の身体を強化し魔力量も増やす——違うかい？」

（コイツ……短絡的に見えてめちやくちや見てやがる……ッ！）

言われてしまえば苦しみのせいもあつて言葉を返すことが出来ない。

言動に騙されがちだがベレラファスラの目はキリヤの全てを見ていた。流石《七剣総統》に数えられるだけでもあり観察眼、戦闘においての見切りもとんでもなく鋭い。

「で、早くもボーヤの弱点だけど何でも魔力を吸収出来るわけじゃないさそうね。現にこうして触れ合っているのに私から身体強化魔法の魔力すら奪えていない。さらに進化するにはどうにも自分の魔力じゃなくて他人の魔力じゃないとダメ」

「ぐ、あ……っ！」

「その欠点をカバーするためにか分からないけど身体能力を向上、体術の強化して——でも自分以上の身体能力で締め上げられたらどう

するのかしら？」

フッフ、と不敵に笑い、ベレラファスラは締める力をさらに強める。だがその瞬間——キリヤも不敵に笑った。

「そんなモン……オレの師匠が分かかってないはずないだろ……っ！」  
途端、ベレラファスラの両耳にキリヤは魔力で両手を加速させ叩き込む。

パンツ、とまるでクラツカーでも弾けさせたような炸裂音を響かせればあのベレラファスラが——確かに怯んだ。

その隙を逃さず手を離れたキリヤは痛む身体に鞭を打ち、靴裏から魔力を噴出させ足場を作れば一気に踏み込む。

怯んだベレラファスラに両拳からの鎖骨に向けた打突。脳震盪を狙い顎を掠めるように拳を放ち、急所である側頭部を蹴りが打つ。

どれも常人ならば必殺の一撃。それでもベレラファスラは倒れず、キリヤはトドメを刺すためにさらに飛び出すが——

「っ！」

「——焦つちやダメよボーヤ」

足下を見ればキリヤの勢いを殺すために岩の拘束が巻きつき、明らかな失速そして停止。

勢いが止まったキリヤにベレラファスラは指で自らの耳を差しながら笑みを浮かべる。

「空気を含んだ手を勢い良く相手の耳に当てて怯ませる……イイ回避方法ねさっきのは。おかげでまだ耳が痛いわ」

「チツ——」

「壊して回避するのとただ殴る、どっちが早いと思う？」

「岩石創成魔法”岩骨”。

拳から腕にかけて岩石を纏ったベレラファスラはキリヤが足下の岩を崩す前にその腹部に拳を直撃させる。

「が、は……ッ！」

「魔力を吸収されても岩石は形を残す。つまり中身の魔力だけ奪うってことか、で、私とボーヤはとことん有利不利別れてるけどもう終わりがかしら？」

一撃で膝をついたキリヤは一度咳き込み、血が飛び出す。胸の痛み、恐らく胸骨が折れたのだろう。急に息苦しくなり、何もせずともすでに全身が痛い状態だ。

だがキリヤは血を吐きながらでも立ち上がれば拳を握り締め、「まだまだ……ッ！ オマエ程度で躓いてたらレオナ様に笑われちゃう……っ！」

「フフ、根性のある男は好きよ」

「オマエに好かれても嬉しくねえつての!!」

(さっきの一撃のおかげでようやく溜まった……ッ！)

確信すればキリヤの身に纏う魔力が一気に膨れ上がり光り輝く。

その眩しさにベレラフアスラも一瞬瞼を閉じれば――

「身体進化魔法〃レベル2・ガイガーアツク強化鎧旋〃!!」

爆煙と共にベレラフアスラの顔面に籠手越しの拳がめり込み、背中から線路に叩きつけられれば地を抉りながら遙か後方まで吹き飛ばす。

煙を引き裂いたキリヤの姿は全身焦げた灰色の鎧に包まれ、被っていたシャーロットの兜は肩に下りて鎧と一体化する。

身に纏う魔力は〃戦竜の腕鱗〃の時とは別人のように膨れ上がり、ベレラフアスラに思い切り指を差す。

「二十秒で充分だ――オマエが倒れるには!」

◎

「二十秒？ 私相手に本気で言つて――」

奇妙な発言をした少年――キリヤ。

ベレラフアスラはまた笑い飛ばそうと思った瞬間、キリヤの拳はすでに眼前まで迫っていた。

「ッ!!」

咄嗟に両腕に岩石を纏わせ防御態勢を取るも直撃した拳の勢いを到底防ぎきれなかった。

ベレラフアスラの靴裏は線路から離ればまるで後ろから猛烈に引つ張られたように吹き飛ばされる。

勢いは止まらず、数十メートル進んだところでこの勢いは無理にで

も止めなければならぬと即座に察する。

岩の壁を幾重にも出現させれば痛みと共に失速。しかし少しでも目を離せばすでに傍にはキリヤが肉薄しており今度は蹴りが襲ってくる。

「ぐ……っ!!」

蹴りをまともに受け、ベレラフアスラの身体はアトラクションの一つにあつた湖へと叩き落とされる。

水面は水飛沫を叩き上げ、ベレラフアスラの身体は一気に湖底へと沈む。

あの鎧を来てからというもののキリヤの身体能力は原型を留めなほほど上がっている。今のベレラフアスラではついていけないほどだ。

(ボーヤが素の身体能力と技術を鍛えていたのはこのため……っ！)

いくら差があろうとも進<sup>レベルアップ</sup>化し続けられれば必ず同等、それ以上になることが出来る。聞いたこともない魔法だが、キリヤの師とやらはそれを見越して育てていたのだ。

先ほどから受けている攻撃も常人の魔道士なら木っ端微塵も良いところの威力を誇っている。どんな環境で育てたかは分からないがキリヤの師匠はさぞかし鼻が高いことだろう。

(敵ながら天晴れ、そう言うしかないわね……)

ともあれ訓練しているとは言え、いつまでも水中にいては呼吸が持たない。

底を蹴って上がろうとするが——湖が二つに割れた。

「よう、元気か？」

「フフ、すこぶって元気よ」

水すらも容易く両断し、キリヤはベレラフアスラの前に両手を構えて立っていた。

軽い問答。直後、両手の掌底打ちがベレラフアスラの腹部を捉えて吹き飛ばし、再び火山へ戻ったかと思えばその身は山へ打ち付けられ巨大なクレーターを生み出す。

丁度二十秒だろうか、キリヤの宣言通りにベレラフアスラは倒れて

しまっている。

(ほんつとうに久しぶりだわ……この感覚)

スピード王国で軍に入り、毎日あまりにも過酷な訓練の日々を思い出す。

いつ死んでもおかしくない。死んだところで烏の餌にしかならぬ無価値な死。

痛みは嫌っていたのにいつしか慣れてしまい、今では好み、何より死に方を自分で選ぶために強くなって気付けば〈七剣総統〉にまで上り詰めていた。

戦いはいつしか快楽を得るための作業になっていたが——この命が削れる感覚。

久方振りに好敵手に出会えたこの高揚、自分も全てを見せたくなくなってきた。

自らの感情に抗う必要はないのだから——

「ボーヤは充分に殴ってくれたから——今度は私が”本気”……出してもイイわよねえ？」

◎

その言葉だけで空気が一変する。

身に纏う魔力は今までとは別格の凍てついたものとなり、ふざけた態度は消え——〈七剣総統〉としての真の姿を見せる。

そしてベレラファスラは自らの右手人差し指に嵌められた指輪を外せば——魔力が全身から噴き出す。

「な——ッ！」

(な、何だこの魔力量……っ!! さっきまでと比べものにならねえ……ッ!!)

今までのキリヤの優勢は全て否定される。

全てベレラファスラの手の上で転がされていたようで、まるで今までは遊びの延長だったようで——

「ボーヤ、私達スピード王国の人間は十五になれば強制的に軍に入れられる。そこで一定以上訓練し、技術を手に居れ力を手に入れたら次はどうやって強くなると思う……?」

「……？」

「魔道具によって魔力を極限にまで抑え込まれ封印されるの。自らに枷をし、そしてそのまま戦場へ駆り出される」

「……そんなことしたら死ぬじゃねえか」

「普通は、ね。でも稀に自ら生き残るために人間の生存本能は身体に語りかけ、限界を超えて新たな魔力の器を創り出す——それが  
セカンドフラスト  
第二の心臓」

つまり今までのベレラファスラの魔力量は極限にまで抑えた状態だったということ。

加えて今抑えていた分と第二の心臓分セカンドフラストを合わせればいくら進化したといえどキリヤの魔力量では——到底叶わない。

「さあ——第二ラウンドと行きましようか」

棍棒を手に戻したベレラファスラはゆっくりと片手を挙げる——

## 17話 「オレが決めたことだから」

(格段に魔力が上がるうが関係——)

「あるわよ。だって、この世界は何を言っても結局魔力が全てなんだから——ねッ!!」

「ッ!」

踏み出そうとした瞬間、キリヤの腹部、右足、右胸に目にも留まらぬ速度で何か当たった。しかもとんでもない威力であり、鎧など何の意味もなくキリヤはそのまま前のめりに転倒する。

「ボーヤは二十秒って言ったけど、私は二秒で倒せちゃったわね」

「ぐ……っ!」

ベレラフアスラの手持たれていたのはいくつもの岩片。

指で弾いたか投げたか、ともかくそれだけなのにもはやその速度は目に捉えることすら出来なかった。

鎧も輝ヒビが刻まれいつ砕け散ってもおかしくない。

余裕など最初からなかったがこうも押し返されてしまえばキリヤも言葉を失う。

「さて、次はどんな進化をするのかしら? ……それとも、もう限界?」

ベレラフアスラの言葉は的を射ていた。

実のところキリヤはすでに進化の限界を迎えている。

魔導書を授与され、メレオレオナと共に半年間修行を続けたが何故か身体進化魔法は“強化レベル2・ガイガーアツク鎧旋”で止まってしまふのだ。

魔力は吸収出来る、だが進化は出来ない。その原因が分からず結局気付けば入団試験の日になっていた。

つまりキリヤにはもう手立てがない。

すでに第二の魔力量など出されてしまうなど想定外にも程がある。

「……? まさかもう手立てがない、とか言わないわよね? ま、それはそれで残念だけど仕方ないか。ボーヤは私相手によく戦った、最期にそう褒めてあげる」

諦めをどこか悟ったのかベレラフアスラはゆっくりとキリヤに手



を翳す。

キリヤはその言葉に対し――

「誰が諦めるって言った……ッ!!」

メレオレオナの言葉、そして魔力がなくても諦めないアスタ。

二つとも知っているのに何故諦めるなど発想が出てくるのか。想定外だって魔法騎士団の戦闘は想定外の連続だとメレオレオナは言っていた。

それに――

「オマエには家族<sup>ソル</sup>を傷つけた落とし前を取って貰わないとな……ッ!!」

「……本当に根性だけは一人前ねボーヤ」

構えるキリヤにベレラフアスラは一際笑みを深める。

だったら、そう言つてベレラフアスラの構えられた手をキリヤに向けられず、あらぬ方向へと向けられる。

「だったら――あの小猫ちゃんから消した方が心折れるかな?」

「っ!!」

ベレラフアスラが見ている方角、そこにはソルが倒れたままでありすでにベレラフアスラの魔導書はすでに輝きを放っていた。

――本気だ。

そう思つた瞬間にキリヤはベレラフアスラに背を向け、ソルの元に駆け出していた。

「家族だから、やっぱりそうすると思つた」

「岩石創成魔法”<sup>がんがっほうそう</sup>岩穿砲槍”。

岩で形成された大砲が出たかと思えばその砲口は火を噴き、中から螺旋状に捻り曲がつた矛先を持つ巨木ほどの太さを持った岩の槍が撃ち放たれる。

威力など知つたことではない。ただ間に合え、その気持ちでキリヤは魔力を最大限に放出しソルの前に辿り着くとその身体を抱きしめる。

直後、キリヤの身体は今まで感じたこともないほどの激痛と共に強烈な浮遊感が襲い掛かる――

◎

「……うん」

一瞬意識を失っていたキリヤ。

しかし気を失いながらも自らがソルの下敷きになっており、ソル自身に新たな傷は見られない。

とにかく安堵の息を吐くが同時に背中の痛みに襲われる。

「いてて……めちゃくちゃな威力だな」

視界も鮮明になっていることから兜が砕けていることが分かり、背中に伝わるのは灼熱。

キリヤから直線上の床は抉れており血の痕も凄まじい。恐らくこの灼熱感<sup>てい</sup>は出血のせいだろう。

すでに鎧が鎧の体を成<sup>てい</sup>していない——と上体を起こしたキリヤはようやく背後にある大きな影に気付く。

「アレは……宝箱か？」

見つけたのはキリヤの身長よりも遥かに大きい宝箱。

嚴重に錠が施<sup>てい</sup>されていて恐らくキリヤが手に入れた鍵はここで使うのかと思っていれば——

『……っ！』

何か、いた。

宝箱の背後からキリヤのいる方をちらちらとこちらを見てくる黒い何か。

しかも夥しい数<sup>た</sup>がいて、キリヤは疑問符を浮かべる。

「えつと……何か用だったら出てきたら？ 別に危害加えるつもりないし」

いっベルラフアスラが追いついてくるか分からない状況だがキリヤは手招きしてみる。

するとおぼおぼと宝箱の後ろから顔を出したのは——黒い兎。

大ききにして拳三個程度。しかも二足歩行で顔というか全体的に絵で描いた感が強く、野生の兎とは全く違うように見える。

差別化として今キリヤの目の前にいるウサギとして、一匹がよちよちと寄って来るなりいきなり頭を下げてくる。

『ゴメンナサイっ!』

「おう? いきなり謝られても意味分かんないけど……」

『こんなハズじゃなかったんだ。ただ、楽しんで貰いたくテ……』

「話が見えん……って、ああ! オマエらアレか! ブローチから出てきてシイナ攫った中の一匹か!」

唐突に思い出したキリヤの言葉にウサギは頷く。

酷く申し訳なさそうな表情をするのでキリヤもどことなく責められなくなり、

「なあ、別に怒ってないからシイナ返してくれよ」

『ゴメンナサイ、無理なんだ。アトラクションを全部クリアしないと……』

「それもそつか。で、シイナは無事?」

キリヤの問いにウサギは大きく頷く。

ウサギが後ろにいるウサギ達に何かサインを送れば宝箱の近くに急に映像が映し出され、そこにシイナはいた。

「お、シイナ」

『っ! キリヤさん!? 無事でしたか!』

ウサギ達にもてなしを受けていたように優雅に紅茶でも飲んでいたシイナは映像越しにキリヤと目が合い、焦った様子で心配する表情を見せてくる。

「正直全然無事じゃねえな、あはは!」

『あはは!』じゃないです! 状況はどうなっていますか? 私の方は何を言ってもここから出してくれなくて——』

「うんそれは聞いた。こっちはスペード王国のへ七剣総統って言われるベレラファスラと戦ってる。ソルは見ての通りダウンしちまってる」

『ベレラファスラ……クローバー王国との戦時に魔法騎士団に相当な痛手を与えた狂人です。私のことはいいですからすぐにここを抜けて一度団長へ相談を——』

「いや、それはダメだ」

『どうしてですか!』

シイナの冷静な判断にキリヤは首を横に振るう。

「シイナをそこから出せてない。ソルの仇を討ってない。何より——  
まだアトラクション一個残ってるからな」

『そんなこと言ってる場合ですか!!』

この頃怒られること多いなーなんて気楽に思いながらキリヤは近くにいたウサギに『消して消して』と手でサイン。

ウサギも『いいのかな』と思いつながらとにかくシイナとの連絡を切ってしまった。

「……………絶対後で怒られるな」

まあそうなれば甘んじて怒られよう、キリヤはとりあえず一旦シイナのことには忘れておくことにする。

傷も痛むし後で怒られるの確定だし散々だなと思っているとキリヤの表情をウサギが眺めてくる。

「ん?」

『どうして、そんな目に遭ってまだ楽しもうとしてくれているノ……?』

確かに一見傷だらけで散々な目に遭っているように見えるがそれは違う。

キリヤは訝しげな目で見つめてくるウサギの頭に手を置く。

「これはオレやアッチが勝手に戦って出来た傷だからオマエらが気にする必要はねえよ。それにオマエらはここを本当に楽しんで貰うために気遣ってくれてたじゃねえか」

クラツカー銃を用いてのシューティングゲームの際、危うく転落しかけた時にキリヤはエネミーに助けられた。

その他のアトラクションも心から楽しんで貰いたいためにどれも細心の注意を支払われていて、だからこそキリヤも本心から楽しんで言える。

「オレはこういう遊びって初めてでさ、すっげえワクワクした! ココってオマエらが建てたのか?」

『ううん、ココはボク達のマスターが建てたんダ』

「だったらそのマスターってヤツは天才だな!」

これだけの遊びを提供出来るのだ。きつと娯楽の天才なのだろう。そう思いキリヤは褒めたつもりだったが——ウサギ達は何故か涙を流し始めてしまった。

「え、ええ？ 何で泣いてんだオマエら！」

『初めテ……初めて楽しめたって言って貰えテ……純粹に楽しんで貰いたいってマスターの願いが叶つテ……』

『アノ女のヒトが来てからマスターの夢ガ……壊されていくみたいデ、ボク達ずつと怖くテ……安心したらこうなつテ……』

ウサギ達の涙を見て、キリヤの拳はいつしか握り締められていた。ただ遊んで貰いたい。ただ楽しんで貰いたい。それだけだったのにスピード王国はウサギ達の想いを、マスターの想いを踏み躪った。まだ足下は覚束ないがキリヤはゆつくりと立ち上がる。

「やつぱり許せないよな……というわけで一つやること追加だ。ウサギ達の想いを踏み躪ったアイツをブツ飛ばしてやるよ」

鎧も崩れ、防御力なんて皆無だがキリヤは一点を見上げる。

そこにはベレラフアスラが大斧を構えて立っており、悠然とキリヤとウサギ達を見下ろす。

「まさかまだ生きてるなんてねボーヤ」

「うつせえ、まだ負けたわけじゃねえだろ」

キリヤは一步進み、ウサギ達に向けてソルを指す。

「ソイツ、オレの家族なんだ。後ろに隠してやってくれ」

『う、うん……っ！』

ウサギ達はキリヤの言葉に頷くと四匹ほどウサギが現れてソルの身体を持ち上げ避難させようとする。

しかしそれを狙って——

「目障り」

一言と共に岩の槍がソルやウサギ達に向かって放たれる。

さらに宝箱の裏からウサギ達が現れてソルを守ろうとするがキリヤは飛び出し左腕を突き出す。

「ぐ、ううううううう——ッ!!」

一瞬、左腕が弾け飛ぶかと思うほどの一撃。

だが受け止めきつたおかげでウサギ達にも怪我はなく、キリヤの左腕はだらりとうな垂れる。

「フ、フフフフ……ハハハハハッ！　どうして庇っちゃったのよボーヤ!!」

『ナ、何デ……？　ボク達は精霊だから傷を受けてモ——』

「……そういうわけには行かねえよ」

痛みはしたがついでの思い出したことがあった。

あの時、兎の影の言葉の後確かにキリヤの耳には届いていたのだ――

――

「オマエら『助ケテ』って言ってたじゃねえか……魔法騎士団ってのは助けを求める弱い人達を助けるのが仕事だ。それが例え人間じゃなくとも同じだったの」

それに――

「オレがここにいる限り、手の届く範囲にいるヤツらは死なせねえ……ッ！　オレが決めたからオレはそれを実行するだけだッ!!」

「いつまで続くか見せてもらおうじゃないか!」

降り注ぐ岩の槍、すでに限界を迎えている身体。

しかしキリヤの心は何一つ諦めてはいない――

## 18話「約束」

大魔道士ディオルグはそれは偉大な人間だった。

元々は貧困な村に生まれ、疫病が蔓延したことによって村は全て焼き尽くされ、それでも一人生き延びたディオルグは二度とこのような悲劇を生み出さないために魔法を研究し始めた。

幸いにもディオルグは魔力、才能に恵まれていた。

魔にも愛され、魔道具を次々と開発し、いつしか一人で国力ほどの力を担うようになっていた。

しかし、あまりに出た杭は打たれるもの。

ディオルグは強大な力を持つばかりに多くの国から狙われ、そして自衛のために人を殺めてしまったのだ。

いつしかディオルグはただ恐れられる存在となり、人間は誰もディオルグに関わらなくなった。

ある日、ディオルグは狩りによって死に瀕していた一匹の兎を助ける。

魔に順応した兎は精霊となりサキムニと名付けられ、サキムニは命を救ってくれたディオルグのために献身的に我が身を捧げ続けた。

サキムニはいつしか数を増やし、ディオルグはいつも感じていた孤独から解放されたように失っていた笑顔を取り戻した。

こんな幸せな日々がいつまでも続く、寿命の概念のないサキムニ達はそう思っていた。

だが、如何なる大魔道士でも死期というのは唐突に訪れる。

ディオルグの身体は不治の病に襲われてしまったのだ――

『サキムニ、私はね今まで沢山人を殺め不幸にしてきたんだ最低の人間なんだ』

『そんなことないヨ。マスターはボク達を助けてくれた優しい人』

『きつとそれもまた自らの罪悪感を薄めるための自己満足に過ぎなかったんだよ』

死期を悟り、自らの本音を打ち明けるディオルグ。

救われた身としてサキムニ達は懸命に首を横に振り、その姿にディ

オルグも微笑む。

『私の夢を、聞いてくれるかい?』

サキムニ達は何度も頷く。

『私の夢は誰か一人でも良いから幸せにしたかった……。いっぱい楽しませて、笑わせて、心から喜んで貰いたかった。だから私は人に楽しんで貰うために娯楽施設を作ったんだ。この夢を——キミ達に託していいかい?』

『任せテ、マスター……』

『そして私の夢が果たされたなら——キミ達は自由に生きて欲しい。キミ達は私にとって家族なんだ。だから私はキミ達にも幸せに生きて欲しいんだ』

『うん……』

サキムニ全てが了承すれば最期の力を振り絞ってディオルグは自らの首から下げていたペンダントを一匹のサキムニに手渡す。

受け取れば大事そうに抱きしめ、その姿にディオルグは安堵し天井を見上げる。

『私の我儘を最後まで聞いてくれてありがとう……。出来れば最期に故郷で聞いたあの鐘の音を聴きたかったな……。』

その言葉を最期にディオルグは静かに目を閉じた。

いくら声を掛けても答えてくれず、大魔道士ディオルグの生は——  
終わった。

◎

「結局、ボーヤも大したことなかったわねえ。久しぶりに好敵手が現れたと思っただけ——ボーヤの師匠も大したことないんじゃないかしらア?」

「この野郎レオナ様のことまで……。クソがア!!」

今サキムニの目の前では一人の少年が戦い続けてくれている。

死ぬはずもない精霊であるサキムニを庇い、血を流しながら懸命に守り続けてくれている。

助けて、そう見ず知らずの者から言われただけなのに。

(マスター……この人なら、この人ならきつト……)



岩の槍が雨の如く降り続ける中、僅かな隙間から遠くの景色を眺める。

見えたのはどのアトラクションよりも大きく作られた鐘塔。

何でもデイオルグの故郷である村から離れた場所には豊かな街があり、そこには一日に一度だけ鳴る大きな鐘塔があったらしい。

デイオルグはそれをよく聞きに街の近くまで行っていたらしい。デイオルグにとって鐘の音を聞くことだけが貧困な村で生きる心の糧だったと言っていた。

だから最後のアトラクションはあの鐘塔の鐘を鳴らすことがクリアとなる。

鐘の音を鳴らすことはデイオルグにとって最大の供養となり、そして全てのアトラクションが終了する。

だがそれは同時に――

『……………』

一匹のサキムニが他のサキムニを見ればすでに全員が同じ気持ちのようだった。

言わずとも領き、異論を唱える者などいるはずもない。

だったら、迷うこともない。一匹のサキムニが走り出せば一斉にキリヤの背中に向かって勢い良く飛び込んだ――

◎

「うお……………?!」

急に背後から何かが飛び込んできたかと思えば後ろにいたウサギ達だった。

一体どうしたのか。何か気に食わないことでもあったのか。

しかし今は戦闘中。今も岩の槍は降り注いでいて一瞬でも気を抜けば――

『大丈夫、新たなご主人！ ボク達も、守りたいんだ!!』

「新たなご主人って――」

言葉の意味も分からず、しかし岩の槍が眼前に迫る。

しまった。そう思ったが――岩の槍はキリヤの少し前で全て砕け散り、キリヤには何一つ届かない。

「何ですって……っ!？」

「コレは……」

手を差し出したキリヤの前には大質量の魔力がまるでオーロラのように揺らめく。

こんな魔力、キリヤは見たことがなくさらにキリヤの魔導書グリモワールはより一層輝きを見せる。

「新しい……魔法……」

どれだけ身を鍛えても、メレオレオナと戦っても、現れなかった新たな魔法。

小さな魔導書に刻まれた新たなページを見ればキリヤは酷く納得してしまった。

(なるほど、だからオレの魔法は一つだったのか)

身体進化魔法は相手の魔力を利用して自らを無限に進化して強くなる、ずっとそう思っていた。

だが違った。あくまで“強化レベル2:ガイガーアップ鎧旋”までは進化のきっかけに過ぎないのだ。

進化というのは環境に適應するためにするもの。だからキリヤは自らの魔力では進化出来ない。

『ボク達の名前はサクムニ。さあ、ボク達の名前を呼んで——』

キリヤの魔導書はキリヤ自身の鍛練を求めていたのではない。

多くの者と触れ合い絆を紡ぐことによって力を鎧に付与し、さらに進化していく鍵とする。それが二つ目の魔法。

突如として溢れ出た魔力量にベレラフアスラは驚きを隠せなかった。

「バカな！　こんな魔力、もうボーヤには——」

「嘗めたこと言っつてんじゃねえぞ、〈七剣総統〉さんよオ!!」

全身も傷だらけで目の前すらも朧げに映る視界。

一見すればそんな者に何が出来るのか、いや何も出来るはずがない。

だがキリヤは拳を握り締め、こちらを見下すベレラフアスラを睨みつけて叫ぶ。

「オレがテメエを許せない理由は四つある!! 一つ目はオレの家族を侮辱したこと!! 二つ目はマスターの夢をブツ壊そうとしたこと!! 三つ目は自分勝手にウサギ達を傷つけたこと!! そして何より四つ目エ!!」

どれだけ身体が傷だらけになろうとも拳の一つあれば敵を討ち取れる——ッ!!

「——オマ工程度がオレが惚れた女様以上なわけあるかアアアアアアアアアアアア!! 行くぜサキムニ!! オレに力を貸してくれ!!」

溢れ出た魔力が全てキリヤの身体に収められる。

未だかつてないほど眩い光を放ち、崩れた鎧はキリヤが受けた傷の回復と共に新たな形へと進化していく——

「身体進化魔法」レベル3・ビビッドアーモアルナフ 兎々戦の鉄鎧!!」

光を裂いて飛び出したキリヤの鎧は凄まじい変貌を遂げていた。

線の細い形となった鎧。兜の額にはV字のウサギの耳を模した裝飾が成され、魔力が帯となって首元から伸びて風に靡く。

「まさか、あのウサギ達こそ大魔道士が遺した魔法だったというの……?」

「ゴチャゴチャうっせえ!!」

地を押し込む足はまるでバネの如き伸縮性を発揮し、キリヤの姿はもはや消える。

肉薄したキリヤにベレラフアスラは大斧を振るうがあれだけ重かったと思つた一撃も今では——

「軽いんだよ!!」

籠手に触れた傍から岩石の刃は砕け、中の棍棒を肩脇に挟めば手刀を落とす。

手刀を受けた棍棒は真っ二つにへし砕かれ、得物を失つたベレラフアスラの胴部に目にも留まらぬ速度で拳の連撃が叩き込まれる。

「ぐ、がは……ッ!」

この時初めてベレラフアスラはまともに膝をつき、口端から零れた血を拭う。

明らかかな焦りと狼狽。睨み付けてくるベレラフアスラにキリヤは



ベレラフアスラが飛んだ先、そこにあっただのは——大きな鐘塔。寸分違わず巨大な鐘に叩きつけられたベレラフアスラ。身体はそのまま地面に向けて落ち、まるで勝敗を決めるゴングの如く鐘は大きく、はつきりと響き渡る。

瞬間、キリヤの目の前には『アトラクシオンオールクリア』の文字が現れ、最後の鍵を受け取る。

「ハハ！ 何だか分からねえけどクリアには持って来いだな！」

唐突に風景が夜になったかと思えばクラツカーの音がいくつも響き、空には火花……花火と言ったか。とにかく夜空を美しく彩る。

『マスター……マスターの願いは全部叶ったヨ……』

いつまでも鳴り止まない鐘の音にキリヤの肩に乗ったサキムニは誰にも聞こえないような小さな声で、そう呟いた——

## 19話 「魔宮踏破」

「何故私の言うことを聞いてくれなかったのですか!! 勝てたから良いもののあのままでは——って聞いてるんですか!?!」

『ご主人ありがトー』『ありがトー』『りがトー』『がトー』『トー』『トー』

「おう分かったからオマエらそんなに引っ付くなって……で、シイナは何て? 全然聞こえねえや」

戦いが終わり再び宝箱がある位置まで戻ってきていたキリヤは沢山のサキムニに絡まれていた。

わらわら群がるサキムニ達の相手をしながらキリヤは出てきたシイナの方を見る。

シイナはこれ以上言っても無駄かと溜息を吐き、

「ありがとうございますと言ったって言ったんです!」

「そっか、別に大したことじゃねえから気にすんな」

実のところシイナはキリヤから映像を切られたもののサキムニに頼んで全てを見ていた。

あの〈七剣総統〉相手にも怯まず、サキムニ達を守り、そして勝った。

傷は塞がっているものの血に塗れ、戦闘で破れた衣服から垣間見える鍛えられた肉体。何も知らない貴族や王族が見ればきつと泥臭いや見苦しいと言っただろう。

でも、キリヤの姿を傍で見ていたシイナは——

「……格好良いと、思いましたよ」

「……ん? 何か言ったか? さっきからサキムニ達がまとわり付いてマジで全然聞こえねえ……」

見ればいつの間にかキリヤの姿がろくに見えないほどサキムニ達が引っ付いていてまるで巨大な毛玉状態になってしまっていた。

ともあれ、今の言葉は別に聞いて欲しいと思った言葉ではないので。

「キリヤさん、そろそろあの宝箱を開けませんかーっ!」

いつまでも魔宮ダンジョンに留まっっていては危険だと思い、大きな声で提案

するとこれは聞こえたのか「おう」と返事が返ってくる。

「よし、ちよつと離れてくれサキムニ」

言えばすぐに離れたサキムニ達。

サキムニ達が離れるとキリヤの手には沢山の鍵が握られており、

「開けるか！」

◎

アトラクションだけではなく戦闘のせいで酷く疲れた身体だが、こういう箱を開けるのは楽しみで仕方がない。

キリヤはうきうきした気分で鍵を――

「つて、どれがどれの鍵なんだ……？」

シイナがズツコケた。

しかしこれだけ施錠されていて、キリヤが手に持っているのは十数個の鍵があるのだから仕方がない。

色と形もそれぞれ別々で消去法で行くしかないのかと思えばサキムニ達が、

『ご主人、開けるの手伝ウ』『ウー』

「ありがとな」

宝箱の全ての鍵を把握しているサキムニ達に錠を外して貰えば今度こそ宝箱と対面。

その大きな宝箱に期待で胸を膨らませながら開けると――

『『新しいご主人ダー!!』『』』

めちやくちやサキムニ達が飛び出してきた。

「ちよ、おま、増えすぎー！」

ただでさえ多いと思つたサキムニがさらに増えた。

喜んでいるのか新しく出てきたサキムニ達はキリヤを胴上げし始め、ちよいちよいと一旦止めて貰う。

下ろして貰うとキリヤはしばし考え、

「もしかして宝ってオマエらのことだったのか？」

ベレラフアスラも確かそんなことを言っていた気がする。

問いかけるとサキムニの何体かがうんうんと頷き、

『魔道具もいっぱいあるけど、マスターはボク達皆が一番の宝物だつ

て言つてタ』

『マスターはボク達にいっぱい魔法を教えてください。攻撃魔法だつて回復魔法だつて使えるヨ』

「すごいですね、これだけの数がいればそれこそ一国の軍にも勝る兵力じゃないですか」

シイナはあたり一面にいるサキム二達を見て思わずそう呟く。

だがキリヤにはサキム二達は結局ウサギにしか見え、よく見れば顔も微妙に違い個体差があると知ったがそれだけだ。しかし、回復魔法が使えるということは――

「なあオレの仲間がさ怪我してんだけど治せるか？」

『うんー！』

キリヤがそう言うとサキム二の何匹かがソルへと近付いて回復魔法で治療し始める。

命に別状はないにせよ傷は傷。治しておくのが最善。

と、なると次は――

「遠くに飛んだベルラフアスラの拘束も出来るか？ 出来れば魔導書も没収しといてくれ」

『了解っ！』

敬礼して何十匹がベルラフアスラが飛んでいった鐘塔の方へ走り出す。

するとすぐに拘束魔法で雁字搦めにされたベルラフアスラが運ばれてくる。驚くべき仕事の早さ。ベルラフアスラが気絶しているからこそもあるがそもそもサキム二達の能力が相当高いように思える。

「てゆうか何でオレ『ご主人』って呼ばれてるんだ？」

『さつき契約したカラ！ 魔導書グリモワール見テ！』

言われるがまま魔導書を見てみると確かに新しい魔法があり、鎧を解除した今も魔法発動の証として文字が光っている。先ほどは自らの鎧に付与する形で使ったがどうにもそれだけではないようで――

「うおっ!？」

一旦魔法を止めてみるとサキム二達が一齐に消える。

あれだけいたのに消えてしまって、しかしソルへの回復魔法やベル



ラファスラへの拘束魔法は消えていない。

となればキリヤはもう一度その魔法を発動するとサキム二達が飛び出す。

「マジだ。……てゆうかもしかしてオマエらって独立した魔力持っているの?」

キリヤの率直な問いにサキム二達は頷く。

つまりキリヤの魔法はサキム二達を呼び出す召喚魔法というだけでそこからはサキム二達が独自に持つ魔力で活動するようだ。

「オマエら超スゲエな! これからよろしく!」

『よろしくご主人!』

「わーっいっぱいいくんなー!」

キリヤと拳を合わせようとサキム二達は大勢押し寄せてきてまたキリヤは大きな毛玉状態となる。

何とかサキム二達の気を済ませてもらおうと先ほどから気になる残りの宝箱の中身を覗き込む。

「おいシイナ、何かいっぱいあるから見に来いよ」

「は、はい」

シイナもサキム二達に支えられ、キリヤと同じように宝箱の中身を覗き込む。

中にあつたのは明らかに外側の箱よりも広い空間だった。恐らく空間魔法を施し中を広めていたのだろう。

キリヤが先に飛び込み、シイナも後に続く数多くの黄金、何よりも多くの魔道具が見える。

「スツゲエ、こんなにも貯めこんでいたのか」

「キリヤさん、魔道具にどんな能力があるか分かりませんから無闇に触ったりしちゃダメですよ」

「……………え?」

シイナが辺りを見渡しながら言っているとキリヤから素っ頓狂な声が響く。

すでにキリヤは手近にあつたやけに黒ずんだ拳銃らしきものを手に取っていて、

「な、何してるんですかキリヤさん！ そんなばつちいもの離してください!!」

「ぼつちいっておま、待て分かったから!」

と、手放そうとした瞬間——キリヤの魔導書グリモワールが勝手に開いてしまふ。

何が起こっているのか止めようにも先に魔導書が拳銃を飲み込んでしまった。

「…………あ」

二人揃って顔を見合わせる。

キリヤが魔導書を開けてみれば三ページ目にはしつかり新しい魔法が刻まれており、試しに魔法を発動してみるとキリヤの手には先ほどの拳銃が。

「…………シイナ、これ内緒な?」

「…………そうしておきましょう」

使い道はまるで分からないがもし保護しなければならぬ超貴重魔道具だったらと思えば二人はとりあえず隠蔽する道を選んだ。

だがこの時、キリヤもシイナも気付いていない。

キリヤが持つ魔導書グリモワールの表紙に描かれていた三つ葉のクローバーに葉が二枚増えていたことに——

◎

「…………ん、……は…………」

目を覚ませばソルは浮遊感と共に自らの足で歩かずに移動していることに気付く。

誰かに背負われている、そう思えばすぐにソルは目を見開いて一気に意識が覚醒する。

「あ、オマエ…………っ!!」

「よう目が覚めたみてえだな」

ソルはキリヤに背負われていて暴れようとするがその前に色々なものが目に入った。

まずはキリヤの傍には沢山のウサギ。何なのかまるで分からないが次に見えたシイナがいることでキリヤが全てのアトラクションを

クリアしたことが明らかになる。

後ろを振り向けばウサギ達が大きな宝箱を運んでいて恐らくあれこそが眠っていた秘宝。

「魔宮は、<sup>ダンジョン</sup>魔宮はどうなったんだ……?」

周りの景色はテーマパークではなく、眼下に広がるのは魔宮に入る前に見えた森林。

キリヤはその問いを聞くとウサギが一匹ペンダントをソルへ見せる。

シイナや自分達を魔宮に引きずり込んだペンダントだと思えば特徴的な宝石はすでに割れて砕け散っていた。

「あの魔宮はコイツらのマスターの夢だったんだ。その夢を果たし、役目を終えたから消えちまったよ」

「そうか……って、あの〈七剣総統〉は!?!」

そうだ。ソルが気を失ったのも現れた〈七剣総統〉のせいだ。

キリヤが自分の目の前に立ち、その後ろに気絶したがあの後一体どうなったのか。

またキリヤが何かとウサギに言うとうサギ達が運んでいたものがソルの視界に入る。

「っ!」

そこには〈七剣総統〉が倒れており、拘束魔法で雁字搦めにされていたのだ。

自分では手も足も出なかった相手。なのに――

「ま、まさかオマエが勝ったのか……?」

「おう。まあサキム二達の協力あってだけだな」

『そんなことない。ご主人、強かつタ!』

一匹に合わせてウサギ――サキム二達は口々に強かつタ強かつタと騒ぎ立てる。

過程はどうであれキリヤはたった一人で魔宮を攻略し、自分が勝てなかった〈七剣総統〉にまで勝ってしまった。

恐らく相当苦戦したんだろう。上半身なんてほとんど裸も同然だ。

無駄に遅しくて、どれだけ鍛えればこうなるのか。今までソルが見

た貧相な身体で軟弱な男とは違って見えてしまった。

「……………ありがとう」

キリヤには絶対聞こえないように小さな声で。

少しだけキリヤに掴まる力を強めながらソルは呟いた。

そして――

「……………認めてやる」

「ん？」

「認めてやるって言ってるんだ！」

「きゅ、急に元気になったな……………」

こちらの表情が見えないように振り向こうとするキリヤの顔を押し退けてソルは声を張る。

唐突なことに何のことか分からない様子のキリヤだが構わない。

「これからも姐さんのために励めよ……………っ！」

「ハハ、了解了解」

「笑うな！」

ビシビシとキリヤの頭を叩いたところでこんなものどうってことないのかキリヤは笑い続ける。つられてシィナも口元に手を当てて上品に笑いだす。

『やめテーご主人に暴力振らないデー』

「うわっ！ 何かいっぱい集ってきたっ！」

叩いていると後ろに続いていたサキムニ達が一斉に集まってきたソルを包み込んで傍から見れば毛玉状態に。

「オイオイ、オマエら一体ずっは軽いけど集まれば重いつて！」

結果キリヤも不安定になり、危うく落ちそうになってしまう。

その流れにいつの間にかソルも笑っていて、サキムニが集まったせいか少しだけ顔に熱を感じていた――

### 第3章く戦功叙勲式編く

#### 20話「いざ戦功叙勲式へ！」

「なるほど、そんなことがあったのか」

ベレラファスラの身柄や保護した宝の献上を魔法帝直属の部下にし終え、へ碧の野薔薇へ拠点に戻ってきたキリヤは早速今回の任務の報告をした。

全ての報告を受けたシャーロットは頷くと、キリヤは何故か嘆き始める。

「せっかく姫様に貰った兜……砕かれてオレめちやくちやショックです」

「あげたつもりはどこにもない。貴様が勝手に取って被っていただけだろう」

ベレラファスラとの戦闘で見事に砕けた兜のことを引き摺っていたのか、キリヤはさりげなくシャーロットが今被っている兜を取ろうとする。

だが今回はそれを読んでいたのかシャーロットの手で頭を押さえられ止められてしまう。

新しい兜もゲット出来ず、落ち込む様子を見せるキリヤだが――  
「……………よくやった」

代わりにシャーロットがキリヤの頭を撫でたのだ。

その光景にキリヤどころかへ碧の野薔薇へ団員全員が啞然とした。あの数多の男が触れようとしても触れられぬ、自らは触れようともしないシャーロットが――男に自ら触れて撫でた。

前代未聞の出来事に度肝を抜かれる一同。

いつも騒がしいキリヤだが一瞬呆気に取られるとすぐに――

「姫様！ オレもつと頑張ります!!」

あろうことかシャーロットに抱擁した。

度肝を抜かれっぱなしの女魔道士達だったがこれには嫉妬どころの目線ではない。

ソルもすぐに飛び出そうとするがキリヤの身体はシャーロットの  
荊の波に飲み込まれる。

「あまり調子に乗るな」

「ごめんなさいっ！」

『ご主人くっ!!』

すでに“強化<sup>レベル2・ガイガーアップ</sup>鎧旋”状態のキリヤは床に倒れていて、サキムニ  
達が次々と魔導書から出てくる。というよりキリヤ自身魔法を起動  
した覚えもないのに自動で発動する節がある。

「何あのちっちゃいウサギ……可愛いっ！」

女魔道士一人の言葉から嫉妬はいきなりサキムニ可愛いムードに。  
いっぱい出てくるので一人一体抱きかかえられるので拠点内はも  
はや動物とのふれあいコーナーと化す。

掃除や力仕事などし始めるサキムニ達に女魔道士から「もう雑用の  
男達いらなくなあい？」とか聞こえてくるがやめてあげて欲しい。

とにかく、サキムニを見たシャーロットもこれには少し驚いた様子  
を見せる。

「これが魔宮<sup>ダンジョン</sup>で手に入れた精霊魔法か」

「そ、そうっス……何だか懐かれて今ではこの子達の主人やってます  
……」

今の一撃は体感ベルラフアスラよりも強かった気がするがキリヤ  
は鎧姿のまま立ち上がる。

「待てキリヤスフィール、まだ話は終わっていない」

するとまだシャーロットの話は終わっていないようで、キリヤも怪  
訝そうに振り向く。

「キリヤスフィール、今回へ七剣総統<sup>ダンジョン</sup>を討ち取り魔宮の踏破。その  
他の功績から魔法帝から下級に留めておくにはあまりに惜しいと急  
遽貴様の昇格が決まった」

「いえーいっ！ って、何ですかそれ？」

「分かってたしもう！」

相変わらずキレのある叩きでソルからツツコミを入れられるキリ  
ヤ。

ツッコミを入れられようとも結局分からないものは分からないので説明を求めるとソルが、

「あのな、魔法騎士には実力を示す“等級”ってのがあるんだ。等級は魔法帝をトップに大魔法騎士、上級魔法騎士、中級魔法騎士、下級魔法騎士って大きく五つに分けられてて、その中でもさらに一等から五等まで分けられてるんだ」

「へえー」

「まあせいぜい言っても四等中級魔法騎士ぐらいだろ。姐さん、どんなもんっスか？」

「五等上級魔法騎士だ」

「……………え？」

ソルを筆頭に〈碧の野薔薇〉の女魔道士全員の目が点になる。

キリヤはそのすごさが分からないので『まあまあなところ？』と言った様子を見せるが周りにとってはそれどころではない。

「な、何かの間違い……………ですよね姐さん……………」

あまりにもうろたえた表情を見せるソル。多分、あの様子だとキリヤはソルを超えてしまったか。

現実逃避しそうな勢いのソルにシャーロットは端的に、

「すでに敵国のトップを討ち倒せる実力。さらに短期間で得た功績の全てが加味された結果、上級魔法騎士が妥当だと魔法帝も判断したのだ」

「ソル……………例え立場が違ってもオレは気にしないぞ」

「むっかーっ!!」

あまりにも桁外れな出世が出来たようでキリヤはソルの肩に手を置いて親指を立てるがそれが逆鱗に触れてしまったようだ。ソルは腰に腕を回し、鯖折りしてくる。

「はっはっはー！ 軽い軽い！」

だがベルラフアスラにされた鯖折りに比べれば軽いもので反対に笑いながら抱きしめ返してやる。

「なッ！ っ、この……………」

てつきり殴られるかと思えばソルはキリヤから離れると手の甲で

口元を隠してキリヤから目を逸らす。

いつもの勢いはどこへやら、急にしおらしくなるソルにキリヤは首を傾げる。

「どうした？」

「うっさい!!」

やっぱり殴られた。

だが鎧は着たままなのでこの程度では効くはずもない。

むしろソルの拳の方が痛んだように蹲りながら拳を空いた手で押さえてしまっている。

「とにかく、戦功叙勲式は八日後だ。くれぐれも問題は起こすな」

「はい」

シャーロットは騒がしいソルとキリヤを放置して伝えることだけ伝えると踵を返し行ってしまおう。

鎧を解除するとキリヤはその隣について行き、

「姫様！ オレこれからオフなんで城下町に遊びに行きましょうよ！」

「貴様がオフだとしても私には団長として仕事がある」

「えー、姫様にもブラックマーケット聞 市 見せたかったですけど」

「……それは摘発しろということなのか？」

シャーロットの言葉の意味が分からず、キリヤは首を傾げるばかりだった――

◎

八日後、キリヤは王都へやってきていた。

何でも戦功叙勲式は魔法騎士団本部で行われるためにキリヤもサキムニの助力があつて何とか王貴界に辿り着き、そこで偶然にもアスタとノエル、ユノ達へ金色の夜明けダンジョンと出会っていた。

「……へえアスタも魔宮ダンジョンに行ったのか！」

「ああ！ ダイヤモンドのヤツらとも戦つてよ！ 見てくれ一本剣が増えたんだ！」

言つてアスタが自らのグリモワール魔導書から取り出したのは一本の剣。

キリヤが見たことあるのはアスタの身の丈と同じかそれ以上の大



剣。それに比べれば細く短い小回りが利きそうであり、キリヤはほうほうと頷く。

「スゲエな！ 何か両剣使いたい感じでカツコイイな！」

「おうー！ キリヤも……って何かいっぱいいるな」

「ああ、コイツらのことか」

キリヤの周りには相変わらずサキムニ達が沢山引っ付いており、そのうちの一体の両脇を持ってアスタ達へ見せる。

「こう見えて精霊なんだよ。兎精霊サキムニ、魔宮で出会って何だかんだで契約したんだけど一匹で色んな魔法が使える優れモンの精霊なのさ！ 数もスゲエいるし！」

「スツゲエ！ でも何かその持つてるヤツ小憎たらしいカオしてんだけどー！」

『……………』

サキムニは一万匹を超えるほどいるのだがそれぞれ個体によって微妙に表情が違う。

偶然キリヤが抱えたのは小憎たらしい顔をしたサキムニだったが、その表情にノエルはというと――

「ちよ、ちよつと貸しなさいよ」

「え？ まあイイですけど……」

両手を差し出してくるのでとりあえずサキムニをノエルへ手渡す。手渡されるとすぐにノエルはサキムニを大切に胸に抱える。

「……シルヴァンタスシュナウザー」

「……………え？」

「このコの名前よ！ し、仕方なく私が飼ってあげてもイイわよ！」  
「いやいやいや！ その子もサキムニですから！ というかあげませんからね!!」

「何よイイじゃない！ すごい数いるんでしょ!?!」

「オレの魔法だから……って、割とアリか……?」

『……………』

あつ、とノエルが言ううちにノエルの元にいたサキムニはキリヤの元に帰ってきて、どうにもサキムニ的にアウトだったらしい。

露骨に残念そうになるノエルに申し訳なく思うとアスタは首を傾げる。

「てゆーか何でキリヤはここにいるんだ？」

「ん？ そりゃ魔法騎士団本部に戦功叙勲式で呼ばれたからだよ。オレ何かと成果挙げたから……でもさ、今寝坊してよ」

「ええ!? だったら急いだ方がいいんじゃないか!？」

「でもさ、絶対姫様怒るじゃん？ 寝坊するなつてめちやくちや念押しされて尚寝坊したから怖いじゃん？ ソルってヤツもいるからオレに味方いいえし」

「自業自得じゃない」

ノエルにはつきりと言われてしまいがサキムニは『ボク達のご主人の味方だヨ』と寄って来てくれる。

何て可愛いヤツらなのだとかキリヤはサキムニ達の頭を撫でてやっているユノの傍にいた眼鏡を掛けた好青年がキリヤを見て驚く素振りを見せる。

「全ての団に挙手されながらもへ碧の野薔薇へに入り、破竹の勢いで成果を挙げている男がいると聞いていたが……」

「どうも姫様の懐刀のキリヤでーすっ!」

「でもやっぱり寝坊しても早く行くべきだと思っぞ! 謝ったら許してくれるはずだ!」

「いえーいとピースしているところでアスタに正論をぶつけられてしまい、キリヤはうーんとユノの方に顔を向ける。

「な、なあユノ、オマエもそう思うか……?」

「怒られるなら早めの方がいい」

「逃げ道ないよなやつぱり……じゃあとりあえず行ってくるわ!」  
はつきり言われてしまった。

というわけでキリヤはアスタ達に別れを告げると猛烈に急いで走り始める――

◎

「遅れましたーっ!!」

勢い良く魔法騎士団本部で案内された扉を開ければ中にいた人間

全員の視線が集中する。

見たところへ紅蓮の獅子王、へ銀翼の大鷲、へ金色の夜明け、そして——明らかに怒っている雰囲気へ碧の野薔薇、団長シャーロットの姿とソルの姿が見えてしまった。

「……………」

床には絨毯が敷かれていてその絨毯を避けるようにして二手に分かれている。

その奥には恐らく魔法帝が立つだろう壇があり、キリヤは立ち止まって少し考える。

ここでそそくさに行けば遅刻した上に他の団に嘗められることになるのではないかと。

ならば——堂々と間を割って絨毯の上を歩く。

「バカかオマエはっ！」

思っていたがやはりソルからの拳骨。

首根つこを引っ張られ、絨毯の上を引き摺られる。

「あれだけ遅刻するなって姐さんに言われてたくせに！」

「ベッドがオレを愛して離さなかったんだよ……………」

引っ張られへ碧の野薔薇の立ち位置に立たされたキリヤは恐る恐るシャーロットの目を見ると——伏せていた目がキリヤの姿を捉える。

「……………何か言うことはあるか？」

「……………本当にごめんなさい」

「ふん、低俗な…………。へ碧の野薔薇の男はよほど気品に欠いているように見受ける。これもそちらの団長の教育の賜物だろうな」

「……………あ？」

様子を見ていたへ金色の夜明けの一人が不意にそんな言葉を漏らす。

顔立ちは成人そのもの。前髪を後ろに流し鬘のようにしている男性だった。

シャーロットは何も言わず、再び目を伏せるがキリヤは自分の悪口は許せても家族の悪口は許すつもりはない。

口元に指先を当てたキリヤはぷくすくすと笑い、

「器ちっさー」

「何……？」

ただ一言言い返しただけで眉を顰める男性。

構わずキリヤは続ける。

「へ金色の夜明けへって聞いてた以上に器小さいっすよねー。わっざわざ違う団の遅刻に目くじら立てるぐらいですか？　いくら金色でも器が御猪口オチヨコだったら黒色でもおっきな器の方がイイよねえ！　ああ、もしかして団長の教育で器小さくなったんすかぶっぷー！」

「貴様ああああああ！！　へ金色の夜明けへ団をあ最底辺の集団以下下でも言いたいのか！！　ヴァンジャンス様を侮辱するとは万死に値するぞ！！」

「ハッ！！　コッチだって姫様侮辱されたんだからアイコじゃないんすかア!?　毛根根こそぎ抜いてやろうか!!」

軽い挑発にも簡単に乗ってきた相手にキリヤも魔導書グリモワールを見せ、ソルも後ろで「やれやれーっ！」と珍しく乗っているので完全臨戦態勢。

今にも魔法を放ち合うかと思つた瞬間、再び扉が開く――

「おや、どうかしたのかい？」

そこに立っていたのは――魔法帝。

その後ろには恐らく魔法帝に招待されたアスタ達の姿も見えた――

## 21話「オトウトレオン」

「——では、戦功叙勲式を始めよう……ってすごい闘気だね何だか」魔法帝が来たおかげで即座に戦闘とはならなかったものの互いに団長を侮辱されたとしてキリヤと相手のアレクドラ・サンドラーは物言わずとも互いを威圧していた。

だがキリヤの後頭部をシャーロットの荊が叩き、無言の圧力が隣から来たのでキリヤは敵意を抑える。

落ち着いたところで早速魔法帝から功績を讃えられる。

まずは〈紅蓮の獅子王〉からレオポルド・ヴァーミリオン。

星取得数七個。二等中級魔法騎士の称号を授与される。

ヴァーミリオン、その名を聞けばどこなくレオポルドはメレオレオナに似ている気がしてキリヤはふと考える。

(もしかしてメレオレオナ様の弟って二人いるのかな……?)

付き添いをしているもう一人の男性——フェゴレオン・ヴァーミリオンはすでにシャーロットのおかげでメレオレオナの弟だと知っている。名前にレオポルドもメレオレオナの弟なのだろう。

次いでソルの名が呼ばれる。

星取得数六個。三等中級魔法騎士の称号を授与される。

思わず拍手したくなったキリヤだがそれさえもシャーロットにさえ止められてしまい、少しテンションが下がればキリヤの番が訪れる。

「星取得数10。〈碧の野薔薇〉団キリヤスフィール・フィン・ガルガン五等上級魔法騎士の称号を授与！」

キリヤや〈碧の野薔薇〉は事前に聞かされていたが他の団の魔道士は驚きを隠せないでいた。

受けた本人には分からないがここまで一気に上がったのは前代未聞、そんな雰囲気会場に漂う。

魔法帝はこの功績にキリヤを褒める。

「まだ入団して間もないのに流石メレオレオナの弟子ともあつて本当に優秀だね！ 精霊を手に入れてさらに身体進化魔法に磨きがか

かったけどこれからも精進するように！ それと後で魔法見せてくれたら嬉しいな!!」

「うっす！ レオナ様と姫様のために頑張りやすー！」

アレクドラは先ほどのキリヤの態度が気に入らず、今にも異論を唱えてきそうだが魔法帝が相手ともなれば認めざるを得ない。

構わずキリヤは戦功叙勲式を見ていたアスタ達にさりげなく親指を立てると呆気にと取られていたアスタも小さく拳を握って返してくる。

(悪いなアスタ、何だかんだオレの方が幸先イイスタート切ったみてえだ)

それから暫く戦功授与式は続き、終えた頃に魔法帝は台に手を置く。

「さて、これから簡単な席を用意して特別なゲストも呼んでおいたから他の団だとか気にせずたっぷり交流してみてくれ。たまには他の団から何かしらイイ刺激を受けるといいかな、うんそれがいい！」

簡単な席とはどうにも食事会らしく、本来なら断る団が多いと思っただがどうにも全員魔法帝の意思は汲むようだ。

何より特別ゲストとして呼ばれたアスタ達には猛烈に視線が集中していた――

◎

「やっぱキリヤはすげえな！ オレらと同期なのにほとんどのヤツらより階級上になってたし！」

「ハハ！ よしアスタ一緒にメシ食おうえええええ……」

食事会が始まって早速盛り上がりを見せるアスタとキリヤ。

主催者であるはずの魔法帝は始まってすぐに「ちよつと用事があった抜けるよ」なんて行って出て行ってしまったが。食事の場を無下には出来ないようで今いる全ての団が残っている。

早速〈黒の暴牛〉やユノから〈金色の夜明け〉の話を聞こうと思っただのに言葉の途中でキリヤは何かにつっ張られてしまう。

先にあつたのはシャールロットの荊であり、団ごとに適当に分けられた中でも〈碧の野薔薇〉のいるところまで無理矢理戻されてしまう。

何故戻されたのか分からず首を傾げるキリヤにシャーロットは見ることなく、

「ここで大人しくしている」

「えー……」

「姐さんが言うんだからそうしとけって。オマエさつきだってへ金色の夜明け」に喧嘩ふっかけてたし、違う団同士の喧嘩って後が面倒なんだぞー！」

「いやさつきソルだって『やれやれーっ！』って言ってたじゃん……」

「あわゆくば……的な感じ?」

「便乗してるじゃねえか!」

せっかく話せる良い機会だと思っただがどうにもシャーロットは許してくれないようだ。

アスタ達も食事を始めてしまったのを見るとキリヤは仕方なくビュツフェ形式で並べられた食べ物を見る。

「姫様、アレって食えるんですか……?」

視線の先にはテーブルの真ん中には円状の柔らかそうなもの。

肉ばかりを食べてきたキリヤには食べ応えがなさそうに見えるがシャーロットは、

「主食となるパンだ。このような食事の場であれば手掴みをしないためにフォークで切れるように作られている」

「へえー」

「……聞きながら離れるな」

唐突に何か飲み物が欲しくなったキリヤはまたへ碧の野薔薇のテーブルから離れると誰も陣取っていないテーブルがあることに気付く。

そこはどうやら魔法帝が手配した人達が立っており、前には飲み物らしきものが色々と並んでいる。

「何だこの変な色した水?」

「こちらはクローバー王国王貴界にて作られている最高級のワインでございます。よろしければお一ついかがでしょうか?」

「うん貰う! あ、でも三つ欲しいです!」

ワインが何か全く分からないが貰えるのならば貰っておこう。

とりあえずシャーロットやソルの分も貰い、渡されたワインの入ったグラスはキリヤの手元で浮かび上がり続ける。

「便利な魔法だな」

物を微動だにさせずに浮かせられる魔法。見たところ魔法とはまた違うようだがとにかく受け取るとキリヤはいそいそとシャーロット達の元へ戻る。

「姫様、ワインっていうの貰ってきましたー」

「……飲むな」

「ええ!？」

せっかく持ってきたにも関わらずすぐに没収されてしまう。

楽しみにしていたのに奪われ、文句を言いたげな表情を浮かべるキリヤにシャーロットは思わず息を吐く。

「これは酒類だ。未成年である貴様が飲めば処罰されることになる」

「まさかそんな罠が張られているとは……食事会恐るべし」

「こんなバカに酒渡す方もバカだと思うけどなー」

ソルにまでそう言われてしまい、キリヤはまた行かなければならないかと思えばソルから水が入ったグラスが渡される。

「水ならここにあるしチョコロチョコロすんな」

「こうなったらオレは何か味が付いた水が飲みてえ!」

「変なところで好奇心出すなよ!」

また行こうとするキリヤにソルは止めるも、今度はキリヤの前にフォークが添えられた皿が差し出される。

見ればシャーロットが皿に食事を装ってくれていたようで、

「食べる。そして大人しくしている」

「姫様……」

その目から本当に大人しくして欲しいと伝わってくる。

相手は団長。流石にここは気持ちを決まなければならぬ。何よりわざわざあの男嫌いなシャーロットが男であるキリヤのために装ってくれたのだ。

というわけでキリヤはパクパクと食べることに。



「……貴様には食事マナーも教えなければならんかもしれんな」  
パクパク食べるキリヤの姿にシャーロットは静かにそう呟く。  
少しキリヤはそうして食べているとふとキリヤの目には〈紅蓮の獅子王〉の二人が見える。

やはり見れば見るほど似ている。

(レオナ様は確かグテーからは学べることも多いって言ってた気がするけど何でだろう)

メレオレオナはキリヤに魔法騎士団入団を勧めた時、中でも〈紅蓮の獅子王〉を勧めていた。

学べることに、それが何だか分からないが今ならその片鱗でも確かめることが出来る。

「姫様、ちよつとだけ〈紅蓮の獅子王〉の方に行ってきたていいですか？」  
「……………」

シャーロットはすでにメレオレオナのことは把握してくれている。

他の団であれば乱闘紛いになりそうなキリヤだが〈紅蓮の獅子王〉だから大丈夫だと両手を合わせ頭を下げる。

「お願いしやすっ！」

「……分かった」

「あざっす！」

何とか了承を得て、キリヤは〈碧の野薔薇〉から一時的に離れる。

近づくキリヤに〈紅蓮の獅子王〉団長フエゴレオンは訝しげな表情を見せるがキリヤはまず頭を下げ、

「自分キリヤって言います！ レオナ様の弟子やってます！ あなた様がレオナ様のグテーですか!?!」  
会っていきなり愚弟呼ばわり。

失礼極まりないが反対に考えれば、かの〈紅蓮の獅子王〉のフエゴレオンを「愚弟」と称することの出来るのはこの世でただ一人だけ。

キリヤの問いにフエゴレオンは笑みを浮かべ、

「やはりオマエが姉上の弟子だったか、キリヤスフィール」

◎

「そうか、姉上がつける修行はかなりハードだったようだな」

「何か目の前に川が見えること何度もありましたっす！」

あれから少ししてフエゴレオンがメレオレオナとの話を聞きたいと言うのでキリヤは一通り修行内容を話していた。

修行当時はまるで笑い話にはならなかったが今ではどれも良い思い出で、フエゴレオンも逐一相槌を打ってくれていたのでより楽しく話せていた。

「思えばオレじゃなかったら死んでましたよ！」

「姉上は出来ない者にはさせない。オマエを見込んでのことだろう。現に今こうしてオマエは短期間で誰よりも早く上級魔法騎士となり姉上の教えが間違っていないかったと証明している。姉上もさぞかし誇らしいことだろう」

「でもあんまりレオナ様はそんなこと言ってくれなかったですけど……」

メレオレオナは基本言葉よりも先に拳。

一日一発は当然で二年半で通算すればそれこそ数え切れないほど殴られた。だが誇らしいや見込んだなど言われたこともなく、首を傾げる。

「ふ、オマエは充分姉上に愛されている。弟である私が言うんだ、間違いない」

「そう言うモンなんスかね……あつ！ フエゴレオン様に聞きたいことあつたんスよ！」

「……？」

「レオナ様はフエゴレオン様から学べる人が多いって聞いたんですけど……何が学べるんスか!?!」

ずつと疑問に思っていた問いをようやくすることが出来た。

疑問をぶつけられたフエゴレオンは少し悩む素振りを見せるもやがて言葉を紡ぐ。

「姉上はきつと私からオマエにもつと“世界”を教えようとしていたのだろう。己から独立させ、全ての行動の責任を己自身に取らせる。そうすることでオマエの精神は鍛えられ、より強くしたいと願っていたのだろう」

「でも姫様もオレに色々教えてくれますよ?」

「偶然身近だったのが私だけだっただけで結局オマエが成長出来れば誰でも良かったのだろう。しかしあの男を毛嫌いするシャーロットが、か……。オマエは私が思う以上の何かを持っているのかもしれないな。姉上がおマエを弟子にしたのも領ける」

「残念ながら弟子でありながらオレはレオナ様の弟子ではないんですよ……」

不敵に笑むキリヤにフエゴレオンは言葉の意味がまるで分からない様子。

キリヤは人差し指をチツチツチと横に軽く振るえば、

「オレはいつかレオナ様に『参った』と言わせて結婚するんすよ! 結婚したらフエゴレオン様はオレの義弟になりますし今からオレのこととお義兄さんって呼んでくれてイイですよ!」

「ハハハ! それは下手をすれば魔法帝になるよりも難しいことかもしれないな!」

至極真面目な発言なのにフエゴレオンは大笑いしてしまう。

ぽかんとするキリヤだがそれは莫迦にする笑いではなく、純粹な興味から出た笑いだった。

「今度へ紅蓮の獅子王に見学しに来るといい。私に何が教えられるのかは分からないが一度手合わせ願う」

「是非!」

「あ、あの姉上が……結婚……?」

近くで偶然一部だけ聞こえていたレオポルドもこれには愕然。

キリヤもレオポルドの驚愕を隠せない姿に調子を取り戻し、

「結婚式はオレとレオナ様が出会った森でしようって思ってるよ……レオポルドお義弟くん」

「そんな、バカな……っ!」

と、もう少し煽ろうかと思つた矢先、キリヤの耳に別のところの会話が聞こえてきた。

それはキリヤに向けられたものではなく、アスタ達に向けられており、キリヤはそちらへと振り向いた――

## 22話「窮地」

アスタに向けられていたのは侮蔑の視線だった。  
魔法帝がどうしてこの場に招待したのか。魔宮ダンジョン攻略出来たのも運が良かっただけ。

実際にその場にいなかったたくせに言いたい放題言うが下民として過ごし続けていたアスタにはどうってこともなかった。

自らのことは別に何を言われようが構わない。

だがそんなアスタを苛立たせたのは自分ではなく周りへの中傷。

中でも〈金色の夜明け〉のアレクドラはユノのことも期待していない下民と見下し、クラウスやミモザまでも馬鹿にされる。

何より〈銀翼の大鷲〉にいたノエルの兄や姉の言葉。

一族の恥晒し、追放同然だったのによくノコノコ戻ってこられた、この場には相応しくない出来損ない——次々と心ない言葉がノエルに突き刺さり、踵を返すノエルだったがアスタはその手首を掴む。

こんなヤツから逃げる必要はないとテーブルに立ちいつも見下してくる王族達を見下ろす。

戦功叙勲式に呼ばれるほどのだからキリヤのように凄い者達だと思っていたが今まで見下してきた他の者達と何ら変わらない——

「相応しいとか相応しくないとか知るか！ 見とけよ、オレは必ず——」

そこでアレクドラが放った砂拘束魔法がアスタの身体を包み込むが魔導書グリモワールから抜いた西洋剣を振るって打ち消す。

これこそ魔力のないアスタだからこそ手に入れることアンチの出来た反魔法——

「魔法帝になってオマエら全員黙らせてやる!!」

切っ先を向けた先、シルヴァ家の次男——ソリドと長女——ネブラは一瞬笑う素振りを見せたがすぐさまアレクドラと共に魔導書を開き——

「「笑わせるなッ!!」」

正面から霧、水の拘束魔法が同時にアスタへ向かって飛ぶがこの程

度の魔法ならば反魔法の剣によって打ち消せる。

しかし、防御によって出来た一瞬のうちに背後から砂の重装兵が現れ――

「――おっしやア!!」

アスタを拘束しようとした砂の重装兵だったがさらにその背後から飛んで来たキリヤの拳がその兜から砕き、元の何の効果もない砂へと戻す。

「何……っ!?!」

「キリヤっ!」

「オレもメチャクチャむっかついたからブツ飛ばしてやろうぜ! 特にあの金メツキおじさん!」

飛び出してきたキリヤはアスタに肩を組んできてビシツと指を差す。

その先にいるのはアレクドラ。何やら因縁があるのか中指まで立てればアレクドラも苛立たしげに眉を顰める。

不遜なアスタとキリヤの態度に中でもソリドは苛立たしげに前に出て、

「オイオイいくら上級取ったからって調子に乗りすぎなんじゃねえのかアア?」

「あ、オレより階級低かったヤツ! 敬語使えよバーカ!」

「オレは王族だぞテメェ!!」

三等中級魔法騎士だったがキリヤ以下なことを気にしていたのかいきなり声を荒げる。

水創成魔法” 聖水の凶弾”。

一箇所に集まった水は両腕を広げた程度の弾丸と化し、魔力の推進力を得て飛び出す。

キリヤは肩を組んだ状態から離れアスタの背中を押すと、

「よし、正当防衛のチャンスだぞ!」

「ありがとなっ!」

アスタにとってあの程度の魔法見切れないわけがない。

魔宮で見たダイヤモンド王国の魔道士の魔法の方がよほど速く、ア

スタは西洋剣を魔導書に仕舞えば大剣を取り出し剣脊を向けて振るう。

「ノエルに……謝れ!!」

水の凶弾は大剣によって跳ね返され、ソリドに向かえばソリドもまたの魔力をぶつけて相殺する。

余波で膝をつき、後退するソリドに今度はいつの間にか背後にいたキリヤが平手を構えれば――

「妹は守ってやるモンだつてママに習わなかったか莫迦者がアアアアアア――つ!!」

「ぼべ……つ!!」

これまでにないほど思い切りビンタしてしまった。

膝どころか背中をついて倒れたソリドにキリヤはフンと鼻を鳴らし、

「王族だか何だか知らないけど家族は仲良くね!!」

「て、てんめえ……」

「うおいキリヤ! オレがきつかけ作つたけどやりすぎ!」

「貴様ら、この晴れ舞台での狼藉……処分は免れんぞ」

「はっ! オマエにそんな権限あつたら……」

な、と言い切る前にキリヤの肩に誰かの手が置かれる。

直後、キリヤの背後から溢れ出す魔力。ヤミの圧倒されるような魔力とはまた別に刺々しく、触れようとするならばズタズタに引き裂かれそうになりそうなほどの魔力量。

今まで恐れ知らずな振る舞いをしていたキリヤだがその魔力を受け急に動きがぎこちなくなり、振り向けば――

「ひ、姫様……」

「私の話を聞いていなかったのか?」

そこに立っていたのはキリヤが所属している〈碧の野薔薇〉団長――シャーロット・ローズレイだった。

その顔を見ると今まであれだけ元気に相手を挑発していたのにすでに青ざめており、

「いやこれは……その、アレですよアレアレ。交流してただけで……」

「そんな言い訳が通じると本気で思っているのか……？」

「ご、ごめんなさいっ！」

アスタが呆然と見ているうちにキリヤは耳を引っ張られ、今まで見ていた強かった姿は見る影もなし。

だが事態はそれだけに収まるはずもない。

「待てローズレイ家、王族に手を出してその程度で済むはずがなからう」

次いで湧き立つ寒気。

冷たい威圧にアスタやキリヤが振り向き、そこに立っていたのは〈銀翼の大鷲〉団長ノゼル・シルヴァだった。

「ソリド、王族が膝をつけられ平手打ちされるなど情けないにも程がある」

「も、申し訳ありません……」

「さて王族に逆らいし下民共……どう裁いてやろうか」

「ハッ！ その前髪どうやってセットしてんですかあ？ 自分野生育ちなんでそのヘアスタイルの良さ全然分からないたたたたたたたたたたっ！」

また臨戦体勢を見せるキリヤだが耳を引っ張られ言葉を遮られてしまう。確かに前髪を三つ編みにしている理由はまるでアスタにも分からないが。

ともかく一触即発の雰囲気。その空気に割って入ってきたのは――

「そこまでにしておけ、シルヴァ一族よ……」

〈紅蓮の獅子王〉団長、フエゴレオン・ヴァーミリオンだった――

◎

「私は再三忠告したはずだ。それを貴様は無視し、勝手な行動を取り、拳句に面倒を作り出した」

「そうだそうだ！ 姐さんの手を煩わせるなんて猛省しろ！」

「いたたたたたたたた――ッ!?!」

荊創成魔法” 荊蔓ノ仕打鞭”。

フエゴレオンの介入により乱闘騒ぎは止まったもののキリヤは

シャーロットが出した回転する荊の鞭によってしこたま尻を叩かれていた。メレオレオナの場合、粗相をすれば即拳骨刑だったが回転しながら猛烈に尻を打たれるこちらも相当痛い。

「何か私に言いたいことはあるか？」

「ごめんなさいっ！」

「具体的に何を反省している？」

「どうせならグーで殴ってれば良かった——あばばばばばばばばばっ！」

どこで選択肢を間違えたのかさらに回転速度が上がる。

アスタの方ではフエゴレオンとノゼルの魔がぶつかり合いとんでもないことになっているがキリヤの尻もまたとんでもないことになっていそうだ。

「大変です——ッ!!」

しばし荊の鞭に叩かれ続けていれば救いの手のように扉が勢い良く放たれる。

焦燥に満ちた声音。只事ではない雰囲気、荊の鞭も止まり、誰もが入ってきた者に注目すればすぐに——

「王都が襲撃されていますっ!!」

突如とした知らせに誰もが一度は耳を疑った。

ここは王貴界。クローバー王国でも特に護衛が堅固に展開されており、交代制で常に魔法障壁を張られているために侵入は不可能とされている。それなのに敵が侵入してきたというのか。

「……………」

岩石創成魔法”世界を語る模型岩”。

シレンと言ったか。とにかくへ金色の夜明けの団の一員が魔導書を開けば岩石によって王貴界の立体模型が創り出される。

恐らく魔を地域一体に張り巡らせ同時にそれを可視化し、立体模型としているのだろう。

明らかに魔の扱いに手慣れた者。アレクドラとは違い寡黙だが——

「やるなあ……………」



キリヤも感心するが模型を見てみれば同時に五つの場所が襲撃されている。

これだけの魔力となればこの場にいるアスタ以外の誰も気が付いてもおかしくなかったがフエゴレオンの見解では相当な空間魔法によつて一瞬のうちに現れたとのこと。

どこに誰を割り当てるか、フエゴレオンがそう考えているうちにアスタはというと――

「いやコレ何待ち!? 助けを求めてるヤツらがいるってのは分かったからオレはもう行く!!」

「状況を把握し切れていないのに動いてどうするアスタ!」

「とりあえず音のデカイ方に行く!! 何かいるだろ!!」

「フハハハハハ!! 貴様の力見せてもらおう!!」

いきなり走り出して出て行ったアスタ。

いつの間にかアスタにライバル意識を持っていたレオポルドもアスタを押して走り出し、キリヤも追いかけてようと思ったが――

「……………これは」

「どうした、キリヤスフィール」

「いや、ここなんですけど……………」

フエゴレオンに問われればキリヤは王貴界の隅に不可解なもの、いや人間を発見する。

しかも小さくて見にくいものの何かを構えており――

「姫様、ここから直線上には何がありますか?」

「国王がいる王宮だが……………まさか――」

「……………サキムニ!! オマエら十匹ぐらいここに残ってフエゴレオン様達に回復役でついててやれ! 他は外に出て怪我人の治療を最優先!! 危なくなったらすぐに逃げろ!」

『ご主人はどうするノ……………?』

「コイツをブツ倒してくる!!」

荊の鞭を散々受けたおかげで<sup>レベルアップ</sup>進化の範囲内に入った。

キリヤはすぐさま<sup>レベル2:ガイガーアツプ</sup>強化鎧旋<sup>レベ</sup>を身に纏えば窓を割って外へ飛び出す。

「あつ！ また姐さんの言うことも聞かずに！」

「悪いソル！ また帰ったら怒られるからよ!!」

いくらキリヤでも国王がどういった存在か知っている。

実質国を統治しているのは魔法帝だが国王は国の象徴として君臨している。もし国王が暗殺されることでもあれば魔法騎士団は名折れも良いところ。

(間に合ってくれよ——ツ!!)

別に国王を守る理由などないがメレオレオナが帰ってくるまでに国王を守りきれなかったとなれば何を言われるか。

キリヤは足裏から魔<sup>マ</sup>を放出することでさらに加速する——

## 23話「狙撃手」

(クローバー王国……)

狙撃銃を構え、スコープから覗く景色に女は奥歯を噛み締めていた。

この国が存在することによって女は愛する者を奪われ、毎日泥水を啜るような気分で生きている。

魔力感知も可能にし遙か先まで覗くことの出来る水晶のスコープが映すのは王宮の一番高き塔。

そこに今ものうのうと国王は生きている。

今から女がしようとしている行動は本来の目的とは違う。しかし、国王の命を取っておいて何も損はない。

自分達から奪ったもので得た権力など誰が認められるか。大方、先祖が創ったものをそのまま継いだだけの何も考えない木偶人形と同じ存在、死んだところで悲しむ者など誰もいない。

(護衛も相応の数がある……だがその程度、容易く撃ち抜ける)

スコープが映し出すのは景色だけではなく、壁の向こうにいる人間が何人か見える。

国王と言うだけあって魔力は相応に濃いもの。しかし、人徳もなければ魔マギにすら愛されていない。

(オマエに真に味方する者など誰もいないということだ)

見てくれだけの空っぽな存在に滑稽を越えて一種の哀れみさえ覚えてくる。

他には魔道士のも何人かいるがこの距離では誰も気付くことはない。

女にとって例えいくら壁があろうとも。防護障壁があろうとも。関係ない。

今から放つ一撃は必殺の一撃。

どれだけ壁があろうとも阻むことの出来ない不可視であり不可避な一発。

「我々の礎となれ——」

魔弾創成魔法” 死榴弾”。

デッドバースト

狙撃銃の銃口から放たれた一条の光。極限まで圧縮された黒と紫は螺旋を描きながら一直線に突き進む。

躲しようのない一撃に国王も——いや、何か影が見えた。

途端、一直線に標的を狙っていたはずの”死榴弾”が不自然に炸

裂する。

スコープで見れば何か鎧を着た者が”死榴弾”の進行を阻み、後

デッドバースト

方へ吹き飛ばされる。

鎧など容易く貫く威力だというのにその者の四肢が散ることはない。

(バカな、そんなこと出来るわけが——)

女の行動を読み、寸分違わず射線に入り、傷一つ負っていない。

一体何者なのか、しかもその者は吹っ飛ぶ最中に遙か遠くにいるはずの女と目を合わせたのだ——

◎

(いつつつつてえ!! 何だあの魔法!!)

実弾ではなかったために魔力を吸収したことでキリヤの身体を貫くことはなかったがその威力はキリヤにしっかりと届いていた。

まるで身体が内側から爆発したような。鎧など完全無視の一撃。

巡り会う敵はどうして毎度ここまで手練れなのか、キリヤは不意に考えてしまうが幸い今の一撃を受けたことで相手の魔マナの色が分かった。これで追尾出来る。

——と、考えていたキリヤは思い切り王宮の壁に叩き込まれてしまった。

壁、何かカーテンらしきものに絡まって、拳句キリヤの身体は柔らかい反発性のあるクッションのような場所に大の字で倒れる。

「いてて……何だこりゃ」

「な、なななな何者じゃ貴様は?！」

「……あ?」

吹っ飛んでいる最中に方向感覚など完全に麻痺していたキリヤだが上体を起こせばこちらに向けてがなり立っている中年男性が大きい

く指を差しつけてきた。

どうやらここはどこかの寝室、のようで中年男性の傍にいた二人の女性も驚いた様子でキリヤを見ている。

とりあえずキリヤは中年男性に近付くと、

「ヒトに指差しちゃダメなんだぞ」

「ぎゃあああああああ?! 余の指がああああああああ?!」

差ししてきた人差し指を軽く捻ると中年男性からそんな悲鳴が聞こえてくる。

本当に軽くやっただけなのにこの絶叫。

何なのだろうかこのおっさんは、率直な感想を言いたくなるがきのこのような髪型をした男性が焦った声を上げる。

「な、何をしているんだ! そのお方はこの国の国王だぞ!」

「そうだ! この余こそこの王国の元首であり魔法帝よりも偉大な存在なるぞ!!」

「……このショボイおっさんが?」

もう我慢出来ずに言ってしまった。

ちよび髭が唯一の特徴と言えいいのか。国王と言う割には器の小さそうな容貌。あまり絵の才能がないキリヤでも描けてしまいうな顔をしている。

と思えば魔<sup>マジ</sup>だけは神々しく、あながち嘘とは思えないように見える。

これに便乗した自称国王の中年男性はあれやこれや言ってくるが

「っ! あぶねえ自称国王!!」

「だから余こそがぶるしゅっ!」

再び見えた黒と紫の閃きにキリヤは自称国王の首根っこを掴んでその身を回転させる。

寸でのところで間に合ったか自称国王の衣服に少し掠る程度で済むが余波でさらに転がされる。

「今のは……」

「狙撃手がいんの!!」

「だがここには高度な防護障壁が張られている。それなのにどうして——」

「単純に全体守ってるより一点特化の方が強いんだって!」

言いながらキリヤは自称国王を転がしながら狙撃を防いでいく。

これだけの精密性。ただこちらを覗いているわけではなく、国王の魔<sup>マナ</sup>の色を覚えて的確に狙ってきている。

「き、貴様! 国王たる余にこんな無礼な扱いただで済まぬと思——」  
「うるっせえ!! ホントなら一発目でテメエは死んでたんだぞ!!」

感謝される覚えはあれど責められる覚えはない。

自称国王直属のフードを目深に被った者達は困惑の色を強め、きこの頭の男性も判断に迫られている状況。

あまり後手に回ってはいつか限界が来る。だったら——

「空間魔法使える人いませんか!? 国王を一旦ここから避難させて欲しい!! 出来れば王貴界から離れて!」

「た、確かにこの濃度の攻撃魔法を一点集中でされれば我らの防護障壁も紙同然……仕方ない。もう少しだけ耐えてくれ! すぐに空間魔法を使える者を手配する!!」

「なっ! 貴様ら余に王宮<sup>こく</sup>を離れろと言うのか!」

「死ぬよりマシだろ!!」

「ならん!! 余がこの場においても何とかせい!!」

「……」

反抗の意を見せる自称国王の胸倉を掴み上げる。

今回の相手はベレラファスラとはまた違った強さを持っている。正直、接近出来たとしても僅かな隙にまた自称国王を狙って狙撃されてしまえば防ぎようがない。

魔宮<sup>ダンジョン</sup>攻略時とは違い、今は連携が取れる。あらゆる可能性を考慮し行動しなければならぬ。

守ろうにもこんな調子でいられればいくらキリヤでも流石に苛立ちを感じる。

別に尊敬もしていないし、傲慢な態度に助ける意味も見受けられない。

だったら、とキリヤは自称国王の胸倉を掴んだまま自らが飛んで来たせいで大穴が開いた壁から外へ向かって自称国王ごと手を伸ばす。「ここにいて死ぬか、少しの間ここから離れて生き残るか!! 選べ!! それともオマエが魔法帝よりも偉大って言うならオマエがアイツと戦ってみるかア!!」

「ま、待て! 待たんか! 余……余が死んだらこの国は終わりぞ!」  
「そうになったら魔法帝がオマエの代わりに国王になるだろうよ」

本当に魔法帝より偉大ならばたかが地面が遙か下にあるうとも足が震えることはない。

キリヤは酷く冷静な表情のまま試しに掴む力を緩めてみる。

即座に自称国王がキリヤの腕にしがみつくように手を回し、どうにも飛行魔法すら覚えていないようだ。

「……で、どうする? 次ここにいていつたらここから落とすけど?」

「わ……分かった! 少しこの王貴界から離れば良いのだろう!」  
「賢明なご判断に感謝」

最初から素直にそう言っていれば良かったのだ。

キリヤは王宮の中に自称国王を戻せばきこの頭の男性が手配しただろう空間魔法の使い手がいそいそとやってくる。

「ささあ国王、こちらから避難を……」

「ぐぬぬ、貴様覚えておれよ! 鎧で顔は分からんが——」  
「うっせえ早く行け」

空中に開いた空間に入る寸前に自称国王は捨て台詞を吐こうとするが構わずその尻を蹴り飛ばして移動させる。

キリヤの行動を一部始終見ていたきこの頭の男性が呆気に取られたような表情をし、

「き、君は勇気があるな……」  
「そうスか? それより空間魔法の人、オレもあの壁のところまで飛ばしてくれねえか?」

「狙撃手をたーいじするのですね! かしこまりましたーっ!」  
察しが良い空間魔法の使い手はすぐに新たなゲートを開いてくれ

る。

それを見てキリヤは親指を立てると、

「ありがとう！」

飛び込めば不思議な感覚だがすぐさま光景が変化し、眼下に狙撃手だろう女が姿を見える。

突如としてキリヤの姿が現れたことで女は驚くもキリヤは構わず突撃する。

「見つけたア!!」

◎

二十代と言ったところか。

狙撃手の女は白銀の髪を靡かせるその容姿は一言で言えば麗人だった。外套を風に靡かせ、中は動きやすさを重視した軽装。ところどころにホルスターが見えており、見間違えるはずとなくこの女こそが狙撃手。

相手は敵を捉えた猛禽の眼光を輝かせ冷静に言う。

「魔弾が当たった瞬間、すでに私の位置を読んでいたか」

「おうよ!!」

足裏から魔力を放出、一気に距離を詰めれば女はすぐに狙撃銃を消し両手に拳銃を構える。

魔弾創成魔法”ライトニングバレット雷装弾”。

先ほどの魔弾よりも遥かに速い目にも留まらぬ魔弾の連射。雷が身を貫く威力が身体を撃つが先ほどの魔弾と違ってまだ鎧で防げる。

(雷属性か！)

先ほどの狙撃。雷属性とならばあの速度も領ける。

肉薄し、拳を振るえば女は一步下がることよって躲し、キリヤの肩を台に跳躍する。

途端、女の靴裏には小型の回転式拳銃がいくつも仕込まれており、手に持っていた拳銃と同時に火を噴く。

魔弾創成魔法”アクアバレッツバースト激流驟雨弾”

高出力で放たれた水の弾丸。文字通り雨の如く降り注ぎ、キリヤの追撃を許さない女は上空へ舞い上がる。



(は!? 今度は水!?)

通常魔道士はそれぞれ一種類の属性しか魔<sup>マナ</sup>を持っておらず、そこから派生した一種類の魔法しか使えないはずだがこの女は軽々しく二種類使って見せた。

さらに女は拳銃を消せば二回り以上大きな銃を構え、撃ち放てば銃口から竜を模した火炎が飛び出す。

「三種類目っ!？」

魔弾創成魔法” インフェルノドバースト 火竜炎舞弾”。

キリヤを飲み込んだ火の竜は空を舞い、キリヤの身体を建物の壁に思い切りぶつける。

「こんの……っ!」

瓦礫を蹴り飛ばして飛び出したキリヤだが次に迫るのは風を纏う岩の弾丸。

魔弾創成魔法” ガイアブラストバースト 岩突風貫通弾”。

躲そうにも数が多く、キリヤが腕を交差させて防いでいけば一際巨大な弾丸が襲いかかる。

「全属性使ってんじゃねえかッ!!」

炸裂音と共にキリヤの姿が砂埃の中へと消えたが女はまるで警戒を怠っていない。キリヤが無事なことをすでに分かっているからだろう。

「——私の名はサイル。全ての属性の魔<sup>マナ</sup>に愛された者だ」

「上等だ。オレの名はキリヤ——属性に全く愛されなかった無属性の男だぜ!!」

愛された者、愛されなかった者。

向き合った二人は互いの魔<sup>マナ</sup>をぶつけ合い、そして魔弾と拳がぶつかり合う——

## 24話 「新たな進化VS魔弾の射手サイル」

「何故あんな国王を庇う!？」

「仕事だから!!」

多種多様な魔弾の数々を弾きながらキリヤは突き進む。

サイルと名乗った女の戦闘スタイルは中距離<sup>ミッドレンジ</sup>。キリヤの拳の範囲外にいて、距離を詰めようにも魔弾の手数が凄まじい。

屋根を蹴り、互いに加速。

眼下では先ほどの食事会にいた面々が生気を感じられない亡者の群れを一網打尽にしており、サキム二達も負傷者の安全確保と治療に尽力を尽くしている。

各々の活躍する姿にキリヤもよりやる気を出せば視線をサイルに戻し、

(そっちが距離を取り続けんなら——)

拳の届く範囲にいないのであればキリヤは自らの拳を伸ばせばいいと籠手を魔力で覆う。

魔力格闘技“獅子戦刃”<sup>ライオネルカット</sup>。

獅子の爪を模した魔力で魔弾ごと相手を薙ぎ払い、さらに全身から獅子の手を幾本も伸ばせばサイルを狙って追尾する。

「っ—」

多方面から攻める獅子の手をサイルは全て紙一重で躲せば魔力を手につつ銃に装填。放たれた魔弾にキリヤも先ほど同様に腕を交差させて防ぐが——寸前で魔弾が暴発。

魔弾創成魔法“激流葬水牢弾”<sup>アクアプリズバースト</sup>。

キリヤを中心に半径十メートルほどの水の球体に閉じ込められれば一気に動きを封じられる。さらに水球の牢獄は荒れ狂い、流れる激流に巻き込まれキリヤの身体は水中でもがく。

「攻撃範囲を伸ばした………だったら私はさらに距離を開く。貴様の手が届かなくなるまで」

「じよほほほほほほほほほほ……っ—」

上等だ、そう言おうとしても水中なので上手く話せない。

それにここでキリヤの新たな弱点が発覚してしまう——シンプルに泳げない。

鎧のせいでさらに動きが鈍重になれば湧き立つ泡のせいでサイルがどこに立っているかさえ分からないう状態になってしまう。

どうしよう、思ったところで水中で泳げないことが仇となって上手く思考も回らない——

◎

自らを追ってきた鎧の戦士の動きは封じた。

サイルは適当な屋根に着地すれば戦場と化した王貴界は静けさを取り戻していることに気付く。

見ればサイル側の魔道士が出した死屍魔法で生み出された亡者達が一箇所を除いて全て倒されてしまっていた。

(それぞれの陽動は済んだ。となれば——)

片手に持った拳銃を空に向けて撃ち上げる。

今までの魔弾とは違い、赤い煙が天高く伸び、それは合図と化す。

『——全員マーキングエリアに入ったか』

言った瞬間、それぞれの場所に黒い斑点が生まれ、一気に広がれば魔法騎士達が空間魔法に気付いたところでもう遅い。

若干名取りこぼしがいたようだがその相手をするのはまた別の者の役目だ。

自らが討ち取るべき国王の魔は流れを探ってもすでにこの近辺にはいない。あの自尊心の塊だと思っていた国王も自らの命が惜しければすぐに逃げ出す。

「……さて、そろそろトドメを刺すか」

逃げられたのも全て勘が鋭かったあの鎧の戦士のせいだ。

今も水の牢獄で苦しむ姿に銃口を向ければ——

「魔弾創成魔法」ブリザードフラワースト 氷結散華弾

放たれたのは水を一瞬にして凍らせ砕く対水魔法戦で使われる魔弾。

それを自らの水で閉じ込めた相手に向かって放てばどうなるか、それは想像に容易い。

すでに引き金を引いており、撃ち放たれた一発は水へ触れようとするが――

「――テメエ姫様に何しやがった……ッ!!」

水に触れる寸前、魔力で形取られた獅子の手が飛び出し魔弾を弾く。

荒れ狂う激流のはずが水は地面に零れ落ち、その中から鎧の戦士が怒りの声で飛び出す。

「邪魔だったから他の者達と共に遠くに飛ばしただけよ」

「邪魔？ つうかオマエら何しに来たんだよ。自称国王様ならもういねえぞ」

「私達の目的は国王暗殺なんかじゃないわ。独断で行動することを許された私が勝手にしているだけよ」

聞けば聞くほどこの鎧の戦士、声が若い。どうにも少年のようだ。

もし、彼が生きていれば――

「だったら早めに決着つけた方がイイみてえだな」

一瞬、思考が戦闘から外れたサイル。

そんなことは露知らずに鎧の戦士は魔導書グリモワールから一丁の拳銃を引き抜く。

「その銃は――」

黒く煤け、一見とても銃弾など込められやしないもの。

だが、その拳銃は――

◎

今は王都内の治療に回しているサキム二達の力を借りられないために“兎々レベル3・ビレットアーマルナフ戦の鉄鎧”は使えない。

このまま“強化鎧レベル2・ガイガーアツプ旋”で戦ったところで決定打に欠けている――ならば魔宮ダンジョンで手に入れ、自らの魔法に追加された拳銃に賭けるしかない。

恐らくこの拳銃の中にも何かしら精霊らしき者はいるのだろうが未だにその声は聞こえない。

だが進レベルアップ化に必要な魔力は蓄積され、キリヤは引き金に人差し指を通し銃口を下に向ける。

「頼む、オレに力を貸してくれ！ 進化!!」

声と共に銃口から魔法陣がいくつも飛び出せばキリヤの身を包み込む。

魔法陣はキリヤに触れた途端闇となつて煙となり、中で魔力が火花を散らせば新たなキリヤの姿が露わとなる。

黒い魔力を翼のようにはためかせ、鎧の形状は全体的に刃物のように各部鋭くなり、兜もより凶悪な形状となつて悪魔の如く口部が凹凸を刻み牙を模す。

身体進化魔法” 斬鉄の吸魔鎧”。

変身し終えたキリヤの前に魔力が集えば手に持っていた拳銃が形状を変え、黒く煤けているのは変わらないが剣が付いた歩兵銃となれば再びキリヤは受け止め構える。

(銃なんて魔宮以来だけど……ッ！)

銃剣の照準をサイルに向けキリヤは引き金を引く。

だが、サイルのと違つて弾が出ない。というより引き金自体が固すぎて動くことすらない。

思わず流れる沈黙にキリヤは自らが構えている銃剣を見つめ、

「……何も出ねえ………?」

「……私を嘗めているのかしら」

しかも魔力の流れが銃剣を持つている右手から右肩まで完全に途絶えてしまっている。

マナスキンを解くなど散々メレオレオナに言われてきたがマナスキンも右腕のみ消えており、進化したキリヤ自身困惑の極みだが相手は待つてくれない。

魔弾創成魔法” 乱反射光明弾”。

自ら持つ銃を構えたサイルは様々な角度に魔弾を放てば壁で反発し、困惑するキリヤの身体を多角度から捉える。

(いってえ右腕！ それ以外は……何か平気だ!!)

右腕だけ鎧越しでも痛みが走るがその他に痛みはない。

やはりレベル3となれば防御力は相当堅固なもの。右腕にさえ気をつければ上手く立ち回ることが出来る。

屋根を蹴って駆け出したキリヤに再び襲い掛かる火の竜に真正面から銃剣を振るう。

一刀両断。銃剣が横一閃に斬り裂いた火の竜は跡形もなく消え、漂う魔力は全て銃剣に収められる。

その光景にサイルもキリヤも互いに驚く。

(斬れた……ッ！)

まるでアスタが持つ反魔法アンチの剣と同じ。

明確に違うのはアスタの剣は魔法を斬り裂いても氷や岩など形あるものは残ってしまう。それはキリヤも同じで魔力を吸収出来るものの実体のあるものは中身の魔力を吸収するだけなので消すことは出来ない。さらに――

(今なら撃てる気がする――ッ!!)

あれだけ魔力を感じられなかった銃剣に炎属性の魔力が宿る。

固かった引き金も今なら引けると感じ――引けば銃口からサイルの魔弾魔法と同じ火の竜が飛び出す。

「弾出た!!」

「っ！」

あまりの嬉しさに声を上げてしまったがようやく仕組みが分かった。

この銃剣の能力は魔力が込められているものに触ればその実体ごと吸収する。つまりキリヤの魔法の完全上位に属する能力だ。

貯蓄ストック出来るのは恐らく完全に魔力が空カラになっていた右腕分。

喜ぶキリヤだが火の竜を放てば右腕分の魔力は再びゼロになり、対しサイルは――

「魔弾創成魔法」ゼロバースト「虚空弾」

撃った魔弾に触れた火の竜は一瞬にしてなかったことにされる。

吸収でも何でもない――ただ消された。

空中で銃口から火を噴かせたサイルはそのままキリヤに肉薄。魔導書から大砲ほどの大きさをした巨大な銃を取り出しキリヤの腹部に押し当てれば――

「吹き飛ばせ!!」

「魔弾創成魔法」ゼルファールバースト 迫撃墮落弾」。

光が瞬いたかと思えばキリヤの視界は一気にブラックアウトし、その身は遙か後方へいくつもの建物を破壊しながら吹き飛ばされていく――

◎

「だあークソ……油断した……」

例えどれだけの力を有していても戦場では一瞬の油断が命取りになる。

首を振るって起き上がれば火花が散りまくっているように眩しかった視界も回復し、アスタ達の姿が見える。

「あ、新手……?」

アスタの傍にいたノエルがそう口にするがキリヤは立ち上がると全身で否定し、

「オレっスよノエル様」

「その声は……キリヤか!」

「そうそう。これがオレの身体進化魔法……って言ってる場合じゃねえ。そっちの状況は?」

アスタもようやくキリヤだと理解したところで状況把握するために問う。

するとノエルは一点を指差し見てみれば片目を黒い帯で隠した男が炎によって拘束魔法を施されており、レオポルドがその胸倉を掴み上げている。

「さっきまでフエゴレオン団長もいたんだけど空間魔法でどこかへ転移されて。でもあんなピンポイントな空間魔法、相当術者が近くにいないと――」

「……そこだアアアアアア!!」

言葉の途中でアスタが走り出したかと思えば動かなくなった亡者の山に大剣を振るう。

舞い上がる屍の中に一人動く者がいて、その者は空間魔法で転移し、高い建物の屋根からキリヤ達を見下ろす。

「よく見破ったな。その勘、まるで獣のようだが――すでにことは済

んでいる」

言った瞬間、地面に空間魔法で何かが転移する。

そこに倒れていたのは片腕を失った——フエゴレオン。

誰もが一瞬呆気にとられ、一番に叫んだのはレオポルドだった。

「嘘だろ……」

あのメレオレオナの弟がこんな簡単に倒されるとは、キリヤにも信じられることではなかった。

手合わせしようと言ってくれたのに、それはもう叶わない。そう思えば思うほどキリヤの思考は真つ白になっていく。

キリヤの背後に降り立ったのはサイル。

倒れたフエゴレオンを見ればサイルは何も思わず、こう言った——

「王都を襲撃した私達の目的は初めからフエゴレオン・ヴァーミリオン、彼にあつたのよ」

「……………殺す」

その言葉にキリヤは拳を握り締め、ゆっくりと振り返る。

真つ白になりかけたキリヤを留めたのは他の何でもない——純粹な殺意だけだった。



## 25話 「吸魔の銃」

「ブツ殺す!!」

すでに冷静さを失った鎧の戦士は銃剣を握り締めサイルに正面から突貫してきていた。

力も痛いほど込め、あれだけ一定に薄く張り巡らされていた魔も感情の機微によって狂いに狂う。

それでは身体能力強化もまばらになり、力任せに振り回したところでサイルに掠りすらしない。

「せっかくの”吸魔の銃”でも持ち主の精神が未熟ならばその程度ね」

「んだとテメェ!!」

冷静さを欠いた時点で勝負は決まった。

大振りの拳を躲せばサイルの蹴りは鎧の戦士の側頭部を捉え、

「魔弾弱体化魔法”弱除弾”!!」

側頭部を捉えた蹴りは靴裏からの魔弾放出によりさらに加速し、蹴りの威力を数段階跳ね上げる。

残像を残し高速回転で壁に叩き込まれた鎧の戦士から破片が飛び散るのが見えた。

“弱除弾”は相手の身体能力強化を無効にし、あの鎧の戦士であれば身体能力を向上させている鎧を砕くことが出来る。さらに相手の能力を一時的に弱体化させ、酷い倦怠感を与える。

あれだけ膨れ上がったいた魔力も魔の流れを読み取ればすでに失われ、大幅に性能は下がった。

何をしようともこれ以上は無駄だ。すでに勝負は着いている。

それより今は死屍魔法使いのラデスをどうにかしなければならぬ。ヴァルトスの空間移動魔法で転移しようにも”退魔の剣”や”宿魔の剣”に阻まれ上手く転移出来ない状況にある。

「クソが!! ヴァルトス早くしろ!!」

今や相手に殴られる一方で、惨めに助けを乞う始末。

普段から自分は王族以上の才能があると傲慢な態度を見せていた

がこれでは哀れな鼠と何ら変わらない。

だがあの死屍魔法にはまだ利用価値がある。ならば――

「どこを見てやがるテメエ……ッ!!」

「ッ…」

言葉と共にサイルは回避行動を取ればすぐ傍を魔力によって形取られた獅子の爪が空を切る。

そのことにサイルは素直に感心していた。

あれだけの一撃を身体強化なしの生身で受けたようなものだというのにまだ立ち上がるのか。それに弱体化魔法を喰らったために倦怠感も凄まじいはずだ。

見れば少年は拳を地面に叩きつけながら何一つ闘志を消していない。

「オレはまだ負けちやいねえ……っ!!」

今までは兜によって隠されていた容貌、鎧が崩れたためにその素顔が見えた。

その瞬間――サイルは驚愕で目を見開く。

あの黒い髪、目つき、口端から覗く八重歯、全てが過去のものと同じになってしまう。

見間違えるはずなどない。

何故、そんなことは分からない。だが――確かに生きていたのだ。

「アルーグ……っ!」

◎

アルーグはとても人懐っこい性格をした少年だった。

笑った顔が可愛くて、故郷でも皆が友達だと素で言えるほど『壁』を作らず、人を信じられずに皆を遠ざけるように生活していたサイルとは大違いだった。

――オレと結婚してください!!

などと出会って開口一番に言ってきたのは衝撃的だったが。

最初は勿論アルーグのことだって遠ざけた。だが毎日のように顔を出して、いつしかサイルも心を許すようになっていたのだ。

何でもアルーグは受け入れてくれた。

いつも傍にいてくれて、落ち込んでいる時も励ましてくれて。同じ時間を共にしていくことでサイルにとってはかけがえのない存在だったのだ。

いつまでもこの時間は続くと思っていた。彼が成人した時、婚姻の儀をし、ずっと共にいられると思っていた。

だが、一夜にしてその夢は焼き尽くされる。

攻めてきた人間がサイルから何もかも奪ったのだ。

アルーグさえも――

『やめろ……私からその人だけは、その人だけは奪わないでくれ……』  
血に塗れながらもサイルは手を伸ばす。だが、その手は虚しく空を切るだけ。

何故か人間はあれだけの虐殺をしておきながらアルーグだけは連れ去った。何が目的なのか、何故アルーグなのか、それは誰にも分かっていなかった――

◎

「アルーグ？ そんなヤツ知るかア!! くたばれ!!」

「どうして私のことが分からないの!？」

「オレの記憶が二年前からしかねえがテメエのツラなんざ見たことねえよ!!」

鎧を外しキリヤの顔を見た途端にサイルの様子がおかしくなった。

アルーグなどと聞いたこともない名前を言い出し、得意の魔弾魔法を何一つ使わなくなったのだ。

鎧は砕かれ未強化<sup>レベル</sup>に戻ったがおかげで冷静になった。

マナスキンは再び一定となり、キリヤは強化した身体でサイルに肉薄する。

「二年前……? でもアルーグはあの時……」

戦闘中だというのにサイルは何かを考え、しかしそれが明確な隙となる。

跳んで躲したサイルにキリヤは好機と感じ、最大限の魔力放出をもって拳をサイルの腹部に直撃させる。

「が……っ!」

(魔力を回して竜巻を起こすイメージで……ッ!!)

魔力格闘技”獅子螺旋砲”。

ライオネットシャウト

当てた拳から魔力を螺旋に放出。拳を中心に魔の嵐マナを引き起こすことでさらに拳をめり込ませて威力を跳ね上げる。

今の状態で出来る最大の一撃。荒れ狂う魔力の奔流に巻き込まれたサイルはそのまま一直線に回転しながら飛ばされ、遠くの建物へと打ち込まれ砂埃が舞う。

「ハッ！　ざまア見やがれ!!」

拳を握り何とか強敵を撃破したキリヤはすぐさま倒れたフエゴレオンの元へ駆け寄る。

ノエルが布を押し当てて止血する中、サキム二達が懸命に回復魔法を施しており、

「ぜってえ死なせるんじゃねえぞ」

『うんっ!』

サキム二達に任せていれば恐らくフエゴレオンは助かる。

ただキリヤ達に劣勢なのは未だに続いており、キリヤ達を囲むのは新たに現れた五人の魔道士。

「あの方から報を受けて来てみれば……何とも情けない」

「待ちなさい！　アルーグがいるのよ!!　勝手な真似は私が許さないわ!!」

声がしてすぐに瓦礫を押し退けて立ち上がったサイルは拳銃をキリヤ達ではなく、現れた魔道士達に向ける。

仲間であるはずだが向ける殺意は本物であり、魔道士達も肩を竦める。

「……確かにアルーグ様に似ている。しかし、他人の空似であることは否めない」

「だったらリヒトに確かめさせればいいわ！　私が拘束する!!」

「余計な荷物を増やそうとすんじゃねえよ!!」

何やら言い争っているようだが正直サイルには立って貰いたくはなかった。

先ほどの弱体化魔法、思った以上に効いてしまっているようで身体

は倦怠感に包まれ、魔力放出もままならない。

今のところ出せても本調子の四割程度、そして魔力の質から言って相手はサイルほどではないにせよどれも手練れのような。

背中合わせにアスタとなればキリヤは小さい声で言う。

「アスタ、レオポルドと一緒に前の四人頼めるか？ オレはあの女と一人をやるからよ」

「ああ……こっちは任せとけ！」

アスタはそれまでの戦闘で深手を負っていたのか出血が酷い。

しかし、その傷口に大剣と西洋剣を当てて斬れば中から誰かの魔力が出て止血される。

「こちとら生まれて逆境なんだよ……！ 何が来たって撥ね返してやらあ!!」

その言葉をきっかけにキリヤも飛び出す。

困うようにしている五人は一斉に魔力を放つがキリヤは魔導書グリモワールから拳銃を取り出せば一つに向かって投げ飛ばし、もう一つは自らの身をもって受ける。

「コイツ……魔力を吸収するのか！」

魔力を得るも弱体化の効果が続いているせいで吸収した魔力はまるで進レベルアップ化には至らない。

だがそれを見越してキリヤはあの拳銃を投げており、予想通りキリヤと同じように魔力を吸収してくれていた。

「だったら……ッ！」

拳銃を宙で受け取ればキリヤは引き金を撃ち、別の属性を持つ魔道士に直撃。

しかし防護魔法で防いがない、拳銃の反動が強く思わず拳銃を手放してしまう。

「この拳銃は……」

飛んでいった先、魔道士の一人が拳銃を受け取ってしまった。

キリヤも勿論焦ったが何より声を上げたのは――

「すぐに放しなさい!!」

「何を……っ!？」

サイルが焦燥に満ちた声を上げればその魔道士の身体が一度大きく脈動する。

金縛りにでもあったように動けなくなり、やがて一瞬で全身の魔力を吸い取られ、全身枯れ果て倒れる。

あまりにも一瞬のことでよく分からず、キリヤも取るのを躊躇うが自分は普通に触れるようで、

「吸魔の銃」は宿主以外が触れれば全ての魔力を吸い尽くされる。そんなことも知らなかったのかしら……」

（オレも知らなかったけどな……てか下手したらオレあの魔宮で死んでたってことか……）

魔力、魔法が飛び交う中、サイルは呆れた様子で言うがおかげで良いことを聞いた。

キリヤが拳銃を見せれば枯木になる光景を見ていた他の魔道士は一步退く。

それもそうだろう。一度でも触れたら即死なのだから。

だがキリヤがそうしているうちにアスタとレオポルドが風魔法によって撃ち抜かれ、地面に倒れ込む。

やはり負傷しているのが痛手と出たか。次いで降る風の槍にキリヤはアスタ達を庇うために覆い被さり――

（何とかなつてくれ――ッ!!）

全て自らの身体に当てれば痛いのが防ぎきれるが――そうはならなかった。

いや、キリヤの身体に触れることすらなく、キリヤの前に銀の膜が覆って風の槍を防いでいたのだ。

「っ！ この魔力は――」

キリヤが振り向いた先、立っていたのは空間魔法によって飛ばされた団長達だった。

「不本意ながら全員の魔法を組み合わせ戻ってきた」

「違う団とは相容れぬ――だが、我ら九つの魔法騎士団はクローバー王国の平和のためにある」

「そんなもの……ッ!!」

「サイルは重火器を装備し、キリヤへ向けて撃ち放つ。

「魔弾拘束魔法」スプレッドイアバースト 獣捕獲網弾」。

また魔弾かと思えば空中で魔力の網となりキリヤに向かって広がり落ちるが――

「こんな程度――」

キリヤは拳銃を仕舞い手を構えたところで視界が唐突にぼやける。

瞬間、地面から荊が噴き出した間欠泉の如く湧き出し網の行く手を阻む。

見れば傍に立っていたのはシャーロット。柄しかない西洋剣からは夥しい数の荊が飛び出しており、サイルのことを睨みつける。

「姫様……」

「下がっている」

「でも――」

「弱体化魔法を受けている者に守られるほど私は弱くない。そこに転がる男共とサキムニから治療を受けろ」

「そうだぞ。オマエは……ま、まあ頑張った、方だ！」

何だか照れくさそうに言うソルの脇に抱えられ、キリヤは前線から下げられる。

邪魔をされたサイルは心底機嫌が悪いのか眉間に皺を寄せ、

「私の邪魔をするなら貴様から撃ち殺すぞ」

「吼えるなテロリスト反逆者、騒がずとも貴様ら全員見逃すつもりはない」  
露骨な怒りと静かな憤り。

物言わずとも二つの巨大な魔力は水面下で闘ぎ合う――

## 26話 「再会」

「待てサイル、オマエもあの小僧との戦いで疲弊している。このまま戦えばただでは済まない……退こう」

今にも襲い掛かってきそうだったサイルを制したのは屋根から飛び降りてきた空間魔法の使い手だった。

冷静に大局を見た判断だがサイルは聞く耳を持たず、

「アルーグが目の前にいてどうして退けるか……っ!!」

「……仕方ない」

先に空間魔法の使い手が手を横に薙げばサイルだけが黒い穴に飲み込まれ消える。

恐らく強制的な空間転移、そして空間魔法の使い手は魔道士達の元へ行けば――

「そう急くな」

ノゼルは言った傍から相手の上空から銀の雨を降らせる。

しかし雨は注射器から何かを注入されたゲル状の蜥蜴によって防がれ、アスタもそのゲル状の蜥蜴の腕に飲み込まれてしまう。

「アスタ!!」

「覚えておくがいい魔法騎士団――我らはへ白夜の魔眼、このクローバー王国を滅ぼす者だ」

そう言い残し、黒に飲みこまれた魔道士達。

姿は忽然と消え、残されたキリヤ達に一瞬の沈黙が訪れる。

「アスタが連れて行かれるなんて……早く助けないと……ッ!」

「魔力の色は覚えている。サキム二達に感知させればまだ間に合う!!」

『ご主人、ここからかなり遠いけど……』

「大丈夫だ、全速力で行けば五分もいらねえ!　ここにいるオマエらはフェゴレオン様の治療を続ける。残りはオレに魔力を――」

今にも飛び出そうとするキリヤに腕を出して制したのはノゼルだった。

睨むキリヤに意すら介さず冷淡にノゼルは言う。

「ダメだ。敵があれだけとは限らない以上、王都の守りを固めるのが



先決だ。負傷者の手当ては完全に終わっておらず、ここに限らず貴様の精霊も必要となる。あのような者に割ける時間も魔力もない」

「だったらオレ一人でも——」

王都の防衛、魔法騎士団としてすべきことは分かる。

だがキリヤにとつてアスタは友達であり、見捨てるなど選択肢にならない。

一歩踏み出すキリヤ。しかしその足から不意に力が抜け、キリヤの身体は地面に倒れる。

「クソ……っ！ あの前体化魔法がまだ……」

時間が経つにつれ消えるかと思えば未だにその効果は衰えず、何ならキリヤからさらに魔力を奪い、体力までも奪う。

歯噛みしているうちに負傷者の手当てを終わらせたサキム二数匹が戻ってきてキリヤの解呪、治療を始める。

『ご主人、今の状態危ない。だから安静にしてて……』

「ちくしょうが……ッ！」

「はっ！ さっきまでエラソーにしてたヤツが地面に這い蹲つてるとはイイ気味だぜ！ それに団長ともあろう者まで地面に倒れてやがる。ヴァーミリオン家も落ちたもんだ！」

倒れたままのキリヤの前に立ったのはソリド。

見下ろしてくるソリドにキリヤも自分だけならまだしもフエゴレオンまで言われれば奥歯を噛み締め、拳を握り締め地面を叩く。

「黙れソリド」

だが意外にもソリドに口を挟んだのはノゼルだった。

「魔法騎士団は勝たなければならぬ。だが、この場になかった我々はヴァーミリオン家もこの男も何一つ責めることは出来ない。現にこの男は国王の危機を誰よりも早く察知し、負傷者に対する治療の手立てもしてみせた。余計に我らがこの男達を責められる道理はない」

「……………はい……………」

見下ろし気分を昂ぶらせていたソリドもノゼルに一喝されればすぐさま萎縮する。

魔法騎士団がそれぞれ守りを固める中、シャーロットはキリヤの前に膝をつけば視線を合わせ、

「……国王の身は？」

「……………割とメチャクチャしましたが生きています。でも、オレがもつと上手く立ち回れていればフエゴレオン様は——」

言葉の途中でキリヤの頭にシャーロットの手が置かれる。

次いで優しく撫でられ、目を丸くするキリヤにシャーロットは静かに言った。

「貴様によつて多くの者が救われたことに変わりはない——よくやった。今は安静にしておけ」

『ご主人、負傷者の治療終わったヨ。次はどうすル……？』

良いタイミングでそれぞれ散っていたサキム二達が姿を見せる。

それぞれ心配した表情を見せてくるもキリヤは手近な一匹の頭を撫で、

「オレは大丈夫だから余ったヤツらは他の魔法騎士団のヤツらと一緒に王都の守りを固めてくれ。終わったら一匹通じて連絡送るから」

『わかつター！』

サキム二達は指示を聞けばまた数を分散させて散り、それぞれ魔法騎士団の指示に従って動き出す。

シャーロットも去った今、キリヤは静かに仰向けになれば天へ手を伸ばし、

「もつと、もつと強くなりてえな……」

◎

テロリスト——〈白夜の魔眼〉によつて引き起こされた王都襲撃は幕を閉じた。

王権派は魔法帝に責任を追及したが民衆の支持は大きく魔法騎士団への期待が高まったことで事なきを得る。

敵侵入の要因となったのは王都の魔法障壁を張る一部魔道士の失踪。寝返りか消されたか、双方の意見に分かれるだろうがこの件においてキリヤは今回の一件を裏で手引きした王都の魔道士がいると考えている。

アスタに関しては何白夜の魔眼の魔道士に連れ去られたものの、偶然へ白夜の魔眼の出現地点を予測し待ち伏せていた魔法帝によって救われ何とか無事に戻ってこられた。

一方、キリヤによって救われた国王だったがキリヤの対応が気に入らず色々言ってきた。だが負傷者の保護、結果的に国王の命を守るために尽力を尽くしたことを魔法帝から考慮、説得されたことから処罰は免除。

今回の働きによってキリヤはさらに星を進呈され、結果的に三等上級魔法騎士にまで上り詰めてしまった。

シャーロットに頼んで休暇を得たキリヤが今向かっていたのは――森。

恵外界に存在する森の中にキリヤはやってきており、すでに目当てとなる魔力は感じていた。

木々に覆われた茂みを抜ければ森林の中でも広い草原へ出る。

中心に巨大な獣に座り込んで焼いた肉を頬張っていた相変わらずのメレオレオナ。

キリヤの気配に気付き振り向けば無表情のまま近付いてきて――

「何だその腑抜けた面はアアアアアアアアアア――!!」

開口一番怒号からの顔面へ拳骨がキリヤへと襲い掛かった――

◎

「――ほう、王都でそんなことがあったのか」

再会して十秒も経たずに殴り飛ばされたキリヤは正座して、王都襲撃事件のことをメレオレオナへ話していた。

メレオレオナは腕を組みながら一応聞いてくれてキリヤの声は途中から小さくなっていく。

「フエゴレオン様だってオレがああ女に苦戦してなかったら片腕だって無くならなか――」

「驕るなアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア――ツ!!」

再会してまだ十分も経っていないうちに二発目の拳骨。

一際強い拳骨にキリヤも大の字で倒れて起き上がれず、メレオレオナの魔は燃え上がる。

胸倉を掴まれ起こされたキリヤにメレオレオナの顔が間近に迫る。  
「イイか糞莫迦弟子。その時の貴様は国王を守るために狙撃手と戦っていたのだろう。そして愚弟は市民を守るために戦っていた。貴様の言う『手の届かない』場所にいたということだ。それに愚弟は曲がり形ナリにも団長、貴様の助けなど要らぬ」

フン、と鼻を鳴らしたメレオレオナは言葉を続ける。

「貴様は貴様に出来ることをし、愚弟は愚弟の出来ることをしていた。たればを語り勝手に気に病むなどそれは愚弟を冒瀆する行為だ。少しでも悔やむ気持ちがあるならばそれを糧にして今よりも強くなれ」

「レオナ様……抱きついてイイですか？」

三発目の拳骨。

怒りが静まったと思えばメレオレオナはそれよりも大きな怒りポイントがあつたようで、これまでにないほど魔マナが燃え上がる。

「何より気に入らないのは貴様が負けたことだ!! あれだけ戦闘中に己を律することも出来ないのは莫迦の極みだと教えてやったのに冷静さを失って弱体化魔法を打たれて負けただど!? 不甲斐ないにも程があるぞ大莫迦者がアアアアアアアアアアアア!!」

「ま、負けては……ないです。負けかけたただけですよ……」

「言い訳するなアアアアアアアアア!!」

本日四発目の拳をぶつけられ、キリヤはまたダウン。

これだけ殴られて鼻血すら出ないのは流石に二年以上同じ時を過ごしたからかもしれないがそれどころではない。

「私は弱い者に興味はないと言ったはずだ!! 私に負けるならまだしも他の女に負けるとは何事だアアアアア!!」

「ごめんなさい!! でもオレはもうレオナ様以外には負けないからどうか嫌いにならないでくださいア!!」

「嫌いだったら会話すらせんわアアアアアアアアアアアアアアア——  
!!」

五発目。今日は短時間でいつもよりも多く殴られてしまっている。だが言いたいことは言い終えたのかメレオレオナの怒りの炎は静

まり、再び腕を組む。

「貴様にはまだ修行が必要なようだな……」

「え、修行つけてくれるんですか!? でもオレ休暇三日しか貰ってないですけど大丈夫ですかね!？」

「甘えるなアアア!! 全ては貴様次第だ!!」

六発目。

今日は不機嫌なメレオレオナに拳骨されまくりなキリヤは小刻みに震えながら正座の姿勢に戻ると一瞬の静寂。

何だと思えば――

「よし、日光浴に行くぞ」

「……是非行かせてください!!」

何だかこの流れで数多もの危険地帯に行つた記憶があるがキリヤはやる気を出して拳を突き上げる。

◎

世界各地には巨大な魔<sup>マ</sup>が渦巻き危険地帯とされている強魔地帯というものが存在する。

キリヤがメレオレオナに連れて来られたのはそうした危険地帯の一つで――

「この魔<sup>マ</sup>は陽の光に愛され、山頂でその魔<sup>マ</sup>を浴びれば疲労も吹き飛び自らの魔力も活性する!! どうだ! 楽しみになつてきただろう!？」

「ごめんなさいレオナ様! がしやんがしやん言い過ぎて全然聞こえません!!」

眼前ではあたり一面大量の岩塊が大小問わず絶え間なく地面に向かって炸裂し続けていた。

砂埃も酷くヴアルサ岩山と言われているが山の姿など見当たりすらしない。というより今キリヤ達がいる場所から一步でも進めば挽<sup>ミンチ</sup>き肉不可避。いや轆<sup>リンチ</sup>き肉と言つた方が正しいか。

「さあ行くぞオオオオオオオオオオオオオオ――!!」

「いやいやいやいや流石に死にますって!!」

相変わらずめちやくちや過ぎるメレオレオナにまた振り回される

キリヤだった――

## 第4章く修行&窮地編く

### 27話「氣」

「何だ貴様、強くなりたいたいのはなかったのか？」

「そうですけど流石に何の説明もなくいきなり岩の弾丸浴びたくないですよー！」

「だから説明しただろう。ここの魔マナを浴びれば——」

「そうじゃなくて！　ここでどんな修行するかの説明が欲しいです！！」

キリヤが説明を求めるとメレオレオナは振り返り、仕方ないと言わんばかりに説明を始める。

「今からこの降り注ぐ岩を掻い潜って山の頂上を目指す。無論ただこの中に入れば即死は間違いない。だが、五感全てで“流れ”を読めば話は変わってくる」

言ってメレオレオナは後ろ歩きで岩の霰の中に身を投じる。

あまりにも自殺行為。キリヤはすぐさま手を伸ばすがメレオレオナは構わず、姿が見えなくなったかと思えば少して戻ってくる。

その姿は無傷であり、キリヤもこれには啞然とする。

「貴様はこれまで実戦経験によって“流れ”を掴むことで防ぐ、躲すなど出来ていた。だがまだ甘い。対人戦では相手の目線、呼吸音、二オイ、筋肉の動き、気配など人間ヒトの“流れ”は多岐によって存在し、それを読むことで相手の次の行動を予測して自らも一手投じられる」

「おお！　でも今関係ないですよね!？」

「……話は最後まで聞かんか莫迦者。先ほど言ったのは異国で“氣”というもの。だが“流れ”が存在するのは何も人間だけではない——自然にも“流れ”は存在する。空気の流れ、魔マナの流れ、集中し全てを五感で感じる。目で捉え、耳で捉え、皮膚で捉え、舌で捉え、鼻で捉えろ。“流れ”を支配すれば誰にも負けることはない」

「何だか分からねえけどスゲエ！　オレ、頑張ります!!」

これまでの修行だつてこの岩雨に巻けず劣らずの場所で練り広げ

られてきたとんでもないものばかり。

失敗イコール死だが今までのもさほど変わらない。何なら実戦経験でも何度か火達磨にされて死にかけて記憶だつてある。

と、メレオレオナは自らの手の平に魔力を灯せばキリヤにぶつける。

「――命の保障だ。これで進レベルアップ化出来るだろう」

先に行っているぞ、その言葉を最後にメレオレオナは岩が渦巻く中へ入って姿を消してしまふ。

早速キリヤも“強化レベル2・ガイガーアツク鎧旋”を身に纏い、息を吐く。

そして集中し、五感で感じる。

（いぎ――）

「あいだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだッ!!」

集中したところで岩の嵐渦巻く中に入れば一瞬で弾雨に曝される。

急いで飛び出せばキリヤはぜえぜえと荒い息を吐く。

そもそもマナスキンでカバーしているから良いものを目には砂埃一色、耳にはガシヤンガシヤンとけたたましい音しか聞こえないし、皮膚なんて鎧で塞いでしまつてるし、味はもはや砂、鼻も砂臭さしかない。

こんなもの次入つたところで同じことの繰り返し――

（いや違う。そもそもその話はそこからじゃない。何でレオナ様がオレに魔力をくれたか、だ）

いつも修行時に命の保障などされたことがない。

基本やりきるか死ぬかの二択。その方向性が急にスタンス変わるなどあり得ないことだ。

つまり――

（引つ掛けだ！）

一目見て分かる。こんなところ何の装備もなく行けばただ死ぬだけだ。

しかし、目の前で歩いていったメレオレオナは死ぬどころか傷一つ付いていない。

要約すれば（マナスキンありだが）生身で行つても死なないのだ。



わざわざ見せたのは出来る可能性を示すため。

それに過剰スパルタなメレオレオナが命の保障などしてくれるはずがない——ツ!!

「だったらオレも鎧なんていらねえ!!」

“流れ”を読むことに初心者なキリヤに鎧を纏ったままなどまだ早い。

感覚を研ぎ澄まし、“流れ”を掴む。

遠くにあるのならば手繰り寄せればいい。走って手掴みにいけばいい。

自分は莫迦者だから愚直に突き進むことしか出来ない、そう心の中で思えばキリヤの目の色が変わる。

一度目は恐る恐る入っていたが二度目は前のめりに突入する。

視界は砂だらけ。耳もけたたましい音の連打。だが集中すれば一つ一つの音が違う。

さらに魔マの流れを的確に掴み、マナスキンのおかげで身体能力は格段に上がっているために拳を振らずとも岩の雨を躲せる。

肝心の山はどこなのか、足下すらまともに分からないが風の流れを肌で感じる。

集中、集中、ただそれだけを胸にキリヤは突き進む——

◎

「その様子だと上手く掴めたようだな」

山頂は下界で起きる岩の惨劇が嘘のように静かな場所でメレオレオナはふと振り返る。

そこに立っていたのは砂埃だらけではあるものの特に傷は見られないキリヤ。

ふう、と一息吐くとキリヤは笑い、

「これぐらいどうってことないですよ」

「だろいな。まだこれは修行の本丸ではないからな」

「……マジですか」

山道を登ってきてこれからメレオレオナとのほのぼの日光浴タイムかと思っていたがまるで違った。

何より冗談を言わないメレオレオナのことだから本当のことだろう。

不敵に笑うメレオレオナは言葉を続ける。

「この山にはある精霊がいてな——出て来い、ノーム」

メレオレオナがその名を呼べば山頂は突如とした地震に襲われる。

何が来るのかと思えば山頂自体にとつもない魔を感じ、キリヤが一步退けば山頂は二つに割れ、そこから飛び出したのは——二つの拳。

いや、拳というよりも岩で横した籠手と言うべきだろうか。それぞれ五メートルはある二つの拳は誰の支えもなく浮遊し、その登場にメレオレオナも笑う。

「コイツが土の四大精霊ノーム。私も戦ったことがあるが最硬の防御力を持つだけあって手強いぞ。〃流れ〃を掴んだ記念だ——勝ってみせろ」

四大精霊——確か何かの拍子にシイナに聞いたことがあった。

何せ数多い精霊の中でももつとも純粹な属性の魔で創られた存在が四大精霊なのだ。

現にキリヤの眼前にいるノームと称された精霊は隅から隅まで土属性しか感じない。

「戦うってことになってるけどノームくんはイイのか!？」

『無論。しかし、一つ問いがある』

サキム二達が言葉を話せるのだから多分いけるだろうと思えば案の定返事が返って来た。

聞く耳を持てば人差し指を立てたノームは問う。

『疑問。何故貴様は〃強さ〃を求める?』

「理由は三つある!!」

向けられる無骨な言葉にキリヤは腕を組んで即答する。

「一つ、レオナ様と結婚するためには強くなかつちやいけねえ! 二つ、オレが守れる〃手の届く範囲〃を広めたい! 三つ——もう二度と自分の弱さで後悔したくねえ!!」

『理解。ならば拳を合わせよ。それこそ戦の火蓋』

「ああ」

ゆつくりと差し出された巨大な拳にキリヤも自らの拳を当て、触れた瞬間に互いは同時に拳を離す。

直後、二つの拳が真正面からぶつかり合い天に浮かぶ雲を割る――

◎

(かっつっつてえ!!)

最硬の防御力を持つと言われていただけあり素手でぶつかり合えばキリヤの拳が痺れる。

しかし、キリヤは一步も退かない。次々と突き出される拳の連打に自らも拳の連打で迎え入れる。

『感心。ならば次の一手』

ノームは左手を地面に擦れば土を握り締めキリヤへと放つ。

単なる目眩ましではなく、投げられて散乱した土全てが新たな拳となりキリヤへと迫る。

「こんの程度……ッ！」

キリヤは魔力をさらに凝縮させて放った瞬間、拳から反対方向に魔力放出して引き戻し、そうすることでさらに加速した殴打を放つ。

増えた拳にも対応するキリヤに今度は拳を地面に叩きつけて地面を割る。すぐに躲したキリヤを挟み込むようにして棘付きの岩の壁が出現し両側から勢い良くキリヤを押し潰す。

「もつと来いよ四大精霊!!」

“レベル2・ガイガーアツ強化鎧旋”を身に纏ったキリヤが岩の壁を蹴り破って飛び出す。

所詮この程度は四大精霊にとってお遊びも良いところだろう。

キリヤが手招きすれば今までと違い、ノームの身が一つの斑点が浮かび上がったと思えば表面が銀色に染まる。

(あのヤベエ前髪団長の魔法みてえだ……)

銀、その色にキリヤはノゼルを思い出すがあれは水から派生したものの。

土から派生したとなれば当然――

(硬度が上がるよな!!)

拳を受け止めれば先ほどとはまた別段階の硬度を見せてくる。

キリヤも進化しているがそれは相手も同じ。すでに進化レベルアップしているようにも同等であり、背後から不意打ちで迫る銀の刃の動きを読んだキリヤは魔導書グリモワールから拳銃を引き抜く。

(飛んでくるものだったら死なねえよな!!)

拳銃を振るい、その銃身を飛んで来た銀の刃に当てればすぐさま刃は消え去る。

外部から魔力を得たことで弾が装填され、引き金を引けば銀の銃弾はノームの左拳を狙う。

正面から銃弾を受けたノームの左拳は自らと全く同じ硬度の銃弾を受け輝ヒビが入り、キリヤは拳銃を仕舞えば次いで二匹のサキムニが飛び出す。

「サキムニ！ 押し出してくれ!!」

『了解、ご主人ツ!!』

跳んだキリヤの靴裏をそれぞれのサキムニが自らの跳躍力を加えて初速から桁違いの速度を見せて蹴りを放つ。

爪先から入ったキリヤの蹴りは左拳の輝ヒビを的確に捉え、貫き着地する。

「まだまだこんなモノじゃねえよな！」

次いでノームの拳は金色に染まる。砕けたはずの左拳は合わさって復活し、迫る拳の速度はさらに上がってキリヤは回し蹴りで捉えるも違和感に気付く。

(まだ上がるのか……ツ！)

返しと言わんばかりに具足に輝ヒビが入り砕け散る。

素足が露わになったキリヤだが速度を上げるノームの連撃を躲しながら魔導書を輝かせる。

「行くぜサキムニ！ 力を貸してくれ!!」

身体進化魔法” 兎々レベル3・ビビットアーマアルナフ戦の鉄鎧”。

兎の耳の如きV字が兜に刻まれればキリヤの魔力、身体能力はこれまでにないほど上昇する。

魔力格闘技” 狩兎獅子旋刃”。

サキム二達の跳躍力によって加速した蹴りが両拳と激突すればキリヤの魔力は一気に放出され、獅子の爪が嵐のように吹き荒れる。

その威力はノームの両拳を吹き飛ばし、手首から先がなくなつたノームにキリヤは手招きする。

「悪いな、惚れた女の前なんだ。流石に二度目の負けは刻みたくねえ」  
対しノームは静かにさらなる魔力を灯す――

## 28話 「レベル4爆誕」

「……………」

メレオレオナに格好良く見せようと決めポーズまでしたがキリヤの眼前でノームは奇怪な行動を取っていた。

復活した自らの拳同士でひたすらにぶつけ合っていて、いつしか熱を帯び、金色などどこへやら自らの熱で発光するまでになっている。

その光景に首を傾げるキリヤだが――

「莫迦者が……………」

戦闘を見ていたメレオレオナの一言でキリヤは今ノームがしている行動が危険なものだと察知する。

だがすでに準備し終えたのかノームの両拳から蒸気が噴き出しその姿が一切見えなくなってしまう、しかもその蒸気はとてつもない熱を持ってキリヤも思わず目を腕で覆う。

『見事。ならば我も本気出す』

蒸気を吹き飛ばし現れたのは全身を水晶の如き透明度を持った美しい宝石と化し、さらに人型となった鎧姿のノームだった。

丁度キリヤと同じ身長でどうにもノームはどこまでもキリヤと真正面から張り合いたいらしい。

「受けて立アつ!!」

サキムニの跳躍力で跳び出したキリヤは先ほどよりもさらに威力を秘めた必殺の蹴りを放つ。

しかし、あまりにも硬い感触に歯を食い縛る。

土精霊創成魔法“網状敷の絶対防御壁”。

キリヤとノームの間には半球状の透明な壁が出来ており、完璧に防御されてしまっていた。

しかもただの壁ではない。今もノームの身体を覆っているあの最高硬度を持つ鉱石を幾重にも網目状に組み合わせることで何よりも硬い防御を創り出している。

両拳を合わせ再度壁に拳を叩きつけるも突破することは出来ない。

代わりにキリヤの周りから切っ先が鋭い金剛石の塊がいくつも飛び出し、軽い身のこなしで躲す。

メレオレオナが課題にしていた“流れ”を掴む。過去の経験もあってこれはほぼ完成されてきたがノームを倒すにはこれも“レベル3・ビビットアーマルナフ 兎々戦の鉄鎧”も正直足りていない。

別にサキム二達を責めるわけではないがただ単純に今回の相手との相性が悪いのだ。

「だったら——ッ!!」

キリヤは一度下がりがりながら“レベル3・ビビットアーマルナフ 兎々戦の鉄鎧”を解除し、“レベル2・ガイガーアツフ 強化鎧旋”に戻ればグリモワール魔導書から“吸魔の銃”を取り出し前方へ構える。

「今回も力を貸してくれ! レベルアツフ 進化!!」

身体進化魔法” 斬鉄の吸魔鎧”。

魔力が火花の如く散れば凶悪な形状になった鎧を身に纏い、キリヤの手には拳銃ではなく銃剣が握られる。

間髪入れずに絶対防御と化した銃剣を叩きつければ先ほどの堅固さは嘘のように切り裂かれ、キリヤは銃口をノームに向ける。

「さっきみてえに自滅しろー!」

金剛石の弾が火を噴き放たれる——が、ノームは間近にいたにも関わらず弾が飛ぶ寸前にキリヤの背後を遠くから取っていた。

さらに両手を前に突き出したノーム自身の身体が発光すれば——

“土精霊魔法” ダイヤレイジングミサイル 金剛王の弾丸”

ノームの十もの指先から数多もの金剛石弾が発射され、キリヤは即座に銃剣を振るう。

近付こうにもこの距離。そして初めて気付いたがこの鎧は——  
(アルナブよりも速度が落ちる……っ!)

サキム二達の力があってこそ爆発的な加速を得られていたがいざ比較してみれば分かる。

“レベル3・ガンドレイドラマー 斬鉄の吸魔鎧”が使いにくいわけではなく、単純に今はこうなってしまった以上近付く術がない。

延々に続く金剛石の弾丸。意識がそちらに集中した途端、これまで

と同じ巨大な拳が迫っており、防御するも具足が浮いてその場から飛ばされる。

「わ、わわっ！ レオナ様危ねえ！」

飛ばされた衝撃で背後にメレオレオナに危うくぶつかりそうになるが具足の裏を地面に叩き込み失速させることでどうにかメレオレオナの眼前に停止。それにしてもキリヤが吹き飛ばされてきたのに物怖じず動く気配すらなかったのは流石の胆力と言うべきか。

「貴様は莫迦正直過ぎる」

「……え？」

「一つに囚われ過ぎているから今追い詰められているのだ」

「一つに……つとー」

側面から迫る金剛石の弾丸。

キリヤは地を蹴って後退し、メレオレオナから離れば言葉の意味を考えさせられる。

（一つに囚われ過ぎている……つて、もしかして——）

と、ある考えが浮かんだ瞬間に金剛石の弾丸がありとあらゆる角度からキリヤを撃つ。

金剛石の塊となったキリヤの姿に空気は静まり返り、ノームも構えていた両手を下ろせば——

「——いやまだだぜ!!」

『ツー!』

金剛石の塊を蹴り飛ばし、キリヤは中から復活する。

この程度ならば銃剣で削り取ることができ、そして何より思いついてしまった。

キリヤは再び現状を解除すれば、レベル2：ガイガーアップ強化鎧旋レベルアップに戻れば左手にサキムニを、右手に“吸魔の銃”を構え、不敵に笑う。

確かに誰が言ったのだろうか。決めたのだろうか。

否、誰も言ったわけではない。

——鎧に付与出来る力が一つではない、と。

「サキムニと“吸魔の銃”、二つ合わせて進レベルアップ化だ!!」

二つの力を混合ミックス。



凶悪な形状と化した鎧にV字の装飾が成された兜。まさに二つの要素を掛け合わせた新たな姿。

身体進化魔法”レベル4・ラビレイドナラーム魔兎戦ノ霊鎧”。

力、速度、魔法吸収、二つの全てを兼ね備えたキリヤは地を蹴れば一つだけの時よりも速く、ノームに肉薄すれば後ろ回し蹴りが炸裂する。

両腕を交差させ防御するノームだがその絶対防御を蹴りは引き剥がして吸収、強烈な威力の放出を同時に行われ後方へと飛ばされる。

“吸魔の銃”の出力を加減し、されどノームの金剛石を吸収出来る程度にキリヤが行った力の調整。

飛ばしたノームの身体にはキリヤが蹴りと同時に打ち込んだ魔力の楔が見える。

何よりこうして“吸魔の銃”と一体化することで気付いたことがある。

それは――

(覚えた魔力を逃がさねえってことだッ!!)

銃剣から煙の如く黒い魔力が噴出すればキリヤは魔力放出し、飛んだノームを楔を目印に追尾する。

いくら金剛石の弾丸が飛んでこようとすでにキリヤの鎧はその威力すら通さない。むしろ金剛石から魔力を吸収することでさらに加速する。

「そうだ。それでいい」

メレオレオナの言葉、同時に黒い刃は尾を引き空に閃光を刻む。

籠手と組み合わさった銃剣は爪と化し、その状態から放たれる不可避なる一撃。

魔力格闘技”ライオネルオデイシャウト獅子黒閃吼”――ッ!!

『……見事』

絶対防御など関係なく真つ二つに両断されたノームは一言そう言い、キリヤは地に着地する。

と、すぐに――

「ああ！ やっちまった！ ごめんノーム大丈夫か!？」

『不配。我の実体そこに非ず』

見れば“流れ”が地中から押し出したかと思えば、服を着た白い鼠が現れる。

手の平に乗る大きさを鎧を解除してとりあえず手の平に乗せてみると、

「も、もしかしてオマエ……ノーム？」

『首肯。我、開幕から地中にて見守っていた』

「勝負はついたみたいだな。どうだノーム、私の莫迦弟子は？」

『僥倖。然らば認めるしかあるまい』

「？」

どうにもキリヤが知らないところで話が進んでいるようで首を傾げる。

だがすでに話は決まり、キリヤの魔導書グリモワールが輝いたかと思えば開いた白紙のページにノームが手を触れる。

「え、え？」

『世受。これから頼むぞ——我が主君よ』

「どゆこと!？」

『よろしくー。ボク達はサキムニ』

『了承。我こそ宜しく頼む』

ノームの手が触れればキリヤの魔導書に新たな魔法が刻まれる。

魔導書から出てきたノームはサキムニ達から歓迎されており、どうにも状況を理解していないのはキリヤだけのようだ。

「貴様の魔法が何かを鎧に付与することは分かっていた。だからこそさらなる力のためにノームに話をつけていたのだ。貴様を見て認めれば力を貸してやって欲しいと」

「レオナ様……ありがとうございます！」

「ええい鬱陶しい！ いちいち抱きつくくな！」

抱きつけば押し退けられ、それでも根性で抱きつき続ける。

と、キリヤは結局頭に拳骨を受けて地面に屈み込み、そうしているとサキムニ達に胴上げされていたノームが降りてキリヤの前に向かってくる。

「言い忘れてた！　これからよろしくなノーム！」

『合拳。こちらこそ』

互いに拳を合わせ、キリヤは笑ってみせる。

その様子を傍で見っていたメレオレオナは口元に笑みを浮かべ、

「精霊に愛される、これも全て魔マに愛される天賦の才があるからこそか」

「……？　どうしたんですかレオナ様？」

「フン、せっかく新たな力を手に入れたのだから試してみる。喜べ、今度は私が相手してやる」

「イインですか!？　今オレ”流れ”完全に来てますから勝っちゃいますよ!？」

この後、めちやくちや敗北したのは言うまでもない――

◎

女の人生は全て”痛み”によって形成されていた。

魔導書グリモワールを授与される三年前、十二の頃から厳しい鍛練を強いられ、痛みの中で友人が一人、また一人と鍛練に耐えられず息絶えていく。

授与されればより厳しい環境に立たされた。富国強兵を掲げているスピード王国に”甘え”や”妥協”など存在するはずもなく、また周りから人間が消えていく。

ただひたすらに研磨され、数多の”痛み”を超えて女はへ七剣総統まで登り詰めた。

しかし、どうして女はそこまで出来たのか。

生きたい、要因の一つとしてはそれもあつたかもしれない。

だが何より、愛した男ヒトがいたからだ。

”生”か”死”か、そんな世界でその男は自らを失うことも泣く、狂うこともなく優しさを持ち続けた。

その男に女は憧れ、いつしか”愛”するようになっていた。

愛は女の胸を焦がし、傷ついてもいないのに”痛み”を覚えていた。

それでも――女の気持ちは届かない。

すでに男には婚約者となる女性がいたのだ。国王が認め、より強い

戦士を生み出すための——政略結婚。

男は女の手の届かない場所にいた。

ただ男を想えば女は満足だった——なのに、男は婚約者と共にス  
ペード王国から逃げ出した。

理由は分からない。だが国としては逃がすわけにはいかない。

女は部隊を率いて男とその婚約者を追った。

追って、男によって胸元に酷い傷を受けることになってしまった。

——痛い。痛い。痛い……。

愛するが故に痛い。愛した者から受けた傷が痛い。

何だ。結局人間の全ては“痛み”によって形成されているではな  
いか。

ならばこの愛を男にも与えよう。今まで自分が募らせていた想い  
をぶつけよう。

女のタカはそこで大きく外れてしまった。

男も、その婚約者も、同じように罅り殺し、女は——狂った。

(随分懐かしいことを思い出したわね……)

あの時、魔宮ダンジョンによって現れた少年によって捕まり、捕虜とされた女  
は牢獄の鉄格子から空を見上げる。

魔導書グリモアールを取られ、魔力も拘束具によって抑えつけられているが——  
(この程度、私を抑えるにはまだまだ足りない)

見張りはこの時間帯一人となる。

ならばすぐさま女は牢屋の壁を思い切り蹴り込む。衝撃は壁を伝  
い、牢屋の壁を背もたれにしていた見張りの背中から心臓を破裂させ  
る。

即死だ。女は器用に倒れた見張りの腰元から鍵を奪えば自らの拘  
束具を外す。

「待ってなさいボーヤ……私はあの程度じゃ終わらない」

名はベレラファスラ。

キリヤスファイルによって地下深くで拘束されていた〈七剣総統〉

## 29話 「貴様程度」

「あれー……おっかしいなあ。何でオレ空を見上げてるんスカね……？」

四大精霊ノームの力を手に入れて早速使ってみたがキリヤはメレオレオナに敗北。

いつもと同じように空を見上げており、日光浴させられていた。

絶対防御のはずなのにメレオレオナは普通に殴り突破してきてこれには文句ものだが――

『謝罪。あの人間、素で我が壁を打ち破りし者』

「シンプルにバケモン……でも好き！」

起き上がるとメレオレオナにはまだまだ余裕がありそうで、まだ結婚の道まで程遠いことが思い知らされる。

だがここで一つキリヤに疑問が頭を過ぎる。

「何でレベル3二つを掛け合わせたのにレベル33にならないんだろ……？」

「莫迦者が。足したところで六だ。組み合わせられるといっても相性があるのだろう」

「なるほど！ 流石レオナ様！」

ともあれ恐らくここで今回の修行は終わり、だがキリヤは「そうだ！」と思い出したように懐に仕舞っていた魔道具”何でも仕舞えライオン”を取り出す。

獅子を模したガマ口の財布になっているこれは専用の異空間にほぼ何でも物ならば仕舞える便利品であり、計算実践の時に闇市で購入していたのだ。

メレオレオナが訝しげに見る中、中身を手で探るとカメラを取り出し、

「レオナ様これ――」

「――見つけたわよボーヤ」

言葉を遮るように上空から何かに着地したと思えば砂埃が舞い上がる。

しかも今の声には聞き覚えがあり、煙を裂いて現れたのは——ベレラファスラ。

キリヤが魔宮ダンジョンで戦ったへ七劍総統の一人であり、その顔はまだ一応鮮明に覚えていた。

「あ、オマエ!!」

「ボーヤのおかげで散々な目に遭ったわ。まあ気持ち良かったからイイものの、やっぱり負けっぱなしってのは癪だしね」

今度は棍棒を持ち合わせていないベレラファスラは不敵に笑いながら岩石創成魔法によつて前回と同様に岩の大斧を創り出す。

何せタイミングが悪い。キリヤはノームからのメレオレオナに全力でぶつかつたばかりでそう体力は戻っておらず、しかしメレオレオナで甘えた態度など見せられずに跳ね起きる。

「レオナ様下がっててください！ コイツ一回戦つたことあるヤツなんだ——」

「下がっているのは貴様だ莫迦者」

前に出ようとするキリヤにメレオレオナは即座にアイアンクロー。そうしてキリヤの前に出たメレオレオナはベレラファスラの顔を見て一つ問う。

「貴様が莫迦弟子を負かせた女か？」

「フフ、そうじゃないけど。でも幸運ラッキーね、ボーヤの師匠まで一緒にいたなんて!!」

ベレラファスラは地を蹴つてメレオレオナに肉薄。

その速度は魔宮で戦つた時よりも遙かに速く、“流れ”を読めていなければキリヤにも分からないほど。

爆発的な力と加速力によつて大斧は横薙ぎに振るわれ、メレオレオナの首を狙う——

「レオナ様っ!」

「——狼狽うろたえるな莫迦者が」

大斧の一撃は的確にメレオレオナの首を捉えたように見えた。

だが見れば首の寸前で止まっており、何より——メレオレオナが素手で止めていたのだ。

単純な握力で大斧を砕いたメレオレオナは拳を握り締め、炎の魔力を凝縮すれば――

「貴様程度に負けていたならば絶縁していたぞ、キリヤ」

炎魔法”カリドゥス・ブラキウム灼熱腕”。

メレオレオナが放った炎の鉄拳がベレラフアスラの顔面に突き刺さり同時に爆発。

凄まじい威力は留まることなくベレラフアスラを吹き飛ばし、その身はすぐさま見えなくなるほど果てしなく飛ばされる。

「フン、この程度かへ七剣総統。貴様もしかするとあんなのに苦戦したのか？」

「そ、そんなわけないっすよ!! あんなのオレでもワンパンでしたよ!!  
なあサキムニ達!!」

(うわあ! さっすがレオナ様ヤバすぎ!!)

『う、うん……広い目で見れば……ワンパンだったヨ?』

「広い目とか言うのやめろ!!」

嘘を吐けない性質タチのサキムニ達は一様に目を逸らしてしまう。

そんな態度を見せられれば当然バレてしまうがメレオレオナもこれにはノーコメント。どうやら勝っただけ見逃してくれるらしい。

ともあれキリヤは一応ベレラフアスラに感謝する。これがもしベレラフアスラではなくサイルだったらそれこそ本当に絶縁されていたものだ。

「あのまま飛ばば王都まで行くだろう。で、キリヤ貴様は何か言いかけていたようだが」

「あ、そうですそうです! これです!!」

「……カメラ?」

キリヤはカメラを見せるとメレオレオナは怪訝そうな表情を浮かべる。

対照的にキリヤは嬉しそうにしながら、

「レオナ様の写真が欲しいです!!」

と正直に言った。下手に変化球を投げれば拳骨を喰らうこと間違いないであり、素直が一番なのだ。

だが冷静に考えればメレオレオナが写真を撮らせてくれるなど考えにくい——

「イイぞ。撮らせてやる」

「え、ホントですか!？」

「貴様は『流れ』を理解しノームの力も手に入れた。修行としては及第点に至っているからな」

「やったーっ!!」

意外にも了承してくれたメレオレオナ。

いつもならば絶対莫迦者がア拳骨（キリヤ名称）が来るタイミングだったがキリヤは遠慮なく写真を撮りまくる。

結局、写真を撮りすぎて拳骨される羽目になったが——

◎

数日後。

キリヤは朝食時とんでもなくご機嫌な様子で首から下げたペンダントを見ていた。

機嫌が悪い時など滅多にないがこれほどまでに機嫌が良いものなかなかないのでシイナは後ろから声をかける。

「どうしたんですかキリヤさん。ものすごくご機嫌じゃないですか」

「ふはは！ 聞くが良い！ とうとうレオナ様の写真が撮れたんだ！

で、現像してもらった!」

「やったじゃないパンチボーイ!」

シイナの傍にいたブーリも顔を覗かせてハッピー雰囲気醸し出す。

前からキリヤの口からよく出る『レオナ様』が何者なのかへ碧の野薔薇では度々議論になっていたのだ。

その疑問がようやく晴れると思いき、シイナも思わず気分が高揚してしまう。

「見せてもらっていいですか?」

「おう見ろ見ろ！ これがレオナ様だ!!」

心底嬉しそうなキリヤがペンダントの写真を見せてくるとブーリは「おお!」と言うがシイナは反対に絶句してしまった。



——何せ、ものすごく知っている顔だったからだ。

メレオレオナ・ヴァーミリオン。王族に属するシイナとは例年行われる王族が集う食事会で幾度と無く顔を合わせる見知った仲。

一年のほとんども自然界で過ごす王族としても物凄く稀有な女性なのだ。

まさかそんな人がキリヤの師匠だったとは——いや、だからこそキリヤもあれほどまでに人外な動きをするのか。

「ものすごくワイルドな女性じゃないの!」

ブーリは絶賛するもシイナはどう反応して良いのか分からない。

と思っっているうちに通りかかったソルも興味を示したのかキリヤの後ろからのしかかって写真を見る。

「何かすごく強そうだな!」

「だろ!? 昨日なんて魔法騎士団本部から逃げ出した〈七剣総統〉ワンパンで倒してたからな!!」

「シンプルにバケモノじゃねえか!」

その話を聞けばソルも驚き、話は盛り上がる。

確かに昨日拘束されていた〈七剣総統〉が看守を殺害し逃げ出したかと思えばすぐにどこからか吹き飛んできて戻ってきたらしい。火傷を負った重傷らしく、異例のスピード解決の裏にはメレオレオナがいたのか。

そうなれば納得するしかないが、シイナは震えた声で、

「キ、キリヤさんはこういう、その、野生味のある女性が好きなんですか……?」

「おう! だって魔法騎士団に入ったのも強くなってレオナ様と結婚するためだし!!」

「ッ!」

キリヤのともども発言にシイナは凍りつき、ブーリやソルを筆頭に聞いていた他の女魔道士も寄ってきて女性特有の恋愛脳で盛り上がり始めてしまう。

いつしかキリヤを中心に会話の輪が広がり、これはキリヤが上級魔法騎士になり始めた頃からだった。

どうにも〈碧の野薔薇〉には温厚派と過激派がいるようでキリヤの実力を認めた温厚派は今ではキリヤと仲良くなっており、何と云うかキリヤはいつしか話しかけられたり手作りのお菓子を貰ったりと仲良しになっていたのだ。それはそれでシイナもシヨックだが。

一方、男なのにシャーロットに気に入られてるに加え隙あらばシャーロットの兜を奪う、抱きつくなどセクハラ三昧をするキリヤに過激派からは今も殺意に似た視線が向けられているがキリヤは微塵も気にしない。

「……何を騒いでいる」

「あ、姫様！」

メレオレオナの話で盛り上がっている中、シャーロットが姿を見せる。

すぐに気付いたキリヤは振り返り、何も言わずババンとメレオレオナの写真をシャーロットに見せれば、

「貴様のその行動力にはいつも驚かされるな……」

すでにシャーロットは知っていたのかそれほど驚きはない様子。

代わりに一枚の紙を見せると、

「キリヤスフィール、シイナ、二人に任務だ」

「おお！ 早速ノームの力試せるのか！」

任務という言葉に気分を昂ぶらせたキリヤの肩には焦げた色の外套を纏った白い鼠がいて、キリヤに合わせて拳を挙げる。

その秘める魔力は凄まじく、どう見てもただの鼠ではないことはシャーロットも気付き、

「四大精霊のノーム……そんなものまで手に入れたのか」

「レオナ様との修行のおかげっス！」

本物のノームにシャーロットさえ驚くもこほんとしてすぐに咳払いし、「……ともかく、今回の任務は山道にいる危険生物の排除だ。近くの村を荒らし、明確な被害を出しているために魔法騎士団が駆除することになった」

「どんな生物なんですか？」

「村人からの聴取によれば全身棘だらけの黒い鱗に包まれた四足歩行

の生物らしい。山岳地帯を生息地としており、食物を求めて人里に下りるらしく、中でも狙われるのは人が作った作物のようだ」

「見た目の割には草食なんスね……」

「これを持って行け」

言ってシャーロットがキリヤに手渡したのはその村の作物だろうヤマダイコン二つ。

手渡されたキリヤはヤマダイコンを剣のように両手に構え、

「……もしかして、これ持って山走れってことですか？」

「敵は作物の匂いを嗅ぎ分けて行動しているらしい。誘き出すには一番の手だろう」

「よし！ 行くぞシイナ！」

「は、はいっ！」

ダイコン二つ持ってキリヤは拠点から飛び出し、シイナも言われるがままその後を追っていく――

### 30話 「責任」

「シイナ、さっきからどうした？」

早速件の山道にやってきたヤマダイコン両手のキリヤだったが振り向けばどうにもシイナの様子がおかしかった。

落ち込んでいるのか。道中も言葉を発せずについて流石にキリヤでも様子がおかしいことは分かる。

問いかけると後ろを歩くシイナはそつと顔を上げ、

「キリヤさんはいつの間にかたくさんの友達が出来たんですね……」

「ん？ まあそうかな。でもシイナは一番の友達だぞ」

「えっ!？」

この言葉にシイナも目を見開く。

それもそうだ。〈碧の野薔薇〉に来て一番最初に友達になったのだから一番の友達だろう。

他意はないがシイナは何故か一気に元気を取り戻す。

「張り切っていきましよう！」

「お、おう」

これも女心は複雑怪奇というものなのか。

とにかく元気になったので良しとし、先を歩くシイナにキリヤもついていく。

だが、ふとキリヤはシイナの傍にある大きな蕾が目に入る。

今にも花が咲きそうな蕾に何かとてつもなく嫌な予感を感じたキリヤは――

「シイナっ!!」

シイナを突き飛ばし、花が咲いた途端に噴き出た花粉を浴びてしまう。

何度か咽るもそれ以上何も無く、転びそうになったシイナはすぐに振り返る。

「キ、キリヤさん大丈夫ですか!？」

「……うーん、特に異常なしだな！」

花粉を浴びたものの特に異常はなく、これならば突き飛ばす必要も

なかった。

大丈夫だと親指を立てているとキリヤの目に今度は大きな足跡が映り込む。

「これが例の魔法生命体の足跡？」

「その可能性は大きくありますね」

修行時様々な野生動物を見てきたキリヤは足跡の形状と歩幅さえ見れば大抵の見分けはつくもののこんなものは見たことがない。

つまりこれが今回の目的である魔法生命体。となれば土の固まり具合からしてこの場を去ってからそれほど時間は経過していない。

「よし急ぐうぜー！」

「はいっー」

今なら充分に追いつける。

キリヤとシイナは即座にその場から走り出した――

◎

「アレか……」

少ししてキリヤ達は討伐対象である魔法生命体の姿を草陰から捉えていた。

全長四、五メートルほどで目撃情報と同じく背中には夥しい黒い棘で全身は鎧のようになっている。

ハリネズミに類似しており、どうにも今は身を休めているようだ。

「よし、それじゃオレが前に出て戦うからシイナは後方支援頼む」

「分かりました。任せてください」

握り拳でやる気を見せるシイナと拳を合わせればキリヤも草陰から飛び出す。

魔法生命体はその気配に気付き、身を起こすと唸り声を上げ、キリヤもシイナも構える。

「恨みはねえけど仕事なんでブツ飛ばさせてもらうぜ!!」

迷わずキリヤは真正面から走ればすぐさま魔法生命体の背が爆ぜる。

飛ばされた黒い棘は上空から降り注ぐもシイナが影を展開し、駆けるキリヤの上空に影の笠を作り出す。

黒い棘は笠に飲み込まれれば消え、キリヤは魔法生命体に肉薄を果たす。

対人戦でなければ相手から魔力を得ることなど出来ない。

ならば素の状態で倒すしかなく、キリヤは魔法生命体の側頭部に拳を打ち込む。

刹那、鈍音が響くも魔法生命体にはダメージは見られない。手応えはあったものの鉄に拳を打ち込んだと同じように響き、恐らく背中と同様に魔法生命体は全身が硬い。

「援護しますー！」

影創成魔法”影模者”。

先ほど影に飲み込んだ魔法生命体の棘を再現し、連続して射撃。

再生した棘を撃ち出し魔法生命体も迎撃するが撃ち損ねた影が肩口に直撃する。

「打ち込んでください!!」

「おう!!」

同じ素材同士ぶつかれば相殺する。

ノームとの戦闘で分かっているキリヤは影を蹴り込めば魔法生命体から出血とも思われる魔が飛び出す。

キリヤはさらにノームのことを思い浮かべば、

「ノーム！ オレの拳にダイヤ纏ってくれ!!」

『御意』

キリヤの言葉にノームが魔導書から出て肩に乗ればキリヤの右拳を金剛石で覆う。

意外にも盲点だったがサキム二達が自立状態でも魔法を扱っていたのならば当然だ。

改めて更なる戦闘スタイルを身に付けたキリヤは軸足を次々に変えながら回転し、遠心力をつけながら魔法生命体に距離を詰める。

当然魔法生命体もただ接近を許すはずがなく、腕を振り上げ迎撃しようとするもののシイナの影拘束魔法がそれを封じる。

「サンキュシイナ!! ——つてことで!!」

魔力格闘技”獅子独楽拳骨”。

高速回転したキリヤの拳が真正面から魔法生命体の顔面を捉え、その威力によって魔法生命体の顔面は勢い良く折り畳まれ顔と尻が圧縮され一枚の紙のようになる。

「うしー・終わりー！」

「あ、相変わらずめちやくちやですな……」

単純なパワー押し戦法なキリヤにシイナも呆気に取られる。

やはり魔法生命体程度では鎧を纏う必要もなかった——そう思うキリヤだが一瞬視界が揺れる。

「キリヤさん？」

何か身体がおかしい。

言葉を変えそうにも視界は徐々に朧になっていき、意識も薄れていく。

体温は自分自身でも高いと感じるほど。むしろ全身が炙られているかのように熱い。

「——っ!!」

シイナが何か言っているがキリヤには聞こえず、その身は倒れていく——

◎

「……これは“ダツコウバ”のアレルギー症状による高熱だね」

「“ダツコウバ”……？」

倒れたキリヤを連れ〈碧の野薔薇〉拠点に戻ったシイナはすぐにシャーロットに医者を手配してもらい、来た女医はベッドで呆然とした目で天井を見つめるキリヤを診てそう言い、シイナは言葉を返す。

「“ダツコウバ”はどこからともなく育ち、花が開けば人体に有害な花粉を発する。その花粉は人体にある魔マと極めて相性が悪くてね。拒絶反応を引き起こし高熱が襲い掛かる。洗浄しない限り常時拒絶反応に襲われ熱は下がらず、眠ることも出来ず食事もとれなず——死に至る」

「どうすれば治るんですか!？」

「落ち着けシイナ」

胸倉でも掴み上げそうな勢いで女医に迫ろうとするシイナを

シャーロットが宥める。

キリヤは自らを庇ってこうなってしまったのだ。本来は自分になっていたにも関わらず、それが焦りとなってしまっている。

「治すにはグランドドラゴンって言うサシガレ高山帯に棲む竜種の背から取れる果実が必要になる。だが今のグランドドラゴンは凶暴期に入っていて危険そのものだ。取り貯めも出来ないために備蓄もない状態だ」

「そんな……」

『ご主人、ご主人……』

すっかり元気を失ってしまったキリヤにサキムニ達は心配そうに声を上げる。

こうなってしまったのは完全に自らの責任。シイナは拳を握れば、「私が行きます」

「グランドドラゴンは凶暴期になれば一個部隊を出してもまだ足りないほど、それでも行く気なのか？」

「はい、キリヤさんがこうなってしまったのは全て私が油断したせいです。だから私がキリヤさんを助けなければなりません」

言ってシイナが部屋から出ようとすると肩に何やら重みを感じる。

見ればサキムニが一匹乗っかって、

『ボクもご主人助けたイ！』

「それでは一緒に行きましょう」

にこりと笑んでサキムニを受け入れると部屋から出て行き、曲がり角を曲がろうとした寸前に女魔道士達の声が聞こえてきた。

「聞いた？ あの男、任務でやらかして今高熱患って死にそうなんだって！」

「聞いた聞いた！ きやはは！ 上級魔法騎士になったからって調子に乗るからそうなるのよ！」

「結局大した実力もなかったわけよ。運が良かっただけ！」

それは〈碧の野薔薇〉でも過激派とも言える女魔道士達の言葉だった。

キリヤ一人だったらあんなことにはなっていない。それなのに今



までのキリヤの実績を嘲笑われ、シイナは憤りで飛び出そうとするがその横から誰かが先に過激派達の元へ行ってしまう。

「なあなあ、その話もつと聞かせろよ」

飛び出したのはソルだった。

陰口を叩いていた二人の女魔道士の間に入って肩を組めば女魔道士の顔は青ざめて黙ってしまう。

「どうした？ さっきの盛り上がり過ぎてたんだから私に聞かせてくれてもいいじゃん」

「そ、それは……」

「よし、じゃあ私から質問すつから答えろよ」

ははは、と笑うソルだがその目は全く笑っていない。

「二つ目、任務でやらかしたって誰が？ キリヤは立派に任務を達成してるけど。シイナを庇ってああなつたけどそれは誰かを守るためだ。自己犠牲も厭わないってオマエらに出来んの？」

右腕を引き寄せ、片方の女魔道士に目を合わせるも女魔道士は目を逸らす。

「二つ目、調子に乗ってるってどこが？ アイツはいつもあんな感じだし上級魔法騎士になってからもアイツは下級共にも分け隔てなく接してるんだけど」

左腕を引き寄せ、今度はもう片方に問いかけるも気まずげに目を逸らすだけ。

「三つ目、運が良かったって何が？ だったらオマエらは運でへ七劍総統を倒せんのか？ 明らかに実力差があつて私は出来なかつたけどオマエらがそう考えられることは私は運が悪かつたんだなあ」

へえーそうなんだー、とわざとらしく声を上げるソル。

今にも謝罪を口にしそうな女魔道士達に構わず言葉を続ける。

「いいか、星っていうのは確かな実績を出して、初めて魔法帝から与えられるもんだ。そこに運なんてものはない。一つ一つの働きを吟味した上で渡される。そんでキリヤは実績を積み上げ今じゃ姐さんも認める三等上級魔法騎士で〈碧の野薔薇〉最強格だ。一方のオマエらは陰口ばつかに叩いてるが何の実績もまだ挙げていないただの下級魔

法騎士、陰口叩く前にすることあると思うけどなあ……——で、まだ言いたいことはあるか？」

「……………」

「だったら最初から陰口なんざ叩くんじゃねえよ。そんなんだからオマエら弱い女は集団で陰口叩くことしか能がないって言われんだろうが」

腕を放せば二人の背中を押しして追い払う。

ふん、と大きく鼻息を鳴らしたソルに一部始終を見ていたシイナは礼を言おうとするがソルは適当に手を振りながら通りすがりに軽くシイナの背を叩き、

「ま、頑張れよ。キリヤのことは任せとけ」

「っ！　ありがとうございます！」

シイナは去っていくソルに頭を下げ、自らも成すべきことのために走り出す——

### 31話 「シャーロット・ローズレイ」

「く——ッ!!」

シイナは目的のグランドドラゴンが棲むサシガレ高山帯の手前にある森で苦戦を強いられていた。

箒で空を飛んでいたがその森自体が危険地帯であり、多くの危険生物が棲む猛獣地帯とされている。

名に違わず空でも巨大な怪鳥に襲われ、シイナは魔導書グリモワールを開き——

「影魔法」影乱喰い墮とし!!」

一度箒から離れ踏みつけた怪鳥に自らの影が映ればその形は変わり、夥しい杭となって怪鳥に突き刺さる。

悲鳴を上げる怪鳥に構わずに影は締め上げれば即座に絶命させ、シイナは再び箒に乗るも眼前に新たな怪鳥が迫っていた。

(さっきの悲鳴は仲間を呼んで——)

気付けば怪鳥は群れを呼んでおり、突撃されればシイナは地上へと避難する。

だが避難したところでこの森全てが危険地帯。地上にはさらに別の猛獣が迫るが影を展開して防ぐ。

(キリがない——ッ!!)

時間が経つにつれて増えていく猛獣達。

グランドドラゴンと戦う前に必要以上の魔力を消費するわけにも行かず、最小限の魔法で迎撃するもこの一帯に棲む猛獣はそれだけでは倒れない。

——だが、一度大きな炎が瞬く。

その炎を見ただけであれほど獰猛だった猛獣達は震え上がり、逃げ去っていく。

「少し力を振るっただけでこれか。全く、危険地帯が聞いて呆れる」  
現れた女性にシイナは目を見開いて驚く。

何せその女性は——メレオレオナ・ヴァーミリオン。

キリヤの師匠であり、女性最強の魔道士——

◎

「あ、あの！」

「……何だ？」

シィナに目もくれずに踵を返したところで呼び止めればメレオレオナは振り返る。

その迫力は昔から健在で今日の前にするだけでも軽く萎縮してしまうがとりあえず頭を下げる。

「助けていただきありがとうございます！」

「別に助けたわけではない。もういいか？」

「あ、あの!!」

「……今度は何だ」

二度目の振り返りは少し不機嫌そうになったメレオレオナ。

昔から正直顔を合わせるだけで怖かったがキリヤの師匠なのだ。今キリヤを襲う危機について話しておかなければならない。

「今キリヤさんが“ダツコウバ”のせいです。苦しんでいます……どうか会ってあげてくれませんか？」

「何故だ」

「そ、その方がキリヤさんも元気になれるかと……」

「あの莫迦がそう言ったのか？」

弟子の命の危機だというのに師匠であるメレオレオナに心配する様子は微塵も見られない。

ましてや――

「せっかく修行をつけてやったというのに莫迦弟子め、熱程度に倒れる軟弱者だったか」

倒れたキリヤのことを“軟弱者”だと称する始末。

これにはいくら相手がメレオレオナだろうとシィナは憤りを隠しきれずにはいられなかった。

「そんなことありません!! キリヤさんは私を守ってそうなつてしまつて、だから――」

「だったら何故貴様はそんな表情カオをしている？」

「え……？」

「本当に守られたのならば貴様はそんな不安を抱えた表情をしていな

い。結局、あの莫迦がそうさせているのだからアイツは何一つ守れていない軟弱者だ」

言われてみればキリヤが倒れてからシイナの心には不安と焦りしかなかった。

メレオレオナはそれを見透かしており、気付いたシイナは勢い良く自らの両方を叩く。

存外力を込めたために頬は痛いがこれで目は覚めた。

「例えあなた様でもキリヤさんを“軟弱者”だなんて呼ばせません。だって私は——キリヤさんの一番の友達ですから……っ!!」

「だったらさっさとあの莫迦を元気にすることだ」

◎

「……………」

女医が帰ってからでもシャーロットはキリヤの傍で椅子に座っていた。

サキムニ達は主人の危機に忙しく動き、困惑の一途を辿っている様子を見せ、

「落ち着け」

サキムニは一匹の感情が全員に共有されているために一匹が不安になれば全員に伝染する。

前主人も病で亡くしたのであれば尚更のことでシャーロットが一匹を撫でて落ち着かせれば自然と周りにいたサキムニも落ち着きを取り戻す。

「キリヤ！ これ買ってきてやつ——ね、姐さん!？」

「病人の前であまり騒ぐなソル」

「す、すみません……」

部屋にシャーロットがいると思っていなかったソルは驚いて後ろに何かを隠してしまう。

一連の動作を見ていたシャーロットは訝しげな視線を向け、

「それは？」

「これは、その、平界で売ってる氷枕というもので。い、いや！ 別にキリヤのために買ってきたんじゃないですよ!? 姐さんの下僕がこ

んなことで死ぬなんてアレじゃないですか！」

「理由はどうでもいい。買ってきたのなら置いてやれ」

「はいー」

ソルが入ってきてまた騒々しくなったがソルは今置いてあるキリヤの枕を退けると氷枕を置く。

ダツコウバの高熱に氷枕など本当に気休めにしかならないが少しだけキリヤの表情が和らぐ。

「どうだ？ その氷枕は魔道具で中に入れた氷は溶けない優れたものなんだぞ」

「……あ、後でお金払う……」

「いらないって。私は借りを残しておかない女だ！」

シャーロットもその魔道具を知っているがソルにとって高価なもののはず。

少し驚かされるがソルはキリヤの毛布をかけ直すと、

「熱なんかには負けるなよ。じゃ、姐さん私急用があるんで後はよろしくお願いしますー」

すぐさま部屋から出て行ってしまふ。

いつもならばシャーロットから離れないソルだが今日は任務もないのに急いだ様子を見せる。

少し考えればその意味が分かったシャーロットはふと笑みを零せばキリヤが酷くゆっくりとシャーロットの方へ首を向ける。

「何で……姫様は付き添ってってくれるんスか？」

「……私も幼少の頃に同じ症状を患ったことがあつてな」

眠ることさえ出来ない高熱。

一人でいれば気が狂いそうになるほど魘されるのを知っており、そつとキリヤの手に触れる。

今までまともに見ることはなかったがキリヤの手は大きく、包むように優しく握る。

「私の場合、グランドドラゴンの果実を手に入れるのに三日かかった。熱による衰弱が判断を鈍らせ、もう無理かもしれない……私でさえそう思った。だが支えてくれたのは私の母だった」

「姫様の、お母さん……?」

「ああ、母はこうして手を握ってくれた。三日三晩自らも眠らず懸命に私を支えてくれたのだ。だから私も治るまで傍にいてやる」

「……ということは、姫様はオレのママ様だった……?」

「そうなる理由がまるで分からないがな」

高熱のせいかいつにも増してどういふ思考回路をしているか分からないキリヤ。

これも判断力が鈍っているとして、母はただ手を繋いでいるだけでなくずつと何かを話し続けてくれていた。少しでも熱から意識が逸れるように気を遣ってくれた記憶があるが――

(な、何を話せばいいんだ……?)

いつもはキリヤが先に話し、答える形だったためにまるで会話の種類がない。

少し重い沈黙が流れてしまい、迷った末に――

「キリヤスフィール、何か私に聞きたいことはないか……?」

キリヤに丸投げした。

唐突な丸投げにキリヤはうーん……と悩めばやがて、

「ママ様って……幼少の頃どんな子だったんですか……?」

「絶対に認めないからな、その呼び名は」

さりげなく呼び名を変えようとするのは完全阻止。

ともあれ、会話を振られたのだから答えるしかないと言っシャロットはやがて言葉を紡ぐ。

「至って普通、と言えいいだろうか。特に際立ったことはない……何だその疑いの目は?」

「いや……流石に姫様が『普通』って、ないな的な……?」

「最後まで聞け」

生まれた時から特別な人間なんてそういない。

現にシャーロットは生まれながらにして今のような強さがあつたわけではない。

そこには明確なきっかけがあつたのだ――

「私に変化を齎したのはローズレイ家を憎む者だった。その者は私が

幼少の頃に齡十八を迎えれば発動する呪詛魔法を仕込んだのだ」

「呪詛魔法……？」

「ローズレイ家を全て飲み込み時の檻に閉じ込める……そういった呪いだ。父や母は嘆き、私は涙を流す両親に強くなると誓った。それから私は強さを求め、自らに架せられた呪いの十字架に打ち克つために“普通”を捨てたのだ」

「でも姫様って、美人だから男も言い寄ってきたんじゃないスカ……？」

確かにキリヤの言う通り男は寄ってきた。

結婚してくれ、そう言ってきた男は数知れず求婚の言葉など聞き飽きているほどに。

だが――

「私に勝てぬ者に我が呪いを受け止められるはずもない。どいつもこいつも口先ばかりの貧弱な者ばかりだった」

「やっぱり……女性って強さを求めるんスカね」

「自らよりも弱い者と共になつたところで未来はない。私ならそう考えるがな」

メレオレオナの考えはシャーロットには至らないところにあるが自らより弱い者と人生を共にするなど考えにくい。

答えればキリヤは納得したように「あーそういうことスカ」などと  
言つて、

「だったらもつと……強くならないとつスね。今のうちに指輪も買つておかないと……」

「……それは気が早過ぎると思うが」

正直あのメレオレオナが負ける姿など想像出来ない。

あと純白のウエディングドレスを着ている姿も全く想像出来ない。「今は治るかどうか瀬戸際なところだ。それどころではない」

「で、でもここでもし死んだらレオナ様に……軟弱者がアアって拳骨されちゃいますから死なないっス。何なら自然治癒でもいけますよ……」

「無理するな」



動こうにも震える身体。

如何に元気に見えようと身体内部を駆け巡る灼熱は本物。現にキリヤは起き上がれずに身体から力が抜けて再びベッドへ身を預ける。

「とここで……さっきの話、結局呪いはどうなったんすか……?」

「ああ、まだ途中だったな。結論から言って私の力では呪いに打ち克つことは出来ず、十八になって呪いは発動してしまった」

起動した呪いはシャーロットを中心に巻き起こり、ローズレイ家だけでなく街全てを荊に飲み込もうとした。

シャーロット自身にはどうすることも出来ず、広がり続ける荊に自らの無力を噛み締めたのは記憶に新しい光景。

「だが、何も出来なかった私を救ったのは——一人の男だった。野蠻で腹立たしい男だと思っていたのに私は救われてしまった」

「それで姫様は案外その男のヒトに惚れちゃったとか……?」  
「っ!」

突然の変化球な言葉に思った以上に動揺してしまった。

キリヤは鈍感かと思っていたがこういうものには敏感なのか。それも野生仕込みの勘なのか。

はは、とキリヤは笑い、

「……もしかすると呪いをかけた人は姫様の性格を知ってて、呪いを解除するには男に——」

「それ以上はやめろ!」

今の状態だと答えを言いかねないのでシャーロットは荊でキリヤの口を塞ぐ。

サキム二達が心配する声を上げると「はっ!」と重病人であることを思い出し解除。

「私が話したのだから今度は貴様の番だ。何故メレオレオナ様に惚れたのか、その経緯いきざつを聞かせてもらう」

「イイツスよ……ついでにレオナ様との修行経験談ラブストーリーも添えてやりましょ。でも、この話聞いてもレオナ様に惚れたらダメですからね……」

「心配するな、絶対にない」

聞けば正直なところ何故キリヤがこうして生きているのか不思議なレベルの修行の数々だった。

そして、キリヤが言おうとしていたことは分からないが呪いを解く方法はただ一つ。

——男に心を奪われる、たったそれだけだった。

### 32話 「女の覚悟」

シイナはあれからメレオレオナとこれと言った会話もなく猛獣地帯を抜け、高山地帯に入っていた。

山に登っていけば徐々に酸素が薄くなっていき、だがメレオレオナは平然としている。歩く速度も速い。下手すれば少し遅れただけで姿が見えなくなるほどだ。

ついて行くだけで精一杯だがメレオレオナは先に足を止め、先を指差す。

「あれを見ろ」

指された先、見下ろせばそこには山を不自然に切ったような草原がありそこでグランドドラゴンらしき竜が暴れていた。

全長にして五十メートルほど。四足歩行型でその背には多種多様な植物が自生しており、さらに中央には火山のような噴火口が見え、そこから炎に包まれた岩塊が幾度となく噴き出す。

凶暴期とあつて身に纏う魔力がとてつもない。

シャーロットに一個部隊あつてもまだ足りないと言わしめたのは納得出来る。

「手を貸してやろうか？」

「い、いえ！ 私一人で充分です!!」

自らがやると決めたのだからシイナはメレオレオナの助力を受けまいと飛び出す。

グランドドラゴンもシイナの接近に気付けば背の火山が噴火。数多もの火山弾がシイナへ迫り、シイナは影を広めて受け止める。

（魔が濃い……自然界の魔を多く取り込んでるからですか！）

影に受けた衝撃が今までの魔法生命体のどれよりも大きく、シイナは歯を食い縛る。

シイナの影魔法は主に影に飲み込む、相手の影を利用する、影に飲み込んだものを再現する魔法。

当然飲み込める質量には限度があり、あまりに巨大なものであれば飲み込むことすら出来ない。

魔法生命体の中でもグランドドラゴンの魔は段違いに濃密。下手に飲み込み続けられれば許容量を上回り、やられてしまう。

加えて相手の有利はそれだけではない。

体躯の大きさが有利を物語っているのだ。

大きければ小回りが利かないなどよく言われるがそんなもの大したことではない。

単純な話、力は大きさに比例する部分が多い。現に歩くだけで地面が揺れ、尾は振るうだけで凶器になる。

「ぐ——ッ!!」

影の防御など関係なく吹き飛ばされるシイナ。

断崖の壁に激突するも影を敷くことによって自らを飲み込ませて衝撃を殺し、飛び出せば火山弾が追加で飛んでくる。

飲み込めるとはもう思っていない。今度はいなすように振るえば火山弾は逸れ、壁を砕く。

別にグランドドラゴンを倒すのが目的ではない。その背にあるだろう果実を取れば良いのだ。

ならば——と、シイナは正面からグランドドラゴンへの肉薄を試みる。

先ほどから嘔き出して襲い掛かってくる火山弾は必ず一度は直上に撃ち出される。そして目標物であるシイナに向かって放物線を描くように迫る。

火山弾に追尾性能はあるもの的大まかであり、この程度ならば上空から帰ってくるまでに直進すれば放物線を描く火山弾は当たらない。

接近にグランドドラゴンは口を開け、口内から莫大な魔を吐き出す。

一直線に伸びた魔の奔流は凄まじく、しかし回避出来ないものではない。

影を足下から展開し板状にすればまるで波に乗るようにして魔の奔流を突き進む。

(よしっ!!)

グランドドラゴンの頭部直上を抜け、とうとうその背に着陸する。

数多の植物が自生した背、火山があるために傾斜になっているがグランドドラゴンもここならば攻撃出来ない。

ここに来るまでにグランドドラゴンに関する文献を読んだがどうにもグランドドラゴンは普段背から日光を吸収してエネルギーに変え、食物はとらずそうして吸収した日光を主なエネルギーに活動している。

だから生命線であるこの背だけは狙えず、揺らされたところで影の上ならば揺れなど関係ない。

(あれだ……っ！)

駆ければ見えたのは数多の大樹に守られた実の数々。

一際強大な魔マナが漂う樹には二メートルほどの果実がいくつもなっており、一目見ただけでそれが目的の果実だと分かる。

だが——急に地面全てが光を帯、輝きを見せる。

「これは——ッ!!」

瞬間、夥しい光がシイナの視界を覆い尽くす——

◎

『まあ、何て不気味な魔法なのかしら』

魔導書グリモワールが授与され、家族の前で初めて魔法を披露した時に姉から言われた言葉がそれだった。

シユヴァルツ家は代々既存の魔法を黒く染め、他の家系にはない唯一の魔力を持つてきた家系だった。

姉の魔法は黒氷魔法、妖しくも美しいと称され今ではへ銀翼の大鷲に属するほどの魔力の持ち主。

そんな正当な力を持つからこそシイナに対する蔑みも生まれたのだろう。

シイナの魔法は姉のように美しく彩ることは出来ない。

出来ることと言えば他者の模倣をし——殺すこと。

これほどまでに殺戮に特化した魔法は見たことがないとさえ言われたものだ。

諦めた自分はどうそれでも良かったし、姉の言葉に反抗する気さえ起きなかった。

だからシイナは姉を避けるように〈銀翼の大鷲〉を避けて〈碧の野薔薇〉に入ることを決意したのだ。

当然両親からも姉からも責め立てられた——オマエは姉シイナから逃げたのだ、と。

（その通りです。私は姉に言葉を向けられるのが怖かった……姉と比べられるのが心の底から嫌だった）

両親が求めるのは姉のようになること。

そこにシイナの意味など関係なく、シイナはもしも姉に何かあった時の代替品扱い。

だからきつと魔法も影で、他者の模倣をするばかり。

だが、諦めたと言っても今思えばどうして姉を避けて〈碧の野薔薇〉に入ったのか。

諦めたのなら両親や姉の言う通りにし続ければ良かったのに何故自ら波風を立てるような真似をしたのか。

それは、きつと——

（誰かに、私を認めて欲しかったから——でしようね）

自分のことを知らない場所で誰かに認めて欲しかった。

姉の代替品などではなく、シイナ・シュヴァルツとして——

『見てたけどオマエの影魔法もスゲエな！ カッコイイな！ アレか攻守万能ってヤツか！』

自分でさえも不気味だと思っていたのにそう言ってくれたのは〈碧の野薔薇〉に入った同期の少年だった。

思えばその少年はいつも嘘偽り無く純粋で、自分に正直な性格をしていた。

羨ましい、シイナは素直にそう思った。

入団試験の時も彼は友達が侮辱されて怒っていた。

あつという間に三人を倒してしまって、自分のことでさえ怒れないシイナには誰かのために怒って実行出来るキリヤが羨望の的だった。

女尊男卑と名高い〈碧の野薔薇〉に入っても何も変わらない。

自らの拳を振るって実力を認めさせ、誰にでも分け隔てなく接する彼には気付けば沢山の人間が周りにいたのだ。そして気付けば入団

して一年も経たないうちに上級魔法騎士になっている。

同時に悔しいとも思った。

自分は王族、他者よりも遥かに恵まれた魔力を持ちながらもそれを活かすことが出来ていない。

初めは隣にいた彼も気付けば遠い存在になっていて、前の任務でも完全に足手纏いになってしまった。

姉のようにはなりたくないと思ったが、彼のようにはなりたいたいと思ったのだ。

自分の意思を持ち、それを真つ直ぐ貫く力を持つ——魔道士に。

◎

「ぐ……うう……まだ、生きてる……？」

全身の痛みで目が覚めてみればシイナの目に映ったのは火山弾のせいで煤けた空。

ということはまだ生きているということだ。身体には明確な痛みもある。

(さっきのは魔力放射ですね……)

咄嗟に防御態勢を取ったが間違いなくグランドドラゴンの背から自生する植物を傷つけないように細い魔力が幾多にも撃たれた。

影を纏ったおかげで外傷はないが衝撃は伝わり、今でも全身が痛い。

だが思考は至って冷静だ。自分にはなかった目的を見出せていたことに心の中で感謝する。

「わざわざ待っていてくれるなんて意外と紳士ですね」

いやこれは恐らくすでにシイナは死んだとして無視し暴れているだけだ。

とそこにサキムニが顔を覗かせる。

『大丈夫……？』

「……正直、大丈夫とは言い難いですね」

サキムニは回復魔法を施してくれるが身体はすでに限界寸前、だが後少しだけなら戦えそうだ。だがこんな状態で何が出来ると言うのか。

『立ち上がり手を伸ばしなさい。諦めない覚悟があなたに新たな力を与えるわ』

唐突に声が聞こえた。

サキムニではなく、聞いたこともないほど澄んだ女性の声。

頭に直接響けばその途端、シイナの魔導書グリモワールは呼応するように輝きを強め、見れば魔法が一つ増えている。

——だったら戦う以外の選択肢などあるはずがない。

「行きますよ……ッ!!」

影創成魔法”影重ノ天衣”カゲノエフアマゴロモ。

シイナの身体の各所から影が漂う。ただ魔力を放出しているのではないのは当然であり、シイナはその場から跳び出せば再び火山弾がシイナを襲う。

だが今回は躲すこともせず真っ向から受けるがまるでシイナの存在自体が影の如くその身体がすり抜ける。

「これ、お返ししますね!!」

手から伸びた影は着弾する前に火山弾を捉え、影が粘着すれば火山弾を影ごと振るって弧を描く起動で噴火口に叩き込まれる。

これで一時的に噴火口は塞いだ。後は全身の動きを防ぎ、あの光に気を付ければ果実は手に入る。

シイナは両手を地面に振り下ろせばシイナを中心に影が大きく、それこそグラウンドドラゴンの足下を覆うほどの影が展開される。

”底なし影大沼”!!ボトムレス・シャドウン

瞬間、黒い影が底なし沼のようにグラウンドドラゴンを足下から飲み込む。

殺すことは意図していないために下顎までで止め、動きを拘束すればシイナは駆け出す——が。

「っ!?!」

不意に足から力が抜け、間抜けにシイナは地面に受身なく転んでしまふ。

新しい魔法は魔力だけではなく、相当な体力を消耗するようで限界寸前だったシイナはすでに立ち上がれなくなる。



「あと少しなのに……っ！」

そう都合良く新しい魔法を得たからと事態を脱却出来るわけではない。

動きを封じられたグランドドラゴンは背を発光させれば夥しい光が飛び出し、上空で軌道を変えてシイナに向けて降り注ぐ。

これは流石に防げな——

「よオオオオオオオオオオし皆!! 根性見せたシイナを守れええええええええええええ!!」

けたたましい少女の声。

それと同時に一斉に飛び出した人影がシイナの前に立ち、魔導書を構えれば防護障壁が飛び出す。

「ソ、ソルさん……それにみなさんもどうして……?」

シイナの前に立っていたのはソルを含めた〈碧の野薔薇〉の温厚派の女魔道士が数十人。

全員の肩にサキムニが乗っていて防護障壁を展開してグランドドラゴンの攻撃を防いでおり、弾き飛ばせば中にいたブーリが親指を立てる。

「パンチボーイがピンチってサキムニちゃんに聞いて任務を即座に終わらせてきたわ! それに力を貸してくれて素直じゃないどこかの誰かさんも皆に頭下げて頼んでたし!」

「なっ! 言うな! これは別にキリヤのためじゃないっての!!」

「ハイハイ! とつと終わらせましょーっ!」

「強引に話終わらせたな……まあいいや。目的はあのデツカイの背中にあるデツカイ実だ!! とりあえず突撃イ!!」

「!!」

ソルの号令を機に女魔道士が箒に跨って突撃していく。

思いの外数が多いことでグランドドラゴンも驚いている様子だが未だに底なしの影から抜け出せない。

と、シイナの隣にメレオレオナが立つ。

「……ふん、あの莫迦弟子は一応仲間に恵まれているようだな」

「メレオレオナ様……」

「貴様は一人で全てを解決しようとしていたようだが何も今すぐに自己完結する必要はない。傍にいる者と共に悩み、研鑽を重ね成長していくことによつていつしか人間は強くなる——何より覚悟を決めた女は最強だ」

ごつん、と荒く額に拳を当てられ、シイナも大きく頷く。

だがどうにも冷静に考えてみればメレオレオナも今までどこかの空のように思えた。それに何だかんだ言つてここまで来たのももしかして、いやこれはシイナの女の勘だが——

「も、もしかしてメレオレオナ様……キリヤさんのこととても心配してました……？」

「……口を動かす体力が戻ったならさっさと決めてこんかアアアアアアアアアア!!」

「は、はい!!」

今にも拳骨が振るわれそうになつたのでシイナは飛び起きて走り出す。

こうして〈碧の野薔薇〉の働きもあつて何とかグランドドラゴンの背から果実を入手することに成功する——

### 333話 「自宅謹慎」

「これでもう大丈夫だ」

果実を溶かした水溶液を注射器でキリヤに注入した女医は安堵を込めて言う。

見ていたシイナも胸を撫で下ろすとキリヤはカツと目を見開いて突然起き上がる。

「おお!! 復活!! オレ超元気になった!!」

『ご主人』『主人』『ジン』

「うわっぷ! 分かった分かったから一旦離れて!」

今では懐かしいと思える毛玉状態。

引っ付いてくるサキム二達に一旦離れてもらいつつ、部屋の中でも外でもキリヤの様子を見ていた〈碧の野薔薇〉団員に頭を下げる。

「皆、ありがとうございます!」

「パンチボーイ、お礼を言うならまずシイナによ。アナタの危機に一番に走り出したんだから!」

「い、いえ、元はと言えば私のせいでキリヤさんは高熱を起こしてしまいましたし……」

「気にすんな! ありがとうございます!!」

シイナの手を握ってぐわんぐわん握手をしながら手を振るうと何故かシイナは顔を赤らめていて、今の状態から言えばシイナが高熱を患っているようだ。

と、今度はブーリに肩を叩かれたかと思えば親指で後ろを指され、見るとそこにはソル。

「ソルちゃんも頑張ってくれたのよ? 皆に声をかけてくれたのもソ

ルちゃんだし」

「ありがとうソル!!」

「ぎゃーっ抱きしめてくんない!」

あれだけ普段ツンケンしているのに助けてくれたソルにキリヤは感動を覚え、親愛の抱擁<sup>ハグ</sup>。

キリヤよりも普通に身長は高い男勝りなソルだが抱きしめ心地で

言えば女性らしい柔らかさを持っている。

「ソルって意外に女なんだな！」

「何だその発言くたばれ!!」

ついでに胸を揉めばまさかのグーパーン。

ふごご、と呻きながらキリヤは追撃を制止しているとまだお礼を言い忘れていた人がいて思い出すとソルの拳を抑えたまま、

「姫様もありがとうございました！ 熱に魘されてる間手を握って貰ったし、色んな話聞かせて貰ったし」

「なん、だと……この羨まし——いや恨めしい!!」

「ぎゃーっ！ やめろやめろ！ 病人だったんだぞ!!」

「すでに過去形だろうが！」

ベッドでソルに関節技を極められ呻くキリヤに『何故言っただ』と言わんばかりに呆れた表情を見せるシャーロット。

様子を見ていた〈碧の野薔薇〉団員もキリヤの復活に笑い、脚が完全に極められているもののキリヤはこれまでにないやる気に満ちていた。

「これでまたバリバリ働けます！」

「——いや、それは無理だ」

張り切ったところでいきなりシャーロットに止められる。

キリヤはあまりに唐突な言葉に呆気にとられるがシャーロットは言葉を続ける。

「前に国王の一件があったがああのを国王がもう一度問題にしてな。

このまま許しては国王の威厳に関わると言い出したのだ」

「器ちっさ……」

思わずソルも言ってしまうがそういうことは思っても言っていない。

他の〈碧の野薔薇〉団員もその話に理不尽さを訴えるがキリヤは甘んじて罰を受けると顔を俯かせる。

「それで罰って何スか……?」

「一週間の謹慎だ」

「……謹慎って何ですか？」

「まあ強制的に取らされる休みつてところだな」  
ソルのぎつくりした説明。

その説明に何も違和感を覚えないキリヤは「なるほど」と頷き、  
「だったら遊びに行つてきます！ わっふーっ!!」  
すぐさま部屋から飛び出して出て行つてしまう。

止める暇もなかった行動力にシイナも声を掛けられず、静かに  
シャーロットは顔を伏せると。

「今のはソルの説明が悪い」

「す、すんません!」

◎

呼び止められた気はするもののキリヤはずっと来てみたかったと  
ころへやってきていた。

それは〈黒の暴牛〉の拠点。

何度も補修されているのか見た目はかなりボロく、正直廃墟にも見  
えなくはない。

(アスタも頑張つてるんだらうな……)

あのボロさもきつと何か深い事情があつてこそ。

アスタの勤務地はそれだけ厳しい環境なのかと思ひながらキリヤ  
は扉をノックすると——ブツ壊れてしまった。

(ええええええええええええっ!! 脆すぎ!!)

キリヤも驚いているうちに〈黒の暴牛〉拠点内にいたメンバーと目  
が合い、一時沈黙。

中には見たことあるバネツサがいて、何故か下着姿だが。  
すると状況をどんな風に捉えたのか見る限り不良な青年ヤンキーが立ち上  
がれば、

「んだコラアアアアアア!! カチコミかアアアアアアアアアア!!」

「いや違うんすよ! 扉脆すぎてノックしたら壊れたんですつて!」

「テメエそのローブ……〈碧の野薔薇〉じゃねえか! やっぱり  
〈黒の暴牛〉にカチコミかア!!」

「あ、野薔薇の坊や久しぶりじゃないの」

「バネツサ姐さん久しぶりっす! で、カチコミつて何スか?」

「今テメエがしてることだア!!」

話も聞いてくれず不良青年が手の平に炎を灯す。

炎は球体に形取れば不良青年の手に収まり、キリヤに向かって思い切りブン投げられる。

炎魔法”爆殺轟炎魔球”。

凄まじい回転を持ちながらキリヤに向けて一直線に飛んで来た炎球。

対しキリヤは避けることもなく、真正面から炎球を受け爆発。

「ちよ、何してんのよ童貞不良!!」

「ど、どどど童貞じゃねーし!! カチコミだったから受けて立つただけだー!」

「野薔薇の坊や大丈夫!?!」

いきなりの攻撃に反応が出来なかったのかとバネツサは心配する声を上げる。

だが爆煙沸き立つ中でキリヤは平然と無傷で「だいじょーぶっ!」と飛び出す。

「オレがここにきたのは友達のアスタくんと遊びたいなって思ってたんですけどーっ!! アスタくんいませんかーっ!!」

「うるせえ!!」

魔法を受けても無傷なキリヤに驚くバネツサと不良青年だったがそれより部屋の奥にいただろうヤミが騒ぎを聞きつけて姿を現す。

相変わらずの筋肉質な身体にキリヤも憧れるが今回はそうではなく、ヤミもキリヤに気付いたようで、

「あ、デシゴレオンじゃねえか。入団試験以来か?」

「そうっスね! あとそのアダ名レオナ様に似てて自分好きっス!」

「で、何で〈碧の野薔薇〉のオマエがいの?」

ヤミのおかげで不良青年も冷静になったのかこれでようやく話が進む。

アイアンクローされた状態だが。

「ははは! レオナ様のアイアンクローに比べればこんなもの全然耐えられますよ!」

「いやそんなこと聞いてないから。てかあの扉弁償しろよ」

というわけでノームやサキム二達に扉の修理を頼み、改めてキリヤは用件を言う。

「自分何だかんだ国王に嫌われちゃって謹慎中なんですよ！ で、暇だからアスタと遊びたいなって思ってた来ました!!」

「そこは謹慎しろよ」

「坊やだったらフィンラルに連れられてラックと一緒に合コンに行つたんじゃないかっただかしら」

「ええ!!」

「でも来ちやっただからゴハン食べていけば？」

「今夜は美味しいウサギ鍋が出来そう……」

『ご主人助けテーっ!』

「ああ！ ウチの子を鍋にしないでくれませんか!？」

チャーミーと呼ばれた小柄な少女がいつの間にかサキム二達を捕まえており、キリヤは焦って取り戻しに行く――

◎

「だからオレはレオナ様と結婚するためにレオナ様を超えるんすよ!!」

「……とんでもねー物好きがいたもんだ。相手はアネゴレオンだぞ」

「レオナ様だからイイんすよ!!」

「イいわねえ一途って」

何だかんだで〈黒の暴牛〉で食事を共にすることになったキリヤは気付けばヤミ達にメレオレオナの話をしていた。

どうにもメレオレオナが弟子を取るということがあまりに珍しいのか、メレオレオナを知る人には全員に聞かれている気がする。

同席していたバネツサもキリヤの一途さに頷くもヤミはそれに同調しない。

「――オマエは初恋に囚われてるだけなんじゃねえか？」

「なん、ですと……」

「アネゴレオンに盲目になってるだけで他の女を知らねえんだろ」

「知ってますよ！ 女子率九割の団にいますし!!」

「……それもそうだったな」

一瞬忘れられていたようだが〈碧の野薔薇〉は九割女性で形成された団なのでキリヤは女慣れしていると自負出来る。

だがそれでもメレオレオナ以外結婚したいとは思えず、しかしヤミはとうとうと。

「よし、社会勉強しに行くか。女遊びってヤツを教えてやる」

「随分と唐突ですね……いやマジで！」

首根っこを掴まれたと思えばヤミに連れて行かれてしまい、どこへ行くのかまた拒否権もなく連れ去られていく――

◎

「……で、ここって何スか？」

「見りや分かんذارー——キャバクラだ」

キリヤは夜の繁華街に連れて来られたと思えばやけに露出度の高い服を着た女性が働く店に連れて来られていた。

ソファに座らされたキリヤの両側には店員と思われる女性が座っていて、ヤミの両側にも女性が座っている。何だかよく分からないがキリヤにとつては混沌カオスな状況だ。

「コレがアレですか。俗に言う“女遊び”っていうヤツですか？」

「おう。日々のストレスを女達と酒飲みながらドンチャン騒いで発散するんだよ」

「そーそー、ヤミさんはこの店によく来てくれるんだよねー！」

「ヤミ団長って意外に女遊びとかするんスね」

「オレも男だからな。この年齢トシで女遊びの一つや二つしてなかったら逆に怖えだろ」

「……そういうもんスカね」

そういうもんذار、とヤミが返すうちにキリヤの口にマスカットが一粒「あーん」と入れられてしまう。

キリヤは未成年で酒も飲めないのでキリヤはヤミの奢りで果物を食べているのだ。絵面は完全に餌付けだが。

「それにしてもボクチャンはどうして〈碧の野薔薇〉に入ったのん？」  
話しかけてきたのは右側に座る女性。



淡い蒼色の髪が特徴的で毛先を丸めてロールを作っており、可愛らしいお姉さんの顔立ちで胸も大きい。

話しながら魔法でナイフを浮かせて果物の皮を器用に剥いているのを見ながらキリヤも答える。

「団のこと全然知らなくて適当に選んだらそうなたんすよー」

「キャハハ！ ボクチャン可愛いねえ！ ホラホラ、いっぱいお食べー」

「あ、ありがとうございませふ……」

いっぱい果物を口に詰められるキリヤ。

これが女遊びなのかと思いながらキリヤは促されるままパクパクと果物を食べていると――

「……んん？」

ドタドタと足音が聞こえてきたと思えば店に突入してきたのは〈碧の野薔薇〉の団員達。

シイナやソルを筆頭に何故か全員サングラスをかけており、キリヤは何故ここにいるのかこの状況を何一つ分からないまま、

「未成年だと知りながら接待したとして――風営法違反で逮捕します」

「ええ!？」

困惑する店内で次々と店員に手錠がかけられていき、ついでにヤミまで手錠にかけられてしまう。

「え？ オレ団長なんだけど？」

「未成年と知りながらこんないかがわしい店に連れてきた……監督不届き現行犯で逮捕します」

「おい今作んな法律を――ってマジか。マジで逮捕する気かオマエら」

キャバクラでまさかの団長逮捕。

クローバー王国始まって以来のとんでもない不祥事がキリヤの目の前で巻き起こる――

## 第5章く雪上の決戦編く

### 34話「全力のリベンジマッチ」

「ちよいちよいちよーいっ!! タンマタンマ!! 何でいきなりやってきて逮捕!?!」

「キリヤさん、先ほども罪状は言いましたよね? キリヤさんを誑かしこんないかがわしい店に連れてくるなど言語道断。団長としての責任感は何無であり、情状酌量の余地ありません」

「それにオマエは謹慎中だからさっさと帰るぞ」

「ソル待つてくれって! こんな誤認逮捕だ!!」

逮捕され手に拘束魔法をかけられるヤミの背中からとんでもなく哀愁が漂い、キリヤは懸命に弁明する。

だがソルも全然聞いてくれず、シイナも何故かえげつなく厳しい。「とにかく——」

『魔法騎士団本部より緊急連絡——』

唐突にヤミの周りで映像が展開され、その映像に人が映る。

どうにもその人物は国王の護衛に付いていた一人できのこのような髪型が特徴的な男性だった。

聞けばノエルが通報したようでこの近辺の町で子供達が連れ去られる事件が発生し、子供達の情報によれば相手に増援が来ておりへ白夜の魔眼くが関与していると。

そして現場に一番近い団がへ黒の暴牛く。現場の状況を判断して後ほど他の団も後に増援として来るらしい。

「さて、行くか」

「オレも行くっスー」

「おう来い」

てつきり帰れと言われると思ったが一応実力は認められるらしい。

拘束魔法を腕力だけで破ったヤミは「オマエらはあのトゲツン姫にでも報告してろ!」と追い払うも、シイナはキリヤに目を合わせてきて、

「キリヤさん、謹慎中ってこと忘れてませんか……?」  
めちやくちや怖い目で見られてしまい、キリヤもしれっと目を逸らす。

解放されたヤミはキリヤのことを脇に抱えれば、

「へ碧の野薔薇くビになつたらへ黒の暴牛くが貰うわ」

「そういう問題じゃなくて——」

「よオし行くぞキリヤ！　こうなりやクビ覚悟で行くぞオ!!」

「姫様ごめんなさい!!　オレまた一から頑張ります!!」

すっかりキリヤはヤミの熱に当てられてしまい、後先考えずにやる気に火が点いた。

それにキリヤだつてへ白夜の魔眼くと聞けば黙っていられない。

フエゴレオンのこともある。何より——キリヤ自身は認めていないが自分を負かせた女がいる。

「まずはウチの空間魔法を使うヤツを捕まえるぞ」

◎

アスタは窮地に立たされていた。

雪が降りしきる中、突如として子供達が行方不明となりその後を追いかけて誘拐犯を含めたへ白夜の魔眼くの一員を打ち倒した。

だが次いで現れたのはへ白夜の魔眼く頭首——リヒト。その傍らには王都襲撃の際にも姿を現した空間魔法の使い手——ヴァルトスもいた。

共にいたへ黒の暴牛く団員のゴーシュもリヒトの圧倒的な速度で放たれる光魔法で深手を負い、シスターも子供を庇って重傷。また自らも足に光魔法が突き刺さつて軽傷ではない。

大剣を盾にしながら真つ直ぐ突き進むことで致命傷を防ごうとするが——

「——無駄だ。その魔導書は返してもらおう」

一瞬の閃光。

瞬間、アスタは死を悟る。

遠距離でさえ目にも留まらぬ一撃だったのが零距离ともなれば躲せる道理もない。

だが——アスタとリヒトの間に一本の剣が飛び出す。

同時に現れたヤミが剣で光魔法を防ぎ、アスタも驚きで思わず目を丸める。

「ヤミ団長、何でここに……?」

「何でってオマエ……集団迷子です。ちよつと道教えろや」

◎

「キリヤも……」

「おう。オレとヤミ団長二人でキャバクラ行ったら呼び出しがあつてな」

「え、団長オレも呼んでくださいよ!」

「うっせえオマエ合コンでいなかっただろうが」

付き添いだった〈黒の暴牛〉の空間魔法の使い手フィンラルは文句を言うがアイアンクローで一瞬で黙らされる。

状況を掴めていないアスタにヤミが説明しているうちにキリヤはアスタよりも後方で倒れている老女のシスターに目が行くと駆け寄る。

「サキムニ、治療開始!」

『うん!』

恐らく背にいた子供達を庇って敵からの攻撃を受けてしまったのだろう。

息も浅い。年齢からして老女の生命力に賭けるしかないがサキムニ四匹がかりで治療を開始。

「オマエらは怪我不いか?」

「う、うん。シスターが守ってくれたから……」

「それなら良かった」

「ババア……っ!」

子供達に負傷はなく安堵するが身体を引き摺りながらこちらに迫る〈黒の暴牛〉団員の青年。

片目が前髪で隠れているのが特徴的だが青年の身も決して軽傷ではない。肩と足、上手く致命傷は外しているが出血が酷い。

「テメーが死んだらマリーが悲しむだろうが……オレも、気分ワリイ

だろうが……ッ!!」

「気持ちには分かるがあんまり動かないでくれ。サキムニ、この人も治療しながら運んでやってくれ。それでフィンラルくん空間魔法早くしてー!」

「わ、分かってるって!」

青年にサキムニ達を配備しながらフィンラルを呼びつけければフィンラルが新たに空間魔法の扉を開く。

子供達は次々に空間魔法の中へ入っていき、負傷者はサキムニが運んでいく。

「フィンラル、オマエちゃんと戻って来いよ?」

「……了承しかねます!」

「テメー絶対戻って来いよ!?!」

飛んでくる光魔法を刀で弾くヤミ。

そのうちにフィンラルは負傷者共々一時撤退し、この場に残されたのはアスタ、ヤミ、キリヤの三人。

対する〈白夜の魔眼〉のリヒトは驚いたような表情を見せる。

「アルーグ……?」

「出たその名前! 前のサイルつつう女もオレのことそう言ってたけど違うっての!!」

「何オマエの知り合いか?」

「いやいやオレだって全然分からないんですって! とりあえず刀向けるのやめてください!」

ヤミに闇を纏った刀を向けられればキリヤは待った待ったと両手を挙げる。

その様子を訝しげに見ていたリヒトは、

「そのローブ、どうして君がクローバー王国の魔法騎士などに……」

「だから——」

「リヒト、あの子は昔の記憶がないの!」

ヴァルトスの空間魔法から現れたのは銀髪の麗人——サイル。

その姿にキリヤの中で闘争心に火が点くがサイルはそんなこと露知らず、リヒトの隣に立てば胸に手を当てる。

「私が彼を連れ戻すわ。だから——」

「ああ、頼んだよ。連れてきてくれれば私の力で彼の記憶を呼び覚ませるかもしれない」

意味深長なりヒトの言葉。

しかし、まるで記憶にはないがサイルの時と同様にどうも初対面という気がしない。

だが——

「ゴチャゴチャうつせえよ！ 今のオレは誰が何と言おうとアルーグじゃねえ!!」

いいか耳をかつぽじってよく聞きやがれ、とキリヤは親指で己を指し、

「オレの名はキリヤスフィール・フィン・ガルガン！ よく覚えとけ!!  
そんで——」

三日という短い期間だったがキリヤはメレオレオナとの修行によって新たな力を得た。

相手の魔法だけでなく大気中の魔<sup>マナ</sup>を吸収し、自らの魔力に変換し——

「初っ端から全力で行くからな!!」

「——ッ!!」

” 兎々<sup>レベル3・ビビットアーマアルナフ</sup>戦の鉄鎧”。

始めから全力で地を蹴ったキリヤはその身に鎧を纏い、瞬間的にサイルと肉薄して腹部に蹴り込む。

「そんじゃヤミ団長！ オレこの女だけには負けられないんで頭首<sup>トクン</sup>の方は任せましたよ!!」

蹴り飛ばせばどこかの洞窟だったのか分からないがサイルは壁を突き破って飛び、キリヤ自身も洞窟を抜ける。

追撃するために空中でさらに蹴り込めば魔力放出によって足下に足場を創ればさらに踏み込む。

サキム二達の力を借りたキリヤの初速はもはや爆発。瞬間的に肉薄を果たせば自ら錐揉み状に回転し、サイルに蹴りを叩き込む。

刹那、キリヤの足に具足越しに伝わったのは緩衝材<sup>クッション</sup>の手応え。

見ればキリヤとサイルの間に銃口から放たれた魔弾がキリヤの蹴りを阻む。

これは完全に魔力だけで形成されたもの。構わずキリヤは蹴りを振り切るも衝撃は殺され、雪の上に着地したサイルは追って着地するキリヤを見据える。

「……ガルガン、本当にそれがあなたの名なの？」

「ああ、手紙にそう書いてあったらしいからな」

「あの女……まさかあの時に、そうか」

キリヤの返答に一人で納得したサイルは忌々しげに一つ息を吐く。次いで右腕に手を当てればいくつかあるうちの留め具を一つカチリと外し、雪上に落とせば——サイルの魔力の質が変わる。

今まで抑えられていた魔力は解放されればより濃く、より大きく膨れ上がり、その魔力は团长クラスにさえ匹敵するほど。

「——アナタを殺す気で行くわ」

前回のようキリヤの素顔を見た途端に見せた動揺などもうどこにも見られない。

一欠片の迷いもなく、すでにその目には確かな覚悟の炎が灯っていた。

「上等だ。今度オマエに負けたらレオナ様に嫌われちまう……ッ！」

”レベル4・ラビレイドナラマ魔兎戦ノ霊鎧”。

グリモワール魔導書から出した”吸魔の銃”を携え、キリヤの鎧は組み合わせる。

兜のV字は残したまま鎧は凶悪な形状へと変化し、拳銃も銃剣へと変化すればキリヤはその場から飛び出す。

サイルは前回とは違いキリヤの拳が届かない中距離で戦おうとはしない。

インフアイト銃器を扱うにも関わらずキリヤの肉薄に距離を開けようともせず、近接格闘となる。

銃剣の振り下ろしに二丁拳銃の片手で受け止めたサイルは返しに空いた右手の銃口をキリヤへ向けるがキリヤの左手は右手首を捉えて上空へ上げる。

同時に銃口が火を噴けば夜空に向けて火の竜が撃ち上がり、しかしそれだけではない。

サイルの肘にも銃は仕込まれており、キリヤは強引に足を前方へ滑らせてサイルの股下を抜けて躲す。

今度は靴裏に仕込まれていた銃口が火を噴き、キリヤは身体を横回転して連射を避ける。

(全身銃器人間だな……ッ！)

両手両足ついた体勢でキリヤは銃剣を振り上げるも手首にサイルの靴裏が押し当てられ勢いを殺される。

即座に銃剣を離し、今度は踏みつけてきた足首を掴んで雪上に叩き込む。

衝撃は雪が逃げ場となり、思うようにダメージは入らずサイルは身を回転させキリヤの手を振り払えば腰元、両手、靴裏から魔弾が一斉に火を噴く。

「チッ!!」

拾った銃剣を振り回し、片っ端から魔弾を防いでいくものの逃した一弾がキリヤの肩を捉える。

触れた途端に爆発を引き起こし、仰け反ったキリヤの顔面にサイルの拳が炸裂。同時に拳に仕込まれていた魔弾も暴発して勢いを凄まじくする。

頭が千切れそうな衝撃にキリヤは首に力を込めて堪え、自らが飛ばされる前にサイルの腹部に蹴りを入れる。

「ぐ……ッ!!」

だが圧倒的な魔力によって壁が出来ているために蹴りの威力はそれだけで半減されてしまう。

キリヤとサイルに一度距離ができ、キリヤは首の骨を鳴らす。

「流石に一筋縄じゃ行かねえか……」

今のところ”レベル4・ラビレイトナラマ魔兎戦ノ霊鎧”でも同等……いやまだ相手の方が上だ。

キリヤは”レベル3・レビットアーマルナテ兎々戦の鉄鎧”に戻れば”吸魔の銃”を仕舞う。

「……諦める気になったの？」



「いんや、ここからだ」

敗北した時とは違う。

すでにその時から進化して得た一手、

「——ここからがオレの全力だ!!」<sup>レベル6</sup>

魔導書から飛び出したノームが肩に乗ればキリヤは兜の中で不敵に笑ってみせる——

### 35話 「過去と今の俺」

「行くぜノーム!! 力を貸してくれ!!」

『御意!!』

キリヤの言葉にノームが呼応すればキリヤの全身が光に包まれる。光の中でキリヤの鎧は変化する。今までにないほど籠手は分厚く、巨木の如き太さになれば拳さえも元々のキリヤの拳を上回り、V字だった兜に新たな直線のラインが刻まれる。

身体進化魔法” 兎<sup>レベル6・ラビイルモンドアルナフ</sup>剛石の重鎧”。

ノームの持つ金剛石の絶対防御がありながらサキムニの瞬発力を失っていない。

剛と柔、二つ合わさりし鉄壁の鎧が顕現する。

「四大精霊ノーム、そんなものまで……でも!!」

サイルは新たな鎧にも構わず直進で迫り、キリヤの首筋に蹴りを打ち込む。

魔弾創成魔法”<sup>スリングバースト</sup>弱除弾”。

王都襲撃の際にキリヤの身体強化魔法を解除し、決め手となった一撃。

あの時と変わらず打ち込まれた瞬間に靴裏の銃口が火を噴く——が、キリヤはまるで動じない。

「っー」

目を見開いたサイルは気付いただろう。

キリヤの首の少し前にはよく目を凝らさなければ見えないほどの透明度を誇った金剛石の壁。

撃たれたのはキリヤ自身ではなくただの壁であり、キリヤには傷一つ付いていない。

「ならば——」

撃ち出される魔弾の数々。だがそれらはキリヤの身体に衝撃すら与えず、キリヤは両拳を地面に叩き込む。

直後、サイルの足下から金剛石が噴き出しその動きを拘束し封じ込める。

土精霊拘束魔法“ダイヤモンドクレバスラ金剛石の重縛”。

全身を金剛石が纏わりついたサイルの動きは封じ込められ、これではどこに銃器を隠し持っていたとしても魔弾を撃ち出すことは出来ない。

魔力放出を断発的にし、軸足を一步ずつ変えながら独楽のように回りながら肉薄。

魔力格闘技“スピンフイニッシュユライオネル獅子独楽拳骨”。

接近と同時に拳を打ち込めばサキム二達の力が解放され、金剛石同士がぶつかったことよって相殺しサイルの身体を天高く飛ばす。

「オレの勝ちだミサイル女——だから前にオマエが勝ったのはナシな!!」

◎ 『サイルの魔法って綺麗だな!』

『そうかしら。自分だとよく分からないけど……』

『オレの魔力ってさ。皆と違って色もねえからサイルみたいに何でも出来るってのが羨ましいぜ!』

二人で丘にある綺麗な花畑を訪れた時の話だった。

アルグには生まれつき魔マナの色というものがなく、出来るのは身体強化魔法だけ。

だからこそ憧れが強かったのだろう。全ての属性をサイルはそんなアルグに気遣って色々な魔法を見せた。

その度アルグは喜んでくれて、魔弾魔法も今思えばアルグとの繋がりが生んだものだった。

『ねえアルグ。どうしてアナタはそんなにも私の魔法を見たがるのかしら……?』

サイルは知っていた。

色を持たないアルグだったが彼を愛する精霊が多く、すでに多くの精霊はアルグの傍にいたのだ。

精霊達の力を借りればサイルが見せていた魔法など容易く再現出来る。

それなのにどうして、純粋な疑問からの質問だった。

質問を投げかけられたアルーグは顔を俯かせ、考える素振りを見せる。

そうしているうちにも精霊がアルーグの周りを漂うがアルーグはにこつと笑ってみせて、

『だつてさ、サイルと一緒にいる口実欲しいじゃん』  
『っ！』

本当に単純なことだった。

ただ一緒にいたいから、いつも直球に物を言うくせにこんな時だけ気持ち隠して。

サイルもつられて笑みを浮かべてしまう。

『アナタは莫迦ね。口実そんごつとなくても私はアナタと一緒にいるわ。それに私はアナタより強いからアナタを守ってあげる』

『オレだつて頑張ればサイル守れるし!!』

遠い記憶の光景。

身体に浮遊感が襲い掛かる中、サイルの手はゆっくりと届くはずのない月へ伸ばされる。

(やっぱり本気になれるわけじゃない……例えばアナタが私のことを全て忘れてしまったとしても私がアナタを殺す気なんて起きるはずもないわ)

◎

「今どんな状況っスか!？」

「おー戻ってきやがったか。ま、見ての通りだ」

サイルに勝利したキリヤは洞窟へ戻るとヤミやアスタ、負傷していたゴーシュがいた。

ヤミに言われた通り周りを見ればサイルが倒れているのは無論へ白夜の魔眼▽頭領のリヒト、空間魔法の使い手ヴァルトスも倒れており、どうやら一通り勝てたようだ。

「分からないことだらけだがとにかくコイツら全員拘束すつからオマエも手伝え」

「オレ自身何にも拘束魔法持ってないっス！」

「そこは精霊の力借りろよ」

「あ、そうでした」

少し精霊達が使える魔法を失念していたキリヤだがすぐにサキムニを出してサイル達を拘束するように指示を出す。

ヤミも闇拘束魔法を使いリヒトを捕らえようとするが――  
「っ！」

ヤミ、アスタ、キリヤの三人は同時に新たに現れた気配に気付く。見ればヴァルトスは倒れているはずなのに全く同じ空間魔法が展開され、そこから新たに三人の人影が現れる。

「うわちやく大変なコトになってるよ。メンドくさがりなウチでも――マブダチは助けられないとな」

一瞬の光の瞬き。

気付けば完全に不意打ちで現れた男の一人がヤミの前に現れており、グリモワール魔導書に手を触れる。

「変わった柄だな」

「てんめえ……ッ!!」

「おっと、危ない危ない」

キリヤが咄嗟に回し蹴りを放つがヤミの魔導書に触れた男は即座にその場から離れる。

と、上から頭を押さえられたキリヤの上からヤミの斬撃が放たれる。

闇魔法”闇纏・無明斬り”。

闇を纏った刀から放たれた斬撃は男に向かって飛び、間合いを見間違えた男の肩を掠める。

「イッター！ ま、こんくらいならチョコイで治せちゃうけどね」

「あの魔法、さっきアイツが使ってたのに何で……」

光魔法”癒やしの光粒”。

光の粒が触れた肩はすぐにその傷を癒やし、その様子にアスタも驚く。

恐らくアスタが戦っていたリヒトも光魔法を使っていただろう。聞くだけで光魔法が希少なものと分かるがあの不誠実そうな男がどうにも光魔法と一致しない。

「……すまない、君達の助力を借りることになってしまおうとは」  
だが今は冷静に考えている暇はない。

援軍である一人の少女が使った炎回復魔法“不死鳥の羽衣”フェニックスはリヒトの身体を覆い、その傷を急速に治癒させていく。

「リヒトくん、何でも一人で抱えてたらメンドーだよ」

「よくも我が友を……八つ裂きにしてやる……ッ!!」

「憎い……リヒトを傷つけたヤツが憎い……」

前髪だけが白色になった黒髪の男。

筋骨隆々としたまるで獣の如き野生味を帯びた男。

どこか臆気な双眸の少女。

その誰もが見た目だけでは計り知れないほどの魔力を持っており、  
下手すれば団長クラスをも凌ぐほど。

「な、何だコイツら……」

「紹介しよう。彼らは〈白夜の魔眼〉でも最強の三人。戦闘能力においては私を上回る存在——〈三魔眼〉だ」サードアイ

「じゃ、とつとつその実力を証明しますか」

先ほどヤミの魔導書に触れた男がそう言えばその手にはヤミのものと瓜二つな闇を纏った刀。その刀に皆が驚かされる。

「君達の王国はクローバーを象徴しているが……クローバーの葉には君達に似つかわしくない言葉が秘められているね。『誠実』、『希望』、『愛』……彼らにはその対と為す意味の言葉を名に冠して貰った」

『不実』のライア。

先ほどヤミが使っていた闇魔法“闇纏・無明斬り”を完全に模倣した形で闇の斬撃を繰り出すライア。

「テメー人の魔法パクってんじゃねえぞ!!」

ヤミも横振りに飛ばされた闇の斬撃に縦振りの斬撃で迎え撃つ。

だがすぐさまキリヤは“兎々レベル3・ビヒットアーマルナフ戦の鉄鎧”を纏いヤミの側面に出る。

「ほう、私の動きに対応するか!」

『絶望』のヴェット。

獣魔法“ベアクロウ”で自らの腕に魔力を纏い獣の爪を模した乱

舞。

その動きにキリヤも応戦するが蹴りと爪が真正面から衝突した途端――

「その程度か!!」

(ヤベェ力負けしてる!!)

あの〈七剣総統〉ですら<sup>レベル3・ビビットアーモアルナブ</sup> 兎々戦の鉄鎧<sup>レ</sup>で圧勝出来たというのに今では完全に負けている。

腕に薙ぎ払われたキリヤは飛ばされヤミに激突してしまい、ヤミが持つ刀の刃を折ってしまう。

「すみません!」

「言ってる場合か!」

ヤミが向いた方向からは莫大な炎の塊が迫っていた。

「ノーム!!」

『御意』

キリヤの魔導書から飛び出したノームは手を正面へ翳す。

金剛石精霊創成魔法<sup>ネ</sup> 網状敷の絶対防御壁<sup>クダイヤ</sup>。

寸前で炎の塊を防いだがノームは怪訝そうに、

『驚愕。この火力は……』

『憎悪』のフアナ。

先ほどの一撃は炎精霊魔法<sup>レ</sup> サラマンダーの吐息<sup>ク</sup>。

現に肩には全長三十センチほどだろうか。小型のトカゲが乗っており、その口から煙を吐いている。

四大精霊サラマンダー。ノームとも顔見知りだったのだろう。だが、他の精霊と違ってまるで意思が感じられない。

「その鎧を着てるのはアルグなの!! お願い〈三魔眼〉<sup>サードアイ</sup>、あの子は……アルグは『ガルガン』に何かされたから私のことや皆のことを覚えていないだけなのよ! だから彼だけは生きて捕らえて!!」

「何だって? ……確かに、あの鎧は昔とは違うけどアルグくんのものだよね」

「真偽はともかくサイルが見間違えるはずもない。ついでだ、捕まえてやる……ッ!」

もう気が付いたのかサイルは声を上げ、その言葉で〈三魔眼〉の目が一気にキリヤへと向けられる。

このままでは皆がキリヤの巻き添えを喰らってしまう。  
ならば――

「皆を守れノーム!! オレの分に魔力は回さなくていいから全力でやれ!! オレがいいって言うまで何があっても絶対出すんじゃないやねえぞ!!」

『……承知』

金剛石精霊創成魔法”ダイヤサークルウォール金剛鉄壁陣”。

ノームはキリヤから離れるとこの場にいたクローバー王国の者全員を囲うようにして金剛石の壁を創造する。

ヤミが中で何か言っているが防音性も完璧なのか何も聞こえない。

「……何故そんなムシケラを庇う?」

「オレの後ろには今トモダチがいるんだ。尊敬する人もいて、今は知り合いじゃないけどいつか知り合うかもしれない連中もいる――ほら庇う理由が三つもあるだろ」

「貴様とリヒトも同じだ。唯一無二の親友であるにも関わらず、何故矛を向けるのだ」

「それにガルガンつつつたらウチらにとつたらこれまでにならない忌み名だ。もつとも、今のキミにしたら”母親”なんだろうけどね」

「憎い……リヒトから親友を奪ったガルガンが憎い」

「……………」

あれだけ敵意を持っていた〈三魔眼〉がキリヤに向ける声音には仲間に向けるものがある。なのに今のキリヤには何も分からない。

だが明確に分かっていることはある――

「オレの母さんがどんなヒトかも知らねえし、オマエらにとってアリーグがどんな存在かも知らねえしリヒトやサイルがオレのことをどう思ってたかも分からねえ。でもな、今のオレにとって生まれや名前なんて些細なことなんだよ」

そう。過去は過去。

覚えていない過去よりもキリヤにとって何より重要なのは生きる



意味を見出せた二年前からだ。言えばキリヤの人生は二年前、メレオレオナに出会った時から始まった。

だから――

「オレはもう二度と負けたくねえ――ただ惚れた女に『カツコイイ』つて認めてもらいたいだけのヤローなんだよ!!」

キリヤは強大な魔力を持つ〈三魔眼<sup>サードアイ</sup>〉相手に“吸魔の銃”を取り出す――

### 36話 「想いは過剰に暴走する」

「行くぜ〈三魔眼〉!!」

“吸魔の銃”を構えたキリヤは目の前に銃を向け黒い闇が噴き出す。

駆けてくる〈三魔眼〉にキリヤは黒い闇から飛び出せば鎧は変化し、  
レベル3：ガンドレイドラーマ “斬鉄の吸魔鎧”となっていた。

「無駄だよ……今の君では彼らには敵わない」

「……無駄、無駄。リヒトが言うんだから」

精霊魔法“サラマンダーの吐息”。

先ほどよりも強い火力で打ち出された莫大な炎の塊にキリヤは銃剣を薙いで斬り裂く。

キリヤの想いに呼応したのか、キリヤは全身に魔力を保持しながらも銃剣だけであの莫大な魔力を吸収出来た。持ち主の想いに応える――“吸魔の銃”に住まうのがどんな者か知らないが今は使わせて貰う。

サキム二達を合わせずレベル3でいるのも“吸魔の銃”が今はこの方が効果的だと言った気がするからだった。

「喰らえ!!」

“サラマンダーの吐息”を打ち返せば対応するのはフアナではなくライア。

側面から放たれた模倣精霊魔法“サラマンダーの吐息”がキリヤの一撃を相殺し、呆気にとられた瞬間をキリヤの横腹をヴェットが打つ。

「ぐ、うう……っ!」

「過去とは違い隙だらけだぞ」

「つるっせえ!!」

鎧などもはや防御になっていない。

襲い来る鈍痛にキリヤは吹き飛ばされ、歯を食い縛る。

今ので肋骨がやられたのか、呼吸するだけで腹部が痛みまともな思考にならない。

だが相手は手を休めることはない。バラバラに見えるようでは取られており、例え魔力を吸収出来る銃剣を持っていてもキリヤは追い詰められる一方だった。

(オレは負けねえ……負けられねえんだよ!!)

再会した時、メレオレオナは言った。

——弱い者には興味がない、と。

サイルに一度敗北を喫したことを伝えた時、メレオレオナは怒っていて失望させてしまったとキリヤは敗北したことを酷く悔いていた。「どうした、動きが止まっているぞ!!」

獣魔法”チーターチャージ”。

瞬く間に肉薄してきたヴェットにキリヤはカウンターで銃剣を振るうも容易く躲かれてしまう。

「剣の扱いがなっていないな……ッ!!」

獣魔法”ベアクロウ”。

宙へと弾き飛ばされたキリヤに容赦なく叩き込まれる”サラマンダーの吐息”。

連発で撃ち込まればあまりの魔力量に吸収しきれない。

地面に頭から落ちたキリヤの鎧は各所が碎け素顔が露わとなり、銃剣は離れた場所へ落ちる。

気を失ったように思えたキリヤだが土を掴みすぐさま起き上がる。だが即座に気付いたヴェットによる追撃がキリヤの背中を打つ。

「が、は……ッ!」

「諦めろ。今の貴様と我らでは差は歴然だ」

ヴェットはそう言い放ち、倒れたキリヤの前にライアが屈む。

「……本当に瓜二つだねアルーグくんと。これ以上戦んのもメンドーだし同郷の仲間を傷つけたくないしね、捕らえさせてもらおうよ?」

◎

ライアの言葉などキリヤの耳に届いていなかった。

聞こえたのは——諦めろという言葉だけ。

『あなたが求めたのはたったこれっぽっちの力なの?』

どこからか、そんな声が頭に直接響いた。

誰の声か分からない。聞いたこともない。だがその問いは否定しなくてはならなかった。

「違う……オレはもつと、強くなるんだ」

『うん、そうだね。もつと、もつと、強くなるんだ』

薄れていく意識の中、目の前に広がっていたのは洞窟の光景ではなかった。

何も無い、地面も空もなくただひたすら何も無い空間。そこにキリヤは浮遊していた。

気付けばキリヤの前に立つのは黒い影に覆われた女性。

『私は誰よりも〴〵あなたの強さ〴〵を知ってる。だからこんなところであんなヤツらに負けるのなんて見たくないの。ホントならあのサイルの時にだって出てやろうと思っただけど思っただけ以上に魂の連結<sup>リンク</sup>出来てなくて。ごめんね?』

「魂の連結……?」

『あなたの身体進化魔法はレベル3以降何かを身に纏うだろう? その間あなたは精霊と魂が繋がっているのさ。だから使い込めば使い込むほど連結<sup>リンク</sup>は深く、強くなっていく』

ま、これは説明しなくていいかと女性はキリヤに近付くなり腕をキリヤの背に回して抱きしめてくる。

『魔法帝だって、魔法騎士団長だって、<sup>サードアイ</sup>〈三魔眼〉だって、キリヤがその気になれば敵ですらないの。もつと私<sup>ちから</sup>を求めて。苛烈に、貪欲に、ただひたすらに——そうすればあなたは誰にも負けない強さを手に入れられる』

「誰にも負けない強さ……」

『メレオレオナ・ヴァーミリオンに嫌われたくないんでしょ? だって嫌われちゃったら会話すらしてくれなくなっちゃうんだし。好きな人に嫌われるのは何事にも勝るほどツライでしょ? 彼女言ってたじゃない——あの程度の女に負けてれば絶縁してたーって、下手すりゃ今回もそうかもよ?』

どこまで知っているのか、この女性はキリヤの全てを把握している

ように思える。

影に覆われて表情は見えないが口元に手を当て、くすくすと女性はキリヤの不安を煽りながら笑う。

『別にそうなくてもあなたには私がいるんだし私的にはイイと思うんだけど、やっぱりこのまま負けるのも癪だしね。あなたの感情次第だよ』

「オレは……レオナ様にだけは嫌われたくねえ」

と、聞けば女性はキリヤの背後へ自然な動きで流れるとキリヤの右手を取る。

『だったらほら、最も基礎的なこと。人差し指から順に、最後は親指で支えて拳を作ればそれを突き出す。あなたが求める限り力は無限に供給されるから——ほら、言つてごらん』

「オレは——」

◎

「もつと強くなるんだッ!!」

「っ!？」

真つ直ぐ突き出した拳はライアの顔面を真正面から捉えていた。

無意識のうちに殴り飛ばした一撃。だがそのおかげで喝が入った。あれだけ激痛を訴えていた身体も痛みを発するどころか全快し、これまでにないほど調子が良くなっている。

「どこにこんな力が……」

顔面に受けた一撃で怯んだライアは一旦光魔法によって距離を取り、フアナが“サラマンダーの吐息”を撃ち出す。

腰を捻り拳を構えればキリヤは真正面から“サラマンダーの吐息”を殴り吹き飛ばす。

「こんなもんじゃねえ！ オレが求めてる強さはア!!」

ただ吹き飛ばしただけではない。“サラマンダーの吐息”に込められていた魔力全てを銃剣なしでキリヤの身に吸収していた。

加速し肉薄してくるヴェットにキリヤは拳を打ち当てる。本来ならばヴェットが持つ強大な魔力で阻まれるだろうが今のキリヤに魔力は意味をなさない。

『もつと!!』

「もつと!!」

先ほどまで意識の空間にいたはずの影に覆われた女性がキリヤの傍に現れる。

だがキリヤにしか声は聞こえず姿も見えていない様子。それでも戦闘に関係はない。

一撃、二撃、拳による打撃がヴェットの顔面と横腹を捉えれば蹴り飛ばす。

『誰も敵わないぐらいに!!』

「強くなるんだア!!」

ファナが炎の魔力を纏い突貫してくるがキリヤは躲し、裏拳を叩き込む。

すると消えたかのような速度でファナの身体は洞窟の壁へと叩きつけられる。

「もつと、もつとだ。もつとオレは強くならなきゃなんねえんだよ!!」

◎

「ダメよアルグ……それ以上その力を使えば——あなたがあなたじゃなくなるわ!!」

アルグの額には魔力で形作られた眼が尾を引き、しかも一つではない。合計して三つの魔力の眼が額に収まらない分、頭頂部付近で揺らめいていた。

あの〈<sup>サードアイ</sup>三魔眼〉ですら劣勢を強いられるようになったのを見てサイルは即座に確信した。

今アルグを突き動かしているのは間違いなく“吸魔の銃”、いやその中にいる悪魔そのもの。

かつてのアルグならば善悪の区別はつけ、あの悪魔との距離感も知っていたはずだが今のアルグはそれを知らずに使っている。

傷は浅くないがサイルは立ち上がるなり激戦の合間を突き進んでアルグへと肉薄し、その両肩を掴む。

「オレの邪魔をすんじゃないねえ!! オレは……強くないといけねえんだ!!」

「そんな強さに意味はないって過去のあなたは言っていた！ 私にそう教えてくれたじゃない!!」

「オマエはオレの敵でしかねえ!! エラソーな口利くんじゃねえよ!!」

不意の衝撃にサイルの表情が苦悶に歪む。

アルーグが放った拳が腹部を打ち、口端から血が零れる。

それでもサイルはアルーグから離れない。このままでは確実にアルーグは自分を見失ってしまう。

例え今のアルーグがキリヤとして生きていて、自分のことを何も覚えていなくとも。敵だと蔑まれようとも。サイルにはアルーグを見捨てる選択肢などどこにもない。

いくら殴られようともサイルは離れず、アルーグを抱きしめ続ける。だがアルーグは止まらない。

『ほら、あなたの強さを否定する女が現れた。壊さないとまたいつ邪魔するか分からないし——殺しちゃえ』

「離れねえんなら容赦はしねえぞ!!」

悪魔——ベルゼヴィーヴィアはアルーグからサイルを強引に引き離してくる。

すでに現世に介入出来るほどの連結リンクをしてしまっているのか。サイルは対処しようにも魔力の塊を拳に纏わせたアルーグが迫っていた。

「ッー」

拳の連撃、後ろ回し蹴りの全てがサイルの身体を捉え吹き飛ばされる。

壁に叩きつけられ、血を吐きながらもサイルは倒れそうになる身体に鞭を打ちながら立ち上がる。

こんな身体に走る痛みなど容易いものだ。だが目先の強さに縛られ、苦しむアルーグをまた失えば今度こそサイルの心は持たない。

「まだまだ……もっと強さが必要なんだ!!」

キリヤの身体に残った鎧の各所が一斉に黒い闇を噴き出させる。

今まで貯めに貯めた魔力が火花を散らし、闇を裂いて現れたキリヤ

の姿は大きく変化していた。

まるで鎧と人が一体化したようにその姿は人間から離れ、背中から大きな一対の鋼鉄の翼が広げられる。

身体強化魔法” 斬滅の万吸魔神鎧”。

生ける災厄とも言われた魔神——いくら禁術を重ねたところで到達出来る人間など片手の指で容易に足りるほどしかない究極形態。

「ルウアアアアアアアアアア——ツ!!」

「……これはまずいね」

莫大な闇の力の奔流に回復中のリヒトでさえ冷や汗を隠しきれていない。

この力はまだ使うべき時ではないのだ。さらにアルグのものとなればイレギュラーも甚だしい。

『きたきたきたーっ!!』

こちらの気持ちなど伝わるはずもなく黒い影に覆われていたベルゼヴィーヴィアもその正体を現す。

妖艶で見る者を魅了して止まない容姿をしているがその体色は薄い紫色と人外そのものであり、目も人間の色では表しきれない色をしている。

「そんな……アルグ」

『一途な愛つてのはヒトを盲目にさせんのよ。あなたよりもメレオレオナって女の方が愛されてるって証拠かしら?』

アハハと哄笑するベルゼヴィーヴィアは勝利を確信したと言わんばかりに両腕を広げ、

『どんな魔力の持ち主でも私の前ではただの食糧。手始めにこの一帯の魔ゼーんぶ吸収べて——』

「——昔と何一つ変わってないわねベルゼヴィーヴィア」

高らかに勝利を宣言しようとするベルゼヴィーヴィアにサイルは回転式自動拳銃に一発の銃弾を込めて放つ。

その銃弾はアルグへ向け放たれるがベルゼヴィーヴィアはけら笑う。

『ははは！ そんなチンケな銃弾一発でどうしようっていうのかしら



！』

「貴様にとって魔<sup>マナ</sup>などどの属性であれ等しく食糧……それが慢心を生むのよ」

『っー！』

魔弾創成魔法” 虚空弾<sup>ゼロバースト</sup>”。

着弾すれば如何なる魔法でも打ち消す無属性の弾丸。

魔神と言えど強化魔法。そして今の状態はアルীগ自身が魔神になったのではなく身に纏っている鎧が変化しただけに過ぎない。

『しまっ——』

気付いたところでもう遅い。

アルীগが身に纏っていた”レベル666・デイレイドベルゼアーマ斬滅の万吸魔神鎧”は解除され、過剰な力を得ていた代償にアルীগは倒れる。

同時に現世に顕現していたベルゼヴィーヴィアも消え、サイルはアルীগの身体を地面に触れる寸前で受け止める。

「もっと強くなる……そうせざるを得ない環境にいるのね」

凄まじいまでの強迫観念。

人間といえるからこそアルীগはこれほどまでに苦しむ、それならば

「帰りましょう、アルীগ」

だが、瞬間莫大な魔力の奔流が三つに渡って放たれる。

アルীগを抱えたサイルを避ける形だったが現れた新たな人影三人にサイルは忌々しげに声を上げる。

「魔法騎士団……ッ！」

そこに現れたのはクローバー王国が誇る魔法騎士団団長三人が立ち並んでいた——

### 37話 「薔薇の姫君VS魔弾の射手」

魔法騎士団本部から一報を受けてシャーロットは〈銀翼の大鷲〉团长ノゼル・シルヴァと〈翡翠の蠅螂〉团长ジャック・ザ・リツパーと共に戦場へ赴いたが事態は思った以上に芳しくないようだった。

ノームの防壁に閉じ込められた状態のヤミやその他は負傷が見え、奥では魔弾の使い手に抱きとめられているキリヤが見える。

状況から察するにキリヤはヤミ達を庇い、一人で戦った。今のキリヤからは魔力が感じられず、何があつたかは不明だが敵に囚われているのは事実だ。

一度ヤミの方へ振り返れば金剛石の壁に手を触れ、

「ノーム、壁を解除しろ」

『……拒否。主は我に指示があるまで何があつても絶対に出すなど言われている』

「そうか……」

と、防壁の内部でいきなり荊が溢れ出す。

そのまま内側から金剛石の壁を持ち上げ、半球状の金剛石の壁を無理矢理地面から引き離す。

「これで話が出るな」

「おたくの団員どうなつてんだ。团长差し置いて一人で突貫しやがって」

「黙れ。元はと言えば謹慎中だったあの莫迦者を連れ回す真似をした貴様がそもそもの原因だ」

「それ言ったら謹慎の意味すら知らなかったアイツに止められなかった〈碧の野薔薇〉のせいなんじゃねーの?」

「……ともかくいつまで尻餅をついている気だ。男のクセに情けの無いヤツだな」

「おい誤魔化したろ今」

ヤミの言葉を途中で切り上げ、背を向けるシャーロット。

その心の中ではヤミに対して何故こんな悪態しか吐けないのかと悔いながらも今はそれどころではない。

あの様子であれば敵はキリヤの命を取ることが目的ではなく、どうにも連れて行こうとしている様子。

「我が国を襲った逆賊のトップが雁首を揃えているとは……また面白い好機だ」

「オレもまだまだ戦いまアす!!」

「引っ込んでいろ下郎」

戦功叙勲式にもいた——名前は思い出せないが反魔法を扱う少年も意気揚々と戦意を見せるがノゼルにすぐさま拒絶される。

「我々団長が出張った戦場に魔力の無い下民など必要ない」

「……っ！」

「新手か……良いだろう！ 果てしなき闘争の果てに真なる絶望がある!!」

「あーヴェットくんやる気なのはメンドーだけどウチ今無理……」

「何を言っているライア」

敵もまた戦意を見せるが鼻を手で押さえたライアと呼ばれる男は「タンマタンマ」と手を軽く挙げる。

地面にも垂れているがどうにも鼻血が止まっていないうだった。

「光魔法で治癒しようにもアルーグくんに殴られた鼻まだ止血出来ないんだわ。悪いけど今回はパス」

「……ベルゼヴィーヴィアの能力ね。魔力を奪われた箇所は一定時間あらゆる魔の恩恵を受けられないわ」

「メンドーだなホント……っことで流石にバトることになれば鼻血って支障出まくりだしサイルいけるかい？ アルーグくんのことならウチが見とくし」

「分かったわ。丁度私もあの女に話があったところよ」

拳銃を携えたサイルだが一度振り返り、

「もしアルーグに何かあればあなたを殺すわ」

「ひえーアルーグくんのことになればホントに盲目になるといっか……まあ大丈夫だって」

「ふん情けないヤツめ。まあ良い、我も魔力を回せない箇所がいくつもあるが丁度良いハンデだッ!!」

その言葉を火蓋に洞窟内で一斉に莫大な魔力が迸る。

ノゼルはサラマンダーを肩に乗せた少女と、ジャックはヴェットと呼ばれた大男と。

そしてシャーロットはサイルと対面する。

「貴様が全ての属性を使う魔弾の射手か。何故キリヤを狙う？」

「決まってるわ——あの子が苦しんでいるからよ。強さばかりを求められ、アルグは悪魔の声を聞いてしまった。だから私は彼を戦場から引き離す。もう二度とアルグにあんな表情カオはさせない」

「その口振り……キリヤの過去を知る者ということか」

キリヤは自ら二年前以降の記憶がないと言っていた。

つまりこのサイルという女はそれ以前のキリヤを知っているということだが——

「アイツの今の名はキリヤスフィール・フィン・ガルガンだ。アルグではない」

「……その名を口にするな!!」

サイルは憎々しげにシャーロットへ銃口を向ける。

「貴様と私では種族も生きる場所も違う……そして思想も。だから私達は殺し合うしかない」

「単純なことだ」

シャーロットは柄しかない西洋剣から荊を出して構え、サイルはグリモワール魔導書を輝かせれば様々な精霊がサイルの周りに現れる。

一見光の球にしか見えないが確かな生命の息吹を感じる不可思議な生命体。十センチ程度の体躯の各所に氷を輝かせる生命体。成人女性に見えるも衣服は全て葉や根で作られている木の生命体。豹の体躯を持ち全身に雷を迸らせる生命体。その他にも多数の生命体がサイルの周りを浮遊する。

そのどれもがとてつもない魔力を内蔵しているのが見て取れる。

「この子達はアルグと共に生きていた精霊よ。どの子もアルグを真に愛していた、アルグもこの子達に愛情を注いでいた。なのにこの子達から、私から、アルグを奪ったのはクローバー王国の……貴様達人間だ!!」

精霊魔弾創成魔法” 雷豹魔弾”。

パンサーダークバースト

撃ち放たれた魔弾は精霊の力が乗ってさらに加速。撃つたと思つた時点で――

『うりゃーッ!!』

「な、サキムニ――」

シャーロットの眼前で魔弾は飛び出してきたサキムニによって防がれる。

その後も続々と現れたサキムニ達は何体か集まれば手を合わせ、輝けば続々と少女の姿になってシャーロットの前に立つ。そこに現れたノームを合わせて相手と同数になる。

『兎精霊強化魔法” 人間化”、ボク達だってキミ達に負けないぐらいご主人に愛情を注いでるから! 絶対に負けなイ!!』

『賛同。義によって加勢する』

「貴様達……」

シャーロットの言葉を聞く暇もなく突撃したサキムニ達とノームは相手の精霊を巻き込んでさらに戦闘を激化させていく。

ようやくこれで一対一の状況を作られたシャーロットは荊の切っ先をサイルへ向ける。

「貴様がどんな信念を抱いてるか知らん。だが私の団員をそう易々と奪わせるものか」

◎

始めから互いの魔力の衝突は全力だった。

柄を軸に荊を展開し、地面から幾度と無く荊を飛び出させ連撃を仕掛けるがサイルもマナスキンによって底上げされた身体能力によって躲していく。

何より魔力の扱いが群を抜いて上手い。一定量の魔力を放出してまともだけでなく、時にまるでキリヤと同じように身体の各所から魔力を一気に放出して加速または減速を行って空中だろうが地上と変わらない身軽さを見せている。

(ならば――)

全ての角度から覆い、逃げ場をなくす。

「荊創成魔法」身縛りの荊牢」。

サイルの地面から飛び出す荊の他の円状に飛び出してあらゆる角度から逃げ場をなくそうと荊が飛び出すが一――

「クロノスー」

サイルは再び魔導書を輝かせればそこから新たな精霊が飛び出す。時計に酷似した体躯を持つ精霊はサイルの周りに浮遊すれば新たな弾丸が放たれる。

精霊魔弾創成魔法」タイムレスバースト時界魔弾」。

着弾した箇所から荊の色が変化したと思えばその動きは酷く緩慢なものへと変貌してしまう。

（対象の時の流れを遅める魔弾か）

新たな精霊に気付いたサキムニが分裂してクロノスを捉えて爆煙の中へ消えていくがサイルがまだ精霊を隠し持っている可能性は充分に考えられる。

これまでの攻防、キリヤからの情報で何発か魔弾の種類は把握しているがまだまだ底知れず、魔導書のページ数が桁違いなものも領ける。（これが魔に愛された者の力……）

全ての属性を持つサイルはシャーロットに対し常に優勢に立ち回れる。

属性不利は当然だと思っていたがその上精霊まで使役していたとは。それもどれもが歴史に名を残すほどのものばかり。

（悲観しても仕方がない。今は倒すよりもキリヤの身が先決だ）

今もキリヤはライアとかいう男の傍で倒れた状態だ。

遠くで空間魔法の使い手も気を失っているがこのままだといつ連れ去られてもおかしくない。

だがそれは当然サイルも分かっているはず。現に戦いながらもキリヤへの配慮は何一つ衰えることはなく、むしろ感覚が研ぎ澄まされているようだ。

それほどまでにサイルはキリヤに執着している。

何があつてそうなったのかはまるで不明だがシャーロットとしてもキリヤを奪わせるわけにはいかない。

今まで地面から湧き出ていた荊は攻撃するだけでなく、一種の視線誘導。一筋の荊が地中深くからキリヤに向かって伸びていたが――

「サラマンダーッ!!」

サイルが何かに気付き叫べば少女の肩に乗っていたサラマンダーが主人の元を離れ、サイルの肩に乗る。

次いでサイルは拳銃を消したと思えば弾丸ではなく杭が装填された重火器を地面に向け、

「精霊魔弾創成魔法」 サラマンダーの爆撃!!」

撃ち放たれた魔弾は地中に勢い良く突き刺さり潜り込めば地面から炎が噴き出す。

シャーロットも荊に乗って噴炎を躲すが今ので地中を進んでいた荊も燃やし尽くされてしまった。

「魔力を抑えて慎重に進めていたみたいだけど無駄よ。私には魔力の流れが手に取るように分かるわ」

「だったらこれはどうだ」

サラマンダーが持ち主の元へ戻っていく中、サイルの側面から岩塊が襲う。

巻き起こる爆煙のせいで直前まで気付かなかったサイルだが――

「精霊同化」 スピリット・パンサード」

雷豹が即座に戻ってくれば弾倉に装填されサイルは自らを撃ち抜く。

しかしそれは傷つけるものではなく、サイル自身が逆る稲妻の如き速度で駆けて岩塊を躲す。

その姿はまさにキリヤが使う身体進化魔法の鎧。雷を鎧として身に纏ったサイルは地に足をつけ、シャーロットを見据える。

「これが精霊と魂を繋げる連結……元々は無属性で身体強化魔法しか使えなかったアルグが創り上げた魔導書に頼らない魔法。そして――」

「ッ!」

拳銃の引き金を引いてもいないというのに魔弾が背後、いやシャーロットのあらゆる面から襲い来る。

荊で防ぐもののあまりの数に身を掠め、シャーロットは膝をつく。

「これが基礎魔法の最終形態。努力を知らない血に選ばれただけの貴様が私に敵うはずあるものか」

「くっ……」

恐らくこれはマナスキンを極めた先に到達するマナゾーンと呼ばれる極地。

マナゾーンは本来の間合いを超えた位置から魔力放出出来る領域のことであり、シャーロットの劣勢はさらに加速度を増す。

(これほどまでの力とはな)

どうにもサイルは元々の魔力量に加え、精霊の力を借りることで王族よりも高い魔力を誇っている。そしてあの戦闘能力。圧倒的な場慣れ、どれだけの戦闘を経ればあれだけの力を得られるのか。

とにかく出し惜しみしている場合ではないことは何よりも確かなことだった。

だが――

「――リヒトッ!!」

何かに気付いたサイルは咄嗟に声を上げる。

瞬間。〈白夜の魔眼〉頭領リヒトの頭上に空間魔法による穴が生まれ、そこから刀を振り上げたヤミがりヒトを急襲する――



### 38話 「裏切り者」

リヒトの頭上から急襲を仕掛けたヤミ——だが、その動きは予想されていたのかりヒトの手には光の球。ヤミならば確実に狙ってくる  
と予想していたのだろう。

完全なるカウンター、しかしどんでん返しは終わらない。

<sup>アンチ</sup>反魔法の剣を構えた少年が地上を走ってリヒトに肉薄していたのだ。

「何故ヤツがそこに!？」

皆が一斉に驚きを見せる。魔力がないからこそ誰の魔力感知にも引つ掛からない唯一の存在。

それでもサイルの反応だけは違った。

リヒトがヤミに急襲された瞬間から狙撃銃を構えていたのだ。まるで乱戦によって巻き起こった爆煙の中を少年が走ってくるのを想定していたように。

「死になさい」

魔弾創成魔法” 死榴弾”<sup>デッドバースト</sup>。

引き金を引く瞬間——引かれるはずの引き金にサイルのものではない第三者の指が突っ込まれる。

「な、アルーグっ!？」

「行けアスタ!!」

きつと状況など理解出来ていないだろう。

だが友のためだと身体が自然に動き、そして守った。

魔弾は放たれることはなく——

「諦めないのがオレの魔法だア!!」

大剣の一撃はリヒトの左腕から横腹を巻き込む形で直撃する。

倒れ込むリヒトに各所で動揺を見せる<sup>サードアイ</sup>三魔眼だがサイルはすでに標的をキリヤに絞っていた。

「アルーグ、正気に戻ったのね!」

「だからオレはアルーグじゃないって——ぼはっ!？」

すぐにもキリヤを捕獲しようとするサイルだが精霊との同化が

いきなり解ける。

気付けば周りで戦っていたサイルの精霊達は戦うのを止めて皆一斉にキリヤへと飛び込む。

「な、何だ!? 誰だよオマエら!」

猛烈な勢いでじゃれついてくる精霊達に流石のキリヤでも困惑を隠せない。

「待て待て覚えてないから反応に困る!」

「待ちなさいあなた達! まだアルーグはあなた達のことを——」

サイルが止めに入ろうにも精霊達は聞き入れずキリヤと戯れる。

だが今までにないほどの魔力の塊を感じ振り向けばリヒトの魔力はとてつもないものへと変貌を遂げていた。

「あんなもの放出されればこの辺り一帯が吹き飛ばぞ……」

王族ですら見たこともない魔力量。あれだけの力を隠し持っていたことにも驚きだがどうにも制御出来ていない様子。このままではあれは生きた爆弾だ。

「く、今回はここまでのようね……」

魔導書を開いたサイルはキリヤに集っていた精霊達を全て戻すと

〈三魔眼〉<sup>サードアイ</sup>もまた三人揃ってリヒトの元へ集う。

三位一体封印魔法。

〈三魔眼〉<sup>サードアイ</sup> 全員の魔力をもって封じ込められたリヒトの魔力は結晶

化し、

「今回は我々の敗北だな」

「というワケで撤退しますか。ほらヴァルちゃん」

ようやく鼻の止血が終わったライアは模倣空間魔法を使用し、〈白夜の魔眼〉に属するメンバーの足下に次々と空間を創り出していく。

サイルは撤退の言葉に哀しそうな顔をしながらキリヤへ手を伸ばすが適当に構えたキリヤに触れるのは諦めたのか、

「私はあなたが幸せならそれでいい。でもあなたが苦しむなら私はどんな手を使ってでもあなたをクローバー王国から連れ出して守るわ」

「……何でオマエは敵なのにそこまでしようとしてくれんの?」

「……………」

その問いにサイルは何も答えなかった。

ただ自らが首に下げていた古びたペンダントをキリヤへ手渡せば  
空間魔法によつてこの場から去っていく――

◎

「えーつと、何ですかこの状況？」

〈白夜の魔眼〉との交戦を終えた後日、キリヤは呼び出された魔法騎士  
団本部地下に来ていた。

早速扉を開けるなり地下室はボロボロで〈紫苑の鯨〉団長らしきハ  
ムミたいな頭部をしている大男が地面に絵のような感じになって埋  
まっている。

他の団長やアスタもいる中で魔法帝はキリヤに気付くと軽く手を  
挙げ、

「よく来てくれたねキリヤくん。〈白夜の魔眼〉の交戦ご苦労だった」

「うす、それはイインスけどこの状況は……？」

「見たら分かんذار。裏切りもんの吊るし上げだ」

「わお」

ヤミが端的に言えばキリヤもどの件か納得する。

王都襲撃の一件、あれは魔法騎士団側が関与しなければ到底成し得  
ないことであり常々裏切り者の存在は示唆されていた。

どうにも確認方法は事情聴取ではなく前に一度会ったきのこ頭の  
男性による記憶交信魔法というものを使うらしい。

今魔法騎士団や魔法帝は裏切り者について過敏になっている。

そしてキリヤにも少なからず疑いの目は向けられているようで察  
したキリヤは自ら手を挙げると、

「だったらオレも調べてくださいっす！ オレ裏切りもんかもしれな  
いんでー！」

「はっ」

と、言いながらすぐに身構える〈翡翠緑の蠅螂〉団長ジャック・ザ・  
リップー。

その腕にはすでに魔法と思われる刃が装着されていて今にも襲つ  
てきそうなのでキリヤは両手を向ける。

「待つて待つてカマキリーマン団長！」

「オイ今冗談聞いてる余裕はねえんだが？」

「すみません！」

すでに団長の一人が裏切り者だった時点で空気はめちやくちや厳しいものだった。

このまま引き伸ばせば襲われかねない。主に〈銀翼の大鷲〉と〈翡翠の蠶螂〉両名の団長に。

「発端は王都襲撃だったんすよ。そこで会ったサイルがオレのこと」「アルグ」とか言い出して、つい先日会った〈白夜の魔眼〉の〈三魔眼〉サードアイもオレのこと知ってる口振りで。何より頭領のリヒトなんてオレの親友らしいんですよ」

それで、と言葉を付け加えながらキリヤは懐からペンダントを取り出して開ければそれを皆へ向ける。

「これは……」

「サイルが去っていく前に渡されたヤツです。サイルとオレがツーショットなんですけど全然身に覚えなくて。それにこの古びた感じとか焼けた感じとか最近作ったものとかには思えなくて」

「他人の空似……というわけにはいかないようだね」

キリヤが見せたペンダントには仲睦まじげに写真に写るキリヤとサイル。

覚えがない分、自分でも初めて見た際は不安になってしまったもので身の潔白を示すには一つしかない。

どんとその場にキリヤは座り込む。

「自分でも知らないうちに裏切っちゃってる可能性あるんでどうか記憶を見てください！ あ、心配なら拘束魔法とかかけてくれても全然構いませんし……ってそうかその気になれば吸収出来ちゃうしな。

そうだアスタ！ 反魔法の剣オレの身体に当て続けといってくれ！」

「お、おう」

アスタの反魔法アンチならばキリヤに抵抗する術はない。

頼まれたアスタもやや困惑の表情を浮かべながらも胡坐をかいて座るキリヤの足に大剣を添える。

「お、おお……」

大剣が触れた途端に魔力が上手く扱えなくなる。初めての感覚に若干気分も高揚するキリヤだがそれどころではない。

魔法帝側近のきのこ頭の男——マルクスは戸惑うように、

「魔法帝、よろしいのでしょうか？」

「彼が身の潔白を証明したいならばするしかない。というより今回彼を呼んだのもこうして調べるためでもあったんだけどね」

「……分かりました。それでは記憶交信魔法を始めます」

◎

「何だこりや……」

記憶を見始めて数分、まず口を開いたのはヤミだった。

初めはやや緊張する雰囲気を感じていたシャーロットや他の団長だったが結論から言っけてキリヤの記憶は本人の言う通り二年前から始まっていた。

それ以前の記憶は一切なく、マルクスも困惑の声を上げていた。どんな人間でも忘れることはあるが深層心理には全て残っているもので記憶交信魔法はその全ての記憶を見ることが出来る。

なのにキリヤのは見れない。防護されているわけではなく本当ではないのだ。まるで破かれた本のページののように跡形もなく消えてしまっている。

だが何も十三歳以前から裏切っていたという確証もない。

ただキリヤの過去は思った以上に凄まじいものだった。

「マジで出会って数秒でプロポーズしてたのか……」

「毎日拳骨三昧で谷底に蹴り落とされたり強魔地帯に連れてかれたり……」

「……よく生きていたな」

あのノゼルですらキリヤの修行光景を見て言う始末。

結局二年はあつという間に経過し、魔法騎士入団試験に突入してしまふ。

「分からねーからってテキトーに団選ぶかフツ」

「ここでもキリヤが適当に団を選んでしまったことが発覚。」

ヤミも思わず真顔で言うがそうしてしまったものは仕方がない。

「パシリランク決定戦なんてどぎついことしてんなあ」

「黙れ。力を見せれば良いだけの話だろう」

ジャックがそう弄ってくるが一蹴。

ここからはシャーロットもほぼ把握しており〈七剣総統〉を打ち倒したことで、そして件のサイルとの出会い。

「全属性による魔弾魔法、か。是非見てみたいなあ……」

「魔法帝、こんなところで興味持たないでください」

すっかり緊張感がなくなった雰囲気になってきたがシャーロットは何か致命的なことを忘れていている気がする。

魔法騎士団本部から逃げ出した〈七剣総統〉を一撃で仕留めたメレオレオナ。その後、キリヤの新たな力となるノーム。

そこまでは良かったが――

「――あ」

思い出したところで遅かった。

キリヤが熱で倒れた際に付きっ切りで看病した記憶が思い切り皆に見えてしまった。

これにはジャックもカカカと笑う。

「あの男嫌いな荊の姫君が男の看病なんてな。気に入った男は可愛がるタイプかあ？」

「……殺す」

「まあいいじゃないか。シャーロットも成長してるということだよ」

裏切り者以前にからかってくるジャックを荊で削り取ってやろうと思ったがユリウスに止められてしまえばそれ以上何も出来ない。

恥を甘んじて受けるとしてまた記憶は進み、とうとうつい昨日のことへと進展していく。

だがその最中、裏切りとは関係ないことで事態は深刻化する――

◎

「……ん、終わった感じですか？」

しばらく意識を失っていた気がするがどうにも記憶交信魔法は終わったようだ。

前を見ると魔法帝ユリウスは何やら少しばかり険しい表情をしており、その他の団長も何やら深刻そうな表情を浮かべている。

アスタもまたキリヤにどう声をかけていいか分からないでいるようだ。

中でもシャーロットは一歩前に出てキリヤへ近付くと膝をつき屈んでキリヤと視線を合わせる。

「キリヤスフィール、結論から言って貴様の潔白は証明された——だが」

「だが……？」

「吸魔の銃」、あれは今の貴様にはあまりにも危険過ぎる。貴様が制御するに値するまで魔法帝含め我々団長で話し合いにより魔法騎士団本部にて封印することが決定した」

「え……」

それは唐突な言葉だった——

### 39話 「新たな魔宮への誘い」

はつきり言つてへ<sup>サードアイ</sup>三魔眼との戦闘はほとんど覚えていない。誰かの声を聞いて、メレオレオナに嫌われたくないと思つて、とにかく強くならなければならぬと感じて。

気付けば気を失つていて戦いは終盤に差し掛かっていた。団長達の反応を見る限りあまり良かったものではないらしい。

それに意識を失つていたとなれば暴走していた可能性がかなり高い。というよりこのような反応を見せられればそうと思えないうい。だからこそ今キリヤは“吸魔の銃”を差し出すように言われている。

「どうした、さつさとしろ」

「う、うす」

正直、今まで“吸魔の銃”には助けられた場面は多い。

サイルとの初戦も、その後のへ白夜の魔眼の魔道士達との戦いも、ノーマとの試練も、助けられてばかりだ。

それに“吸魔の銃”にもはつきりとは覚えていないが何かがある。ここで見捨てるのは恩に反する行為だ。

『ダメよ』

シャーロットの言葉を否定したのはキリヤではなく“吸魔の銃”だった。

勝手に<sup>グリモワール</sup>魔導書から出たと思えばその銃口から闇を噴き、闇が形を成せば女性の形を作り出す。

『私がこの子と離れるなんてあり得ない。だって次負けちゃったら絶縁よ絶縁。キリヤが大好きなメレオレオナに嫌われちゃって戦う意味だつてなくなつちやうんだし!!』

「それは……」

「メレオレオナ様がそのようなことするはずがない。誰にでも敗北することはある。だが重要なのはそこからどう立ち上がるかだ。キリヤスフィール、貴様が信じるメオレオレオナ様は一度でも失敗したオマエを見限ったことがあったか？」



一抹の不安が過ぎりそうになった瞬間、シャーロットがその思考を遮断してくる。

確かに今思えばキリヤは修行中幾度となく失敗したりメレオレオナに敗北してきたが見限られたことは一度もなかった。怒られはしたが魔力放出による加速も出来るまで付き合ってくれたり、負けた時だって改善点を教えてくれた。

結局メレオレオナはいつもキリヤが倒れた瞬間から起き上がり方を教えてくれていたのだ。

「――信じるメレオレオナ様を、自分を。そして貴様は魔法騎士団に入ってまだ一年も経過していない若輩者だ。何も焦ることはない。自らの弱さを認めることもまた大切なことだ。挫けても、躓いても、とにかく一歩ずつ進んでいけばいい」

そつと、シャーロットに優しく抱きしめられるキリヤ。

ほんのりと香る薔薇の匂い。どうしてシャーロットは一団員であるキリヤにここまでしてくれるのか。

だがおかげで目が覚めた。強さを求めるばかりにどうにも焦ってしまっていたようだった。

「オレは団長の意に従います」

『ハアアアアアアアアアア!? 何言ってるのよ今のキリヤはとんでもなく弱つちいのに!! 私力がなかつたら〈<sup>サイドアイ</sup>三魔眼〉にやられちゃってたつていうのに!! 何で拒絶するのよ! 何で何で何で何で!』

「ごめんなオレが弱いばかりに」

『別にキリヤを責めてるわけじゃない! 私さえいればあなたは最強なの! 昔だつてそうだった! なのに自分から捨てるつて正気の沙汰じゃない!!』

「捨てるわけじゃない、今のオレじゃまだ力不足だ。だからもう少し時間をくれ。必ずオマエの力を制御出来るようになるからさ」

『嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ!! あなたがいなくなつてどれだけ待ったと思ってるの!! 私はあなたがまた現れるまで何度も人の手に渡つて気付けばよく分かんない大魔道士の宝物庫に入れられて! やつと

会えたのにまた待てなんて出来ない!!」

「身勝手なのは重々承知してる。今ここでオレのことを見限ってくれてもいい」

『違う違う違うの!!』

頭を抱え苦しむ様子を見せる女性。

葛藤があるのか。すでに警戒の色を濃く見せる団長達など意に介さず、

『あなたと私には約束があるの……どうして忘れちゃったのよ。あの女に、ガルガンに何をされたつてのよ……』

どれだけ闇に包まれていようともその涙だけははっきりと見えた。

キリヤはどう答えれば良いか分からず、だが女性は返答を求めていなかった。

『もういい！ あなたがそうするなら私もあなたが強くなった時に全ツ部真っ向から否定してやる!! 謝ったつて遅いんだから!!』

憤怒の表情を見せた女性はすぐさまキリヤに肉薄。

シャーロットが咄嗟に荊を放つも触れた途端に吸収されてしまい、女性はキリヤの魔導書グリモワールを開く。

ページをめくり、“吸魔の銃”について書かれていたページに掌を当てるとそのページが黒に染められる。

「これは見過ごせないね」

『見過ごさざるを得ないのよ！ 魔法帝だろうが私には絶対敵わない!!』

ユリウスが放った時間魔法に女性は真っ向から受け止める。

時間魔法だろうが何だろうが魔力であれば吸収出来る、キリヤの知っているとおりの魔法帝の一撃だろうとも女性は完封してしまう。

『じゃあねキリヤ！ あなたが強くなったと私が判断したらまた出てくるから!!』

べーっと舌を出した女性はそのまま“吸魔の銃”ごと一瞬で消えてしまう。

再び沈黙になったこの場でヤミが一言。

「またとんでもねえのに好かれたなオマエも」

「……まあ、それも否定出来ないっすけどね」

最近の女性関連のことを思えば本当に否定出来ないキリヤだった。

◎

「先ほどはすまなかつたね。“吸魔の銃”に関しては私の部下が追跡を行うよ」

でも、ユリウスは付け足す形で言葉を続ける。

「ゲルドルの件は悲しいね。一緒に戦ってきた仲間が裏切るといのは慣れるものじゃない。僕は全力で走ってきたが故にたくさんの間違いを、見落としをしてきたのかもしれない」

「そんな話するんなら残す人選間違ってますぜユリウスのダンナ」

魔法帝の言葉で一時は解散したアスタやキリヤを含めた団長達だったがキリヤとアスタ、ヤミだけは別室に呼び出されていた。

「実は話には続きがあつてね。捕虜の〈白夜の魔眼〉二人に尋問した際に私が彼らのアジトで見た石版のことも教えてくれたんだ」

「石版？」

「そう。いくつか石が嵌められていてね、キリヤも一つ手にしたことがあつただろう」

「あーあの時の……ですか」

初任務の際に〈白夜の魔眼〉が商人の荷から狙っていた石。

そのことを思い出すとユリウスも頷く。

「あの石のことを彼らは魔石と呼んでいて、全て集めると彼らは魔と密接に繋がった真の姿に生まれ変わり強大な力を得られると信じてるんだ」

「ということはもしかしたらオレも進化しちゃうってワケですか？」

「いやオマエの魔法自体進化してんだろ」

「それもそうっすね！」

「……話を進めさせてもらうよ。真偽はどうであれ彼らが見せる執着心は本物だ。絶対に先に入手させてはならない」

「ほうほう、それで？」

「残る魔石は三つ、そのうち二つはすでに奴らが場所を突き止めている。強魔地帯の一つ、海底神殿と地底帝国だ」

ユリウスから言われた二つの強魔地帯。

だがアスタはいまいちピンと来ていない様子で、

「強魔地帯……って何ですか?」

「オマエこの頭もういらねえんじゃね?」

「ぐあああああつ! ま、待つてくださいヤミ団長!」

「アスタ、強魔地帯ってのはな……アレだ。とにかく魔が超凄くて超荒れてるところだ」

「オマエもか?」

「ぎゃーっす!!」

何故か説明したキリヤもアスタ共々アイアンクローを喰らう羽目になり呻き声を上げる。

状況を見かねたユリウスが人差し指を立て、

「強魔地帯とは魔の力場が強くなり災害のような魔法現象が起きている特定地域の総称さ。海底神殿も地底帝国もどちらも強魔地帯でも屈指の危険性を持っている」

「……で、へ白夜の魔眼より早く行つてかつさらつてこいつてことか」  
「そうだ。家柄などのしがらみに囚われない者の多いヤミ率いるへ黒の暴牛がうってつけだと私は考えた」

「ハイ質問! それなら何でオレも呼ばれたんですか!?!」

「魔法騎士団内に裏切り者がいる可能性はまだある。その中でキミは皆の前に記憶を曝し、身の潔白を証明した。何よりキミは単独行動に長けている。独自の思考と機動力を持つキミならばきつと地底帝国でも遂行出来ると私は判断した」

「……それって裏を返せば姫様のこと信頼してないってことっすよね」

思わずキリヤはユリウスをジト目で見てしまう。

シャーロットはメレオレオナの次に好きで尊敬している女性だ。男嫌いなのにシャーロットはユリウスのことを認めているようにも思える。なのにユリウスはそんなシャーロットを疑っている。

加えて言葉にはしていないが多分これはキリヤにとつてさらなる身の潔白を証明するため、それとも単独行動させてへ白夜の魔眼を

誘き出すため、なのかもしれない。自らが莫迦なために深く考えることは出来ないが。

はつきり気分の良いものではない。

だが団長の裏切りは現に起こってしまった上にキリヤも“吸魔の銃”の一件で信頼を失っているも同然。

記憶を見せたところでまだ一手足りていない状況だ。ここで一発かましておかなければシャーロットに対する疑念だつて晴れない。

だったら――

「オレは姫様のために頑張るって決めたんで例えオレが過去にやらかしてようとも今のオレはオレの意思に従います。というわけで強くなるためにも頑張ります」

完全に間違つた敬礼をしてしまっているがユリウスは薄く笑みを浮かべ、

「そうか。ヤミは……やってくれるかな？」

「アンタは魔法帝だ。オレはその指示に従う。そんでオレはオレの力でアンタが間違つてないって証明するだけだ」

「ふ……ありがとう二人共。そしてアスタくん、海底神殿に入るにはキミの反魔法が不可欠になるだろう。それにへ白夜の魔眼との戦闘経験も役に立つはずだ。よろしく頼むね」

「ハイっ!!」

ヤミに続いてアスタも敬礼し、その場は解散となる――

◎

「アルーグ……」

撤退して以来アジトでサイルはアルーグのことばかり考えていた。気を失っているうちに連れ去ろうと思ったがそれも失敗し、監督不届きでライアを殺そうにもリヒトに止められてしまった。

だがあのままクローバー王国に戻ってもアルーグはへ白夜の魔眼との繋がりを疑われるに違いない。

(やはりあの時、彼の気持ちを無視してでも……)

もしかするとアルーグは今牢に囚われているかもしれない。

そう考えればいてもたつてもいられない。すぐクローバー王国に

乗り込むべきだと立ち上がる。

「サイル、少し良いかい？」

「……リヒト」

そこに現れたのはリヒトだった。

柔らかな笑みを浮かべ、サイルも怪訝げな表情を浮かべる。

「何の用かしら？」

「魔石についてのこととアルグのことについてさ」

「……魔石なら海底神殿と地底帝国、海底神殿にはヴェットが行く予定のほすだけど」

「地底神殿にはサイルに向かって欲しいと思ってる。何人か部下を手配しよう」

「それは構わないけど——で、アルグについてどうという意味？」

サイルの問いにリヒトは少しばかり表情を暗くする。

「キミがアルグに抱く愛の深さを私も理解しているつもりだ。けど今の彼に全力は注げない、その意味は分かるね？」

「……ええ、分かってるわ。でも次こそは必ず捕らえる」

あくまで〈白夜の魔眼〉は抱く宿願のために動いている。

どれだけ親友であったとしてもリヒトはついてきてくれてくれる者達のためにもアルグを一番に考えることは出来ないと言イルも重々承知しているつもりだ。

「もし捕らえて連れて来れたとしても彼の記憶が戻らなければ——殺すしかない」

「そんな……ッ！」

「そのことを頭に入れて行動して欲しい。僕も頭領の身だ、どうか了承して欲しい」

リヒトの立場も慮れば責めることも出来ず、サイルは返事をせず踵を返す——

## 第6章く地底帝国編く 40話「魔導書合体」

「ここが地底帝国がある強魔地帯……」

と、キリヤは指定された場所にやってきたが渋い表情をしていた。それもそのはず。今日の前に見えるのは――

「メツチャ見たことある光景!!」

岩片が雨霰の如く降り注ぎ、人間など容易く挽肉してしまうほどの猛威。

端的に言えばメレオレオナと修行をし、ノームに出会った場所だった。

「えー……ここかよ。ノーム、地底帝国なんてあんのこれ？」

『返答。正確には名の通り地下に存在する』

と、ノームは魔導書グリモワールから出てきたかと思えば金刚石でキリヤの頭上に笠を創り出す。

岩片が当たってもびくともせず、

『推奨。我が案内する、ついてまいれ主』

「おうー」

ノームの案内のもと楽々と岩が降り注ぐ道を突き進んでいく。

進んでいくうちに前には分からなかったが荒れ狂った道でも地面に描かれた一筋の線だけはどれだけ岩に打たれようが消えず、ノーマもそれに沿って進む。

『説明。これは遙か昔に偉人がこの地に付けた道標』

「なるほどな。確かにこんななんだたらどこに何があるか分かんねえし……っついていや無理だろ」

冷静に考えるまでもなくこんな道を普通に歩こうとすれば即死も良いところ。

よく昔の人間は死ななかつたなと思いつつ、さらに進むこと十分足らず。ようやく線が途切れ、その先には今までになかった洞穴のような空洞が見える。

「これが入り口？」

『肯定。これこそ地下帝国に至る入り口』

「よおし、飛び込むか」

だがここでキリヤはあることに気付く。

この強魔地帯では地属性の魔マナに満ち溢れている。そのため他属性の魔マナがればすぐさま気付くもので現にキリヤから離れた場所に行くつかの魔力を感じる。

（〈白夜の魔眼〉……もう来たのか）

数にして四つ。しかも一つが桁違いな魔力量をしている。

恐らくだがこの桁違いな魔力は——と考える前にこんな場所で戦うわけにもいかない。

「よし、行くぞー！」

一体どんな場所か皆目検討つかないがキリヤは意気揚々と洞穴に向かって飛び込む。

だがすぐに浮遊感に襲われ、

「うわマジか!!」

思い切り落下していった——

◎

「——つとセーフ！ あぶねえあぶねえ……」

身体進化魔法”

レベル3・ビレットアーマーアルナフ

兎々戦の鉄鎧を纏っていたキリヤは見事に着

地。

着地地点に何か罠があるとも考えたがそこまではなく、肩に乗っていたノームが向こう側を指差す。

『注目。あれを見よ』

「あれは……」

見てみれば地底だというのに何一つ明るさは失われていなかった。

むしろ地上よりも空は澄んでおり青空で、地に広がるのは真新しい煉瓦で作られた建築物の数々。

「どうなってんだ……?」

『回答。あの空は魔マナを帯びた苔による産物。そしてこの建築物は……不明』



「ノームにも分からないってのか？」

『首肯。我、この地のこと知らず。されど知識として鉱物が盛ん、無限の金銀が得られることは知識に存在。人が住む時代もあったそうだが滅びたとされる』

「無限の金銀ってどこの国も欲しがりそうだな」

だが外のあの状況。ノームの金剛石やキリヤの流れを読む力があれば容易く進めるだろうが普通はそういかない。

だからこそこの光景は誰にも触れられず守られているはずだが――

「何か気配がいっぱいするんだよな」

人が滅びたとノームは言っているがこの気配の数、とてもそうは思えない。

すでに誰かの手が施されているのか、はたまた――しかし、今はそこに注視している場合ではない。

「来たな」

言った直後に降りて来たのは――〈白夜の魔眼〉の魔道士四人。

その中にはサイルもいてキリヤの鎧姿を見るなり驚愕の表情を見せる。

「ア、アルーグ！」

「出たなミサイル女！」

一直線にサイルへ向かいたいところだが周りにいる魔道士が邪魔だ。

地を蹴れば即座にキリヤはその場から消え、壁を蹴って魔道士達へ肉薄。宙にいるうちに二人に蹴りを叩き込み、壁へ新たな彫刻と化する。

だが一人だけ正面からの蹴りを防ぎ、反撃の魔法を構える。

（レオナ様みたいに後ろから獅子の手が出せれば――）

「どりゃア!!」

前方に張られた防護壁に対し正面からキリヤは拳を打ち、防護壁に触れる寸前相手は不敵に笑うが――その背後から魔力で形取られた獅子の手が飛び出して魔道士の背中を打つ。

「ばはっ!？」

「出来た！」

何だか分からないが出来てしまった。

魔道士は背中からの打撃に反応出来ずに直撃、前方に飛んだ魔道士の顔面にキリヤが突き出した拳が突き刺さる。

「今のは……」

「うし、後はオマエだけだ！……ってその前に」

「……？」

サイルはキリヤの態度を見て怪訝に思う素振りを見せるがキリヤは構わず頭を下げる。

「この前は悪かった。ほとんど覚えてねえけど暴走した時迷惑かけた」

「いいのよそんなこと。あなたが無事で何よりだわ」

敵であるはずなのにサイルはいつもこうだ。

自分達は会えば戦う仲にあるはずなのに今のサイルからは微塵も戦意が見られない。それどころか声音から真に安堵しているようにも思える。

「許してもらったところで……オレは怒ってる！」

「え……？」

「オマエ！ オレと戦った時また手を抜いただろ！ 殺す気で行くとか言ってたくせに姫様と戦ってた時にいた精霊オレには使ってたかったし!!」

キリヤが気に入らなかったのはそれだ。

気が付いた時、キリヤの目には偶然シャーロットとサイルの戦いが見え、その中でサイルは精霊を使った魔弾を使っていた。つまりキリヤとの戦いではあえて使わなかったものだ。

しかも精霊と同化までして自らの肉体を強化していた。結局キリヤとの戦いでサイルは何一つ実力を見せていなかったのだ。

「ごめんなさい、私にはやっぱりあなたと本気で戦うことは出来ないの。そして精霊達もそう。皆あなたのことを愛してるからこそ誰もあなたを傷つけないとは思っていないわ」

「ぐぬぬ……」

素直に悔しいとしか思えないがそれ以上責めることは出来ず、だがこうして再び出会ってしまった以上戦うしか他にない。

と、思えば不意にサイルは自らの魔導書を地面に置いて後ろへ下が  
る。

「……？」

「今の私にあなたと戦う気はないわ」

「何でだよ。オレはクローバー王国の魔法騎士団でオマエはクローバー王国を滅ぼそうとするへ白夜の魔眼、それにオレを連れて行くとか言つてたじゃねえか」

「……事情が変わったの。それに私は確かにクローバー王国に憎しみを抱いてるけどそれはアルーグの仇を討つため。こうしてアルーグが生きていれば私にとって後のことなんてどうでもいいの。だから私はもうあなたと戦わないわ」

疑うなら魔導書を取ってくれても構わない、と付け足すサイルにキリヤはいきなり殴りかかるわけにも行かずに鎧を解除する。

思えばこうしてサイルとまともに話すのは初めてのことだ。色々と事情を聞くのも選択肢として充分にある。

「なあ、オレはアルーグじゃないけどアルーグってどんなヤツだったんだ？」

「今のあなたと同じよ。実直で、勇敢で、自分を曲げない優しい子」  
「でもオレはアルーグじゃない」

アルーグとキリヤを重ね合わせるサイルにキリヤは改めて否定する。

「どれだけ似てるか知らねえけどオレはキリヤ、そっちのはアルーグ。歩んだ道も違えば愛した女も違うんだ」

断言するキリヤだがそれでもサイルは首を横に振るう。

「魔力を視る力を極めれば魂すらも把握することが出来る。それは元々魔と魂との繋がりが強いから分かることで一人として同じものを持たないの。でもあなたの魂はアルーグと全く同じ、何故かは不明だけどあなたはあの時……故郷を滅ぼされた遥か昔から一度として

死んでいないのよ」

サイルの言葉にキリヤは疑問符しか浮かび上がらない。

さらにサイルは「それに……」と言葉を続ける。

「他の誰を愛しているようにとも私はあなたを愛してる。もうあなたの傍から離れたくないわ」

いつの間にか接近していたサイルはキリヤを抱きしめようとするがキリヤはそれを躲す。

「オマエの話をどこまで信用してイイか分かんないけど今はとにかく魔石を手に入れるのが先だ」

サイルは強敵だ。そんな彼女が魔導書を自ら置いたのだからありがたく没収しておく。

躲されたサイルは特に傷ついた様子を見せず、

「ついていてもいいかしら……？」

「いやいやいやダメだろ。オレら敵同士だし」

「何をすれば信用して貰えるかしら。今の私はすでに武器も持ってないけど」

「何もないところから銃いっぱい出してたじゃねえか！」

「それも魔導書から出したの。あ、靴裏のは仕込み銃よ」

「武器発見！ 今すぐ靴脱げコラア!!」

やや強引にサイルの靴を脱がせるとその裏には本当に銃口がいくつも存在した。

ともあれ靴を奪われ素足を曝すサイルにキリヤは――

「……サキムニ、何か靴用意してあげてくれ」

『あいあいサー』

サキムニ達が魔法で創った革靴をサイルに履かせるとサイルはどこか照れた様子を見せる。

「アルーグからのプレゼント……」

「そういうわけじゃないし、素足でいるのも可哀相だなんて……つておいオマエ肘とか腰にも銃あっただろ！」

「よく覚えてたわね。何なら全身見せてくれても構わないわ」

キリヤは次々とサイルから銃を外していき、サイルは自ら進んで身

体に触れるように催促してくる。

だが数分経って――

「もういいや！　こうなったらオマエの言葉を信じる！」

「いいのかしら……？」

「こんなみみっちいことはやめだやめ！　オマエが不意打ちしてきてもオレは今度こそオマエに勝つし！　おら魔導書も返して――んんん？」

腰元の銃や何だ返している時にふとサイルの魔導書が目に入る。

まるで辞書のような分厚さでしかも普通の魔道士のものよりも大きい。何より表紙に不思議な凹みがあった。

四角形の凹み、そのサイズがどうにも見たことがあるような気がして不意に自分の魔導書を見る。

「……？　どうかしたの？」

「いや、この凹みにオレの魔導書嵌めれそうだなーって思ってた」

丁度サイズがぴったり合いそうで何を思ったのかキリヤは自らの魔導書をサイルののに嵌め込んでみる。

すると驚くほどすんなり嵌まってしまい、

「え？」

これまでにないほどの光を放ったかと思えば光の中でその形が変化していく。

少し経って光が止んだかと思えばキリヤとサイルの本は形状を変えて普通の魔導書のサイズとなり、その分厚さは健在で――

「いやいやいや待って待って!!」

完全に一つになってしまった。

これにはサイルも驚き、キリヤは焦りを見せる。

魔導書の表紙には多種多様な紋章が刻まれており、もはやどちらが所有者なのか分からない状況に。

「えーっと、とりあえず……一緒に行くか？」

「っ！　ええー！」

罪悪感からかキリヤはサイルの同行を了承してしまった。

一方サイルはこの上ない笑みで頷く――

## 41話 「地底帝国の支配者」

「しっかし奇妙なことになっちまったなオレの魔導書……」

地下帝国の道中、キリヤの注目はやはりサイルのものど合体してしまつた魔導書だつた。

開いてページをめくれば今までのキリヤの魔法は存在し、見たこともないものは恐らくサイルのもの。つまり本当に二冊の魔導書が一つになつてしまつたのだ。

困惑するキリヤにサイルはと言えば何だか嬉しそうな様子。

だが、気になることはもう一つあつた。

「てかたまに光るの何なんだろう？」

「それは多分中にいる精霊が出てこようとしてるのね。駄目よあなた達、今のアルグはまだ私達のことを信じきつてくれていないの」

と、サイルが声をかければ魔導書は仕方ないといったように光を止める。

その様子にキリヤも思い出し、

「前も何かいっばい来てたなそういえば」

「アルグは数多の精霊を使役していたのよ。精霊を愛し、愛されて、アルグの純粋な心は悪魔……あの“吸魔の銃”にいるベルゼヴィーヴィアにも見初められて契約してたの」

「そっか、アイツも」

彼女が言っていた約束、キリヤにはまるで分からないことだがアルグならば真相を知っていたのだろうか。

今のキリヤには何のことかまるで分からず、ともあれ先ほどからサイルがキリヤの手に触れようとして一歩手前でやめているのが何度も視界に入る。

遠慮しているのだろう。それもそうだ。今共に行動しても敵同士の関係には変わりない。

ただキリヤは暴走した際にサイルが止めてくれたのも知っている。

恩を感じているのだから返さなければならぬと、それでも線引きはしっかりしなければならぬと思ひ、

「アルーグって呼ぶのやめてキリヤって呼んでくれたらオレに触つてもイイけど」

「っ！ ほ、本当に……？」

「オレに二言はねえよ」

「……リヤ、キリヤっ！」

「早いっ!？」

てつきり躊躇うかと思えば何の迷いも無く抱きしめられる。

手を繋ぐ程度かと思えばいきなり抱きしめられ、心底愛おしそうに頭を撫でられる。

においまで嗅がれやりたい放題だがここは地下帝国ですすでに敵の陣地だ。何があるか分からな——

「うわ何かいる！ ミサイル女後ろ後ろ！」

サイルからは背後になっっているがキリヤにはこちらに近づく四足歩行型の魔法生命体が近づいてくるのが見えた。

首には首輪が付けられており、見るからに番犬で口元から覗かせる牙や涎が明らかにキリヤ達を食糧として見ている。

キリヤの声にサイルは番犬に一瞥をくれたかと思えば——

「消えろ」

乾いた音が響く。

ただ見ただけで番犬の頭部が炸裂して吹き飛び、頭部を失った身体は地面へと倒れる。

「これでもう大丈夫よ」

「え、今何したんだ……？」

見ただけで爆発、流石にそんなことはありえない。

よく見ればいつの間にか手に拳銃を持っており、気付かぬ速さで引き金を引いていたようだ。

どうにも魔導書が一体化したものの互いの魔法には何ら影響はないらしい。

「……キリヤ、少し隠れるわ」

状況を理解出来ないままキリヤはサイルに連れられて物陰に隠れる。

サイルの胸元に押し付けられているせいで何が起こっているか見えないが足音は聞こえてきた。

巨乳だ……いやそれはこつちの話で、あつちは巨体だ。

何とかサイルの胸から顔を上げると番犬に大型の何か近付いていく。

「あれはトロールね……」

見えたのは獣の皮を腰に巻いただけで白い肌が目立つ巨軀を持つ生命体だった。

頭部は一見して豚のよう、しかし二足歩行で手は人間の頭部を軽々と握り潰せるぐらいに大きい。全体的に脂肪が多いように見えるが総じて筋肉にも見える。

片手には棍棒を持っていて、どこか間抜けな目で番犬を見つめる。

「アイツのペットってか？」

「……まだ分からないわ」

サイルが目を配った先、今現れたトロールとはまた別のトロールが現れる。

そのトロールは全身に鎧を纏わせており、先ほどのトロールとは別種に思える。

『侵入者、侵入者。番犬、やられた』

『分かってる。報告、フィオレナ様、報告』

相談し合うトロール達にサイルは怪訝げに眉を顰める。

「おかしいわね……トロールは知性が低くてキングトロールを筆頭にそれ以下は全て同じ地位のはず。でもあの二人には明確な地位の差が見える。しかも糞尿垂れ流しな彼らの身なりがあれほど綺麗だなんて」

「アイツらの長のキングトロールがそれだけ賢いってことか？」

「突然変異種、その可能性はあるけど今はまだ何とも言えないわ」

現状判断するには材料が乏しい。

だがキリヤはほんぽんと頭を撫でられ、

「何が来ても大丈夫。私があなたを守るわ」

「はー？ オレ一人で何とかなるし！」



「こら、あまり大声あげないの。気付かれてしまうわ」

文句を垂れようにもまた胸に埋められて発言権を失う。

騒いでしまったがトロールには気付かれておらず、彼らは彼らで勝手に話し出す。

『木偶人形に守られたウンディーネの秘宝、今日こそ入手。それ、おまえ担当』

『理解、向かう』

「秘宝……ってことは魔石のことか！ だったらアイツら追いかけて……」

「待って」

またサイルに止められてしまう。

見ればトロール達の周りにはそれぞれ蝙蝠のような魔力で創られたものが飛んでいる。

「恐らくあれはトロール達を監視するためのもの。下手に動けば私達の行動は筒抜けになってしまうわ」

キリヤもおかげで地下帝国のあちこちを飛び交う監視の目に気付く。

始めにあれだけ騒いでいたので今更隠密に行動したところで無駄かもしれないがこれはキナ臭くなってきた。

「とにかく慎重に進めましょ」

「おー」

何だか分からないが異常に息が合うキリヤとサイル。

キリヤも言われるがままに賛同してしまう。敵なのに――

◎

「それでえー進捗はどうなの?」

甘ったるい少女の声が玉座に響く。

軍服を身に纏い、目元に深い傷痕を残す少女はところどころ跳ねた長髪を弄びながら問う。

『面目ありません……まだ、決着つかない』

「はあ?」

四つん這いで椅子にされていたキングトロールが正直に話せばい

きなりその身を鞭が打つ。

さらにキングトロールから下りた少女は魔力を纏った蹴りが何度もキングトロールの腹部を蹴り飛ばす。

「グズー・ノロマー！ ゴミ！！ いつまで時間かかってんのよ！！」

『ごっつげぶ……っ！ ず、すみません……』

「謝罪の言葉はもう聞き飽きましたー。こんな豚小屋みたいな場所で豚共をせっかく管理して導いてやってんのに恩を仇で返すつもり？

死にたいの？」

すでにこの地底帝国にやってきて数週間、何の成果も得られていないのが現状。

少女がこの場を支配した時点ですでに無限の金銀は手に入ったも同然だが邪魔な存在がいる。

それをトロールを使って排除しようとしているのだがやはり低能な生物のために予想以上に時間がかかっていた。

少女が狙っているのは金銀に勝る秘宝。

そこに繋がる唯一の道を塞いでいる者がいるのだ。

四大精霊の一角ウンディーネとそれを守護する鋼の巨兵ジブラウスト。

ウンディーネは別にどうでも良いが問題なのはジブラウストの方だ。あれがいるせいで計画は狂いつぱなし。

「全く、本当に憎たらしいわジブラウストツ！！」

追加でキングトロールの腹部を蹴り飛ばす少女の名はフィオレナ。

十六歳にてへ七剣総統で徹底的な管理によって他者を導く独裁者

◎

「どこに向かってんだ……？」

あれからキリヤとサイルはトロールや監視魔法の視界に入らないように尾行していた。

トロールは次々と合流して数を増やし、向かっているのは帝国の中でも一際目立っている塔。

「アルーグ危ないわ！」

「……へ？」

いきなり隣にいたサイルが発砲。慌ててキリヤも足を退かす。

あと少しでサイルの魔弾が掠っていたところで何だとキリヤがサイルを見れば、

「アルーグが躓きそうな石があつたのよ」

「わざわざ魔弾を使うほどのことなのかそれ……」

何が来ても守るだとか言っていたが少し過保護過ぎるのではとキリヤは思う。

シイナも過保護な面があつたがサイルはそれ以上。今だつてキリヤの肩を手で自らに寄せるようにしており、片時も離れる気はないらしい。周りに対する警戒心もすごい。

「そんな警戒しなくつたつて石程度じゃ死なないし」

「アルーグもそう言つて昔崖から落ちたことがあるの、何が起こるか分からないわ」

「な、何かすまねえ」

よほど活発な少年だったのか分からないが謝るとふとサイルと目が合う。

その瞬間尾行中だというのにまた抱きしめられて頭を撫でられる。

「今私は最高に幸せだわ……」

「それは良かったけど見失うつて！」

あれだけの大所帯早々見失うことはないがこのサイルの緩みっぷり。

初めて戦つたのが嘘のように何と言うか周りにハートがいっぱい溢れているというか。何とも気が抜けた感じというか。

ともあれ、後を追うとトロール達は塔へと入っていき、キリヤ達もまたその後を追う。

「これって……」

気付けばキリヤ達は塔の中に入ったというのにまた開放的な空間に立っていた。

目の前に広がるのは地底にはありえない草原。そしてその先に見えるのは広大な湖。

「これが地底湖ってやつか？」

「そのようね。トロール達の視線の先、何かいるわ」

トロール達から遙か先、丁度地底湖の真ん中に位置する場所に何やら小島が浮かんでいた。

そこにはトロールの巨躯をも凌ぐ体長をした鋼の巨兵が存在した。遠目だがその身体に傷など一つもなく、キリヤの傍にノームが現れる。

『提示。あれは魔法で創られし造兵<sup>ゴレム</sup>』

「つうことはソルの魔法みたいな感じか？」

『否定。あの存在は魔法で創られし一時的なものではなく、魔法で研磨されし鋼で出来た体躯。すなわち魔道具の一種なり』

「なるほどな。でもどうしてあんな小島に？」

『不明。しかし、鋼の造兵の背後。何かあることに違いない』

ノームの言葉で目を凝らし、流れを感じて見れば確かに何かあるように思える。

とてつもない魔力量。その魔力量は今隣にいるノームと同じほどで——精霊のように感じられる。

「キリヤ、トロールに動きがあるわ」

「ん、おう」

トオールの目的もその精霊に関わっているのか、様子を見ていればトロール達はいきなり雄たけびを上げて走り出す。

「え、マジかよー」

直後、トロール達は一斉に湖に向かって走り出す。

湖がどれほどの深さは不明だが——トロールの何体かがいきなり全身を水面に沈めてしまう。

それでも同じ場所を走る別の個体は無事で一心不乱に走る。

「何かあるよなああの湖」

「ええ、恐らく罫魔法の一種ね。何を基準にしているかは不明だけど」

そして部隊で言えば半数に近い数を失ったが何体かのトロールは小島に上陸。

だが鋼の巨兵はトロールを凌ぐ体躯。簡単に蹴散らせるかと思え

ば——背後にあるものを庇うように身を屈める。  
「え？」

あれだけ強そうに見えた鋼の巨兵はそこからトロール達によって  
滅多打ちにされることになる——

## 42話 「鋼の巨兵」

あれから一時間に渡ってトロールの猛攻は続いた。

キリヤは飛び出そうにもサイルに止められ、何も出来ずただ見ていることしか出来なかった。

だが鋼の巨兵は傷一つ付けられず、疲弊したトロールは帰っていない。

再び沈黙を取り戻した湖。

監視魔法もこの場から消え、キリヤはすぐに小島へ向かおうとするがサイルが前に手を出して止める。

「下手に踏み込めばキリヤもさっきのトロールと同じように沈むかもしれないわ」

「だったらどうしろってんだ」

と、キリヤの肩を叩く者がいた。

見れば小さいが身体の各所に氷を纏った精霊がいて、ちよいちよいと服を引つ張ってくる。

「セルシウス……まだ駄目だって言ったでしょう」

サイルが呆れた声で言うが氷の精霊——セルシウスは聞かず、キリヤを湖の近くまで近付ける。

近付ければふうとセルシウスは一息吹き、だがそれだけで湖全体が凍りつく。

「うわすげえー」

キリヤが感心の声を上げるとセルシウスは何やら頭を差し出してくる。

これは褒めて欲しいのだろうか。流石に手全体ではいけないので指二本でセルシウスの頭を撫で、

「ありがとなセルシウス」

言葉は発せずとも喜ぶ様子を見せるセルシウス。

これで湖を渡れると思いきや今度は魔導書グリモワールからまた別の精霊が現れる。

全身に雷を迸らせている豹のようでキリヤの服を噛んで己に集中

させると、

「うおっ速ッ！」

瞬きする前に雷豹は向こう側の小島に着いてしまっていた。

鋼の巨兵はまだ身を屈めているので気付いておらず、そのうちにも雷豹はキリヤ達の元へ戻ってくる。

「ヴォルト……あなたまで」

雷豹——ヴォルトと呼ばれた精霊は首を自らの背の方へ向けてキリヤに目で訴えてくる。

どうにも背中に乗れという意味らしいがこれにセルシウスが近付いて何やらヴォルトに反論。ヴォルトはそっぽを向いて完全に無視。終いには氷と雷で喧嘩が起こってしまう。

「ごらごら、喧嘩すんなって」

キリヤが二体の喧嘩を止めていると今度は葉や根を纏った女性型の精霊が現れる。

木の根を生やして凍った水面よりも高い位置で木製の橋が出来上がり、これまたセルシウスやヴォルトの喧嘩に巻き込まれる。

「ドリアードも喧嘩するなら戻りなさい!!」

最後はサイルの一喝で魔導書に戻ってしまう精霊達。

そう思えばサキムニが沢山出てきて何をするのかと思えば連なつて橋のようになり、

『ご主人、ボク達が橋になるからその上歩いテ!』

「出来るか! 精霊保護団体が黙ってねえぞ!」

そんな団体実在するかは不明だが絵面は完全にアウト。

キリヤはサキムニにも魔導書に戻ってもらい結局辿り着いた答えは、

「木の橋渡るか……」

最も安全そうだなドリアードが創り出した橋だった。

一瞬で創ったとは思えないほど精巧な木橋。キリヤはサイルよりも先に歩き始めると湖の水面上になった瞬間——

「うおっ!」

木橋がいきなり音を立って崩れた。

それだけではない。まるで水面に吸い込まれるように引つ張られる。

セルシウスが張った氷も意味は簡単に砕け、この様子にサイルも焦りを見せる。

「キリヤっ!!」

「だあーいじょうぶだった!」

てっきり何体かのトロールと同じように水面に沈むと思ったがどうにもキリヤは何もせずとも水面に立っていた。

その光景を見てサイルも胸を撫で下ろし、

「何もなくて良かったわ」

「ミサイル女の言うとおりで何かの基準があるみたいだな」

「……………」

キリヤが水面を何度か踏んで確かめていると唐突に無言になるサイル。

見てみるとキリヤの方をジト目で見ており、キリヤも首を傾げる。

「急にどうしたんだよミサイル女」

「……………私はミサイル女じゃないわ。あなたは私にキリヤと呼ばせてるのになんただけ私のこと〃ミサイル女〃から変わってないわ」

「……………結構今さらな話だけどな」

地底帝国でも何度かそう呼んだ記憶があるもサイルはどうにも気に入らないらしい。

これも女心は複雑怪奇というものなのか。とにかく不満そうなサイルにキリヤは少し照れくさそうに、

「えーつと、じゃあ…………サイル?」

「っ! ええ、ええ! 私ハサイルよ!」

尻尾があればぶんぶん振っていたぐらいに一気に雰囲気明るくするサイル。

あれだけ戦闘中は冷徹に敵を撃つ魔弾の射手だというのに今はその見る影すらもない。

キリヤとサイルは敵同士。関係は一切変わっていないためにどうにもキリヤの調子は狂わされる。



「ま、まあともかく行くぞ」

手招きするとサイルもまた水面に降り立つ。

サイルもまた沈むことはなく、だがサイルは数秒何かを考えたと思えば爪先で何度か水面を確かめ始める。

「……………？ 何してんだ？」

「キリヤ、私沈むかもしれないわ」

「え、マジで？」

「ここから一歩でも歩いたら私は……………」

「わかったわかった。そんな力才すんなっての」

だったらそれまで爪先で感触を確かめていたのは何だったのか。

キリヤは気になるもののサイルの元へ戻れば彼女の身体を抱きかかえる。

お姫様抱っここというのだろうか。とにかくそうやってサイルを抱きかかえれば突然サイルはごく機嫌な表情を浮かべる。

「ん、どうした？」

「いいえ、何でもないわ。早く行きましょ」

何だか分からないが進まないことには始まらない。

キリヤはサイルを抱えたまま水面を歩いて小島を目指していく――

◎

『ど、どうして……………？』

小島に着いた途端に鋼の巨兵は驚く素振りを見せる。

その反応にキリヤも首を傾げ、

「どうしてって言われてもな。普通に渡って来れたけど」

『ミナモについたトキ、ヨクボウがあればシズむのに……………トクにニンゲンなんて』

「なるほど。だからさつき沈んでたのは鎧を着たトロールばかりだったのね」

キリヤから下りたサイルは鋼の巨兵の言葉を聞いて納得の素振りを見せる。

そのことにキリヤはよく分からず、それが分かったのかサイルは教

えてくれる。

「トロールは知能が低いんだけど特殊なカーブがあるこの群れでは鎧を着たトロールは少し知能が高いように見えた。だからこそ秘宝に対する欲も芽生えてあの湖に落ちる可能性が高かったのよ」

「へー、よく見てんなあ」

『オ、オデ、ウンディーネをマモる。ゼツタイ、テダしさせない!』  
キリヤが納得すれば鋼の巨兵は背後にある結晶を庇う姿勢を見せる。

その様子にキリヤはそれ以上近付かず、地面に座り込む。

「キリヤ?」

「いいからサイルも座ってくれ」

声をかければサイルもその場に座り込む。

秘宝だとかウンディーネだとか、そういった話をする前にキリヤには疑問がある。それを解消しない限り次には進めない。

「なあー、何でさつきトロールに襲われた時反撃しなかったんだ? オマエみたいな巨体ですげえ硬かったらあんなヤツら殴り飛ばせたらんじゃねえの?」

純粹な質問。

問いに対し、鋼の巨兵は一瞬警戒心を見せるもやがて両腕を下げる。

『オデ、オクビヨウでブキヨウだから、こうすることしかできないんだ』

「でもよ、それだとオマエはボッコボコにされるだけじゃねえか」

『オデ、ガンジヨウだからダイジョウブ。それに、オウジヨサマとヤクソク……したんだ。どんなことがあっても、オデ、マモる。オウジヨサマやウンディーネがマモリたかったモノ、オデがマモるんだ』

「だったら少し話を聞かせてくれよ。どうしてここがこうなってるのか、オマエの友達についてとかさ」

『でも、おまえヒホウがホしくてここにきた。そうだろう?』

「うーん、じゃあ一つ聞けけど秘宝ってそれじゃねえのか?」

キリヤが指を差したのは鋼の巨兵——ではなく、その後ろに結晶体

となつて存在していたウンディーネが首から下げている魔石。

純粋な質問に鋼の巨兵は首を横に振るう。

『チガウ。ヒホウはこのミズウミのシタにあるキンやギンがムゲンに  
トれるバシヨのこと』

「なーんだ、そんなもんいらねえや！ 食べねえし！」

『え、でも……』

「オレはそんなものに興味ねえし。つうかもし欲しくなつたとしても  
ノームに頼めばいいしな。なあノーム？」

『肯定。我こそ無限の鉱石を生み出せる者』

言つて魔導書から出てきたノームは金銀をいとも容易く出してみ  
せる。

鋼の巨兵もこれには驚き、キリヤは金を手に取ると適当に後ろへ投  
げて湖に落とす。

「オレにとつちやこんなもんだだ硬い石だからな。これなら食える肉  
の方がよっぽど価値があるつての」

『傷心。何気ない主の言葉、我傷ついた』

「ご、ごめんなノーム……でも戦闘だつたらオマエの魔法すげえ役に  
立ってるからな？」

落ち込む素振りを見せるノームにキリヤは失言だつたとノームを  
励ます。

だがどうにも鋼の巨兵は何故キリヤがこの帝国のことを知りたが  
るのか理解出来ない様子だ。

腕を組んだキリヤは一言――

「オマエやウンディーネは今オレの“手の届く場所”にいる！ だか  
らオマエが助けを求めてんならオレは手を伸ばす！」

『オデタチ、ミズシらず。なのにナゼ？』

「至極単純な理由だ――オレがそうしたいから！」  
『えっ？』

「オレはもう二度と後悔したくない。だからここで見ず知らずだろう  
がオマエらのことを知らねえフリする気には一切ならねえ」

でも、どうしても鋼の巨兵が理解しようとするならば――

「オレの名前はキリヤスフィール・フィン・ガルガン。長いからキリヤでいいよ！ で、こつちがサイルだ。つうことでオレと友達になろうぜ！ そしたら友達が友達を助けるのに理由なんていらなくなるし！」

笑みを浮かべながらキリヤは鋼の巨兵に手を差し伸べる。

にこつと屈託のない笑顔を向けられた鋼の巨兵は一瞬躊躇う姿を見せるもやがてキリヤの手にそつと触れる。

『オデのナマエ、ジブラウスト』

「よろしくな！」

はっはっは、と笑いながらキリヤはジブラウストと握手を交わす。

その様子にサイルも納得する様子を見せ、

「キリヤがそう決めたなら私も協力するわ」

「ありがとなサイル。ホントは敵なんだけど」

「そんなの些細なことよ。私はあなたの味方で〈白夜の魔眼〉よりもあなたの想いを優先するわ」

至極当然のように言われてしまえばキリヤはそれ以上何も言えなくなってしまう。

というよりサイルはキリヤと行動するようになってからよく笑うようになった気がする。

そんなことを思いながらもキリヤは本題に戻る。

「じゃ、この帝国のこと教えてくれよジブラウスト」

『ワかった』

頷くとジブラウストはゆっくりと言葉を紡ぎ始める――

### 43話「本当の宝物」

元々、この地底帝国と呼ばれしこの国は地底にあったわけではない。

地上にあり自然環境に恵まれた美しい国だったらしく、ジブラウストは門兵として国を守っていた。

国を守るために創られた造兵<sup>ゴレム</sup>だったジブラウスト。

だがジブラウストに人を傷つけることは出来なかった。何が駄目なのか自分自身さえ分からないがとにかく相手を傷つけることが出来ない。そのことから失敗作だと罵られ続けた。

実質ただの置物としていつも一人で過ごすのが当たり前だったジブラウスト。そんな彼に声を掛けた人物がいた。

その人物こそこの国の王女だった。

王女は当時水の四大精霊ウンディーネと契約し、国の中でも有数の魔道士として国民からの支持も厚く、国には欠かせない存在。優しい王女はいつも一人で国を守っていたジブラウストをずっと気にかけていたのだ。

始めこそ遠回しに王女を遠ざけようとしていたが粘り強い王女にジブラウストも降伏し、気付けば王女ともウンディーネとも仲良くなっていた。

互いの夢を語り、数多の星を見て、創られた魔法生命体とは思えないほどジブラウストの日々は充実していた。

だが、平和とは脆く崩れ去るもの。あの日から全てが変わってしまったのだ。

偶然にも国民が発見したのだ——金や銀などの鉱石が無限に発掘出来る場を。

その日からこの帝国は大きく変貌を遂げる。

外交によって一気に豊かとなり、小国だったこの国は金という大きな力を得たのだ。

しかし、同時に敵国から一気に狙われるようになる。

採掘所を巡り侵略国との数多の戦争が起きた。

ジブラウストも王女も国を守るために必死に戦い、そして戦争が続いたことよって大気中の魔マダに綻びが生じてしまったのだ。

その影響で帝国は地の中に丸ごと沈み、地上は四六時中岩の弾丸が降り注ぐ世界となってしまうた。

結果的に降り注ぐ岩石によつてこの地に近付く者はいなくなり、平和を取り戻す。

地の中というのは初めは慣れなかったにせよ特別な苔によつて太陽や月が再現され、生活には困らない。数多の戦争によつて疲弊していた国民達にとつてまさに恵みだったに違いない。

訪れた束の間の平和、ジブラウストもようやく安堵することが出来る——そう思っていた。

安息を手に入れたと思えば今度は疫病が帝国に蔓延したのだ。

食糧は自給自足出来ていたが疫病に対する備えなどなく、人々は病に打ち負けて屍を積み重ねていく。

時が経つにつれて疫病に恐れるあまり人々は王女や王を糾弾するようになつてしまった。

——おまえらが戦争さえしなければこうはなっていなかった。

——あの採掘所さえなければこんなことにはならなかった。

今まで採掘所の恩恵で豊かな暮らしが出来ていた者さえ掌を返し、責めた。

王女はそれでも諦めなかった。

どうにか国民の反発を抑えようと自ら飛び出したのだ。

ジブラウストも王女についていこうとしたがジブラウストが出来ば力によつて制圧しようとしていると見られる危険性がある。だから待っていて、そう言われ止められた。

だが、いつ思い出してもこの時動けば良かったとジブラウストは思い返す。

民衆を前に落ち着くように言葉をかける王女を国民はあろうことか魔法で撃つたのだ。

明らかに致命傷だった。助からない傷だった。

『ウンディーネ……オデ、アイツらユルせない!!』

そこからはもうウンディーネの言葉は聞こえなかった。

王女を傷つけた者達を皆殺しするために拳を振るおうとしたジブラウストを——瀕死の王女が止めた。

『怒らないでジブラウスト……』

息も絶え絶えになりながら今にも死にそうなのに、それでも王女は国民を庇った。

『どうして、どうしてそんなヤツらをカバうんだ……？』

『違うよ。今のはジブラウストを庇ったの』

ジブラウストにはその言葉の意味が分からなかった。

止められていなければジブラウストは国民を虐殺していた。その可能性以外ないはずなのに。

だが、王女は血塗れになりながらも微笑む。

『私は大丈夫だから——怒らないで』

『でも、でも……』

『あなたは失敗作なんかじゃないわ。心を持った優しいゴーレム、それでいいじゃない。こんなことでせつかく今在る心を失うような真似はしちやダメだよ』

咯血する王女、その足は自らの体重を支えることも出来ず、倒れる。

ジブラウストはすぐにも王女の身体を抱きかかえると王女はゆっくりとジブラウストへ触れる。

『ふふ……やっぱりジブラウストっておっきいね』

『シなないでオウジョサマ……オデ、オウジョサマがシんだらどうすればいいかわからないよ』

『だったら、約束しよ……私の宝物をどうか——守って』

宝物、それが何を指していたのか分からない。

王女はその言葉を最後に眠るようにして息を引き取り、ジブラウストは涙さえ出ない鋼の体軀を呪った——

◎

『でも、ミンナあのとエキビョウでシんだ。オデ、どうすることもできなかつた。ノコされたのはサイクツジョだけ。だからオデ、ここまもることにキめた。ウンディーネ、ジブンをフウインしてサイクツ

「ジョにツナがるここのミズウミをツクった」

「だからウンディーネは結晶の中にいて、この地底にこんな湖があるのか」

『いつのマにかトロールがここにくるようになった』

『探査。主、確かにこれよりさらに深層に採掘所の気配』

「話は本当みたいだな」

疑っていたわけではないが確証を得たキリヤはうーんと悩む様子を見せる。

「ジブラウスト、オマエはこれからどうしたいんだ？ 王女様の宝物を奪おうとするトロールを皆殺しにすればいいのか？」

『トロール、ダレかにオソれイダいてる。だからデキるならタスけたい』

「優しいヤツだなー。敵として来るんだったらブツ飛ばせばイイと思うけどなあ」

その方が手っ取り早いと思う脳筋発想なキリヤだがそうなればこの状況は変わらないことになってしまう。

このままではいつまでも一定周期で来るトロールにジブラウストが痛めつけられるだけ。

そんなことは見過ごせないと、その前にキリヤは純粹な疑問を浮かべる。

「そもそも王女様の宝物って本当に採掘所のことなのか？」  
『え？』

考えてみればそうだ。

話を聞く限り王女は金銀財宝に目が眩むようには思えない。ジブラウストの反応からもそれが見て取れる。

だったら――

「これはオレの勝手な勘だが王女様の宝物ってオマエやウンディーネのことだったんじゃないか？」

答え合わせをする相手はすでにこの世にはいない。

ならば勝手に言わせて貰うことにする。

「人は『物』を宝物にするんじゃないやなくてその物に込めた『想い』を宝物



にする。だから王女様の宝物はこの国の資源なんかよりも一緒に絆を深めたオマエらだと思っただけだな」

となれば、とキリヤは立ち上がる。

「サツサとこの地に終止符打とうぜ。二度と悪用されることのないようにな」

『で、でも、ウンディーネのフウインはウンディーネがトこうとオモわないとトけない。ムリヤリすればウンディーネがシンじゃう』

「じゃ、ウンディーネの封印を解かずに採掘所を誰も触れないように埋めますか！ やるぞノーム！」

『御意』

呆然とするジブラウストを尻目にノームが創り出したのは地底帝国の中でも地底湖下の立体模型。

見れば確かに採掘所と思わしき空洞があり、それを見たキリヤは――

「このあたりなら届きそうかな……サイル、ちよいと魔力貸してくんね？」

「ええ、わかったわ」

キリヤのしようとしていることが分かるのかサイルは問うこともなく差し出されたキリヤの手を握る。

「身体進化魔法」

レベル5・ダイヤモンドラマー

「剛石の重鎧」

ノームを身に纏ったキリヤはさらに空いた手でグリモワール魔導書に触れる。「精霊達、オマエらもオレに力を貸してくれ」

言えばすぐに魔導書から次々と濃密な魔力がキリヤの身体に流れ込む。

多種多様な属性が混じった魔力だがそのおかげでキリヤの魔力制御範囲が広がっていく。

要するに地底帝国に入った途端に会った〈白夜の魔眼〉戦でした広げた魔力範囲から獅子の手を出した事と同じようなことをしようとしているのだ。

そしてサイルや精霊達の助力もあつて地底湖下全体にその範囲が広がる。

——土精霊創成魔法” 金剛石塞葬”。

ネイワークグレイサダイヤ

瞬時に湖の全てが下層から金剛石で固められる。

その光景にジブラウストも驚き、キリヤはそのまま誰もいない方向を睨みつける。

「これでオマエが欲しかったモンはキレイサツパリ固めちまったワケだがどうするよ!？」

一見何もないが氣の流れを読めれば分かる。

トロール達が去った後でもこの場を監視出来るように限りなく大氣中の魔に溶け込み擬態するように仕掛けた監視魔法が今もあった。

キリヤの言葉に氣付かれているのを察したのか透明化をやめ、現れたのは胴体に水晶が埋め込まれた魔法生命体の蝙蝠。

『あつはははははははは！ 地底湖固めてドヤ顔とか笑つちやうわくつ!!』

突如として蝙蝠から甘ったるい少女の高笑いが響く。

やがて地面と同化した蝙蝠は魔法陣となり、輝く魔法陣から一人の少女が現れる。

年齢にしてキリヤよりも幼く見えるほど低身長で童顔。軍服を身に纏い、背には背丈に不釣り合いな外套。どう見ても少女が背伸びをしたように見えるがその目元に見える深い傷痕は歴戦を潜り抜けた証。

何より胸元にスペード王国の紋章があり、少女は一頻り笑ったと思えば――

「このクツセエ下水場みてえな場所を開拓すんのにどんだけ時間がかかったか分かってんのかクソ餓鬼イ!! テメエなんぞの命で足りるワケねえ事態だ!!」

「ハッ！ こつちだつて友達イジメてたヤツは子供だろうが容赦しねえぜ!!」

いきなり凄む相手にキリヤも怯まない。

言葉を返された少女は見るからに青筋を立てたかと思えば指に嵌めていた指輪を外して投げ捨てる。

「アタシをそこらのガキと一緒にすんじゃねえ!! アタシはスペード王国が誇るへ七剣総統」ファイオレナ・ミライズデオルナ様だ三下魔法

騎士野郎!!」

「残念だったな!! オレはすでに三等下級魔法騎士を超えた三等上級魔法騎士だってーの!!」

言葉を返す二人の視線が固まった地底湖を挟んで火花を散らす――

## 44話 「地底湖の激闘」

「七剣総統」なんて倒したことあるし！」

「ベレラファアスラなんかと一緒にしてんじゃねえぞ!!」

言葉に憤りが止まらないフィオレナは腰元に携えていた鞭を手に取るとパチンと小気味良い音を響かせる。

「出てこいクソ豚共!!」

水晶移動魔法” クリスタルベーター 水晶転移”。

フィオレナの言葉で次々と地面から水晶が現れたかと思えば砕け散り、その中からトロールが現れる。

どうにもトロールを率いていたのはフィオレオナだったようだ。恐れを双眸に見せるトロール達がそれを如実に証明している。

「キリヤ、援護するわ。トロールは私に任せて。あの女は任せたわ」

「了解！ あ、トロールは殺しちゃダメだからな！」

「分かってるわ」

魔弾拘束魔法” アイスレヅジバースト 氷結枷弾”。

サイルが撃ち放った魔弾はトロールの足下を捉え、その瞬間下半身まで凍らせて動きを封じる。

その隙にキリヤは” レベル3・レビットアーマー・アルナブ 兎々戦の鉄鎧”を纏い、トロールの動きを掻い潜りながらもフィオレナとの肉薄を試みる。

「トロール任せじゃなくて自分でかかってこいよ!!」

「バカが！ 優れた指導者つてのは自分で動かず指揮に徹するんだよ!!」

水晶を先に纏った鞭の一撃はしなり、キリヤは躲すも背後にいたトロール達の背を打つ。

ただの仕置きではない。打たれた瞬間にトロールの筋肉量が一気に膨れ上がるのが見えた。

「うおっ!？」

トロールの豪腕から放たれる大振りの一撃。地面が金剛石であるために砕けはしなかったが相当な威力であることは確かだった。

その様子を見てフィオレナは不敵に笑みを浮かべる。

「水晶強化魔法」クリスタルエナジー、水晶力上」、叩いた者を強制強化するのさ!!」

「ジブラウスト悪い!! やっぱ気絶させる方向で行く!!」

あまり躊躇う素振りを見せれば相手に付け入る隙を与えることになる。

顎を掠る拳、強制強化されていようともトロールは脳を揺さぶられ、気を失ったように倒れるが――

「何寝てんだ!!」

縦横無尽な軌道を描く鞭の一撃は倒れたトロールをさらに打つ。

いくら強制強化しようとも気を失えば立ち上がることは出来ないと思っていたが白目を剥いたまま立ち上がった。

「アタシの支配下にいるんだから死ぬまで戦わせるさ!」

「クソ!!」

「任せて」

あまりの数にフィオレナの姿さえ見えなくなりそうになればサイルの声が耳に届く。

後方支援から前線に出てくればサイルは拳銃を消し、新たな自動装填銃を両手に構える。

「どんな魔法だろうとそれが強化魔法ならば取り除く」

魔弾弱体化魔法”スリングバースト弱除弾”。

二丁の自動装填銃から放たれる”スリングバースト弱除弾”は数で圧倒しようとする強化されたトロール達を撃ち抜き、その強化魔法を強制的に解除していく。

さらにそれだけではない。キリヤも身をもって体感したことだがあの魔弾を喰らうとまるで呪いでも受けたかのような倦怠感が止まらない。

受けたトロール達は根こそぎ倒れていき、その追加効果から今度こそ立てる者がいない。

正直、あれだけいたトロールをここまで一瞬で殺さずに動きを止める余裕を持つサイルと戦っていたこと自体キリヤは自らでもすごいと思えるほどの所業だった。

ただ一人残されたのはフィオレナ。どれだけ圧倒的な魔力を持つ



◎ 「アツハハハハハハハハハハハハハハハハ!! ざまあみろ!! 油断するか  
らそうなるんだ!!」

クローバー王国の魔法騎士と魔弾使いが空間移動し、フィオレナは  
高笑いをする。

いくら空間移動出来るとしても空間魔法に比べて制限も厳しいが  
今この地底帝国で一番抜け出せない場所に送り込んだ。

もう戻ってくることはない。そう確信したフィオレナは視線を前  
に戻す。

「さあて……」

本当は魔法騎士がこの地底湖を何とかしたところで横取りするつ  
もりだったが想定外だった。

しかし、自ら動くことになったにせよ軌道修正などいくらでも出来  
る。

視界にいるのはウンディーネの結晶体を守るジブラウスト。

「時間をかければダイヤモンドなんてどうにかなる……となれば後はそのウ  
ンディーネを殺せば忌々しい封印魔法もおさらばってわけよねえ？」

◎

「どわっ！」

油断から水晶魔法によって場所を転移させられたキリヤ達はいき  
なり地面に叩きつけられる。

上に乗った状態で落ちて来たサイルを手で退けつつ、すると周りは  
真っ暗な上に何だか酷い臭いが立ちこめていた。

「サイル、オマエなんか臭いぞ」

「えっ!? ち、違うわ!! 私じゃないから!!」

ジト目で見るキリヤにサイルは大慌てして手を振るう。

試しにサイルに抱きついて間近で嗅いでみると確かに花のような  
匂いでサイルから発せられているものではない。

あわわと目をぐるぐる回すサイルは現状使い物にならないとして、  
魔導書を軽く二回小突く。

「ヴォルト、ここを照らしてくれ」

と、声をかければすぐに雷豹のヴォルトが魔導書から出てきてあたりを照らす。

その光景にキリヤも驚きを見せる。

「これは……」

明るくなったこの場にいたのはトロール達だった。

身なりも汚く、傷だらけの身体からは湯気が出るほど懸命に地面を掘り進めている。

酷い臭いは恐らくこの働くトロールから発せられており、その数も尋常じゃないために充満してしまっているようだ。

「ここで何してんだ？」

『ご主人、多分これ穴を掘ってるんだヨー』

首を傾げるキリヤの肩にサキムニの一匹が乗ってそう言う。

しかし、それではいまいち分からず、

「何で？」

『回答。恐らく、あの地底湖から採掘所に行けないことを考慮。そして別の道で繋げるため』

「なるほど、そのためにコイツらは——」

言葉の途中で目の前でトロールが一体倒れてしまう。

だがすぐに近くで浮遊していた水晶の蝙蝠が鞭を出してトロールを滅多打ちにし始めてしまう。

「やめろっての!!」

すぐさまキリヤは魔力を飛ばして破壊。その他にも浮遊していた水晶蝙蝠を撃つてトロール達を解放する。

キリヤの行動はすぐトロール達の目に留まり、一際大きい体躯をしたトロールがキリヤに頭を下げる。

『感謝の意を述べる。ありがとう』

「オマエがトロールキングってヤツか？　でも何でこんなところに？」

その問いにトロールキングは頷く。

『我、あのフィオレナなどという人間に椅子にされていた身。しかし、採掘所がなくなったと知れば血相を変え、我をこの場に捨てて出て



行った』

「なるほどな。正面突破が無理になった時のことを考えてたのか」

そこは流石〈七剣総統〉と言うべきか。

一つの策にこだわらずに二の手も打つ、だがキリヤにしてみればやり方が気に食わない。

『我らトロールはどこにいても爪弾きにされる故、この地底はまさに夢のような土地。しかし、あのフィオレナとかいう人間来てから、我ら奴隷扱い。人間、教えてくれ。我らはどうすればいいのだ？』

トロールキングの悲痛な想い。

キリヤはトロールのことはよく知らないために人間にどう害を成すのかまでは知らない。

ただこのトロールキングを見ればただ安心して暮らせる場所を求めているだけのように思える。

ならば――

「助けてって言えばいいんじゃないやねえか？ オレは今さ、友達助けるためにあのフィオレナを殴り飛ばそうとしてるし。ついでと言ったら何だけどオレ魔法騎士だからオマエらがクローバー王国の国民かって言われたらまあまあグレーだけど守ってやるさ」

ははは、と軽く笑い飛ばせばトロールキングは目を丸める。

やがて頭を下げ――

『頼む。我らを、助けてくれ』

「よし、分かった。だったらこんな場所さっさと抜けちまおうぜ」

二つ返事での返答。

サイルもキリヤの判断に任せているのか反論する様子はなく微笑ましくその様子を見ていた。

周りのトロール達もその言葉を聞いて作業を止めれば早速作戦会議が始まる。

「とりあえず今つてどこぐらいなの？」

『これ、見て』

トロールの一匹が壁を指す。

そこには現在地が書かれた地図のような物があり、見ればキリヤ達

が先ほどまでいた地底湖の陸地から綺麗に横線を引いた部分に印が付けられている。

「ほうほう、だったらここからこっちに向けて掘った方が早そうだな」  
キリヤは位置を確かめながら壁を見つけるとうんうんと頷く。

「よし、皆！　こっちに向けて全力で掘るぞ！！　一列に並べーい！！」

『『おお！！』』

硬い岩盤だがノームが金剛石で創り出したツルハシであれば何の問題もない。

あとは根性勝負だとキリヤやトロール達は意気込んでいるとキリヤの服をちよいちよいとサイルが引つ張ってくる。

「私もするわ」

「いやいいよ。オマエは女だし、こういう力仕事は男に任せとけ。服も汚れないように離れとけよ？」

力仕事は男の役目、〈碧の野薔薇〉で散々教わっているのでそう言うってキリヤは壁と向き合う。

と、急に後ろから抱きしめられてしまい、何だと思えばサイルだった。

「おいおい、何だよ次は？」

「……………」

「何か言えよ！」

何だか分からないがとりあえず離れてもらい、キリヤとトロール達は一斉にツルハシを構える。

「よっしゃ行くぞーっ！！」

掛け声と共にがむしゃらに全力で掘り進め始める――

## 45話 「剛機絶鋼の鉄重拳」

「ホンツツツト無駄に硬いわね!!」

キリヤとサイルが転移魔法によって飛ばされてから十数分。手駒であるトロールを全て倒されてしまったフィオレナは魔法で強化した鞭を振るう。

結晶化し今は動くことの出来ないウンディーネを庇い、ジブラウストは鞭に打たれるまま必死に耐えていた。

耐える中、ジブラウストの頭に過ぎるのはキリヤの言葉だった。

——人は『物』を宝物にするのではなくそのものに込めた『想い』を宝物にする。

王女のことはウンディーネとジブラウストが誰よりも知っている。なのに気付けなかった。

いや、きつとウンディーネは気付いていたのだろう。だがジブラウストがここを守ると決めた時、そして譲らないと言った時、ウンディーネはジブラウストの心の拠り所を守ろうとしてくれた。

何も気付かず、知らなかった愚鈍な自分が憎い。

だがそんな自分にも誰かを庇うことぐらいなら出来る——

『オデ、トモダチマモる。ウンディーネ、キズつけさせない……っ!』

「造られた金属如きが友情語ってんじやねえよ!!」

苛立たしげに言葉を零し、何故かフィオレナは鞭による攻撃をやめる。

次いで後方に一步ステップを踏んで下がれば魔導書が光り輝き、

「今のプリティーな見た目が崩れるからやりたくなかったが……これ以上手間がかかるんなら仕方ねえ。セカンドブラスト 第二の心臓解放だ!」

水晶強化魔法” クリスタルエナジー・ダイナスプート 水晶剛力巨人”。

指輪を外し、指先に水晶の針が顕現したかと思えばそれを自らの胸に刺した途端にフィオレナの身体が大きく脈打つ。

身体の表面に無数の血管が浮き出たかと思えば小柄だったフィオレナの身体がどんどんと巨大化し、数秒すればジブラウストと大差が無くなってしまふ。

少女から離れた筋骨隆々とした巨軀。肌の色は青へと変化し、人外のものへと変化する。

「ぐああああ……この姿になのは久しぶりだな。こうなりやブリキを壊すのに十秒もいらねえ!!」

『っ！』

巨軀に似合わない速度で駆け出したフィオレナの拳は次の瞬間深々とジブラウストを穿つ。

あれほどトロールに滅多打ちにされ、魔法で強化された鞭で打たれても傷一つかなかったジブラウストに拳型のはつきりとした窪みが出来上がり、あまりの威力に足裏が地面から離れそうになる。

それでもジブラウストはただじっと耐える。

どんな相手でも自分は傷つけることが出来ない。今、ウンディーネを守るのは自分だけだというのに何も出来ない。あまりにも無力だった。

（ごめんオウジョサマ……やっぱりオデ、デキソコないだったよ……）  
身体も限界、心もまた今にも折れそうになっていた。

だが、その時――

「やっど開通したああああああああああああああああ――ツ  
!!」

破碎音と共に快活な少年の声が地底湖に響く。

ジブラウストもフィオレナも同時に声の方向に目を向ければそこには――キリヤがいた。

ツルハシ片手に土塗れになりながらもトロール達を率いて壁から飛び出し湖の水面上に着地すれば、

「オレの友達に手エ出してんじゃねーよっ!!」

すぐさまフィオレナに肉薄し、その顔を殴り飛ばす。

『キリヤ……』

「遅くなって悪かったな。助けに来たぜ」

○

「てんめえ……」

殴り飛ばされたフィオレナは島から落ちることはなかったが口端

から零れた血を手の甲で拭う。

憎々しげに見られたところでキリヤは言葉を返すことはなく、背を向けて視線をジブラウストへ向ける。

ジブラウストに手を触れ、キリヤはにこっと笑い、

「よく頑張ったな」

見ればジブラウストの身体は拳の痕だらけでひたすらに耐えていることが分かる。

守るためにただ一方的に攻撃を受け続ける、そんなことキリヤにだって出来ない。尊敬の念を抱くほどだ。

ジブラウストは自分の信念を身をもって見せてくれた。ならば――

「今度はオレの番だな」

『キリヤ、オデもタタカう』

「でもオマエは……」

『あのトキ、オウジョサマがオデをトめたのはオデがニクしみにトラわれないためだったとオモう。だけどイマ、オデがこのままヒキサガったら、キリヤにマカせるだけだったら――きつとオデ、ナンにもかわれない。ツヨくなるんだ』

強くなる、その言葉にキリヤは自分を重ねてしまう。

がむしやらに力を求めたところでただ闇雲に誰かを傷つける暴力になる、キリヤは身をもってそれを知っている。あのままだとメレオレオナに顔向け出来ないほどに。

ただジブラウストは違う。守りたいもののために。過去の自分と決別するために。明確な意志を持って強さを求めている。

その覚悟に満ちた眼はキリヤもずつと見てきた――

『キリヤ、“強さ”というのは何も腕力や魔力だけではない――“心”もまた“強さ”だ。“心”がなければ自らの力に溺れ、私利私欲に走り闇雲に他者を傷つける輩と化す。貴様の魔法は身体を進化させる、だからこそ貴様は今以上に人間として“心”を成長させなければならぬ。分かるな？』

（レオナ様……あの時は適当に頷いちゃったけど今やつとその言葉の

意味が分かりましたよ)

どうして今まで忘れてしまっていたのか。

本当に自分は愚か者で馬鹿だと思い、笑ってキリヤはジブラウストに拳を向け、

「じゃあ一緒に戦おうぜジブラウスト」

『うんっ!』

ジブラウストの大きな拳がキリヤの拳と合わさればキリヤの魔導書が光り輝く。

心の成長、それがキリヤに新たな魔法を授け、そして――

『推奨。我とジブラウストの交差』

魔導書の中にいたノームがキリヤの肩に乗り、キリヤもその意図が読み取れた。

言葉にせずとも、何の証拠がなくともノームとジブラウストは今までにないほど相性が良いと感じ取れた。

ならばそれだけで根拠は充分だ。

「ノーム、ジブラウスト! オマエ達の力を貸してくれ!!」

魔導書の輝きと共にキリヤの身体も光に包まれ、新たな鎧が形成されていく。

さらに重厚となった装甲。身体の各所には魔力を放出し推進力と変える砲口の数々。兜にはクロスのラインが走り、鎧の胴部から具足にかけて銀色の線が何条も刻まれる。

重量に特化し、一撃によって万物を砕き破壊するその鎧の名は――

「レベルアップ身体進化魔法」レベル12・ディストラクトモッドラマー剛機絶鋼の重装鎧」ツ!!」

「んな虚仮脅し通じるかよツ!!」

間髪入れずフィオレナの拳がキリヤの顔面を打つ。

湖の水面を割るほどの衝撃が走り、後方にいたトロール達が吹き飛ばされるもキリヤの身体はその場から微動だにすることはなかった。

「な……ッ!」

「らあああああああ――ツ!!」

通常ならば振るうことすら出来ない重量であつてもマナスキンによる身体能力超向上によつて無理矢理振るい、さらに魔力を推進力に

変えて加速させることでそれを補助して爆発的な火力を生む。

重量、速さ、力、何もかもが合わさり何倍も膨れ上がった一撃を受けなければどうなるか——想像に容易い。

「ぐげええああああああ——っ!!」

叫び声と共に鳩尾を打たれたフィオレナの身体はまるで跳弾の如く地底湖の壁、天井に叩きつけられめり込み、再びキリヤがいる島へと受け身もなしで落ちてくる。

「な……そんな、バカな。アタシがこんなガキに……」

立ち上がるうにも相当効いたのか足は震え、強化された肉体も元の可憐な少女へと戻ってしまう。

そんなフィオレナの前にキリヤはゆっくりと佇み、

「まだ戦う？ 戦うってんなら今まであんたに虐げられたトロールの分とジブラウストの分とか全部返すから数百は殴るけど」

「ひ……っ」

拳を少し上げるだけでフィオレナの目から明確な恐怖が見えた。

もう彼女自身分かっているのだろう。心が折れてしまえば勝ち目がなくなり二度と立ち上がれなくなると。

ただ相手はへ七剣総統、何をしてくるか分からない。なので油断せず——

「どうするっ？」

「ま、まま……参りましたっ!! 降参降参降参しますっ!! 大人しく投降しますからあ!!」

——意外とあっさり降参した。

魔導書を前に置いて土下座。あまりの速度と変わり身の速さにキリヤも一瞬驚かされる。

「……えと、イイの？」

「はい! もう悪いことはしませんっ!」

「潔過ぎね……キリヤ、まだ警戒した方が良いわ」

「とりあえずサキムニ、捕縛と魔導書の没収」

『あいあいサー』

『いサー』

決着と同時に傍に来たサイルも警戒の色を強めるもあつさり  
とファイオレナはサキムニに拘束魔法で捕縛され、特に抵抗する気は見  
られない。

その姿に不思議に思ったキリヤは鎧を解くとしやがんで視線を合  
わせる。

「何かおとなしくなったな……」

「だってあんたに勝てないしこのまま捕まってトロールに殺されるか  
クローバー王国で捕虜になるかここから逃げても任務失敗でスペ  
ード王国で殺されるし。逃げても行くとアテもないし人生詰んだし」

口を尖らせ拗ねたようにファイオレナは肩を落とす。

「素のアタシはこんなのだよ。小さい頃から訓練ばっかだたまたま才  
能あつたからへ七剣総統」になつただけ。で、威厳的な欲しくてあ  
んな乱暴な振る舞いしてたの。実際はへ七剣総統」の中でも一番雑魚  
だけどね」

「じゃあベレラファスラはどのくらい強いのか？」

「アタシの一個上、元々へ七剣総統」は一から七まで割り振られてア  
タシが《七鞭》、ベレラファスラが《六斧》。入れ替わり激しいけど《三  
矢》《二槍》《一剣》は強過ぎて誰も倒せないんじゃないかな」

「へ七剣総統」なのに一以外ほぼ剣使つてなくね……？」

「どうでもいいとこツッコむな！」

随一の軍事大国と称されるだけあつて未だに底知れぬスピード王  
国。

だが今は余計なことを考えるとキリヤ自身賢くないためにショ  
ートしてしまうので一先ず置いておき、

「行くアテないならへ碧の野薔薇」に来いよ」

「……は？」

「だから行くアテないなら——」

「いやいや聞いてたよ!?! 聞いてた上での『は?』だつただけど!」

「オマエ死にたくないんだろ? だったらクローバー王国来て何か  
色々洗いざらい吐いて魔法騎士団来ればイイんじゃないか。オレだつて  
協力するしウチの団長ならイイって言ってくれるだろ!」



「ア、アタシらさつきまで戦ってたんだけど……それにアタシはそのトロールだつて——」

「それはそれ！……これはこれだ!! まあ確かにオマエがしたことは許されないことだろうけど……ここでのトロールの死者はゼロだから暴力振るつたこととかは謝つて許して貰え！」

キリヤの発言にその場にいた皆が驚かさされる。

腕を組み、キリヤは鼻をふんつと鳴らす。

「さつき採掘所埋める時ついでに湖の中も探知してみたら沈んだの全員眠つてるだけで生きてるって分かったしな。ウンディーネに感謝しろよ。盗人相手でも優しさ見せてくれたんだから」

「で、でもさ……」

「——自分を騙して生きるのなんて楽しくないだろ？ 今まで〈七剣総統〉で息苦しかっただろうがこれから変わっていけばイイんじゃないかね？ したいこととか見つけてさ」

「……………」

そこまで言うとならフィオレナは黙ってしまう。これでフィオレナも多少反省するだろう。

踵を返せばキリヤはウンディーネが封印されている結晶の前まで行き、その場に座り込む。

「ようやく話せるな、ウンディーネ。オレの名前はキリヤスフィール・フィン・ガルガン、キリヤって呼んでくれ。王女様のごときはジブラウストから聞いたよ。あんたの望んだ結果じゃないかもしれないけどオレが勝手に終わらせちゃって……悪かった」

『良いのよ、あーしだつて本当は姫ちゃんのお気持ち知ってたし。こうして封印したのはジブリンがここ守るって言い出したからあーし自身も最後の付き合いかないって思つて協力してただけだし——それももう終わりっ！』

やけに軽い口調で女性の声が響いたかと思えば結晶に輝が入つていき——

『あーしつてば真実の愛を見つけちゃったから！ ねっ！ だーりんっ!!』

全身水属性の魔力で出来た女性が思い切り飛び出しキリヤに抱きついた。

その光景に何がどうなっているのか、全く理解出来ない一同だった

## 46話 「開国と真実と後輩誕生」

『正直一目惚れでいつ登場しよーっかなって悩んでただけどやっぱり全部片付いてからのの方がタイミングも良いと思って待ってたんだけどかーつこよかった！ あれ何て言うの？ 身体進化魔法だっけ？ ノームとジブリンを纏ってた鎧イイねえーっ！ あーしも早くだーりんに纏われたいつてゆーかー』』

「あ、あの、ウンディーネ？ 思ってたキャラと全然違うんだけど……」

『ウンディーネ、ムカシからあんなカンジ』

物凄い勢いでマシングントークをされてしまい珍しく圧されているキリヤに対してジブラウストはどこか懐かしさを感じている様子。

本題の魔石に関する話に行きたいのだが当のウンディーネは久しぶりの会話で止まらず、ジブラウストに近付いては肩を叩きまくる。

『ジブリン！ あんたもよーっやく前に進む気になったのね！ ずっととうじうじうじうじうしてたからあーしがいちいち言うのもメンドくさいし放置してたけどようやくこれであーしのここでの役目は終わり！ これからあーしはだーりんについていきまーすっ！』

「え？」

ついていけず会話の流れで次はキリヤの魔導書にウンディーネが増えれば光り輝き、新たなページが刻まれる。

あまりの行動の早さに呆気に取られてしまい、そのうちにウンディーネが首から下げていた魔石のネックレスを外してキリヤに手渡す。

『あ、だーりんコレあげる。あーしにはこれいらないし』

「いやこれ王女様に貰ったものとかじゃ……」

『んーん。どっかで拾ったんだけど欲しいならあげるー』

「ありがとな」

『いーえーイイのよこれくらい』

『ウンディーネ、ここからデていくのか？』

『うん』

ノームに凹んだ身体を修理されていたジブラウストはウンディーネの言葉に度肝を抜かれたように呆然とする。

その様子にウンディーネは息を吐く。

『確かにここは姫ちゃんやジブリンと一緒に過ごした大事な場所。だけれども昔みたいなお場所じゃないし今はトロール達がここで新しい文明を築いてる。姫ちゃんの最期は確かに悲惨だった。でもどんな形であれ姫ちゃんはきちんと人間として命を全うしたんだ。あーしらは人よりも当然長く生きるからいつまでも割り切れないままじゃいられないよ』

『でも、それだとオウジョサマがいたアカシ、どこにもなくなる……』  
『姫ちゃんと同じ時間を生きたあーしがいる。あんたがいる。あーしは自身が証なの。だからさ、あんたがそんな力オしてると姫ちゃんいつまでも安らかに眠れないよ。それにイイ加減出来なかったお葬式してあげようよ。あんた変わりたかったんじゃないの?』

近付いてじつとジブラウストの目を見つめたウンディーネ。その視線を受けてジブラウストもやがて頷く。

『……うん。オデ、カわる。キリヤ、オデもついていく。ついていってオウジョサマがミタかったセカイをミる』

『おう、これからよろしくなジブラウスト。ウンディーネ』

ジブラウストとウンディーネ共にキリヤと拳を合わせればウンディーネの声はさらに高らかなものとなる。

『そんじやージブリンもここから卒業つてことで姫ちゃんしめっぽいの嫌いだっだし皆巻き込んで盛大な宴にしようよ！　ね、だーりんも協力してくれる?』

『ああ、勿論だ。サイルも頼むよ』

『ええ、任せて』

『我らも謹んで協力させてもらおう』

『じゃあ盛大に騒ごうぜー!』

湖から解放されたトロールも起き上がり、キリヤが拳を突き上げればつられてこの場にいた者達も一斉に拳を突き上げる――

『ウンディーネ、罪深き我らを許して貰い感謝の念を——』

『イイのイイのあんなの。マジの盗人だったらブッコロ確定だったけどあんたらのことは何となく事情があること分かってたし!』

湖から地底帝国本土に出ればトロール達が用意した大きな炎を中心に巨大な肉が焼かれ、トロール達も含めてキリヤ達は盛り上がった。いた。

「何の肉か分からねえけど美味しいなこれ!」

「口に合って良かったわね」

メレオレオナとの修行の際は基本野生の肉焼きは基本だったので特に抵抗もなく骨付き肉に齧り付き、サイルは上品に皿に盛った肉をナイフとフォークで食べている。

そこにせめてもの贖罪として宴席を走り回って料理などの準備や酒の追加などを行っているフィオレナがやってくる。

「キリヤ先輩サイル先輩お疲れ様です! お水か果酒はいかがですか!?!」

「あー俺未成年だからなあ。あと先輩って?」

「やっぱりお世話になるんですし先輩って呼ぶのが筋なのかと!」

「一応言っておくけど私は魔法騎士団の人間じゃないわよ?」

「え、ホントですか!?! でもあんなに強いなんてマジ尊敬です!」

「ず、随分と変わったわね……」

水を注ぐフィオレナの姿にサイルも目を丸める。

あれだけ地底帝国の女王を気取っていたのに今では完全に後輩と化していて、その変化にはキリヤも驚かされている。〈七剣総統〉という重みを捨てたために本人は気楽そうであるが。

「それでは失礼しますっ!」

「おう、頑張れよー」

「はいっ!」

一礼してフィオレナは走り去っていき、再びサイルと二人になればキリヤはサイルへ顔を向ける。

「地底帝国の魔石も手に入ったし、この宴会が終わったらオレ帰るけどサイルはどうするんだ?」

「私はもう〈白夜の魔眼〉をやめるわ」

「……マジで。あんなにクローバー王国のことを憎んでるのにな？」

「幹部以上はクローバー王国だけじゃなくて人間自体を恨んでるわ。その点は私も同じ。でも私はアルーグが……キリヤが生きていてくれればいいの。私はそれだけでいいわ。今だから言うけどリヒトはあなたが〈白夜の魔眼〉側にならなければ切る選択をした。私がそれを許すはずがない」

「何でそこまで俺のためにしてくれるんだ？ 俺ってばおまえのこと全く覚えてないし何もしてやれてないと思うんだけど」

「愛してるから、それ以上に理由は必要ないわ。あなただって頑張っている根底にあるのは『レオナ様』への愛でしょ？」

「うん。でも抜けた後はどうする気なんだ？ 行くアテとかあるのか？」

フィオレナはまだしもサイルは実際に国王暗殺未遂を行い、現状クローバー王国の中で最大の咎人と称される〈白夜の魔眼〉の一員。仮に自首したところでその罪はあまりに重く、どれだけキリヤが言っても覆りはしないだろう。

だが考えがあるのかサイルは微笑み、

「……キリヤ、今から少しだけ難しい話をするわね」

「……？」

「私やリヒトや〈三魔眼〉、あなたも含めて人間じゃないの。元々は人間より魔力に愛されたエルフって種族なの。過去に人間に裏切られ殺されて魂が転生して今はあなた以外人間の器に宿ってる。その人間の器には元々の人間の魂もあるからつまり一種の二重人格のようなものね」

「一つの身体に二つの魂……？」

「ええ。中でも私は魔力の後押しもなしに転生して……って、あなたには論より証拠を見せた方が良いわね」

言ってサイルは瞼を閉じる。

するとサイルの身体は光の粒子に包まれ、肉体に変化が訪れる。

二十代に見え長身だったサイルの容姿は小柄な少女のものへと変

化していき、その容姿にキリヤも驚く。

黒髪をボブほどの長さにした愛らしい少女は――

「シイナ……?」

キリヤと共に〈碧の野薔薇〉に入団したシイナ本人だった。

変身魔法でもなく、ゆつくりと瞼を開いたシイナはキリヤの顔を見るなり驚き、

「え、あれ!? どうしてキリヤさんがここに? それにここは一体……?」

「シ、シイナだよな……?」

「はいもちろんです! ですが――」

と、シイナの言葉の途中で再び光り輝き、その容姿はサイルのものとなる。

あまりの変化に驚かされるばかりだが、

「私とシイナは記憶の共有が出来ないの。最近になってようやく私の声がシイナに届くようになって一方的だけど様子を見ることが出来るようになったけど……とにかく私が〈白夜の魔眼〉を抜けてもシイナとして魔法騎士団に居続けることが出来るわ」

「氣を感じ取れるようになったけど全然分からなかった……」

「本当に多重人格なら氣配で分かるけど私の場合には姿も魂も完全に變えてるから氣付かなくて当然よ」

「……ん、姿も魂も入れ替えてるから氣付かない……?」

その言葉に何やら引つ掛かりを感じたキリヤ。

見逃せないはずの言葉で何かの真相に行き着きそうになるも如何せんこういったことに頭が回らない。散々馬鹿と言われてきたが流石に自覚症状が出て来そうになる。

「キリヤ……?」

「な、何でもない」

心配そうに顔を覗いてくるサイルを慌てて誤魔化すも一抹の不安が過ぎる。

サイルは迷う様子を見せるキリヤに今度は二人で一つになった魔導書を手に持ち向ける。

「これはあなたが持っていて。私はここから出るとシイナに変わって見ることに専念するわ。それに精霊達もきつとあなたといることを望んでいると思うから」

「申し訳ないけどそれは出来ねえよ」

「…………どうして?」

「サイルの魔導書にいる精霊達と絆を紡いだのはアルーグだ。そんでオレの魔導書にいるのは今のオレのことを認めてくれた精霊達だ。だからオレの力がアルーグを超えたって時、昔よりも今オレがイイって思ってくれた時に来て欲しいと思ってる」

「本当に頑固ね」

「今のオレじゃ持て余しそうだしな。…………ぶつちやけサイルもそう思ってるんじゃないかね?」

「…………ちよっぴりね。でも彼は本当に強かったから」

「ぐぬぬ、いつか必ず超える!」

いつの間にか魔導書から出てきていたアルーグの精霊達は少し寂しげに、しかし納得した様子で魔導書内に戻り、一つになっていた魔導書も二つに分離する。

元に戻った手帳サイズの魔導書がやけに懐かしく感じながらもキラヤは笑い、

「なあサイル。もしオレの手が届かない場所でシイナに何かあったら助けてやってくれねえか?」

「ええ、構わないわ。この子に死なれば私も死ぬし」

「それもそっか。でもありがとな。最初はめちやくちや普通に敵だったけど話してみればサイルは優しいヤツだ。今更だけど」

「良いのよ。でも私が優しいのはあなたにだけ。他の人間にはこうはいかないわ」

「そうだとしてもオレはおまえのこと優しいって思うよ」

『なーにしんみりしてんのよだーりん! あーしと踊りましょーよーっ!』

「おう!」

盛大な宴はさらに盛り上がりを見せており、炎を囲んでトロール達



が踊りを見せていた。

そこにキリヤもウンディーネに手を引かれて参加し、夜通しで飲んで騒いでを繰り返した――

○

翌日――

「――ご苦労様、〈白夜の魔眼〉を退けて無事に魔石を手に入れられたようで何よりだ。それで……その子が今回捕虜にした〈七剣総統〉の一人かい？」

「はい。そこでオレからの願いなんですけどコイツ行くアテもないから〈碧の野薔薇〉に置いてやりたいんです。勿論コイツが知ってる情報全て差し出すのも了承してるし相当強いしどうかお願いします！」  
懸命に頭を下げるキリヤだがその願いを聞いた上でユリウスは首を横に振るう。

「……地底帝国だろうがそこはクローバー王国の領地。彼女が侵略行為をしたことに変わりないから厳罰は当然のことだよ。〈七剣総統〉はスピード王国の要、むやみやたらにこの国の中で自由を、しかも魔法騎士なんていう立場を与えることは出来ない」

「そこをどうかお願いします！　まだオレの潔白が証明出来たわけじゃないですが何かあれば必ずオレが責任を取りますから!!」

「先輩……」

「僕は魔法帝でこの国を守る義務がある。そして君もまたその義務を背負う者だ。敵国の有力者を引き入れるのがどれだけ危険なのか分かるね？」

「……はい。それでも今フィオレナはオレの“手の届く範囲”において助けられるんです。だからオレは自分の意思に従いフィオレナを見捨てません！　ここで見捨てるのはオレの信念が許せないんです！

お願いします！」

再び頭を下げるキリヤにユリウスも困った表情を浮かべる。

やがて考えがまとまったのかキリヤの肩を叩く。

「……正直もつと強く言いたいところだけど――君は充分過ぎるほど実績を示している。その褒美と言っちゃなんだけど君が信じるなら

私も一度信じてみよう」

「ホントですか!?!」

「ただしまずは情報収集から。そして元へ七剣総統の肩書きは隠して執行猶予付きでキミの監視のもとで行動させる。大前提としてへ碧の野薔薇へに入団出来るかはシャーロット次第だけど」

「やったなフィオレナ! これでおまえの魔法騎士だ!」

「ありがとうございますキリヤ先輩!」

「話聞いている? まず色々してもらわないといけないんだけど——」

魔法帝そっちのけで喜び合うキリヤとフィオレナの二人にユリウスも「まあ今は良いか」とその様子をしばし見るのだった——

## 第7章 誕生日会&キテン防衛編 47話 「誕生日会準備」

「せんぱい！ 待ってくださいよっ！」

「モタモタしてつと置いてくぞっ！」

「……何やってんだあれ」

珍しく大抵の〈碧の野薔薇〉のメンバーが非番の日、〈碧の野薔薇〉拠点内で謎にゆつくりな追いかっこをしているキリヤとその後を追う少女を見てソルは呟いていた。

テーブルに肘をついて見ていたが一向に意味が分からず、対面に座っていたシイナもよく観察し、

「あれは多分キリヤさんが先輩の振る舞いがよく分からなくて『先輩は先輩の背を追うもの』と考えて走ってるんだと思います」

「すごいなシイナ……本格的にキリヤの専門家みたいになってきているな」

「分かりやすい人ですから」

確かに、とソルは今までのキリヤのことを考えれば納得の意を示す。

単純で馬鹿だが真つ直ぐとした行動、確かに分かりやすい。男は女よりも遥かに馬鹿と称されているがキリヤを見れば充分過ぎるほど頷ける。

「てゆうかあの後輩キャラ誰だ？ 〈碧の野薔薇〉のローブ羽織ってっけど見たことないし」

「確かに言われてみればそうですね」

「団長から何か言われてたかしら？」

話を聞いていたプーリも頭に疑問符を浮かべる。

髪を二つ括りにしてその童顔もあつて可愛らしく、シイナもまた童顔だが彼女は実年齢に比例した幼さを見せているようだ。ローブを羽織った姿も背伸びしている感が否めないが不思議なことに身に纏う魔は洗練されたもの。

実力は不明だが圧倒的に場慣れしているように見え、〈碧の野薔薇〉でもかなり上位に食い込むかもしれないほど。思えば不思議になつてくるのが彼女の出自だろう。

「先輩やつと捕まえましたよ〜っ!」

「はははっやるな〜」

ようやくキリヤが後ろから抱きしめられる形で捕まったところでシイナが軽く挙手する。

「あのキリヤさん? その女の子は一体誰なんですか?」

「ん〜? ああ、コイツはオレの後輩ちゃんだ!」

「いやそれは見ていて何となく分かりましたけどどこの誰なんですか?」

「申し遅れました! アタシはフィオレナ・ミライズデオルナ、これからお世話になります!」

「——的な感じで姫様からも許可貰ったし新入りってわけだ」

近付いて頭を下げて挨拶する少女——フィオレナ。

突然の新人団員、しかもこんな時期外れになれば不思議な話だがソルはそんなこと気にしていないようで、

「おうよろしくな! 私は——」

「ソル先輩ですよね! それにシイナ先輩とプーリ先輩! 昨日までに名簿見て全員覚ええました!」

「なかなかやるなオマエ! よし気に入った!」

「ありがとうございまくすっ!」

早速ソルはフィオレナと意気投合したようでも乱雑にフィオレナが撫でられる。フィオレナも嫌がる素振りなく撫でられており、早くも周りの面々から受け入れられていた。

その様子を見てキリヤもどこか嬉しそうにし、近くの席に座ればシイナも近付いて耳打ちする。

「(あの子何か訳アリなんですか……?)」

「まあそんなトコ。つい最近までやりたくないことしてたみたいだし任務のついでに連れ帰ったんだ。で、魔法帝とか姫様とか色々説得して〈碧の野薔薇〉の魔法騎士になったってワケ」

「な、なるほど。聞くに聞けないですがなかなか壮絶な人生を送って  
そうですね……」

「そうなんです！ でも荒れてたアタシをキリヤ先輩が救ってくれた  
んです！ すごくいですよね！」

女子の輪から離れてフィオレナはキリヤの膝上に勢い良く飛び  
乗ってくる。

その姿はもはや先輩後輩というよりも――

「何だか兄妹みたいですわね」

「それイイですね！ お兄ちゃん先輩って呼んじやおつかない！」

「おう、イイぞイイぞ」

「即答過ぎるだろ！」

あまりの受け入れの早さにソルも思わずツツコミを入れるもキリ  
ヤは笑って返す。

単純と言うよりももう何も考えずに反射で返しているような、そん  
な風にシイナも思っていれば不意に間に出現した何かに押されて引  
き離されてしまう。

『ちよいちよいちよーいっ！ あーしのだーりにちよっち気軽に触  
れすぎじゃね!?!』

現れたのは人型ではあるものの人ではなかった。

身体の隅から隅まで水で形成されており、滑らかな曲線によつて女  
性の肢体を描き、まるで芸術品のような上品さを醸し出している。対  
照的にその話し方は軽快で何やらぶんぶん怒っているようだった。

しつとフィオレナも退かせば現れた水の精霊はふんと胸を張り、  
『だーりに気安く触れようなんてあーしの目が黒いうちは許さない  
かんね!』

「黒には見えねえけど……」

『確かにあーしの身体全部水で出来てるから黒くないけど比喻だから  
イイの!』

「え、えーっと、この精霊は一体……?」

『聞いて驚け！ あーしはだーりに一目惚れしてついできた水の四  
大精霊ウンディーネ様よ！ さあメス共！ このあーしにひれ伏せ

ひれ伏せえい!』

「こ、これがあの四大精霊の……何か思ってたのと違うような……」

『説明。昔は慎ましかつたが初代契約者にフラレて素になった』

『こらノーム! 元カレの話は禁止! だーりんが気にしちゃうでしよ!』

『訂正。元カレですらない。あとだーりんですらない』

『んだとくっ! もうあーしがだーりんって言ったたらだーりんなんですう! 相手に別の女がいようが構わずいちやついてやる! あとあんた昔から変わらなすぎよ!』

魔導書から現れたノームの辛辣なツツコミにとうとう喧嘩を始めてしまう始末。

同じ四大精霊で面識もあったのか、互いに知り合いのようだが拠点内で喧嘩されてしまえばその濃密な魔力もあって被害がえげつない。

「あ、あの、キリヤさん! 止めてもらえませんか!」

「ん、あー、うん。二人ともそこそこにしとけよー」

そこでシイナに疑問が過ぎる。

何せいつものキリヤなら「こらーっ!」とか言いながら走り出しそうだが今日は不思議なほどおとなしい。どちらかと言えば元気がないように見える。

元氣と根情が実体を持ったようにいつも元氣なキリヤが落ち込むというのか。

半ば失礼なことを考えてしまうもシイナはキリヤに目を合わせ、

「何か悩み事でもあるんですか?」

「……大したことじゃないし一日経ったら終わりだし大丈夫」

「大したことじゃないって言うことは何かあるってことですよね。いつもキリヤさんにはお世話になってますしたまには私にも力にならせてください!」

「シイナ……」

一瞬言うのを躊躇う素振りを見せるもやがて、

「今日さ、オレの『タンジョウビ』ってヤツなんだ。修行してた時いつも厳しいレオナ様だけこの日だけは超優しくてさ。何かメシも

豪華ですんげえ楽しかった。でもオレもう魔法騎士だしひよいひよいレオナ様のところ行ったら絶対『甘えるなアアアア!!』ってガチ拳骨だろうしちよびつとだけ寂しいなって思ってたさ」

あの過剰スパルタなメレオレオナにも『超優しい日』なんて存在するののか。

申し訳ないがそのインパクトが強すぎて寂しそうなキリヤの言葉が少し入ってこなかった。

だがこれで元気がない理由が分かった。となれば――

(とにかくいつもお世話になっているお礼をしなくては！)

拳をきゅつと握り締め、人知れず気合いを入れ直すシィナ。

と、今度はキリヤの魔導書から何匹かのサキムニが静かに飛び出し、そそくさと出入り口の方へ向かっていく。

(あれ……?)

声を掛けようとすればサキムニがジエスチャーで『しーっ』とし、そうされてしまえば黙って見送る。

不思議に思うも今は誕生日会が優先、そう心に決めてシィナは密かに心の中で奮起する。

○

「というわけでフィオレナちゃんが上手い具合にキリヤさんを連れ出してくれたので作戦会議をしましょう！」

「何で私まで……」

「何だかんだでソルさんもキリヤさんのこと何かと気にしてるじゃないですか。つまり同志です。ということ皆さんも一緒にキリヤさんのお誕生日を祝いましょう！」

シィナの掛け声と共に〈碧の野薔薇〉でもキリヤと仲良くしている温厚派の面々が『おぉー』と声を上げる。

魔法で壁に『キリヤさんお誕生日会プラン』と書き、早速会議が始まる。

〈碧の野薔薇〉は九割が女性の団なのでそれ相応に手料理や菓子の役割分担は容易く決定されていくも問題はここから――

「プレゼント……どうしましょうか」

問題はこれだ。

今までキリヤと行動を共にすることも多かったが未だにキリヤの趣味嗜好は分からないことが多い。

ここにいるメンバーが共通して思い浮かぶとすれば、

「やつぱり『レオナ様』って人だよなあー」

ソルが後頭部に手をやって天井を見上げながら呟けば周りも同調して頷く。

一貫してキリヤが好きなものと言えばメレオレオナ、これに限る。キリヤのテンションが低いのはメレオレオナが祝ってくれないことにあり、そうなればキリヤにとって最大のプレゼントはすぐに分かる。

「メレオレオナ様を何とかして呼びましょう……」

最大のプレゼント、最大の試練、あらゆる意味で最大だがキリヤの元気を取り戻すためには仕方がない。

だが絶対に一筋縄で行かないのは確かだ。というより行く前から無傷で終われないことなんて想像に容易すぎて本当に怖い。

とりあえずそこから料理班は先に決め、もはや死刑宣告と言っても過言ではないメレオレオナを呼ぼう班を決める時になってシイナも言葉を詰まらせる。

「い、言い出したのは私ですから私が行くのは決定で……」

シイナが目線をやると一斉に逸らされる視線。

すでにメレオレオナが〈七剣総統〉の一人を一撃で倒したことは〈碧の野薔薇〉では有名な話（キリヤが自慢していたため）でその実力の高さは周知の事実だ。

しかもメレオレオナの性質もあって絶対に「来てください!」「分かった」で来てくれるような人ではないため必ずと言っていいほどバイオレンスな展開になるだろう。

（流石に私一人では――）

「騒々しい……何を騒いでいる」

「だ、団長っ!」

すでに料理担当の団員達は話し合っているために騒々しく、その騒



ぎを聞いて団長室から出てきたシャーロット。その美貌と今の状況もあいまってまさに女神降臨だ。そうに違いない。

「団長くっ！」

「な、何だ急に抱きついてきて……」

「あ、こちら！ 姐さんにいきなり抱きつくな！」

思わず抱きついてしまつてソルに引き剥がされるもシイナの高揚は止まらない。

一方全く状況の分からないシャーロットは頭に疑問符を浮かべ、

「それで何の騒ぎだ？」

「それが——」

説明を求められれば包み隠さず伝えるとシャーロットも納得したように頷く。

「なるほど。キリヤスフィールの元気を取り戻すためにメレオレオナ様を呼んで誕生日を祝う、か……。メレオレオナ様の人柄を知っている分はつきり言つて難しいな」

「そこを何とかお願いします！ このまま今日が終わつてしまうといつても頑張つてるキリヤさんが報われないんです！ 明日から突然モチベーションを失つたらと考えると……」

「あいつに限つてそんなことはないと思うが……」

「キリヤさんは今この団で誰よりも頑張つてるんです！ 団長から劳いの意味も込めてどうか！ どうかお願いします！」

「分かった。分かったからしがみつくな」

「姐さんが行くつていうなら私も行くつス！ 姐さんあるところに私ありつス！」

『メレオレオナ様見つけたヨー』

『たヨー』

仲間同士でどこからか受信したのか拠点内にいたサキムニが耳を立てる。

どうやら先ほど秘密裏に拠点から抜け出していたのはメレオレオナを探すためだったようで、シイナはサキムニを手に乗せる。

「ありがとうございます。それでメレオレオナ様は一体どこにいるん

ですか？」

『行ったことがある魔獣がいつぱいいる森だヨ』

「ダッコウバ」の時の……」

キリヤが「ダッコウバ」の高熱で苦しめられている際に治療に必要な果実を取りに行った魔獣の森。

まさかそこにもう一度行くことになるとは思ってもいなかったがシャーロットがいれば何とかなるだろう。

誰かの影響もあって楽観的に考えてしまっても本当の苦勞はここからなのと言うまでもない――

## 48話 「最高のプレゼント」

「断る」

事情を説明した後、メレオレオナの開口一番がそれだった。

正直何の意外性もなく魔獣の森までやってきていたシイナ、シャーロット、ソルは皆同様に『やっぱり……』という感想を抱く他なかった。シイナの肩に乗っているサキムニでさえその威圧感にいつもはピンと伸びた長い耳がへなつとじてしまっている。

あとさりげなく賄賂のつもりでシャーロットがメレオレオナ好みの酒を差し入れるもそんな忖度を通じる相手なわけがない。

「そもそもあの莫迦弟子の誕生日など一度も祝ったことはない」

「……え、でもキリヤさんは誕生日の日だけメレオレオナ様が本当に優しいと言つて……いなくともなくはなかったかとお……」

言葉の途中からメレオレオナの眼光が鋭過ぎて逆に忖度させられてしまうシイナ。

“ダツコウバ”事件の時もそうだが何だかんだメレオレオナはキリヤのことを気遣っているし大切にしていることは言葉にせずとも分かっている。だが多分その点を突いたら最後燃やされて灰すら残らないだろう。

幹事であるシイナがあまりの威圧感に口ごもってしまい、メレオレオナの視線はシャーロットに移る。

「シャーロット、貴様もその話に乗った口か？」

「……結果的には」

「男だ女だと線引きしていた割には随分と丸くなったな」

「いえ、そういうわけでは……キリヤスフィールは入団以降数々の戦績を上げ、一年も経たず上級魔法騎士になりました。その弛まぬ努力と成果を認めただけであり、そこに男や女などと線引きをするつもりはありません」

「そうだそうだ！ 何やかんやでキリヤは使える男だ！ キリヤの師匠つて言うんなら認めて褒めてやってもイイと思うけどな！」

「下らん。あの莫迦は魔法騎士団に入る前から実力は充分過ぎるほど

にあった。上級魔法騎士になったのも当然の結果でわざわざ認めるも褒めるも何もない」

「紅蓮の獅子王」団長の姉って聞いてたけど意外と冷たいんだな……」

(いえ、今は……)

ソルが口を尖らせるもシイナには今のメレオレオナの言葉が違った意味で聞こえた。

一見冷たく聞こえるだろうが一から十までスパルタなメレオレオナがすでにキリヤの実力を認めているのだ。それも魔法騎士になる前から。

結果はその延長線で、元々認めているのだから褒めるも何もないというのも当然だろう。

(何だかんだ言って誰よりもキリヤさんのことを認めてるんですよね……)

「何だその目は？」

「い、いえ何でもありません！」

「何でもないなら早く帰れ。貴様らに構っているほど私は暇ではない」

返事も聞かずに踵を返すメレオレオナにシイナ達は萎縮してしま

う。シャーロットもシイナも昔から一応付き合いはあるものの畏敬の念を抱いているのは確かだ。だがここで引くわけには行かず、何の成果もなしでは帰れない。

もうそこから何も考えシイナは背後からメレオレオナに抱きついてしまう。

「待ってください！ メレオレオナ様を連れて行くまで帰れません！」

「……ほう。この私に背後から来るか」

(はわわ、思わず抱きついちゃったけど怖い……っ！)

猛々しく燃え上がる炎の如き魔と威圧感でそれはもう身体が震えてしまう。

いつもキリヤは何かある度に抱きついていたそうだがよくこんな威圧感を受けて平気でいられる。ある種尊敬の念を抱いてしまうほどだ。

色んな感情が入り混じって固まるシイナを剥がし、メレオレオナは振り向いてシイナを見下ろす。

「イイだろう。気が変わった。そこまで言うなら行ってやる」

「ほ、本当ですか!？」

「——ただし、貴様らが私に実力を見せたらの話だがな」

「「……へ?」」

突然の提案にシャーロットも含めて三人は素っ頓狂な声を上げてしまう。

「この魔獣は手応えがなくて刺激を求めていた頃だ。丁度良い。シャーロットがどれだけ成長したか団員諸共に見てやる」

「し、しかし……」

「怖気づいたのか? ならば帰れ。私は弱者の言葉に耳を傾けるつもりはない。私を動かしたければそれ相応の力を見せろ」

圧倒的実力主義者。

王族でありながら血統や魔力で人を計らず、俗世から離れ自らの研鑽を続けているだけあって言葉の重みが違った。

ただクローバー王国随一と言っていいほどの実力者を目の前にしてシイナは申し出に言葉を詰まらせれば代わりにシャーロットが一歩前に出る。

「いいえ、せつかくです。団員にも良い経験になるでしょうし私自身今のあなた様にどれだけ通じるか試したいと思います」

「安心しろ、加減はしてやる。それに今回は遊びだ。私に一発でも当てれば貴様らの勝ちにしてやる」

「な、何かとんでもない展開になったな……」

「は、はい……でも正直予想はしていたんでやるしかありませんよ」

それでも開口一番の「断る」からだいぶ譲歩されている方だ。

予想していたためにそれほど驚きはなく、シャーロットは魔導書から柄を抜く。

「ソル、シイナ、私の援護に徹しろ。怪我をしたくなければ全力で行け、あの方の遊びは遊びではない」

「は、はいー!」

「作戦会議は終わったか? ならかかって来い」

「全力で行かせて貰います!」

こうしてキリヤの誕生日会を祝うために何故かメレオレオナと戦うことになったシイナ達。

メレオレオナが魔力を少し解放しただけで魔獣の森から一斉に魔獣達が逃げ出したのは言うまでもない――

○

「キリヤ先輩このお菓子美味しいですねー。〈碧の野薔薇〉の先輩に聞いて気になってたんですよ」

「確かに美味しいな。オレあんまり甘い物とか食べて来なかったけど」

キリヤとフィオレナがやってきたのはキテンと呼ばれるダイヤモンド王国との国境付近にある街だった。

資源も豊富にあるということで平界の中でも市民の生活は比較的豊かであり、キリヤは知らなかったがフィオレナの調査によれば女子受けするスイーツを取り扱う店も多いようだ。

連れられて入った店でワツフォルという焼き菓子を食べながらも街の風景に目をやれば他の地域に比べ外壁が分厚いように見える。その上には魔法騎士による警備部隊も見え、キリヤは片肘をつく。

「やっぱり国境付近ってだけあって警備も嚴重だな」

「当たり前ですよ。ここ取られちゃったらダイヤモンド王国が一気に有利になっちゃいますし私が指揮官だったらまず拠点に欲しいところですよ」

「スピード王国って〈七剣総統〉だけが動いてるイメージあるけど軍隊とかあるの?」

「ありますよー。ただベレラファスラもアタシも任務の場所が場所でしたから大人数連れて行けなかったんです」

「確かにあの魔宮も地底帝国も大人数で行くには向いてないしな」

ベレラファスラは本人の性格的に部下を引き連れているイメージ

は湧かない上に地底帝国も行くまでが大変だ。むしろフィオレナ自身よく辿り着いたと思うもそこはへ七剣総統たる実力だからだろう。「あ、先輩今アタシがよく地底帝国に行けたなとか思いましたね!?」  
「行けますとも! 落ちてくる岩程度なら鞭で叩き落とせますし!」

「思った以上に解決方法が凄かった」

メレオレオナがどうしていたかは不明な部分もあるが少なくともキリヤは魔<sup>マ</sup>や氣<sup>キ</sup>を読んで躲していた。それを上回る脳筋的解決方法にキリヤも素直に感心する。

「そーいや〈碧の野薔薇〉の皆とは仲良く出来そうか?」

「まるでお父さんみたいな心配ですね……ダイジョウブですよ。〈碧の野薔薇〉って女性多いですから若干ギスつてるところもありますけどソル先輩とかシィナ先輩とかいるんで何とかかなりそうです!」

「ギスつてゐるのがよく分かんないけどそれなら良かった」

「キリヤ先輩は基本誰とでも仲良くしてそうなんでギスるとか無縁そうですね……」

「……? 何か知らないけど女子の世界って面倒そうだな」

「全くです。キリヤ先輩と話してる方が気が楽つてもんですよ」

にししと笑みを浮かべるフィオレナにキリヤも笑い、そろそろ店から出るかと立ち上がると――

「ダイヤモンド王国が攻めて来たぞオーツ!!」

突然上空から響き渡る魔法騎士の声。

空を見上げれば箒に乗って複数の魔法騎士が外壁に向かって飛んでおり、氣を探れば外壁の外に多数の氣配を感じる。フィオレナも異様に気付いたのか立ち上がり、

「ダイヤモンド王国、こんな時に……っ!」

魔法騎士大人数によって創られた魔法障壁も起動し、どう見たって訓練の類ではない。

キリヤはフィオレナを抱えればすぐに足を踏ん張り、

「様子を見る。飛ぶぞ」

「はいっ!」

非番だが緊急事態を見過ごすわけには行かない。

その場から跳んだキリヤはすぐさま外壁の上に到達すれば周りにいた魔法騎士も驚きを見せる。

「な、貴様！……ここで何をしている!？」

「へ碧の野薔薇の団員だから偶然だけど手助けに来た」

「この男……まさか新人でありながら破竹の勢いで三等上級魔法騎士になったあの——」

「そういうのいいから！ 一般市民避難させるとか色々あるだろ！」

見ればダイヤモンド王国の一部隊ともあつて二、三十人はいる。

中でも先頭にいる三人の魔力は周りに比べれば段違いでどう見たって只者ではないようだ。

「フィオレナ、あの三人に覚えはないか？」

「あれは……へ八輝将です。クローバー王国で言ったら魔法騎士団団長でスピード王国だったらへ七剣総統クラス、実力者であることは確かです」

「まずは雷魔法の将を狙え！ 撃てーっ！」

一人の魔法騎士の声を筆頭にあらゆる属性の魔法がへ八輝将の三人のうち一人に向けて放たれる。

しかし、へ八輝将それぞれに部下となる魔道士が複数人配備されており、その魔道士達が発生させた魔法障壁を貫くことは出来ずに防がれてしまう。

「何と弱々しく醜い魔法……いいか、魔法は——こうやって射つのだ」

「ノーム、オレ以外の連中と街を守れ！」

『御意』

雷創成魔法” 雷鳥戦騎・烈空魔弓の装”。

土精霊創成魔法” 網状敷の絶対防御壁”。

へ八輝将の一人から放たれた光速の矢は魔法騎士達が創り上げた魔法障壁を容易く貫くもすでに射撃点を見抜いていたノームが完全に防御。いくら速い魔法であれノームの防御は崩れず、キリヤは自らに飛んで来た雷の矢を片手で掴み取る。

「あれ、誰も撃ち抜けてませんか?？」

「貴様……っ！」



さぞかし自慢の魔法だったようだが氣と魔の動きを讀めるキリヤにとって速度はもはや誤差だ。

それにこれが最速で撃った魔法ならば今まで強者達と戦ってきた中で言えばへ八輝将へは大したことはない。敵の中で最も強いランキングはやはりサイルがダントツで一番だろう。

雷の矢から魔力を吸収すれば矢は消え去り、

「悪いけどあんたらに足止めされるほどオレは弱くねえ！」

淡々と事実を告げればキリヤは不敵に笑う――



るんです。いっつも真正面から猪みたいに突撃してくるんですよ」  
「なるほどね。で、オレはどうすればいい?」

「先輩は遊撃をお願いします。とか倒してくれても全然おっけいです。フレンドリーファイア喰らっても先輩の魔法だとむしろプラスですよ?」

「シンプルでいいな。とりあえず防御用にフィオレナ、オマエにノームを預ける。ノームもフィオレナのこと任せたぞ」

『首肯。我、幼子の相手は得意ぞ』

「ちよつと子ども扱いしないでくれます?!」

フィオレナの監視から少し離れるもノームがいれば安心だろう。

その場から飛び出せばへ八輝将へ向かって突撃するキリヤ。その隣に魔導書からウンディーネがひよつこりと顔を出す。

『ねね、だーりん! 今サキムー全員揃ってないしノームも今フィオレンのところにいるしジブリンは今回パスって言うてるからあーしの鎧使ってくれるよね!? ね!』

「はは、分かった分かった。力を貸してくれウンディーネ」

『がってん承知よーっ!!』

手を合わせ握ればすでに戦いで大氣中に満ちた魔マギによって身体進化魔法が発動する。

——身体進化魔法”レベル5・ウンディーネ・ナベルベ水恋精の情鎧”。

全身広大な海を示すような蒼で彩られ、珊瑚の如き桃色の装飾が各部を飾る。兜から伸びた鎧とは正反対の紅い髪の一束がより全身の蒼を引き立てていた。

「エツエツエ! 先ほどデカイ口を叩いてた餓鬼が一人で突撃してきよったわ!」

「その勇敢さだけは認めてやるが無謀だなアア!!」

『さあだーりん暴れて! 水つてのは何にも縛られない自由な属性なんだから何でも出来ちゃうし!』

「ああー!」

思い浮かべるだけで水が飛び出し、幾重にも螺旋を刻み道を創り出せばキリヤの身体は内側の激流と共に加速してへ八輝将の周りにい

る魔道士達に迫る。

その拳は水の魔力で形取られた鮫が大口を開け、逃げようにも鮫が喰らいつけば離さず次いでキリヤの拳が追撃で殴り飛ばす。そうせずとも道となった水がその激流をもって敵を飲み込み地面に叩きつける。

「オレ泳げなかったけどこれで弱点克服だな！」

『いいいいえーいっ！ もーっといっちやいましよーっ!!』

と、昂ぶる気分のまま次々とダイヤモンド王国の魔道士を倒していくキリヤ。

しかしその動きは突然水の中で止められてしまい、見れば水の中に何やら粘性の強い液体が混じってキリヤの動きを止めていた。

「エツエツエツエ……粘液魔法の味はいかがかな？」

「うわきったね！」

ただ纏わり付いただけではない。

粘液に触れた途端にキリヤの魔力が著しく弱め、鎧も強制解除されて地面に落ちてしまう。

キリヤの魔法の性質上粘液はすぐに魔力を吸収して水と変わらな  
いが――

『だーりん前から来てるっ！』

「がーっはははははははははは！ 行くぞ若造!!」

赭土創成魔法”大猪猛激進”。

赤い土で形成された大猪がへ八輝将の一人を乗せキリヤへと突撃し、真正面からその衝撃を受ける。

足を踏ん張るもその勢いに押され外壁を突破してしまい、ブロッコ  
スも高らかに笑う。

「ダイヤモンド王国万歳っ!! いくら精霊を使役しようとも魔力を  
奪われればその程度よ!!」

「よく見ろよおっさん!!」

直撃を受けはしたが獣道の先キリヤは立って持ちこたえていた。

逃げる人々を守り、魔力が奪われようとも筋力だけでキリヤは相手  
の魔法から魔力を吸収しつつ持ち上げる。

「だあらっしやああああああ——ッ!!」

「ぬおっ!!」

そのまま力任せに投げようとした途端、嵐の如く吹き荒ぶ風がへ八輝将<ごと猪を破壊し吹き飛ばす。

——風魔法“暴嵐の牙”。

新手かと思ひ振り向けばそこにいたのは——

「ユノっ!? 何でここに!?!」

「……仕事」

「そりやそつか!」

立っていたのはアスタの友人でへ金色の夜明け<に属するユノ。

元々才能があるタイプだと思っていたが今の一撃で分かる。初めて会った時とは比べ物にならないほど強くなっているようだ。

キリヤを見るなりユノは極めて淡々と言う。

「苦戦してるから手を貸した」

「いやいや苦戦はしてないって。今から楽勝だったんだけど!」

「無理するな」

「はあーこの野郎! ちょっと強くなったからってこのこの!」

「おいやめろ。オレはそんなキャラじゃない」

『ごらーっ! ユノをイジメないでよーっ!』

澄ました顔のユノの横腹をつつついて茶化すと唐突に現れたのはユノの顔ほどの身長をした精霊だった。

身に纏う魔力からして風、そしてその魔力の純粋性はノームやウンディーネと同じよう——

「ユノも精霊と契約してたのか!」

「……ああ」

『無視するなーっ! 四大精霊なんだぞ私はーっ!』

「うるさいけど一応」

『一応って何なのよーっ!』

『何だかピーチクパーチクうるさいのがいるって思ったたらシルフじゃん! 相変わらずちっさー!』

『げ、ウンディーネ!! あんた何でこんなところにいるのよ! てか

ちっさいって何よ!」

四大精霊は意外と仲が悪いのか、すぐさま喧嘩を始めてしまうウンディーネとシルフ。

キリヤは額に手を当て、

「……何かごめんな」

「……こっちこそ」

普段絶対に謝ることをしなさそうなユノが謝罪するほどのうるささ。

別に騒がしいことは悪いことではないが今はそれどころではない。が、市民達は〈金色の夜明け〉の援軍に恐怖よりも高揚が勝っているのか声を上げる。

「〈金色の夜明け〉が……最強の騎士団が来てくれたぞオオオ!!」

「うわスゲー人気」

他の団員やヴァンジャンスの気配、魔を感じるために求めていた援軍は来たようだ。

フィオレナもそれを察して迎撃態勢は取りつつも市民の避難にも魔道士を割くも迎撃を潜り抜けて外壁の穴から〈八輝将〉が侵入し、〈八輝将〉の一人ともあろう者が美しくない……下がれブロッコス」

「ぬ、ラガス! 吾輩の邪魔をする気か!」

「邪魔ではない。任務を全うしているだけだ」

雷魔法の〈八輝将〉——ラガスは雷創成魔法で創られた雷鳥に乗ったまま雷の弓を構え、その弓にはいくつもの矢が番えられている。今にも放たれそうな一撃に対しキリヤはユノに視線を向け、

「防ごうか?」

「いや、自分で出来る——ベル」

『ホイきたーっ!』

ウンディーネと喧嘩していたシルフ——ベルは呼ばれるとユノの傍らに戻り、ユノもまたラガスと同様に風属性の魔力で創られた弓を構える。

風魔法”疾風の白弓”。

ベルが息を吹きかければ通常よりも遥かに威力が上がり、雷の矢と

衝突しても貫通。相手が張った魔法障壁すら貫いてラガスの周りにいる魔道士達を撃つ。

「将を名乗るぐらいなら仲間を護つてみせろ……っ！」

「ガハハ！ 身体も温まってきた頃だ！ 吾輩も加勢してやる！」

「相手はちょうど二人、ぶつちやけオレ一人で充分だけどどつちがイイ？」

「どつちでもいい。早い者勝ちで」

「イイなシンプルで。あ、恨みっこなしな」

「そつちこそ」

にしし、と笑えばキリヤも再びレベル5・ウンディーナレベル6「水恋精の情鎧」を纏う。

赭土を纏い巨大化したブロツコス、ラガスは雷鳥に乗ったまま空を飛ばたきユノも風の鳥に乗ってその後を追う。

「貴様がどの程度の強さか吾輩が見極めてやろう!!」

「いらねえ世話だな！」

しなる水の道に飛び込めばブロツコスの視界を攪乱し、一瞬でも視界をキリヤから外せば水の道から飛び出した鯨がブロツコスに喰らいつき、鯨に意識が向けばキリヤ自身が直接殴り飛ばす。

「小賢しい真似を……っ！」

怯み片膝をついたブロツコスに肉薄するキリヤ。

その手には直径十センチほどの球状の水があり、それをブロツコスの腹部へ押し付ける。

「炸裂しろ!!」

水精霊魔法アクアブツンユメツツ“炸裂炭酸玉”。

押し付けた球状の水がブロツコスの腹部で泡立ち炸裂。もはや火属性と言っても過言ではないほど爆発し、ブロツコスの身体は大きく弾き飛ばされる。

「おとなしく撤退した方がいいぞ。オレに勝てないようじゃヴァンジャンス団長にも勝てねえだろ」

「ダイヤモンド王国に撤退の二文字などないわアアア!!」

雄叫びを上げ、尚も潰えぬ戦意。

だがそんな戦意はすぐさま現実に押し潰される――

「樹は熟した——今大樹が芽吹く」

ヴァンジャンスの滅茶苦茶な魔力によって形成された大樹の根や枝が周囲にいたダイヤモンド王国の魔道士を捕まえ樹の一部にして成長を繰り返す。

世界樹魔法”ミストルテインの大樹”。

あまりにも巨大な大樹は新たなシンボルかのように荘厳でキリヤも感心の声を上げる。反対に〈八輝将〉は絶句しているようだが。

「わ、吾輩の軍がほぼ壊滅だと……っ!?!」

「残念。あともうちよいで全滅だよ」

拳を地面に叩きつけければ間欠泉の如くブロッコスの足下から水が噴出。その勢いにブロッコスが纏っていた赭土は引き剥がされ、勢いのまま空へと打ち出される。

丁度時と同じくしてユノとラガスは空中戦を繰り広げており、そこにブロッコスが打ち上げられラガスの雷鳥と激突し、大きくバランスを崩す。

「何だかんだ言って決めるのは同じタイミングだな!」

「……みたいだな」

声音からあまり感情の機微を感じないものやや悔しそうなユノ。

だが今は戦闘の最中、ユノ自身も割り切って考えており、キリヤが片脚に水で創成した輪をいくつも出せばその身体をベルの力を使つた風で一気に押し出す。

——精霊複合魔法”轟風刃の激流槍”。

水の道を回転する輪と風の推進力を経て最大級に加速したキリヤの蹴りはラガスとブロッコスを捉え、衝撃の瞬間に魔力の放出も加えこれでもかと威力を底上げする。

いくつもの建築物を貫き静止したブロッコスとラガスだが完全に意識を断ち切られ起き上がることはない。

「よおしオレ達の勝ち! ほらユノ」

「……………」

キリヤが拳を向ければユノも仕方ないといった様子で拳を合わせ、キリヤは笑う。



複合魔法は初めてだったが上手く行き、何だかんだウンディーネとベルの相性も良——

『やっぱり割合で言ったらあーしら7であっちが2くらいじゃない？』

『何言ってるのよ！ こっちが7よ！ ってこっちが2だったらあとの1誰の活躍!?!』

『あーしら?..』

『だったら8じゃないの!! 本当はこっちが8だけど!!』

訂正、やっぱり駄目なようだった——

## 50話 「女の因縁」

「貴様らの実力はそんなものかア!!」

メレオレオナ発案による“遊び”が始まって数分、シイナ達は劣勢を強いられていた。

シャーロットの動きに合わせてシイナとソルが援護しているもそもそも属性的に荊魔法のシャーロットと炎魔法のメレオレオナでは相性があまりにも悪い。

(やはりメレオレオナ様はめちやくちやです……っ！)

数多蠢く荊も真正面から炎で燃やし、その光源を利用し影魔法を伸ばしたところで野生の反射神経を持つメレオレオナは見ずに空中へ飛び出して躲す。

怪獣、そんなイメージすら湧くともない動きでソルが生み出すゴーレムも対応出来ず、このままではジリ貧も良いところだ。

(だったら——)

影魔法”シャドードール影人形”。

メレオレオナ本人の影に魔力を送ってメレオレオナの影に実体を与える。影とは本体と表裏一体の存在、すなわち今のメレオレオナと同じ実力を持つ——

「次だア!!」

通じる通じないを考える以前にメレオレオナの一撃で影人形が吹き飛ばされてしまう。

「嘘……」

「所詮は影だ。私が私に負けるはずがないだろう」

もう言っていることがよく分からない。ついでにやっていることも。

シイナは一度下がるとシャーロットの傍に行き、

「(団長、私が何とかメレオレオナ様の動きを抑えます。そのうちに私ごと攻撃してください)」

「しかしそれでは……」

「(大丈夫です。最近便利な魔法覚えたんで!)」

「……分かった」

シャーロットも領けばシイナの身体から影の如き魔力が揺らめき覆う。

影創成魔法”影重カゲノエノアマゴロモノ天衣”。

“ダツコウバ”の一件で習得した魔法であり、真正面からメレオレオナに向かつて駆け出す。

「ほう」

突撃するシイナに対しある種感嘆の声を上げたメレオレオナは炎を纏った拳を振るう。

炎魔法”灼熱腕”。

今までの魔法全てを燃やし尽くしたメレオレオナの魔法は拳ごとシイナの身体を貫通し炎を上げる。

「シイナ！」

「平気ですー！」

ソルが声を上げるもシイナ自身にダメージはない。

確かに腹部は貫かれているも”影重カゲノエノアマゴロモノ天衣”を纏ったシイナは実体があるようでない不可思議な状態となっている。

現にメレオレオナの拳は効かず、しかしメレオレオナの腕は捕まえる。腹部に違和感を覚えるも構わずシイナは影で地面に根を張り、

”底ボトムレス・シヤドウンなし影大沼”!!」

メレオレオナの身体ごと自分を影の中に沈めて動きを止める。

あの巨体を持つグランドドラゴンでさえ沈めた技。あの時はかなり範囲を広めてさえ沈められたのだからただ一人の人間サイズで絞ればその拘束力は言わずもがなだ。

「なるほど。自分の身ごと撃たせるつもりか」

気付いたところで遅い。

シャーロットの荊とソルのゴーレムがシイナごと打つつもりで迫り、この距離ではどうしようも——

「この程度どうにも出来んと思ったか？」

途端、メレオレオナの全身から魔力が爆発的に放出される。

そのため圧倒的な光量を受けた場に影の存在は許されず、シイナは

後方へ飛ばされ同時に荊もゴーレムも弾き飛ばされる。

だがシャーロットはそれを見越していたのかさらに地面から一条の荊を伸ばし、爆発し終えたメレオレオナの顔を狙う。

「——ッ！」

それでも反応するのがメレオレオナだ。

一步退いて荊を躲し、拳を構えるもシイナはその瞬間を逃さない。

荊が伸び、メレオレオナの身体に荊の影が出来たということは——

(影魔法で捉えられる——っ！)

荊の影を切り離し、躲した先でさらに影の荊で追撃する。

それでもメレオレオナは反応してくる。首を捻って荊の影を躲し、炎によって荊本体を崩す。そうして影は途切れ、シイナの操作範囲外となってしまう。

「これでどうだ——ッ!!」

「不意を打つ時に喋る者がいるか莫迦者が」

土創成魔法” 暴れ地母神”。

カリドゥス・ブラキウム

ゴーレムの拳が届く暇もなく” 灼熱腕” の連打で崩されてしまい、落ちたソルにメレオレオナの拳骨が炸裂する。

「だいつダああ——っ!!」

「戦い方が雑過ぎだ」

次いでシャーロットもシイナも拳骨を喰らう。

「容易く燃やされるな。貴様がその気になれば属性相性など崩せる」

「は、はい……精進します……」

「貴様は前よりかマシになったがまだまだだ。光すらも飲み込めるようになれ」

(め、めちやくちやな……)

と思いつつも頷くシイナ。

いつの間にか修行を受けていたようになっていいるもこれまでの”遊び”ではつきりと分かってしまった。

——これ無理だ、と。

団長と合わせて不意討ちに不意討ちを重ねたところで反応され、正面きって戦えば正面から叩き伏せられる。

最強の女性魔道士の名は伊達ではなく、これではキリヤの誕生日パーティーも――

『シイナ、少し私と変わりなさい』

「え――」

精霊魔弾創成魔法”ワープレスバースト 転移無方弾”。

シイナの意識が途切れた瞬間、シャーロットとソルの姿がこの場から消える。

その光景にメレオレオナも多少驚いたようだが変化したシイナの姿に笑みを浮かべ、

「その魔法……なるほどな。貴様が莫迦弟子が言っていた魔弾の使い手か」

「ええ、あの二人は遠くへ飛ばしたから当分はここには来ない。私個人としても貴様に話がある」

「奇遇だな。だが私は話などよりもコツチだな」

拳に魔力を灯し、轟々と炎を滾らせるメレオレオナ。

対してシイナ――いやサイルも魔導書から取り出した銃を構え、

「奇遇ね。私も話じゃなくてこつちだったわ」

二人の戦意はとんでもない魔力量の放出となつてぶつかり合い、空間に歪みすら生み出す――

○

炎魔法”カリドゥス・ブラキウム 灼熱腕”。

魔弾創成魔法”アクアバレッツバースト 激流驟雨弾”。

炎の連撃、水の弾雨、数多もの魔法がぶつかり合えばあたり一面に衝撃で水蒸気が噴き出す。

弱点属性でありながら容易く相性を覆しながら迫るメレオレオナ。放たれた拳を躲せば追撃で背後から迫る炎の一撃にサイルは踵の銃を撃ちその反動で跳んで躲す。

(マナゾーン……なるほど。キリヤが地底帝国で見せたのはこの女の影響ね)

クローバー王国の人間には不可能だと思われていたがどうにも出来る者がいたようだ。

あたりの魔を掌握し、全方位への魔法攻撃を可能とするマナゾーン——だが、それは一方的に支配していた場合でありこちら側も使えるとなれば話は変わる。

「ツ！」

魔弾創成魔法” 乱反射光明弾”  
ミラーバウンドバースト

放たれた光の魔弾はメレオレオナの周りで乱反射、そして反射する度に速度を上げると共に分裂してその数を増やす。

「ほう、あの莫迦弟子を負かしたとだけあってやるようだな」

拳を振るい” 灼熱腕” を連発して光すら燃やし尽くすメレオレオナ。

マナゾーンの使い手同士がぶつかれば必然的にどちらが大気中の魔を掌握するか、それこそが勝敗を分ける。

「次はどうする?」

(人間にしてはやるわね……)

混じり気のない純粹な強さ。

流石俗世から離れ一年のほとんどを森で暮らしていたともあり魔の扱いが上手い。

接近戦を繰り広げながらサイルは時計に目を向ける。

(ここから拠点まで戻るには一時間ほどかかる……そろそろ決めないとキリヤが拠点に戻る時間になってしまう)

個人的な恨みはあるも今回はキリヤのためにメレオレオナを拠点へ送る、それが目的だ。

ならば四の五の言っではいられず、

「クロノス!!」

「ツ！」

魔導書から現れた時間の精霊クロノスによる時間停止。

魔力消費は激しいが半球状の範囲内の時間を止め、サイルのみが動くことを許された世界とする。攻撃する際には時間停止を解除しなければならぬが躲せる者などいるはずもない。

しかし、

「この状況でも反応していたなんて、化物のレベルね……」

見れば時間が停まる瞬間、メレオレオナはすでに後方へ跳んでいた。

あと数センチのところまで範囲外に出られており、そうなればさらなる苦戦を強いられるだろう。

だが今回は――

(私の方が一手上だったわねッ!!)

「魔弾創成魔法」ゼルファーバースト 迫撃墮落弾”。

時間停止解除と同時に魔導書から迫撃砲を顕現し、メレオレオナの腹部に向かつてほぼ零距离からの一撃。

その衝撃はサイルも後方へ飛ばすほどでその直撃を受けたメレオレオナはさらに遙か後方へと飛ばされる。

ただその靴裏は地面から離れず、やがて制止すれば魔弾は腹部に直撃していながらも両腕で挟み込むようにして受け止めており、もはや人間ではない反射レベルにサイルも鼻で笑ってしまう。

「どうした、まだ戦いは終わってないぞ。早くかかってこいッ!」

「いいえ、終わりよ」

「……何だと?」

すっかり高揚してしまっているのかサイルの言葉に尚も炎を巻き上げるメレオレオナ。

キリヤの一つのことに集中すれば他のことを忘れてしまうのは師匠譲りか、などと思いつながらサイルは息を吐く。

「一発当てたらこちらの勝ち、今回は”遊び”なんでしょ?」

その言葉にメレオレオナの闘志が薄れ、魔法も止む。

「……ふ、なるほどな。最初からそれが狙いだったのか」

「私はもうへ白夜の魔眼じゃない。アルーグの……いえ、キリヤの味方よ。だからリスクを背負ってでも表に出てあなたと戦った――シイナの代わりに」

「それだけじゃない気迫だったかな」

「当然。あなたの言葉がキリヤを追い詰め暴走させたことは事実なのだから」

あの時、もしサイルがいなければキリヤは死ぬまで暴れ続けていた

だろう。

その原因となる強くならなければならぬと強迫観念を抱かせたメレオレオナにずっと憤りを感じていた。だが同時にサイルは分かっていた。

「あの子の中にもう私はいない——だけどあなただけのはあの子を見捨てないであげて欲しい。キリヤにとってあなたが生きる意味なのだから」

「……そんなことは貴様に言われずとも分かっている」

戦意はなくなり、メレオレオナは手近な岩へと腰を下ろす。

「キリヤは私と出会ってから真っ直ぐに育った、愚直なまでに。アイツは私の手から離れ、思っていた以上に成長している。自らどう進むかを考え、そのために何をすれば良いか分かっている。師としての役目は終わりだと言って良い」

「それが誕生日会に出ることを決めた理由……？」

「すでに独り立ち出来たアイツにとって私はもう不要の存在だ。私は恐らくアイツが死ぬまで傍にいてやることは出来ない。だからこそ他の若い女でも見つけろとでも思っていた——」

だが、とメレオレオナは言葉を区切り、

「必要か不必要か、そんな損得勘定をあの莫迦は持ち合わせていないことなど私もよく知っているはずだった。だが私自身が忘れかけていたようだ。それにシャーロット達が出来たということは分かりやすくあの莫迦が凹んだのだろう。……全く手間のかかる糞莫迦弟子だ」「そう言う割には嬉しそうね」

「そんな風に見えたならそう思っておけ。場所は〈碧の野薔薇〉の拠点で良いのか？」

「ええ、シイナがそう言っているのを聞いたわ」

そうか、と言ってメレオレオナは立ち上がり歩き始める。

普段どうか知らないためにはつきりしていないがその足取りは軽そうに見える、

「少しはキリヤの素直さを見習ったら？」

「逆だ。あの莫迦はもう少し隠すことを覚えねばならん」



それもそうね、とサイルもどこか嬉しそうに笑い、そしてシイナへ  
身体の主導権を戻すのだった――

## 51話 「ハッピーバースデー」

「よっアスタ！ オマエも来てたのか！」

「おう……お？ だ、誰だ……？」

「あ、鎧着てるから分からなかったか」

あれから途中からやってきた〈黒の暴牛〉アスタ達の活躍もあつて三人目の〈八輝将〉を捕らえることに成功し、キテン戦役は見事にクローバー王国魔法騎士の勝利となった。

アスタ達に手を挙げながら挨拶するキリヤだが鎧姿はアスタにとって初見だったようで解除する。

「キリヤだったか！ 何だそのカツケエ鎧！」

「これがオレの身体進化魔法さ！ んで新しい友達のウンディーネ」

『どーもー！ だーりんのトモダチ兼精霊カノジヨのウンディーネでーすっ！』

「何かめちやくちや騒がしいやつだなー」

『元気が取り得なのよ！ ってあんたも随分ファンキーな怪我負ってるわね……』

アスタを見れば両腕にギプスを嵌めていて明らかに重傷だ。この状態でよく戦場に來たとさえ言える。

ただそれを見ていつも無表情に近いユノは笑い、

「オマエがそれだけボロボロになってるってことはまた更に強くなっただんだな——負けないぜアスタ」

「オレだって負けねーぞユノ！」

互いにライバルを公言しているだけあつて認め合っている二人。

と、ウンディーネがアスタの腕を見て気になったのかそろそろと近づき、

『男同士イチャついているところごめんだけどー』

「いやイチャついてないけど!？」

『まーまー置いといて。ちよつち腕見せて。だーりんのトモダチみただからついでに治してあげる』

「え、マジで!？」

『まじまじく。水の四大精霊ナメとつたらいかんぜよ〜』

精霊水回復魔法<sup>ウンディーネケアル</sup> 水精ノ泡衣<sup>〃</sup>。

ウンディーネの指が触手のように蠢き、包帯越しでアスタの折れた両腕に触れる。

『あーなるほどね……これ呪いがかかっているから余計に重傷化してるからで……あー、カンタンな重傷だったら治せるんだけど呪いか……どうやって解呪するんだっけこれ。何せ超古いやつだから……』

何やら不穏な雰囲気。

やがてウンディーネは魔法をやめて腕を組むと、

『一旦この国の医者に診て貰いなっ！ あーしちよつと久しぶりすぎて回復魔法のやり方忘れちった！』

「ええ!? さつきまでの思わせ振りの台詞は何だったの!?!」

『あーしても調子悪い時あるしー。ねーだーりん!』

「流石にわからねえけど!」

「せんぱくいつ! 街の復興とか被害者の治療の手配とか色々終わりましたー。疲れたんで帰りましょー」

「ん、ああ。お疲れファイオレナ」

新人魔法騎士だというのにすっかり仕事を押し付けてしまったファイオレナが疲れた様子……には見えない元気な声のまま抱きついてくる。

付き添っていたノームも一礼の後に魔導書に戻り、周りを見れば壊されていた建築物も見事に元通りとなっていた。ノームの魔法で修復したのでろう。

「ノームもお疲れ」

「あれ、そんな子いたっけ? 前会ったのは黒髪の女の子だったけど」

「ああ、これオレの後輩。何だかんだかくしかじかあって魔法騎士になったファイオレナだ」

「うおおお! オレがバカ過ぎてキリヤが何説明してつかわかんなかった!」

「何も説明してないけどな」

「じゃ、後輩も疲れてることだしオレら帰るわ。また会えたら会おう

ぜ」

「おう！　じゃあな！」

アスタ達に別れを告げればアスタ、ユノ、キリヤはそれぞれ別方向に踵を返して歩いていく――

◎

「報告します。ダイヤモンド王国のへ八輝将へ三人含めた部隊がクローバー王国のキテンを襲撃。しかしクローバー王国の返り討ちにあつたようです」

スピード王国城内会議室。

そこに集められたへ七剣総統へ五人の前に部下が跪く。

「戦力は魔法騎士であるへ金色の夜明けへ、風の四大精霊シルフの使い手に土の四大精霊ノーム、水の四大精霊ウンディーネの使い手も。さらにその使い手は精霊を鎧として身に纏う魔法のようです。そして……《七鞭》フィオレナ様の姿もありました……」

少年の声に言いにくそうに返す部下。

刹那、それまで黙っていたへ七剣総統へ達から威圧的な雰囲気がある場を支配する。

裏切ったわけではない部下の喉が干上がるほどで震え、そんな部下を尻目に一人の少年が息を吐く。

「まさかあれだけ忠誠心を植えつけられていながら裏切るなんて」

「彼女はこの国を嫌っていましたから去る可能性はありました。仕方のないことです」

「……ゼネルラ様」

少年――《四拳》ステイクが目を向けた先、そこにへ七剣総統への頂点たる女性がいた。

白銀の髪を腰ほどにまで伸ばし、端正な顔立ち。その身を包む髪と正反対な漆黒の鎧。携えているのはこのスピード王国の至宝とも称される剣だった。

スピード王国一の強さを持つ女性――《一剣》ゼネルラ。

憧れて止まない存在にステイクはすぐさま頭をゼネルラに向けて垂れ、

「ゼネルラ様、是非この僕に裏切り者の始末をお申し付け下さい。すぐにも殺してこの場に首を差し出してみせましょう！」

「その必要はありません。確かに単騎行動に向いていた《六斧》、優れた指揮能力の《七鞭》を失ったのは手痛いものですが誤差の範疇。今はダイヤモンド王国を攻め落とし我が領土の拡張を行うのが先です」「では例の拠点製作を開始するということですか」

「その通りです。《二槍》と《四拳》は魔女の森へ。《三矢》と《五扇》は竜穴へ。それぞれ軍を率いて攻め落とし、ダイヤモンド王国侵攻への準備を」

「はっ！」

（必ず成果を挙げゼネルラ様へ捧げる……如何なる者が邪魔しようが僕の拳で打ち砕く！）

惚れて憧れた人間へ少しでも近付くために。

そして超えた先の約束を果たすために。

ステイクは拳を握り締め、やる気と共に魔力を滾らせる。

◎

「先輩もうすぐですよー」

「何で帰るだけなのにオレ目隠しされてんだ……？」

「いいからいいから早く行きましょー」

《碧の野薔薇》の拠点に帰る最中、キリヤは何故か目隠しをされた状態で運ばれていた。

目隠しされているも大気中の魔マナや氣を感知すれば目で見ていなくとも瞼を開けている時と大差ない状態で動くことが出来る。

（ん、やけに人がいるな……）

拠点内の氣を感知すればやたら人がいるようでフィオレナが扉を開けてもとても静かなものだった。

いつもの女性達の話し声の一つもせず、不思議に思うも目隠しを外される。

「それでは目を開けてください先輩！」

「ん……」

言われるがまま目を開ければ――

『お誕生日おめでどうキリヤっ!!』

一斉にクラッカーの音が鳴り響き、皆の声が一斉に響き渡る。

見れば〈碧の野薔薇〉の団員のほとんどがキリヤの誕生日を祝福し、シャーロットもまたその場においてソルに促されるままクラッカーを鳴らしていた。

「みんな……」

「どうだ驚いたか!? べ、別に私はしなくていいって思ったけどシエナがどうしてもって言うから——」

「もうソルちゃんつてば無粋よ! みんなでお祝いしましょーって話だったじゃない!」

「とりあえずキリヤさんお誕生日おめでどうございます! ケーキもありますよ!」

と、出てきたのは何段重ねにもされた巨大なケーキ。

キャンドルが丁寧に挿されており、見ればキリヤの年齢と同じ数が灯っていた。

『ささ、消しテグ主人!』

「おう!」

サキム二達に肩車されてケーキ上まで上回れば息を吹きかけてキャンドルの灯火を消す。

すると拠点内で大きな拍手が巻き起こり、今度は次々と料理が運ばれてくる。

「さあ食べましょう騒ぎましょう! 今日の主演はパンチボーイなんだからハイこれ!」

プーリから手渡されたのは『今日の主役ダヨ!』と書かれた襷。

それを肩から下げれば続々と団員達がやってきて、

「はいこれプレゼント!」

「ありがとな!」

何が入っているかは分からないが沢山の丁寧な包装が成された小包みを渡され、シャーロットもやってきてキリヤに一つの兜を差し出す。

「入団したての頃に散々盗られたからな。これを機にひとつやろう」

「本当ですか！　ありがとうございます！　でも壊さないために部屋に飾るとききます！」

「匂いを嗅ぐのはやめろ！」

被っていたものをくれたのか匂いを嗅げばしっかりと薔薇の香りがして小突かれるもキリヤは笑う。

それからプレゼントは山盛りになるほど渡され、最後に――

「これは我がヴァーミリオン家に伝わる家宝の一つだ。受け取れ」

「え、そんな大事なものを貰っちゃってイイんです……か」

紅い宝玉が埋め込まれた腕輪を渡され、その顔を見上げればキリヤは言葉を奪われる。

何故ならそこにいたのは絶対にいるはずもないはずなのに――

「やっぱキリヤさんが喜ぶと言えばこの方だと思っただので」

「仕方ないから渋々来てやったぞ――糞莫迦弟子が」

「レオナ様っ!!」

そこに立っていたのは間違いなくメレオレオナだった。

あまりの嬉しさに突撃して勢い良くメレオレオナに抱きつく。

「泣くな莫迦者。祝われる者がそんな顔をしてどうする」

「やぎじいいいい……いづもなら絶対拳骨なのにい……」

この日ばかりは本当に優しく抱きしめられ余計に涙腺が崩壊してしまう。

祝われないとばかり思っていたためにこうして来られるとあらゆる感情が爆発してしまつて頭まで撫でられてしまえばもうパニックだ。

「あと礼を言うならばシイナ達にしろ。わざわざ私を呼びに来たんだからな」

「ありがとうシイナ！」

「わ、わわっ！　べ、別に私が何か出来たというわけでは――」

メレオレオナから離れれば今度はシイナとハグし、そうすると魔導書からウンディーネが飛び出す。

『あーずるいずるい！　あーし特に何の準備もしてないけどハグしよだーりん!』

「おう！」

やけに心地良いひんやりとした身体のウンディーネも抱きついてくるので抱きしめ返し、そうしているとウンディーネを見たメレオレオナが「ほう」と感嘆の声を上げる。

「あれは水の四大精霊ウンディーネ……そんな者も引き入れたのか」「ええ、何かと好かれるようで。本人はどれほどの偉業なのか知る由もないでしょうが」

「こうなったら一人ずつパンチボーイと熱いハグをしましょーっ！」

「賛成さんせーいっ！」

次々と女性団員達がキリヤをハグしていき、ジブラウストやサキムニに胴上げされたりして〈碧の野薔薇〉は開設以降初かもしれないほど騒ぎ、時間はあつという間に過ぎていく。

「みんなありがとう！ 今日は一生涯の思い出になるよ！」

「大袈裟だな！」

「レオナ様も来てくれてありがとうございます！ 大好きっす！」

「そんな歯の浮くような台詞は修行時に聞き飽きた。次に進みたいばさっさと私に『参った』と言わせるんだな」

「頑張りまーすっ！」

嬉しそうにキリヤは笑って夜は明けていくのだった――



## 第8章く魔女の森編く

### 52話「トモダチのために出来ること」

『だーりん起きてー朝よー』

「……ん、ああ。もう朝かー……」

誕生日会の翌日。

身体を揺さぶられ目覚めればキリヤの目の前にはウンディーネが小さな水球を二つ掌に乗せていた。

『はーい、朝の準備ねー』

一つは洗顔、一つは歯磨きとして水球は使用され、目覚めて数秒で完全覚醒だ。契約してからと言うもののウンディーネは何かと甲斐甲斐しく世話をしてくれて人として駄目になってきている気がする。

ともあれ時計を見ればいつもよりも早く、キリヤは首を傾げる。

「何か早いけどどうした?」

『いやー昨日ちよつち言いそびれたことがあっちゃってさ……言うに言えなくて』

「……?」

『あの両腕骨折のおチビちゃんの話なんだけど』

「アスタのことか。でもあの傷は治るんだろ?」

キリヤの問いにウンディーネは嘘を吐けないのか難しい表情を浮かべる。

やがて言葉を選ぶようしながら静かに言い始める。

『あのおチビちゃんの腕はただの骨折じゃないの。むーつかしの呪術って呪いが含まれてて、治すには解呪してからじゃないと治せないの』

「……つうことはアスタの腕は——」

『クローバー王国の医者レベルは知らないけど多分このままだとおチビちゃんの腕は一生使えない』

「そんな……」

魔力がないアスタだからこそ振るうことが出来る反魔法の剣。

だが腕が使えなくなればそれを振るうことすら出来ず、もうアスタには何も残らない。

そうなればアスタの夢は――

「どうにかならないのか……?」

『あーしも解呪魔法使えるけどちよつちやり方思い出せなくて時間がかかりそうだし……』

「皆何か知らないか?」

『不明。役に立てず申し訳ない』

『ごめんわかんないヤ……』

『オデも』

「いや大丈夫だ。何か他に手があるはずだ」

きつとアスタの腕のことはへ黒の暴牛にも伝わっているはず。

ならば彼らも何かしら動いているだろう。キリヤに出来ることはないかもしれないが無い頭を振り絞って思考を巡らせる。

サイルなら何か知っているか、いや彼女にこの場で頼ることは出来ない。下手な接触をすればシィナ自身にも危険が及ぶ可能性ぐらいキリヤでも知っている。

どうするべきか。

今までの人脈、たった一度でも会った者、普通とは違う者――

「あ……」

もしかしたら、とたった一つだけ浮かんだ可能性があった。

あの時、キリヤ自身あまり気にしていなかったが一人だけ人間とは違う氣だった。可能性にしてはかなり低いが――

「聞いてみる価値はあるよな……」

◎

「あのー朝早くからすみませーん」

あれからキリヤが記憶頼りにやってきたのは一つの店の前だった。扉を何度かノックすればドアノブが開き、そこから顔を覗かせたのは一人の女性。

「なあにいーこんな時間から……ってあれ、あなたこの前ヤミさんと来た男の子?」

そう。キリヤがやってきたのはヤミに連れられて一度来たキャバクラだった。

女性はキリヤの顔を覚えてくれていたようで不思議に首を傾げ、「どうしたのこんな時間から？　ウチはお昼からも一応営業してるけどちよつと早いよっ。」

「今日来たのはお客としてじゃなくて、あの、淡い蒼色の髪したお姉さんいませんか？」

「ああ、トウルーちゃん？　まあとりあえず入って。中にいるから」「ありがとうございます！」

頭を下げ、店内に入れてもらえばまだ準備中なのか椅子の多くがテーブルに上げられていた。

その中でキリヤはソファ席に案内され、ジュースまで出されてしまう。

「すみません急に来て気を遣わせて……あとこの前はすみませんでした。オレの仲間がいきなり乗り込んじやって」

「いいのよいいのよ。でもヤミちゃんはいつか本当に逮捕されちゃいそうだけど」

笑って女性は控え室らしき場所に視線を向け、

「トウルーちゃん！　この前の可愛い坊やが来てるよーっ！」

「え、ホントホントーっ!?　すぐ行く行くーっ！」

名前を呼ばれば控え室から飛び出したのは淡い蒼色の髪をした女性——トウルー。

相変わらず胸も大きく如何にもお姉さんといった顔立ちでこれが大人の色気というものだろう。

キリヤを見るなりトウルーは軽い足取りで近付いて隣に座ると抱き寄せて頭を撫でてくる。

「どうしたのーボクチャン。またお姉さんに会いたくなっちゃった？」

「簡単に言ったらそうなんです」

「キヤー！　キタコレ！」

「力を貸して欲しくて！」

「……へ？」

期待した展開とは違ったのかトウルルは怪訝そうに首を傾げる。

困惑気味のトウルルの手を握り、キリヤはその目を見つめ、

「お姉さん人間じゃなくて——精霊ですよね？」

「……アハハ、精霊みたいに可愛いつてこと？　もうボクチャンつてば褒め上手う！」

「茶化するのなし！　オレってば人間の氣とか魔マとか読めるので人間と精霊の区別がつくんです！　それで前より読むの上達したんで今からはつきり言えるっス！　それにウチのサキムニつて精霊も魔法で女の子に変身出来るので！」

力説すれば圧されたトウルルは一瞬戸惑う素振りを見せるもやがて決心がついたのか、一度息を吐く。

「ボクチャン大正解。確かにワタシはケット・シーっていう精霊だよん。それでボクチャンはケット・シーなワタシに何のご用なのかな？」

「——トモダチを助けたいんだ。古代の呪術魔法……つてやつで両腕が治せなくて。その両腕を治してやりたいんだ！」

「うーん、あるっちゃあるけど……」

「あるの!？」

「でもねーその、ねえ？」

「お願いします!!　オレが出来ることなら何でもする！　だから教えてくれ!!」

トウルルの手を握り、ソファの上で押し倒す形で顔を近付けるキリヤ。

あまりの勢いに先ほどまで主導権を握っていたはずのトウルルも驚き、勢いに圧されて話し出す。

「あのね、ボクチャン。魔女って知ってる？」

「魔女……？」

「魔女っていうのは普通の魔道士よりも呪術とか使い魔とかトクベツな魔法に長けた女魔道士のことなの。そんでその中でも多分魔女の王様——魔女王なら解呪の方法知ってるんじゃないかな」

「じゃあその魔王にあって治して貰えばいいのか！」

「でも魔王の森は強魔地帯だけどボクチャン大丈夫？」

「強魔地帯はレオナ様と行き慣れてるんで大丈夫！　というかオレ強いから！」

親指を立てるとトゥルーは少し考え、やがて頷く。

「やっぱり道案内は必要だしワタシも行くしかないか！　でも何かあったらボクチャン守ってくれる？」

「ああ！　オレの手の届く範囲にいれば必ず守るさ！」

小指を差し出してきたトゥルーにキリヤも合わせて差し出し指切り。

「あ、そうだ！　フィオレナのこと忘れてた！」

監視しなければならぬのにすっかり忘れていた後輩のことを思い出し、まずは呼びに行くことに――

◎

「あ、あの先輩？　どうしてこんなところにアタシ呼ばれてるんですか？」

寝ていたところを叩き起こされ急ピッチで準備させられたフィオレナは魔導具の“飛ぶ絨毯くん”に座りながら眠たそうにしていた。

「仕方ないだろ。オマエはオレが監視しなきゃいけねえから必然的にオレの行動に合わせてもらうし」

「それは分かってますけど……どこに向かっているんですか？」

「魔王の森」

「何で!？」

全く状況を察することの出来ないフィオレナの頭は疑問符だらけになってしまふ。

とりあえず移動中にアスタのことを説明し、現状を伝えると腕を組んで頷く。

「なるほど。先輩のお友達先輩の腕を治すためにキャバクラのお姉ちゃんさんと一緒に魔王の森にいる魔王に頼みに行くんですね……さっぱりわかりませんけど！」

「理解しなくていいから納得してくれ！」

「強引っ！ でも先輩ホントに人脈広いですね……まさかキャバクラまでとは」

「にやはははは！ 頼まれた勢いに押されちゃってワタシも困ったんだけどやっぱりボクチャンの目を見ると助けたくなくなっちゃったのよん」

「どうかクローバー王国は未成年でもキャバクラ行けるんですね」

「いやダメだったけど」

「ダメだったんかーいっ！」

フィオレナのツツコミが冴え渡る中、キリヤ一向は魔法の森を視界に捉える。

その途中フィオレナが小さく挙手し、

「キリヤ先輩、何で先輩はそのアスタ先輩のためにここまでするんですか？」

「友達だからに決まってるんだろ。それにアスタは未来の魔法帝になる男だ。こんなところで躓かせるワケにはいかねえだろ。まあもう一人魔法帝目指してる友達いるけど、こんな形で脱落すんのは違うだろ」

「優しいねーボクチャンは」

「そっちだって何で手伝ってくれるの？ 場所さえ教えてくれれば何とか出来ると思いますけど」

「あーもうタメ口でいいよん。さつきから割とタメ口だったけど。で、まあ質問に答えるとボクチャンの熱意に負けたってのもあるけど過去との決別もあるかなー」

「過去との決別？」

「ワタシ元々魔王と契約してたけど嫌気が差して逃げたの。で、その先がクローバー王国で気付いたらキャバ嬢やってたってワケなのん」

『だーりんを誑かすだけのファツキンクソアマだと思ってたけど事情があったのねー』

「ボクチャン女の精霊とも契約してたんだ。それでワタシを口説くなんてこのウワキモノっつー！」

「ウワキ……？ よくわかんないけどそんなこと言ったらサキムニだつてメスだしな。なあサキムニ」

『うん。浮気とか言ったらボク達いっぱいいるからわけわからなくなるヨー』

「ボクチャン結構精霊と契約してるのね〜」

『あ、あんたはダメだかね！ サキムニは無害だからイイけどあんたは絶対だーりんに悪影響及ぼすから！』

「でもギャルとキャバ嬢の精霊って度合いで言ったら変わらなくない？ ね〜ボクチャン？」

「ぎやる……きやば……字で言ったら大した違いないんじゃない？」

「ほらーね〜？」

『ぎやーっ！ だーりんがキャバ嬢の毒牙に!! あと抱きつくなくなーっ！』

「と、とりあえず魔女の森ですし集中しません？」

至極真つ当なフィオレナの指摘にキリヤに抱きついたトゥルーやそれを引き剥がそうとするウンディーネの動きが止まる。

確かにそうだね、と皆領き本来の目的を思い出して冷静になつてしまふ。

「あ、ここ裏道あるから……つて何か騒がしいね〜」

すでに何か交戦状態になつているのか魔力を放出する音が響いており、誰か先にこの場にやってきたのかそのおかげで入った瞬間に魔女達の視線がキリヤ達へ注がれる。

「……マズイかなーこれは」

監視用と思われる小さなゴーレムの大群がキリヤ達に向けられ、キリヤはすぐに魔導具の絨毯を叩く。

「最高速度で突っ切る！ 多分あのスゲーデカイ樹に魔女王はいるだろ！」

絨毯の先頭に立てば夥しい数の魔力弾がキリヤ達に向け放たれるも魔の動きや氣を感じ取れば防御するのは容易く、そうじゃなくてもキリヤの魔法は魔力吸収だ。

何発か受けるも構わず突き進めば大樹の屋敷の中に見えたのは――

「ア、アスタっ!？」

「え、キリヤっ!？」

着地すればその場には見知った顔とそうではない顔が多数あった。アスタ、ノエル、フィンラル、バネツサ。知らない男性に知らない女性。シイナに結構似ている少女。

奥にいる異様な魔力の持ち主は恐らく魔女王だろう。

「は、初めまして魔女王様……?」

全員の視線が突き刺さったキリヤはそう挨拶するしかなかった――



### 53話 「開戦の狼煙」

「オマエどうしてこんなところに!？」

「ここに来ればアスタの腕が治る方法があるかもってトゥルーに聞いたからさ。余計な真似だったかー」

「そんなことねえよ。ありがとな!」

「……」

早くに再会したキリヤとアスタは互いに笑うとその奥で魔女王が何か察知したのか魔力を灯す。

三つの水晶玉が創成され、そこに映し出されたのは三つの勢力だった。

「〈白夜の魔眼〉にダイヤモンド王国……そんで後は誰だ……?」

「あれは……スピード王国の〈七剣総統〉ですね。《四拳》だけじゃないくて《二槍》も来てるなんて……とうとうダイヤモンド王国に対して本気つてことか」

「《二槍》……」

戦慄するフィオレナにその名を思い出すキリヤ。

〈七剣総統〉の中でも群を抜いて強いとされる《三》以上の存在、そんな相手が来るとは。

しかも〈白夜の魔眼〉を見ればサラマンダーの使い手である〈三魔眼〉<sup>サードアイ</sup>のファナまでいる。ダイヤモンド王国の戦力は不明だが明らかに魔女の森では持て余すほどの勢力の数々。

瞬間、サラマンダーの開いた口に炎が灯り、放たれる。

炎精霊魔法“サラマンダーの吐息”。

前に見た時よりも格段に威力が上がった一撃は魔女の森の防護を容易く破り、数多の木々を焼き尽くす。

『サラマンダー……あんな憎悪しかない魔<sup>マ</sup>になっちゃってバーカ』

同じ四大精霊としてウンディーネも思うことがあるのか苛立たしげに言葉を零す。

と、そこでノエルが一步魔女王へ向かって踏み出し、

「ちよつとその女王、アナタの森大変なことになってるわよ。アス

タの呪い解けるなら早く解いてちょうだい。今すぐにも助けに行きたがってるから。治せばきつとこの森の役に立つわ。そいつが動けば私達も動く。戦力が少しでも必要だってなら——女王として最善の選択をしなさい！」

魔女王に対しても物怖じないノエルの言葉。

受けた魔女王も少し考える素振りを見せるもすぐに、

「いいだろう。そのガキの腕を前よりも丈夫にして治してやる」

血液回復魔法”滅呪の血籠り繭”。

高度な魔法を一瞬で行いアスタの折れた両腕は完治し、アスタは両手に反魔法の剣を携える。

「よっしゃアアアアア！ 完全復活ツ!!」

「良かったなアスタ……」

「ボクチャン取り越し苦労ってヤツね〜」

「イイんだよ。治ればさ」

「そこのガキ、オマエも少し私に寄れ」

「……？」

アスタがノエル達に喜びで蹴られている中、キリヤは魔女王に手招きされる。

何事かと思えば魔女王に両手で顔を押しさえられると冷たい視線が注がれ、

「……やはり貴様エルフの者か。まさかデイフォーヌ・フィン・ガルガン以外に生きている者がいたとは」

「デイフォーヌ・フィン・ガルガン……？ オレ、キリヤスフィール・フィン・ガルガンって言います。元はアルーグって名前らしかったんですけど……」

「……なるほど。あの女が盗んだ呪術は貴様に使われたということか」

魔女王が言っていることがいまいち分からず疑問符を浮かべるキリヤ。

だが魔女王の中では完結しているらしく手を離せば指差し、

「腹いせだ。貴様にかけられた呪術も解いてやる」

血液回復魔法”滅呪の血籠り繭”。

特に怪我をしたわけではないがすぐさまキリヤは魔女王の魔力に包まれ、解放されれば――

「せ、先輩大丈夫ですか!？」

「……な、何にも変わらない?！」

『だーりんは何すんのよっ!』

てつきり記憶でも思い出すのかと思えばそうではなく特に身体に変化はないよう。

困惑するキリヤだが魔女王は淡々と言う。

「記憶は恐らくあの女の消滅魔法で消されたのだろう。私が解いたのは魔力の枷、つまり貴様のエルフとしての魔力を封印していた呪いを消したに過ぎん」

「で、でも魔力的な変化も何もないんですけど……?！」

「知らん。そこまで親切にしてやる義理はない」

「ですよねー……」

ともあれ何かかけられていた呪いはこれで解けたようだ。

何だか不穏な魔力も注がれた気がするがそこはキリヤの魔法が吸収してしまい異常はなくなった。

「しかと見せてもらおう。オマエ達の実力を……」

「おう任せとけ! 腕治してくれてありがとうな!」

「アスタ、積もる話はあるが私達はダイヤモンド王国側の応戦をしに行く。マルス……あの魔導戦士とは因縁があるんだ」

「わかった死ぬなよ。あと服着ろよゼルのオッサン」

確かに見ればアスタの知り合い――ゼルと呼ばれた男性は何故かパンツ一丁。

シイナ似の少女ともう一人の女性もついて行くようでこれでダイヤモンド王国側の勢力は決まった。

「だったらオレはスピード王国側かな。へ七剣総統」とは二回戦ってるし」

「せ、先輩……本当に《二槍》は次元が違うんです……先輩でもきつと――」

「フィオレナ、怖かったら逃げていいんだぞ。別に恥ずかしいことじゃない。これはオレのワガママで来たところだしオレ自身の責任だからな」

「先輩……」

正直《二槍》の実力は分からない。

ただフィオレナのこの恐れようから察するに今のキリヤ以上だということに違いはないだろう。だがキリヤにとって今襲撃されている魔女の森は手の届く場所だ。

魔法騎士として、自分の信念として、立ち向かわない理由にはならない。

だがそんな個人的な意地にフィオレナが付き合う必要もないのだ。だが――

「アタシも行きます！ アタシ、先輩についていくって決めましたから相手が誰だろうと乗り越えてみせます！」

「だったらオレがオマエを絶対守ってやる！ 頼りにしてるぜフィオレナ！」

「はいっ！」

『あのさ、だーりん。あーし今回サラマンダーのところに行っていい？』

「話したいことがあるんだな。うん、いいぞ。ノエル様が水魔法の使い手だから相性もいいだろ、行ってこいよ」

『ありがと大好きっ！ 終わったらすぐソッチ行くから！ んじゃ、そんなワケでノエっち突然だけどよろしくねっ！』

「ノエっちっ!? ま、まあ良いわよ別に」

ノエルも了承してくれたところでアスタがキリヤの前にやってくる。

そつと拳を差し出してくればキリヤもその拳に合わせ、

「頼んだぜキリヤ！」

「任せとけ！ ソッチこそしくじんなよ！」

こうして別れば各々の配置に向かって駆け出す――

◎

「さて、ダイヤモンド王国とクロバー王国のテロリストへ白夜の魔眼なる者達がありますが先に潰しておきますか？」

先ほどの炎魔法を狼煙に各々の勢力は進み出し、スペード王国へ七剣総統の《四拳》ステイクは隣に絨毯に胡坐をかいて座りながら浮遊する《二槍》——マンダラに問う。

目を伏せていたマンダラは静かに瞼を開け、

「……わざわざこちらから向かう必要はない。三つの方角から攻めていけば互いに交わる。それに——すでに敵は来ているようだ」

「そのようですね」

気配を感じ、目を向ければそこから飛び出すのは魔女——ではなくウサギの群れ。

しかもただのウサギではなく魔法強化を受けているのか通常のウサギではありえないほど筋骨隆々としており、しかもそれぞれが鎧とハンマーを持って武装している。

その数は数十に達するか。ウサギ達は空中を蹴っては部隊に襲い掛かる。

「応戦しろ」

控えていた魔道士に告げれば魔道士達は各種魔法や武器で応戦するもウサギ達が纏っているのはただの鎧ではないようだ。下手な魔法は弾き、物理攻撃ですら傷一つ与えられず、部下達は押されていく一方だった。

「……スペード王国の軍人たる者が情けない」

魔女の下僕なのかは不明だが苦戦している事実ステイクは苛立たしげに吐き捨てる。

拳を握り締めれば迫るウサギ達を拳で弾いて叩き落とし、

「獣では僕は倒せないよ」

「だったらこれはどうだクソ共が——ッ!!」

「っ—」

突如として聞こえた聞き覚えのある少女の声。

同時に側面から放たれる投石の数々。殴れば拳が弾かれ、不意討ちによつて魔道士達は次々と弾き落とされていく。

少々体勢を崩すステイツを尻目に《二槍》は軽々しく槍で切り裂き砕いていく。

チツ、と思わず舌打ちが零れるも一度触れば性質は分かった。ステイツも拳の力の入れ方を変え、打てば今度は弾かれることなく砕き割る。

「小賢しい……やはり小手先に関しては君の方が上手なようだ——  
フィオレナ」

「ふん！ 今のは挨拶代わりだ！ てめえらを相手にすんのにまずは邪魔なのを駆除しただけさ！」

樹の枝に立っていたのはやはり《七剣総統》の一人《七鞭》フィオレナだった。

資源確保のためにクローバー王国にある地底帝国の金銀採掘所を手に入れる任を与えられていたがいつの間にか行方不明。クローバー王国の捕虜になったとばかり思っていたが——

「僕達に矛を向けるということはスピード王国を裏切り敵に回す……つまりゼネルラ様の想いを踏み躪る気かな？」

「ゼネルラ好き好きも大概にしろよ。これ見て分からないか？」

フィオレナは着ているローブを見せつけ、見ればそれはクローバー王国魔法騎士の者。

それは明らかな裏切り行為であり、ステイクの逆鱗に触れた——

「もう言葉は要らないか——」

魔力放出による爆発的な加速。

瞬時にフィオレナとの距離を詰めれば拳は顔面に向かって振るわれ、裏切り者の顔面を打——

「そうはさせねえよ」

フィオレナの顔面の打つはずの拳はその眼前で他の手によって止められていた。

同時にステイクの顔面を打つ一撃。仰け反り後方へ飛ばされ樹に打ち付けられればステイクに走るのは痛み以上に衝撃だった。

(まさか僕の拳を止めるなんて……)

並みの魔道士では今の速度も拳も止められない。

慌てて見ればフィオレナの前には一人の少年が立っていた。

黒髪で八重歯が特徴的な少年。その身体は服越しに見ても鍛えられていることが分かり、拳も人を殴り飛ばすのに特化した骨の形状だ。

一目見て分かる。間違いない——好敵手だ。

この好敵手と戦い殺せば自分はより先に進める。より強さを手に入れられる。

そうなればゼネルラの強さに近付け、より自分を認めてくれるだろう。

「マンダラ、この男は僕が殺ります。あなたはフィオレナでも狩って  
いてください」

「……………」

ステイクの言葉にマンダラは仕方ないと言った様子で立ち上がり、  
絨毯から下りる。

気分が高揚して堪らないステイクは身構え、

「君の名前を教えてください。僕はステイク……ステイク・フィスタだ」

「キリヤスフィール・フィン・ガルガン」

「良い名だ——さあキリヤスフィール、僕と踊ろう。そして上質な経  
験値となってくれ」

魔拳昇華魔法” 蛇掌拳”。

ランク1・ダシヨウケン

好敵手の出現に不敵に笑みながらステイクはキリヤに向かって飛  
び出す——

## 54話 「進化VS昇華」

「フィオレナ、無理だと思ったたらすぐに逃げる。オレは二対一でも大丈夫だ!!」

ステイクが飛び出したと同時にキリヤもその場から飛び出す。

拳に蛇の如き装飾が成された籠手が装備されたステイクと同時に拳を放つキリヤ。だが同時に打ったにも関わらずステイクの拳が先にキリヤを打つ。

(伸びるのかそれ!)

見れば籠手ごとステイクの拳が伸び、躲すタイミングもずらされたようだ。

おかげでキリヤの拳は虚しく空を切るも同時にキリヤも魔法を発動する。

身体進化魔法”レベル1・ブルガトリトン戦竜の腕鱗”。

腕に竜の鱗、爪を模した籠手を纏えばステイクはますます嬉々とした表情を浮かべる。

「奇しくも僕と同じような魔法か!」

「うっせえ!」

伸びることは分かっている。

ならば伸びることも含めて躲せば良いだけのことだ。キリヤは鞭の如くしなる拳を躲せば肉薄し、拳を振るうもステイクにいなされる。

「残念」

「そうかなっ!」

魔力格闘技”フィオネルカット獅子戦刃”。

マナゾーンによって背後から出現した獅子の爪を間一髪躲すステイクだがその隙に今度はキリヤ自身の拳がステイクを打つ。

一瞬怯むもステイクはすぐさまキリヤに打ち返し、キリヤもまた打ち返す。

身体進化魔法”レベル2・ガイガーアツテ強化鎧旋”。

鎧を身に纏ったキリヤの拳が防御越しにステイクの身体を後方へ



殴り飛ばす。

靴裏を引き摺りながら勢いを殺したステイクは手をぷらぷらと動かし、

「先ほどよりも威力が上がっている……なるほど。君の魔法は何かしらの方法で進化していき自分を強化していく魔法か……本当に君の魔法と僕の魔法は似ているようだ!!」

魔拳昇華魔法”ランク2・レッシュヨウケン烈掌拳”。

蛇の装飾からさらに炎の紋章が加わり、纏われている籠手の形状が変化する。

籠手の魔力量が上がり、ステイクは不敵に笑う。

「僕の魔拳昇華魔法は相手を殴れば殴るほどに経験値を得て昇華していく。さあ君はどれだけ僕をさらなる高みに連れて行ってくれるんだ?」

「昇り過ぎてあの世に行くかもな!!」

「それは楽しみだツ!!」

二人の拳がぶつかればその衝撃で地面が砕け、余波で木々を薙ぎ倒す――

◎

「……派手にやっているようだな」

「……………」

目の前にいる男に対し、フィオレナは最大級の警戒心を抱いていた。

灰色の髪を伸ばし、物憂げな双眸。携えられているのは魔槍”デイアボリア”。

同じ《七剣総統》の中でも《七》のフィオレナとはレベルの次元が遥かに違う存在――マンダラ。

マンダラはフィオレナを一瞥し、

「……何故スピード王国を裏切った? 貴様は《七剣総統》、立場としても何不自由なものだと思ったが」

「そりゃ戦闘至高の連中にとったらそうだろうけどアタシは違う。友達も欲しかったしお洒落もしたかったし普通の女の子として生活し

たかったんだ！」

フィオレナの言葉を聞いたマンダラは呆れたような眼差しを向け、「……そんな一時の感情で立場を捨てたのか」

「一時の感情だからだよ!!」

生まれた時から軍人になることが定められ、十二歳の頃から親と離されて無理矢理訓練を強いられる。

当然のように訓練で死人が出て、無理矢理でも実力をつけさせられ、もはや人間とさえも扱われない。結婚相手もより強い人間を生み出すために国が定め、恋愛の自由もない。

やりたいことも夢見ることすら許されない何も自由がない雁字搦めで国のために死ぬなんてずっとフィオレナには御免だった。だからこそ、あの時敵でありながら手を差し伸べてくれたキリヤは命の恩人と言っても過言ではない。

まだ一緒にいる時間は少ないがそれでもキリヤという時やへ碧の野薔薇で団員達といえるのは本当に楽しい。したいことや夢見ていたことが出来て、十数年生きてきたスピード王国よりも遥かに満たされていた。

だからこそ――

「アタシは……もうアタシはへ七剣総統へなんかじゃない！ クロバー王国魔法騎士団へ碧の野薔薇へ新入団員フィオレナ・ミライズデオルナだ！」

魔法騎士として、鞭を振るってサキム二達の力を底上げする。

スピード王国で学んだ忌むべき指揮能力を奪うためではなく、守るために使う――

◎

アスタ達はへ白夜の魔眼へのへ三魔眼サードアイへファナと戦闘を繰り広げていた。

一国の軍事力に匹敵すると云われるサラマンダー相手に攪乱、アスタの反魔法でファナを追い詰め、一度は対話を求むもファナの憎悪がそれを許さず三つ眼が開眼。別属性の魔法とサラマンダーが混ざり巨大化し、窮地に追い詰められていた。

だがノエルの魔法は水、そして今は水の四大精霊ウンディーネが傍にいる。

起死回生の一撃を放てるのはノエルのみだ。

「ノエル——ッ!! オマエは強い!! オマエなら出来る!! 頼んだぞ——ッ!!」

「言われなくともやってやるわよっ!!」

兄や姉達に虐げられ、どれだけ自信を失いかけようともアスタの言葉がノエルを奮い立たせる。

海底神殿で習得した“海竜の咆哮”、現状のノエルでは一発が限界だが——

『あーしも後押ししてあげるから思いっきり撃っちゃえ!!』

「ええッ!! もう私は出来損ないじゃないッ!!」

水創成魔法“海竜の咆哮”。

そしてウンディーネが一体化してさらに魔力で後押しし、“海竜の咆哮”はさらに巨大化し、三つ首の竜と化す。

水精霊創成魔法“大海竜の轟咆哮”。

例えサラマンダーが鉱石の防御を繰り出そうとも紙同然に打ち砕き、真正面からサラマンダーに喰らい付く。

「やったーっ!!」

『このままサラマンダーと話あつから連れてく!! あと頑張つてノエちゃん達!!』

そう。ウンディーネの狙いはここからだった。

大海竜と化したウンディーネはそのままサラマンダーからフアナを引き離し、木々を薙ぎ倒して着地しサラマンダーに覆い被さる。

水精霊拘束魔法“水精牢”。

拘束すれば思い切り息を吸ってウンディーネは叫ぶ。

『何イイように憎しみに侵されてんのよヴアアアアアアアアアアアアアアアアアア——ッ!!』

『ッ!』

攻撃性の魔に特化しているためにサラマンダーの感情は乏しいもの。

だからと言って良いように操られ、契約者の憎悪に左右されるのはあつてはならないことだ。

暴れるサラマンダーの眼はウンディーネを敵として捉えており、その口に巨大な炎が灯れば――

炎精霊魔法“サラマンダーの吐息”。

爆発的な火力で拘束していた水すらも蒸発させるもウンディーネは気合いで耐え、拳を握り締める。

『イイこと教えてあげる!! あーしやノームが今契約してる男はね!! 歴代契約者の中でも最も欲がないし素直でイイ子だし強いし精霊の扱いも上手い超優良物件間違いないだからア!! 一回ソツチの契約切つて見に来ていやアアアアアアアアアアアアアア――ツ!!』

水精霊創成魔法“ウンディーネ水精激情愛拳”。

水を蒸発させるほどの火力を持つサラマンダーをさらにその上から巨大な水の拳で殴りつけ、サラマンダーの身体は地面にめり込み、大地が罅割れて爆発する。

『……けぶつ爆発し過ぎよマジで』

大規模な爆発の中心地にしたウンディーネだが何とか耐え、手を伸ばして殴り飛ばした地の底で何かを掴む。

引き上げればその手にはすつかり幼体になって小さくなってしまったサラマンダーが掴まれており、舌をちろちろと動かしていた。先ほどまで感じていた邪悪な魔マナも消えたようで、その反動で小さくなってしまったがあんな邪悪な魔力を抱えているよりかよほどマシンだろう。

『ホントあーしに感謝しなさいよサラマンダー。昔の誼で助けてあげたんだから……ってあぢぢぢっ! ちょよ、ちょっと肩に乗らないでよ! あんたメツチャ熱いんだからね!!』

シャーつと言いながらもどこか悪戯つぽく笑っているように見え、ウンディーネもその額をデコピンしてまた熱がりながらもキリヤの元に戻ることにする――

◎

「もつとだ!! もつと君の実力を見せてくれ!!」

身体進化魔法” 剛石の重鎧”。

レベル5・ダイヤモンドラマー  
ランク5・ハヤブサシンシヨウケン

魔拳昇華魔法” 隼疾掌拳”。

二人の戦いは肉弾戦と化しており、打って打たれてを繰り返し互いに進化、昇華を繰り返す。

どれだけ打ち込んでもステイクは嬉々として打ち返し、ノームの鎧を纏っているキリヤは速く鋭くなる相手の拳に徐々に押されていく。

防御態勢を取るも相手の魔法は殴れば殴るほどに昇華し、強化されていく拳だ。一度防御態勢を取れば一気に形勢は相手に有利なものとなり、キリヤが押され始める。

「その程度かキリヤスフィール!!」

「ぐ——ッ」

一撃の重さに特化したノームの鎧では現状速くなっている相手の拳には追いつけない。

そして殴られる度威力が上がっているためにノームの金剛石をもつてしても徐々に衝撃を通すようになってきている。このまま殴られ続けなければこの防御も破られる。

だが、キリヤは耐えたことで大気中の魔——マナ魔女の森ともあって非常に濃密な魔を吸収したおかげで条件は満たした。

「行くぞノーム、ジブラウスト。オレに力を貸してくれ!」

「っ!」

身体進化魔法”

レベル12・ディストラクトモントラマー  
剛機絶鋼の重装鎧”。

大きく変化した鎧にステイクも驚くも魔力放出によって爆発的な加速を見せた巨大な拳が眼前に迫り、両腕を交差して防御するもその威力によって遙か彼方まで飛ばされる。

具足からも魔力放出を行い、加速すれば彼方に飛ばされるステイクに追いつき、さらに拳を握り締めれば装甲が重厚さを増す。

防御態勢のまま後方に飛ばされていたステイクはキリヤの接近に気付くも後方へ突然金剛石の壁が出現したことによって衝撃を受け、バランスを崩し、その隙にキリヤの拳がステイクの右頬から顔面を打つ。

「オレのこと経験値つつつたが生憎易々と倒される気もねえし残念

ながらオレがオマエをブツ飛ばす!!」

芯から入った一撃でステイクの身体は錐揉み回転して尚も吹き飛ばぶ。

明らかかな手応え。砂煙が舞い上がり、明らかにダメージが入ったのは明白だ。

だが地に背をつけて大の字で倒れていたステイクは跳ね起き、ペッと血を少量吐いて口元を拭う。

「良い一撃だね。効いたよ」

「そんな風には見えないけどな」

「いいや、僕に背をつけさせるとはなんてスピード王国でも片手で足りるぐらいさ。誇りに思っただけで良い。だが僕は君程度に躓けないんだ——ここで負ければ愛する女性に呆れられてしまうからね」

「奇遇だな。オレもこんなところで負けられねえよ。オレが愛してる女を超えるにはこんなモンじゃ足りねえ。それに——負けるのはあの時だけでイイ!!」

己の無力に苛まれるのはサイルに負け、フエゴレオンが重傷を負ったあの時だけで良い。

再び魔力放出によって飛び出しステイクへ肉薄するキリヤ。

だが——今度の拳はステイクには届かなかった。

「——残念だけどそれはもう僕には通用しないよ」

魔拳昇華魔法” 羅刹掌拳”。

ランク14・ラセツシヨウケン

レベル12・ディストラクトモンドラマー

ステイクの一撃は”剛機絶鋼の重装鎧”の防御を貫き、その衝

撃で今度はキリヤが吹き飛ばされた——

## 55話 「気まぐれなる猫との共鳴」

(ぐ、うううう……重——ッ!!)

セカンドプラスト  
第二の心臓を解除していたフィオレナの一撃すらも凄いでいたというのにまだ解除していないステイクの拳はそれ以上の威力を持っていた。

レベル12・ディストラクトモンドラーマ  
“剛機絶鋼の重装鎧”でも防ぎきれない威力で殴り飛ばされたキリヤは吹き飛ばされながらも魔力放出で体勢を引き戻す。

一方、両拳に鬼の彫刻が成された籠手を纏いながら迫るステイク。金剛石の杭で迎撃するもステイクは容易く砕きながら突き進み、拳と拳がぶつかり合えばとうとう鎧が砕かれキリヤの顔面にステイクの拳が迫る。

(しまッ——)

猫精霊魔法“気まぐれ回転円盤”。

突然キリヤとステイクの間に現れたのは回転するルーレット。それがステイクの拳に砕かれれば鎧が解けたキリヤをいつの間にか抱えていたトゥルーは笑みを浮かべる。

「ラツキーだねオニーサン。」「パニック”効果だよん」

「っ！」

ステイクは拳を放った体勢のまま地面に向かって転落していき、その隙に手近な樹へと着地する。

着地すればトゥルーはにやははと笑い、

「あつぶなー。」「パニック”以外だったら止められてなかったかも」  
「あ、ありがとな。ぶっちゃけ危なかった」

「いーえー。でもボクチャン結構ピンチそうだけどダイジョウブ?」  
「何とかするさ。今までもガッツで何とかしてきた場面も多いしな。それにオレはオマエを守るって約束したからこんなところじゃ死なねえよ」

追い詰められた時こそ不敵に笑う。

正直何の策もないが相手は近距離戦に特化した魔道士。ならば接近戦で片をつけるしかないだろう。

サキムニは今フィオレナに貸しているために戻すことは出来ない。現状ではステイクに有効打がなくどうするべきか、そう考えていれば――

「もうボクチャン難しいカオしても仕方ないって。ボクチャンは考えるより行動派でしょ？」

「お、おう」

いきなり抱きついてきたトゥルーに息を耳に吹きかけられる。

思わず両肩を震わせてしまい、それを見たトゥルーは楽しそうに笑う。

「ボクチャンは素直だね。今の言葉にも嘘を感じないし戦い方だって肉弾戦一本だし。おバカさんだけどそれがイイとこってのは分かってるよ。でもたまには違う戦い方したってイイんだよ？ 勝てなきゃ守れるモノも守れないし」

気まぐれな猫はそう言っただけで楽しそうに笑い続け、離れるとキリヤの魔導書の空白のページに手を触れる。

「搦め手が得意なワタシが力貸したげる。それにさつきみたいに精霊同士合わせるのにワタシとぴったりな相手はもう帰って来そうだし」

「え？」

『サラマンダーのやつどこ行つたのよーっ！ もう見失つたしい！』

あ、ただいまだーりんっ！』

「おかえり……もしかしてウンディーネのこと？」

「うんうん。キャバ嬢ワタシと合わせられるのってギャルこの子しかいないと思うの」

『何の話……ってああ！ あーしがいないうちに勝手に契約してるし！！ って嫌よ！ あんたとあーしが相性イイわけないし！！』

帰って来て早々両腕で大きなクロスを作って完全拒否するウンディーネ。

だが現状これしか打破出来る術はなく、キリヤも頭を下げる。

「頼むウンディーネ、オレに力を貸してくれ」

『アタマ上げてだーりんっ！ だーりんには全然力貸すけどね！ あ



の——』

「もうグダグダ言うのナシ！ ボクチャンのために頑張ろうね〜」

『ああもう仕方ないし！ やってやるんだから!!』

拳を向ければトウルーもウンディーネも拳を合わせれば新たな鎧を身に纏う。

身体進化魔法”

レベル15・ウンディーネ・ベネルローベ  
水恋猫の軽装鎧”。

猫の耳を横した兜。蒼を基調にした線の細い軽装の鎧には煌めく派手な装飾が散りばめられ、籠手の掌には何故か肉球。猫の尻尾まであつてトウルーの影響が大きく出ているように見える。

「まだ先があつたのか!!」

トウルーの魔法によってステイクは怯んでいたものの回復したのか、キリヤの姿を見て歓喜の声を上げる。

嬉々として拳を構え突撃してくるステイクに迎え撃とうにも少しキリヤの心の中は騒がしかった。

『ちよつとあんたア！ 何この鎧デコってんのよ!』

『にやはは！ カワイーでしょ〜』

『これ戦い用だし！ 可愛さなんて必要ないし!』

「ちよつと二人共喧嘩はやめて集中してくれ!」

いつもは弄る側のウンディーネが完全に弄ばれているようだがそれどころではない。

突撃してくる拳をいなし、返しに肘鉄を喰らわせ距離を開けさせれば今度はキリヤが距離を詰める。

負けじとステイクも拳の連撃をキリヤに浴びせるも——

『スロットスタートっ!』

殴ったはずのステイクの拳で奇妙なスロットが始まる。

コミカルな音と共に三つのスロットが決まれば映し出されるのはウインクしたトウルーの表情だった。

『カウンター五倍返しだよ!』

「ぐッ!?!」

いきなりステイクの顔に殴ったような衝撃が生まれ、顔が思い切り仰け反る。

殴った自らの威力を五倍にして返されればステイクの膝は笑い、一歩下がったところで次はキリヤ自身の拳。

水魔法を纏った拳でステイクの鳩尾を打てばさらに追撃で水によって創られた拳のラツシュが決まる。

「こんなもの——ッ!!」

身体強化魔法が凄まじいのかステイクは尚も起き上がる。

だが再び『スロットスタート!』とトゥルーの掛け声がし、見ればラツシュが決まった箇所全てにスロットが現れる。

『威力二倍!』『威力半減……』『特になしスカン!』『威力七倍!!』『追撃雷属性!』『ボーナズでもう一ラツシュ!!』

「ぐ、う、がは……っ!! 何だこの魔法は……ッ!?!」

声と共に全ての効果を浴びせられたステイクの身体は飛び、受け身もなく地面に膝をつく。

その光景にトゥルーも「にやはは」と笑って心の中でピースする。

『猫精霊創成魔法』ニャンニャンスロット、ボクチャンを攻撃した相手かその攻撃を受けた相手に強制的にスロットで効果を決めるのよん。たまにスカンあっちゃうけど当たりだったら「即死<sup>デス</sup>」もあるから気をつけちゃって〜』

「そんなもの一撃で決めれば……ッ!!」

全力で拳を振るおうとも今のキリヤは水と猫のしなやかさを兼ね合わせている。

氣と魔<sup>マ</sup>の流れを読み、身体を水にして躲<sup>カケル</sup>することも余裕でその顎を殴り飛ばす。そして水の道を創り出し、背からもラツシュを決める。

「く、クソオオオオオオ——ッ!!」

全てのスロットが発動すればそれぞれの効果でステイクは吹き飛んだりデバフをかけられたりと踊らされ、握り締めたキリヤの拳は水の加速と共にステイクの顔面へと叩き込まれる。

『ラツキーっ! 威力百倍!!』

トドメの一撃によってステイクの顔は大きく天を見上げた——

◎

その人は本当に美しい女性だった。

初めて会ったのは戦場でステイク達新兵の指揮を取っていたのが《一剣》ゼネルラであり、戦場で戦う姿はまさに気高く——神にも等しかった。

生まれて何一つ良いことがなかったステイクにとってゼネルラとの邂逅はまさに唯一の幸福。そしてその衝動を抑え切れなかったステイクは——

『僕と——結婚してください!!』

一度会った、それも指揮官相手に新兵が求婚してしまった。

普通ならばその場で殺されてもおかしくない。それなのにゼネルラは——

『私は強い者にしか興味がありません。もしあなたが私よりも強くなればその求婚を受けましょう』

そう言ってくれたのだ。

だからステイクは強くなり続けた。鍛練を欠かさず、時には周りを蹴落として強くなり、そして前任者の《四》を殺して《四拳》となった。何もかも一人で突き進んできた。

それでもまだ足りない。

まだ《三》とさえ渡り合えない状態だ。そんな自分が《一剣》たるゼネルラと共にあれるはずがない。

強くならなければ。強くならなければ。

何をしても。何を殺してでも。どんな手を使ってでも。

今負ければ何もかも失う——

◎

「それだけは嫌だツ!!」

「っ—」

倒れると思えばステイクは顔を上げ、指輪を外せば爆発的に魔力が引き上げられる。

周囲の魔<sup>マナ</sup>が押し潰されるほどの魔力量、それを全て注ぎ込み創られるのは——

「魔拳昇華魔法」ランク50・マジックジョウケン 魔 刃 掌 拳 “……この一撃で終わりだ。たかがレベル15如きの君では僕には敵わない……ツ!!”

片腕だけに纏われた籠手。

漆黒に染められた籠手は今までのどの籠手よりも質素だがそれに込められた魔力は本物だ。

その一撃をまともに喰らえばキリヤどころか魔女の森さえ無事では済まないだろう。

だが――

「その一撃、受けて立つ……ッ!!」

『だ、だーりんっ!?!』

『ボクチャンさすがに無理すぎだよっ!?!』

あまりの魔力量の差にウンディーネとトゥルーが止めに入るも構わずキリヤはステイクの前に立つ。

互いの一撃が届く間合い。恐らく搦め手を使ったところでステイクは倒れない。

一人の女を超えるために進む同士分かる。だからこそ、力以上にステイクを支えているのが心だということは分かっている。

「この差を前にまだ戦う気なんてね……」

「ここで退いたら」漢「じゃねえからな……」

崩れ落ちる瓦礫。

その音が合図でキリヤ、ステイクの両者の拳が互いに向けて一直線に振るわれる。

ただキリヤは拳ではなかった。

拳を握ったまま人差し指を立てその指先の一点に全身の魔力を集中、一筋の切っ先として形成する。

どうしてそうしたのか、キリヤには分からなかった。

メレオレナならばもっと別の方法を取っただろう。それでもキリヤは迷わなかった。

本当にメレオレオナを超えなければ真似事だけでは一生敵わない。だからこそ――

「これがオレの全力だ――ッ!!」

魔力格闘技“獅子一刺”。

極限に研ぎ澄まされた魔力の一突きは籠手の一点を貫き、ヒビを与

え、そこから切っ先を通して水を弾けさせて砕き、破壊する。

魔力を全て注いだためにキリヤの鎧も解け、だがキリヤの右手はすでに拳を作っていた。

どんな魔法よりも早くに習得したメレオレオナ直伝の拳骨を握り締め、

「だらっしやアアアアアアアアアアアア——ッ!!」

振るわれたキリヤの拳骨がステイクの顔を捉え、殴り飛ばせば今度こそ倒れ動かなくなる。

「オマエは確かに強かったけどオレ達の方が強かったな」

肩で息をするキリヤは拳を突き上げ勝利を示し、にこつと笑った――

## 56話 「エルフの覚醒」

(倒したはいいけど魔力消費が激しいな……)

相手の一撃を超えるために自分の全ての魔力を放出してしまった。それに加えて新たなレベルアップによって立っているのもやつとなほどの疲労感が襲い、例え身体進化魔法のレベルアップによって身体の傷が治ろうとも体力だけはどうしようもない。

「早くフィオレナのところに行かねえと……」  
《四拳》でこの強さだ。

フィオレナとサキムニが足止めしてくれているのはそれを遥かに上回る《二槍》。

そうなればフィオレナもただでは済まない。急がなければもしかすると殺されているかもしれない。

駆け出そうとするキリヤだが一歩大きく躓き、ウンディーネとトウルに支えられる。

『だーりんとりあえず回復しよっ！』

『今のボクチャンが行ってもどうしようもないってば！』

「でも、早く行かねえとフィオレナが——」

「……急ぐ必要はないだろう」

唐突に聞こえた男性の声。そしてキリヤの前に捨てられる人影。

そこに倒れていたのは血塗れのフィオレナであり、それまでの道に倒れているのは無数のサキムニだった。

慌ててフィオレナを抱きかかえれば重傷だというのにフィオレナは笑ってみせる。

「ごめんなさい先輩……アタシ、しくじっちゃったみたいです。サキムニ先輩達も巻き込んだんじゃって……」

「いいんだ。よく頑張ってくれた。ちよつと休んでろ」

ウンディーネに目を向ければ彼女もキリヤの意を汲み、フィオレナを抱えて下がり回復魔法で治癒し始める。

倒れたサキムニ達は自動的にキリヤの魔導書に戻り、涙ながらの声が聞こえてくる。

『ごめんご主人……ファイちゃんボク達が守れなくテ……』

「大丈夫だからオマエらも休んでろ」

傷ついたフィオレナやサキム二達の姿に一瞬で怒りが沸点に達したキリヤは眼前に立つ《二槍》を睨みつける。

睨み付けられたところで物怖じすることのない《二槍》は倒れているステイクを見て、

「……ステイクを倒したか。クローバー王国の魔法騎士は貧弱だと思っていたがなかなかやるようだ」

「……………」

「……そんな顔をするな。これでも褒めている。貴様ほどの戦士はここで殺すには惜しいと思うほどに」

「何が言いたいんだよ」

「……ここはおとなしく退け」

「断る」

「……そうか。フィオレナの仇、とでも言いたいのか」

興味がなさそうに《二槍》は肩を竦める。

「……フィオレナも一時の感情で国を裏切ったが貴様もまた一時の感情で命を捨てるか。彼我の実力は明確。そこから一步でも動けばそこは死地だというのに」

「フィオレナは譲れないモノがあった。そのために勝てないと分かってもあんたに立ち向かったんだ」

「……愚かな——ッ!？」

言葉を終える頃にはすでにキリヤの拳は《二槍》の左頬を捉えていた。

顔が歪み打ち抜けば《二槍》は二歩ほど下がり、口端から血が零れ滴る。

「愚かなんて上等だ!! 仲間やられて黙ってるほどオレア人間出来ちやいねえんだよ!!」

「……本当に愚か者だ」

「ぐ——ッ!!」

殴り飛ばしたかと思えばすでにキリヤの掌には槍の一撃によって

風穴が開けられており、次ぐ一撃もあまりの速さに氣も魔マナの流れも氣付く頃には穿たれている。

急所を避けたところで足を穿たれ機動力を殺され、《二槍》はキリヤを見下ろす。

「……ステイクとの戦いで疲労していたとしてもすでに実力の差は分かるだろう」

相手は身体強化魔法すら使っていない状態でこの差。

明らかに勝てる見込みなどどこにもあるはずがない。だが、それでもキリヤは拳を地面に叩きつける。

「フィオレナは……勝てないって分かってもあんたに挑んだ。オレが来るって信じて戦った。だからオレが逃げるワケにはいかねえんだよ」

「……そうか」

あまりに一瞬過ぎて《二槍》の腕がブレただけしか見えなかった。

そして身体が一瞬揺れたかと思えば自らの左胸に違和感を覚えて、見れば――

「ボクチャンツ!!」

トウルーが慌てた悲鳴にも似た声を上げるもキリヤには意味が分からなかった。

ゆつくりと、徐に違和感を覚えた左胸を見ればそこには――何もなかった。

いつも聞こえていた鼓動の音も消えており、咳き込めば手に広がるのは夥しいほどの血。

「マジ、か……」

キリヤの意識は途切れ、その身体は地面に沈む――

◎

「……は……どこだ?」

やけに温かな、それでいて何もない空間。

気付けばキリヤはその場に立っていて周りを見渡してみれば今までキリヤが歩んできた記憶が映像として流れていた。

メレオレオナとの出会い、修行、魔導書授与、入団試験、パシリラ



ンク決定戦、魔宮探索、ベレラファスラの戦い——これまで歩んできた全ての道が示されていた。

魔女の森にいたはずなのにどうしてこんな場所にいるのか。

それが分からずキリヤは首を傾げるも考えても分からないので思い出に浸ってみる。

今までたくさんの人間に出会って、たくさんの精霊に出会って。

気付けば一人でいる時間などないほどに楽しい時間を送ってきた。誰も彼もがかけがえのない存在で。

だからこそ——帰らないといけないと思った。

「でも帰るってどこに?」

『そりゃ皆のところになる。オマエを必要としてるヤツらがいっぱいいるんだから』

「え、誰?!」

突然自分と同じ声がすれば驚いて振り返る。

するとそこには鏡写しのように自分と瓜二つの少年——ただ髪色だけが違う少年が立っていた。

その少年はキリヤを見るなりにこつと人懐っこい笑みを見せ、

『オレは初代オマエだよ——アルーグって言えば分かるか?』

「え、マジで!」

アルーグと言えばサイルが求めて止まなかった存在だ。

その少年が今日の前に立っていて、キリヤに向かってピースしている。

だがそれ以上に困惑することばかりで、

「初代オレってどゆこと?」

『ガルガンのヤツ、オレを捕まえて記憶消しまくりやがってよ。こうやって深層心理にオレ自身の人格を残したけどそれから何度も記憶削除を繰り返されたせいでいくつも人格が出来て消えるを繰り返してな。他はもう完全に消えちゃったけどその中でもオマエが一番新しいオレさ』

「サッパリ分かんないけどあんたがオレの初代なのか……」

『初めからそう言ってるだろ? やっぱオレってバカだな!』

「ははは！ ……じゃなくて！ どんだけサイルがオマエに会いたがってたか！ いるんだつたら会ってやれよ！」

『残念だがそりゃムリな話だ』

「何で!？」

『そもそも今のオレはオマエだから出ようと思えばオマエの人格が消えちまうし。他のヤツらと違ってオレの身体はオリジナルだからな。サイルみたいにおいそれと魂チェンジ出来ねえワケよ。オレらの場合魂チェンジはいらねえけど！』

「か、軽く言ってるけどサイルに会いたくないのかよ?」

『会いたいよ。会って思いつき抱きしめてやりたい。だけど今はもうオレもサイルも死んだ身だ。今を生きているオマエやシイナや他の人間を犠牲にしてまですることじゃない。例えエルフの末路が悲惨だったとしてももう死んだんだ。だから安らかに眠るべきだってオレは考えてる』

「そういうモンなのか……」

『そういうモンだ……つてそんな辛気臭い話をするために話しかけたんじゃないの!』

アルーグのツツコミに首を傾げるキリヤ。

全く自覚症状のないキリヤにアルーグは我ながら呆れた様子で額に手を当てる。

『オマエ今死にかけなんだよ。このままだとあの世に魂を持っていかれちまう』

「ああそうか！ オレ 《二槍》 にやられたのか!!」

ここで急速に思い出す記憶。

魔女の森で 《七剣総統》 の 《四拳》 を倒したのは良いがその後に見えた 《二槍》 に完膚なきまでにやられた。

悔しくなつて拳を握り締めるキリヤにアルーグは笑う。

『でももうオマエの傷はサキムニが治して今は心に入ってオマエの意識を迎えに来ようとしている。ただオレがオマエに教えたいことがあつて止めてるんだけどな』

「教えたいこと?」

『ああ。魔王が封印を解いたのと一回死にかけたおかげでガルガンがオレに仕掛けてた魔力の封印は完全に解けた。オマエが目覚めたら今とは比べモンにならないほどの魔力が使えるだろうよ。あと耳とかとんがるぞ』

「カツコ良くなるワケか!」

『まあそうなるな。で、オマエの身体進化魔法のことだが先輩がイイことを教えてやる!』

「お、何だ?」

『——もつと精霊と一つになれ。今までオマエの身体進化魔法の鎧はただ表面上しか連結<sup>リンク</sup>出来てねえ。もつとだ。まるで自分の身体のように、手足のように、混ぜ合わせる感じで繋がれ。そうすればオマエと精霊の絆に誰一人として太刀打ち出来ねえ!!』

「もつと一つに……」

自分の手を見ればアルグはキリヤの胸に拳を当てる。

『オマエはオレだ。オレはオマエだ。だからオマエならやれる。最強になれる。何が《二槍》だ、一番じゃねえのかよって鼻で笑ってやれ!!』

「ああ、任せろ!!」

キリヤもアルグの胸に拳を当てればアルグの姿は消え、代わりに現れるのはサキムニの一体。今にも泣きそうなサキムニはキリヤに抱きついてくる。

『ご主人、ご主人……っ!』

「ああ、もう大丈夫だ。行こうサキムニ、あの野郎にオレ達の真の力見せてやろうぜ!」

『うん……っ!!』

サキムニも大きく頷けばキリヤの意識は覚醒していく——

◎

「……………」

倒れた少年を一瞥し、《二槍》——マンダラは踵を返す。

心臓を穿てば生きてはいられない。即死だろう。

精霊の一体が傍に寄り添うもどのような回復魔法ももう無駄だ。

そう思えば――

「……っ!!」

今だかつて感じたことのない魔<sup>マナ</sup>の奔流にマンダラは思わず振り返る。

それは倒れた少年から発せられている者であり、その魔力の濃密さはもはや人間ではない。

精霊の領域――いやそれ以上に滾る魔力にマンダラも目を見開く。

「……貴様」

倒れていたはずの少年が土を握り締め目覚めればその身体を光が覆い、鎧が形成される。

身体進化魔法”レベル28・レベルットアーマウイクトリ。兔々戦の勝鎧”。

線の細い形状の鎧。兜に刻まれたV字の装飾が二つ重なり、魔力の帯が二本首元から揺らめき、その雄々しき姿を彩っていた。

目を奪われる魔<sup>マナ</sup>の輝き。

だがすぐにマンダラはその場から吹き飛ばされる。寸でのところで魔槍で防御したものの咄嗟の行動のあまり構えていた手元が震えるほどの威力。

これまでにないほどの力に思わず笑みが零れ、

「……俺の名はマンダラ。貴様の名を聞こうか」

「キリヤスフィール・フィン・ガルガン。感謝するぜマンダラ――あなたのおかげでオレはまた強くなれる」

兜越しても分かる不敵な笑みを浮かべ少年――キリヤはマンダラに向けて駆け出す。

## 57話 「兎炎霊の業猛鎧」

「行くぜマンダラアアアアアアアア——ッ!!」

その場で連続して拳を振るえばキリヤの拳は衝撃波として放たれ魔力の拳となってマンダラに向かっていくつも飛ぶ。さらに空中で弾かれ様々な角度でマンダラに迫る。

魔槍を構えたマンダラはその攻撃に対応し、切り落とすも分裂し兎の形に変化してさらなる追撃を行う。

「……っ！」

その兎がマンダラの身体に張り付けば拳の衝撃がマンダラを襲い、一発でも被弾すればそこから一発に込められた分の一撃の数々が連続で打ち込まれる。

「……ただの兎ではないか」

被弾した箇所を手で押さえることで衝撃を殺し、それと同時に駆けてキリヤとの距離を詰めてくる。

敵と認めてくれただけあって身体強化されたその速度はもはや瞬間移動にも等しい。だがそれでも今のキリヤは負ける気がしない。

螺旋する槍の一撃を脇に挟み込めば返す刀でヘッドバッドで打ち返し、しかしマンダラもその瞬間に蹴りでキリヤの身体を蹴り飛ばす。

穿<sup>がんかつ</sup>袂魔法“ヴァルサー”。

離れたキリヤの足元の地面が形状を変化させ槍と化せば無差別に襲い掛かる。

キリヤは躲しながら倒れているフィオレナを抱き上げトゥルーを回収し、一度大きく跳んで離ればフィオレナを魔女の一人に向ける。

「この子を頼む!!」

「え、あ、はいっ！」

女至上思考が強い魔女でもキリヤの言葉に圧されフィオレナを受け取り、それを見ると再び跳んでキリヤはマンダラの元へ戻って拳を叩きつける。

「……これで邪魔者はいないな」

「邪魔だなんて思ってたねえけどな!!」

魔槍で防御されそこから始まる拳と槍による応酬。

見えなかつた一撃が見えるようになり、互いの一撃は徐々に勢いを上げ速度を上げ、先に届いたのはキリヤの拳だった。マンダラの腹部を打てばマンダラも堪えきれず血を吐くもその腕に地面が絡みつき

——  
穿袂魔法“ヴァルサーリール”。

触手の如く蠢いた大地の槍が何条もキリヤの巻きつけば突如として天空へ伸び上がり、頂点まで達すれば高速回転したままキリヤを地面に叩きつけ、同時に地面が炸裂し抉れる。

「いつでええええええええええええ——ツ!! だアアアアアアアアアアアアアアアア——ツ!!」

痛みなど声で吹き飛ばし、絡みつく槍を殴り飛ばして復活。

その瞬間を狙って肉薄していたマンダラの魔槍を持つ手の腕は恐ろしい勢いで筋肉が膨れ上がり、そこから放たれる一撃の速度はもはや光速に達する。

「ラビットラビット兎瞬発蹴!!」

それでも来る方向さえ知っていれば反撃が出来る。

サキム二達の後押しでマンダラの魔槍と匹敵するほどの速度になった蹴りが正面からぶつかり合いその余波は空に浮かぶ雲を掻き消すほど。圧倒的な膂力のぶつかり合いだがキリヤの勢いは収まらない。

ぶつかり合っていた蹴りと魔槍の拮抗は崩れ、砕き割れるのは魔槍。そしてキリヤの蹴りはマンダラへと叩き込まれる。

蹴られ後ろに下がったマンダラは粉塵に包まれた魔槍の柄を握り締めながら——笑った。

「……まさかここまでやるとは」

「ぶっちゃけオレも驚いてるけどな」

「……貴様を侮ったことは謝罪する。だが——ここからが私の本気だ」

指輪を外せば爆発的に上がるマンダラの魔力。

そして碎き割ったと思われた魔槍は中から一回り細い魔槍が現れ、その秘められた魔力と威圧感からあれが魔槍本体であることが分かる。おそらく今までののは鞘に収めて戦っていた状態だろう。

それでもキリヤに恐れはなかった。負ける気もなかった。

むしろ興奮しているほどだ。これほどまで精霊と一体化したことなどなく、その初めての相手が今まで出会った中でもトップクラスの強者となれば遺憾なく自分の実力を試せる。

初めはフィオレナやサキムニを傷つけられ憤慨していた。許せない気持ちが消えていないのは事実だがそれと同じくらいに爽快さを感じている。

純粹な、混じり気のない戦闘。

それを感じているのは相手も同じようで、笑ったのはそういう意味だろう。

『……………』

と、そんな時にキリヤの肩に降りて来たのは炎で形取られたトカゲだった。

いや、よく見るとそのトカゲは〈白夜の魔眼〉の〈サイドアイ三魔眼〉ファナが使役していたサラマンダーであり、サラマンダーはキリヤに目で訴えかけてくる。

「何だオマエも力を貸してくれるか?」

言葉にせずとも言いたいことは分かる。

サラマンダーは領けばキリヤの魔導書の空白ページに触れ、新たな魔法が刻まれる。

そして魔導書からサラマンダーは伝えてくる——力を使ってくれ、と。

サキムニとサラマンダー。片や数で、片や火力で、どちらも一国の軍事力に匹敵するほどと云われる精霊達。

ならば——

「行くぜサキムニ! サラマンダー!! オマエらの力を貸してくれ!!」

二つの力を合わせキリヤの身体は新たな進化を迎える。  
燃え尽きぬ業火。止まぬ連撃。万物を連鎖的に燼滅せし超攻撃特  
化形態。

——身体進化魔法”レベル58・サラマンドアルマウイクトリー 兎炎 霊の 業 猛 鎧”。

竜を模した鎧は赤褐色に染まり、兜はより鋭利になり竜に。そして  
鎧の各所に炎が灯る。

「らアアアアアアアアアア——ッ!!」

どれだけ夥しい槍が迫ろうともマナゾーンとサラマンダーの火力、  
そしてサキムニの連撃がマンダラの攻撃を全て焼き尽くし燼滅し、キ  
リヤの勢いは止まらない。

迫る真の魔槍の一撃もキリヤの拳が砕き割り、へし折れた魔槍にマ  
ンダラが驚いた瞬間——

「これで終わりだアッ!!」

マナゾーン”サラマンレッド・カリドウス・ブラキウム 業 火 炎 竜 灼 熱 腕” 連 撃。

放たれた一撃はマナゾーンとサキムニの力もあつて万以上叩き込  
まれ、辛うじて身体を残したマンダラの身体が地面に叩きつけられ  
る。そして動く気配もなくなり、キリヤは拳を握り締め喜びを爆発さ  
せる。

「しゃアアアアアアアアアッ!! オレ達の勝ちだアアアアアアア—  
——ッ!!」

『ホントいきなり強くなりすぎよーっ!!』

『心配させてこのこのっ!!』

『ボク達も飛びつくっ!!』

『オデもオデも』

「待ってジブラウスト! 流石に今のオレじゃ受け止められねえわ  
!!」

大の字で倒れば一斉に飛び込んでくる精霊達。

人間サイズまでは大丈夫だが流石にジブラウストサイズになれば  
今は無理で無理矢理起き上がった——

◎

「オマエ達の言う魔石はコレのことだろう。私には必要のないモノ



だ。くれてやる」

「え、魔石?! あぎーっス!!」

アスタ達の方も〈白夜の魔眼〉とダイヤモンド王国の〈八輝将〉を撃退に成功しており、キリヤの〈七剣総統〉撃退も合わせれば魔女の森の防衛を完了していた。

魔女王とバネツサの蟠りもなくなったように魔女王は耳からピアスにされていた魔石を外すとアスタに向かって放り投げる。

「〈白夜の魔眼〉はこれを欲しがってたみたいですけど何でか分かります? てか何者なんスか?」

「……その魔石は装着者の魔力を底上げする魔導具だ。だが真に使いこなせるのはエルフ族だけだ。そこにいる男に渡してみせよ。私が知るにこの世に二人しかいないエルフ族の生き残りだ」

「え、キリヤが!」

「そうみたいだ。スンゲー魔力あるんだけど今は抑えてるよ」

言った通り今は抑えて普段と変わらない魔力量だがどうやらまだキリヤはあの邂逅をきっかけに完全にエルフの魔力——アルーグの魔力を得てしまったようだ。おかげで覚醒したキリヤの耳は尖っており、試しに魔石を渡されると本当に魔力が底上げされ、キリヤ自身も驚く。

「うわびびっくりした!」

「こっちはそれ以上にびっくりしてるっての!」

「エルフ族は数百年前に生きていた高魔力保持種のことだ。非常に高い魔力を持っていたが数で勝る人間との争いで滅び去った……。あのファナとかいう女の三つ眼は禁術魔法はただの人間には出せない。他の誰かが発動したのだろう。だが禁術魔法の発動には途方もない魔マヤと何かしらの犠牲が必要となる。——古の魔神もまたエルフ族の長が発動した最大級の禁術魔法だ」

そしてアスタが持つ剣はエルフ族の長が使っていた魔法剣の成れの果て、そこまで聞けばアスタの頭は限界を迎えてショートしてしまう。

「だがこうしてエルフは今日の前に現存している……つまり生き残り

「ているということか？」

「いや多分オレとディフオーヌ……さんだっけ。その人以外は死んでるよ」

「ほう、何故分かる？」

「オレの中にいる初代オレが教えてくれた！」

そう言うのと魔王は理解出来ないと言った様子で怪訝そうにするもキリヤは構わずショートして倒れてしまったアスタの元に歩み寄る。

「なあアスタ、オレがへ白夜の魔眼の連中と同じエルフ族としたら……もうトモダチじゃいられねえか？」

「そんなわけあるかーっ！ オマエがエルフだとかそんなの関係なくオレの友達だ！」

「……そっか、ありがとな」

例えエルフだと知ってもアスタは変わらず、その言葉にキリヤは笑みを浮かべる。

と、魔王の視線は次にキリヤの魔導書に注がれ、トゥルーが仕方なきように飛び出す。

「トゥルー、一つ聞かせて欲しい。アナタは何故私の元を去ったのか」

「にやはは。魔王様は確かに完璧な人だったけどワタシはもつと不完全に不恰好なのが好きなんだ。だからボクちゃんについていくの。これ決定事項だから！」

「……そう。アナタとは長い付き合いだった分残念ね」

「今生の別れじゃないしました会いに来るよん。気まぐれだけど」

魔王とトゥルーは長い付き合いだったのか、互いの心は分かるのか笑い合う。

そのままキリヤに抱きついたトゥルーは満足げにしている、そうするとキリヤにも疑問があった。

「あ、あの！ 魔王様、オレも一つ質問していいですか!？」

「ディフオーヌ・フィン・ガルガンのことだろう。あの女もまた数百年前に存在したエルフ族の生き残りの女だ。しかし、残念だがあの女はここに侵入し盗みを働いただけだ。私はそれを撃退しただけに過ぎ

ん」

「そうですか……」

同じガルガンの名を持つから何かしら関係があると思ったがそれ以上は情報がないようだ。

少しだけ残念だがきつといつかは分かるだろう。そう楽観的に考えているとサキム二達が支えていたフィオレナが起き上がる。

「あ、あれ……ここは……」

「起きたかフィオレナ」

「先輩っ!? アタシ眠っちゃってたみたいでどうなりましたか!?

《二槍》は——」

「大丈夫だって、オレが殴り飛ばして勝った。ほら見てみ」

キリヤが親指で指せばそこにはサキムニやウンディーネの拘束魔法でガチガチに拘束された《四拳》ステイクと《二槍》マンダラが捕らえられており、キリヤの肩にサラマンダーが上ってくる。

それらを見たフィオレナは目を丸くして啞然とし、

「しかもそれサラマンダー……先輩スゴすぎます!!」

「おうおう、何とかするって言っただろ。とにかくオマエが無事で良かった」

「ぜんぱいっつ!!」

泣いて抱きついてくる可愛い後輩にアスタ達も笑い、キリヤも笑って一先ず結果としては最高な形で魔女の森を去れることとなった――

## 第9章 星果祭&温泉合宿編

### 58話 「星果祭開催」

「まさかへ七剣総統を二人……しかも《四》と《二》を撃退して拘束してくるとは貴様は留まるところを知らないな……」

「お褒めいただきありがとうございますっ!!」

本部にへ七剣総統の身柄を引き渡し、魔女の森での一件をシャーロットに報告すれば素直に褒められ、キリヤは両腕を広げて何やら期待した眼差しを向ける。

「……何だその目は」

「いや頑張ったんで姫様からのハグとか欲しくて!」

「絶対にせんど……ってそんな目で見るな」

『ちよつとちよつとーっ! だーりんは命懸けで頑張つて! しかもとんでもないヤツらを相手に捕まえて帰って来たのに褒めるだけで何もなしなの? 団長としてどうなの貴族としてどうなのーっ!?!』

「それは——」

『ボクチャンかわいそう! 頑張ったのに報われないなんて! クローバー王国の魔法騎士は義理も人情もないのねえっ! ダイジョーブ、ワタシがハグしたげるっ!』

ウンディーネはともかくトゥルーも魔導書から飛び出せばキリヤを抱きしめ徹底抗議。

終いにはサラマンダーが魔導書からキリヤの肩に上つて何も言わずじーっとシャーロットを見つめる。

「サラマンダーまでも……分かった。分かったから見つめるのはやめろ」

何故こんなことをしなければならないのかと言わんばかりな目を向けられるもキリヤは挫けない。

生憎ソルがいないためにストッパーもおらず、本当に仕方ないと言った様子でシャーロットに抱きしめられる。キリヤもノリノリで抱きしめ返し、

「ふっふーっ！ 相変わらず薔薇のイイ匂いがしますねーっ！」

「よし離せ今すぐ離せ。というより貴様メレオレオナ様に惚れているのではなかったのか？」

「……？ そうですけどそれがハグしちやダメな理由になるんですか？」

「そうか。元は野生児だったな貴様は……」

「姐さんに何をしとるんじやーいつ！」

「イタっ！ もうソルが来たか！」

団長室に突入してきたソルに蹴り飛ばされシャーロットから引き離されたキリヤ。

相変わらずシャーロットのこととなれば行動の早いソルはすぐさまシャーロットの前に立つ。

「最近成果を挙げてるからってそう易々と姐さんに触れられると思うなよー！」

「……よく来てくれたソル。今だけはその呼び名を許す」

「ありがとうございます姐さん！」

「もう結構触れたからだいじょーぶっ！」

「うらやまけしからんっ！」

ソルに横腹をびしびし指で突かれ騒がしくなる団長室。

ここでシャーロットは一度手を合わせ、その音で一度キリヤ達を黙らせる。

「報告ついでだ、聞け。もうすぐクローバー王国を代表する祭りがある」

「祭り、ですか……？」

「『星果祭』って言ってだな。ほら功績で貰える星あるだろ？ 四月

から翌年三月までの一年間累計した数を発表してその年一位の団を決めるんだよ。で、そのついでに国民総出で屋台とか出してドンチャン騒ぐんだ。それが祭りだ！」

「すっげえ！ いつやるんですか!？」

「今日の夕暮れから夜明けぐらいまでだ。羽目を外し過ぎず楽しめ」  
「姫様も一緒に行きましょう！」

「断る」

「何ですか!?!」

「貴様と行くと絶対に疲れるからだ」

「姐さんは私と回るんだ! オマエは精霊とかシイナとかフィオレナとかと回れ!」

「……ソル、正直オマエと行くのも疲れる気がしてならんのだが」

「そんなことないですよ! 不埒な輩が現れれば私が撃退しますから!」

「そんじやーシイナもフィオレナも連れて一緒に行きましょう!」

「話を聞け……」

こうして押せ押せで交渉してみれば結局シャーロットが根負けし、キリヤが他のメンバーを誘って共に行くことになった――

◎

「うわースツゲーっ!」

「スゴイ装飾ですね先輩っ!!」

「おいあまり離れるなよ」

「はーいっ!」

夕暮れ、始まった。星果祭。にやってきたキリヤとフィオレナは開幕からはしゃいでいた。

街中はいつも以上に賑わい、見ればソルが言っていたように屋台も多く見るものが珍しいキリヤとフィオレナはきよろきよろと辺りを見渡す。

すっかり保護者なシャーロットとその傍を歩くソル。はしやぐ二人にシイナは小首を傾げる。

「キリヤさんはともかくフィーちゃんも初めてなんですか?」

「はい!。だってアタシはクローバー王国の出身じゃな……くなくて遠い方でしたから!」

「そうでしたか。では本当に初めてなんですね」

「いえーすっ!。だから今日は楽しみまーす!」

「私は近くの休憩所で座っている。何かあれば来い」

「えー姫様一緒に遊んでくれないんすか!?!」

「私は団長だ。それともう屋台で遊ぶ歳でもない」

今のシャーロットはいつもの軽装の鎧を外してぱっと見へ碧の野薔薇〈団長とは分からないほどだ。

今にも踵を返しそうなシャーロットにキリヤは露骨に不満そうな顔で、

「ヤミ団長なら絶対楽しんでると思いますし童心は大切だの言おうと思うんすけど」

「あ、あの男は関係ないだろう！」

「そうだそうだ！ 姐さんとあんなムサ苦しいオブムサ苦しい男団長と一緒にすんな！」

「いや心の持ちようを言っただけなんだけどなあ」

『「こらこらだーりん、たまには女心を尊重しないと！ 一緒に来てくれただけで御の字でしょ！」』

「確かに！ じゃあ何か景品取れたら姫様のところに持って行きます！ あ、姫様に何かあったらダメなんでサキムニ一匹置いていきますね！」

「私は姐さんの美しさを際立たせるドレスでも探しに行くかーっ！」

ソルはソルでどこかへ走り去ってしまい、シャーロットも踵を返して休憩所の方へ。

残されたキリヤ、フィオレナ、シイナはとりあえず、

「せっかくの祭りだし回ろうぜ皆！」

「おー」

二人の賛成を得たところを出発。

屋台では普段は売られていない食べ物が多く売られており、それを楽しみながらも路上で行われる大道芸を鑑賞。戦闘以外の魔力の使い方をあまり知らなかったキリヤは心の底から楽しみ、拍手を送る。

数多ある屋台の中でもキリヤが気になったのは魔力を駆使して遊ぶゲームをしているもので特典が多ければ多いほど豪華な商品が貰えるらしい。

「あれやりてえ！」

「それでは行きましようか。フィーちゃんも良いですか？」

「先輩あるところにアタシありですからモチロン行きます！」

「へいらっしやい！ 一回三百ユールだよ」

キリヤは三人分として九百ユールを支払えばそれぞれに歩兵銃を渡される。

どうにもそれは遊戯用らしく実弾は撃てないが魔力は撃てるよう  
で一定時間現れる的をいくつ撃ち抜けるかを試すゲームらしい。

「それじゃ始め！」

店主の掛け声と共にゲームがスタート。

一度魔宮でやったことが似たようなゲームをしているために経験  
済みだ。現れる球状の魔力に向かって余裕と思いつつ撃つと――  
当たらない。

「あれ？ 何でだ？」

シイナもフィオレナも試しに撃ってみれば思った以上の着弾点で  
はないようで首を傾げる。

それからも感覚が掴めないまま虚しく時間は過ぎていき――

「残り三十秒だよ」

「アレ姫様にあげたかったけど無理っぽいなあ」

キリヤが見たのは賞品棚に飾られた特賞の花束。何でも永久に枯  
れない薔薇らしく、それならばシャーロットも喜ぶと思ったがどうに  
も当たらない。

少しだけ残念に呟けば何故かシイナの目の色が変わる。

「キリヤさん、少し銃を貸して下さい」

「え、あ、うん！」

「――行きます」

キリヤから歩兵銃を借り二丁を脇に構えればシイナはいきなり連  
射して射抜きまくる。

感覚が掴めたのかそれまでの当たらなさが嘘のように的が撃ち抜  
かれていき、あっという間に目標の点数を超えてキリヤもフィオレナ  
も驚いて啞然とする。

「お、おめでとうございます……」



これには店主も啞然としてしまう。

だが次の瞬間、シイナはその店主の胸倉を掴み寄せればその双眸を真っ直ぐ見つめ、

「認識を阻害して的に当てにくくしていたようですが——あまり嘗めた真似をすると容赦しませんよ?」

「は、はいいいいっ!」

自分よりも遥かに年下とは思えない剣幕に店主も両手を挙げて謝罪。

そんなガクブルの店主から薔薇の花束を受け取ればあれだけ凄んでいたシイナの表情は一気に笑顔になり、

「はいキリヤさんどうぞ」

「ありがとなー」

「いえいえこの程度のこと」

半ばスキップで歩き出すシイナにフィオレナがそそくさとキリヤに耳打ちしてくる。

「(シ、シイナ先輩ってキリヤ先輩のことになるとメチャ怖ですよね……)」

「そんなことないと思うけど。仲間想いのイイヤツなんだよシイナは」

と言いながらも先ほどの歩兵銃を撃つ姿は容姿は違えどサイルのもの。

何だかんだ手伝ってくれているのかな、その程度の認識でキリヤも後について祭りを回るのだった——

◎

「姫様これプレゼントです! シイナが取ってくれたんですけど!」

「これは薔薇か……しかもなかなか高価なものだな。まさかこのような祭りであるとは」

「どうスカ気に入って貰えますか?」

「ああ、感謝する」

休憩所にいたシャーロットに先ほどの薔薇の花束を渡せばあまり表情には出ないものの喜んでくれたようだ。

キリヤはシイナやフィオレナ達とイエーイと手を合わせ喜びを示し、シャーロットもその様子を見て微笑む。

他にも屋台で見つけてきたシャーロットが食べそうな物を渡そうとすると――

「おふうむうむ麗しいな。よし、今宵の相手はそなただ！」

「……………」

現れたのは明らかに酔っている貴族の中年男性だった。

周りの声から中年男性はバミルトン家のバルトン男爵という爵位持ちらしく、馴れ馴れしくシャーロットに近付く。

「まずは一緒に祭りを楽しもうか、さあついて参れ！」

「……………」

バルトン男爵の言葉を無視するシャーロットだがバルトン男爵は強引にその腕を引き、シャーロットの手から花束が落ちてしまう。

その花束を見たバルトン男爵は鼻で笑い、

「そのような安価で価値がないものなど持つ必要はない！ この私が最高級の花束をそなたに捧げてやろう！」

「……………価値がない、だと？」

落ちた花束を踏みつけようとするバルトン男爵の足首を掴めばシャーロットの眼光は威圧的なものとなり、相手を睨みつける。

「これは私の団員達が私のためにと手に入れてくれたものだ。権力を笠にすることでしか女を口説くことの出来ない陳腐で矮小な貴様程度が金を叩いて買うものなどよりも何千倍もの価値がある。それに貴様は私が女だからと軽々しく接してきたようだが貴様に私よりも勝るものが何かあるのか？」

そのまま荊魔法でバルトン男爵を締め上げるシャーロットの言葉は止まらない。

地面に落ちた薔薇の花束を拾えばさらに大量の荊でバルトン男爵を締め上げ、

「何がバミルトン家だ私はローズレイ家だぞ。あそこまで傲慢な態度を取ったのだ。私の魔法など容易く超えられるのだろう。早く貴様の魔法で私の荊をどうにかしてみろ」

「よしサラマンダー！ アレは姫様の敵だ！ つまりへ碧の野薔薇の敵だ！ 思い切りやっちまうぞー！」

『……………』

キリヤの想いが伝わったのかトカゲ状態だったサラマンダーは成長し四足歩行の火竜と化し、その大口を開ければファナの時以上の火炎がサラマンダーの口に灯る。

「ちよ、キリヤさんそれは流石にやりす——」

炎精霊魔法”サラマンダーの吐息”。

荊に囚われたままのバルトン男爵にサラマンダーから火球が放たれれば突然その前に人影が飛び出して魔導書から取り出した大剣で火球を天へ跳ね返す。

「流石にかーんっ!! やりすぎだキリヤーっ!!」

「あ、アスタじゃん」

そこにいたのはいつの間にか状況を見ていたアスタだった——

## 59話 「替え玉作戦」

「キリヤさん！ 流石に公衆の面前でサラマンダーは駄目です！ 例え団長を守るためでもやりすぎですから！」

「ええー……」

「でも先輩の気持ち分かります！ 何かキモかったですしあの男爵芋！」

「フィーちゃんはちよつと黙ってて！」

“サラマンダーの吐息”で騒然とする市民達だがそんなこと構わずキリヤはシイナから怒られていた。ついでにフィオレナも。

ドレスを手に戻ってきたソルもこれには驚き、

「うわ何だこの騒ぎ！ 姐さんどうしたんスか!?!」

「些細なことだ。あと団長と呼べ」

「はい姐さん！」

「いや些細なことじゃなかったでしょ！ というかまだあのオツサン締め上げられてるし止めなさいよっ！」

見ていたアスタは未だに荊に締め上げられているバルトン男爵を指差しながらソルに近付くも躓いてソルの谷間にダイブイン。通常の女性なら殴り飛ばすかビンタものだがソルはアスタを掴み上げ、

「あ、オマエ戦功叙勲式にいたチビっ！」

「誰がチビじゃあああああっ！」

「アスタ！ オレ前にソルの胸揉んだことあるからオレの方が上だな！」

「何と競ってんの!?!」

「そんなことより姐さん！ とてつもなくイカすドレスを見つけたんスよっつ！ 絶対似合いますから！」

「や、やめろソル……っ！」

アスタを放り投げたかと思えばソルはシャーロットの手を退いて簡易試着室に突入。どったんばったんと中で大暴れした後に出てきたシャーロットの服装はソルが持ってきたドレスへと変化していた。

蒼を基調とした薔薇の装飾が成されたドレスはシャーロットの美

しさをより一層引き立てる。

「イカすっス姐さんっ！」

「やっぱり姫様は美人っス!!」

「ドチャクソ綺麗です団長！」

「フィーちゃんその表現だとあんまり褒めてない気が……でも綺麗です団長！」

その姿を見た〈碧の野薔薇〉団員達は大きく盛り上がり。

一方野次馬と化していたアスタも含め男達もその美貌に盛り上がるが――

「騒ぐな男共見世物ではないぞ……ッ！」

「姐さんの美しさに盛り上がっていいのは〈碧の野薔薇〉の団員だけなんだよ！ 見るな見るな！」

「だったらオレは最大級に盛り上がってイイみただし精霊達と一緒に――」

「絶対やめろ。オマエだけで完結しろ」

「ええー……」

今からサキム二達の協力も得てパレード風にシャーロットを讃えようとしたが先読みされたのか即刻止められる。だがこういった場合止まってくれるのは良識ある者だけで。

魔導書からトゥルーが出てくればにやにやと悪い笑みを浮かべ、

「やっぱりボクちゃんの想いは形にしないとね！」

「何をする気――」

「サラちゃんと一緒におつきな花火で大宣伝だよくんっ!!」

精霊複合魔法“ニャンマンダーの大花火”。

トカゲ状態に戻ったサラマンダーを肩に乗せたトゥルーが火球を夜空へ打ち上げれば天高くで特大の花火が爆発。

しかもその花火には『ここにとびつきりの美人がいるにやくんっ!』と書かれており、それを見たシャーロットはわなわなと震える。「貴様何をしている……っ!」

「だつてえ〈碧の野薔薇〉団員だったら盛り上がってイイワケだしいゝ。ね〜ソルちゃん!」

「やりすぎだけどな!？」

ソルも予想以上の盛り上がり方をされれば少しテンパっており、しかしキリヤはうんうんと頷く。

と、ここでトウルーの出で立ちを見ればキャバ嬢時のドレスとはまた違ったドレスを身に纏っていた。

遊牧衣装と言えばいいのか。全体的に紫を基調とし、ところどころ猫を模した刺繍が施され、スカート部分には深いスリットが入っている。ぴっちりとしたサイズのためにトウルーの身体のラインの良さをより引き立てていた。

「あ、トウルーも衣装チェンジしたんだな」

「お祭りだからね、どうどう可愛い？」

「おう可愛いな。どっちかと言えば綺麗系？」

「むふふくボクチャンは素直でよろしい！」

『だーりんあーしも見てみてーっ!』

トウルーに頭を撫でられていれば今度はウンディーネが魔導書から飛び出してくる。

基本全裸で水色なウンディーネだが今は器用に身体の水を形状変化させてドレスを作り出しており、髪型もサイドテールへと変化して肌の色や髪色を自ら着色して創り出していて完璧な人間の少女となっていた。

「へー器用なモンだな! もちろん可愛いぞ!」

『いえーいっ! サキムーも見たげて! ほらほらサキムー恥ずかしがってないで出てきなよー』

「う……うん」

魔導書から出てきたサキムニは人間の姿になっていた。

兔精霊強化魔法“人間化”。

前に一度少女の姿になっていたのは見ていたが今のサキムニは完全に女性であり、恐らく全てのサキムニが一人に集中した結果なのだろう。その証拠に――

「デカイなー」

キリヤよりも身長が高く、二メートルは余裕で超えていて頭頂部に

ある耳も含めたら三メートルはあるのだろうか。

黒い髪を膝裏ほどまで伸ばしており、恥ずかしそうに容貌を手で隠しているもその隙間から見ても分かるほどの美女だ。メイド服を基にしたドレスも可愛らしく、その身長もあつて視線は一気にサキムニに注がれる。

「うう、恥ずかしいよご主人っ!」

「ぼふっ!? だ、大丈夫だ……今のオマエはどこに出しても恥ずかしくない美人だぞ」

高身長のサキムニに抱きしめられれば面白いほどに視界が黒く染まり、何とか宥めて引き離すと見ていた野次馬達から「こ、今年の〈碧の野薔薇〉はレベル高いな……」などと声が聞こえてくる。

と、今度はキリヤの掌に乗ったのは小さなゴーレムだった。

『これがおマツリ……』

『ジブラウスト? えらくちっちゃくなつたなオマエ……』

『僥倖。核さえあればジブラウストは維持出来る。我、それにより小さい形態を創つた』

『ナイスノーム! これでジブラウストも普段外に出られるな!』

『うん!』

小さくなつたジブラウストはウンディーネの頭に乗る、これにより一層祭りを楽しめると思えば野次馬が多く集まつてしまった休憩所にヤミが現れる。

「何だとびっきりの美人がいるつて花火上がったから来てみればオマエかよトゲトゲツンツン女王。つうかどうしたそんなキラツキラな恰好して」

「貴様こそ何だその奇妙な出で立ちは……」

至つて冷静に言うシャーロットだが本当にヤミの恰好はよく分かつた。

上半身裸に“暴れ牛”と書かれた法被を身に纏つて下は禪フンドシ。シャーロットの恰好を笑うヤミだがそれ以上に奇天烈な恰好をしているのには間違いない。

「小僧共も盛り上がつてるか?」

「はいヤミ団長！」

「デシゴレオンは……言うまでもないな。どんなハーレム築いてんだ」

「……？ 楽しいですよ祭り！」

「そりやそんなだけ女侍らしてて楽しくないとか言ったらウチのアツシーくんが死ぬぞ」

何やかんやトゥルー達に抱きつかれたままのキリヤは言葉の意味が分からず首を傾げるもフィオレナが、

「先輩って強いし人望もありますけどハイパーモテますよね……まあアタシの時みたいな感じで声かけてれば当然なんでしょうけど。しかも行動アリですし」

「モテ……？」

「皆に好かれるってことですよ」

「オレも皆好きだけど？ 皆モテまくりってことか？」

「いやそういうわけじゃなくて！ というかそれ絶対ヨソの男の前で言っちゃダメですからね!? 今の先輩が言ったらブチ殺されますよ!?!」

フィオレナが何を言いたいのかイマイチ理解出来ないでいるキリヤ。聞いていたシイナもこれには苦笑し、その間にもシャーロットの方では何だか対戦が行われていようとしていた。

様子を見にキリヤはヤミの隣に立ち、

「えと、これ何してるんスか？」

「よく分からんがバネツサがトゲツン女王に突っかかって酒飲み対決になったんだよ。トゲツン女王酒弱いつてのに」

現にそう言った途端それまでに飲んできていたのかバネツサがダウン。次いで飲んだシャーロットもダウン。

倒れたシャーロットの酒をヤミが飲み、両者引き分けに終わってしまった。

「何て虚しい戦いなんだ……」

終わった後に立つ者なしという光景を目撃してキリヤも息を飲む。

やがて市民達が騒ぎ始め、



「大広間で魔法騎士団の功績発表が始まるぞーっ！」

「今回は団長全員集まるんだってよー！」

「〈紅蓮の獅子王〉と〈紫苑の鯨〉に新しい団長も来るらしいし楽しみだー！」

「団長全員……？」

「でも姫様とヤミ団長はここにいるし……」

「行き遅れた。ヤベーどうするか」

「ええええええええっ!？」

功績発表があることはシャーロットも知っていたはずなのに何をやってしまっているのか。

シャーロットを見れば完全にダウンしており、このままでは到底間に合わない。

「ど、どうしましょうか……？」

「流石に欠席ってマズイっしょ！ ヤミ団長ならともかく！」

「オイ何でオレは『ともかく』なんだよ。結構マジメに仕事してっからなっ。」

「このままだと姫様のメンツに関わっちゃうだろうし……」

「話聞けよオイ」

ヤミの言葉が耳に届かないキリヤは無い頭で懸命に考える。

傍に居るのはキリヤが契約した精霊達で、その顔を見た瞬間に思いつく。

「よしっ!! 何が何でも姫様は功績発表に出席させるー！」

「出席させるって姐さんこんな状態なんだぞ？」

「幸いソルが着せたドレスのスカートは丈が長い。つまりオレが中に入って肩車してもちよいと屈めば何とか移動は出来るー！」

「先輩それだと団長の身体ぶらんぶらんになりますけどー！」

「そこはサキムニに一体ずつ背中とか腕とかに引っ付いて貰って人形みたいに動かす！ 声は……トウルー何とか出来るか？」

「任せて！ 声マネとか得意だから！ はいボクチャンと合体っ！」

身体進化魔法”レベル24・ニャンコニャンニャンラーマー 気紛れ猫精の軽鎧”

兜は猫耳を模したもので細くしなやかな鎧を纏えばキリヤは拳を

握り締める。

『猫精霊魔法』 ケットボイス 猫撫で声〃 ……これでボクチャンの話し声は完璧に美人団長と同じになったよ〜』

「ありがとう！ って思った以上に姫様の声だ！」

試しに声を出してみればキリヤの声はシャーロットの声そのもの。

これで無限に遊べそうだがそうも言ってられず、サキムニは〃  
ヒトカ人間化〃を解いてそれぞれシャーロットの背や腕に張り付く。

「多分実行して成功したとしてもトゲツン女王ドエライ恥かきそうだがけど大丈夫か？」

「大丈夫ですよ！ きつと姫様も分かってくれるはずですよ！」

支えられて立ち上がったシャーロットのスカートの中に入り込み、  
上を見上げれば――

「うわ姫様結構派手な下着着けてるんですね！」

「オマエ後で絶対殺されるわ」

思った以上に派手だったので思わず言葉が出てしまい、ヤミの冷静なツツコミが飛んでくる。

ドレスのスカートがボリユームあるおかげでキリヤが入ったところで大した変化はない。

「よーし行くぞーっ！」

『おーっ！』

キリヤの掛け声に精霊達も応え、今シャーロットの面子を守るための小さな戦いが火蓋を落とす――

## 60話 「功績発表」

「カカツ！ 随分と重役出勤じゃねえか野薔薇の団長さんよ……って何だその恰好は？」

シャーロットのスカートの中から肩車したキリヤは団長達の控え室にどうにか間に合ったものの遅れてきただけあって団長達の視線がシャーロットへ注がれる。ちなみに視界はここに来るまでにスカートの二箇所小さな穴を開けて確保してある。

それにしてもスルーしてくれると思ったが団長の中でも〈翡翠の蠟螂〉団長のジャック・ザ・リッパーは何かと人に絡むのが好きなようだ。というか確かにサキムニを装備しまくった今のシャーロットの出で立ちはおかしいが。

ここはシャーロットっぽい口調で、

「気にするなカマキリマン。少し団員達と祭りに興じていただけだ」

「カ、カマキリマン……？」

（しまった！ 思わず言ってしまった！）

名前をイマイチ覚えていなかったために思わず口が滑って前に言ってしまったあだ名を言ってしまった。

カマキリマンと呼ばれたジャックは不審に思うもそれより先に前に出たのは――

「シャーロット、貴様少し弛んでいるのではないか？」

〈紅蓮の獅子王〉のローブを身に纏ったメレオレオナだった。

新しい団長が来ると市民は話していたのは聞いていたがまさかメレオレオナだとは思ってもいなかった。

「レオナ様っ！ レオナ様が新しい団長だったんですね！ オレ嬉しいっスー！」

「レオナ様……オレ……？ 貴様、何かおかしくないか……？」

鋭くなるメレオレオナの眼光にキリヤはしまったと思いい、慌ててサキムニ達にシャーロットの身振り手振りをさせ、

「も、申し訳ありません。少し酒が回ってしまっているようで……」

「貴様なかなか酒癖が悪いクチか」

『——さあ国民みんなで呼ぼう！ 我ら九人の魔法騎士団長を!!』  
あまりにも適当な誤魔化したもののどうやらメレオレオナは納得してくれたようだ。

丁度良いタイミングで魔法帝ユリウスの声が響き、団長達はシャーロットに構っている暇がなくなって歩き出す。

と思いきや——

「——そんなところで何をしている莫迦弟子」

「ぎゃあああああつ！ 気付いてたんですかレオナ様!!」

先に他の団長が進む中、しゃがんだメレオレオナとスカート越しでがつつりと目を合わせられる。

その眼光は獅子そのものの威圧さを持ち、思わず驚いてシャーロットの身体が大きく揺れてしまう。

「声では一瞬気付かなかったが喋り方と気配で分かった。それで何故そんなところにいる？」

「あの、姫様がお酒飲んでダウンしちやつて……でも今日は特別な日って聞いてますし」

「貴様なりの気遣いか。それならもっと上手くやれ」

「うう、も、申し訳ありません……」

「時間もない。行くぞ」

「うすっ！」

「……話す機会があればシャーロットになりきるのは忘れるなよ」

念押ししつつメレオレオナは先に行き、キリヤも改めて後についていく。

薄暗い控えから出れば観衆の前にすでに他の団長達は立っており、キリヤもシャーロットを肩車したままそそくさと自らの場所と思われる端へ立つ。

「何で〈碧の野薔薇〉の団長はあんなにウサギを付けてるんだ……？」

そんな疑問の声が上がりながらも観衆の話題は〈黒の暴牛〉の団長ヤミがいない方が強く、そのおかげで難を逃れる。

『それじゃあ気を取り直して順位をいきなり発表しちやおつか!』

一位——〈金色の夜明け〉。

前年度の星を大きく更新した125という多大な数を持つて堂々の一位。

正直一位を取れなかったことは悔しいがやはり〈金色の夜明け〉は精鋭揃いなのだろう。

『〈金色の夜明け〉は今年も素晴らしい活躍だった。それでは星取得に最も貢献した団員——風の四大精霊を従えた期待の新人ユノくんに登壇してもらおうか!』

ユリウスの言葉によって登壇したユノは堂々とした立ち振る舞いであり、観衆からも歓声が湧き立つ。

そして二位の発表。観衆はそれぞれの予想を立てながら耳を傾ければ——

『第二位は——〈黒の暴牛〉!!』

その言葉に観衆の誰もが度肝を抜かれてしまった。

星の取得数は101。荒くれ者の集まりと称されていた〈黒の暴牛〉の二位に疑う声上がるも今までアスタ達が助けてきた人間達がそれを否定する。

『驚くのも無理はないよ。去年は異例のマイナス50だったからね。でも今年は目覚ましい躍進を見せ一気にこの順位まで上り詰めた!』

中でも凄かったのが新人のアスタくん……ってどこかにいるかな?』  
ユリウスが声をかければどこからか投げ飛ばされてくるアスタ。

その姿にスカートの中で様子を見ていたキリヤも自分のことのように喜んでいると——

『ここで新人の紹介をしたいところだけどそれは第三位を発表してからだよ! それじゃあ第三位は——〈碧の野薔薇〉! 星取得数はジャスト100! 〈黒の暴牛〉にはちよつとだけ及ばなかったね!』  
〈紅蓮の獅子王〉も〈銀翼の大鷲〉をも差し置いて〈碧の野薔薇〉が第三位。

観衆にとって今年は大波乱の年であり、ユリウスも興奮を隠しきれないように言う。

『女性が強い〈碧の野薔薇〉だけど今年はあまりにも凄い魔道士が入っ

たんだ！ 彼一人で獲得した星は団の中でも半分以上！ そして数多くの精霊を従え、スピード王国の〈七剣総統〉を単騎ですでに四人も倒した。その余りある実績から新人の中で最も魔法帝に近いことは間違いない！』

とんでもない前フリにキリヤも目が点となってしまうもユリウスはさらに大きな声で――

『それでは登場して貰おう！ 新人の中でも星取得数一位のキリヤスフィール・フィン・ガルガン!!』

(ええええええええ――っ!! 出にくいっ!!)

とんでもない雰囲気が出来上がってしまった場に今スカートの中から飛び出すのは難しい。

そう思っていれば魔導書が光り輝けばサキムニや精霊が次々と飛び出す。

『そーよっ！ このあーしウンディーネを従えてるんだから当然よ!!』

『当然。我らが主こそ一位に相応しい』

『オデもそうオモウ!』

『……』

『やっぱりご主人は凄いんだ!!』

ウンディーネやノーム、サラマンダー、ジブラウストにサキムニ達がこれでもかと言うほど魔力で派手に演出し、観衆の度肝をさらに抜いて場を彩る。

ユノのベルも合わせれば四大精霊が全て揃ったこの場はこれまでにはないほど自然の魔マナに満ち溢れ、ただ今のキリヤにとっては申し訳ないが自重して欲しいところだ。

『さっ場はあたためたから！ 出でよだーりんっ!!』

最終的にシャーロットのスカートに向けてライトアップされてしまい、出るしかなくなって鎧を解除してサキムニにシャーロットは任せて暖簾を潜る感覚でスカートから出る。

「ど……どーも」

「いやどっから出てきてんの!?!」

何だか色々申し訳なきが出ているもキリヤはユノの隣に立てばサラマンダーが右肩、ノームが左肩、ウンディーネが頭に両腕を乗せてもたれてくる。

「何か……ごめんな。二人の邪魔をするつもりはなかったんだけど」

「負けねえ。魔法帝になるのはオレだ」

「オレだっつーの！」

「相変わらず仲良いな。まあ頑張れ。オレは二人を応援してる！」

「いやキリヤ！ オレはオマエも超える気でいるからな！」

「ははは、そりや楽しみだ！」

『ユノくんとアスタくん、キリヤくんは共に新人の中で特に優秀で期待の新星だ。入団して半年で例を見ない素晴らしい成果を挙げた！

しかも二人は同郷の幼馴染で三人共若千十六歳、まだまだ将来が楽しみだね！』

その言葉に観衆も三人を褒め、だがすぐに――

「いやアスタとユノってのは最果ての下民らしいぜーっ!! しかもアスタってのには魔力がないインチキ野郎だろーっ!!」

心無い言葉で観衆達はざわめき、中にはアスタ達の実力を疑い始める者もいた。

この数の観衆でも声がした方は分かる。そしてそこにいたのはアスタが入団試験の際に戦ったことがあるセツケがいて、恐らくセツケがアスタ達の足を引っ張るために言ったのだろう。

『サイツテーっ！ ヒトの功績妬んで足引っ張るとかマジ考えられなーっ！』

『……………』

ウンディーネも分かったのか苛立たしげに言い、サラマンダーも言葉にせずとも口を開ける。

だがユノは至って冷静に魔導書を開き、

「ベル、全力だ」

身体から魔力を引き出せばいきなりアスタへと放出。

突然の一撃にアスタはすぐさま魔導書から反魔法の大剣を抜いて風を切り裂く。

「って何すんじやオマエはくっ!! 晴れ舞台上で殺す気か!」

「アレで死んだらその程度の男だってことだ」

『……二人の力を見てまだ疑う者がいれば出てきて欲しい。確かに二人は下民だが誰よりも努力しこの場に辿り着いた。努力する者のその足を引つ張る真似をする者がクローバー王国にいるとは思いたくない』

どよめく市民達だがすでにアスタ達の功績を疑う者はいなかった。と、そこでユリウスの視線はキリヤに向けられる。

『せっかくだ。新人一位のキリヤくんの実力も少しみんなに見せてやってくれないかい?』

「マジですか」

アスタとユノのように分かりやすいパフォーマンスなんてあったか。

そう考えるキリヤの肩を叩いたのは控えていたトゥルーで、

「どっかーんって魔力見せてあげたらどうかかな?」

『そーそー多分みんな驚くわよ?』

「そっか、それでイイのか——よっと!」

至極単純なのはキリヤに向いている。

促されればキリヤは両腕をクロスして一瞬集中すれば——“エルフ覚醒”。

人間とは比較にならないほどの魔力がキリヤから放出され、周りで見っていた団長も驚きで目を見開き、市民の中にはあまりの魔マナの奔流に耐えられず倒れてしまう者も出てしまう。

「これで良いですかね魔法帝……って、もしかしてやらかした感じですかコレ」

何人も倒れてしまった観衆を目にしてしまえばキリヤも急いで元に戻る。

だが少し遅かったようでユリウスも含めて周りは絶句。ドン引き状態と言っても良い。

「君は一体……」

「オレはオレですけど……」



『ほーら見て見て！　だーりんの力を見て卒倒しちゃってるわよ！』  
振り絞った魔法帝の言葉にキリヤはストレートに答えるもそうではなかったようだ。

喜んでくれているのはウンディーネ達精霊だけでキリヤは何だか居所の悪さを感じてしまうもそこから順位発表は何とか再開され、それでも市民達はどこか上の空のようだった――

## 61話 「国王との再会と王撰騎士団」

「レオナ様く何かオレ間違ったんスカね〜っ!」

「莫迦者が。こんな場で抱きつくな」

順位発表が続く中、先ほどのやらかしを気にしたキリヤはメレオレオナに抱きついていていた。

だがここは容赦ない拳骨で引き離され、涙目でキリヤは頭を押さえつけてしやがみ込む。

「——では順位発表も終わったことだしお待ちかねの我らがクローバー王国国王の登場だ!」

「そーいやこの国の国王ってどんなヤツなんだ!」

「オレ会ったことあるよ」

「マジで!? どんな人!」

「小物」

「それ絶対本人の前で言っちゃダメなヤツだ!」

サイルとの初戦で会った自称国王が本当に国王ならば事実だ。

ぶつちやけ魔法帝がトップの方が国は成り立つだろうとキリヤでも思うほどだがどうにもそうは行かないようで。微妙な拍手と共に現れるのは——国王。

絵に描いたようなザ・王様としか思えないその姿にアスタもユノも無言になってしまう。

「えーこほん。我が国民たちよ、御機嫌よう。クローバー王国国王  
アウグストゥス

A ・ キーラ・クローバーである」

「国王様ばんざーい……!」

「やめちまえ国王ーっ!」

アスタやユノと同じような反応で観衆達も微妙な反応を示し、その反応に国王は青筋を立てる。

「もつと余を讃えんかア——ッ!! とうか今さりげなく国王やめろ  
と言った奴は誰だ!? 余こそ国王ぞ!? 魔法帝なぞよりも遥かに偉  
大な存在なのだぞオオオオ——ッ!!」

いきなり激昂した国王が叫び声を上げたところで観衆は引き気味

の沈黙しか出来ない。

所詮血で玉座に座っているだけなのだから実際に行動し、皆の模範となつている魔法帝には遠く及ばないというのに。そうキリヤは思う。ちなみにやめちまえと言つたのもキリヤ。

『うつさーマジであれ国王なのだーりん?』

「残念だけどそうみたいだな……」

「ワタシも何度か見たけど魔法帝の方が王の器だよね。てゆうかセクハラ酷かつたし! ボクチャン慰めて」

「何だあの国王キャバクラ行つてたのか……」

「なっ!? 貴様あのキャバクラのキャバ嬢!? それに貴様はあの時の糞餓鬼ではないか!」

トウルーが抱きついてくる中、ようやく国王はキリヤのことが分かつたようで大きく指を差してくる。

「まあ落ち着けよ自称国王。オレらみんな引いてるよ……まさか国王がキャバクラで権威振るつてセクハラしてたなんてな。セクハラつて何か知らねーけど」

「ナチュラルなタメ口はやめんか!!」

「いやオマエに敬意示すほど尊敬してないし」

「はつきり言いおつたな貴様アアアアアアアアアア——!!」

「まあまあ国王落ち着いて下さい。怒るよりも先に国民に伝えることがあるでしょう」

「そ、そうだな……」

わざとらしく咳払いした国王は改めて、

「報告することがある——〈白夜の魔眼〉のアジトを突き止めた。今まで奴らの後手に回っていたがいよいよこちらが総攻撃を仕掛ける!

そのために魔法騎士から選りすぐりの騎士を集め最強の選抜隊を余が結成する! それこそが王撰騎士団!!」

国王の言葉によれば試験は一週間後に全騎士を対象として行うらしい。

その試験を通過すれば王撰騎士団への入団を許可されるらしいが

「何で王様が選ぶんだ？」

少し我慢していたキリヤの代わりにアスタが先に言ってしまった。

「オレ達が尊敬してるのは魔法帝や団長達で王様じゃないんだけど」

「だよなー。選ばれるにしても椅子に座ってるだけの王様に何の権限があるんだって話だよな。どうせアイツが選んでも王族とか貴族だらけになって本当の精鋭揃わないかもよ？ アイツ賄賂とか普通に受け取りそうだし」

「な……貴様ら……っ！」

「オレ今まで王様が何かしたって話聞いたことないし」

「オレも。前にクローバー王国が襲撃された時も『余を守れえ！』しか言ってなかった気がするし」

「スゲー魔力あるのは分かるけど国民に何もしてくれてなくね？」

「……そうだな」

アスタもユノもキリヤもその点は同じことを思っていたようで好き勝手言ってしまう。

トドメを刺したのはアスタの言葉で――

「やっぱりあの王様器小さそうだよな……」

「オイアスタ。こういう時は本当のことを言ったらダメなんだぞ」

「奇遇だな二人共。オレも会った時そう思ったしオレ一回アイツの器小さいせいで謹慎にされたし……」

「処刑じゃああああああ!! いくら強かろうが国王の余に対してこの狼藉!! 決して許されたものではない!! この三人を即刻処刑せよ――ッ!!」

「そういうところが器ちっちゃいって言われるんだって……」

逆鱗に触れたのかブチギれる国王にキリヤは冷静にツツコミを入れてしまい、ウンディーネやトウルは笑いを堪えるのに必死なようだった。

しかしこれは大問題。魔法帝を目指すアスタやユノがこんなところで処刑されるのは敵ったものではない。

「自称国王様!」

「何じゃ今さら様付けしおって!!」

「ごめん許して！」

「そんな安い謝罪で許すかアアアアア——ツ!! 国王を何じやと思つとるんだ!!」

「よし殴り飛ばそう！」

「それは流石にマズイって！」

分からなければ拳で伝えるまでと拳を握り締めるとアスタに慌てて止められる。

代わりに国王の前に出たのはユリウスで、

「どうか私に免じて気をお鎮め下さい国王。それにこの程度のことですの権威を振るえば安く見られますよ？」

「ぐぬ……っ！」

「王撰騎士団……私も期待している！ 魔法騎士達よ！ その力を存分に見せて欲しい！」

やはり魔法帝の人気は絶大なものでユリウスの言葉で場は収まり、盛り上がりを見せる。

(やっぱり実績も必要だけど上に立つには魔法帝やレオナ様とかみたいにこう……何か特別な才能がいるよな)

反面教師自称国王のおかげでつくづくそう思うのだった——

◎

「魔法帝すみませんでしたああああ！」

「良いんだよ。それより王撰騎士団ロイヤルナイツは次の実績を得るチャンスだ。君達は確かに凄いがまだ新人、試験には多くの猛者が集まるだろうが——驕らずに進んでおいで」

「はいっ!!」

魔法帝の言葉に大きく頷くアスタとユノ、それを見ていたキリヤも次いで頷く。

そしてアスタやユノは魔法帝に別れを告げて歩き出し、その後を追おうとすればキリヤの肩が叩かれる。

「ん……どうかしたんですか？」

「少しだけ話をしても良いかい？」

「ええ、大丈夫ですけど」

この後の予定も考えておらず、アスタ達について行くかメレオレオナのところに行こうかと思っただがユリウスの真剣な表情に足を止める。

了承すればユリウスも「ありがとう」と言い、

「とうとう四大精霊の三体と契約したようだね」

「はい。何かと縁があつて」

「本当に凄いとしか言いようがない。そして聞かせてくれ——キミは何者なんだい？」

真剣な眼差しのユリウス。

その目にキリヤも目を逸らさず、

「オレはエルフ族の生き残りらしいです。でもキリヤスフィール・フィン・ガルガンであることに変わりありません。それに——オレは守りたいものを守って信念を貫くだけです」

今度ばかりは正しい敬礼をユリウスに見せる。

今のキリヤを創ったのはメレオレオナでありシャーロットであり、今まで出会ってきたヒト達だ。だからこそ自分が人間じゃないからといって自分の信念は守りきらない理由にはならない。

その覚悟を示せばユリウスも笑む。

「そうか、それなら良かった。もしかしてキミ以外にもエルフの生き残りはいるのかい？」

「魔王に聞いた話だとディフォーレ・フィン・ガルガンって女性がいるらしいですけどその人がオレの母様なのか何なのかは分かりませんけど」

「なるほど……引き止めて悪かったね。もう行ってくれて大丈夫だ」

「それでは失礼します！」

改めて敬礼してキリヤはアスタ達が歩いていった方へ駆け出す――

◎

「えーっと、これどういう状況ですかレオナ様？」

「見れば分かるだろう、温泉合宿に行く準備だ」

数分後、無事アスタ達を発見したキリヤだがよく分からないことに

なっていた。

メレオレオナの背から炎の獅子の手が何本か出ていてそのうち一本がアスタをもう一本がユノを捕まえており、その背後にいるのは〈紅蓮の獅子王〉の団員達でレオポルドもいる。

——温泉合宿。

その単語には非常に聞き覚えがあり、ということば——

「オレだけの師匠じゃなくなっちゃったんですかレオナ様ア!!」

「莫迦者がアアアアアアア——ツ!!」

「久しぶりの顔面拳骨っ!?!」

「愚弟がいない間に〈紅蓮の獅子王〉は随分と腑抜けたらしくてな。仕方ないから私がしごいてやるだけだ。そしてこの二人は立候補したため連れて行くだけだアアア!!」

「いや立候補はしてませんけどね!?!」

「ということは今でもレオナ様の弟子はオレだけってことですか!?!」

「そういうことだ莫迦者オオオ——ツ!!」

「やったあ!! レオナ様大好きっス!!」

がばつと飛び込み拳骨されようが構わずメレオレオナの胸に飛び込む。

その後、ヤミ、シャーロット、ノエル、シィナも捕まってソルとファイオレナもついでについて来ることになり温泉合宿はスタートするこ  
◎ となる——

強魔地帯ユルティム火山登山道。

やってきた一行の眼前ではこれでもかど火山が荒れ狂いながら止め処ない噴火をしており、その熱波はとんでもないもの。全員がドン引きしているのが分かるがキリヤも初めて来た時は同じ反応だった。

「さあ行くぞ!! 糞莫迦共オオ——ツ!!」

「よっしや行くぞーっ!!」

「流石にそのテンションにはついていけねえよ!」

「ここは地中深くに巨大な魔<sup>マナ</sup>を浴びた火山帯があり常に噴火している。普段は人間の近付ける場所ではないが山頂には滋養強壮に良い

温泉があるのだ!! どうだワクワクしてきたらう!! さあ各々山頂に向かえ!!」

「はいレオナ様!!」

「先輩はメレオレオナ様先輩のことになると途端に盲目になりますね……」

「この温度も物凄いですけどキリヤさんと私達にもとんでもない熱量の差がありますね……」

「こうなればアスタ! そしてユノとやらも誰が最初に山頂に辿り着けるか勝負だ!」

「……勝手にどうぞ」

「チンタラせんとさっさと行かんかアアア!!」

アスタやユノに勝負を挑んでいたレオポルドはメレオレオナに蹴り飛ばされる形で登山道へ落とされる。

そして呼吸もままならない熱気の中、先立つヤミとシャーロットはこの環境下ですら構わず突き進んでいく。

あまりにも乱れない行動に〈紅蓮の獅子王〉の団員達が驚くも、「分かったぞ! 魔力を常時纏って身を守っているんだ! この魔<sup>マナ</sup>が安定しない環境でも一糸乱れない魔力放出で!」

「でも分かったところで一朝一夕で長時間やるなんて無茶だ!」

「いいやイケる——ツ!! 少しずつ感覚を掴み、ここに順応するのだ!! 腑抜けた自分を鍛え直すには最高の環境だ——ツ!!」

マナスキンのタネに気付いたことで〈紅蓮の獅子王〉から弱音にも似た言葉が飛び出すもレオポルドが激励しやる気を出す。

その最中、レオポルド達の隣をしれつとマナスキンを完璧に使いこなしているフィオレナが通り過ぎる。

去り際にふと〈紅蓮の獅子王〉の方へ振り向くと苦戦している様子を見て、

「え……この程度魔<sup>グリモワール</sup>導書貫う前には出来るようになってるのが普通ですよね? まさかクローバー王国の魔法騎士ってこんな基礎的なことも知らなかったんですか?」

フィオレナの何気ない言葉が〈紅蓮の獅子王〉やユノ達を煽り倒し



てしまった――

## 62話 「登山からの温泉っ！」

『案外カンタンねー』

『僥倖。コツなるものを掴んだ』

『ボクにも出来る！ ご主人ボクすごい!?』

『おうすごいぞサキムニ！ じゃあ皆山頂で会おうぜ！』

「うええ〜ボクチャン、マナスキン出来たけど登るのメンド〜おんぶして〜」

「分かった分かった」

“人間化”したサキムニや他の精霊達は元々は魔で身体が創られているためにマナスキンなど容易くシイナの目の前で出来て山頂に向かつて飛び出していく。

トウルーだけはマナスキンは出来ているものの運動するのが面倒なようにキリヤにもたれておんぶされていた。

『オデ、魔力ナ』

「イイんだよジブラウスト。本来ならオマエらはしなくてイイんだし」

さりげなく肩に乗っているサラマンダーもマナスキンをしていてそもそも火山帯との属性が同じだからする必要はないように見えるがどうにも付き合いでしているようだ。

その光景を見ながらシイナは己の苦戦が恥ずかしくなってくる。魔の一定量放出は口で言うのは簡単だがいざ実践となれば話は別だ。

先に行ってしまったユノはさておき現にノエルもレオポルドもソルもあまり一定に放出出来ておらず荒削りでその分魔力の消耗も激しい。

フィオレナはもう先に行ってしまった、コツを聞くことは出来ない。そう思えばシイナに気付いたキリヤがトウルーを背負ったまま戻ってくる。

「苦戦してるみたいだな」

「は、はい……ちなみにですけどキリヤさんはどれくらいからマナスキン出来るようになってたんですか？」

「レオナ様と初めて戦った時かな。見様見真似でやったら出来たし」  
「ゴツとかありませんか……?」

「ゴツ……か。魔力で服を着る感じ? そんな考えたことないからあんまりはつきりとした答え返せないけど」

「いえ、今ので充分です。私のことは良いですからどうか先に進んでください」

一礼すればキリヤはシイナの意を汲んで背を向けて駆け出す。

一瞬で姿が見えなくなればシイナは一呼吸し、両頬を手で叩いて気合を入れる。

「やります!!」

『良い覚悟ね。魔力放出が狂ったら教えてあげるわ』

「……? また私の心の声さんですか?」

『まあそんなところよ。無駄話は終わりにして始めなさい』

「はいっ!」

服のように当たり前に、意識せずまるで魔マを着る感覚で。

—— マナスキン。

深く考える必要なんてなかったのだ。フィオレナもキリヤも共通して当然のようにしており、確かにフィオレナからすれば出来ない方がおかしく見えるだろう。

「追いつきます……ッ!!」

影創成魔法“漆黒ノ影翼”。

影が伸びればシイナの背で一対の翼となり、飛び立つ。

『ほら、翼が出来ただけで背中の魔力放出が分厚くなってる』

「はいー!」

逐一心の声に叱咤されながらシイナは調整し、さらに加速する——

◎

「やっと全員揃ったな莫迦者共オオオ——ッ!! このユルティム火山は夜になると完全に噴火が止んでしまう! それまでに登れなかった者は後日もう一度来オオオオい!!」

『はいっ!!』

「よオオオし!! では全員温泉に浸かることを許すッ!!」

絶好調なメレオレオナが言い切れれば噴火が収まった火口から温泉が噴出し火口を満たす。

一瞬にして巨大な風呂が現れればアスタ達も気分を高揚させるもここでソルが両手を挙げ、

「男共に姐さんの清らかな裸体は絶対に見せんッ！」

土魔法“土壁遮断”。

温泉を二等分にする土の壁が現れ見事に男湯と女湯が出来上がればメレオレオナの「よし入れエ!!」と許可が下り、それぞれが男湯と女湯に分かれる。

だがそれに少々不満そうにするのが男女で分けた際に女湯側になったウンディーネやトゥルー達で。

『えくだーりんと別なのっ!?!』

「ボクチャンも一緒に入ろうよ〜」

「背中流したいのニ……」

「普段一緒に入ってるだろ？　ここはオレ達だけじゃないからワガママ言うんじゃないやしません。後日一緒にくればイイだろ」

露骨に不満そうにする精霊達だが仕方ない。

ここは皆がいるために裸を見るのも見られるのも嫌だと思ってる者もいるだろう。そうやってはせつかくの温泉なのに気分を害することになってしまう。

「え、オマエ普段精霊と一緒に風呂入ってたのか？」

「はい。男はへ碧の野薔薇の拠点にある大浴場使えないんで自室の風呂ですけどね」

「マジかオマエ、マジか……」

ヤミは特にトゥルーや“人間化”<sup>ヒトカ</sup>しているサクムニを見ていてキリヤはよく分からず首を傾げる。

ともかく、

「聞き分けなさい。以上！」

『『はーい……』』

少々言い過ぎたかしよんぼりした様子でウンディーネ達は女湯の方へ。

それを見送るとキリヤもサラマンダーやノーム、小さくなったジブ  
ラウストを連れて男湯へ――

◎ 「ふう……良いお湯ですね」

あれだけの熱気を持つユルティム火山だったが温泉は適温のよう  
でシイナは登山の疲れを癒す。

周りを見ればメレオレオナが酒を片手にシャーロットに絡んでい  
たり、ソルがノエルの髪を洗っていたりと各々好きなように過ごして  
おり、シイナは夜空を見上げる。

（今日もいっぱい助けて貰ったけど私の中から聞こえてくる声は誰な  
んだろ）

度々聞こえ、日を増すごとにはつきりと聞こえるようになった女性  
の声。

幻聴かと思っていた時期もあったがあれほどはつきり聞こえるの  
が果たして幻聴なのだろうか。というより幻聴なら魔力の扱い方な  
ど教えてくれないだろう。現にそのおかげでマナスキンはマスター  
出来た。

「シイナ先輩っ！ 何か考え事ですか？」

「いえ何でもないですよ」

上から顔を覗かせたのはフィオレナだった。

反応すればシイナの隣に座り、その視線はシイナの胸へと注がれ  
る。

「……？」

「女湯にいるみなさんホントにおっぱいおつきくてアタシペったんこ  
だから困ってたんですけどシイナ先輩には親近感が持てます！」

「……フィーちゃんってたまにとんでもなくデイスってきますよね」

周りを見てみれば確かに胸の大きい女性ばかりだ。

精霊はさておきメレオレオナやシャーロットの大人の女性は無論  
のこと同期であるノエルや年齢の近いソルですら大きい。対して  
シイナとフィオレナは見事な幼児体型のぺったんこ。

気にしていないと言えば嘘になるためにシイナは顎あたりまで湯

に身を沈める。

「あつて困ることはないでしょうが私たちの体格であつても身体のバランスがおかしくなりますよ」

「そうですねー。昔同僚に貧乳って散々煽られましたけどこの方が動きやすいですしー!」

「んにゃくまあ考え方はそれぞれだよねえく」

「あ、トウルーさん」

湯面に浮かびながら流れてきたのは最近キリヤと契約したケット・シーのトウルー。

大人びた女性の姿をしていて胸もまた豊満。巨乳は浮くと聞いてはいたがもはや身体すらも浮いてしまっているというのか。

こうしてまともに話すのは初めてでもトウルーは構わず体勢を変えてシイナ達の前で止まる。

「ねね、ボクチャンいなくて退屈だから恋バナでもしよっ」

「と、突然ですね……」

本当に突然の切り出しに驚くも相手は気紛れな猫だ。

キリヤから聞いていたが突拍子のない行動が多く、現に今がそれ。

「ボクチャンのこと好き?」

「確かに好きですけどきつと私がキリヤさんに抱いている『好き』は恋愛感情じゃないですよ」

「ほほー?」

「キリヤさんはへ碧の野薔薇の団員を本当の家族のように想ってくれて、血の繋がった家族と何一つ良い思い出がない私にたくさんのお出をくれました。——だから私にとってキリヤさんは憧れで人間として好きなんですよ」

「からの〜?」

「……からの、とは何でしょうか?」

「だって今のつて超絶建前でしょ? ワタシそういうの見抜けるレディなのよん」

「べ、別にそれ以上の感情なんてないですから!」

やけににやにやしているトウルーはそのままシイナに近付いてく

る。

「ここだけの話にしとくからさ〜?」

「ここだけが一番不味いですからね!」

異性として好きかはともかくメレオレオナがいる手前、軽率な発言は出来ない。

というよりトウルーに言えば絶対碌なことにならないのは目に見えている。

(あくまで友達としてですから! そんな恋愛感情なんてありません!)

『何はともあれ自分の心に嘘を吐くのは良くないわよ』

「ぐぬう……心の声さんまで」

「別に相手に好きな人がいようがまいが好きなものを好きだって言って何が悪いの? 一度きりの人生なんだから思うように生きないと! ほらほら! ホントは〜?」

「ええ……」

「好きな? 嫌いな? 男として見てどつちな?」

「……す、好きですよ。そ、その……い、異性として」

「へえ〜! いつ?! いつ好きになっちゃったの!」

促されて言ってしまったがもうすでに後悔してしまっている。

目を爛々に輝かせて顔を近付けてくるトウルーの表情はそれともう楽しそう。

しかし、促されたとはいえ白状してしまったので、

「思い返せば入団試験の時に見て一目惚れ……でしょうか」

「ボクチャン、カツコイイもんね〜!」

「他言無用ですよ!? 本当にお願いますからね!」

「わかっているわかってる〜……おいボクチャン! シーちゃんがボクチャンのこと男として大好きなんだって〜!」

「何してるんですか!」 他言無用って言った傍から何ダイレクトしちゃってるんですか!」

「え〜だって言いたくなっちゃったんだもん!」

両肩を掴んで揺さぶればあらゆる部分が揺れるトウルー。

その表情は何の悪びれもなく、それよりもシイナは手を離せば、  
「あのキリヤさん！ 今のは——」

『オレも好きだぞシイナ！』

「ええっ!？」

「何を騒いでるか莫迦者共」

「わーっ！ 違うんです違うんですメレオレオナ様！ 今のはえーつと、その、あれです!！」

キリヤのことだから好きだと言っても友達としてなどだろう。

立ち上がって必死に取り繕おうとしても頭に手を置かれ、再び湯船に座らされる。

「別に構わん」

「え?！」

「獅子は一匹のオスを筆頭に複数のメスが囲い群れをもつて生活する。貴様が望み、あの莫迦が受け入れればそれも可能だろう」

(……ん?)

慌てていたが冷静になってみればメレオレオナの発言に違和感を覚える。

今の話、まるでメレオレオナも含められていたような、というかすでにメレオレオナはキリヤのことを受け入れているような——

「ち、ちなみになのですが……メレオレオナ様はその、キリヤさんと本気で結婚するつもりはありますか……?！」

その弾みでずっと聞こうと思っていたことが思わず口から零れてしまった。

これは怒られる、と思えば案外そうでもなく、

「あの莫迦弟子に『参った』と私に言わせれば結婚でも何でもしてやると言った。正直あの莫迦の成長には驚かされる。四大精霊の三体を従え、どういうタネかは知らんが魔力だけで言えばどの団の者よりも上だ。私が『参った』と言う日も近いかもしれんな……」

(あ……)

メレオレオナが見せた不意の微笑み。

キリヤに対して明確な想いを口にはせずともその成長を心から喜



び、誰よりも認めている。それ以上詮索するのは野暮だろう。

思えばメレオレオナは言葉遣いや教え方が荒いものの相手が王族だろうが貴族だろうが下民だろうが立場など構わず面倒見がよく、それは弟子であるキリヤも同じだった。

(やっぱり師匠と弟子は似る者なのでしようか……)

納得したところでメレオレオナはシイナの目を真っ直ぐ見つめ、やがて言う。

「経緯はどうであれ貴様もノエルと同じように柵しがらみから解き放たれたのだな」

「は、はい！ キリヤさんのおかげで！」

「——ならば後は自らの過去を超えろ。誰かの代替品ではなくシイナ・シユヴァルツとしての証明を貴様の強さをもって姉を超え見せつけろ」

「っ！ はいっ!!」

王撰騎士団ロイヤルナイツ選抜戦でもしへ銀翼の大鷲に属する姉に当たるとすれば。

それはきつとシイナ自身のけじめをつける瞬間だろう——

### 63話 「男風呂と覗き」

「へえーアスタは今回の修行で反魔法を全身に回して強化出来るようになったのか！」

「おう！ オレも初めて魔法を使った気分になれたぜ！」

「ブラックアスタ！ オレがそう名付けた！」

「何それカッコイイな！ レオポルド義弟くん！」

「そ、その呼び方はどうかやめて欲しいものだが……」

男湯にてキリヤは早速アスタから今回の修行の成果を聞いていた。

当のアスタはさりげなくキリヤの肩に乗っているサラマンダーに触ろうとするも寸でのところだがぶつと噛まれてしまい、

「いでえーっ!？」

「あ、こらサラマンダー！ 噛むんじゃない！」

「あの〈サードアイ三魔眼〉から離れておとなしいと思っただけどやっぱりダメかーっ！」

キリヤが背を軽く触れるとサラマンダーもアスタの手を離し、離ればアスタも痛がる。

何故触ろうとしたのかさっぱりだが口を離れたサラマンダーはキリヤの頭に移動してしまう。

「やっぱり火属性だから湯は嫌いなのか？」

『……………』

ぺちぺちと尻尾で叩かれれば何となく嫌なのだと察する。

サラマンダーは炎の塊だが髪が燃えることもなく、不思議だと思っ  
ていれば珍しくユノからキリヤに話を切り出してくる。

「キリヤ、少し教えて欲しいことがある」

「ん、どした急に？」

「キテンの時、オマエは魔法で精霊と一体化してた。それはオレでも出来るのか？」

「おう。実際元へ白夜の魔眼〉のサイルって女がしてたしな」

「どうすれば出来る？」

「どうすれば、か……」

キリヤの場合は今まで身体進化魔法で精霊と一体化してきた。

だから方法など考えたこともなかったがそこでアルーグの言葉を思い出し、

「ちよつと見ててくれ。サラマンダー行くぞ」

精霊と一つになる。自分の身体のように。手足のように。混ぜ合わせて一つになる。

——精霊同化”スピリット・サラマンド”。

サラマンダーがキリヤに溶け合うように吸収され、同化が完了すれば一気に湯の温度は跳ね上がる。

「どあっちゃーっ!!」

「あづっ！ 何やってんだデシゴレオン！」

思わぬ余波にアスタやヤミ、へ紅蓮の獅子王の面々が湯から飛び跳ねる。

女湯の方でも「うわ熱ッ！」というソルの声が聞こえ、キリヤも慌てて同化を解除する。

「すみませんっ！ ちよつとユノが精霊との同化の仕方知りたいつて言うからまずは見せる的なことしたんすけど！ ってユノ大丈夫か!?!」

一番近くにいたユノが一番熱の影響を受けているようだったがユノは不敵に笑う。

「ぜ、全然大丈夫だけど……」

「……マジでごめんな。ウンディーネ、ちよつと湯を冷まして元に戻してくれ！」

『あいあいさーっ!』

壁越しで伝えればウンディーネの力で湯は先ほどの温度に引き下げられる。

見本を見せたところでキリヤは改めて湯に浸かり、

「マナスキンと同じ感じさ。精霊を着る感覚で自分に混ぜ合わせる。ただ取り込むんじゃないかって心から一つになるんだ。まあオレも最近教えてもらってまとも出来るようになったけど」

「そうか。ありがとう」

「何こんなところでも修行してんだ真面目過ぎんだろ。ここは温泉、向こうは女風呂、そうなりやもつと楽しみ方あるだろーが」

「……?」

「覗くぞ女風呂」

ヤミの突拍子のない発言に男湯、特に〈紅蓮の獅子王〉の面々に衝撃が走る。

向こうにいるのは現〈紅蓮の獅子王〉団長メレオレオナを筆頭に女性でも猛者ばかり。下手どころか見ようとした時点で殺されるだろう。

ざわめく〈紅蓮の獅子王〉の面々をヤミは一発で黙らせる。

「男に生まれたなら命を賭してでもやるだろうが。なあクールくん？」

「いや見たくないです」

「やめてやってくださいヤミ団長！ ユノは本当に見たくないんですよ！ 子供の頃から男としか風呂に入りませんでしたし！」

「オイアスタ。誤解を生む言い方はやめろ」

「デシゴレオンはどうだ！ アネゴレオンのが見たくねーか!？」

「オレ見たことありますよ？ というか何度も一緒にお風呂入ったことありますし」

『え?』

しれっととんでもないことを言うキリヤに〈紅蓮の獅子王〉の面々の中でもレオポルドが度肝を抜かれてしまう。

「ここも修行の時何度も来ましたしその時に一緒にお風呂入ったり背中を流したりしました！」

「そうか、確かそんな記憶もあったな……」

キリヤの記憶を見たことがあるヤミはそういえばと思い出し、しかしキリヤは立ち上がれば手を合わせ指を絡めて腕を伸ばしてストレッチする。

ヤミの言葉に意味がないとは思えない。現に覗きにはいつもの戦闘とは違う隠密性、そして大胆性を求められる。つまりこれはヤミからの一種の修行なのだろう。

「——でもやりましょう！」

「ははは！ その意気だ骨は拾ってやる！」

「兄上ならば……」

「オイ爆発ヘッド。あの熱血真面目大王と一緒にどーするよ。テメーはアイツを超えるんだろ？」

「ツ!! そうだ、オレは兄上を超える！ よオオオオオし覗くぞオオオオオオオ——ツ!!」

巧みなヤミの扇動に乗せられたレオポルドは猛り声を上げ、それに同調したへ紅蓮の獅子王の団員達がさらに声を上げる。絶対に女湯に聞こえていることは間違いない。

アスタやユノはノリ気ではないので放っておき、キリヤも拳を上げ、

「行くぞオマエらアアアアア——ツ!!」

◎

「な、何なの!?!」

最初に男達の雄叫びに気付いたのはノエルだった。

そこからバシャバシャと湯を蹴る音が響き、それが男女を隔てる壁に近付けばソルも事態を察し、

「まさか男のヤツら……ツ！」

「この死をも恐れぬ気迫に満ちた声、それでこそへ紅蓮の獅子王だ」  
「やってることただの覗きですけどね!?!」

メレオレオナは愉快そうに笑うもすかさずノエルのツッコミ。

壁を登る気だろう男達にソルは再び土魔法を発動して壁を高くするもそれより早く男達がその奥で元のサイズを取り戻したジブラウストが手にへ紅蓮の獅子王の団員を乗せて立つ。その肩にはノームもいた。

『あ、ノームっ！ ジブリンっ！ あんたら覗きなんかに加担して!!』

『……謝罪。我、主の命に逆らえず』

『オデ、よくワかんないけどキリヤにタノまれた……』

「なにになにボクチャンが覗きたいって言ったの!?!」

「何嬉しそうにしてんのよ！ 不埒者はブツ飛ばすわよ！ ウン

「デーネ、力を貸して！」

『りょーかいっ！ だーりんだけなら全然許したけど他の野郎に見せるモンはナシナシ！ ちよつとお灸を据えっちやう必要あるし!!』

水精霊創成魔法” 大海竜の轟咆哮”。

ノエルの魔法にウンディーネが後押しすれば三つ首の巨大な海竜が撃ち出され、ノームもジブラウストも驚いた様子を見せるもすぐさま魔法で対抗する。

土精霊創成魔法” 金剛巨人の絶対防御盾”。

ジブラウストの両腕にノームの魔力で大きな盾が創り出され、真正面から海竜を防ぐ。

ただでさえ頑丈なジブラウストにノームの防御が掛け合わさった盾は例えノエルの魔力でも砕くには足りないが――

「倒れるには丁度良いでしょ!!」  
大海竜の勢いは止まらず盾ごと押し倒し、男湯の方で悲鳴が上がる。

ジブラウストの大質量が倒れ込めば男湯の温泉は壁を超えるほど湧き出し、何人かへ紅蓮の獅子王の団員が空を舞うのも見えた。

「やった！」

『ざまーみろってんのよ!』

「ま、まあ、その……協力してくれて……ありがとう」

『え!? 何て!? おっきな声で言ってくれないとあーし聞こえない!!』

「ありがとうって言っただけ！」

ツンデレキラークライなウンディーネはノエルに耳を近づければ勢いに押されてノエルも礼を言う。それに満足げに頷けばウンディーネはもう一度壁を見ればあれだけ騒がしかった男湯が静かになる。

「随分と静かになりましたね」

「多分あのゴーレムが倒れて下敷きになったんじゃないかしら」

「バカな男共にはお似合いだな！」

温泉ほどの巨体なジブラウストが倒ればどうなるかなど想像に容易い。

簡単に終わってしまった男達の覗き作戦に楽しんでいた節があったトウルーは退屈そうにまた湯船に浮かぶ。

「にや〜んだかつまんないな〜」

「覗きに面白さとか求めないでくださいいいトウルー先輩っ!」

「でもフィーちゃんは見られても平気っしょ?」

「失礼な! 小児性愛者コエリコイシとかいるかもしれないじゃないですか!」

「まあそうだよねえ……ん?」

湯船を浮かぶトウルーだが途中で頭に何か当たって起き上がる。

見たところそこには何もなく、ただトウルーが触ってみればそこには何かがあるようで。

「どうかしましたか?」

シイナもそこに近付けばトウルーは怪訝そうに首を傾げる。

「何かあるんだよん。円柱っぽい?」

「何でしょうか……?」

手を伸ばしてみれば確かに何か透明な円柱があり、湯の中をまさぐると引つ掛かりがあつて持ち上げると――

「や……やつほーシイナ……?」

「うわああああああつ!? キ、キリヤさん!」

本当に驚いてシイナが尻餅をついてしまい、そこに座っていたのはキリヤだった。

円柱の中を見れば外側からは見えないが内側からはぼつちり外の光景が見える構造で、

「こんなところで何してるんですか!」

「ヤミ団長からの修行で覗きに来た!」

「何誇らしげに言ってるんですか先輩! あと絶対騙されてますからねそれ!」

「なるほど。ジブラウストとノームやへ紅蓮の獅子王を囷にして上へ視線誘導しそのうちにノームに創らせたそれを被って侵入か。少しは小手先が出来るようになったか莫迦弟子」

「いやだから褒めてもただの覗きですからね!」

「こんのバカ! 姐さんの裸体を拝もうだなんて絶対許さん!」

慌てて湯に浸かって身を隠すノエルにもう自分の全裸関係なしに拳を握るソル。

キリヤはもうバレた時点で覚悟を決めているようで腕を組んだまま目を閉じているも——

「ご主人っ！ ご主人来てくれたんだネ!!」

「もうボクチャンつてば正直じゃないんだからっつ！」

『身体洗ったげるだーりんっ!』

「じゃあアタシ背中流します先輩！」

先ほどまで全く元気がなかったサキムニを筆頭に精霊達がキリヤに近付いてすぐさま洗い場へ。フィオレナもついていって一瞬でキリヤの身体や髪が泡でもこもこになっていく。

「オレてつきりボツコボコにされると思ったんだけど！」

『だーりんならイイの！ あ、でもノエっちとかのは見るのやめたげてね!』

「分かってるって。事故で見ちゃったシイナは……何もなかったな」

「うわ今の発言めちやくちや傷付きましたよキリヤさん!？」

「あと姫様のもガツツリ見ちまった……」

「許さんっ！ やっぱりブン殴るっ！」

やはり一応罪悪感というものがあつたのか額に手を当てるキリヤ。

結果的に言えば覗きは完全にキリヤの一人勝ちであり、先ほどの告白のこともあつてまともに見られないシイナは思った。

（これ多分キリヤさんじゃなかったら本当に殺されていたかもしれないませんね……）

ジブラウストの下敷きになったへ紅蓮の獅子王達はある意味幸運の持ち主だったのでは——と。

そんなことを思いながらユルティム火山で行われた修行は幕を閉じていく——



## 第10章 王撰騎士団選抜試験編 64話 「風神鳥が語る真実」

『ねーだーりん。ホントにここでイイの？ 森だよ？』

「ああ、うん」

温泉合宿の翌日、キリヤは一人である森に来ていた。

本来ならばフィオレナの監視と共に連れてこなければならなかったが今回の一件はそうはいかず、信頼のおけるシイナに任せた。

キリヤの手には一枚の手紙。そこには――

『愛するキリヤへ。』

私はあなたの出自の全てを知る者です。

夕暮れにあなたが目覚めた森へと来てくれればそこであなたの真実を話しましょう』

自室で目覚めればこの手紙が置かれており、一瞬誰かの悪戯を疑ったがその手紙はどうにも風属性の魔力で刻まれものでウンディーネ達精霊が言うにはこの文字は風属性の精霊によつて刻まれたものらしい。

ユノと契約している風の四大精霊であるシルフ――ベルがそんな真似をするはずもなく、ならば行つて確かめるしかない。そのためキリヤは自らが最初にメレオレオナと出会った森へ赴く。

「ここだな……」

メレオレオナと初めて出会った場所、そこがキリヤとして目覚めた地。

森の中でも拓けた地であり、手頃な岩に座るといつも騒がしいキリヤは無言で自らの手を見つめる。

「ボクチャン、不安なの？」

「楽しみ半分怖さ半分、かな」

来るのが一体誰なのか。何故自分の記憶は十三歳以前のものがないのか。

アルーグからも多少聞いていたが今まであまり深く考えてこな

かった自らの出自。

自分が知らない自分を知られているというのは一種の恐怖になり得る。

だが――

『だーりんにはあーしらがいるじゃん』

「どんな過去があってもボクチャンはボクチャンでしょ？」

精霊達はそんなキリヤを案じて半ば震えていたキリヤの手に触れてくる。

その言葉や温かみでキリヤは思わず笑い、

「そうだな。誰が何と言おうがオレはオレだよな」

『うん！ そうだヨゴ主人！』

「じゃあ決心もついたらし――出てきてくれよ」

『……気付いていましたか』

女性の声と共に周囲の魔<sup>マナ</sup>が風となつて逆巻けば粉塵を切つて現れるのは風を纏う神鳥。

全長は縦に五メートルほどか。身体各所に風を纏い、翼を畳み二足で立つ風神鳥だがその風は他者を傷つける者ではなく優しく包むような爽快なものだった。

「あんたがオレをここに呼んだのか……？」

『そのとおりよ、キリヤ。私の名はシムルグ、キリヤがキリヤとして生まれられたその時から貴方を知る者です』

どこか申し訳なさそうにしながら名乗った風神鳥――シムルグ。

それが何故か分からずキリヤは不思議に思いながらも立ち上がり、「あなたの言葉を疑うワケじゃないけど何か証拠とかあるのか？」

『ええ……』

そう返せば再びシムルグの傍につむじ風が起き、晴れば何枚かの写真がそよ風に乗ってキリヤへと手渡される。トウルー達も肩から覗いて来てその写真にはシムルグと共に赤ん坊から少年までの成長過程が映し出されていた。

「うわーホントにボクチャンがボクチャンの頃ねえ」

『調査。魔法による偽造もなし』

『ガチモンってコトかー』

キリヤ自身見間違えるはずもない。

赤ん坊の頃はよく分からないものの年齢を重ねるにつれてキリヤそのもの。それを見せられては納得するしかない。

「分かった。あんたの話を信用する」

『ありがとうございます。……この場に来たということはやはりあなた自身の真実を知りに来たということですね』

「うん。魔女の森で死に掛けた時アルグにオレはアルグが記憶消されまくった結果生まれた人格って教えて貰ったけど、それだとオレがちっちゃい頃何で記憶がないか分かんないし」

『アルグの人格がまだ貴方の中に……そうですか。なるほど、深層心理の中に自分の人格を魔<sup>マナ</sup>として残していたのですね……』

「さっぱり分かんない！」

『それでは一から……元々私はアルグと契約していた精霊の一体でした。ですがエルフ族が襲撃されたあの日、私の契約はアルグからガルガンへ移し変えられ瀕死のアルグはそのままガルガンへと攫われました。そしてガルガンは自らの消滅魔法によってアルグの“時間”を消し、自らの身体に宿したのです』

時間を消す、身体に宿した、その言葉の節々が分からず首を傾げるキリヤ。

だがトウルーやウンディーネは分かったようで、

「じゃあボクチャンはそのアルグとしての時間を消されてもう一度ガルガンが産んだってこと？」

『そのとおりです。それも一度や二度ではなく何十、何百と産み直してアルグとしての記憶、サイルのことも何もかも全て着実に消してガルガンは魂を転生させずに自分だけの“アルグ”を創った……それこそが“キリヤスフィール”——貴方なのです』

「ほーう……」

『だーりん何で他人事みたいな感じ!? えげつないことされてるけど!?!』

「こう、よく分からんからなあ……」

会った時、アルーグも記憶を消されていると知りながらもガルガンに怒りを示すことはなかった。

だから不思議とキリヤも憤りを感じることはなく、むしろ知りたいたいのはそのからだ。

「でもそれだったら何でオレってばガルガンから離れたんだ？」

『それは完全にアルーグの記憶が消滅した際に私がガルガンとの契約を破棄して赤子の貴方と共にガルガンから逃げたからです。それから私は私が親代わりとしてこの森で育て魔の扱いも教えていました』

不思議とその言葉で納得してしまう。

きつとメレオレオナに出会って最初に戦った時から荒削りながらマナスキンが出来たのも、形状変化に対応出来たのも、きつとシムルグが教えてくれた下地があったからだろう。

でも、とシムルグは言葉を付け足す。

『貴方が十三の頃にガルガンの追っ手が現れ、どうしても貴方を手放すしかなくなったのです。だから私は手紙を残し、そこに貴方に関する情報を全て載せました。一人になっても心優しき人間に出会えるようにと祈って』

思い返せばメレオレオナと出会った時、キリヤは手紙を持っていた。

自分の窮地にさえシムルグはキリヤを気遣ってくれて、それでもシムルグの言葉は罪悪感で溢れていた。

『私は本来貴方の前に現れて良い存在ではありません。私といった記憶がないのは精霊に育てられたことから人間に馴染めなくなることを恐れ、私がガルガンから盗んだ記憶消滅魔法の瓶を貴方に使ったからです。貴方のためなどと口実を作っても、結局私もガルガンと変わらないことをしてしまっただけです……っ！』

独白し、涙を流すシムルグ。

真相を聞いてキリヤは少し考え、やがて笑って――

「なあシムルグ。オレさ、記憶消されてもずっと幸せだったぜ？」

思い返してみれば記憶がなかったキリヤだが、それを不幸に思ったことはなかった。

「レオナ様と出会って、友達が出来て、色々な場所に行って、いっぱい思い出が出来た。だからさ、記憶が消されたのは残念だけどシムルグが自分を責めることは何もない。あんたがオレを守ってくれたから今のオレがあるんだしな！」

記憶がなくともそれ以上に色々な経験をしてきた。

自分の無力に苦しんだことやつらい時もあつたがそれもまた今のキリヤを作っている要因だ。

歩み寄ればキリヤはシムルグを抱き締め、

「——ありがとう、シムルグ。何と言おうがあんたがオレを救ってくれて、守ってくれて、育ててくれたことに変わりないよ。だから泣かないでくれ」

『ふぐ、うううう……良い子に育って……』

『もう泣きすぎよー。水の精霊のあーしより水出す気?』

抱きつけば余計に泣いてしまい、見ていたウンディーネも近付いてその涙を拭う。

思ってもいない再会にキリヤは魔導書をシムルグへ向け、

「せっかく再会出来たんだしオレに力を貸してくれよ。予定がなかったらでいいんだけど」

『ええ、勿論!』

『じゃーだーりんのお母さんってコトはあーしにとつたらお義母様!?!』

『絶対にその呼び方はやめてください』

『何でよーっ!』

早速精霊同士で馴染む姿にキリヤもつられて笑ってしまう。

シムルグの嘴が魔導書の空白のページに触れれば新たな魔法が刻まれ、一件落着すればキリヤにはふとした疑問が浮かぶ。

「でもどうして急に教えてくれる気になったんだ?」

『それは……魔女の森での貴方の覚醒は私に居場所を伝えると同時に

——あの女にも知らせることになったからです』

『あの女……?』

『キリヤにとっては産みの親である——』

◎

「《四拳》はともかく《二槍》まで倒されるとは……」

唯一国内に設置された教会の中で美しき女性は女神像に祈りを捧げながら呟く。

スピード王国が誇る最強にして至高の存在——《一剣》ゼネルラ。その至高たる存在ゼネルラの魔力感知は国を超える。

クローバー王国やハート王国、ダイヤモンド王国までには届かないもののそれぞれの国の境界線となる地域まで届き、魔女の森で何があつたか魔力の機微で把握することが出来る。

サラマンダーを従えたかつての同郷が反魔法の使い手や王族達と戦ったこと。ダイヤモンド王国が生み出した魔道戦士の力。そして——覚醒したエルフの魔力。

この世に現存する真なるエルフは二人しかいない。そうなれば自分を除き、後残っているエルフは——当然キリヤ。スピード王国を利用し、侵略行為をしながらも探し続けていた結果がようやく実った。「ふふ……ふふふふふふ……見つけた。ようやく見つけました……」

祈りのままゼネルラの口元は今まで誰にも見せたことがないほど歪んだ笑みを作り出していた。だが同時に蘇ってくる憤りも感じていた。

契約していたにも関わらずゼネルラを裏切り、自分が何よりも大切にしてきたやつと手に入った理想のアルーグ——キリヤを奪い、逃げたシムルグ。あの精霊だけは必ず殺す。

喜びと憤りが混ざり合って、しかし喜びが勝るゼネルラは恍惚の笑みを浮かべる。

「キリヤ……私の、私だけのアルーグ……」

そう。彼女はゼネルラであつてゼネルラではない。

数百年前、エルフ族の壊滅の最中にアルーグを攫い、何百回も産み直しその度に記憶を消した狂気のエルフ。

「大丈夫ですよ。すぐに母<sup>わたし</sup>がまたあなたを何度でも産み直して浄化してあげましょう。そうしたらまた一緒に暮らしましょう。邪魔者は

全て私が殺しましょう。あなたの愛が私にだけ向けられるまで——」

真の名は——デIFOオーレ・フィン・ガルガン。

同胞を裏切り自らの死すらも消して永劫の時を生きる女の狂気は止まらない——

## 65話 「王撰騎士団選抜試験開始」

「先輩！ アタシは諸々の事情で試験を受けられないですけど今日はめいっばい先輩を応援します！」

「ありがとなフィオレナ」

王撰騎士団試験当日、各々の団の実力者達が会場に揃い、キリヤもまたその会場にいた。

付き添いでやってきたフィオレナがきゅつと拳を握って意気込み、それを見たキリヤも笑う。

「キリヤさん！」

「お、シイナにソルとプーリも！」

呼ばれて振り向けばシイナ、ソル、プーリ。

それぞれ〈碧の野薔薇〉の中でも指折りの実力者であり、フィオレナも手を振って出迎える。

「もちろんシイナ先輩達の応援もします！」

「ありがとうございますファイちゃん。でもどうしてファイちゃんは出られないのでしょうか？ 火山登りから明らかに実力者とは団長も分かっているはずですが……」

「まあ諸々ですよ諸々」

「適当な誤魔化しだな」

と言いつつもソルは気にしていないらしく、キリヤを指差す。

「今日もし戦うことになっても容赦しないからな！」

「当たり前だ！ 全力でやるからな！」

やや雑だが拳を合わせ、シイナの方を見るとシイナはどこか別のところを見ていた。

見てみればそこに立っていたのは如何にも育ちが良い雰囲気的女性。その黒い長髪や容貌はどことなくシイナと似ており、ただシイナと違って長身でまるで大人版シイナだ。

「なあアレって——」

「はい、私の姉——リイナ・シュヴァルツです」

ただならぬ気迫。



今までのシイナになかった確かな闘志が漲っており、キリヤは驚きながらもシイナの額をこつんと軽く小突く。

「分かっていると思うけどオマエは強いよ。だから気負い過ぎんな。もつと自然体で行けば負けるはずないさ」

「っ！ はいっ！」

「それじゃ先輩アタシ応援ゾーンに行きますんで！」

「おうー！」

元気良く返事したシイナにキリヤも大きく頷く。

これ以上はシイナの精神的集中にも邪魔になると思い離れ、フィオレナとも離れたところで見慣れた人影が近付いてくる。

「よっキリヤー！」

「おうアスタ。ユノには挨拶したのか？」

「ああ！ キリヤ、今日は負けねえぞ！」

「オレこそ負けねえよ。まあ何するか知らないけど」

「……確かに！」

ずっと思っていたがこの場にいる誰もまだ何をするか知らない。

すると丁度良いタイミングで魔法帝が皆よりも高い位置に現れ、一気に空気が張り詰める。

「じゃあこれから王撰騎士団選抜試験を始めよう」

「——試験説明は余からしよう」

「げ、また出てきた自称国王」

「またとは何だまたとは！ というより貴様余が出る度に無礼を働きるよるな!! 国王ぞこっちは！」

奥から現れた国王はもう完全にキリヤのことを覚えてしまっており唾を飛ばしながら怒りを表すも今日は珍しくすぐに冷静さを取り戻す。

「試験内容はチーム対抗魔晶石破壊バトルーナメントであるっ!!」

シンプルに実力を試すかと思えばそうではないらしく、国王の背後に用意されていた魔晶石クリスタルが示され、さらに映像としてバトルフィールドらしきマップが表示される。

「ルールは簡単！ エリアに配置された自軍の魔晶石クリスタルを守りつつ先に相手軍の魔晶石クリスタルを破壊すれば勝利じゃ！」

加え三十分以内に破壊出来なかった場合は魔晶石クリスタルの損傷具合によって決められるらしい。

次いだ魔法帝の話では対へ白夜の魔眼〱戦では様々な団が協力して立ち向かう必要があり単騎の力だけではなく協調性と共に戦略性を測るのに最適な方式だと考えられたと。

「では早速チーム発表だ！」

やはり自分達では決められないようで名前が書かれた映像が展開される。

多く羅列した名前の中自分の名前を見つけるのは一苦労だったがようやく自分の名前を見つけるキリヤ。

どうやらアスタやユノ達とは一緒のチームになれなかったようで少し残念に思うとキリヤに向かって一人の女性が歩み寄ってくる。

「アナタは私と同じチームのようね、キリヤスフィール・フィン・ガルガン」

「ん？」

声を掛けられ見てみればそこに立っていたのはへ金色の夜明け〱のローブを纏った女性だった。

眼鏡を掛けており、目つきは鋭くややくせつ毛なのが目立ち、髪は後ろで束ねている。見る限り二十代ほどだろうか。

冷たい印象が見て取れるも声を掛けてきたというのなら女性の言う通り同じチームなのだろう。

「よろしく！ えーっと……名前何？」

「別にアナタと馴れ合うつもりはないわ。だから自己紹介もしない」  
「じゃあメガネって呼ぶことにするな！ よし、今日からオマエはメガネだ！」

「な……ッ！」

名乗らないのならばそう呼ぶしかない。

いきなり“メガネ”呼ばわりされたへ金色の夜明け〱の女性は一瞬クールな表情が崩れるもすぐに平静を取り戻す。

「ま、まあこの際それでも良いわ」

「よしよろしくー」

握手をしようと手を伸ばすも一度は躲かれ、しかしその程度で諦めないキリヤはメガネの手を追って強制的に握手する。

「もう何なのよ……」

「あと一人は誰だろうな」

何やらユリウス付近で遅刻してきたザクス・リユージュナーが何かしたようで騒ぎになっているがキリヤにとってはそれより重要な残り一人のメンバーの方だ。

と、探していると何やら会場の雰囲気呑まれてテンパっている少年がいた。

「そこのキミ！　もしかしてオレ達と同じチームの人!?　オレはキリヤでコッチはメガネだけど！」

「私の本名はメガネじゃないんだけどね」

「お、おまて……おまちさせました！」

「えっ？」

思わず素で聞き返してしまった。

多分『おまたせしました!』と言おうとしているのだろうが完全に緊張してしまっているようだ。

見ればそのローブはへ翡緑の蠟螂のもの、キリヤの肩ほどの身長。特筆すべき点は特になく普通の少年だった。

「ビ、ビスです！　よっろろしくしゃす！」

「そんな緊張しなくてイイのにな。よろしくビス！」

ビスと名乗った少年は手汗びっしりな手でキリヤと握手を交わし、さりげなくウンディーネに洗浄されてしまうもこれでチームは揃った。

周りを見てみればアスタは先ほど騒ぎを起こしていたザクスと、ユノはノエルと、ソルはへ黒の暴牛のマグナと、レオポルドはフィンラルと顔見知り同士でチームが出来ておりシイナを見ればシイナのチームに知り合いはいないようだ。

「では試験のステージに移動しようか！」

ユリウスの言葉で魔法帝直属の空間魔道士コブが空間魔法で皆を試験会場へと連れて行く。

空間魔法の先に見えたステージは森、岩場、砂漠、廃墟と一つで様々な様相を見せ、これもまたユリウスの狙いの一つなのだろう。これもまた戦略の幅にも繋がるに違いない。

「事前に抽選で決めたトーナメント表を発表するよ！ バトルの勝ち負けが合否に関係するわけじゃないけど勝ち上がっていくほどに実力をアピール出来るから頑張って！」

映し出されたトーナメント表にはキリヤ達の初戦の相手はプーリ、クラウス、ラックと書かれていた。

全体的に見ればアスタとは決勝戦まで当たらず、二回勝ち抜けばユノやシイナと当たる可能性がある。しかもシイナの初戦は運命なのかリイナであり、キリヤも改めて気合いを入れ直す。

（優勝して改めてレオナ様が育てた弟子が最高だっるところを見せてやる！）

そして第一回戦、早速アスタの試合が始まる。

開始早々に不意討ちの魔法が魔晶石クリスタルに炸裂し、見れば遠距離から相手チームは合体魔法によって狙撃していた。

しかしアスタのチームにいるザクスは協力するつもりはなく寝始め、戦略が狭まるアスタともう一人——確かミモザと言ったか。ミモザが守りアスタが攻める形で突貫する。

（こんなところで負けんじゃねえぞアスタ）

氣が読めるだけあって位置さえ分かればアスタは狙撃を反魔法で斬り落とし、接近を果たすも相手は偽物を用意することで攪乱。だがミモザの感知によって本物を看破する。

しかし敵三人に囲まれた瞬間にアスタが何者かの罨魔法で怯んでしまい、三方向から同時に強力な魔法が放たれる。

流星に回避不能——そう思えばそれぞれの魔法の前に魔法陣が出現。魔法を飲み込んでそれぞれ違う相手に魔法が炸裂する。

すると今まで眠っていたはずのザクスが起き上がり、辛うじて魔晶石クリスタルを守っていた魔道士を踏みつける。

「未知の魔法に対する想像力が欠如してるんじゃないか!? あらゆる可能性も考慮しないで魔法ブツパで勝てりゃ世話ねーんだよ!!」

言葉遣いは荒い者のザクスの言葉は正論。

アスタと一波乱ありそうだがザクスの一撃で相手チームの魔晶石クリスタルは砕かれ勝利した。

(次はソルか)

ソルのチームにはマグナの他に〈珊瑚の孔雀〉副団長キルシュがいて、彼の桜魔法と助言のおかげでソルやマグナは上手く立ち回り危なげなく勝利を収める。

続く一回戦第三試合はレオポルドや〈金色の夜明け〉の団員をフィナルが空間魔法で上手く誘導することにより戦場を支配し、圧勝を収めた。

第四試合目、セツケはともかく〈金色の夜明け〉副団長ランギルスの攻撃性に特化した空間魔法で相手の魔晶石クリスタルを一瞬決って瞬間的に勝負を決めてしまう。

流石〈金色の夜明け〉副団長とだけあって恵まれた魔力に魔法、圧倒的な力を見せ付けられる。

自分ならどうするか、そう考える暇もなく迎えたのは第五試合目。Xという謎の名前は〈水色の幻鹿〉団長リル・ボワモルティエが扮していた仮の姿であり、魔力を絵の具にして操る絵画魔法は全ての属性を再現可能であり、その一撃で決めてしまう。

「うわすっげえ何あれ! カッコイイな!!」

「はいはい。次は私達の番だから早く準備しなさい」

「へいへーい」

身乗り出して絵画魔法で創られた炎と水の双嵐を見ていればメガネに襟元を引っ張られて引き戻される。

見れば次は第六回戦、気付かないうちにキリヤが戦う番となっていた。

「よっしや行くぜ! メガネ! ビス!」

「騒々しいわね本当に……」

「が、が……がんば、がんばりまひよ……」

莫迦者、生真面目、情緒不安定、よく分からないチームがいよいよ  
出陣する――

## 66話 「火力VS雷速」

「よーし作戦タイム！　まずは魔法の情報を共有しようぜ！　オレの魔法は身体進化魔法で相手の魔法を吸収して進化出来る！　最近はその魔法なしに相棒の精霊達の魔力とか大気中の魔<sup>マナ</sup>を吸収して進化するようになったけど！」

「『星果祭』の功績発表で見せていたあの魔力は使わないの？」

「あれ結構体力使うからな。これ勝ったら次は団長相手だしその次もユノかシイナだから苦戦すること間違いなしだし。別に今の相手を侮るわけじゃないけどなるべくは使いたくないかな」

「一応考えはしてるのね……意外」

「マジで失礼だな！」

確かにメレオレオナには基本莫迦者と呼ばれ、ソル達にも馬鹿扱いされているものの考えてはいる。

キリヤの魔法の紹介が終われば、今度はメガネが眼鏡をくいっと人差し指で上げる。

「私の魔法は羅針盤魔法、自慢じゃないけど撃てば必ず当たる」

「すげえ！」

「あとは相手の魔法を針の示す方に曲げたり、かなり魔力を消費するけど空間の魔<sup>マナ</sup>を掻き乱したりすることが出来るわ」

「天才かよ！　何だメガネ、オマエは天才だったのか！」

「ちよ、ちよつとやめて……そんなに褒めないで」

見たこともない魔法にキリヤもテンションが上がって褒め称えると、褒められ慣れていないのかメガネは顔を逸らして照れてしまう。

一見クールだがどうやら女性としての可愛らしさもあるらしい。

新たな発見と思いつつ今度はビスの方に視線を向け、

「ビスはどんな魔法なんだ？」

「ぼ、ぼくですか!？」

「いや今オマエしかいないけど……」

「そそそ、そうでしゅよね！　ぼくの魔法は音魔法です！　何と説明したらいいですかね……主に音の発生源を決めちって、起こった

音の記録と再現が出来るんしゅ!」

「音の再現? あともう少し落ち着いてくれてもいいんだぞ」

メガネも意味があまり分からなかったのかキリヤと共に小首を傾げる。

視線を受けたビスはテンパリながらも一度しやがみ拳で地面を殴ってみせ、その後魔導書が開く。

音魔法”ヘヴィローテーション加重再生”。

魔法を唱えれば、まるで先ほどの再現のように地面を殴る音が連続して響く。

それに合わせて地面も徐々に凹みが生まれていく。まるで地面を殴り続けているようだ。

「スゲー! オマエも天才か!」

「い、いえ、あの、その……っ」

「これは応用性に長けた魔法ね」

「で、ですよねえ……」

「それじゃー、作戦は全員で突撃して何やかんや魔晶石クリスタルを破壊するか!」

「ヒトに魔法説明させておいて、その結論に至るアナタの思考回路どうなってるの?」

「よく考えたらオレ考えるよりも、行動した方が早くなって思ってたな」

フィオレナならばこんな時、あの指揮能力で見事な作戦を立てられるだろうがキリヤは基本脳筋。簡単な役割分担なら出来るもこう戦略性を求められればポンコツに等しい。

そのポンコツさを早くも見抜いたのかメガネは額に手を当て、

「——作戦は単純にしましょう。私とビスがサポート、アナタはただ思うがままに突撃しなさい」

◎

『それでは一回戦第六試合開始——ツ!!』

「さて行きますかっ!」

腕を回して準備を整えれば、キリヤの肩に魔導書から出てきたサラマンダーが何かを目で訴えてくる。



トカゲ状態のサラマンダーはシャーつと声を上げ、キリヤも何となく意図が分かる。

「戦いたいのか?」

『……………』

炎の魔を滾らせサラマンダーは意欲を示す。

それを見てキリヤも頷いて笑み、

「よし、じゃあ行くぞ!」

魔晶石クリスタルの防御はビスに任せ、数メートルに巨大化したサラマンダーにキリヤは飛び乗る。

二人で移動した方が良いとメガネに手を差し伸べればメガネは一歩引き、

「ん、どうした? 乗れよ!」

「いえアナタは良くても、サラマンダーが物凄い目で見てくるんだけど」

「あ、こらサラマンダー! メガネにガン飛ばさないの!」

認めていない相手には、とことん警戒心や敵意が剥き出しなサラマンダー。

とはいえ、すでに戦闘は始まっているのでモタモタはしていられない。一旦サラマンダーから下りればすぐにメガネをお姫様抱っこする。

「ちよつとっ!?!」

「ごめん我慢してくれ!」

これならばサラマンダーに直接触れているわけではないのでサラマンダー的にもセーフ。

高速移動を可能としメガネにも得がある。そうなればキリヤもより戦闘しやすくなって、これで皆ウインウインというもの。

サラマンダーは仕方ないといった様子で飛ばば、すぐに地上に相手チームの魔晶石クリスタルを発見する。

「二発デカイの撃ってやろうぜサラマンダー!!」

魂の連結リンクによりサラマンダーとより密接に魔マナを繋げる。

そうすることで精霊魔法は格段に威力を底上げされ、放たれる一

撃。

——炎精靈魔法”サラマンダーの吐息。

放たれた火球は魔晶石クリスタルに向けて一直線に落ち、地面ごと吹き飛ばす。

だが流石にこれはあまりにもテレフォンパンチだったか。

雷属性の具足、籠手を纏ったへ黒の暴牛へラックが魔晶石クリスタルを抱えて躲し、残ったへ金色の夜明けへクラウスは翼魔法で飛んだプーリに抱えられてその場から離れていた。

(風属性の派生って確か魔感知マナに長けてるんだっけか……)

仮にそうでなくても、軌道を読まれてしまえば容易く躲される。

つい先ほどザクスが魔法ブツパで勝てれば世話ねーよと言っていたというのに早くも忘れていた。

サラマンダーは楽しそうだがあまり有効打ではないことに違いない。

「降ろすぞメガネー！」

「ええー！」

地面擦れ擦れに滑空しメガネを離せば綺麗に着地し、キリヤも地面に下りて相手三人を視界に収める。

プーリとは同じ団、同じチームで活動したこともあり魔法や戦法は分かっている。だがそれは相手も同じだろう。キリヤの身体進化魔法はすでにバれているに違いない。

「クラウスの魔法は鋼、あの女の魔法はわかる？」

「翼魔法だな。何かバサバサして追い風起こしたり飛んだり羽根飛ばしたり出来る感じ」

「前半怪しかったけどアナタにはよく覚えていた方ね」

「お褒めいただきありがとう！」

「ハハッ！ 君スゴいね！ 僕と戦ヤろうよ!!」

「オーケーかかってきな！ 残念ながら一対一タイマンは出来ねーけど！」  
雷魔法”迅雷の崩玉”。

肉薄していたラックから雷を圧縮した球がいくつも放たれる。

その速度は速く、キリヤとメガネを同時に狙うもメガネがキリヤの

前に立てば、

「その程度、私達には届かない」

羅針盤魔法” 心在らずの逆針”。

メガネの前に羅針盤が四つほど羅列し、“迅雷の崩玉”が触れる寸前に針が差す上空へと飛ばす。

「メガネすつげえなそれ！」

「さつきも説明したでしょ！ 早く攻めに行きなさい！」

「了解！ 行くぜサラマンダー！ オマエの力を貸してくれ!!」

メガネが力を見せたなら次はキリヤの番だ。

身体進化魔法” 炎靈蜥蜴の業鎧”。

赤褐色の鎧を身に纏い各所に炎を纏えば、爆発的に魔力が膨れ上がり大気中の魔が熱を帯び、あたりの一気に温度が上昇する。

「気を付けなさいクレイジーボーイ！ パンチボーイ相手に接近戦は危険よ！」

「ッ！」

魔の流れを読む力に長けているだけあってラックはプーリの言葉に身の危険を感じ、すぐさまバックステップを刻む。

翼魔法” 天使の羽ばたき”。

魔晶石を持った状態で飛んだプーリから夥しい羽根が放たれキリヤやメガネには攻撃と妨害、そして味方であるラックとクラウドスには追い風を与える。

今回は魔晶石破壊がメイン。戦闘を避けるのも一手であることは確か。

だが羽根による攪乱、追い風——キリヤもすでに体験済みだ。

ラックが足に力を入れた途端、視界が羽根だらけのキリヤは籠手を鋭利な爪に変化させれば思い切り振るう。

炎精霊魔法” サラマンダーの鉤爪” 連打。

煩わしい羽根も焼き尽くし、強引な力技で再び視界を開けると共に相手の追い風をも消し去る。

メガネの位置は羽根で邪魔されながらも氣と魔で何となく理解して避けており、視界を取り戻したメガネはすぐさま針をプーリへ飛ば

す。

一撃で羽根を振り払われたことで驚いていたプーリの一瞬の隙を突き、針が翼を貫く。

「あ……っ！」

バランスが崩れ傾いた体勢のまま転落するプーリ。

その際魔晶石クリスタルも離れてしまい、その瞬間をキリヤは逃さない。

炎を噴出して魔晶石クリスタルへ接近、貫手に構えられた手を一直線に放つ。

それでもラックは雷属性の速度もありキリヤに追いついて蹴りを放っていた。その蹴りによって、キリヤの貫手がずれ、一撃で決めるつもりが掠って半分程度しか削れずに耐えられてしまう。

それでも一度入った攻勢は止まらない。

手首を蹴ってきた具足を掴めばラックに向けてメガネの針が放たれ、その眼前に迫る。

「ラックー！」

鋼創成魔法“鋼城の鎧壁”。

駆けつけたクラウスがラックの前に立てば、地面から鋼の壁が創られ針はその壁に突き刺さる。

それでも針の勢いは止まらない。

音魔法“加重ヘヴィローテーション再生”。

こちらの魔晶石クリスタル付近にいたビスの魔法によって、メガネの針は鋼の壁に着弾しても止まらず、幾度となく突き刺さる音が響きその度針は壁を貫いていく。

「何……っ！」

ついには鋼の壁を貫き、クリスタルを穿つ。

それでも後少し足りず、壊しきれないが目前にキリヤがいる。すでにラックの足首を掴んだまま空いた手で拳を握っており、ラックもまたキリヤに向けて構える。

雷魔法“迅雷の崩——

「——少し遅かったわね」

ラックが魔法を放つ前に針に乗ってすでにこの場に追いついていたメガネがラックの前に立っていた。

そしてラツクの眼前には針が上を指す羅針盤。それはすでに初撃で見た魔法だった。

『羅針盤魔法』ウイルフル・コンパス 心在らずの逆針”。

ラツクの魔法を虚空へ飛ばし、キリヤの拳は見事に魔晶石クリスタルを砕く。

『魔晶石破壊！』クリスタル しチームの勝利！』

「本当にすげえなメガネ！ ありがとなメガネ！ ビスもありがとな！」

「そんな露骨にメガネを連呼しなくていいわよ。というより抱きつかないで」

鎧を解除してメガネに抱きつくキリヤ。

鬱陶しがられながらもビスに手を振ればガチガチに緊張した様子で振り返される。

「さて、次の相手は団長か。やってやろうぜ！」

「分かったから離れて……重い……」

キリヤの先にいるのは、へ水色の幻鹿、団団長のリル。

すでに強力な絵画魔法を使ってくることは分かっているために、キリヤも湧き上がる高揚に笑みを浮かべる。

## 67話 「きょうだい」

「いえーい快勝！ な、メガネ！ ビス！」

「い、いえーいですね……」

「何で私達は肩を組んで帰ってきてるのかしら……」

観覧席に戻ってきたキリヤは何故かメガネとビスと肩を組んで帰ってきていた。

勝利の余韻とノリだったために深い理由はないがそうしているとふとアスタが目映る。キリヤの勝利と同じ〈黒の暴牛〉であるラツクの敗北、喜ぶべきかどうするべきかと微妙な表情でいた。

（まあ仕方ないか）

本当はアスタとも喜びを分かち合いたいと思っただがここでは互いに戦うべき相手だ。

敵チームと余計な馴れ合いをするべきじゃないと思い、絡むのはやめて周りを見渡すとノエルの兄——ソリド・シルヴァがノエルに話しかけているのが見えてしまう。

話が終わったのを見るとキリヤはメガネやビスから離れてソリドの前に立つ。

立てばソリドもキリヤのことを覚えていたのか明らかに不機嫌そうな表情を浮かべ、

「……ああ？」

「またノエル様に何か嫌味でも言ってたのか？」

「出来損ないで恥晒しの分際でこの試験に参加してる方が悪いだろうが。むしろ余計な恥をかかないように排除してやろうって兄の優しさだよ優しさ」

優しさなどと言うがその言葉のどこにも優しさなど存在しない。

ただ見下して、ただ闇雲に傷つける言葉の刃、ノエルを虐げるだけのものだった。

「なあ、何でアンタはそんなに心の器が狭いんだ？」

「……は？」

「アンタが王族で魔にも生活にも恵まれてたのは分かる。でもさ、ア

ンタの兄貴はアンタの手本になってるだろ？ アンタの姉もアンタに寄り添ってくれてるだろ？ 兄として、姉として、それぞれアンタを導いてくれるはずだよ。なのに、何で兄は妹にアンタノエル様そうしてやれないんだ？」

気に入らないとか何だとかキリヤにも思うことはある。

だが今はただ——純粹に悲しかった。

「強いヤツほど誰かに優しくなれるはずなんだ。レオナ様もグテー様も魔法帝も……みんなそれぞれ強いからこそ優しさを持つてる。何でそんなことも分からないんだよ」

「オイオイ、血の繋がった家族すらいねえヤツがオレに偉そうな説教してんじやねえよ！」

「そつか。まあ分かってたらこんなこと言つてないもんな」

血の繋がった家族がいなくとも魔法騎士になって出会えた家族と呼べる人達がいる。

だがソリドには分からないだろう。血筋や才能ばかりで人を見下すことしか出来なくなれば当然視野だつて狭まってくる。それが何年経ていれば当然になってしまつて、その自尊心が他者を拒絶する。

一度ブツ飛ばされなければ分からないだろうとソリドとの話を切り上げると次の対戦カードを見て、

(きょうだい、か……)

シイナとリイナ。

戦う前から向き合い対面する二人がキリヤの目に映る——

◎

「ふふ、久しぶりねシイナ」

「ええ、久しぶりですリイナお姉様」

バトルフィールドに移動する直前、移動しようとするシイナの前にリイナ・シュヴァルツが現れる。

艶やかな黒髪を伸ばし、長身で大人びた容姿はまさにシイナを大人の女性にしたものと言つても過言ではない。

〈銀翼の大鷲〉に属する一等上級魔法騎士、黒氷魔法の使い手。生まれ

てからシイナは常にリイナの背中を見ていた。

「ノゼル団長に拳手されながらどうして〈碧の野薔薇〉なんて選んだのか、今までお姉ちゃんの言うこと全部聞いてくれてたのにどうして、なんてシイナがいなくなってから考えてたの」

「……………」

「でも分かったの。大丈夫、許してあげる。妹のちっぽけで可愛い反抗だもの。お母様達の言う通りにするのも嫌になっちゃうよね」

朗らかな笑みを向けて上機嫌に話すリイナ。

〈碧の野薔薇〉に入って、姉のことを考えなくなっていたから忘れていた。

ノエルの兄——ソリドのように見下し、直接悪意を持った言葉で傷つけるのではない。リイナ自身には悪意はなく、ただ思ったことを直球で言っているだけだ。

出来る自分が当たり前。出来ないシイナが当たり前。リイナの中ではそう決め付けられていて、だからこそ平然とシイナの覚悟を可愛い反抗と言い切ってしまう。

「でもね、この戦いが終わったらそろそろお姉ちゃんと同じ〈銀翼の大鷲〉に移籍しよ？ 〈碧の野薔薇〉は女性ばかりで悪い虫はつかなさそうだけど、王族としての振る舞いを覚えるにはやっぱり王族が団長を務めてる〈銀翼の大鷲〉の方が良いの。ね、お姉ちゃんが言うことは正しいって昔から知ってるでしょ？」

近付いてきて、抱きしめてきて、頭を撫でてきて、懐柔しようとする。

昔から何も変わらない。ずっとリイナの中でシイナはいつまでも成長しない小さいままのシイナ。

だから——

「……………しません」

「……………え？」

シイナの否定にリイナは目を丸くして啞然とする。

今まで姉の言葉に逆らったことがなかったシイナの真っ直ぐとした眼差しにリイナは理解出来ないでいた。



「何で？ お姉ちゃんの言うことだよ？」

「お姉様の言葉だからです」

撫でられていた手を振り払い、一步下がってリイナと距離を取る。「私はお姉様から離れ色んなことを体験し、学びました。時には無力を痛感し、心が折れそうになることもありましたが、でも、そんな私に〈碧の野薔薇〉で出会った仲間……家族は手を差し伸べてくれて、共に進んでくれました。私を私として認めてくれる方々にも出会いました」

最初はただの反抗だった。

だけどその先で出会った仲間達は何よりもかけがえのないもので、血よりも固い絆で結ばれていた。

今まではリイナが用意した道を歩くだけだった。だが離れてシイナは自分で自分の道を決め、進めるようになった。

「もう思考停止してお姉様の言うことを聞く人形ではありません。あなたの代替品でもありません。私はシイナ・シュヴァルツ、今日私はこの場をもってお姉様を超えてみせます」

「……何で？ 何で何で？ お人形さんだったのにシイナがお姉ちゃんに反抗するわけがないのに……やっぱり悪い虫がいたのね」  
言ってリイナの視線は遠くにいたキリヤへ向けられる。

シイナと唯一同期の少年、そのキリヤに対するリイナの目は憎しみに歪んでいた。

初めて見る姉の表情にシイナは臆することなく、

「はい、キリヤさんのおかげです。あの人は私にとって憧れで少しづつでも近付くために努力してきました。ですからもう昔の私とは思わないで下さい」

「……生意気」

親指を噛み締め流れ出る血。

あれだけ余裕な笑みを浮かべていたというのに一変し、シイナから踵を返して離れていくリイナ。

その姿に少しだけ溜飲が下がる思いで胸を撫で下ろす。

(本番はここからです。キリヤさん、どうか見ていてください)

◎

『それでは一回戦第七試合を開始します!』

「作戦は……どうしましょうか」

「ワハハ! 私は魔晶石クリスタルと共に三人全員で進軍し——」

「ツ! 避けて下さい!!」

言葉の途中でシイナはしゃがめば髪を何かが掠る。

間一髪シイナは躲けたもののへ水色の幻鹿〈フランシス、〈紫苑の鯨〉ウインストーンは額、側頭部を撃たれ、そのまま受け身もなく地面に倒れてしまう。

見れば額で小さな氷が炸裂しており、狙撃されたことは明らか。そしてこの黒い氷は——

「避けれたのはえらいと思うけど——これで二人はもう駄目ね」

「姉さん……っ!」

黒い氷に乗って現れたリイナ。傍には同じように黒氷に乗る他の二人の魔道士もいて先ほどの間違いなくリイナの黒氷魔法による狙撃。

あれほど多角的な攻撃、どうやってしたのかは不明だが圧倒的不利であることは間違いない。

「今ごめんなさいって言えば許してあげるし、痛い思いをしなくて済むけどどうする?」

「しませんよ」

「影魔法”怨邪の濁流”。

間欠泉の如く噴出した影が魔晶石クリスタルを飲み込めば跡形もなく地上から姿を消す。

ルール上セーフなのか分からないが影の中に仕舞ってしまえば相手はシイナの意識がある限り魔晶石クリスタルには触れない。

一対三、キリヤがいつもやってきていたような戦況だ。  
だからこそシイナは逆境こそ不敵に笑い、

「お姉様こそ今降参すれば、痛い思いをせずに済みますよ」

「……そう」

「黒氷魔法”咎人への冷塊”。

影魔法”影の執行者”。

リイナから放たれる夥しい黒氷の弾丸。対し、宙で放たれたことで地面に影が生まれればシイナの魔法によってその影から全く同数の弾丸が返される。

だが弾丸は宙で突然角度を変えてシイナを多角的に襲い、シイナもその異常に気付く。

(あれは——黒氷の結晶ですか！)

太陽の反射によってかなり見にくくなっていたが、リイナの周りを含めこの近辺の空中には無数の黒氷の結晶が張られていた。

それぞれの弾丸はそれに反射され跳弾してシイナへと返ってきていたのだ。恐らく狙撃にも使われたのだろう。

黒氷創成魔法”冤罪の断殺”。

”影重カゲノエノアマガコロモノ天衣”であれば躲さずに通すことが出来るが魔力消費量を考えれば得策ではない。

ならば王撰騎士団選抜試験まで修行した成果を見せる時だ。

「捕まえてー」

シイナが手を握れば弾丸と化していた影が空中で伸び、互いに連結。網状となれば粘着性を持ち、氷の弾丸ごと捕まえて急速に収縮し、地面に落ちれば影と消える。

あまりの一瞬の出来事にリイナも驚くもその隙を逃さない。

影創成魔法”泥沼ノ導キ手”。

黒氷に乗っている三人の足元から影で出来た鬼の手が迫り、一人の魔道士が火属性の魔法で閃光させて影を消そうとするも光を上回った影の手は構わず相手を捕まえる。

影魔法”影極”。

関節技を極める形で拘束するもリイナだけは元から黒氷の分身だったのか碎き割れ、見越していたシイナは影で二人の魔道士を叩いて気絶させる。

「これで一対一ですね」

「へ碧の野薔薇へに入って強くなつたのは本当みたいね。でもシイナは絶対にお姉ちゃんには敵わないの」

魔導書から何かを出したのが見え、その瞬間にシイナはリイナの身体を影で拘束する。

今度こそ本体——だが右手を中心に影は吸われて拘束が解かれてしまう。

「それは……っ！」

「あら知ってるの？　ちよつと前にお姉ちゃんの前に現れたんだけど相性が良いみたい」

ふふ、と笑うリイナが持っていたのは一丁の拳銃。

しかもただの拳銃ではない。それは——

「キリヤさんが持っていた……」

魔宮の宝物庫で見つけた“吸魔の銃”。

それがどうしてこんなところであるのか。あれはキリヤの話によれば封印されるてはずになっていたがまさかリイナの手にあるとは。

「これがある限りシイナに勝ち目なんてないからね」

言って今度はリイナが不敵に笑う——

## 68話 「魂重なる光と影」

「あれは……」

『ベルゼヴィーヴィア……何故あんなところに』

シイナとリイナの戦いを見ていれば現れたのは、吸魔の銃。

〈三魔眼〉との戦いで暴走したキリヤにはまだ使いこなせないと封印を余儀なくされ、その場から一時撤退していたがついに出てきてしまった。

恐らくキリヤがエルフとして覚醒した時、シムルグやデイフォーレが気付いた時にベルゼヴィーヴィアも気付いたのだろう。

あらゆる魔力を吸収する、そんな能力を相手にすればシイナでもただでは済まない。

キリヤは観戦している魔法帝ユリウスに駆け寄り、

「魔法帝！ あれはオレの問題です！ だから——」

「いやこれはシイナ達の戦いだ。実戦だと何が起こるか分からない。不測の事態だって当然起こり得る。その時に君はいつでもシイナの傍にいられるのかい？」

「それは……」

「違うだろう？ だからこそ今あの銃を目の前にしてシイナの真価が問われる。仲間だと言うのなら時に信じることも大事だよ」

「……はい」

すっかり言い負かされてしまい、熱を失ったキリヤはシムルグに促されて元の場へ戻る。

するとウンディーネが魔導書から現れ、

「だーりん、今のシーちゃんをよく見て」

「……？」

意図が分からないが見てみればシイナは——笑っていた。

窮地こそ不敵に笑う、キリヤがいつもそうしているように。

それにウンディーネの言葉の意味がようやく分かった。シイナが纏う魔マナが今までとはどこか違う。

「ああ、何だ。仲良くなったのか」

今まではどうか知らなかったがキリヤはそう言うと言いつつと笑みを浮かべて戦況を見つめる――

◎

「ずうっと不出来で！ 自分じゃ何にも出来なかつたくせに！」  
「っ！」

“吸魔の銃”を出してからのリイナの猛攻にシイナは劣勢を強いられていた。

激昂したリイナの魔はどこか薄暗くおぞましいものへと変化し、黒氷魔法もより凶悪に、より鋭利なものとなっていた。

今では“吸魔の銃”を鎧として纏い、銃剣と共に戦場には黒氷が乱れ狂う。

「これは“吸魔の銃”の影響なのでしょうか……？」

『いいえ、これはベルゼヴィーヴィアの影響ではないわ。あれは……別の影響よ』

シイナの頭に直接響く女性の声。

最初は幻聴かと思っていたが今でははっきりと意思疎通が取れ、

「こ、心の声さんは何か知っていますか？」

『ええ。でも今は関係ないわ。眼前にいるのは敵でそれを倒す、それ以外は余計なことよ』

「でもやはり“吸魔の銃”は厄介ですね……」

「こちらが影で攻撃したところで“吸魔の銃”……もはや鎧だがその鎧に吸収されてしまう。」

どの魔法を使用しても有効なダメージは見られず、今のままでは立てがない。

「シイナはね、お姉ちゃんを認めてくれてれば良いの。お姉ちゃんの言葉に頷いてくれるお人形さんで良いの。なのに！ どうしてお姉ちゃんの気持ちちを分かってくれないの!!」

「……っ！」

『耳を傾けては駄目よシイナ。あれはもうあなたを人間として見ていない。ただ自分を肯定してくれる愛玩動物が欲しいだけよ』

「分かっています。でも……」

姉に良い思い出なんてない。

だけど今の姉はどこか苦しんでいるようにも見えた。

シイナとは違いずっと周りに期待され、重圧を負い、〈銀翼の大鷲〉に入団しても王族として日々周りに見下されないように進んできたのだろう。いつも笑っていたが、それは自らに降りかかる重圧に対する一種の現実逃避だったのかもしれない。

今の言葉だって本当はリイナもシイナと同じように苦しんでいた証だろう。

きつと誰もリイナに手を差し伸べてはくれなかったのだ。初めから強かったリイナには手を差し伸べられる者などいなかったから。肩を並べて隣に立つ者なんていなかったのだから。

シイナにはキリヤがいた。自分を認めてくれる存在が。確かに姉よりも才能はなかったかもしれないがその分仲間に恵まれていた。

強者故の孤独、リイナの心が軋んで悲鳴として聞こえてくる。だから――

「お姉様、今助けます。私の――いえ、私達の力で！」

『よく言ったわ。私としても倒す相手がいる……やるわよシイナ』

王族として恵まれた魔力、それに加えて大気中の魔力を吸収し、自らに掛かった枷を外す。

心の奥で枷が破壊されれば今だかつてないほどに魔力が影として溢れ出す。

溢れ出した影は圧縮し女性を形作ってシイナの身体を抱きしめて包み込む。そして心の声の主とシイナの魂が混じり、一つに溶け合っていく。

メレオレオナとキリヤのmanaゾーンを参考に心の声の助言と修行もあつて完成したその名は――

魂魄同化“真影の光騎士”。

影から解き放たれたシイナの姿は今までの幼さがあるものでもなく大人びたもので、髪色も黒のままだが前髪に白銀のメッシュが入る。

「何その姿……？」

「この姿は身体から血が噴き出るまで努力した結果です。そして私がお姉様を超えた証でもあります」

「王族が……努力……でも、魔力じゃこの鎧は崩せな——」

今まで影が触れれば魔力を吸収していたリイナの鎧。

だが今度だけは違った。影が触れた途端に“吸魔の銃”による鎧は剥がれ、拳銃へと姿を戻す。

影弱体化魔法“虚栄の禊ぎ”。

魔法であればあらゆる強化を無効化し引き剥がす上に一定時間相手の基礎能力と魔力を格段に下げる魔法。リイナが鎧を纏っていたのはあくまで魔力で鎧に変えていたため、ならばシイナの魔法でも引き剥がせる。

「そんな……っ！ ダメ!! シイナ！ シイナだけは——」

「ごめんなさいお姉様。私は次へ進みます」

影魔法“絶影魔弾”。

銃のように構えた右手から放たれる一閃は黒氷の壁を難なく貫けばリイナの身体ごと魔晶石クリスタルに叩き込み、砕き割る。

『第七回戦勝者はMチーム!!』

過去の自分とを分かっ一撃。

勝利を収めたシイナは天を見上げ、一度大きく息を吐いた——

◎

「……ん」

あれから一回戦第八試合が始まって数分して救護班に運ばれたリイナは目が覚めた。

元に戻ったシイナはすぐ傍で様子を見ていて目が合えば、リイナは自分の状態を省みて理解し、

「そっか、お姉ちゃん負けちゃったか」

「はい。今回は私の勝ちです」

「お姉ちゃんと違ってシイナはきちんと一人で進めてたんだね。ずっと後ろにいると思ってたのに、いつの間にか卒業されちゃってたかあ……」

きつとリイナにとってシイナは最後の頼みだったのだろう。



自らの価値を証明してくれる存在として。唯一姉と呼んで地位も関係なく接することの出来る存在として。

それが瓦解した――が、

「確かに私はお姉様を卒業しました。けど、卒業したからこそ隣に立ち共に戦うことが出来ます。お姉様は〈銀翼の大鷲〉に私を入れたいようでしたけど反対に〈碧の野薔薇〉に来ませんか？ あそこなら王族だとか何だとか関係なく接することが出来ますし」

「ふふ……それも良いかも。ごめんねシイナ、今までずっと……」

そこでリイナの言葉が途切れてしまう。

どうやら意識を失ったようで涙を流すリイナの目元を指でそっと拭う。ようやくこれで姉妹としてのスタートを切れたのだとシイナは思う。

一方、もう一つ終わらせなければならなかったことがあった。

『前菜のくせに！ キリヤと戦う前にボコってやろうと思ったのに！』

もうこの女はいいモン！ 別のに寄生するモン!!』

リイナが持っていた“吸魔の銃”から現れたのはベルゼヴィーヴィアだった。

悔しそうに地団太を踏み、子供のように喚きながらシイナを睨みつける。それに対し心の中の女性は苛立つような声音で、

『シイナ、少し変わって』

「は、はい。分かりました……?」

変わって、の意味があまり分からずとりあえず了承するとまるで身体が操られているように動き出す。

徐に首を掴めば顔をベルゼヴィーヴィアの間近まで近付け、

「――覚えておきなさい。あなたが何をしようが私には絶対に敵わない。次誰かを巻き込もうとするならば、今ここで殺すぞ」

『ひっ……あ、あんたまさか……』

あまりの眼光に恐れをなしたのかベルゼヴィーヴィアの表情は引き攣り、同時に魔力が抜けたのか小さくなっていく。

〈金色の夜明け〉ユノが契約しているシルフほどに小さくなれば地面にへたり込んでしまう。

『び……』

『び……？』

『びええええええええええんっ!! だ、だってえキリヤが悪いんだモン!! あたしのこと封印するなんて言うがらっ!!』

「うおっ! 何だかとてもないことになってんな……」

「あ、キリヤさん」

ベルゼヴィーヴィアがガチ泣きし始めたところでキリヤが現れる。

心の声の女性も引っ込んでしまっただけでシイナに戻っていたために泣かれると反応に困ってしまっていたが助け舟が来た。一步下がってシイナが見守る中、キリヤはベルゼヴィーヴィアの前にしゃがみ込む。

「ごめんなベルゼヴィーヴィア。オレが弱かったせいでオマエを傷つけちゃった」

『ぐす……許さないし。絶対許さないし!』

子供のように拗ねたベルゼヴィーヴィアはそっぽを向くもキリヤはその小さな体軀を掌に乗せる。

「もう一度だけオレにチャンスをくれないか? 都合のいいこと言ってるってのは分かってる。けどもう一回だけ今のオレを信じてくれないか」

キリヤの言葉にベルゼヴィーヴィアはそっぽを向きながらも考える素振りを見せる。

やがて振り向き、

『……確かに魔力も上がってるし強くなってるみたいだけど、もうあたしのこと放っておかない?』

「ああ!」

『あたしも友達?』

「オマエがそう思ってくれるなら!」

『……じゃあ戻る!』

今まで泣いて拗ねていたのが嘘のようにキリヤの肩に乗ると頬にちゅっちゅとキスし始めたかと思えば“吸魔の銃”はキリヤの魔導書に戻り、黒く染まっていたページが再び復活する。

ベルゼヴィーヴィアの件も無事に解決すればキリヤはシイナに手を向け、

「シイナ、ほれ」

「はいっ！」

差し出された手にシイナも快活に返事をしてハイタッチを交わす。タッチし終わればシイナはふと考え、やがてキリヤに身を預けて抱きつく。

「ん、どうした？」

「いえ、フィーちゃんがいつもこうしていたのを見ていたので……その、あれです。何となくです」

「そっか」

曖昧な理由でもキリヤはシイナを受け入れて、フィオレナにしたように頭を撫でてくれる。

鍛えられているせいか妙に安心出来てしまって、安心からか少し手が震えてしまう。

「頑張ったな。姉にも勝ったし自分の限界も超えてたじゃねえか」

「……はいっ。でも流石に同じチームの二人が気絶したままなので二回戦は棄権になりますけど」

「マジか」

「大マジです」

思わず笑いが零れてしまって、キリヤも驚きながらも笑い、そんなことをしているうちに一回戦最終第八試合はユノのチームが勝利して幕を閉じていた――

## 69話「独創VS創造」

二回戦はまさに波乱だった。

一試合目アスタのチームは〈珊瑚の孔雀〉副団長キルシュのチームに勝利するも問題は二試合目。

〈黒の暴牛〉フィンラルのチームとその弟である〈金色の夜明け〉副団長ランギルスのチームの戦いではフィンラルが新たな魔法を見せるもランギルスはそれを上回る禍々しい魔力と共に勝利する。

だが試合が終わってもランギルスはフィンラルを殺そうとし、それを止める〈黒の暴牛〉の面々。

そして急遽アスタチームとランギルスチームによる試合が行われることとなり、傍目から見てもそれは試合と呼べるものではなかった。

ザクスが放つ渾身の灰魔法によるカウンターでさえランギルスを捉えることは出来ず、その反動で動けなくなったザクスを反魔法を<sup>アンチ</sup>全身に張り巡らせたアスタが守る。

魔力の高い貴族の中でも特に恵まれた強い魔力を持つランギルス。彼にとつては下民や平民——選ばれなかった者が選ばれた者と同じ舞台に立とうとするのを忌み嫌い、それでもアスタは言葉を受け止めながらも返す。

「特別なオマエらに別に好きになって欲しいワケじゃねー……ただ、理不尽に奪うなよ。オレ達は特別なオマエらとみんなを守るために、競い合って高め合うために、一緒に戦うために——強くなってこころま<sup>こころ</sup>で来たんだ」

下民も平民も貴族も王族も関係ない。

魔法騎士団に入って権力を笠に誰かを傷つけるのではなく、ただ助けを求める誰かを守るために。

そんな当たり前のことを言っているだけなのにランギルスはそれを認めない。

——ブラックメテオライト。

剣がランギルスの身体を捉えればその黒き一閃で魔晶石<sup>クリスタル</sup>をも砕く。

しかし、同時にアスタチームの魔晶石クリスタルもランギルスの魔法で砕かれ、それにより引き分け。つまりこの場では両方敗者となってしまう。

「……キリヤ、次は私達の出番よ」

「ああ。次は団長相手だ」

「き、緊張して声がふりゆえてきます……っ」

アスタとは一度戦いと思っていたがこうなってしまうては仕方がない。

メガネに声を掛けられれば改めてキリヤも気合いを入れ直し、バトルフィールドへ向かっていく――

◎

『それでは気を取り直して二回戦第三試合を行います！』

『あたしあたし！ あたしがやる！』

『さつきはサラマンダーがやったんだし今度はあーしの番！』

「落ち着いてくれ皆。テンション上がるのは分かるけどこれはチーム戦だからな」

いつもなら突撃してその場で対応していくが今はチーム戦だ。

相手は団長ともありしかも一回戦の戦いを見ていれば苦戦することには違いない。

「私達は変わらずアナタのサポートをする。だけど相手はへ水色の幻鹿〈団長……絵画魔法は相手の弱点を突いてくる。その攻略をしないと」

「それならボクチャン、ワタシにイイ考えがあるよ」

「マジ？」

「うんうん、マジマジ」

そう言っつて魔導書から出てきたトウルーはキリヤに近付くと耳打ちしてくる。

その作戦は意外と単純だがよくよく考えれば浮かばない方がおかしく、しかしそれを本当に実行して良いのだろうか。

迷うキリヤにトウルーは笑い、

「もうボクチャンつてば急に真面目になっちゃって！ でもこの試験

は全力を出すんでしょ？ だったら別にイイと思うにゃくん。大体相手のダンチョーサンも真つ向勝負つて魔法じゃないしい？」

「うーんそれ言っちゃうとな確かにつてなる」

『キリヤ、私も今は勝つことを重視した方が良いと思います。私の息子が最強なのだど証明したいので』

『出た親バカ！ いつの間に母親になつてんのよシムルグ！』

『あなたがいなくなつていているうちにですよベルゼヴィーヴィア』

アルグの時から仲とあつてかシムルグとベルゼヴィーヴィアは面識があつたようだ。

ともあれ、すでに戦闘は開始されている。あまり悠長なことは言つていられず、

「じゃあ今回はオレ一人で魔晶石壊しに行くからメガネとビスは自軍の守つててくれ」

キリヤの言葉にメガネもビスも領けばキリヤはトゥルーと共にシムルグの背に乗つてその場から飛び立つ。

瞬く間に相手チームの魔晶石クリスタルを視界に収め、

「よし行くぜサキムニ！ 力を貸してくれ！」

『うーん！』

身体進化魔法” 兎々レベル28・ピレソットアーマヴィクトリー 戦の勝鎧”。

有利な属性を突かれると言うのならあえて無属性のまま行く。シムルグからトゥルーを抱えて飛び降りればそのまま一直線に蹴りを放つ。

「あふふふ！ さあ今回もイイ一枚を描こう！」

絵画魔法によつて描かれ顕現した巨人の拳がキリヤの蹴りと真つ向から衝突する。

しかし威力を相殺するために放たれたものではなくキリヤの蹴りは衝撃を吸収され、そのまま拘束されそうになるも魔力吸収で絵画魔法から魔力を奪い、ただの絵の具へと変える。

「あつぶね、下手すりゃ今ので詰んでたな」

「まだまだ行くよっつ！」

キリヤが鎧を解除し、リルが絵画魔法のために扱う筆とパレットを

構えた途端――

「今だよねっ!」

猫精霊魔法” 悪戯猫の取替えっ!”キャットチェンジトリック。

魔法が発動すればトウルーが地面から拾っていた石二つとリルの筆とパレットが強制的に転移、それぞれの手元に交換させられてしまう。

絵画魔法は筆とパレットさえ取ってしまったらこちらのものだ。

こうしてトウルーが狙っていた展開になるも、

「大丈夫! こんな時のために予備を持ってるからねっ!」

「あちゃー……そりゃそっか」

『あんたの作戦何の意味もないじゃないの!』

「いやウンディーネ、これはイイかもしれねーぞ!」

『え?』

筆とパレットをトウルーから受け取ったキリヤは一つ思いついて笑みを浮かべる。

「トウルーっ! オマエの魔法で絵画魔法再現出来るか!?!」

「一応出来るけど……」

『だーりんまさか……』

「行くぜ団長さん! オレとお絵かきで全力勝負しようぜ!!」

その言葉に対戦相手のリルも驚かされる。

結局、何だかんだ策を練ったところでキリヤの性分は変えられない。それにここまで団長と真っ向勝負が出来る機会などないだろう。

ならばこの機会に己の全力をぶつける。相手も全力を見せる。その上で――勝つ。

「もう仕方ないよね!」

猫精霊魔法” 鏡写しのチエシヤ猫”。

一枚の鏡がキリヤとリルを写せばキリヤのメモ帳サイズの魔導書に光が覆って陽炎のように揺らめき、リルのものと形状を似せる。

「これで一定時間の間ボクチャンも絵画魔法使えるけど、その間身体進化魔法は使えないよ!」

「ありがとう!」

絵なんて今までまともに描いたことなどないがこんなのは感覚だろう。

筆を宙に走らせれば筆から離れた絵の具がどんどん新たな形を創っていけばよく分からない四足歩行の獣らしきものが地面に着地する。

「よし出来た！」

「ボクチャン絵下手っ！ 何それ!？」

「カッコイイだろ！」

「あふふ！ だったらこっちも負けないよっ！」

犬とも猫とも見える四足歩行の獣はリルに向けて走り出し、リルまた動物を描けば二つの動物は互いの中央で激突。そして相殺してしまえば絵の具が散らばって地面を彩りさらなる様相を見せる。

「落ちた絵の具が新しい絵を創ってる……いいよいいよっ！ あふふふっ！」

「あははは！ 絵描くの初めてだけど楽しいなコレ!!」

そこから始まる二人の世界。

巨人が現れればその首元に噛み付く怪獣が現れ、巨大な蛇が現れば笛を吹く男が現れる。

あまりに突発的で、あまりにも現実離れた光景に見ていた魔法騎士達も呆気にとられ、もはやそれは戦闘と呼べるものではなかった。互いの創造性をひたすらにぶつけ合い、二人が生み出した芸術は止まらない。

誰に理解されるわけでもないがただ楽しいと思えた。

「二人で描こう最高の一枚を!!」

「イイなそれ！ よおしオレのとっておきを見せてやるっ！」

エルフとして覚醒し魔力を爆発的に上昇させればキリヤが身に纏う魔力は段違いのものとなる――

◎

リルは昔、誰にも理解されずにいた。

魔導書を授与され、好きな絵を描いていただけに周りにはリルを恐れ、誰もがリルから筆を奪おうとした。



周りが拒絶するならばもうこちらも拒絶する。

そのつもりで絵を描き、苦悩に満ちていたリルを救ったのは執事のじいやだった。

大き過ぎる才能は他者に理解されないもの、だがじいやは思い切り魔法を震えるキャンパスを教えてくれた。それこそが魔法騎士団だった。

——最高の一枚を描くために。

そのためにリルは魔法騎士団に入団し最少年齢で団長となった。

そして今とうとう目の前に全力をぶつけても良い相手が現れた。

まさか相手の魔法を使えてしまうとは思ってもいなかったが人生で初めて自分と同じ絵画魔法を使う相手。どれだけ描いてもそれと同等か、またはそれ以上で返してくる。

(最高だよ、最高だよじいや！　ようやくじいやに最高の一枚を見せられそうだ！)

相手——キリヤの魔力は爆発的に膨れ上がり、今では団長の自分すらも凌ぐほど。

全力を出してもまだ足りないほどに相手は強い。今まで他の団長と出会ってその力を見てきたが魔力を見ただけでそう思えたのは初めてで、同時に気分は最高潮に高揚する。

「これがオレのとおきだア!!」

キリヤが描いたのは今までにないほどはつきりとした女性の巨人だった。

しかもそれはリルも見たことがある女性だ。はつきりと会ったのは功績発表の時だがあの荒々しく燃える炎のような魔力は一度見ただけで記憶に深く刻まれる。

——メレオレオナ。

きつとキリヤが一番好きなものを描いたのだろう。これまでにないほど圧倒的な愛情と魔力が込められた作品はまさに最高の一枚を描くのに対応しい。

「あふふふふふふふふふっ!!　だったら僕もいっちなん好きなものを描くよ!!」

あの時、周りのことすら理解しようとしなかったリルを“人間”にしてくれた大恩人。

誰よりも好きなじいやを描き、対抗するに足りない魔力は地面に散らばったリルとキリヤの魔力の残滓を吸い上げ、魔力を得る度に筋骨隆々な姿となっていく。

互いに向き合った巨人が拳を構え、放ったのは同時だった。

絵画魔法“アモーレじいやの救手”。

絵画魔法“女獅子メレオレオナ・カリドウス・インバクトの灼熱鉄拳”。

二つの拳がぶつかり合えば今までにないほどの衝撃でバトルフィールドごと粉塵が巻き上がる――

## 70話 「最強の証明」

とてつもない魔力のぶつかり合いの余波は観客席まで届いており、シイナも観客席の手すりに掴まっていなければ危うく吹き飛ばされるところだった。

傍にいたフィオレナもシイナに抱きついて暴風を防ぎ、風が止んだところで一息吐く。

「と、とんでもない試合ですね……」

「先輩は……先輩はどうなったんですか……?」

抱きついたままのフィオレナがバトルフィールドを覗く。

爆発の中心地であるキリヤ達がいた場所は未だに濃い砂埃が包んでおり、その姿は一切見えない。

見ていた魔法騎士達が固唾を呑んで見守る中、徐々に砂煙が晴れていき――

「あ……」

二人が描いた巨人は両方とも倒れてはいなかった。

だが〈水色の幻鹿〉団長リルが描いた巨人の片腕は吹き飛び、キリヤが描いたメレオレオナの巨人の拳は見事に相手チームの魔晶石クリスタルを打ち抜いていた。

観客席から見ればその光景はまさに一枚の絵。何故か不思議な魅力を持ち、見ていた人間の視線を釘付けにする。

『しよ、勝者チーム……』

団長の敗北、それはアナウンスしていた者にも衝撃で言葉に詰まっているようだが〈碧の野薔薇〉の者達はそれどころではない。

フィオレナは勢いのままシイナに抱きつき、ぴよんぴよんと跳ねる。

「先輩が勝っちゃいました！ すごいすごいっ！」

「フィ、フィーちゃん……私達同じくらいの身長ですから跳ねられると首が……」

「あ！ ごめんなさい！」

同じくらいの身長で抱きつかれてはしゃがれてしまえば首がやら

れてしまう。

だがとうとうキリヤは新人の枠を超えて団長にも匹敵するレベルとなってしまう。魂魄同化を習得しただけではまだまだその背には追いつけないようにシイナも笑みを浮かべる。

「やりましたねキリヤさん……」

◎

「あふふ……負けちゃったか〜」

「ああ、オレの勝ちだぜ団長さん」

絵の具だらけとなったバトルフィールドで大の字になって倒れているリルにキリヤは手を差し伸べる。

その手を掴み、起き上がればリルは負けたにも関わらずどこか楽しそうだった。

「ありがとうキリヤくん！ 君のおかげでほんつとうに最高の一枚が描けたよ！」

「コッチこそすんげー楽しかった！ でもこれからまだまだ人生あるんだから最高の一枚なんていくらでも出来るさ！ だから今のは今日の中で最高の一枚だ！」

「あふふ！ それいいね！」

そのまま二人は固い握手をし、朗らかに笑う。

「君さえ良ければ僕と友達になつてよ！ また絵を描き合おうよ！」

「おういぜ！ 何だかんだ描くの楽しかったしな！ 今度基礎教えてくれ！ 最後のメレオレオナ様以外オレの絵ヤバイみたいだし！」  
「でも芸術は自由だからね〜！ ただ上手く描くだけじゃダメなんだよ〜！」

『あの盛り上がってるところ大変恐縮ですが、決勝戦がありますので一度お下がりしていただけませんか!?』

リルとキリヤが二人で盛り上がっていたが今は試験中だ。

しかもアスタとランギルスのチームが引き分けたことで次は準決勝戦でありながらも事実上決勝戦。

キリヤの相手となるのはシイナが棄権したために不戦勝で進んだユノだ。

まともに戦うのは初めて、だが相手にとって不足はない――

◎ 決勝戦。

戦局は二つに分かれ、メガネとビスが相手魔晶石クリスタルの破壊に。キリヤは自軍の魔晶石防衛クリスタルに立っていた。

魔晶石を破壊しにやってきたのはユノで、キリヤと攻防を繰り返す。

下民だろうが恵まれた魔力と四つ葉の魔導書を持つユノの風魔法は多彩で強力。だがキリヤの守りはなかなか崩せない。

――身体進化魔法“レベル66・ディーレイドシングルセルアーマー斬滅嵐の風魔神鳥鎧”。

翠を基調とした鎧に黒のラインが何条も入り、全体的に鋭利な形状で特に兜には牙を思わせる凹凸が掘り込まれている。背にはシムルグを模した鋼鉄の一对の翼が生え、周りには黒き風が薙ぐ。

シムルグとベルゼヴィーヴィアの掛け合わせた鎧が巻き起こす黒き風はユノの風を喰らい、刃となってユノを襲うもマナゾーンの域に達したユノの魔法もまたあらゆる角度からキリヤを襲う。

魔晶石クリスタルを砕こうにもすでにノームによって性質を変化させ、ノームの絶対防衛を崩すとなれば相当な魔力を練り上げなければならぬだろうがそれをさせないのがキリヤだ。

「はは、こうしてまともに戦うのは初めてだけどやるなユノ！」

「……そっちこそ」

『何なのよアイツっ！ 何やってもあの黒い風が防ぐじやないのっ！』

ただの風魔法ならばシムルグはシルフに劣るかもしれないが今はベルゼヴィーヴィアの魔喰魔法（戦う前に聞いた）を組み合わせたことで来る風魔法を全て封じられる。ユノにとってこの組み合わせはとことん相性が悪いだろう。

「どうする未来の魔法帝！ このままだとジリ貧になっちゃうけど！！」

戦況は徐々にキリヤの一方的なものになっていく。

だがユノもこれでは終わらない。黒き風の刃を潜り抜け、一度キリ

ヤから距離を取れば立ち止まる。

「……？」

「ベル、アレをやる……っ！」

大気中の魔<sup>マナ</sup>、そして風の四大精霊シルフ。

そしてメレオレオナから学んだマナスキン、キリヤが見せた精霊同化。

その全てが組み合わせられてユノの身体は風の魔力に包まれ見えなくなっていく。

「本当はアスタとの決勝戦で使うつもりだったが……オマエ相手なら不足はない」

——“精霊同化”スピリット・ダイブ。

ベルと一体化したユノの左半身は有り余る魔<sup>マナ</sup>の輝きで淡い翠に染まり、一翼を背負う。

その魔力は団長クラスに匹敵、いやそれ以上かもしれない。

何より——

「スゲエなユノ。あんなちよこつと教えてただけで出来るようになったのか……」

いやそれだけではないだろう。

ユノは魔導書や魔力に恵まれていながらも努力を惜しまず、圧倒的な才能と組み合わせさせた結果だ。

だが、

「風ってことに変わりねえよなー！」

いくら魔力が増大したところで風属性に変わりはない。

黒き風の刃と共にキリヤが飛び立てばユノは左手を構え、放たれるのは圧倒的な魔力。

風精霊魔法“スピリット・ストーム”。

圧縮された風属性の魔力の奔流がキリヤと真つ向から対立し、黒き風の刃を正面から受けて触れた瞬間から削られるもすぐに魔力によって補填し突き進む。

「マジかー！」

奔流が傍まで迫れば手に携えていた銃剣を振るおうとするもここ

で別の方向から魔力を感知。躲そうとするも別の“スピリット・ストーム”が上空からキリヤに背を撃ち、正面のと合わせた挟み撃ちを受ける。

『キリヤっ!!』

「だーいじょうぶっ!」

威力は鎧越しで受けるもキリヤは魔力を吸収し、そのまま今度はキリヤが返す。

マナゾーン“黒風刃の輪舞”。

ユノから円状に地面から黒き風の刃が飛び出し、一斉に覆い隠すようにしてユノを襲う。

マナゾーン“静かなる精霊の舞踏”。

全方位からの攻撃をまるで踊るように軽やかに魔の流れに乗って躲すユノ。あまりにも自然な動きに思わずキリヤも笑いが出してしまう。

(魔力量はコッチが上だけど魔力の扱いはソッチの方が上か……)

パワータイプなキリヤとテクニクタイプのユノ。

はつきりと分かれる相性だがキリヤにはまだ秘策がある。

『キリヤ、あれをするつもりですか』

「ああ。オレも全力を見せたくなつた」

他の風魔法や“スピリット・ストーム”を喰らってリルの時に消費した魔力の補填は出来た。

ならばキリヤは一度鎧を解除すれば拳を握り締め、

「だったらオレもこの日のために修行してきたハイパーとっておきを見せてやるッ!」

『とっておき? 何それ?』

『あんたは知らないだろうけどあーし達はこの日のために練習してきたの!』

ベルゼヴィーヴィアは何のことだかさっぱり分からなさそうだが合わせて貰うしかない。

“エルフ覚醒”によって枷を外し、莫大な魔力を得たキリヤの傍に魔導書から全ての精霊が飛び出す。

「これは正直メレオレオナ様相手にする時に取っておきたかったけど。全力を出したユノに全力を出さないのは失礼だからな——皆、オレに力を貸してくれ！」

身体進化魔法“強化鎧旋”レベル2・ガイガーアツプを纏ったキリヤに次々と精霊達が飛び込む。

今までは相性の良い二体を組み合わせていただけだった。一度三体以上の組み合わせを試したことがあるがその時はキリヤが精霊達の魔力に耐えられず、魔法が強制解除されてしまったためだが今は違う。

エルフとして覚醒し、魔力の器が桁外れになった今ならば全ての精霊の器となれる。

メレオレオナを超えるために、いや今はユノに勝つために。キリヤは最高最強の鎧を身に纏う。

——身体進化魔法“精霊魂の絆鎧”レベル99・アルカディアサンクチュアリ。

あまりの魔力量、そして当たり前のように魔に紛れ、もはやその姿は陽炎のように揺らめき、まともに認識することさえも許さない。

立っているだけで魔の恩恵を受けた大地は草木や花が芽吹き、キリヤ付近に凝縮された魔力はもはや他者の魔力を近付けることも許さない。

「オレはまだ未熟だからこの姿だと十秒も持たねえが……悪いなユノ、こうなった今はオレの方が強いみてえだ」

「——ツ——」

精霊複合魔法“全能手”アルマハト。

陽炎のように揺らめくキリヤが手を握る素振りを見せればユノはその場から動けず、遙か遠くから碎け散る音が響く。

ユノが振り向けば遠くで戦っていたノエル達付近にあった魔晶石クリスタルも砕かれ、ノエル達もユノと同様に動けず何か拘束された状態となっていた。

「この状態になったらオレのmanaゾーンはこのバトルフィールド全体に届かせるぐらいできうえええ……」

と、言葉の途中でキリヤは前のめりに倒れる。



同時にユノ達の拘束はなくなり、普段の魔力に戻ったキリヤから精霊達が飛び出す。

『ご主人くっ!』

「ボクチャン大丈夫っ!? やっぱりちよつと無茶だったと思うよ!」  
「ヴェエ……」

呆気に取られる周りに対し勝者であるはずのキリヤがダウン。

気を失っているわけではないがレベル99の反動は凄まじく、たった十秒だというのにキリヤは現状指一本さえ動かせない上喋ることもままならない。こんなものルールありしの戦いでしか使えないのは見え見えだ。

『ゆ……優勝はキリヤスフィールチーム!!』

だが勝ちが勝ちだ。

高らかな優勝宣言と共にキリヤの気は失われていく――

## 第11章 白夜の魔眼討伐編 71話 「大喧嘩」

ロイヤルナイツ  
王撰騎士団選抜試験が終了したことで、魔法帝ユリウスから団長に選ばれたメレオレオナは試験中の戦闘を鑑みて魔法騎士達を選別を任されていた。

帰路に着く中、リストに目を通すメレオレオナだが優勝したキリヤの成長に驚くばかりだった。

たった十秒とはいえ、契約している全ての精霊との一体化。すでに単純な力だけで言えばメレオレオナを超えているだろう。

喜ぶべきなのは分かっているが、同時に考えなければならぬことがあった。

報告によれば、キリヤは魔女の森で魔女王から解呪魔法を受け、自らにかけられていたエルフの魔力を封じていた枷を外され、スピード王国が誇る〈七剣総統〉の中でも最強クラスの《二槍》を打ち倒した。弟子の成長を喜ばない師匠はいない。だが身体的にもエルフの特徴が出て、記憶は戻っていないらしいがそれ以上の問題がある。

選抜試験だけで考えれば、優勝に大きく貢献したキリヤは合格以外ない。

ただ、まだキリヤは気付いていないだろうがロイヤルナイツ王撰騎士団に選ばれることが、どのような意味となるか。メレオレオナはすでに気付いている。

魔法騎士として、国を守る者として考えるならばすでにキリヤも覚悟の上だろう。

ただ——そこまで考えた時、メレオレオナに刺さる視線に気づき、目を向ける。

「……来るかこちらから出向くか考えていたところだ——出て来い」

『あなたがメレオレオナ・ヴァーミリオン……でしょうか？』

見上げれば空中から一羽の風神鳥が地に足をつける。

選抜試験中にもキリヤの傍にいたシムルグと言ったか。問いに対

しメレオレオナも首肯する。

「ああ。どうやら私とあの莫迦が出会ったのは、貴様の道筋があつたということか」

『ただの偶然もありますが……まずは礼を言わせて下さい。あの子が己が境遇に悲観せず真つ直ぐ強く生きているのは、間違いなくあなたの薫陶があつたからです』

「礼など要らん。だが貴様が知っているキリヤのことについては全て話せ」

『……分かりました。私が知る限りの全てを話しましょう。そして〈白夜の魔眼〉がこれから何をしようとしているのかも』

メレオレオナの言葉を受け、シムルグも頷き、そして話し出す――

◎

ロイヤルナイツ 王撰騎士団選抜試験から数日後、キリヤは〈碧の野薔薇〉拠点にいた。

だがその表情はどこかぼーっとしていて、シイナも怪訝に思っていると傍にいたトゥルーがその頬を両手で軽く引つ張る。

「おいボクチャンどつたの？ せっかくロイヤルナイツ王撰騎士団選抜試験で優勝したんだし」

「んー……別に何でもないぞ」

いつも元気で楽しそうな様子から一変してテンションが低く、こんな時は大抵悩み事がある時だ。

前の誕生日の一件もそうだったこともあり、シイナもされるがままのキリヤの顔を覗く。

「また何か悩み事ですか？」

「悩み事……うーん、まあそうだけど今回はオレ自身が解決することだから大丈夫さ」

「ですが――」

『邪魔するぞオオ――ツ!!』

シイナが追及しようとした途端、拠点の扉の方から響く大声。

その女性の声には酷く聞き覚えがあり、キリヤも反応して扉を見れば扉が弾き飛ばされる。

そこに立っていたのはメレオレオナでキリヤは今までぼーっとしていたのが嘘のように飛び上がる。

「レオナ様！　もしかしてオレに会いに来たんですか!？」

「そんなわけないだろう莫迦者が。私がここに来たのは別件だ。シイナ、プーリ、来い」

「え、私ですか?」

いきなり呼ばれたシイナは驚き、見ていたプーリも驚く。

状況が分からないようで疑問符が浮かぶようだがメレオレオナは構わず続ける。

「貴様らは王撰騎士団ロイヤルナイツ選抜試験合格者だ」

「っ！　オレは！　オレのこと呼び忘れてませんか!」

「呼び忘れてなどいない。〈碧の野薔薇〉からは二名だ」  
「え……」

その言葉にキリヤは呆氣に取られてしまう。

だがすぐに首を振るって拳を握り、

「何でスカ！　オレ優勝したんですよ!!　選ばれない方がおかしいっスよ!」

「驕るな莫迦者がアアアア——ッ!!」

「ぐえっ!？」

駆け寄れば容赦のない拳骨がキリヤの顔面に直撃し、それでも今だけは退かない。

すぐにでも起き上がれば、メレオレオナの目を真っ直ぐ見つめる。

「レオナ様と離れてからオレ超強くなりましたよ!」

「ならば貴様は敵を殺せるのか?」

「それは……」

「今迷っただろう。それが今回貴様を不合格にした理由だ」

「でも、殺さずに倒すことだつて出来ませし!」

「それが甘さだと分からんのかアアア——ッ!!」

いつにも増して鬼気迫るメレオレオナの怒号は最早拠点内の窓ガラスを砕き割るほど。

炎の魔力は昂ぶり、メレオレオナの双眸はキリヤを捉える。

「貴様は何かと甘い。時に敵にさえ手を差し伸べてしまうほどに」

メレオレオナが目線を配った先にいたのは、柱に隠れるようにして立っていたフィオレナ。

どうにも隠し事は出来ないらしくフィオレナが元へ七剣総統だということを知っているらしい。

だが――

「でも強くなればなるほど誰かに優しくなれるって、オレは信じてます。あの時だって出会ったばっかだったオレにレオナ様は弟子にしてくれて、手を差し伸べてくれたじゃないですか」

「その考えのせいで現に貴様はすでに〈白夜の魔眼〉にいたあの魔弾の使い手を“敵”として見れなくなっている。もし魔弾の使い手と再び戦うことになったらどうする？ 貴様は万全を期して戦えるのか？」

サイルはキリヤとは戦わないと言った。

しかしそれはあくまで口で言っただけに過ぎない。これから先絶対ないとは言い切れないのも事実。

もしその時が来たとして、襲撃の際やヤミと共に向かった時のように戦えるのか。

戦える、そう言いたいのがキリヤの心は戦いたくないと思ってしまうている。

それを見抜いてか、言葉を返さず俯くキリヤにメレオレオナは腕を組む。

「馴れ合いは優しさでも何でもなし。重要な判断を迫られた時に今のよう迷えばどうなるか。今回の作戦では団体行動を基本とする。迷えばそれだけで周りを巻き込み、下手をすれば誰かが死ぬ。そんな覚悟のない者が来て良い場所ではない」

「でも、オレが一緒にいないくてレオナ様に何かあつたら――」

「見くびるなアアアアアアア――ツ!! 貴様程度に守って貰わずとも自分の身ぐらい自分でどうにかする！ 私をみくびるのも大概にしるオオオオオオ――ツ!!」

「見くびってなんてないですよ!! レオナ様こそオレのこと下に見過

ぎなんですよ!!」

「だったら力で示せ! この場で私に勝つことが出来たら連れて行ってやる!!」

「やってやりますよ!!」

売り言葉に買い言葉。

思い返せば何かあれば言葉よりも先で、実力主義なメレオレオナとは何度も戦ってきた。

もう修行していた頃とは違う。キリヤはへ碧の野薔薇のロープと自らの魔導書をフィオレナへ投げ、フィオレナも慌てて受け止める。

「せ、先輩っ!?!」

「これは勝手な喧嘩だからそのロープは羽織らないし精霊なかまの力も要らない。オレ一人で戦る!!」

「私相手にイイ度胸だ糞莫迦弟子。いつでもかかって来いッ!!」

キリヤに次いでメレオレオナも魔導書を投げ捨てる。向こうも魔法はなしで戦うつもりらしい。

互いに拳の届く距離まで近付き、双眸に闘志が滾る。

一触即発の雰囲気。だが、周りの団員はあまりの魔力のぶつかり合いに一步引き、拠点の壁にヒビが入る。

直後、互いの頬を捉える拳。同時に吹き飛ばされたキリヤとメレオレオナはそれぞれ壁に叩き込まれる。

「だらアア!!」

“エルフ覚醒”で膨れ上がった魔力は瓦礫を吹き飛ばし、キリヤが飛び出せばメレオレオナも腕に凝縮した魔力を纏って飛び出す。

そこからはもう武術や魔法など関係なく、ただ魔力を纏った拳骨の殴り合い。

相手が女だとか、年上だとか、そんなものは関係ない。

昔から、気に食わないことがあつたら拳をぶつけて解決してきた。だから今回も——いや、今回だけは。

「絶対譲らねえ!!」

「何と言おうが絶対に連れて行かん!!」

メレオレオナの拳がキリヤの拳よりも先に放たれる。

だが、ここでキリヤは退かない。むしろ前に出る。

——クロスカウンター。

遠距離攻撃を基本とする魔法騎士に対しては無力だが、《四拳》ステイクとの戦いから密かに練習していた。

メレオレオナの拳に合わせ、キリヤも拳を放ち、二つの拳が交錯する。散々受けてきた拳だ。

今更どの軌道で来るかなど予想することもない。自然に身体が軌道を読み、躲そうとしていた。

そしてキリヤの拳は確実にメレオレオナを——

「……来るなキリヤ」

いつもの怒声とは違った。

今まで聞いたことのない懇願する声で、そのせいでキリヤの反応は少し遅れてしまった。

メレオレオナの拳は吸い込まれるようにキリヤの顔面を打ち、キリヤの身体は床に何度も跳ねながら壁に叩きつけられる。

(何でそんな顔するんですか、レオナ様……)

意識が混濁し黒に染まっていく中、一瞬見えたメレオレオナの表情が嫌なほど脳に刻まれ、キリヤの意識は途切れていく——

◎

「……シイナ、プーリ、行くぞ」

殴り飛ばしたキリヤは気絶したようで飛んだ先の壁から起き上がることはない。

倒れたキリヤには精霊達が寄り添い、中でもシムルグはキリヤとメレオレオナを交互に見て複雑な表情を浮かべる。

それに対しメレオレオナは何も返さず、キリヤを殴った拳を一瞬見ながら踵を返す。

「何デ……何でこんな酷いことをするんだ……っ！——」

「……………」

声を受け、振り向けば、そこにいたのはサキムニだった。

“人間化”<sup>ヒトカ</sup>によって二メートルを超える女性となったサキムニは、近付くなりメレオレオナの胸倉を掴み上げる。

「ご主人は今までずっと……あなたと一緒に、肩を並べて戦えるように……そしていつか超えるために努力してきたんだ。だからあなたが……ご主人を拒絶するなヨ。ご主人を否定するなヨ……っ！」

『サキム……』

「……殴って気が済むなら殴れ。だがキリヤは連れて行けない」

「この分からず屋ッ!!」

魔力が込められたサキムニの平手がメレオレオナの頬を打つ。

今度はメレオレオナが殴り飛ばされる番で〈碧の野薔薇〉拠点の壁を貫き吹っ飛び、その先で足を踏ん張って留まる。

「まともに殴られるのもそうだが、平手打ちなど人生でされたことがなかったな……」

いつもの彼女らしくないしおらしさで呟き、サキムニに言われた言葉を思い返す。

「分からず屋か……」

分かっているながらも、時に嘘を吐かなければならないこともある。

例えばそれがキリヤを傷つけることになったとしても、今回の戦いに行かなければそれで良い。

シムルグが言っていたことが本当ならば間違いなく連れて行くべきではないことは確かだ。

「他者をこれほど考えるとは私も随分焼きが回ったものだ」

乾いた笑いしか出ず、慌てて出てきたシイナとプーリを見れば、メレオレオナは再び踵を返した――